粧ひ」太平記廿七「匂ひ薫蘭を凝らし、粧ひ紅粉を盡くしたる美麗の童」古詩「娥娥紅粉粧、纖纖出素手」

こう-ふん 興奮 ㊀感情によりて心氣の奮起すること。㊁刺激によりて神經の引きたつこと。又、其の狀態。

こう-ふん 公憤 公事に關する憤慨。おほやけばら。又、公衆の憤怒。宋史「荃國家大恥、而天下之公憤也」

こう-ぶん 公文 (名) ㊀公儀の文書。おほやけにする文書。公式令「凡行公文皆印事狀・物數及年月日、並署、縫處、鈴傳符剋數」舊唐書職官志「凡施行公文、應印者監印之官考其事目、無差然後印之」㊁〔法〕國家機關が、其の職權上より發する文書。議院法第十七條「書記官長は中略公文に署名す」攝政令第三條「御名を要する公文」

こう-ぶん 後聞 のちに聞くこと。あとにて世間の人の聞き知ること。東鑑一、治承四年十月廿六日「所憚平家之後聞也」盛衰記廿八「直實申所眞僞、定後聞無其隱候歟」

こう-ふん-ざい 興奮劑 (名) 興奮せしむる爲めに用ふる藥劑。

こう-ぶん-しき 公文式 (名) 法律・命令の制定・公布等に關する方式。

こう-ぶん-しょ 公文書 (名) 官廳が其の職權の執行上作成したる文書。明治三十二年法律第六十八號第二條四號「領事官か援助の請求書に船舶登錄簿及艦船乘組員名簿の正當なる拔萃又は乘組員たることを證明するに足るへき公文書を添付せさりしとき」

こう-ぶん-じょう 公文乘 (名) ㊀古へ國司などが、恆常の賦の外に、名目を設けて餘分の物をとること。類聚國史廿四「奸吏之輩、犯用官物、名公文乘」㊁官吏が官物を盜用すること。類聚三代格廿「一、禁犯用官物、名公文乘事」

こう-ぶん-ぼ 公分母 (名)【數】多くの分數が同じ分母を有するとき、其の分母の稱。

こ-うへ 故上 (名) 物故したる貴族の夫人。宇治拾遺六「己れは故うへのおはしましし折り、みづし所仕り候ひし者の娘に候」

こう-へい (名) 利口に口をきくこと。かたかなほし「利口に口きき侍るをこうへいといふは如何」

こう-へい 工兵 (名) 保壘・砲臺の築造、橋梁の架設、通路の開修、其の他、軍事上の工事を擔任する軍隊。又、其の軍隊に屬する兵士の稱。

こう-へい 公平 公正にして私曲なきこと。平等にして偏頗なきこと。戰國策秦「商君治秦、法令至行、公平無私」管子形勢解「天公平、故美惡莫不覆、地公平、故小大莫不載」唐書百官志「敍以四善、一日德義有聞、二日淸愼明著、三日公平可稱、四日恪勤匪懈」

こうへい むし 公平無私 公平にして私心なきこと。韓詩外傳「正直者、順道而行、順理而言、公平無私」

こう-べい 貢米 (名) みつぎものにする米。こうまい。

こうへい-かん 工兵監 (名) 教育總監部の職員。教育總監に隸し、工兵科團體の教育上、本科・專門の事項に就き齊一・進步の責めに任じ、又、工兵科に關する事項を調査・研究・審議し並びに立案することを掌るもの。教育總督部條例第九條「工兵監輜重兵監は教育總監に隸し」

こうへい-かんぶ 工兵監部 (名) 教育總監部の一部。工兵監が其の事務を取り扱ふ所。教育總監部條例第十四條「教育總監部に幕僚及騎砲工輜重兵監部を置く」

こうへい-くゎいぎ 工兵會議 (名) りくぐんこうへいくわいぎ(陸軍工兵會議)の略。

こうべい-しなし 紅瓶子梨子 (名)【植】薔薇科、梨屬の落葉喬木。梨の一種。實の形、瓶子の如くにして、色赤く、肉は白し。

こうへい-の-いた 後平板 (名) せいた(背板)に同じ。

こう-へう 公表 おほやけに發表すること。世間一般に披露すること。公示。公開。

こう-へう-るゐ 喉鰾類 (名)【動】魚類中、硬骨類の一亞目。食道と交通せる鰾(ウキブクロ)を有す。腹鰭あるときは腹部に位して、棘は無し。鯰(ナマ)・鯉(コヒ)・鮒(フナ)・鮭(サケ)・鮎(アユ)等これに屬す。

こう-へき 後壁 (名) うしろにあるかべ。後方の障壁。(前壁の對)

こう-べる (自動) 人の機嫌を取りて、詞たくみにしゃべる。

こう-へん 口邊 (名) 口のあたり。口のはし。

こう-へん 公邊 (名) ㊀こうぎ(公儀)に同じ。㊁おほやけざた。おもてむき。我衣「寛保二年八官町に心中出來る。公邊になり、つひに賣女に落ちて」

こう-へん 後編 後篇 (名) 前に續きて記述したる書卷。のちのまき。次の編。(前編・中編又は初編などの對) 後漢書班彪「今此後篇、愼覈其事、整齊其文」

こう-べん 口辯 べんこう(辯口)に同じ。史記淮南王安「淮南王有女陵、慧有口辯」

こうへん-むき 公邊向 (名) おもてだちたる方面。おほやけざま。

こう-ほ 候補 (名) ㊀條件の成就又は期限の到來によりて、將來或る地位・身分を得べき資格あること。又、其の人。㊁或る地位・身分を得んと望むこと。又、其の人。

こう-ほ 後圃 (名) 家の後方の圃。後園。唐書隱逸「登樓見人于後圃有所瘞藏者」歐陽修文畫錦堂記「作畫錦之堂於後圃」

こう-ぼ 後母 (名) 父の後妻。まはは。繼母。史記孝文紀「養後母孝謹」

こう-ぼ 洪模 (名) 洪大なる規模。常景永文頌「敷茲景跡、洮美洪模」

こう-ぼ 公簿 (名) 法令の規定によりて、官公署の調製する帳簿。國有土地森林原野下戾法第二條一號「公簿若は公書に依り所有又は分收の事實を證するもの」

こう-ほう 口俸 (名) 一人の糊口するだけの俸給。

こう-ぼく 紅木 (名) 品質良き紫檀(シタン)。

こう-ぼく 厚朴 (名) 朴樹の皮にて製したる藥。苦く辛し。紫褐色にして潤ひ多きを良品とす。支那の原產なり。

こうぼく-ぐゎん 厚朴丸 (名) 古への丸藥の一。急劇なる下痢を治すといふ。厚朴より製したるものなるべし。和名抄「厚朴丸」

こうぼく-せん 厚朴煎 (名) 古への煎藥の一。厚朴より製したるものなるべし。和名抄「厚朴煎」

こうほ-しゃ 候補者 (名) 候補を期待する人。候補たる人。議院法第三條「三名の候補者」

こうほ-せい 候補生 (名) 一定の課程を修了せる後、或る官職に就き得る生徒。卽ち、公醫候補生・海軍の少尉候補生、機關少尉候補生・小軍醫候補生・小主計候補生、及び陸軍の士官又は下士となるに必要なる術科を修むる生徒の類。

こうほふ-しば (名)【植】こなら(枹)の異名。

名。

こうぼふだいし-くはず-の-くり 大師不食栗 (名) 榛の實の異名。弘法大師栗。

こうぼふ-ちゃ (名)【植】かはらけつめい(山扁豆)の異名。

こうぼふ-ひえ 弘法稗 (名)【植】しこくびえ(田桂)の異名。

こうぼふ-むぎ 莎草 (名)【植】莎草科、薹(スゲ)屬の多年生草本。葉は細けれども厚硬、光澤ありて叢生す。五六寸の莖を葉間より抽出し、上部に太さ一寸許りの穗を生じ、春夏の際、黃褐色を呈す。我が國、各地の海邊の砂地に自生す。ふでくさ。

こうぼふ-むぎ 弘法麥 (名)【植】からすむぎ(燕麥)の異名。

こ-うま 小馬 子馬 (名) 馬の骨格小さきもの。又、馬の子。武具要說「多田淡路守申分、右之衆申す處至極に候中略一寸・二寸の小馬にて、大勢の中を驅け破り」承曆二年內裏歌合「こうまかきたる扇のつまに」

(諺)**小馬の朝いさみ** 初めに全力を傾けて、早く疲るる譬へ。

(諺)**小馬の朝驅け** 前條に同じ。

ごう-ま 降魔 佛語。惡魔を降伏せしむること。榮華音樂「又降魔・成道・轉法輪・切利天にのぼり給ひて、摩耶を敎化し奉り給ふ」釋迦譜「五降魔相中略群魔憂戚、悉皆迸散、是名降魔相」

ごうま の りけん 降魔利劍 ごうまけん(降魔劍)に同じ。謠曲葵上「躍きもやらで徒らに、行者の床を窺ひて、降魔の利劍を待つこそ、はかなかりけれ」

こう-まい 工米 (名) 古へ人夫の爲めに課したる米。大日本農史 建武式目追加「一、役夫工米以下段錢京濟事」

こう-まい 貢米 (名) こうべい(貢米)に同じ。

こう-まう 鴻毛 (名) 鴻の羽毛。甚だ輕きものに譬へていふ語。戰國策楚「權輕於鴻毛、而積禍重於丘山」史記韓長孺「衝風之末力、不能漂鴻毛」

こう-まう 紅毛 (名) ㊀紅色のけ。梁簡文帝文詠美人「紅毛覆翼、翠鬣垂心」㊁往時、阿蘭陀國、又は其の國人を呼びし語。又、日本・支那などにて、歐米人の稱。あかひげ。漳州府志「紅毛番本名米粟果、佛郎機與國也」

こう-まう 鉤毛 (名)【植】植物學上の用語。鉤狀をなせる毛。

こうまう-じん 紅毛人 (名) おらんだ人。又、歐米人。

こうまう-せん 紅毛船 (名) 往時、歐羅巴國の船の稱。

こう-まき 紅卷 (名) 紅の卷染め。紅しぼりの類。貞丈雜記 異本糺河原勸進申樂記「公方樣御小者六人。素袍はこうまき、色色けっこうなり」條條聞書「こうまき・ひやうもんは御禁制也。一段はれの時著せらるべき也」

こうま-くらべ 小馬競 (名) こまくらべ(駒競)に同じ。永曆二年內裏歌合「左の人人加茂に參りて、よろこび申して、こうまくらべなどせさすとて、祓へして立ちけるほどに」

ごうま-けん 降魔劍 (名) 佛語。惡魔を降伏せしむといふ劍。不動明王の手にせるもの。

こ-うまごやし (名)【植】荳科、苜蓿(ウマゴヤシ)屬の一年生草本。莖の高さ尺許り。葉は三小葉より成る羽狀複葉、殆ど全緣なる托葉を有す。春日、黃色の小蝶形花を葉腋に開き、短き總狀花序に排列す。果實は螺旋狀の莢にして、刺を有す。我が國、各地の原野に自生す。牧草及び綠肥として佳良なり。

こ-うまじるし 小馬標 (名) 馬標の小なるもの。(大馬標の對) 大阪軍記「五月五日巳の刻、京都御進發中略二重ふくべの御小馬印」

こう-まつ 口沫 (名) 激しく物を言ふとき、口角より飛ばす沫(アワ)。

こ-うまはり 小馬廻 (名) 走衆又は步行小姓の類の總稱。

こう-まろ 鉤丸 (名) 簾をかかげおくための鉤(コ)。

こうまろ-を 鉤丸緒 (名) 鉤丸に附くるふさ。貞丈雜記 建武年中行事正月「御簾中略常の時の如く、こうまろをにあぐ」

こう-まゐり 講參 (名) 講中を結びて、神佛に參詣すること。一代女六「出女の顏白白と見せて、こうまゐりの通し馬を引き込み」

こ-うみ 子產 (名) 子をうむこと。出產。產。榮華初花「中納言殿のうへも、此の頃御子うみの事あべければ」

こう-み 口味 (名) 口にあぢはふあぢはひ。韓非子說林「君曰、愛我哉、忘其口味、以啗寡人」

こう-み 厚味 味の濃厚なること。又、其のもの。周語「厚味寔腊毒」列子楊朱「豐屋・美服・厚味・姣色」

(諺)**厚味は實に腹の毒** 厚味なるものは腹に害あること。

こ-うみすずめ 小海雀 (名)【動】鳥類中、游禽類の一種。鳩大なり。全體、暗黑色にして、肩は白色、額其の他にも白き羽毛あり。本邦沿岸に多し。

こう-みやう 功名 (名) いさをとてがらと。功を建て名を揚ぐること。保元「冠者ばらを差し遣はして鎭め候ひき、これ爲義が功名にあらず」

こうみやう-ざた 功名沙汰 (名) 功名をなしたりといふ取り沙汰。柳樽「白拍子功名沙汰に無心文」

こうみ-をんな 子產女 (名) 子を產みたる女。子持。

こう-みん 公民 (名)【法】市町村の住民にて公民權を有するもの。卽ち、一戶を構へ、且つ治產の禁を受けざる滿二十五歲以上の帝國臣民たる男子にて、二年以上市町村の住民となり、其の市町村の負擔を分任し、其の市町村內にて地租若しくは直接國稅年額二圓以上を納むるもの。市制第七條乃至第九條「公民」町村制第七條乃至第九條「公民」

こうみん-けん 公民權 (名)【法】公民が公民たる資格によりて有する權利。卽ち、其の住居する市町村の機關の組織に參與する權利。町村制第十二條「公民權を停止せらるる者」

こう-む 公務 (名) ㊀おほやけのつとめ。公儀の事務。公用。增鏡上「公務の日たりとも、暇を申して此の八講にあふべし」宋史儒林傳「勤于公務、而疎於訓子」㊁〔法〕國家又は公共團體の事務。公務員の職務。町村制第九條三項「町村の公務」樞密院事務規程第三條「樞密院は內閣及各省大臣とのみ公務上の交涉を有し」刑法第七條「公務に從事する議員委員其他の職員」

こう-む 工務 (名) 工業に關する事務。工事に關する事務。

こうむ-きょく 工務局 (名) 農商務省の一局。工業及び度・量・衡に關する事務を掌る所。農商務省官制第四條三號「工務局」

こうむ-しょ 公務所 (名)【法】公務員が其の職務を行ふ所。刑法第七條二項「公務所」

ごう-むね 乞胸 (名) 〔先方の胸中の志を乞ふ義〕江戸時代、乞食の一種。守貞漫稿

こうむ-にん 〜公務人 (名) 明治元年五月廿七日諸藩に置き、貢士を以てこれに充て、朝廷に關係する事務を掌らしめたるもの。藩論を代表すべき者を任用せしむ。同年八月二十日公議人と改稱す。明治職官沿革表二、職官部上明治元年「置二諸藩公務人一」

こう-むらご 紺村濃 (名) こんむらご(紺村濃)に同じ。

こうむ-ゐん 〜公務員 (名) 【法】官吏・公吏、及び法令により公務に從事する議員・委員其の他の職員の總稱。刑法第七條「公務員」

こ-うめ (名) 【植】薔薇科、櫻屬の落葉灌木。幹の高さ五六尺、枝條細し。葉は橢圓形、鋭頭、徹鋸齒を有す。早春、梅花に似たる白色の五瓣花を開く。果實は小形の核果にして、初夏熟し、食ふべし。我が國、各地の庭園に栽培せらる。吉野忠信「こうめ・八重梅・一重梅」

こ-うめ 小梅 (名) 【植】㊀しなのうめの異名。㊁にはうめ(郁李)の異名。

こう-めい 〜功名 (名) こうみやう(功名)に同じ。諸葛亮「政を身に任せ、功名富み貴く、心の如くなるべきを」莊子刻意「無二功名一而治、無二江海一而閒」戰國策齊「成二其道德一而揚二功名於後世一者、堯舜禹湯周文王是也」史記管仲「知下我不レ羞二小節一而恥中功名不上レ顯二于天下一也」

こう-めい 〜後名 (名) 後日の名譽。後世の名聲。運歩色葉「後名コウメイ」諸元曾我「惜しみても惜しむべきは後名の嘲り」

こう-めい 〜鴻名 洪名 (名) 鴻大なる名譽。大なる名聲。繆襲魏文鼓吹曲「邁二武德一揚二洪名一」

こう-めい 〜公明 公平にして私曲なきこと。明白にしてかくしだてのなきこと。

こう-めん 〜後面 (名) 後部の方面。後方。後部。裏面。(前面の對)

こう-めん 〜垢面 (名) あかの附きたる顏。漢書王莽「亂首垢面」

こう-めん 〜厚免 特別の恩赦をうくること。厚意によりて赦免さるること。東鑑二、治承五年七月五日「長尾新六定景蒙二厚免一」盛衰記十九、兵衛佐賜二家人一「しかるに忠淸、厚免を蒙りて上洛後、忽ちに芳恩を忘れて、還って阿黨をなし」

こうめん-し 〜貢綿使 (名) 綿布を貢進するための使。民部省式下「凡太宰府毎年調綿三千疋、附二貢綿使一進レ之」

こう-もつ 〜公物 (名) 官府の物。官物。大內家壁書「就二寺領一沙汰出來之儀、被レ押二置中途土貢一事、準二武領一不レ可レ被レ用二御公物一」

こう-もつ 〜貢物 (名) こうぶつ(貢物)に同じ。雪女五枚羽子板上「民・百姓は貢物を私し」

こう-もん 〜告文 (名) ㊀神祇に告げ奉る文書。玉葉建久元年五月三日「此日中宮八社奉幣也。辰剋文章博士光輔朝臣、持二參告文草一、先內內見レ之」東鑑二、治承六年五月廿九日「奉二告文等於伊勢太神宮一」㊁天子より臣下へ告げさとし給ふ文。太平記一、謀告文「先づ告文一紙を下だされて、相模入道が忿りを靜めばや」太平記賢愚抄「告文コウモン」

こう-もん 〜後門 (名) 後方の門。うらもん。(前門の對) 李商隱詩少年「別館覺來雲雨夢、後門歸去蕙蘭叢」

こう-もん 〜肛門 (名) しりのあな。史記倉公「肛門重十二兩」

こうもん-くわつやくきん 〜肛門括約筋 (名) 【醫】肛門の濶大・收縮の作用を營む括約筋。

こうもん-は 〜講門派 (名) 日蓮宗不受不施の一派。寛文年中、俗日講に創まる。

こうもん-は 〜興門派 (名) 〔日蓮宗興門派の略〕明治三十二年二月以前の本門宗の稱。

こう-や 紺屋 (名) こんや(紺屋)の音便。運歩色葉「紺屋コウヤ」狂言記「こうやに足らぬ物ならば、しんし・絹ばりのやうな物ではなかったか」

(諺)**紺屋のあさって** 〔紺屋の、染物の期日の遷延すること多きよりいふ〕約束したる期日の、あてにならぬ譬へ。吾吟我集三「つれもなき人は紺屋のあすあさて、あひそめん日をのびのびにする」浮世風呂四序「稿本たびたび虛ぐれど、紺屋の明後日、作者の明晩、久しい分說(フセツ)と合點して」

(諺)**紺屋の白袴** 人のためにのみ計りて吾が身の計をなす暇なきに譬へていふ諺。古への紺屋は常に袴をはきしよりいふと。紺搔(コウカキ)の白袴。

(諺)**紺屋の地獄** 紺屋は常に違約して人を詐るより、死後は地獄に墜つとの意。

(諺)**紺屋の地震** 〔藍(アイ)澄まず(相濟まず)の意〕申譯なしといふ隱語。

こう-やく 〜公約 (名) 【法】こうはふじやうのけいやく(公法上契約)の略。こうはふ(公法)の條を見よ。

こう-やく 〜口約 口上にてやくそくすること。くちやくそく。

こう-やく 〜後約 あとの約束。(前約の對)

こう-やくすう 〜公約數 (名) 【數】二つ以上の數に共通なる約數。例へば、2は4と6との公約數なるが如し。

こう-よ 〜後輿 (名) 後部にある乘輿。(前輿の對) 謝惠連詩「推二鋼惠前軾一、鳴佩二後輿一」

こう-よ 〜公餘 (名) 公務の餘暇。王禹偁詩「公餘多愛入二林泉一」

こう-よう 〜公傭 (名) 國家又は公共團體の雇傭に係ること。(私傭の對) 褒章條例取扱手續第三條「其公私傭に係る者」

こう-よう 〜公用 ㊀公共の用。公衆の使用。漢書食貨志「毋將隆奏言、武庫兵器、天下公用」㊁國家又は公共團體の使用。耕地整理法第四十三條第三號「府縣郡市町村其の他勅令を以て指定する公共團體の公用又は公共の用に供する土地」㊂國家又は公共團體の用事。公務。公事。傾城島原蛙合戰三「公用の憂さはらし、傾城狂ひに來たりしなど、沙汰は無用」川中島合戰三「公用に付き、夫婦共に登城」明治二十九年三月法律第十五號航海獎勵法第七條「船舶を公用の爲に使用すること」㊃官府の費用。公儀の入用。類聚三代格十一「薄レ賦省レ傜、既闕レ支二於公用一」大內家壁書「至二餘得分一者、可レ被レ備二公用一之」中興鑑「賞賜行レ私、以越二公用一」

こう-よう 〜功用 ㊀物の役にたつこと。はたらき。ききめ。續古事談二「油漏器中略賀陽親王これをうつし造りたりけれども、功用ほどこすこととなし」㊁手柄。功勞。韓非子外儲左上「人主之聽レ言也、不下以二功用一爲中的上、則說者多二棘刺白馬之說一」史記魯周「功用既興、然後授レ政」

こうよう-きてう 〜公用歸朝 (名) 外國に駐在する者が、公務のために本國に歸ること。在外公館費用條例第十八條「公用歸朝」

こうよう-ざいさん 〜公用財產 (名) 【法】こういうざいさん(公有財產)に同じ。

こうよう-せいげん 〜公用制限 (名) 【法】國家又は其の機關が公用のために、特定物に對する私人の所有權、又は其の他の權利の行使に制限を加ふる行政處

分。

こうよう-せん 〜公用錢 (名) おほやけの使用に供する錢。政所賦銘引付「顯順申雜照文明十七廿三御室元成多喜方へ、赤松廣岡方より公用錢事。成多喜返手役儀就二元沙汰一、以二他足一廣岡方へ辨償畢。仍催促候處、成多喜難澁」

こうよう-ちょうしう 〜公用徵收 (名) 【法】國家又は其の機關が公用のために、特定物に對する私人の所有權、又は其の他の物權を強制して徵收する行政處分。

こうよう-にん 〜公用人 (名) ㊀大小名の家にて、公儀に關する用事を辨ずる役。又、其の人。㊁明治元年八月二十日諸藩に設けて、從前の留守居役の職を掌らしめしもの。同三年九月十日の藩制改革によりて廢せられたり。明治職官沿革表一、職官部上明治元年「公用人を設け從前留守居役の職を掌らしむ」

こうよう-ぶつ 〜公用物 (名) 【法】こういうぶつ(公有物)に同じ。

こうより-すぢ 紅寄筋 (名) こうえりすぢ(紅寄筋)に同じ。

こう-ら 勾欄 (名) こうらん(勾欄)の訛り。和泉式部日記「石山中略こうらのしもの方に、人のけはひのすれば」同「こうらにおしかからせ給ひて」

こう-らい 〜後來 (名) こののち。ゆくすゑ。今後。將來。運歩色葉「後來コウライ」齊書王儉「後來佳器也」

こう-らう 〜功勞 (名) てがら。いさをし。ほねをり。周禮司勳「國功曰レ功、事功曰レ勞」史記秦始皇本紀「積二功勞一世以相傳久矣」

こうらう-でん 〜後涼殿 (名) 禁中、清涼殿の北にある殿。源氏鈴虫「殿上人はこうらうでんのすのこに、各心寄せつつさぶらふ」

こう-らく 〜後樂 衆人よりおくれて樂しむこと。あとのたのしみ。岳陽樓記「先二天下之憂一而憂、後二天下之樂一而樂」

こう-らく 〜攻落 城などをせめておとすこと。

こうらくゑん-やき 後樂園燒 (名) 江戸時代、水戸侯の庭園の後樂園にて燒きたる樂燒。

こう-らん 〜勾欄 (名) かうらん(高欄)に同じ。一心二河白道二「雲の舞臺の勾欄に、立ち並んだる御姿」傾城酒呑童子三「此處に四十許りの男の子、勾欄の下につっと出で」通雅「作レ橋中略勾欄甚嚴飾」

こう-らん 〜紅蘭 (名) 花の紅色なる蘭。著聞廿「秋有二紅蘭紫菊之花一」江淹文別賦「見二紅蘭之受一レ露」

こう-らん 〜洪瀾 (名) おほなみ。洪濤。郭璞文江賦「洪瀾浣演而雲廻」

こうらん-くわ 〜紅藍花 (名) 【植】うっこんかう(鬱金香)の異名。

こ-うり 小賣 (名) 物品を卸賣商より買ひ入れ、これを消費者に分け賣ること。小資本・小規模にて經營するを例とす。(卸賣の對) 商法第二十五條二項「小賣の取引」

こう-り 〜公吏 (名) ㊀公務を取り扱ふ吏員。公儀の官吏。㊁【法】地方自治團體の執行機關を構成する市町村長・市町村助役・收入役等の吏員、及び官廳の任命により公衆の囑託する事務に從事する公證人・執達吏の總稱。刑事訴訟法第二十條「官吏公吏の作る可き書類」

こう-り 〜公利 (名) 公共の利益。公益。河川法第四條二項「流水に因りて生ずる公利を增進し又は公害を除却若は輕減する爲に設けたるもの」左傳昭公廿六年「大夫不レ收二公利一」

こう-り 〜功利 (名) ㊀功名と利得と。荀子「詐レ尙二功利一、是漸レ之也」史記平準書「無レ益二於俗一、稍騖二於功利一矣」㊁功勞と利益と。功用利益。韓非子難三「疾二功利於業一、而不レ受二賜於君一」何晏文景福殿賦「當時享二其功利一、後世賴二其英聲一」㊂【倫】〔英 Utility〕こうりせつ(功利說)を見よ。

こう-り 〜厚利 (名) 多くの利益。あつき利得。韓非子說難「說レ之以二厚利一、則見二下節一而遇二卑賤一」

こう-り 〜公理 (名) ㊀おほやけの道理。公明の道理。公道。㊁【數】吾人の經驗によりて眞なることを承認する事項。普通公理と幾何學公理とあり。

ご-うり (名) 【植】からすうり(王瓜)をいふ、肥前國の方言。物類稱呼

こう-りう 〜公流 (名) 公衆の自由に使用し得る水流。民法第二百二十條「公路公流又は下水道」

こう-りう 〜拘留 ㊀執らへてとめおくこと。抑留。朗詠「鶯聲誘引來二花下一、草色拘留坐二水邊一」漢書匈奴「單于亦輒拘二留漢使一、以相報復」㊁【法】主刑の一。一日以上三十日未滿、拘留場に拘置するもの。刑法第九條第十六條「拘留」㊂【法】舊刑法の違警罪の一。一日以上十日未滿、拘留所に留置し、定役に服せしめざるもの。舊刑法第九條一號「拘留」㊃【法】次條に同じ。貴族院伯子男爵議員選擧規則第四條「刑事の訴を受け拘留又は保釋中に在る者」勾留。

こう-りう 〜勾留 【法】刑事被告人を監獄に拘置すること。刑事訴訟法第八十五條「勾留を受けたる被告人」

こうりう-しう 〜拘留囚 (名) 【法】拘留場に拘禁せられたる囚人。監獄法第三十二條「拘留囚には自衣の著用を許し」

こうりう-じやう 〜勾留狀 (名) 【法】豫審判事又は公判判事が、禁錮以上の刑に該當すと認めたる被告人を勾留するために發する令狀。刑事訴訟法第七十五條「勾留狀」

こうりう-じょ 〜拘留所 (名) 警察官署に附屬する留置場の俗稱。

こうりう-せき 〜紅榴石 (名) 【鑛】きざくろいし(貴柘榴石)の異名。

こうりう-ぢやう 〜拘留場 (名) 監獄の一。拘留に處せられたる者を拘禁する所。監獄法第一條一項三號「拘留場」

こ-うりかへで (名) 【植】めうりのきの異名。

こうり-けう 〜功利教 (英 Utilitarianism) (名) 【倫】こうりせつ(功利說)の舊譯語。

こうり-ざかや 小賣酒屋 (名) 酒を小賣にする店。うけざかや。(おろしざかやの對)

こうり-しやう 小賣商 (名) 小賣の商業。又、その人。(おろしうりしやうの對)

こうり-しやうげふ 小賣商業 (名) 小賣の商業。小賣商。

こうり-しやうにん 小賣商人 (名) 小賣を業とする商人。(おろしうりしやうにんの對) 民法第百七十三條一號「生產者卸賣商人及び小賣商人か賣却したる產物及び商品の代價」

こうり-しゆぎ 〜功利主義 (名) 次條に同じ。

こうり-せつ 〜功利說 (英 Utilitarianism) (名) 【倫】廣義には行爲の功利如何、卽ち行爲が福利・快樂を增進するに適するや否やを以て、行爲の目的及び其の善惡判斷の標準となす倫理說を言ふ。廣義の功利說は、行爲者自身の福利を其の標準とする利己的快樂說と、他人の福利を標準とする利他的快樂說と、自他の差

別なく、一般公衆の福利・快樂(最大多數の最大幸福)を標準とする公衆的或ひは普汎的快樂說とに區別せらる。普通、此の最後のもののみを特に功利說と稱す。

こうり-ちやう 小賣帳 (名) 小賣人が、其の賣渡しの種類・斤量・年月日・代金等を記入する帳簿。糖業稅則施行細則第十一條二項「小賣人又は自用者に賣渡すものは砂糖小賣帳を調製し賣渡の年月日種類斤量を記し每月計を附すへし」

こう-りつ 〜公立 (名) 公共團體の設立・維持にかかること。又、其のもの。(官立・私立の對) 衆議院議員選擧法第十二條二項「官立公立私立學校の學生生徒」

こう-りつ 〜工率 (英 Power) (名) 【理】機械などの仕事をなす割合。單位時間に爲す仕事の量を其の機關の工率といひ、馬力を以て單位とす。發電機にてはわっと・を以てするを通常とす。

こうりつ-がくかう 〜公立學校 (名) 地方自治團體の設立・維持にかかる學校。(官立學校・私立學校の對) 文部省官制第三條二號「公立學校職員に關する事項」

こうり-てん 小賣店 (名) 小賣をなす商店。こうりみせ。

こうり-ねだん 小賣値段 (名) 小賣のねだん。(卸賣値段の對)

こうり-にん 小賣人 (名) 小賣商を營む人。小賣商人。(卸賣人の對) 糖業稅則施行細則第十一條二項「小賣人」

こう-りふ 〜興立 おこすこと。謠船橋「橋、興立の志、返す返すも優しうこそ候へ」 幸若舞曲 築島「經の島と申して、平相國のこうりふの、今に有りとぞ見えにける」 後漢書 許劭傳「今興ニ立廢業ニ富ニ國安ニ民」

こうり-みせ 小賣店 (名) こうりてん(小賣店)に同じ。

こうり-や 小賣屋 (名) 小賣をなすいへ。

こう-りやう 〜虹梁 (名) 一柱と柱との閒に架したる楣(ハリ)の如き梁。蝦虹梁・妻虹梁などあり。二大なるうつばり。東鑑 二、治承五年六月廿七日「鶴岡若宮材木、柱十三本、虹梁二支」 庭訓往來 三月「材木者爲ニ虹梁ニ之閒、爲ニ杣取ニ令ニ謀候」 狂言 朝比奈「門中略大きなるこうりやうに、大釘・かすがひを打ちぬき打ちぬきしけるは、劍の山の如くなり」

こう-りやう 〜公領 (名) 一朝廷の御領。官府の領地。東鑑 廿八、貞永元年九月一日「爲ニ公領ニ者、尤可ニ爲ニ國司成敗ニ、於ニ庄園ニ者、爲ニ領家沙汰ニ、經ニ奏聞ニ可ニ爲ニ聖斷ニ之由被ニ定」 長曾我部元親百箇條「公領名田、訴訟停止之事」 二江戶時代、幕府の領地。

こう-りやう 〜餱糧 (名) 旅に携ふべき食。かて。左傳 宣公十一年「具ニ餱糧ニ、度ニ有司ニ」

こうりやう-でん 〜後涼殿 (名) こうりやうでん(後涼殿)に同じ。著聞 九十「後涼殿(コウリヤウデン)の東のすのこに」 運步色葉「後涼殿 コウリヤウデン 大內」

こうりやう-へる (自動下二) こうろへるに同じ。一心二河白道 二「狸を附け出しましたが、こうりやうへたやつで、我れ我れが手にかなひませぬ」

こう-りやく 〜攻略 攻め奪ふこと。攻め掠むること。晉書 天文志「攻ニ略并州ニ多ニ所ニ殘滅ニ」

こう-りやく 〜寇掠 財物を掠奪すること。唐書 盧衡傳「寇掠不ニ爲ニ止」

こう-りゆう 〜興隆 おこりさかんなること。興起して榮ゆること。おこして盛んならしむること。平家 二、座主流「ただ吾が山の興隆をのみ思へり」 盛衰記 卅九、長寺「伽藍を興隆し、群生を可ニ濟度ニ」 諸葛亮 出師表「親ニ賢臣ニ遠ニ小人ニ此先漢所ニ以興隆ニ也」

こう-りよ 〜後慮 後日の事をおもんばかること。後日の心配。あとあとの氣がかり。後顧。

こう-りよく 〜公力 (名) 國權を行使する機關の强制力。陸軍治罪法 第四十條「現行犯の軍人を逮捕し若くは其の檢證處分を爲すときは公力を用ふることを得」

こう-りん 〜紅輪 (名) 紅色をなせる日輪。開見後錄「日輪湧出、正紅色騰起數十丈」

こうりん-しやうさん 〜口輪匝筋 (名) 【醫】口を圍繞し、口の閉合する作用をなす筋肉。

こう-る 梱 (他動四) 繩などにて荷を括る。荷造りをなす。とる。

こ-うるか (名) うるかの一種。うるかを見よ。朝倉亭御成記「十三獻 中略 こうるか」

こうる-らび (獨 Kohlrabi) (名) 【植】きうけいかんらん(毬莖甘藍)の異名。

こう-るゐ 〜紅淚 (名) 一血の淚。けつるゐ。平家 十一、腰越「御勘氣をかうぶるの閒、むなしくこうるゐにしづむ」 十訓 下「苦學冬夜、紅淚盈ニ巾」 二美人の淚、又は花の露を形容していふ語。溫庭筠詩「紅淚文姬洛水春」 羅隱詩 庭花「向ニ晚寂無ニ人、相偎墮ニ紅淚ニ」

こう-るゐ 〜猴類 (名) 【動】さるるゐ(猿類)の異名。

こう-れい 〜恆例 (名) 常例として行ふ儀式又は公事。常例。定例。(臨時の對) 運步色葉「恆例 コウレイ」

ごう-れい 〜恆例 (名) 前條に同じ。著聞 三「恆例・臨時の大小事」

こう-れつ 〜功烈 (名) 大いなるいさをし。すぐれたる功績。左傳 襄公十九年「銘ニ其功烈ニ以示ニ子孫ニ」 禮記 祭法「文王以ニ文治、武王以ニ武功ニ去ニ民之菑ニ、此皆有ニ功烈於

民ニ者也」 孟子 公孫丑上篇「致ニ力以爲ニ功、成ニ業以爲ニ烈」

こう-れつ 〜鴻烈 洪烈 (名) 大なる功烈。偉烈。宋書 武帝記「俾ニ朕負ニ扆高拱、而保ニ大洪烈ニ」

こう-れん 〜後聯 (名) 漢詩の律體にては、第五・第六、排律にては第九・第十の二句の對句。(前聯の對) 詩法纂論「試帖正格、九・十句、謂ニ之後聯ニ」

こう-れん 〜厚斂 分外なる取りたてをなすこと。左傳 宣公二年「厚斂以彫ニ牆」 同 昭公廿六年「公厚斂焉、陳氏厚施焉」

こう-れん 〜拘攣 かかはりひかるること。勿などのひきつること。痙攣。揚雄 太玄賦「蕩然肆ニ志、不ニ拘攣ニ兮」

こう-れん 〜公廉 公平にして廉潔なること。漢書 尹翁歸傳「爲ニ市吏ニ、公廉不ニ受ニ餽」

こう-れんげつつじ (名) 【植】れんげつつじ(羊躑躅)の異名。

こう-れんつつじ (名) 【植】れんげつつじ(羊躑躅)の異名。

こうれん-せき 〜紅簾石 (名) 【鑛】綠簾石の一種。紅色にして多色性なり。

こうれん-へんがん 〜紅簾片岩 (名) 【地】綠簾片岩の一種。卽ち、綠簾石に代ふるに紅簾石を以てしたるもの。本邦、四國・武藏・磐城等に出づ。

こう-ろ 〜公路 (名) こうだう(公道)に同じ。民法 第二百十條「或土地が他の土地に圍繞せられて公路に通せさるときは其土地の所有者は公路に至る爲め圍繞地を通行することを得」 同 同條「崖岸ありて土地と公路と著しき高低を爲すとき」

こう-ろ 〜紅爐 (名) 火の熾んに熾りてあるゐろり。續近思錄「顏子克ニ己、如ニ紅爐上一點雪ニ」

こう-ろ 〜鴻臚 (名) こうろくわん(鴻臚館)の略。朗詠「後會期遙、霑ニ纓於鴻臚之

曉淚ニ」

こう-ろ 〜攻路 (名) 攻擊する路。せめみち。

こう-ろう 〜候樓 (名) ものみやぐら。望樓。周禮 地官 注「亦、市中候樓也」

こう-ろう 〜紅樓 (名) 美しく裝飾したる樓。又、妓樓。白居易詩「紅樓富家女、金縷繡羅襦」

こう-ろく 〜厚祿 (名) 手あつき俸祿。澤山の扶持。戰國策 楚策「處ニ尊位ニ受ニ厚祿ニ」 史記 日者傳「尊官厚祿、世之所ニ高也、賢才處レ之」

こうろ-くわん 〜鴻臚館 (名) 古へ京都に設けられて、外國來貢の人を接待せし館。太宰府・難波にもあり。令義解 職員令「玄蕃寮。頭一人、掌ニ佛寺・僧尼名籍 中略 及在京夷狄、監ニ當館舍ニ 謂鴻臚館也 事ニ」 源 桐壺「このみこを、鴻臚館につかはしたり」

こうろ-けい 〜鴻臚卿 (名) げんばのかみ(玄蕃頭)の唐名。運步色葉「鴻臚卿 コウロケイ 玄蕃之唐名」 文獻通考 職官考「鴻臚卿、周官大行人、掌ニ大賓客之禮ニ」

こうろ-し 〜鴻臚史 (名) げんばのさくわん(玄蕃屬)の唐名。

こうろ-じ 〜鴻臚寺 (名) げんばれう(玄蕃寮)の唐名。宋史 職官志「鴻臚寺卿、掌ニ四夷朝貢宴勞 中略 禁令ニ」

こうろ-じよう 〜鴻臚丞 (名) げんばのじよう(玄蕃允)の唐名。

こうろ-せうけい 〜鴻臚少卿 (名) げんばのすけ(玄蕃助)の唐名。

こうろ-へる (自動下二) 一年功を歷て老熟す。二年を積みて長大となり、又は變形す。

こう-ろん 〜公論 (名) 一世上一般の議論。輿論。明治元年三月十四日御誓文「廣く會議を興し萬機公論に決すへし」 二公平なる議論。元史 仁宗紀「御史臺是一時公論、國史院實萬世公論」

こう-ろん 〜口論 ことばにて爭論すること。いひあひ。口爭ひ。爭論。東鑑 十九、承元三年三月一日「使者俗與ニ地頭大夫屬入道代官ニ、及ニ口論ニ」 盛衰記 四十六、義經仲違「渡邊の船汰への時、逆櫓の口論を深く遺恨と思ひければ」

こう-わ 〜媾和 かうわ(講和)に同じ。

こう-わう 〜侯王 (名) 一國の君。王侯。莊子 漁父「侯王之佐與、子貢曰非也」

こうわう-さう 〜紅黃草 (名) 【植】菊科、萬壽菊(センジュギク)屬の一年生草本。莖の高さ一二尺、よくよく分枝し、各一箇の花序を戴く。葉は羽狀複葉、各小葉は線狀篦形、鋸齒を有す。夏日、黃褐色の美花を開き、頭狀花序に排列す。舶載の花草にして、我が國、各地の庭園に觀賞用として栽培せらる。くじやくさう。藤菊。

こう-わん 〜口腕 (名) 【動】しんぺん(脣瓣)に同じ。

こう-ゐ 〜功位 (名) 功勞と地位と。又、功勞によりて得たる官位。漢書 高后紀「差ニ次列侯功ニ以定ニ朝位ニ 中略 嗣子各襲ニ其功位ニ」

こう-ゐ 〜攻圍 せめかこむこと。攻擊包圍すること。祖君彥文「四面攻圍、千里援絕」

こうゐ-ぐん 〜攻圍軍 (名) 攻圍する軍。

こう-ゐん 〜講院 (名) 佛語。天台宗・華嚴宗等にて攻學を主とする寺院。

こう-ゐん 〜後院 (名) 天皇の讓位後の御所。榮華 果夢不見「一條のおほきおとどをば 中略 いみじう造らせ給ひて、みかどの後院に思し召すなるべし」 新儀式 四「後院事。代代多有ニ後院ニ」

こう-ゑ 〜講會 (名) 神佛などの信者の集まりて催す法會。

こう-ゑい 〜後衛 (名) 一後方を守護すること。(前衛の對) 二軍隊にて、後方の掩護に屬する部隊。(前衛の對)

こうゑい-ぢんち 〜後衛陣地 (名) 後衛が占領して敵を防止すべき陣地。

こう-ゑん 〜公園 (名) 一公衆の逍遙・行樂に供するため特に設備せる庭園。地所名稱區別「各所の舊跡名區及公園等民有地にあらさるもの」 二官有のその。北史 魏宗室傳「任城王澄爲ニ定州刺史ニ表減ニ公園之地ニ以給ニ無業ニ」

こう-ゑん 〜後園 後苑 (名) 家の後などにある庭園、又は島。平治 賴朝生捕常磐落「何となく後園に出でて見廻はすに」 盛衰記 卅九、重衡酒宴「三位中將は無雙の能者にておはします也 中略 琵琶ひかせ來れ。賴朝も汝が後園にたたずみて聞くべし」 史記 相國世家「相舍後園、近ニ吏舍ニ」

こう-ゑん 〜後援 後詰の援兵。あとよりのたすけ。唐書 高宗紀「左監門衛將軍李謹行爲ニ後援ニ」 周書 孤信傳「孤軍數千、後援未レ接」

こう-ゑん 〜弘遠 弘大にして久遠なること。漢書 高帝紀「規摹弘遠」

こうゑん-たい 〜後援隊 (名) 後援する部隊。

こうゑん-ち 〜公園地 (名) こうゑん(公園)に同じ。臺灣地租規則 第一條三號「公園地」

こう-をんたい 〜恆溫帶 (名) 【地】じやうをんそう(常溫層)に同じ。

こ-うん 〜孤雲 (名) 一片の雲。片雲。朗詠「歸ニ谿歌ニ鶯更逗ニ留於孤雲之路ニ」 謠 實盛「雀歌遙かに聞こゆ、孤雲の上」

ご-うん 〜五雲 (名) 一五色の雲。周禮 保章氏「以ニ五雲之物ニ辨ニ吉凶・水旱・降豐・荒之祲象ニ」 二ごうんのくるま(五雲車)の

略。太平記 十一、還幸「左輔・右弼列を引き、六軍次でを守り、五雲閑かに幸すれば」

ごうん-の-くるま 五雲車 支那にて、貴人の乘物として、五雲を描きなどしたる車。太平記 卅七、楊貴妃「五雲の車に召され、左右の侍兒人(ジドト)に手を引かれ」

ご-うん 〜五運 (名) 五行の運行。又、曆にて、火・水・木・金・土の五星の稱。通曆「太昊木德王、始有ニ甲曆五運ニ」

ご-うん 〜五蘊 (名) 色蘊と受蘊と行蘊と想蘊と識蘊との稱。增鏡 下「四大本無レ主、五蘊本來空、將ニ頭傾ニ白刃ニ、但如レ鑽ニ夏風ニ」 正治二年百首「釋敎 五蘊色 中略 受 中略 想 中略 行 中略 識」 心經「照ニ見五蘊ニ皆空、度ニ一切苦厄ニ」

こえ 肥 (名) 一地味を肥えしめ、生產力をゆたかにする爲めに、土地に施すもの。こやし。肥料。砂石集 五下「田舍の習ひなれば、田に入れんとて、小法師糞(コエ)を馬に附けて行くを見て」 二糞尿。大小便。

(諺)**肥えよりも鍬** 施肥よりも、能く耕すが効多きこと。

ごえ 越 (接尾) 國名又は峠の名の下に添へて、國境又は峠などを越ゆる徑路を示す語。

こ-えい 〜孤影 (名) 一人にてものさびしく見ゆるかげ。

ご-えい 〜御影 (名) 肖像又は寫眞等の敬語。東鑑 廿五、承久三年七月八日「召ニ信實朝臣ニ被レ摸ニ御影ニ」

ご-えいか 〜御詠歌 (名) えいか(詠歌)三の尊稱。

こえ-いく 越行 (自動四) こえゆく(越行)に同じ。萬葉 十「おほとものみつの泊りに船はてて、たつたの山をいつか故延伊加(コエイカ)む」

こえ-いづ 越出 (自動下二) こえて出づ。境など越えて他へ出づ。安閑紀「長

駕遊携嬉遨(行ごえ)手都外」

ごえう 〜五曜 (名) 紋所の名。

ごえうせん 〜五曜鐵線 (名) 紋所の名。

ごえうのうめ 五曜梅 (名) 紋所の名。

ごえうま 越馬 (名) はねて飛び越えがちなる馬。讃古事談「舞人業弘は、とりかげと云ふこえ馬にあたりて、つかうまつるに能はずと申しければ」

ごえかかる 越掛 (自動四) 越えんとす。續後拾遺「こえかかる山ぢの木は知らねども、長きを頼む秋の夜の月」

ごえかぬ 越兼 (自動ナ) 越ゆることをなしかぬ。こえわぶ。

ごえきり 〜古驛 故驛 (名) ふるき驛。昔の宿驛。雜游「蕪山古驛經三折」王維詩「蹋蹋並驛通秦甸里、長亭下「雄原」

ごえきり 〜虎疫 (名) 〔こ(虎)は虎列刺の頭字〕これら病。これら病。

ごえきり 〜雇役 やとひて使役すること。又、雇はれて服する役目。

ごえく 越來 (自動カ) 山川などを越えて來る。萬「遥き山せきも故郷夜(ごえ)ぬ、今更にあづまぎよしのなきがさびしさ」古今雜下「梓弓はるの山べをこえくれば、道も去りあへず花ぞ散りける」

ごえくのす 越寄 (他動四) 越えながら日をくらす。夫木「こえくらすもとの里の月のタ間に、松風おくるさやの中山」新續古今雜上「越えくらす山わけ去さらでただに、千きぬ袂にふる時雨かな」

ごえくる 越暮 (自動ナ) 越えながら日暮る。新續古今雜上「今日もまた暮なる山ゐ越えて暮れて、袂の底なる人相の夢」

ごえくるま 肥車 (名) 〔こ(肥)ゑ(肥)〕に同じ。水鏡眼目「ゑとりて牛に

こえ車をそかけてける」

ごえすぐ 越過 (自動ナ) 越えて通り過ぐ。萬「いやを遠に國を來離れ、いや高に山を越要須麻(こえ)」新千載雜上「越え過ぐる高ねのこのま出でそめて、むかふ裾野に月ぞ先だつ」

ごえだ 小枝 (名) 小さき枝。枝の先に出でたる枝。きえだ。源氏賢木「こ枝」

ごえたい 肥代 (名) 糞尿を取らしむる代として受け取るもの。糞尿を取らる代として渡すもの。

ごえたご 肥桶 (名) 肥えを撒ぶ桶。こえをけ。くそをけ。

ごえたこのひもとほし 肥桶縅通 (名) 桶つ仰のきて、穴大きなる鼻を喇りて、いふ語。穴の二つ並べるさまの相似たるよりいふ。くそをけのひもとほし。

ごえたあ 肥溜 (名) 肥えを溜めおくところ。

ごえつち 肥土 (名) 地味の肥えた土。沃土。字鏡「爽(こえつち)」

ごえつぼ 肥壺 (名) 厠にすえて、大小便を受くる壺。

ごえとり 肥取 (名) 厠の肥えを汲み取りて掃除すること。又、其の人。こやしくみ。掃除屋。

ごえとりぐるま 肥取車 (名) 肥えを汲み取りて運ぶ車。水鏡眼目「道にこえとり車のあるを見て」

ごえとろ 肥取 (名) こえとり(肥取)の訛り。

ごえなやむ 越惱 (自動四) 越えんとして行きなやむ。越えかねてなやむ。風雅集「こえなやみ我が身行きとまるタ山の、尾のへを月は今ぞ出づなる」

ごえなる 越則 (自動ナ) 常に越えて通る。話千載雜三「越えなれしあとの山のは、もはえず立ちの殿り、つらき後せの山のは

こえ事をそかけてける」

ごえすぐ 越過 (自動ナ) 越えて通り過ぐ。萬「いやを遠に國を來離れ、いや高に山を越要須麻(こえ)」新千載雜三「越え過ぐる高ねのこのま出でそめて、むかふ裾野に月ぞ先だつ」

ごえだ 小枝 (名) 小さき枝。枝の先に出でたる枝。きえだ。源氏賢木「こ枝」

ごえたい 肥代 (名) 糞尿を取らしむる代として受け取るもの。糞尿を取らる代として渡すもの。

ごえたご 肥桶 (名) 肥えを撒ぶ桶。こえをけ。くそをけ。

ごえたこのひもとほし 肥桶縅通 (名) 桶つ仰のきて、穴大きなる鼻を喇りて、いふ語。穴の二つ並べるさまの相似たるよりいふ。くそをけのひもとほし。

ごえたあ 肥溜 (名) 肥えを溜めおくところ。

ごえつち 肥土 (名) 地味の肥えた土。沃土。字鏡「爽(こえつち)」

ごえつぼ 肥壺 (名) 厠にすえて、大小便を受くる壺。

ごえとり 肥取 (名) 厠の肥えを汲み取りて掃除すること。又、其の人。こやしくみ。掃除屋。

ごえとりぐるま 肥取車 (名) 肥えを汲み取りて運ぶ車。水鏡眼目「道にこえとり車のあるを見て」

ごえとろ 肥取 (名) こえとり(肥取)の訛り。

ごえなやむ 越惱 (自動四) 越えんとして行きなやむ。越えかねてなやむ。風雅集「こえなやみ我が身行きとまるタ山の、尾のへを月は今ぞ出づなる」

ごえなる 越則 (自動ナ) 常に越えて通る。話千載雜三「越えなれしあとの山のは、もはえず立ちの殿り、つらき後せの山のは

ごえはつ 越果 (自動カ) 全く越ゆ。越えをはる。後拾遺雜三「こえはてぬ都も遠くなりぬべし、關の夕風しばし涼まん」

ごえび 小蝦 (名) 小きえび。芭蕉句集「蕉が家は小海老にまじるいとどかな」

ごえびしぎ 肥柄杓 (名) 肥えを汲むに柄杓。「あぢに柄をすげた肥柄杓」

ごえびと 肥人 (名) こえふとりたる人。源氏賢木「肥人」

ごえかれ 〜枯葉 (名) かれたる草木の葉。かれは。丘遲詩「枯葉未落」

ごえ 〜五葉 (名) 【1】いつつの葉。【2】〔植〕ごえふのまつ(五葉松)の略。宇津保祭使「大いなるいはほのほとりに、五えふのもも木ばかりし、同賢「中島なる五えふに、みさご池よりたちて、三寸ばかりの鮒を食ひて居りけるを」枕「ごえふ」【3】梧葉。〜梧葉。(名) あをぎりの葉。草慰物詩「況鼓風雨夜、叢樹梧葉秋」

ごえふかうの (名) 〔植〕やぶからし(烏蘇蘇)の異名。

ごえふさう (名) 〔植〕ちくせつにんじん(土參)の異名。

ごえふつつじ (名) 〔植〕石南(ごえつ)科、石南屬の常綠灌木。幹の高さ五六尺乃至丈許、分枝繁なり。葉は橢圓形、厚く、五葉づつ一枝柄に生ず。春季、白色の合瓣花を開く。我が國、各地の山地に自生し、又、觀賞用として庭園に栽培せらる。

ごえふにんじん (名) 〔植〕ちくせつにんじん(土參)の異名。

ごえふね 肥船 (名) 肥料を運ぶ船。こやしぶね。糞船。

ごえふのまつ (名) 〔植〕ごえふまつ(五葉松)の異名。宇津保祭使「木の葉は色づき、草むらの花咲き、五えふの松はのどけき色をまし」

ごえふばい 〜五葉苺 (名) 〔植〕つた(蔦蘿)の異名。

ごえふまつ 五葉松 (名) 〔植〕【1】松杉科、松屬の常綠高木。幹の高さ數丈、樹皮は粗糙なり。葉は針形、五箇づつ一所より叢生し、濃綠色にして內面白色を帶ぶ。花は單性、雌雄同株、雄花をなす。果實は球果なり。我が國、各地の山地に自生し、又、觀賞用として栽培す。材は器具用・建築用とす。いつつはのまつ。ごえふのまつ。五葉松。五葉松。五鬚。【2】てらせんまつ(海松)の異名。【3】ひめこまつの異名。

ごえくだる 越隔 (自動四) 越えて隔たる。萬「白雲のたなびく山を、岩根踏みた古要藤祭利(ごえ)なば」

ごえまつ 肥松 (名) 【1】脂(こえ)多き松の木。【2】幹枝の肥えたる松。風雅集「肥えたは肥松、痩せたは松松」

ごえゆく 越行 (自動四) 越えて行く。萬「白雪のふりしく山を越由可(ごえ)む、君をぞもとないきのをにもふ」

ごえらか 肥 (形) 肥えふとりたるさまにいふ語。五代帝王物語「ごえらかにゆゆしき情の著座したれば、誰れにかと思ひて」

ごえる 肥 (自動ナ) こゆ(肥)の口語。運歩色葉「肥ごえ」

ごえる 越 (自動ナ) こゆ(越)の口語。運歩色葉「越ごえ・超ごえ・踰ごえ」

ごえわかる 越別 (他動四) 越えて其のものと分かる。後拾遺雜四「おのづから道ふ人あらば言つてよ、宇津の山べを越えわかるとも」

ごえぶ 越伦 (自動ナ) 越ゆること。もなしわぶ。こえかねど、崎鈴日記「道狭の關の戸やしなかなかに近けれど、こえわびぬれば、頃きてぞふる」新勅撰雜三「こえわびぬれば、埋む白雲」

ごえを 肥桶 (名) こえたご(肥桶)に同じ。

(諺)肥壺も百荷 いかなる物にても、多くあれば見事なること。

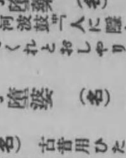
ごえん 小緣 (名) 小さきえんぶは。蜻蛉日記「小緣に腰り出でつつ」大原問答抄「小緣に立ち出で、遠見して居られし越に」

ごえん 〜故緣 (名) むかしの緣故。

ごえん 〜後宴 (名) 【1】大饗會の後、更に行ふ酒宴。源氏賢木「其の日は後宴の事ありて、まぎれくらし給ひつ」江次第廿「御遊を解き、元服後宴事」【2】神祭の型日、讃を解き、衆人會合して催す酒宴。

ごえんどう (名) 〔植〕天蓼の異名。

ごえんどう 胡荽 (名) 〔植〕繖形科、胡荽屬の一年生草本。莖の高さ一尺許り。葉は羽狀複葉、各小葉は楔形細裂す。葉柄は莖部鞘狀に分れて莖を抱く。莖・葉共に香氣あり。夏日、白色小花を開き、複繖花序に排列す。果實は圓形にして翅を有せず。歐洲地中海沿岸の原產にして、果實を香料とし、又、藥用に供す。



(ごえんどう)

ごえんぶ 〜呼應 (名) よぶこと。よびかはすこと。傳燈錄「俱呼俱應」

ごえんぞ 小御衣 (名) こおんぞ(小御衣)に同じ。宗五大草紙「殿ばらの御」公方樣御

衣所の御」

ごえんだいじゃん (名) 〔じゃんはじゃんけんの略〕石けんの一。五度と定めてなすもの。內三度以上勝ちたるを勝ちとす。

ごえんぞうり (名) 〔植〕金絲桃(ごえん)科、金絲桃屬の草本。莖の高さ五六寸乃至五許。葉は對生、長橢圓形、下面白色を帶び、透明の小點を密布す。葉先・葉脚漸く狹小す。夏季、黃色の花を開き、雄花序に排列す。我が國、各地の山地に自生す。

ごえんたたらこ 稻槎菜 (名) 〔植〕菊科、やぶたたらこ屬の一年生草本。莖は根生し、大小不整の羽狀缺刻を有し、質柔軟なり。莖は細く、高さ三四寸、疎らに分枝し、枝端各一箇づつの頭狀花序を著け、早春、黃色の花を開く。我が國各地の原野に自生す。ひめたたらこ。たたらこ。

ごえんゆり (名) 〔植〕百合科、百合屬の多年生草本。地下に鱗莖を有す。地上莖は高さ三四尺。葉は披針形、全緣、平行脈、葉脚に珠芽を生ぜず。夏日、莖頂に赤黃色にして暗色の小點を有し外反せる花二三箇を開く。我が國各地の山地に自生し、又、觀賞用として栽培せらる。鱗莖は食用に供す。

ごおひむし 子負蟲 (名) 〔動〕昆蟲中、朝鮮有吻類の一種。體は扁圓形にして、長さ八九分、暗褐色。雄は雌の前脚の腿部はさほど太からず。雄は雌の產みたる卵を背負ふを以て此の名あり。

ごおぼね 小大根 (名) 〔植〕だいこん(菜根)の異名。運歩色葉「小大根」

ごおもて 小面 (名) 能樂に用ふる女の面の一。熊野松風等に用ふ。

ごおよび 小指 (名) こゆび(小指)

に同じ。和名抄「手指。唐韻云、手指曰小指、第五指也」

ごおら (代) これら(是等)の訛り。

ごおらし 小蕨 (名) 曲彙の馬鹿の馬鹿。宮滅小兼狩官小(ごおら)し大蕨・小蕨・逆び・延足・地耳足・蕨滅しといふ曲を、乘り返し引き返し」

ごおろし 子墮 (名) 胎內の子を、期に先だちて、藥などを用ひておろすこと。墮胎。簗中抄「子おろしの藥れ」

ごおろしぐすり 子墮藥 (名) こおろしに用ふる藥。堀河波語「人に隱して、子おろし藥を買うてくれとおしゃりまして」

ごおろしばあ 子墮婆 (名) こおろしを救ふ產婆。

ごおん 〜音 (名) 字の音。宋史樂「郭茂詩古音辨一卷」

ごおん 〜五音 (名) ごいん(五音)に同じ。

ごおん 〜吳音 (名) 【1】支那にて、吳越地方に行はれし音。悉曇藏「來和之末、正法師來也元慶之初聽法師來中國此國法若音非呉音・漢音且如麻字・那字・尼字・雪字・慶士字・支字・迦字等類、吳似和音、漢如正史實「吳音不變」【2】我が國に極めて古く より行はれたる漢字音の一種。平・下・廻をヒャウ・ゲ・エとよむ如き是れなり。通常、古代の事物の名・官職名・律令格式・佛語などに之を用ふ。支那古代の南方音の傳はりしものといふ。つしまこゑ。朝野群載三「欽明天皇之代、佛法始渡、音土、此時爲有二、一是正音、以吳音傳之、因茲日域經論皆用此音、故謂之釣馬音」

ごおん 〜御恩 (名) 【1】おん(恩)の敬語。【2】ごおんち(御恩地)の略。東鏡「曾我兄弟聚河國八郎の大名になされし、その御恩を、王業小相、第五指也」

ごおんしょ 〜御恩所 (名) ごおんち(御恩地)に同じ。東鏡十月廿八日「久下權三郎、今宮領知」

ごおんぞ 小御衣 (名) 小き袿。即ち、小袖の裏(こ)の長きもの。貞觀儀式「ごおんぞに、大嘗祭の時、袴」運歩色葉「小御衣」

ごおんち 〜御恩地 (名) 恩賞により賜はりたる地。東鏡建暦三年「以御恩地、不可賣買之由」

ごか 〜古歌 (名) ふるき歌。古人の詠歌。「嘗生「我がせこが來べき宵なりささがにの、蜘蛛のふるまひかねてしるしもといふ古歌をつらねし」白居易詩「古歌雜曲君休聽」

ごか 〜胡歌 (名) 胡國の人の歌。半參詩「胡歌一曲斷人腸」

ごか 〜古家 (名) ふるき家。古屋。

ごか 〜故家 (名) きうか(舊家)に同じ。孟子「孟公綽「趙・魏老則可、不足以爲滕・薛之大夫」」家語「孔子「家語風俗篇、家貧者爲貴、家富者爲貴」」

ごか 〜估價 (名) 賣買の價額。ねだん。「物爲價者、准市估價」唐會要「估價宜

出巡し給ふ時、二人の幼き者どもを助けて給はらんと申しければ」

ごかしょ 〜御恩所 (名) ごおんち(御恩地)に同じ。東鏡十月廿八日「久下權三郎、今宮領知」

ごかのまつ 小御衣の松 (名) 小き袿。

ごかぶ 小株 (名) 〔植〕ごえふまつ(五葉松)の異名。宇津保祭使「草むらの花咲き、五えふの松はのどけき色をまし」

ごかぶ 〜五葉苺 (名) 〔植〕つた(蔦蘿)の異名。

ごかぶ 五葉松 (名) 〔植〕【1】松杉科、松屬の常綠高木。幹の高さ數丈、樹皮は粗糙なり。葉は針形、五箇づつ一所より叢生し、濃綠色にして內面白色を帶ぶ。花は單性、雌雄同株、雄花をなす。果實は球果なり。我が國、各地の山地に自生し、又、觀賞用として栽培す。材は器具用・建築用とす。いつつはのまつ。ごえふのまつ。五葉松。五葉松。五鬚。【2】てらせんまつ(海松)の異名。【3】ひめこまつの異名。

ごかくだる 越隔 (自動四) 越えて隔たる。萬「白雲のたなびく山を、岩根踏みた古要藤祭利(ごえ)なば」

ごかまつ 肥松 (名) 【1】脂(こえ)多き松の木。【2】幹枝の肥えたる松。風雅集「肥えたは肥松、痩せたは松松」

ごかゆく 越行 (自動四) 越えて行く。萬「白雪のふりしく山を越由可(ごえ)む、君をぞもとないきのをにもふ」

ごからか 肥 (形) 肥えふとりたるさまにいふ語。五代帝王物語「ごえらかにゆゆしき情の著座したれば、誰れにかと思ひて」

ごける 肥 (自動ナ) こゆ(肥)の口語。運歩色葉「肥ごえ」

ごける 越 (自動ナ) こゆ(越)の口語。運歩色葉「越ごえ・超ごえ・踰ごえ」

ごかわかる 越別 (他動四) 越えて其のものと分かる。後拾遺雜四「おのづから道ふ人あらば言つてよ、宇津の山べを越えわかるとも」

ごかん 〜跨下 (名) またぐらの下。史記「韓信「無死則我、不能死出我袴下」」

こ-か〔火客〕 (名)〔火客の字の宋音〕佛語。禪宗にて、爐の火を司る者。火伴(コハン)。百丈淸規三「火客」禪林象器箋職位「火客」

こ-か〔古柯〕 古加 (名)【植】古柯科、古柯屬の灌木。幹の高さ六尺餘り。葉は長橢圓形、全緣。花は小形、淡黃色にして單性、雌雄異株、初夏開く。南亞米利加洲ぺるの國の原產。葉を古柯葉と稱して藥用に供す。

こ-か〔鼓歌〕 鼓をうちて歌をうたふこと。莊子在宥「乃齋戒以言ㇾ之、跪坐以進ㇾ之、鼓歌以儛ㇾ之、吾若ㇾ是何哉」

こが (名) をけ(桶)又は、たる(樽)の異名。又、さかだる(酒樽)をいふ、上總・下總・武藏の方言。和訓栞 下學集下「樣ゴガ 桶也」

こ-が〔虎牙〕 (名) 一とらのきば。揚雄文(執金吾箴)「如ニ虎有ㇾ牙、如ニ鷹有ㇾ爪」 二武勇の士。東鑑一、治承四年九月九日「武衞興ニ虎牙跡、鎭ニ狼唳ニ給」 三このゑふ(近衞府)の稱。十訓下「源順が右親衞源將軍始談ニ論語ニとき、職列ニ虎牙ニ雖ㇾ拉ニ武勇於漢四七將ニ」

こ-が〔箇我〕 (名) 箇人としての自己。

こ-が〔古雅〕 古色を帶びて雅致あること。法書要錄「善ㇾ書中略幽深無ㇾ際、古雅有ㇾ餘」

ご-か〔後架〕 (名) 佛語。禪宗にて、大衆の洗面所の稱。百丈淸規六、日用規範「輕手揭ㇾ簾出ニ後架ニ中略輕手取ㇾ盆洗ㇾ面、湯不ㇾ宜ㇾ多」 禪林象器箋殿堂「後架」

ご-か〔午下〕 (名) ひるすぎ。

ご-か〔梧下〕 (名) 書簡文にて、宛名の傍に添へて敬意を表する語。机下。

ご-か〔五稼〕 (名) ごこく(五穀)に同じ。續紀十、天平二年二月丙寅「冀ニ五稼之有ㇾ饒」 左傳僖公三年「夏六月雨。杜注周六月、夏四月、於ㇾ播ニ種五稼ニ無ㇾ損」

ご-か〔五加〕 (名) 【植】うこぎ(五加)

こかあ (名、副) 鴉の鳴聲。大藏狂言柿山伏「あれは烏ぢや中略烏といふものは鳴くものぢやが中略なかずばなるまい。こかあ・こかあ・こかあ」 同花子「烏がこかあ・こかあと、夜があけた」

こ-かい〔巨海〕 (名) おほうみ。大海。きよかい。朗詠「雖ニ一念ニ兮必感應、喩ニ之巨海納ニ涓露ニ」 盛衰記十八、文覺淸水狀天神金「巨海に漂流すと云ふも、觀音を念ぜば波浪に沒する事なからん」

こ-かい〔湖海〕 (名) みづうみとうみ。又、みづうみ。盛衰記十二、大臣以下流罪「勢多の唐橋渡るほど、湖海遙かに顯はれて」

こ-かい〔孤介〕 直情にて、人に親しまぬこと。又、其の人。狷介。南史(異)「性孤介、未ニ嘗造請ニ」

こがい (副) 此のやう。かやう。伊勢國長島・出雲邊・播磨國などの方言。物類稱呼

ご-かい〔沙蠶〕 (名) 【動】蠕形動物、環蟲類の一種。體の長さ三寸許り、細長にして七十乃至百二十箇の環節より成り、色は淡紅又は帶黃紅色、環節每に、側面に上下の疣狀突起を生じ、これに剛毛を密生す。淡鹹水の混ずる海の泥中に埋もれて生活し、各地の海に產す。釣魚の際、餌となす。

ご-かい〔五戒〕 (名) 佛語。殺生・偸盜・邪婬・妄語・飮酒の五つの戒。源若紫下「御いただき、しるしばかりはさみて、五戒ばかり受けさせ奉り給ふ」 拾芥抄下本「五戒。一、不殺生、二、不偸、三、不婬逸、四、不妄語、五、不飮酒」 榮華疑「三歸・五戒を受くる人すら中略恆河沙眷屬ども讓るなり」

ご-かい〔誤解〕 意味を取りちがふること。解きちがへ。おもひちがへ。

ご-かいだう〔五街道〕 (名) 江戶時代江戶を中心としたる東海道・中山道・奥州街道・日光街道・甲州街道の五箇の街道の總稱。

こがい-のき (名) 【植】やぶにくけい(天竺桂)をいふ、長門國の方言。物類稱呼

こ-かいまき〔小搔卷〕 (名) 綿薄く、小形に仕立てたるかいまき。

ごかい-まつ〔五葢松〕 (名) 紋所の名。

こかいん (英 Cocaine) (名) 【化】古加葉(コカ)中にある、あるかろいど・にして、鹽酸との化合物、鹽酸こかいん・は局部麻醉劑として醫用に供す。烈しき毒物なり。

こ-かう〔湖港〕 (名) 港灣の一種。湖畔にあるもの。

こ-かう〔枯槁〕 かれはつること。痩せ衰ふること。元氣おとろふること。平家女護島二「憔悴枯槁のつくも髮」 莊子刻意「枯槁赴ㇾ淵者之所ㇾ好也」 戰國策秦「形容枯槁、面目黧黑」

こ-かう〔鼓行〕 古へ軍隊が、鼓を打ち鳴らして進行すること。史記項羽本紀「我引ㇾ兵、鼓行而西」

こ-がう〔呼號〕 呼びさけぶこと。漢書陳遵「晝夜呼號」

ご-かう〔五更〕 (名) 昔の寅の時刻。即ち、今の午前四時より六時までの稱。戊夜。盛衰記七、上臨寺先帝御「時打つ鼓の聲を聞けば、夜は未だ五更の初め也」 雪女五枚羽子板下「まだ夜も深き五更の一點、虎の御門に著きにけり」 陸游詩「賣困兒童起ニ五更ニ」

ご-かう〔五港〕 (名) 我が國維新當初、五箇所の開港場。即ち、橫濱・神戶・長崎・新潟・函館の總稱。

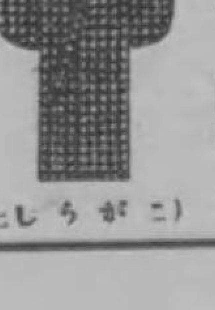
ご-かう〔五香〕 (名) 旃檀・雞舌・沈水香・丁子香・安息香の總稱。釋迦如來誕生會ニ「旃檀・雞舌・沈水香・丁子香・安息香五つの香り交はって中略今の世までも綠兒の五香の妙藥、是れ此の佛の方便力」

ご-かう〔御幸〕 中古以來、上皇・法皇・女院のいでましの稱。(主上のみゆきを行幸といふ對) 著聞三「後鳥羽院中略瀧口殿へ御幸なりて」

ごかう-ぐら〔御幸鞍〕 (名) かがみぐら(鏡鞍)に同じ。古今要覽稿 諸鞍日記「御幸鞍の事。移しの形にて、赤銅を外に打ちて掛けて、覆輪をかけたり」

こ-かうじ〔小柑子〕 (名) せうかうじ(小柑子)に同じ。みかん(柑)をいふなるべし。勢語臆斷 三代實錄四十九、仁和二年正月廿九日「太宰府例、貢ニ小柑子ニ」 勢語「其の上にはしりかかる水は、小柑子・栗の大きさにて、こぼれ落つ」

こ-がうし〔小格子〕 (名) 一小き格子。二辨慶縞の小なるもの。(大格子の對) 庭訓往來七月「小隔子織物」 三東京の吉原遊廓にて、最も格の低き女郎屋。(大まがきなどの對)



(こがうし)

こ-がうし〔紅格子〕 (名) ねりぬきの一種。くれなゐの地にからしを織りたるもの。高貴の女房の著用。貞丈雜記 御成次第古實「こがうしは、御女房衆にも御中﨟衆はめされず候」

ごかうしよ-はじめ〔御講書始〕 (名) 每年一月七日、主上御學問所に出御ありて、侍講の進講を聞こし召さるる儀式。

ごかう-ずゐ〔五香水〕 (名) 佛語。灌佛會に、釋迦の像に灌ぐ五香の水。後世は甘茶を代用す。

こ-かうぢやう〔小考定〕 (名) 古へ八月十二日、即ち定考(カウヂヤウ)の翌日、大辨已下の人、東廳に著きて行ふ儀にて、史生・官掌・使部の類に對する定考。西宮記八「小考定事中略考選所史、率ニ考選史生二人ニ自ニ南廊ニ趨進」 年中行事祕抄八月「明日小考定事 辨一人行ㇾ之、用ニ近江國早米ニ 雜ニ炊料ニ」 名目抄「小考定コカウヂヤウ是れは逆にあらず」

ごかう-はじめ〔御幸始〕 (名) 御讓位の後初めて他所へ臨御し、又、新年に法皇又は皇太后宮に朝覲し給ふ御幸。故實拾要三「三日御幸始。是仙洞禁中へ御幸始也。但日限不定。又、親王の御方へ御使始也」

ごかう-はじめ〔御行始〕 (名) 將軍が就職の初め、又は歲首に、他所へ出行すること。東鑑十一、治承四年十二月廿日「今日御行始之儀、入ニ御藤九郎盛長甘繩之家ニ」

こか-えふ〔古柯葉〕 (英 Coca) (名) 古柯の葉。乾してこかいん製造の原料とす。

ごかえふ-わうれん〔五加葉黃蓮〕 (名) 【植】毛茛科、黃蓮(ワウレン)屬の多年生草本。莖は地中を匍匐す。葉は掌狀複葉、五小葉より成り、各小葉は楔形、銳齒牙を有し、往往三淺裂することあり。花莖は葉間より抽出し、高さ二三寸、四月頃、白色五瓣の花を開き、形やや梅花に似たり。我が國、各地の山地に自生す。根莖を藥用に供す。ばいくわわうれん。ぜにわうれん。

こ-がき〔小垣〕 (名) 小き垣根。ささやかなる垣根。

こ-がき〔小書〕 (名) 一細かく分けて書くこと。又、そのもの。二かへのかた(替形)に同じ。

こ-がき〔小餓鬼〕 (名) 小供を罵りて呼ぶ語。

こ-がき〔小牡蠣〕 (名) 【動】いそがき(磯牡蠣)の異名。

こ-かきつばた〔紫石蒲〕 (名) 【植】鳶尾(イチハツ)科、鳶尾屬の多年生草本。地下に根莖を有し、之より葉を生ず。葉は劍狀線形、尺許に達す。花莖は葉間より抽出し、春季、紫色にして花蓋筒の細長なる花を開く。我が國、各地の庭園に栽培せられ、觀賞用に供せらる。たれゆゑぐさ。

こ-がきで〔小書出〕 (名) げしよ(下書)をいふ。殊に、受領を任ずる時の下書。受領下書。蜷晃翼抄「小書出(コガキデ)。小書出と謂ふは、任ニ受領ニとする時に、先取ニ大間禮紙ニ天、寄物に任て書ニ受領闕國ニて、次書ニ入任人ニ之後、寫ニ付大間ニ也。或ひは小書出を受領の土代と謂ふ。又は受領下書とも謂ふ也」

こがき-もの〔小書物〕 (名) 小書(コガキ)三の附きたる能樂。

こ-かく〔小角〕 (名) 一角(カク)の折敷を三寸四方にしたるもの。五寸四方なるを中角、八寸四方なるを大角といふ。貞丈雜記 二昔、芝居茶屋にて、錢百十六文をいふ隱語。洒落話

こ-かく〔顧客〕 (名) 得意の客。おきやく。とくい。

こ-かく〔孤客〕 (名) 獨りにて旅にある人。謝幼度詩「孤客傷ニ逝湍ニ徒旅苦ニ奔峭ニ」

こ-かく〔古格〕 (名) 古くよりの格式。古來のかた。

こ-かく〔狐貉〕 (名) きつねとむじなと。又、其のかはごろも。論語子罕「衣ニ敝縕袍ニ與ニ衣ニ狐貉ニ者立而不ㇾ恥者、其由也」

こ-かく〔胡角〕 (名) 支那にて胡國の人の吹き鳴らすといふ角。朗詠「胡角一聲霜後夢、漢宮萬里月前腸」 晉書樂志「胡角者本以應ニ胡笳之聲ニ」

こがく〔玉蝴蝶〕 (名) 【植】虎耳草(ユキノシタ)科、八仙花(アヂサヰ)屬の落葉灌木。幹の高さ五六尺乃至一丈。葉は對生、長卵形、細鋸齒を有し、銳尖頭、葉柄を具ふ。初夏、帶紫色の萼を有する花を開き、聚繖花序に排列す。我が國、各地の山地に自生す。

こ-がく〔古學〕 (名) 一古代の事を研究する學問。古文の學。後漢書鄭玄「古學大興」 二儒家にて、宋儒の義理の學に對して、漢唐の註疏を主とする學。三吾が國の古典を研究する學。

こ-がく〔古樂〕 (名) 古代の音樂。禮記樂記「敢問、古樂之如ㇾ彼何也、新樂之如ㇾ此何也」 同「吾端冕而聽ニ古樂ニ則唯恐ㇾ臥」

こ-がく〔鼓樂〕 鼓をうち樂を奏すること。孟子梁惠王下「今王鼓ニ樂於此ニ」

ご-かく〔碁客〕 (名) 圍碁をなす人。碁うち。

ご-かく〔語格〕 (名) 言葉遣の法則。語法。

ご-かく〔五角〕 (名) ごかくけい(五角形)の略。

ご-かく〔牛角〕 互角 〔牛の角の、左右互ひに長短・大小なき義〕 雙方優劣なきこと。互ひに負けず劣らずなること。平家三「佛法王法牛角也」 太平記十七、京都「牛角の戰ひに成りにけり」 法華經科註「依ニ我見ニ而邊見、如ニ牛頭兩角ニ耳」

ご-がく〔五樂〕 (名) 漢土にて五種の音樂。下文を見よ。漢書郊祀志「五樂謂春則琴瑟、夏則笙竽、季夏則鼓、秋則鐘、冬則磬」

ご-がく〔吳樂〕 (名) くれがく(吳樂)に同じ。

ご-がく〔語學〕 (名) 一言語の發達・變遷等を研究する學問。二文字・言語・文章等の性質・用法等を研究する學問。文法學。三ぐわいこくご(外國語)の俗稱。

ごかく-いなづま〔五角稻妻〕 (名) 紋所の名。

ごかく-けい〔五角形〕 (名) 【數】五つの有限直線によりて圍まれたる平面圖形。其の有限直線の相等しきものを正五角形と云ふ。五邊形。

ご-かくご〔御恪勤〕 (名) 武家の職名。將軍へ御膳を參らする時、御末衆より進達する膳部を受け取りて、御供衆へ渡すもの。同朋以上たり。貞丈雜記

こがく-さう〔常山〕 (名) 【植】あまちやのき(土常山)の異名。

ごがく-しや〔語學者〕 (名) 語學を專門とする學者。語學に長じたる學者。

こがく-は〔古學派〕 (名) 本邦の儒學の一派。程朱・陸王等の學は孔孟の眞意を傳へたるものならずとなし、往古に遡りて儒敎の眞相を發揮せんとするもの。伊藤仁齋・物徂徠・山鹿素行等、其の代表者たり。

こ-がくる〔木隱〕 (自動四) 木の蔭にかくる。物にかくる。古今離別「君が代にあふさか山の岩しみづ、こがくれたりと思ひけるかな」 同短歌「山下水のこがくれて、たぎつ心を誰れにかもあひ語らはん」 後撰夏「木がくれてさつき待つともほととぎす、はねならはしに枝うつりせよ」

こがくれ-はつ〔木隱果〕 全くこがくる。新後撰雜上「思ふこととむなしきからに、うつせみのこがくれはつる身こそつらけれ」 新六帖六「あし引の山橘のなぞもかく、こがくれはつる身とはなりけん」

こがくれ-わたる〔木隱渡〕 そこここに木がくる。榮華鳥邊野「わざとならねど木がくれわたる鹿の聲など、物心ぼそう聞こゆ」

こがくれ-ゐる〔木隱居〕 木隱れてゐる。大和物語三「歎きのみしげきみ山の子規、こがくれゐてもねをのみぞ鳴く」

こがく-るゐ〔固顎類〕 (名) 【動】魚類中、硬骨類の一亞目。海に產し、概ね甲

鱗・棘鱗等を被り、上顎骨は前顎骨と共に頭骨に固著し、背鰭は柔軟にて、臀鰭に相對し、往往、腹鰭を缺き、鰾は食道に通ぜず。はぎ・河豚(フグ)・鰒車魚(マンボウ)・針千本(ハリセンボン)・虎河豚(トラフグ)等の類。悉く海に產す。
こ-がくれ　木隱　(名)　こがくること。木の陰に隱るること。又、そのところ。萬十「春されば木隱(コガクレ)多き夕づく夜、おぼつかなしも、山かげにして」宇津保藤原「秋の色も露をも今や女郎花、木がくれにのみおくとごそ見れ」
ご-かくわ　五加科　(名)　【植】うこぎくわ(五加科)の異名。
こ-かげ　木陰　(名)　木の陰。樹陰。宇津保吹上上「木がらしの風も吹きつと松蟲や、しげき木かげと人に見ゆらん」蜻蛉日記中「みな月のこかげにわぶるうつ蟬の」
(諺)木陰に臥す者は枝を手折らず　恩を受けたるものに仇をなさぬに譬ふ。韓詩外傳三「食其食者不毀其器、蔭其樹者不折其枝」
こ-かげ　小陰　(名)　いささかなる物かげ。ちよっとしたる物かげ。狂言淨瑠璃平六「風呂のこかげに入りにけり」天網島上「格子の小陰に肩身をすぼめ、隱れて聞くとも、內には知らず」
ごかご　(名)　【植】しらくちづる(獼猴桃)の異名。
こかご-あゆ　子籠鮎　(名)　產卵期に近き雌の鮎を鹽漬にして乾し、藁にて卷きたるもの。
こが-こが　(副)　こげこげ(焦焦)に同じ。日蓮書七「母の身のこがこがと燒け候ひし」
こ-がさ　小瘡　(名)　あせも。字鏡集「痱ガサ」拾玉二「小瘡の所勞ありと聞きて、とぶらひたりし返事に」

こ-かさがけ　小笠懸　(名)　笠懸の一種。方四寸の板を串に挾みて的とし、的間(アヒ)は遠笠懸より近く、矢は三四寸許りの小蟇目を用ふるもの。四季草「古くは笠を的となしたるよりいふ。」東鑑三、壽永三年五月十九日「於杜戶松樹下、有小笠懸、是土風也」同十三、建久四年三月一日「若公萬壽、於由比浦、射小笠懸給」
こ-がさじるし　小笠標　(名)　おほがさじるし(大笠標)を見よ。
こかし　(名)　おためごかしに同じ。元祿時代の語。一代女「如何なる粋も、いやとは云はぬこかしなり」
こがし　焦　(名)　一こがすこと。こがしたること。二穀類を炒り焦がし、碾(ヒ)きて細末にしたる粉。「むぎこがし」「米のこがし」みづのこ畿國はったい畿內・西國こぐわし上野・越前むぎいりこ加賀いりこ近江からうせん奥州・上總・下總・肥州(物類稱呼)　三からうせん(香煎)の異名。
ごかし　(接尾)　其れを辭柄として、自己の利益を圖るにいふ語。「おためごかし」「親切ごかし」壽門松中「賢女賢女と、賢女ごかしの拜み倒しに逢うて」浦島年代記上「勅諚ごかしに、非道を働くえせ者奴等」津國女夫池二「うぬはよう、上意ごかしに打ったな」
こがし-の　焦箆　(名)　矢柄の名。節の所を少し焦がして色づけたるもの。高忠聞書「犬射からをこがし箆にすること、くるしからず」
ごかしはらゐん-りう　後柏原院流　(名)　勅筆流の一派。後柏原院より始まりたるもの。
こか-しゅ　古柯酒　(名)　こか葉を赤葡萄酒に浴浸して製するもの。興奮・鎭痛劑とす。
こ-がしら　小頭　(名)　大頭の下に屬する一部の長。「人足のこがしら」武家名目抄甲陽軍鑑末書「五十騎の備へは二十五騎宛二つに分けて、右を先きとして、小頭に下知をなさせ」

こかす　(他動四)　一物の位置を轉ず。動かす。押し遣る。名義抄「搣コカス、オゴク、ウゴク」二こけしむ。打ち倒す。投げうつ。おしつく。名義抄「擲コカス、ウツ」狂言六人僧「あの人は寢ごいほどに、こかいても知れまい」三ひそかに盜みとる。くすねる。心中萬年草中「二十八貫目拾らた、惠美須・大黑が乘り移った作右衞門をこかさうや、おいてくれ」
こがす　焦　(他動四)　一火にて一部分を燒きくろむ。こげしむ。薰集類抄「こがさぬものから、よくこがね色にあぶれ」二薰物(タキモノ)の烟にて燻(フス)ぶ。源夕顏「白き扇のいたうこがしたるを」三心を惱まし苦しむ。苦悶せしむ。焦慮す。後撰戀二「淚にも思ひの消ゆるものならば、いとかく胸はこがさざらまし」
こ-かぜ　小風　(名)　わづかなる風。そよ吹く風。微風。和名二「微風、此間云古乃加世」赤染衞門集「笛の音に神の心やたよるらん、森のこかぜも吹きまさるなり」
こか-せんさく　古歌穿鑿　(名)　古歌に就きて穿鑿だてをなすこと。狂言大藏流「太郞冠者と、いらざる古歌穿鑿を致いて、ふねと申す古歌にほらと詰まった」
こ-かた　子方　(名)　一こぶん(子分)に同じ。浮世床中「子分・子方を、兩方から引き連れて」二能樂・演劇等にて、子供のなす役。又、それをなす人。
こ-がた　小形　(名)　形の小きこと。又、其の物。(大形の對)
こ-がた　來難　(句)　來難きこと。萬十「足がりのあきなの山に、ひこ舟の、しりひかしもよ、ここは故賀多(コガタ)に」
ご-かたき　碁敵　(名)　碁の相手。聞碁の敵手。浮世風呂上「所謂碁敵なる者であらうて」
こがた-げんごらう　小形龍蝨　(名)　【動】昆蟲類中、鞘翅類の一種。龍蝨(ゲンゴラウムシ)の一種。體の長さ一寸、黑褐色にやや青みを交じふ。翅鞘に二條の縱點線あり。觸角・鬚鬚及び脚は黃色なり。
こか-だて　古歌立　(名)　必要もなきに、古歌穿鑿をなすこと。古歌のいひたて。狂言鈍太郞「いらぬおのれが古歌だてではあるまいか」
こ-がたな　小刀　(名)　一小さき刀。著聞廿「硯に小刀のありけるを、取りてもたりけるほどに」新六帖五「かちときのまだはもあはぬこがたなの、世にたたでこそ思ひわびしか」東鑑十、建久元年十月十三日「相副小刀於鮭楚割」夫木卅「今は我れまろばにとげるこがたなの、世につかはれぬ身とぞなりにし」二腰刀にさし副へたる小き刀。そへこ(副子)。うらざし(裏差)。こづか(小柄)。平治頼朝遠流「刀を免し給はねば中略小刀並びに木の切れを乞ひ給へば」太平記廿九、將軍兵庫入道「如編木子(ササラ)叩きなしたる太刀の齒本を、小刀にて削り直し」
(諺)小刀に金鑼を打ったやう　物事の不釣合なること。
(諺)小刀に鍔　前條に同じ。
こがたな-ざいく　小刀細工　(名)　一小刀にて、彫物など、細かなる細工をなすこと。又、其の細工したるもの。日本永代藏五「小刀細工利きければ、卯木の耳搔、鼠の作り物仕出して」二大局に著目せず、徒らに小策を弄すること。
こがたな-びつ　小刀櫃　(名)　刀の鞘の差表(サシオモテ)の名所。小柄の刀を插し入るる穴。甲陽軍鑑廿「小刀櫃の通りに磨くは

中」
こ-かたびら　小帷　(名)　一小形のかたびら。狂言法師物狂「織りたる布は何何。素襖・袴・十德・布子のおもて、こかたびら」二鎧の下に著る單衣。半袖にして、長(タケ)は膝に至る。ぐそくかたびら。岡本記「具足かたびらといふ事なし、こかたびらとこれをいふ」
ごか-ちゃ　五加茶　(名)　五加(ウコギ)の嫩葉を乾して茶に代用するもの。
こ-かつ　枯渴　(名)　一水分のなくなること。かわきかるること。元稹詩「登高意枯渴、顧見深泉冷」二缺乏すること。つきて無くなること。
こ-かっしき　小喝食　(名)　能樂用の假面の一。喝食の若きもの。
ごかって-かた　御勝手方　(名)　ごかんぢやうぶぎやう(御勘定奉行)を見よ。
こ-がつを　小鰹　(名)　【動】うづわがつを(渦輪鰹)の異名。
こ-かど　小門　(名)　門內に更に設けたる小き入口。字鏡集「闗コカド。」
こが-なし　(名)　「肥前國高來郡空閑(コガ)の產なるより名づくといふ。又、肥後國八代郡古閑橋村の產なるよりとも、熊澤了介が下總國古河に初めて植ゑしよりともいふ」【植】薔薇科、梨屬の落葉喬木。梨の一種。實の形圓くして、皮の色赤味を帶ぶるもの。乳梨。
こが-にし　(名)　【動】いはにし(岩螺)の異名。
こ-がね　黃金　金　(名)　「きがねの轉」一きん(金)に同じ。わうごん。神代紀上「韓鄉之島、是有金銀」和名十「金 説文云、鉄五色金之最有光澤也」名義抄「金コガネ」二金の貨幣。金貨。竹取「今こがね五十兩賜はるべし」宇津保初秋「六人のこくもは、千兩のこがねを送る」三こがねいろ(黃金色)の略。宇津保藏開下「こがねづくりの車いろいろに調じて中略こがねのあめ牛かけて」同藏開中「火桶中略內にはこがねの塗りものをしたり」
こがね の あめ を ふらす　降黃金雨　旱魃の時に、膏雨をふらすにいふ。
こがね の いけ　黃金池　極樂にありて、底に金沙を敷けりといふ池。赤染衞門集「大井川白く照らせる月を見て、こがねの池を思ひこそやれ」
こがね の いさご　黃金砂　金の砂。砂金又は金色の砂。宇津保吹上下「ませ中略こがねのいさご敷きて、黑方をつちにしたり」謠盛久「眞珠のいさご、瑠璃のいさご、こがねのいさごを地には敷き」松風村雨東帶鑑「麗水滋滋として、黃金のいさご鮮かなり」
こがね の いろ　黃金色　こがねいろ(黃金色)に同じ。夫木六「もろこしの人に見せばや、やきがねのこがねの色に咲ける山吹」大貳集「ありがたき身のほど人に見せんとや、黃金の色の石に成りけん」
こがね の うてな　黃金臺　黃金を鏤めたるうてな。いと美しきうてな。津國女夫池三「黃金の臺、玉の床、錦の褥に夜もすがら」
こがね の かたな　黃金刀　こがねづくりのかたな(黃金作刀)に同じ。こがねづくり(黃金作)を見よ。普廣院殿御元服記「義雅著淺黃絲鎧、帶金刀金太刀」
こがね の きぎす　黃金雉子　鷹飼の語。春の雉子の雌鳥の稱。夫木五「つれもなき人の心をとり柴に、こがねのきぎすつけ得てしがな」
こがね の きし　黃金岸　佛語。極樂淨土にありといふ七寶の池の岸。涅槃の境界に近づくをいふ。夫木廿「すみまさる池の心にあらはれて、こがねの岸に浪ぞよせくる」謠柏崎「岸を力の助舟、こがねの岸に至るべし」
こがね の くるま　黃金車　一金色の車。又、金作りの車。きんしや。宇津保藏開「こがねのくるまにこがねのあめ牛かけて乘せたる人、つけたる人」二靈柩を載せたる車をたたへたる語。榮華嶺月「こがねの車ながらよせて、玉のとぼそとぢてよりこのかた」
こがね の ことば　黃金言　きんげん(金言)に同じ。謠實盛「法の敎へは朽ちもせぬ金の言葉多くせば、などかは至らざるべき」
こがね の すず　黃金鈴　黃金製の鈴。又、黃熟したる橘の實の形容にいふ語。朗詠「枝繫金鈴春雨後」堀河百首眞我「が園の花橘の色見れば、こがねのすずをならすなりけり」謠丹人「をがたまの木に、こがねの鈴を結びつけて」
こがね の ぜに　黃金錢　金の貨幣。宇津保藏開上「こがねのぜに一包み包み、白きしきしに、白がねのぜに一包み包み」
こがね の だう　黃金堂　こんだう(金堂)に同じ。宇津保藏開「思ふ事なし給へらば、こがねのだう建てん、金色の御かたあらはし奉らん」
こがね の たち　黃金太刀　こがねのかたな(金刀)に同じ。
こがね の たちばな　黃金橘　黃熟したる橘の實。宇津保藏開上「よきほどなるしろがね・こがねのたちばな、一ゑぶくろ」著聞卅「銀の皿に金の橘一ふさ盛られたるを」
こがね の たま　黃金玉　黃金の如くうつくしき玉。相模集「露を重みいかばかりかはかかるらん、こがねのたまと見ゆる菊かな」
こがね の たま の こゑ　黃金玉聲　うつくしき聲。金玉の音。大貳集「卷きこめし黃金の玉のこゑなれや、とまれる跡もみにぞしみける」
こがね の つる　黃金蔓　かねのつる(金蔓)に同じ。かね(金)の條を見よ。國姓爺後日合戰相生宮「世世に絕えせぬ黃金の蔓」
こがね の でい　黃金泥　こんでい(金泥)に同じ。宇津保國讓上「書き附けたる歌は、こがねのでいして草手あり」榮華本雫「紺じやうを地にして、こがねのでいして書きたれば、金泥の經なり」
こがね の との　黃金殿　うつくしき宮殿。きんでん。新葉集序「玉の臺・金の殿より、瓦の窻・繩の戶ぼその內に至るまで」
こがね の なみ　黃金波　「金波の字の直譯」こがねいろの波。赤染衞門集「おきて見る菊のまがきの露の上に、こがねの波の影ぞうつれる」
こがね の はな　黃金花　黃金の美しきを花に譬へていふ語。夫木卅「咲きそめしこがねの花は、すべらぎの光をひらく初めなりけり」同卅「見るたびにめづらしきかな、極樂のこがねの花の散らぬ木ずゑは」傾城島原蛙合戰三「御褒美と、十兩包ぐわらりぐわらりと投げだせば中略木綿褔袢の懷に、今日ぞ始めて陸奧の黃金の花ぞ咲きにける」
こがね の ひかり　黃金光　一こがねいろの光。金光(キンクワウ)。竹取「かはころも中略毛の末には、こがねの光かがやきたり」二金銀の威光。かねのひかり。
こがね の みて　黃金御手　神佛などの手を敬みていふ語。狂言笠下「忝くも如來のこがねの御手をさしあげ」

こがねのもじ 黄金文字 金泥にて書きたる文字。栄華物語「こがねの文字は、上茅渟の谷の林よりも黄なり」 今鏡「こがねの文字の御經、みかど御みづからの書かせ給ひて」

こがねのやま 黄金山 ■黄金の山。又、金色の山。宇津保物語「こがねの山・いきものなどありて」 ■黄金にて造りたる山。又、黄金を高く積みて山の如くしたること。謡曲「こがねの山を築せては、白がねの月輪を出だされたれ」

こがねのようひ 黄金鎧 こがねづくりの鎧。東鑑十四「中略「被奉金鎧於神宮」

こがねはなさく 黄金花咲 黄金の出づるをいふ。高野すめろぎの御代祭えむとて、あづまなるみちのく山に金花咲佐久(さかえ)」 今昔「佐渡の國にこそ、金の花咲くる所は有りしか」 栄花「酒呑童子「ひらぎの長が歳作り、風にも散らず日に枯れぬ、黄金花咲く松と梅」

こがねをけす 消黄金 柴口金を鎔すに同じ。しゆうから(柴口)の條を見よ。夫木「心せよいつはり人の言の葉は、こがねをけすと聞くもおそろしし」

こがねもけつ 消黄金 前條に同じ。夫木「こがねをもいひけつ口の、たまみがく月をばえこそ濁らざりけれ」

(謡)黄金、泥に擲ず 泥中の金に同じ。「ていちゆう(泥中)の條を見よ。砂石集「俗形にして本性を動ぜず、金の泥にくろまず、蓮の水にそまぬ如くなり」

(謡)黄金と岱は朽ちても朽ちぬ 黄金と武士との精華は永久に朽ちず。略縁起出家形気「此の一卷は大吉由良之助の侍系図、朽ちても侍へたる詞の時分の黄金と朽ちぬしるしの五倫」

(謡)黄金の麦を踏り出したやう 饒俸を得たる喜びにいふ。

(謡)黄金は命を延ぶ 金鍍は蓬命の薬なり。宇津保物語「こがねの粕にこがね千枚を入れて中略やり給ふ。死ぬる身を惜しみかねてや君にやる、ちりのこがねは命のぶとか」

(謡)黄金を炊き、玉を食ふ 奢侈なるさま、又、物價の高きにいふ。

(謡)黄金を鑄め、玉を磨く 華美を極くす。

こがねー小金 (名) 僅かばかりの金錢。多からぬ財。(おほがねの對)「小金が酒まるる」「小金を賃す」

こがねー小鐵 (名) 銀ひ金にて裏りたる鎧の小札(こざね)。割小札の鎧にて、革の小札と一枚まぜに銅じ。之を一枚まぜの鎧といふ。東家記「革縅の大荒目に、こがねまぜたるを草摺長に著なし」

こがねーいろ 黄金色 (名) こがねの如く黄色に光る色。山吹色。神武紀「金色(こがねいろ)靈鶏」 源河百首「黄金いろにやへ咲く菊は昔より、老いせぬ秋のかざしなり咲くけり」

こがねーかし 小金賃 (名) 小金を賃す。

こがねーがたな 黄金刀 (名) こがねづくりのかたな(黄金作刀)に同じ。こがねづくり(黄金作)の條を見よ。相國寺供養記「金刀」

(謡)黄金刀もとうて見よ 何事も貴際あたつて見るべし。

(謡)黄金刀もさいて見よ 何事も一度は無疎すべし。

こがねーかん 黄金菱 (名) 羊羹の一種。黄金粉(こがね)をまぜて黄色にしたるもの。

こがねーぐさ (名) 【植】■かたばみ(酸漿草)の異名。■きく(菊)の異名。「菊の異名。金平記「にしたみなる輝の色のごとにこがねぐさ」 ■草の名。

こがねーづくり 黄金作 (名) 黄金にて裝飾すること。又、其の物。宇津保物語「御弓、絲毛六つに、こがねづくり十に、源氏「一腰の黄金作り」 ■山鉾

こがねづくりのかたな 黄金作刀 刺鞘等の金具を黄金にて飾りたる刀。欽明紀「金防刀(こがねづくりのつるぎ)」 二口、大内問答「金作の刀は御鞘御刺にて候」

こがねづくりのくるま 黄金作車 車に金の一種。刺、詳かならず。櫛代車なと平安朝頃金具を附けたるものなるべし。貴族人の乗用。宇津保物語「こがねづくりのくるま一、びらびらげの車二」

こがねづくりのたち 黄金作太刀 刀の金具をこがねづくりにしたるもの。名目抄「金作太刀、大臣已上著之」 東鑑「文治元年八月廿日「帯金作大刀」 盛衰記「金作太刀の太刀を帯び」

こがねどび 黄金鴉 (名) きんし(金翅鳥)に同じ。源氏物語「こがねとび」

こがねーのーぜに 黄金錢 (名) 【植】■ふしのぜにの花はやつれず」 ■ウリ(交趾)の異名。

こがねーのーは (名) 【植】■ふしのぜにの花は秋の下にかくせども、こがねんくわ(金蓮草)の異名。■すみれ(菫)の異名。

こがねーぞね 黄金札 (名) 鎧の札の一種。黄金色にせるもの。宇津保物語「こがねざねの腹巻もいて、せけり」 用明天皇職人鑑「家に雛く鎧井に居らぬ黄金ざね、名を卯の花縅にふしなはあ」

こがねーしだ (名) 【植】■かたひば(筑州柏)の異名。■こがねわらびの異名。

こがねーづくり 黄金作 (名) 黄金にて裝飾すること。又、其の物。宇津保物語「御弓、絲毛六つに、こがねづくり十に」 源氏「一腰の黄金作り」 ■山鉾

こがねづくりのかたな 黄金作刀 刺鞘等の金具を黄金にて飾りたる刀。欽明紀「金防刀(こがねづくりのつるぎ)」 二口、大内問答「金作の刀は御鞘御刺にて候」

こがねづくりのくるま 黄金作車 車に金の一種。刺、詳かならず。櫛代車なと平安朝頃金具を附けたるものなるべし。貴族人の乗用。宇津保物語「こがねづくりのくるま一、びらびらげの車二」

こがねづくりのたち 黄金作太刀 刀の金具をこがねづくりにしたるもの。名目抄「金作太刀、大臣已上著之」 東鑑「文治元年八月廿日「帯金作大刀」 盛衰記「金作太刀の太刀を帯び」

こがねどび 黄金鴉 (名) きんし(金翅鳥)に同じ。源氏物語「こがねとび」

こがねーのーぜに 黄金錢 (名) 【植】■ふしのぜにの花はやつれず」 ■ウリ(交趾)の異名。

こがねーのーは (名) 【植】■ふしのぜにの花は秋の下にかくせども、こがねんくわ(金蓮草)の異名。■すみれ(菫)の異名。

こがねーばな 黄金花 (名) 【植】唇形科、二尺許り。葉は對生、披針形、葉柄を有せず。夏秋、紫色又は白色の小唇形花を葉の上部の葉腋に開く。我が國各地に産、路傍に生ずる。肥大なる根を藥用に供す。こがねやなぎ。わらごん。

こがねーばな (名) 【植】■うまのあしがた(毛茛)の異名。■かたばみ(酸漿草)をいふ。筑紫の方言。■みやこぐさの異名。

こがねーまぜ 黄金交 (名) 鎧の札の一種。いちまいまぜ(一枚交)に同じ。刀の鎧。

こがねーむし 金龜子 金龜蟲 金龜牛兒 (名) 【動】昆蟲類中、鞘翅類の一種。體はやや卵圓形、鞘翅綠色にて金光を帯す。幼蟲をちむしと云ひ、農作物の根を喰ふ。これに似たるまめこがねむし・ひめこがねむし等の類多し。當流小栗判官書「やんま・とんぼう・こがねむし」

こがねーめとり 黄金雌鳥 (名) 雀の雌子の雌鳥。雌貝

こがねーめなご (名) 【植】■きく(菊)の異名。■みやこぐさの異名。■りうなら

こがねーやなぎ (名) 【植】こがねばな(黄芩)の異名。

こがねーやま 黄金山 (名) 金の產出する山。きんざん。

こがねーわらび (名) 【植】木龍骨(ゆしだ)科、根茎を有す。葉は二尺許り、三回羽狀複葉、葉柄を有し、葉柄は平滑なり。子囊は葉の裏に著生し、小きく同形にして本種色なり。食ふに堪へず、各地の山地に自生す。こがねしだ。

こがねーわらび (名) 【植】木龍骨(ゆしだ)科、根茎を有す。葉は二尺許り、三回羽狀複葉、各小葉は楔形、斜方形、不整の鋸牙狀を呈す。子囊は葉の裏に著生し、小きく同形にして本種色なり。食ふに堪へず、各地の山地に自生す。こがねしだ。

こがねのもじ 黄金文字 金泥にて書きたる文字。栄華物語「こがねの文字は、上茅渟の谷の林よりも黄なり」 今鏡「こがねの文字の御經、みかど御みづからの書かせ給ひて」

こがねのやま 黄金山 ■黄金の山。又、金色の山。宇津保物語「こがねの山・いきものなどありて」 ■黄金にて造りたる山。又、黄金を高く積みて山の如くしたること。謡曲「こがねの山を築せては、白がねの月輪を出だされたれ」

こがねのようひ 黄金鎧 こがねづくりの鎧。東鑑十四「中略「被奉金鎧於神宮」

こがねはなさく 黄金花咲 黄金の出づるをいふ。高野すめろぎの御代祭えむとて、あづまなるみちのく山に金花咲佐久(さかえ)」 今昔「佐渡の國にこそ、金の花咲くる所は有りしか」 栄花「酒呑童子「ひらぎの長が歳作り、風にも散らず日に枯れぬ、黄金花咲く松と梅」

こがねをけす 消黄金 柴口金を鎔すに同じ。しゆうから(柴口)の條を見よ。夫木「心せよいつはり人の言の葉は、こがねをけすと聞くもおそろしし」

こがねもけつ 消黄金 前條に同じ。夫木「こがねをもいひけつ口の、たまみがく月をばえこそ濁らざりけれ」

(謡)黄金、泥に擲ず 泥中の金に同じ。「ていちゆう(泥中)の條を見よ。砂石集「俗形にして本性を動ぜず、金の泥にくろまず、蓮の水にそまぬ如くなり」

(謡)黄金と岱は朽ちても朽ちぬ 黄金と武士との精華は永久に朽ちず。略縁起出家形気「此の一卷は大吉由良之助の侍系図、朽ちても侍へたる詞の時分の黄金と朽ちぬしるしの五倫」

(謡)黄金の麦を踏り出したやう 饒俸を得たる喜びにいふ。

(謡)黄金は命を延ぶ 金鍍は蓬命の薬なり。宇津保物語「こがねの粕にこがね千枚を入れて中略やり給ふ。死ぬる身を惜しみかねてや君にやる、ちりのこがねは命のぶとか」

(謡)黄金を炊き、玉を食ふ 奢侈なるさま、又、物價の高きにいふ。

(謡)黄金を鑄め、玉を磨く 華美を極くす。

こがねー小金 (名) 僅かばかりの金錢。多からぬ財。(おほがねの對)「小金が酒まるる」「小金を賃す」

こがねー小鐵 (名) 銀ひ金にて裏りたる鎧の小札(こざね)。割小札の鎧にて、革の小札と一枚まぜに銅じ。之を一枚まぜの鎧といふ。東家記「革縅の大荒目に、こがねまぜたるを草摺長に著なし」

こがねーいろ 黄金色 (名) こがねの如く黄色に光る色。山吹色。神武紀「金色(こがねいろ)靈鶏」 源河百首「黄金いろにやへ咲く菊は昔より、老いせぬ秋のかざしなり咲くけり」

こがねーかし 小金賃 (名) 小金を賃す。

こがねーがたな 黄金刀 (名) こがねづくりのかたな(黄金作刀)に同じ。こがねづくり(黄金作)の條を見よ。相國寺供養記「金刀」

(謡)黄金刀もとうて見よ 何事も貴際あたつて見るべし。

(謡)黄金刀もさいて見よ 何事も一度は無疎すべし。

こがねーかん 黄金菱 (名) 羊羹の一種。黄金粉(こがね)をまぜて黄色にしたるもの。

こがねーぐさ (名) 【植】■かたばみ(酸漿草)の異名。■きく(菊)の異名。「菊の異名。金平記「にしたみなる輝の色のごとにこがねぐさ」 ■草の名。

こがねーづくり 黄金作 (名) 黄金にて裝飾すること。又、其の物。宇津保物語「御弓、絲毛六つに、こがねづくり十に」 源氏「一腰の黄金作り」 ■山鉾

こがねづくりのかたな 黄金作刀 刺鞘等の金具を黄金にて飾りたる刀。欽明紀「金防刀(こがねづくりのつるぎ)」 二口、大内問答「金作の刀は御鞘御刺にて候」

こがねづくりのくるま 黄金作車 車に金の一種。刺、詳かならず。櫛代車なと平安朝頃金具を附けたるものなるべし。貴族人の乗用。宇津保物語「こがねづくりのくるま一、びらびらげの車二」

こがねづくりのたち 黄金作太刀 刀の金具をこがねづくりにしたるもの。名目抄「金作太刀、大臣已上著之」 東鑑「文治元年八月廿日「帯金作大刀」 盛衰記「金作太刀の太刀を帯び」

こがねどび 黄金鴉 (名) きんし(金翅鳥)に同じ。源氏物語「こがねとび」

こがねーのーぜに 黄金錢 (名) 【植】■ふしのぜにの花はやつれず」 ■ウリ(交趾)の異名。

こがねーのーは (名) 【植】■ふしのぜにの花は秋の下にかくせども、こがねんくわ(金蓮草)の異名。■すみれ(菫)の異名。

こがねーばな 黄芩 (名) 【植】唇形科、二尺許り。葉は對生、披針形、葉柄を有せず。夏秋、紫色又は白色の小唇形花を葉の上部の葉腋に開く。我が國各地に産、路傍に生ずる。肥大なる根を藥用に供す。こがねやなぎ。わらごん。

こがねーばな (名) 【植】■うまのあしがた(毛茛)の異名。■かたばみ(酸漿草)をいふ。筑紫の方言。■みやこぐさの異名。

こがねーまぜ 黄金交 (名) 鎧の札の一種。いちまいまぜ(一枚交)に同じ。刀の鎧。

こがねーむし 金龜子 金龜蟲 金龜牛兒 (名) 【動】昆蟲類中、鞘翅類の一種。體はやや卵圓形、鞘翅綠色にて金光を帯す。幼蟲をちむしと云ひ、農作物の根を喰ふ。これに似たるまめこがねむし・ひめこがねむし等の類多し。當流小栗判官書「やんま・とんぼう・こがねむし」

こがねーめとり 黄金雌鳥 (名) 雀の雌子の雌鳥。雌貝

こがねーめなご (名) 【植】■きく(菊)の異名。■みやこぐさの異名。■りうなら

こがねーやなぎ (名) 【植】こがねばな(黄芩)の異名。

こがねーやま 黄金山 (名) 金の產出する山。きんざん。

こがねーわらび (名) 【植】木龍骨(ゆしだ)科、根茎を有す。葉は二尺許り、三回羽狀複葉、各小葉は楔形、斜方形、不整の鋸牙狀を呈す。子囊は葉の裏に著生し、小きく同形にして本種色なり。食ふに堪へず、各地の山地に自生す。こがねしだ。

こがねーわらび (名) 【植】木龍骨(ゆしだ)科、根茎を有す。葉は二尺許り、三回羽狀複葉、各小葉は楔形、斜方形、不整の鋸牙狀を呈す。子囊は葉の裏に著生し、小きく同形にして本種色なり。食ふに堪へず、各地の山地に自生す。こがねしだ。

こがねんじゅ (名) 【植】のぎ(小蘗)の異名。

こかーのーあもう 吳下阿蒙 (句) 國語志「呂蒙傳「呂蒙及諸葛瑾、曰中略蒙始渡三學、學業益志不倦、中略弟但有武略耳、今者學識業博、非復吳下阿蒙」

こかーのーき 古柯樹 (名) 【植】こか(古柯)の異名。

こかーのーき (名) 【植】えこのき(齊墩果)の異名。宇鏡「擲「柘」

こかーのーこゑ 五箇聲 (名) 同じ。宇津保物語「おまへ、より給はせたる風の琴を、こかの聲にしらべてひくせたに」

こかーのーしらべ 五箇調 (名) 琴に五通りの調べ方。即ち、「琴手(ことで)」・「片垂(かたたれ)」・「水宇瓶(みうへ)」・「若海波(わかなみ)」・「鷹鳴(たかなき)」をいふ。と。「河海「下若「きんは、こかの調べ、あまたの手の中に心を留めて、必ずひき給ふべき五六のはちを、いとおもしろくすましてひき給ふ」

こかーのーみこ (名) 【動】さる(猿)の異名。

こかーのーみこ 早雲寺記

こかは 小川 (名) 小き流れの川。をがは。

こかは 小革 (名) 革の名。百錬寶鑑「に甚だ似たれども、質同じからず。

こかはせ 小爲替 (名) ■郵便爲替の一。其の所及び受取人を指定するの爲替。隨意とせんもの。郵便爲替規則「小爲替證書」 ■こがはせしようしよ(小爲替證書)の略。

こかはせーさん 小爲替金 (名) 小爲替の料金。

こかはせーしようしよ 小爲替證書 (名) 小爲替の差出人に、其の受取郵便局所より受付する證書。差出人はこの證書を其の受取人に送り、受取人は特に拂渡郵便局所の指定ある場合の外は、何れの郵便局所にても引換へこれを受くるを得るもの。郵便爲替規則「小爲替證書」

こかはせーれう 小爲替料 (名) 小爲替の料金。

こかはらけ 小土器 (名) 小き土器。東鑑「文治元年「以小土器、挿手五寸之串、三献之、次盛燈赤柔貝等」 徒然草「小土器の盃に、小土器(かわらけ)に味噌の少し附き盛たるを見出でて」 類聚雜要「大土器中略小土器九十口」

こかはらひは 小河原鶸 (名) 【動】鳥類中、鳴禽類の一種。河原鶸の一類にして、稍小形、腕翼の基部黄色なるを著しき相違の點とす。體の長さ五寸。

こかはり 子變 (名) 小形の、成長するに從ひて、類色・容貌の變化すること。

こかはん 五箇番 (名) 武家の職名。殿中にて番を勤むる人を五番に分けたるもの。當番・非番ありて、番は交替はたらく事を行ふ。來公衆。年中定例記「夜番は二人づつ遣はす。ほこらかす、五箇番よりに入つて燈竹五本ほこらかす、五箇番よ一本づつ遣はす上」

こがひ 小貝 (名) ■小き貝。をがひ。(おほがひの對) 宇津保物語「伊勢の海清き渚に駒とめて、都のつとにこがひ・ひらはんと」 ■漢字の鳴の名。時・朝・貨・時などの貝の字の稱。(貝(ばい)の對)

こがひもあぐ かひつぐ(貝作)に同じ。かひ(貝)の條を見よ。

こがひ 小買 (名) 常用の品だけ、少しづつ買ひ入るること。

こがひ 子養 子飼 (名) ■子たる時より飼養すること。子を養ふこと。枕草子「ものの子がひし」 平家「女護島「狼の子飼すると同然」 ■稚き時より養ひ育つること。又、その養はれたる人。直井筒「十の年から子飼にて」 今昔「心中「子飼と思ひ、肌を免し」

こがひ 蠱飼 (名) かひこを飼ふこと。又、其の人。養蠶。宇津保物語「こがひもすれども、種絶ぜず」 二つに錄の十・中層「とらぬなし」 和名抄「蠶坐」 拾遺集「とし・もよしこがひ・まえたり、大國の里たのもしくおもほゆるかな」 庭訓往來「可沼居兼者綾・羅・養」

こがひ 籠飼 (名) 籠の中に入れて飼ふこと。孕雀「籠飼の鶯の色色に、雀をそそめ出だす森・梢梶」

こがひな 小腕 (名) こうで(小腕)に同じ。虚實記「文愛は、右宗が小がひなを突き貫く」 信長記「小がひなおし折り拾つべきものを」

こかーもの 子飼者 (名) 商工なとの家にて、幼少の時より弟子又は雇人にしたる者。(中年者の對) 盛子「中年者・年季奉公人」

こがーふ 一古甲 (名) こへぶん(古甲金)の略。國家金銀錢譜「甲斐國は甲金と號し、今以て甲石金あり。一國通用目方は三四段もあるものなり。古甲・新甲甲と號し、二品あり。右古甲は位位し、新甲は少し劣れり」

こがふ 子抹 (名) 【祭式會記が新樣を慕樣するには舊樣に對り當てて、其の所有者より慕樣するを通例とするにより此の稱あり」しんかぶ(新樣)の異稱。(酒樣の對)

こがふ (名) 【植】こかぶら(小蕪菁)の異名。

こがふ 一古甲金 (名) 武田氏以來、元祿年間までの甲州金。即ち、甲石金・板金・大菱判・細字金・延金・鬼目金等の稱。品位は約八百四十二。甲斐國志「古甲金」

こがふ 一五合扶持 (名) 昔時、扶持米の計算に、男一人に從き一日に五合と見つもり、之を一人扶持と稱せしこと。

こがふ 一五合無米 (名) 一日に五合だけ貢ひて、米を調へ難き分際。聖德太子繪傳記「五合無米の下部ども」

こかぶら 小鏑 (名) 鏑矢の鏑の小きもの。平家「矢にこかぶら取つてつがひ、ひふと射きつ」 ぬえとならべて前にぞ落としたる」

こかぶら 小蕪菁 (名) 【植】十字花科、蕪菁行屬の二年生草本。かぶらの一品種。全形小なるもの。

こかべ 小壁 (名) ■狹小なる壁。一部分にのみあるかべ。明日香井集「隙子の上の小壁にぞ書き附けける」 ■建築 有職「の中に欄間ある時、その上下の壁の稱。

こがへし 小返 (名) 軍陣の語。退目方は三四段もあるものなり。右古甲・新甲甲と號し、二品あり。右古甲は位位し、新甲は少し劣れり」

こかーふ 子抹 (名) 【祭式會記が新樣を慕樣するには舊樣に對り當てて、其の所有者より慕樣するを通例とするにより此の稱あり」しんかぶ(新樣)の異稱。(酒樣の對)

こかぶ (名) 【植】こかぶら(小蕪菁)の異名。

こかぶ 一古甲金 (名) 武田氏以來、元祿年間までの甲州金。即ち、甲石金・板金・大菱判・細字金・延金・鬼目金等の稱。品位は約八百四十二。甲斐國志「古甲金」

こかぶ 一五合扶持 (名) 昔時、扶持米の計算に、男一人に從き一日に五合と見つもり、之を一人扶持と稱せしこと。

こかぶ 一五合無米 (名) 一日に五合だけ貢ひて、米を調へ難き分際。聖德太子繪傳記「五合無米の下部ども」

こかぶら 小鏑 (名) 鏑矢の鏑の小きもの。平家「矢にこかぶら取つてつがひ、ひふと射きつ」 ぬえとならべて前にぞ落としたる」

こかぶら 小蕪菁 (名) 【植】十字花科、蕪菁行屬の二年生草本。かぶらの一品種。全形小なるもの。

こかべ 小壁 (名) ■狹小なる壁。一部分にのみあるかべ。明日香井集「隙子の上の小壁にぞ書き附けける」 ■建築 有職「の中に欄間ある時、その上下の壁の稱。

こがへし 小返 (名) 軍陣の語。退

却の途中より、軍勢の一部引き返すこと。〔増〕家忠日記慶長五年八月廿三日「敵兩度小返しして、味方の兵を追ひ拂ふ」

こがへしのやり 小返槍　小返しの時、敵につくる槍。

こ-がへり 子轉（名）出産の時、胎兒が位置を顛倒し、頭を下方にすること。

こ-がへる 小返（自動四）波など、勢ひ強く進み行きて、あとへ少し引きかへる。字鏡「濱淪〔波浪也。前却之貌（中略）佐加留支波奈加留留波豆乃古加戸留〕」

ご-かぼう 五荷棒　五嘉寶　五家寶（名）糯米の粉を蒸しなどして、水飴などにて固め棒とし、青豆粉などを附けたる菓子。奴師勞之「安永六年丙申、日光御社參の時、道中にて見し駄菓子に、五荷棒といふものあり（中略）今年庚辰、ある友のもとより、武州忍領秩父の邊の菓子とて、五かぼうといふものを贈りしを見しに、昔見しよりは形大にして、其の質も赤おこし米をもて造りたり。其の形は野鄙なれど、四十年の昔に比ぶれば味ふべし」

こ-がまへ 小構（名）構への小きこと。小規模。諸艶大鑑「越後の竹六といふ男、かりそめにも、こがまへなること嫌ひなり」

こ-がみ 小腹（名）このかみ（小腹）に同じ。下腹。

こ-がみ 小神（名）末社。支社。延慶本平家二中、入道希三百廿間の廻廊、並びに小神・小神の鳥居・鳥居を立て置き」

ごがみ（名）【植】いけま（牛皮消）の異名。

ごがみ（名）【植】ががいも（蘿摩）の異名。

ごがみ-づる（名）【植】前條に同じ。

こ-がめ 小瓶（名）小きかめ。盛衰記廿六、〔淑女〕「右の手に小瓶を持ちて」夫木〔廿〕「神さぶる鹿島を見れば、玉だれのこがめばかりぞまだ殘りける。」此の歌は鹿島〔中略〕其の所に壺といふ物、誠に大なるが、半過ぎて埋もれて見えしを、先達の僧に尋ねしかば、これは神代よりとどまれる壺にて、今殘れる由申し侍りしこそ」

こ-がめ 小龜（名）一 小き龜。和名〔十九〕「攝龜。爾雅集注云、攝龜。一名、陵龜〔古米〕小龜也」 二【動】すっぽん（鼈）をいふ、四國の方言。物類稱呼

こがめ（名）【植】いけま（牛皮消）の異名。

こ-がも 小鴨（名）【動】鳥類中、游禽類の一種。體の上部、黑灰色にして、赤褐色の斑條を示し、下面は白褐色にして暗色の斑あり、雄は頭上より後頸部に亙り、又、眼の前・頰・喉等は赤褐色あり。秋季、本邦に來たる。たかぶ〔奥州〕たかべ〔關西・關東〕（物類稱呼）

ご-かもん 御家門（名）江戸幕府の親藩の稱。尾張・紀伊・水戸の三家及び越前・會津の二家。又、加賀の前田及び因幡の池田をも稱することあり。

こ-がや 小萱（名）【植】かや（萱）に同じ。催馬樂「走り井の己加也〔ガヤ〕刈りをさめ、それにこそまゆ作らせて絲引きなさめ」

こ-がら 子柄（名）子供の容貌・體格又は態度。

こ-がら 小柄（名）體の小きこと。こづくり。（大柄の對）百日曾我〔三〕「出で立ち小がらにりりしくて」津國女夫池〔三〕「三十許りの小柄の男」

こ-がら 小辛（名）七色たうがらしの辛み最も薄きもの。（大がら・中がらの對）

こ-がら 小雀（名）【動】鳥類中、燕雀類、やまがら科の一種。體はやまがらより小く、嘴短小なれども鋭し。頭黑く、背・腹は白く、翼と尾とは黑色なり。四時、本邦に棲息し、夏は多く山地に在りて巣を營み、秋に至れば食を逐ひ平地に下だりて越冬する漂鳥。じふにから（十二雀）。新六帖〔二〕「冬野にはこがら山がらとび散りて、またいろいろの草の原かな」夫木〔廿七〕「春來ても見よかし人の山里に、こがらむれゐる梅の立ち枝を」〔運歩色葉〕

（こがら）

こ-がら（名）【動】かさご（笠子）をいふ、奥州の方言。物類稱呼

こがら-かす 焦（他動四）こぐるやうにす。こがす。

こ-がらき 木枯木（名）たきぎ（薪）をいふ、伊勢國の南部の方言。〔和訓栞〕

こがらけ（名）葉の附かぬ柴をいふ、伊勢國の方言。物類稱呼

こ-がらし 木枯　凩（名）一 木を吹き枯らすあらし。主として秋より初冬にかけて吹く風にいふ。六帖〔二〕「木枯の秋の初風吹きぬるを、などか雲ゐに雁の聲せぬ」源〔帚木〕「こがらしに吹きあはすめる笛の音を、引きとどむべき言の葉ぞなき」夫木〔廿六〕「立田山夏の木ずゑの木がらしは、川瀬の波の底よりぞ吹く」 二 すりこぎ（擂粉木）をいふ、女詞。女重寶記「れんぎはこがらし」

こがらし の かぜ 木枯風　こがらし（木枯）に同じ。宇津保〔吹上上〕「木がらしの風も吹きつと松蟲や、しげき木かげと人に見ゆらん」後拾遺〔秋下〕「山里の賤の松垣ひまを荒み、いたくな吹きそこがらしの風」

こがらし-ちゃ 木枯茶（名）木枯の後の枯葉の如き色。橙がかりたる焦茶の少しさえたる色。

こ-がらす 小烏　子烏（名）小き烏。又、烏の雛。太秦廣隆寺牛祭文「堂塔の檜皮喰ひめぐ大烏・小烏め」緋縮緬卯月紅葉〔道行〕「森の小烏・川千鳥」

こ-からつ 古唐津（名）唐津燒の古陶器。

ごがらび（名）【植】ががいも（蘿摩）の異名。

こから-ふ 古柯蠟（名）古柯の木より採りたる蠟。

こがら-め 小雀（名）【動】こがら（小雀）の異名。行宗集「たちのけどうへならひぬるこがらめを、つれなき人の心ともがな」夫木〔廿七〕「友ねしてはぐくみかはすこがらめの、思ふ人だにある世なりけり」

こがらめ-うま 小雀馬（名）馬の毛色の、こがらめの羽色に似たるもの。

こがらめ-ぶし 小雀臥（名）こがらめのふしたること。又、そのさま。こがらめは雌雄羽をならべてふすといふよりいふ。夫木〔廿七〕「ならびゐるこがらめぶしの中に入りて、わりなく人にむつれぬるかな」同〔同〕「はねかはすこがらめぶしを見てもまづ、我がひとりねの契りをぞ知る」

こ-かりぎぬ 小狩衣（名）はんじり（半尻）に同じ。後鳥羽院宸記〔建保四年四月十八日〕「聊著〔二〕小狩衣〔一〕」

こがる 焦（自動下二）一 火に燒けて黑くなる。こげる。拾遺〔物名〕「夜と共に照燒くあまの絶えせぬは、なぎさの木の葉こがれてぞ散る」枕〔八〕「すびつのけぶりのたちければ〔中略〕かへるの飛び入りてこがるるなりけり」源〔胡蝶〕「夜べのは燒け通りて、うとましげにこがれたる匂ひなどもことやうなり」〔運歩色葉〕 二 日光に曝されて色變はる。こげたる如き色となる。夫木〔十〕「下紅葉あきもはかなく色づくは、照る夏の日にこがれたるかも」堀河百首〔秋〕「瀧の上のみ舟の山のもみぢばは、こがるるほどになりにけるかな」 三 戀ひ慕ひて思ひ亂る。

心悶え惱む。萬〔十二〕「足引の山田もるをぢがおくかびの、した粉枯〔コガ〕のみわが戀ひをらく」續後紀〔十一〕「太上天皇崩〔與〕田依〔天〕晝夜止无久哀迷比焦〔コガ〕御坐〔須〕」後撰〔戀五〕「消えずのみ燃ゆるおもひは遠けれど、身もこがれぬる物にぞありける」源〔桐壺〕「泣きこがれ給ひて」

こがるる いろ 焦色　思ひこがるるやうす。拾遺愚草〔下〕「戀しとてこがるるいろもあらし吹く、ははそが原に人も宿らで」

こがれ 焦（名）こがるること。こがれたること。伊勢集「身の憂きを知ればはしたになりぬべし、思へば胸のこがれのみする」相模集「蚊やり火は烟のみこそたちまされ、下のこがれは我れぞわびしき」

こがれ-いひ 焦飯（名）焦がれたる飯。こげめし。名義抄「燋飯〔コガレイヒ〕」

こがれ-かう 焦香（名）一 染色の名。濃き香色。薄紅に黃を加へて染む。裝束には若年の人の著用とす。二 織色の名。經・緯共に濃き香にて織る。もろかう（諸香）。三條家裝束抄。物具裝束抄 三 襲の色目の名。表は濃き香、裏は紅。三條家裝束抄

こがれ-くさし 焦臭（形二）こげくさし（焦臭）に同じ。物類稱呼

こがれ-じに 焦死（名）一 燒け焦げて死ぬること。平家女護島〔四〕「熱や熱やのこがれ死に、生き火葬とは是れやらん」 二 思ひこがれて病を發し死ぬること。おもひじに。百合若大臣野守鏡〔三〕「我が君の御事戀ひ慕ひ、焦がれ死にと承り及びしが」

こがれ-しぬ 焦死（自動變）こがれじにとなる。井筒業平河內通〔四〕「この儘居てもこがれ死ぬ、よし道で死ね、先で死ね、追っかけ行かん、連れ歸らん」

こがれ-なき 焦泣（名）思ひこがれて泣くこと。曾根崎心中「膝に抱き附き焦がれ泣き」壽門松〔道行〕「今日は故郷の焦がれ泣き」

こがれ-ぶね（名）漕がれて行く舟に、思ひ焦がるるをかけていふ語。堀河波鼓〔上〕「そもじ樣故こがれ舟、人目の岩に波堰きて、碎くる磯邊床右衞門」百合若大臣野守鏡〔三〕「水主・梶取の身ならねば、心許りにこがれ舟」

こがれ-まさる 焦增（自動四）まさりて思ひ焦がる。狹衣〔上四〕「くらべ見よ淺間の山の烟にも、誰れかおもひのこがれまさると」

こがれ-ゆく 焦行（自動四）思ひこがれつつ月日を經ゆく。多く漕がるるにかけていふ。狹衣〔下〕「舟のはるかにこがれ行くが」新勅撰〔戀二〕「こがれゆくおもひを消たぬ涙河、いかなる波の袖濡らすらん」

こがれる 焦（自動下一）こがる（焦）の口語。

こがれ-わぶ 焦侘（自動上二）思ひこがれてわびしく思ふ。多く漕がるるにかけていふ。續後拾遺〔戀三〕「こと通ふたよりもあらば知らせばや、にふの河舟こがれわびぬと」

こがれ-をる 焦居（自動變）思ひ焦がれて居る。多く漕がるるにかけていふ。狂言〔鵜飼〕「山田やはせの渡船の、夜は通ふ人なくとも、月の誘はば自から、船も焦がれて出づらん、焦がれ居るらん」

こ-かん 胯閒　股閒（名）またのあひだ。

こ-かん 固諫　固く諫むること。强ひて諫むること。史記〔晉世家〕「管仲固諫不〔レ〕聽」

こ-かん 枯旱　ひでりして植物の枯るること。漢書〔于定國傳〕「郡中枯旱三年」

こ-がん 胡雁（名）雁は北地の鳥にて、多く胡國の方に住むといふよりいふ語。朗詠「胡雁一聲秋、破〔二〕商客之夢〔一〕」鮑照詩「河畔草木未〔レ〕黃、胡雁已矯〔レ〕翼」

こ-がん 孤雁（名）ただ一羽にて、連れのなき雁。蕭琮詩「翩翩孤雁何所棲、依依別鶴夜半啼」

ご-かん 御感（名）一 感嘆の敬語。感賞。ぎょかん。平家一〔殿上闇打〕「上皇猶御感の餘りに、內の昇殿をゆるさる」 二 かんじゃう（感狀）に同じ。松隣夜話「伊賀守申すは、雲州は故爲景公、當謙信公兩度の御感を、廿三まで御取り候由、其の聞え全く承り候」

ごかん の ごしよ 御感御書　ごかん（御感）〔二〕に同じ。東鑑〔十五、建久六年七月十六日〕「成敗尤叶〔二〕民庶雅意〔一〕之由、就〔レ〕聞召及〔一〕今日被〔レ〕下〔二〕御感御書〔一〕」

ご-かん 五感（名）五官によりて感ずる視・聽・嗅・味・觸の五つの感覺。

ご-かん 沍寒（名）凍り寒がりて寒氣烈しきこと。極寒。左傳〔昭公四年〕「其藏〔レ〕冰也、深山窮谷、固陰沍寒、於〔レ〕是乎取〔レ〕之」劉晷文〔雪賦〕「在〔二〕於沍寒之節〔一〕」

ご-かん 語幹（名）語尾の變化する語の幹部。黑しのくろ・往（イ）ぬのいの類。

ご-がん 護岸　石・蛇籠等にて、河岸又は堤防の水流に沿へる處を保護して、水害を防ぐこと。

こかん-し 拒捍使（名）古へ御厨の折り、その境域內に、牛馬などの闖入するを拒ぎ止むる事を掌る官人の稱。江次第〔六、齋院御禊點地〕「拒捍使・檢非違使、著〔レ〕冠參候」

ごかんぢゃう-がしら 御勘定頭（名）ごかんぢゃうぶぎゃう（御勘定奉行）の舊名。

ごかんぢゃう-ぎんみやく 御勘定吟味役（名）江戸幕府の職名。公事方・勝手方に別かれ、勝手方は租稅の徵收、米錢の出納等を勘査し、公事方は訴訟の裁決の當否を判じ、評定所に列して意見を陳述することを得。吏徵〔上〕「御勘定吟味役四人」

ごかんぢゃう-しよ 御勘定所（名）江戸幕府の制。御勘定組頭以下の屬吏の候する所。大手御門番所の後にあり。これを下御勘定所といふ。また營中にも御勘定所あり。これを內座といふ。

ごかんぢゃう-ぶぎゃう 御勘定奉行（名）江戸幕府の職名。四人を置きて、御勝手方・公事方とを分掌す。御勝手方はすべて租稅の徵收・米穀の出納・金銀銅山・諸役人の知行割等、總べて民政・財務に關する事を掌る。公事方は關八州の公私領及び關外公領の訴訟を聽斷す。吏徵別錄〔上〕「御勘定奉行〔舊稱御勘定頭〕」

こ-がんぴ（名）【植】一 瑞香科、蕘花（コガンピ）屬の落葉灌木。幹の高さ二三尺許り。葉は橢圓形又は卵形なり。夏季、淡紅色の小筒狀花を枝端に叢生す。我が國、各地の山野に自生す。樹皮は日本紙製造の原料となす。こまばがんぴ。 二 きがんぴ（蕘花）の異名。

（こがんぴー）

こき 濃（名）濃きこと。濃きもの。宇津保〔國讓下〕「綾・かいねりのこき・うすき」後撰〔夏〕「色といへばこきも薄きも頼まれず、やまとなでしこ散る世なしやは」

こ-き 國忌（名）皇考・皇祖・母后などの御忌日。當日は至急を要する事の外廢務し、所司を定むる所の寺に遣はし、佛事を修せらる。代代國忌の廢置あり。官符を以て發布せらる。持統紀〔二年二月〕「詔曰、自今以後、每〔レ〕取〔二〕國忌（キ）〔一〕要〔レ〕須〔レ〕齋也」令義解〔職員令〕「國忌〔謂先皇崩日也〕」治部省式「國忌」建武年中

行事三月「中の午の日、石清水の鹿時祭なり、國忌にあたりたらば下の午也」太平記「五日は東寺の國忌」

こくき 黒器（名）黒漆の合子。

事談「黒器といふ物に、みそうづの毛立古持ちたる一杯と、薄漬の繞きたる二杯とを持ち來て、黒器の物をばひきそはめて岩吸りくひて、只今そ人心地するとて」

こくき （名）【植】あるあし（蘆葦）の異名。

こ-き ～古器（名）古代の器物。古器物。古物。音書「造新鑄、律與古器」

こ-き ～古記　故記（名）ふるき記録。舊記。雙生隅田川「家家の名記・古記」表管「記を尋ねて、是れぞと云ふべき例もなく」表管「故記」「駐馬臣之兄讃故記日」

こ-き ～古稀（名）「下文の杜甫の詩の句に基く」七十歳の稀。杜甫詩豊「酒債尋常行處有、人生七十古來稀」後漢書「賈夫已近古稀年」

こき ～枯葉（名）木にて造りたる葉。

こき ～呼氣（名）肺より體外に呼出する空氣。（吸氣の對）

こき ～孤危　孤立して甚だ危きこと。左傳「小國孤危、不能自固」

こぎ 漕船（名）こぐ（漕）こと。萬葉「朝床に聞けばはるかし、いづみ川朝己藝（漕）し つつうたふ船人」同「大舟を漕ぎ出でて」

こ-き 小木（名）小き木。順集「小木の生び出でて、萬代の老木にならんまでの心ばへをとまませ給ふに」栄華「今ひき繰ふさせ給へるこぎの、行く末遠かに生ひさきありて」

こ-ぎ ～古儀（名）古昔の儀式。書儀。

こ-ぎ ～古義（名）❶ふるき意義。又は解釋。史記酷吏「決大獄、欲傳古義」❷こぎは（古義法）の略。

こ-ぎ ～虚偽　きょぎ（虚偽）に同じ。一代女「今までのこぎ、本心に返つて」

こ-ぎ ～狐疑　❶狐の性疑ひ深く、氷河を渡るに且つ渡るといふこと。即鈔「狐初渡氷、無聞水結狐疑謙有氷」❷事に臨みて躊躇すること。疑ひてためらふこと。疑ひ。疑心。書「今後戒無懲之伴、住待天合座主者、恐怕狐疑於先賢、方致狼藉於後輩」盛衰記「非狐疑無疑調者」「漂沒之由、雖有風聞、亡命之餘、猶占今、心猶豫而狐疑」契子「用兵之者、猶豫最大、三軍之災生於狐疑」

ごき 非器（名）非石を入るる器。こげ。

ごき （名）【植】かはらよもぎ（河原蓬）の異名。

ご-き ～御器（名）食物を盛る器物。木製・金屬製又は土器。後世は特に椀の稱。字津保「上同じうくるびきのごきの中にかねのごきよきまるりもの、同じ數なり」同「これはつくも所のうくるを加へども居て、ごきとも同じものしてひくし大饌にも御めし物うるはしく御器などにもまるりすゑて、只御かはらけにて、盛なども、なくて折敷にとり据ゑつつぞそまるらせる器。」「御伽草紙「ごきと箸とたべて」五器。陶器。合器。

ごききく 御器下　非人・乞食となる。淀鯉出世濃樣「今の間に御器さげて、心からの非人乞ひ」善門松「五器提げる禪利か」

ごきのみ 御器貫　御器の中に入るべき貫。即ち底。丹後與作「同屋・馬さ張箭詩「鳳凰宛轉有二古樣」

こ-ぎ ～虚偽　きょぎに同じ。「五幾・七遊」

こ-ぎ ～語氣（名）ことばの調子。もの いひぶり。ことばつき。語調。語勢。蘇氣。

こ-ぎ ～語基（名）こかん（語幹）に同じ。

こ-ぎ ～後騎（名）こうき（後騎）に同じ。海人藻芥「前驅は六騎後騎は一人也」

こ-ぎ ～御記（名）ぎょき（御記）に同じ。

こ-ぎ ～御忌（名）ぎょき（御忌）に同じ。寒宮年中行事「月十三「おんやうれう、ちいれんのこぎをけいす」

こ-ぎ ～誤記　誤りて記すこと。かきあやまり。かき損ひ。

こ-ぎ ～五義（名）五に、兄は友に義、弟は敬に、子は孝なること。國語「五教昭明、五義紀宜」五義、父義、母慈、兄友、弟恭、子孝也」

こぎあひ 漕達（名）こぎあふこと。こぎあひたること。新六帖「友船は筑紫も伊勢もこぎあひの、同じ泊りに浮きねをぞする」

こぎあふ 漕達（自動）舟を漕ぎ行きて出合ふ。萬「わが船は神ゆなさかり、むかへ船かた待ちがてら浦ゆ拂ひ會ひ（こぎあ）」

こぎあみ 漕網（名）引網の一種。水底に投げ、一網又は二網の漁船を漕ぎて引く網の總稱。

こぎあらひ-むし （名）【動】あぶらむし（油蟲）の異名。

し。親方へ廻つて、洗濯物の五器の賞をぶちあげ、「まかりがせて見せうず」

（謡）御器も持たぬ乞食　全然無一物なること。又、その人。

こ-き ～五幾（名）こきない（五幾内）に同じ。「五幾・七遊」

こ-き ～語氣（名）ことばの調子。もの いひぶり。ことばつき。語調。語勢。蘇氣。

こ-き ～語基（名）こかん（語幹）に同じ。

こ-き ～後騎（名）こうき（後騎）に同じ。海人藻芥「前驅は六騎後騎は一人也」

こ-き ～御記（名）ぎょき（御記）に同じ。

こ-き ～御忌（名）ぎょき（御忌）に同じ。寒宮年中行事「月十三「おんやうれう、ちいれんのこぎをけいす」

こ-き ～誤記　誤りて記すこと。かきあやまり。かき損ひ。

こ-き ～五義（名）五に、兄は友に、弟は敬に、子は孝なること。國語「五教昭明、五義紀宜」五義、父義、母慈、兄友、弟恭、子孝也」

こ-きあひ 漕達（名）こぎあふこと。こぎあひたること。新六帖「友船は筑紫も伊勢もこぎあひの、同じ泊りに浮きねをぞする」

こ-きあふ 漕達（自動）舟を漕ぎ行きて出合ふ。萬「わが船は神ゆなさかり、むかへ船かた待ちがてら浦ゆ拂ひ會ひ（こぎあ）」

こ-きいで 漕出（名）こぎいだすこと。こぎだす。太平記「船を帆に上げて、後の外に拂ぎ出でだす」狂言「船を漕ぐとこぎいだす」

こ-きいで 漕出（自動）舟を漕ぎて出づ。萬「大船をあるふに漕出（こぎ）や船だけ、わが見しこしらがまみに漕出（こぎ）や船古今「わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと、人には告げよあまの釣船」源氏「舟に乘せて漕ぎ出づるほどは」

こ-きいな 漕往（他動）漕ぎて行く。萬「らなかみのそのつにさして君が己藝麻（こぎ）ば」

こ-きいる （自動）〔こきは語を頭ひる語〕いる（入）に同じ。狂言「稽何かの事語はいるまい、こちへこきいて、まうぼし著せやれ」

こ-きいる 扱入（他動）こきている。こきる。

こ-きいる 漕入（自動）漕ぎて其の内に入る。夫木「こぎいれし秋のこの葉の淡川、となせの波に鎖たつなり」

こ-きいろ 濃色（名）❶染色の名。紫色の濃きもの。著聞「濃き色の二つ衣、單衣著て」❷緑色の名。經・緑共に濃き紫にて緑りたるもの。

こ-きう ～故舊（名）年舊を知り人。久しき朋友。太平記「故舊・多」「故舊を思ふる無」「今一人、人、舊友、故舊也」同「故舊・朋友故舊也」」詩「貧知交之義、親故舊之恩」後撰「故舊・朋友」」後撰「故舊無」

こ-きう ～孤裘（名）狐の皮にて製りたるかはごろも。太平記「狐裘羔裘、民事不定」論語「狐裘羔裘、黒衣羔裘」詩「人狐裘表に鳥の袍をつき」詩經「狐裘黄黄、其人美且仁」「狐裘羔裘、豹袖如虎」禮記「狐裘黄黄、其人美且仁」

こ-きう ～枯朽　枯れくつること。くちたること。又、その物。後漢書「空桑城雖小、合生氣、實同枯朽」

こ-きう ～吳牛（名）〔支那の南方の地に產するより いふ〕【動】すゐぎうら（水牛）に同じ。

こぎう あうぐ 吳牛喘　水牛は暑さを吳るるよりて月を見て日なりとして喘ぐといふ故事より、牛の喘くにもいふ。太平記「終於暑氣を暑喘「大石共を塞めたれば、車輾りて輪を摧き、吳牛喘ぎて舌を垂る」世說「言「臣猶喘吳牛見月而喘」注今之水牛。唯生二江淮間、故謂之吳牛」

こ-きうち 濃打（名）濃き紫の打衣。

こ-きおとす 扱落（他動）こきておとす。扱き取る。こきおろす。

こ-きおろし 扱下（名）こきおろすこと。こきおろしたること。

こ-きおろす 扱下（他動）❶こきておろす。むしりおとす。堀河百首「鶯のみをこと思ひけりかなもる山は、もみおこきおろす名にこそありけれ」拾遺愚草「今日そ人に冬の風とは思へども、たえず こきおろすよもの木の葉は」飲木集「あのととえてけはしき谷の岩の上に、花こきおろす夜の山風」❷俗しく人を貶め辱しむ。

こ-きか 濃香（名）裏の色目の名。紫・綠とも に濃き香のいろの織物に、裏の紅濃りなるもの。

こ-がく ～古義學（名）古學派の一人たる伊藤仁齋の唱道したる學說。

こ-がく ～古學（名）古學派の略。

こ-がく ～は　派の略。

こ-がく ～古義學派（名）古學義學を主義とするもの。

こ-かくる 漕隱（自動）漕ぎて物に隱るる。萬「おゆの風いたく吹くらし、なごのあまの釣りするをぶね許藝可久漕隱（こぎ）見ゆ」

こ-かぶ （名）【動】ぶらむし（油蟲）をいふ。肥前・肥後の方言。

こ-かぶり （名）【動】前條に同じ。

こ-かへす 漕返（他動）こぎもどす（漕返）に同じ。

こ-かへる 漕返（自動）漕ぎて戻る。萬「許藝可敝里（こぎ）來て井にはつるまで」竹取「三日はかりあり て、こぎかへり給ひぬ」古今「漕ぎたなし小船こぎかへり、同じ人にやあらびわたりなん」

こ-かよ 漕通（自動）漕ぎて ゆきゆき通ず。夫木「わかめ刈る海士やよるらん、こゆるぎのいそがしくのみ漕ぎかよふ舟」

こ-くく 小菊（名）❶【植】りうなぎくの異名。❷下等の和紙。土佐・美濃用等に產す。暴紙又は茶の湯の釜敷などに用ふ。こみの。小折り。一代男「こぎくのはながみ」

こぎ-く 漕來（自動）漕ぎて來る。萬「白たへのころもの袖をまくらがよ、あま許夜久（こぎ）見ゆ波たつなゆめ」同「湖まよりぞ許藝許（こぎ）し舟を、風はやみ沖つみ浦に宿りするかも」

こぎ-くれなし 濃梔子（名）染色の名。くれなゐと くちなしとにて染めたるもの。紫式「深支子綾一疋、紅花大十二兩、支子一斗、酢五合、紫半圓、新卅斤」

こぎくらひ-むし （名）【動】ぶらむし（油蟲）をいふ。伊勢國の方言。

こ-くりげ 濃栗毛（名）馬の毛色。あかくりげ（赤栗毛）に同じ。三好記「三好長治見「家中之馬、同玄蕃頭、五寸程りある濃き栗毛の五歳したる」

こぎ-くる 漕容（自動）漕ぎつつ目 覚る。續拾遺「こぎくるる浮きねの浪枕、よるとて夢もえやは見えつつる」讃千載「君はるばると浪路の末にこぎくれて、知れぬ海に泊まる舟人」

こぎ-くれなゐ 濃紅色（名）紅の甚だ濃くして、黑む程になりたる色。平記「駕「由井濱の浦風に、濃き紅の大笠符を吹きもそせ」能圓往來「濃紅袴」

こぎ-ごぎ （副）固き物の觸れ合ふさま に いふ語。

こ-ぎ-ぞう （名）【植】はこべ（鳥觀草）の異名。源氏十二段「春生鳥蘇・蘇・はこべら・佛の座・菁菜・蘇・ずしろ・芹・蘇、是れを合はせて打ち搗へ、それも七種」

こぎ-そう ～虛偽相（名）佛語。三界は虛偽の迷界なりといふこと。

こ-きざみ 小刻（名、副）刀を細かく刻みて柔くなすこと。「こきざみに歩く」「太鼓をこきざみに打つ」

こきし 鍵吉支（名）古への朝鮮語。三韓の王の稱。「にきし。垂仁紀「任那王（こき）」同「新羅王（こき）子」社氏通典「百濟王號於羅濃、百姓呼鍵吉支、夏言並王也」

こ-きし 幾計（副）ここばく。もこばく。「駕「一說、數（こ）しの義。「記「うたのたかきに嗚わなる藏る中國こなみが、なる乞はきは、たちそばのみの、なけくを許記志（こき）ひ乞ねし」

こ-きし-く 扱（他動）こきおとして散き並ぶ。萬「秋風の吹き古夜之家（こき）る花のには、清きつく夜に見れどあかぬかも」同「玉敷かず君が悔いていふ堀江には、玉之夜美尼（古夜之夜（こき））て つぎて通はむ」

こ-きじゅ ～孤起頌（名）〔ふだ（佛陀）の譯〕げ（偈）に同じ。

こ-きしょ 御識所（名）ぎのところ（御所）に同じ。東宮年中行事「月「ためふさのあそん、こぎしょの綿を召して、一人に一とんこれを給はる」

こ-きしり 小碾（名）【動】はつかれずみ（蜆貝）の異名。

こ-きしろ 小碾（名）【動】前條に同じ。

こ-しん ～孤疑心（名）狐疑する こころ。選歩色葉「孤疑心」

こ-しんこんしゅう ～古義眞言宗（名）眞言宗の一派。正應元年、信圓業が新義眞言宗を創始して より以後、新義の高野山の眞言宗の稱。古義眞言宗の對。

こ-きず 小疵（名）いさきかの疵。漕ぎ手疵。太平記「三「少の小疵をば、物の數とも不思けりる上」

こぎ-すぐ 漕過（自動）漕ぎて過りぬ。萬「しかまま江は許藝須敝（こぎ）ぬらし、あま尋ふひがさの浦に波たてる見ゆ」夫木「漕ぎ過ぐる舟さへ波ひ心して、堀江のかはづ聲しきるなり」

こぎ-そく 漕退（他動）漕ぎのく。土佐日記「いつしかといふやかりつる讃波漕ぎこぎそけて御船をにけり」

こきだ （副）いくそばく。いかばかり。いたく。多く。許多。こきだく。こきばく。ここばく。ここだ。記「うたのたかきに中國いちさかき、みの多けくを許記志（こき）ひ乞ねし」

こきた 胡鬼板（名）こぎいた（胡鬼板）の略。

こきだく （副）ここだく（幾許）に同じ。

高「みなかみ笠山野遊ゆく道は己佐太雲(ユクモ)」
「苦しげく荒れたるかゝりさにあらなくに」

きさ-だけ 扱竹 (名) 稻を扱く具。竹にて造る。

きさ-だし (形シク) 多し。清山なり。「許百太斯(ココダシ)意保(オホ)天下乃事手(ノコトテ)」

きさ-だす 清出 (他動サ四) きさいだす(清出)に同じ。狂言(キョウゲン)「縁の音おかからりころりこからりとこぎ出して」

きさ-だし 小穢 (形シク) 少しきたなし。どことなくけがきるし。七個人写(ウツ)あるつゝ、小穢い小性でどざるなあ」

きさ-たむ 清回 (他動マ四) こぎめぐらす。こぎまはす。高「いづこにか船はてすらむ、あれの崎榜多味(ゴ)ゆきし棚無し小舟」

きさ-たむ 清回 (他動ハ四) 前條に同じ。高「許伎多賀(ココタガ)波(ハ)」

きさ-たもとほる 清回 (自動ラ四) 清ぎまはす。高「許(ココ)ぎ多(タ)ひれもすに見とゝもあくべき浦にあらなくに」

きさ-たる 扱垂 (他動ラ四) こきおろす。やうに垂れさがる。又、扱き垂る。古今(コキン)「刈りてはす山田の稻のこきたれて、なきこそわたれ秋のうらければ」同(ドウ)三「あけぬとてかゝるみちにはこきたれて、雨も涙もふりそぼちつゝ」後撰(ゴセン)「引くまゆのかくれこもりせまほしみ、くはこきたれてなくらを見せばやし」

きさ-ちやう 小几帳 (名) 小き几帳。類聚雜集(ルイジュウザフシュウ)「円、内之不(ノ)殿、月ノ小几帳」雅亮抄(ガリャウセウ)「其の枕の左右にこぎ丁をたつ、枕ぎ丁といふなり」

きさ-ちらす 扱散 (他動サ四) 扱きて散らす。扱き落す。むしりもちらす。古今(コキン)「上こきちらす酒の白玉ひろひおきて、世のうき時の涙にぞ借る」同(ドウ)「たまの緒解きてこきちらし、あられ風れて雪氷り」源(ゲン)「松原の深緑なる中に、花・紅葉をこきちらしたるとも見ゆるゝうへの衣の裾き濃き薄き数知らず」

きさ-づ 清出 (自動ダ四) こぎいづ(清出)に同じ。高「朝びらき許藝豆(ココギ)れば、むこの浦の沙ひのかたにたづが啼すも」同(ドウ)「さきもりの翔江己藝豆(ココ)いづて船、かち取るまなく愁はしげけむ」

きさ-つかふ 扱使 (他動ハ四) むごく使役す。容赦なく迫ひ使ふ。「居船斬今岡荘舎「一せめて責げでも食はすることゝか、手洗(ココ)飯米でこき使はれ」

きさ-つく 清著 (自動カ四) 清ぎて至り着く。夫木「雫かかる浦にこぎつく筑紫舟、いづくか今日の泊りなるらん」

きさ-つく 清著 (他動カ四) 1清ぎて到り着かしむ。2努力して或る點まで進行せしむ。

きさ-つける 清著 (他動カ四) 前條の口語。

きさ-て 小切手 (名) 手形の一。一定の地に於て一定の金額を受取る人又は所持人に対して銀行に支拂ふことを委託する證券。多くは銀行に対して銀行を信用を有する者、若しくは銀行に當座預金ある者が、自己又は其の名指人若しくは持參人に、額面の金額を支拂ふべき旨を、其の銀行商に送付して委託する一種拂のものをいふ。「銀行手形」「当座預金」「一覧拂」「小切手」

きさ-てちやう 小切手帳 (名) 小切手の用紙を綴ぢ込みたる帳簿。銀行が當座預金勘定を開きたる預金者に渡しおき、小切手振出しの便宜に供するもの。

きさ-ねぎつね 小狐 子狐 (名) 小き狐。又、狐の子。下學集「野干(ヤカン)ちひさき狐、草子(ソウシ)「小狐」」源

きさ-のはたん (名) 【植】毛茛(ウマノアシガタ)科、毛茛屬の多年生草本。莖の高さ一二尺。葉は長き葉柄を有して三全裂し、各裂片は更に深裂し、各租き鋸齒を有し、莖頂葉共に毛茸多し。春季、黄色の花を花莖に自に開く。我が國、各地の山野水邊の地に自生す。

きさ-つらぬ 清連 (他動ナ四) つらねて清ぐ。清ぎつれしむ。「字津保(ウツホ)「にこがねの舟どもこぎつらねて、船進び水しして」

きさ-つり 清釣 (名) 釣絲を船尾に繰り、絲を清ぎ進めつつ魚を釣ること。

きさ-つる 清連 (他動ナ四) つれてこぎつらねなりこぎつれて、廣瀬にならぶ篝火のかげ」

きさ-つる 合子草 (名) 【植】苞蔓(ホウマン)科、合子草屬の一年生草本。莖蔓を有し、巻鬚により他物に攀登す。葉は長心臓形、鋭尖頭、やゝ三淺裂乃至五淺裂す。秋季、葉腋に帯黄綠色の花を開き、單性、雌雄同株、雄花は花序に排列す。果實は小葉果にして、横に裂開す。我が國、各地の平野に自生す。かからすのこき。

きさ-で-ん 弘徽殿 (名) 禁中、清涼殿の北にある殿。七間四面なり。こくるでん。「こうきでん。和名抄「弘徽殿(ココキデン)」西宮記「延長二年八月十九日於弘徽殿」源氏物語「桐壺」「紅葉賀」「葵」「賢木」「澪標」「絵合」「松風」「須磨」「明石」「澪標」「蓬生」「関屋」「絵合」「澪標」「若菜上」「若菜下」「柏木」「夕霧」「御法」「幻」「匂宮」「宿木」「東屋」「浮舟」「蜻蛉」「手習」「夢浮橋」

きさ-でん 小機轉 (名) ちよつとした機轉のきくこと。目先の機轉。八笑人「小氣でんのきいた、身の軽い者がいいし」

きさ-とどむ 扱留 (他動マ四) 扱きてとどむ。

きさ-とむ 扱留 (他動マ四) 前條に同じ。

きさ-ぬ 扱入 (他動ナ四) 1扱き落して他の舟をおひぬく。2力强く清ぎ。

きさ-ぬく 清退 (自動カ四) 清ぎて其處より退く。夫木「あま小舟やそ島つたふ浪の上もぬ、こぎのくゝ藤は松の一むら」

きさ-のこ 胡鬼子 (名) 1はこ(箱子)に同じ。はね。つくばね。年中定例記「正月十御所御所御所みやげは、こぎいたこきのこ」運歩色葉「胡鬼子(ココ)」2【植】つくばねの異名。目つくばねの實。半濁胡荼「幼き童のこきのことしひてつきゆるは、いかなる事ぞや。答、兎角は幼きものの蛟にくくはれぬ呪ごとなり。秋の始めに蜻蛉といふ蟲出てきては蛟をとりくふものゆゑ、こきのことしいふは、未選子などをとゝんばらかしらにして、はねを附けたり。これを蛟にくくはれば、落つる時り、とんばらがくゝりのやうなれば、蛟をおそれしめんため、こきのことてつきゆるなり」

きさ-は 一古義派 (名) きさしこんしゆう(古義宗)に同じ。

きさ-はらし 小王簪 (名) 【植】百合科、菜葱(ユリ)屬の草本。きはらしの一種。莖はきはらしよりも長く、花は茎にて、葉はきはらしに同じ。

きさ-はき 扱刮 (名) 弓工の語。矢の刮ぎ方の一種。

きさ-ば 幾許 (副) いくばく。高「こきたくもあるかな」

きさ-ば 幾許 (副) いくばく。高「こきたくもあるかな」

きさ-ばつ 清泊 (自動ナ四) 清ぎ行きて泊りに著く。高「さし谷らむ磯のさきざき、許藝波能(ココ)も泊りに」

きさ-はなる 清離 (自動ラ四) 清ぎ行きてそこを離る。源氏「浮島をこぎ出はなれてもゆく方や、いづく泊りと知らずもあるかな」金葉「阿弥陀佛と唱ふる聲をかおにてや、苦しき海をこぎはなるらん」

きさ-び 小氣味 (名) きみ(小氣味)に同じ。

きさ-び 小穂 (名) 【植】きび(穂)の異名。

きさ-ぶ 一呼吸 1生物體生活の原動力を與ふる化學變化に必要なる酸素を體内に導入し、新陳代謝により化成せる炭酸を體外に排泄する作用。息の出入。荘子「書「嘔呴呼吸吐故納新、熊經鳥伸」源氏「書「嘔呴呼吸沈潜、今參「朝霞」「決」勝負あり「朝定」「成敗手呼吸」「鏡志「呼吸」「書「樂毅攻齊、齊「呼吸下齊七十餘城」2目くばり。かねあひ。つゝあひ。つゝ。

きさ-ぶ 一御給 (名) ねんくわん(年官)ねんしゆく(年爵)をいふ。北山抄「「奏可」「最」「遣」「給名」「之由」「勅」「許」「位」「爵」「後、召」「奏」「議」「決」「之」「拾芥抄「御給」「給」「部」「第」「九」「戸」「有」「職」「田」「令」「議」「位」「爵」「勅」「所」「之」」

きさ-ぶ-うんどう 一呼吸運動 (名) 【生物】肺臓が空氣の呼吸を營む爲め、絶えず行ふ伸縮作用。

きさ-ぶ-き 一呼吸器 (名) 【生物】呼吸を營む機關。動物の呼吸器は、生息する場所に住むものは肺・氣管の類を有するも、水中にあるものは鰓によるを普通とす。陸上に住むものは肺・氣管の類を有するも、水中にあるものは鰓によるを普通とす。梯下等のものには、體面全部にて呼吸するものもあり。

きさ-ぶ-きん 一呼吸筋 (名) 【醫】呼吸に際し、胸腔の擴大・收縮を補助する筋肉。即ち、肋間筋・肋骨舉筋等なり。

きさ-ぶ-さよう 一呼吸作用 (名) 【生物】生物が酸素を吸入し、炭酸瓦斯を呼出する作用。若く生物界に認むるもの。即ち、動物にては肺・鰓・氣管又は皮膚に依り、植物にては氣孔又は皮目に依りて酸素を吸收し、炭酸瓦斯を呼出す。蓋し呼吸作用は一種の化學作用にして、其の際生ずる勞力は即ち、活力に變ず。

きさ-ぶ-しき 一呼吸式 (名) 【醫】呼吸運動の樣式。胸式呼吸と腹式呼吸との二あり。各條を見よ。

きさ-ぶ-じよ 小給所 (名) 江戸時代の末、小姓本の領地。

きさ-ぶ-ちゆうすう 一呼吸中樞 (名) 【醫】呼吸運動を主宰する神經中樞。即ち、延髓の生活點の帶。

きさ-ぶつ 一古器物 (名) こき(古器)に同じ。

きさ-ぶね 清船 (名) 御座船(ゴザフネ)を乞く先頭の船。ひきぶね。

きさ-ぶ-もの 呼吸物 (名) 呼吸(コキフ)を要するもの。調子物。

きさ-ぶり 挫蝎 (名) 【動】あぶらむし(油蟲)の異名。

きさ-くい 一護旗兵 (名) 軍旗を護衛する兵。

きさ-ま-ず 扱雜 (他動サ四) 扱きまぜ合はす。古今(コキン)「見渡せば柳さくらをこきまぜて、都ぞ春の錦なりける」源氏「少女「御箱の蓋に、色色の花・紅葉をこきまぜて、こなたに奉らせ給へり」新勅撰「白雪と梅の花とをこきまぜて、わくことかたき我が心かな」

きさ-ま-ぜ 扱雜 (名)(副) こきまぜること。こきまぜたること。かきまぜ。宇津保(ウツホ)「いろいろの花にきまぜに散りしける、ちらしは愛しは打ちて染めしぞ」源氏(ゲンジ)「見も知らぬ四位・五位、こきまぜにひしなう出て入りつゝ」夫木「紅にはちすの浮きたるみとりぬに、白波たてはこきまぜの花」

きさ-ま-ぜる 扱雜 (他動サ四) こきまぜる(扱雜)の口語。

きさ-ま-ず 清廻 (他動マ四) 清ぎまはらしむ。こぎめぐらす。新六帖「淡入り ぬらば舟もこそゐるれ」

きさ-まはる 清廻 (自動ラ四) こぎめぐる(清廻)に同じ。新六帖「こぎまはる淡の舟の鯉かせに、ひれのさわぎの浪高く見ゆ」蜻蛉日記「身共が船に乗せて、浦を清ぎ廻はつて、ゆるりと船遊をさせうぞ」

きさ-まふ 清廻 (自動ハ四) こぎまはる。源氏物語「絵合」「その山のさきより、こぎまひして、新六帖「わたの原みさきにこぎまふ釣舟の、はるかになれば心すみけり」

きさ-み 小氣味 (名) きみ(氣味)に同じ。心もち。若風俗「極分こきみのよき事を、あらけなくいひ伝はせ」天鶏鳥上「小氣味の悪いお爺ちや」

きさ-み 小君 子君 (名) なじみの遊女。(小夫(ココ)との對)蜻蛉「遊女「若菜が伯父にて候ひしが子きみにて候ひき」

きさ-み 故君 (名) 故人となりし人の敬稱。宇津保「俊蔭「こきみ」には天人もえまさらざりけるを、世習ひとり給へりけるこそはかしこけれ」同「こきみの遺言なれば」源氏「こきもの」紀は、明石の浦の海人の藻刈り給はば、明石の方はかりの覓えには劣り給はば、さらましし」

きさ-むる 清回 (自動マ四) 清ぎてめぐりゆく。こぎまはる。高「己藝米其利(ココ)見れどもあかず」源氏「同じ」高「にかくすがくすこぎめぐらん」いと人笑くなる船なしを弗あきたるべし」

きさ-もとす 清戻 (他動サ四) 清ぎてもとゝもどす。こぎかへす。夫木「記「月」「手」に手に船を清ぎもどす」

きさ-もゆひ 扱元結 摎元結 (名) 紙縒を長くよりて水にひたし、平にて縒じこきもとゆひ。本朝世事談綺正「摎元結。寛文の頃より起こる。紙縒を長く縒りて水に浸し、平にて縒を掛けて水を摎く故に、摎元結なり」

きさ-もる 清戻 (自動マ四) 清ぎてもとゝもどる。散木集「たまたまに出でてこぎ清ぎ行くほどに、ところ狭高しとてこぎもどるを見て」

きさ-やう 一故郷 古郷 (名) ふるさと。郷里。郷國。「遊歩色葉「古郷(ココ)」」遊歩色葉「故郷」「古郷」「遊歩色葉「故郷」」史記「「周必反故郷」「如衣錦夜行」」

きさやう-の-かぜ 故郷風 故郷の風。用明朝、天皇、職人盛「行「野御の御のやさしくも、故郷の風の北にいはえていなければ」

(諺)故郷には錦の袴を著て歸る 故郷に錦を飾るに同じ。盛衰記「行「遊」故郷には、錦の袴を著て歸るとぞ云ふ」「今度生國の下向に、錦直垂に石打の征矢「同」兎と蒙り候はん」

(諺)故郷忘じ難し 故郷のなつかしさは己伎奈久(ココ)もゆたけきかも」

忘れがたし。狂言鈍太郎「急いで戻らう。いや誠に、故郷忘じ難しとは、よう申したものでござる」蟬丸四「修行念佛他事もなし、されば故郷忘じ難し中略都に歸る」 王環詩雜「人情懷舊郷、客鳥思故林」

(諺)故郷へ錦を飾る 他郷に在りたるものが故郷に歸るには花やかに飾りて身の出世を示す。平家七、實盛最後「事の譬への候ぞかし、故郷へは錦を著て歸ると申す事の候へば、何か苦しう可候、錦の直垂を御召し候へかし」 南史劉之遴「卿母年德並高、故令卿衣錦還郷、盡榮養之理」

(諺)故郷へ花を飾る 前條に同じ。

こ-きやう 〜故京 古京 (名) ふるきみやこ。もとのみやこ。舊都。盛衰記廿四、開院主上遷御「故京に上ぼる嬉しさは、さる事に侍れど」

こ-きやう 〜古經 (名) 古代の經書。ふるき經典。漢書藝文志「禮古經五十六卷、出于魯淹中」 後漢書儒林「以古經校之」

こ-きやう 〜古鏡 (名) いにしへの鏡。ふるき鏡。杜甫詩「暗塵生古鏡、拂匣照西施」 古鏡記「臨終贈度以古鏡」

ご-きやう 〜五經 (名) 儒教にて、聖人の述作として尊重する五部の經書。即ち、易經・書經・詩經・春秋・禮記。源椎本「三史・五經の道道しき方を」 漢書宣帝紀「詔諸儒講五經」

ご-きやう 〜五境 (名) 佛語。五根の所取となり、五識の所緣となる色境・聲境(シヤウキヤウ)・香境・味境・觸境(ソクキヤウ)の五種の對境。五塵。五妙慾境。

ご-ぎやう 〜五行 (名) 一 支那の學說にて、天地間に運行して息まざる五つの元氣。即ち、木・火・土・金・水の稱。木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ、水は木を生ずとして、これを相生(サウジヤウ)といふ。又、木は土に尅(カ)ち、土は水に尅ち、水は火に尅ち、火は金に尅ち、金は木に尅つとて、これを相尅(サウコク)といふ。陰陽家にては、之を男女の性に配し、相生のもの配合すれば幸福あり、相尅のもの相合すれば災難來たるといへり。又、之を方位に當てて、木を東、火を南、土を中央、金を西、水を北とし、之を四時に配して、木を春、火を夏、土を四季の主、金を秋、水を冬とし或ひは之を五常の仁・義・禮・智・信、其の他種種のものに配していふ。盛衰記十八、文覺發心「黃鐘調と申すは中略五行の中には火・土也」 謠、淡路「天に五行の神ます。木・火・土・金・水是れなり」 書經洪範「五行。一曰水、二曰火、三曰木、四曰金、五曰土。水曰潤下、火曰炎上、木曰曲直、金曰從革、土爰稼穡。潤下作鹹、炎上作苦、曲直作酸、從革作辛、稼穡作甘」 同甘誓「有扈氏威侮五行、怠棄三正」 左傳昭公廿二年「天有三辰、地有五行」 春秋繁露五行相生「五行之義、木已生而火養之、金已死而木藏之、火樂木而養以陽、水克金而喪以陰、土之事天竭其忠」 參同契註「五行相尅、更爲父母」 荀子非十二子「五行五常、仁義禮智信也」 二 陣立の名。地形に因りて方・圓・曲・直・銳の五體に布きたる陣。評太宗李衛公問對 續紀廿三、天平寶字五年十一月丁酉「悉赴弓馬、兼調習五行之陣」 傾城島原蛙合戰三「水・火・木・金・土、五行之陣勢ありありと」 三 佛語。布施・持戒・忍辱(ニンニク)・精進・止觀の五つの稱。五門修行。 四【植】すべりひゆ(馬齒莧)の異名。

ご-ぎやう 〜御形 (名)【植】一 くそにんじん(黃花蒿)の異名。二 ははこぐさ(鼠麴草)の異名。年中行事祕抄正月「七種菜中略御形」

ごきやうごく-りう 〜後京極流 (名) 御家流(オイヘ)の一派。後京極攝政藤原良經の創めたるもの。

ごぎやう-さう 〜五行草 (名)【植】すべりひゆ(馬齒莧)の異名。

ごぎやう-せうゐん 〜五行少尹 (名) おんやうのすけ(陰陽助)の唐名。

ごぎやう-せつ 〜五行說 (名) 支那の漢時代に起こりたる學說。萬物を五行に配當して說明するもの。

ごぎやう-のゐん 五行尹 (名) おんやうのかみ(陰陽頭)の唐名。

ごきやう-はかせ 五經博士 (名) 五經の文義其の他に通曉せる博士。繼體紀「貢五經博士段楊爾」

ごぎやう-ぶつ (名)【植】ははこぐさ(鼠麴草)の異名。

ごぎやう-ほん 〜五行本 (名) 義太夫本の一。半枚に五行づつ印刷せる、大阪版の正式のもの。

ごぎやう-むすび 五行結 (名) 緒の結び方の名。

(ごぎやうむすび)

ごぎやう-やぶり 五行破 (名) 五行の順序を破壞すること。國姓爺後日合戰五「虛空を睨み、五行破りの祕文を唱へ、天地を責めて祈ると見えしが」

ごぎやう-よもぎ 御形蓬 (名)【植】ははこぐさ(鼠麴草)の異名。

こ-きやく 〜沽却 賣り放つこと。賣却。著聞十一「唐繪の屛風は實範傳へたりけるを、成章に沽却しにけるとぞ」

ご-ぎやく 〜五逆 (名) 次條に同じ。謠、弱法師「此の御經にひかれて、五逆の達多は天王記別を蒙り」 同、善知鳥「十惡を導き、五逆をあはれむ」 國姓爺三「八逆・五逆・十惡人」

ごぎやく-ざい 〜五逆罪 (名) 佛語。天理に違逆する五種の罪。即ち、父を殺すと、母を殺すと、阿羅漢を殺すと、和合僧を破ること、即ち妄語をなして四人以上集合して佛道を修する者を離間せしむると、佛身の血を出だすとの總稱。保元物語「判官殿を擊ち奉らば、五逆罪の其の一を犯すべし」 平家一、祇王「死期も來たらぬ母に身を投げさせんずる事は、五逆罪にてやあらんずらん」 涅槃經「殺父、殺母、自佛身出血、破和合僧、殺阿羅漢」 運步色葉「五逆罪ゴギヤクザイ」

こきやく-じやう 〜沽却狀 (名) 土地など賣却の證書。賣券。沽券。放券狀。

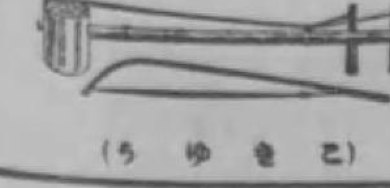
こきやくち-あんど 〜沽却地安堵 (名) あんど(安堵)三を見よ。

こきや-こう (名、副) こっきやっこうに同じ。大藏流狂言、二人大名「雞の蹴合ふ眞似をせい中略こきやこうこう」

こき-やなぎ (名)【植】こごめばな(珍珠花)の異名。

こ-きゆう 〜故宮 古宮 (名) もとの宮殿。ふるき宮殿。盛衰記七、成親卿流罪「唐の呂房と云ふ人、旅の空に行きしかども、故宮の月に慰みけり」 太平記四、呉越軍「越の國に歸って、住み來し故宮を見給へば」 謠「年を經る古宮の軒端、苦むして」

こ-きゆう 〜胡弓 鼓弓 (名) 樂器の名。形三味線に似て小さく、もとは三絃なりしが、今は四絃あり。馬の尾を絃にしたる小き弓にて摩して鳴らす。古く葡萄牙より渡來したるものなりといふ。傾城反魂香中「心細げな鼓弓の聲、あはれ催す相の山」 嫗山姥「三味線・鼓弓」


(こきゆう)

こ-きゆう 〜胡藭 (名)【植】せんきゆう(川芎)の異名。

こぎ-ゆく 漕行 (他動四) 漕ぎて進み行く。萬廿「あともひて許藝由久(コギユク)君は」 同廿「ぬばたまの夜あかしも船は許藝由可(コギユカ)な、みつの濱松まち戀ひぬらむ」

こ-きよ 〜故居 (名) もとのすまひ。古き住居。舊居。劉孝綽詩「故居猶可念、故人安可忘」

こ-きよ 〜故墟 (名) ふるきあと。故跡。廢墟。詩譜「成王封母弟叔虞於堯之故墟」

こ-きよ 〜虎踞 一 虎のうづくまること。又、其れに似たるかたち。二 一方に據り居て雄をふるふこと。

こ-ぎよ 〜枯魚 (名) ほしたる魚。ひもの。ほし魚。家語「枯魚銜索、幾何不蠹」 莊子外物「君乃言此、曾不如早索我於枯魚之肆」

ご-ぎよ 〜五魚 (名) 料理の語。鯛・鯉・鱸・鯔(コチ)・比目魚(ヒラメ)の稱。

こ-きよく 〜古曲 (名) 昔の樂曲。又は歌曲。鮑溶詩「征人歌古曲」

こき-よす 扱寄 (他動下二) かきよす。清正集「春風はやへたつ波の色にさへ、色こきよする井出の山吹」

こぎ-よす 漕寄 (他動下二) 漕ぎて近寄らす。こぎよらしむ。新後撰雜上「もみぢ葉のあけのそほ舟こぎよせよ、ここを泊りと君も見るまで」 新千載釋教「こぎよする便りならでは渡し舟、のりうけ難き我が身なりけり」

こぎ-よせる 漕寄 (他動下一) 前條の口語。

こぎ-よる 漕寄 (自動四) 漕ぎて近寄る。漕ぎて寄り合ふ。

こきら 〜拘耆羅 (名) くきら(拘耆羅)に同じ。

こきり (名) こきりこ(小切子)の略。浦島年代記雅宮七「ちやうちやらちあはは、走りこきりこきりや」 用明天皇職人鑑道行「隱れんぼ、走りこきりこきりや」

こきり (副) 一 かはゆらしく小きさまにいふ語。今宮心中道行「おれが殿御は日本おろかよ、唐物町にも稀な男の、ちよきりこきり小女房」 二 固き物の觸れ合ふさまにいふ語。

こきり (接尾) これかぎり。きり。「一遍こきり」

ごきり (副) こきり副二を强めていふ語。

こ-きりこ 小切子 (名) 放下僧の持ちあるくもの。竹に赤小豆など入れて作り、指先にて廻はし、又は打ち鳴らし、手玉に使ひ、種種の曲をなす。ちきし。嬉遊笑覽 七十一番歌合放下「月見つつうたふ放下のこきりこの、竹の夜聲のすみ渡るかな」 謠、放下僧「こきりこは放下にもまるる、こきりこの二つの竹の世世を重ねて」

こきりこ-をどり 小切子踊 (名) 放下僧の、こきりこを以てなす所作。

こ-きりど 小切戶 (名) 小き切戶。大藏流狂言、節分「忍ぶ小切戶がきりりとなるほどに、誰ぞよと思うて走り出て見たれば」

こ-ぎりふ 小切生 (名) 切生(キリフ)の一種。建治三年記十二月二日「相太守賢息御元服中略御野矢小切府、宇津宮下野前司」

こき-る 扱入 (他動下二) こきいる(扱入)の約。萬廿「しろたへの袖にも古伎禮(コキレ)」 同廿「池水に影さへ見えて咲き匂ふ、あしびの花を袖に古伎禮(コキレ)な」

こぎ-る 漕入 (自動四) こぎいる(漕入)の約。萬廿「沖つ波きそひ榜入(コギ)こ、あまのつり船」

こ-ぎる 小切 (他動四) 一 小く切る。小部分にしきる。二 ねぎる(値切)に同じ。狂言「價はこぎりますまい」

こ-ぎれ 小切 (名) 一 布帛などの切れはし。小片。斷片。二 こぎれもの(小切物)の略。

こぎれ-あきんど 小切商人 (名) 前條二を賣る人。

こ-ぎれい 小綺麗 (名、副) やや綺麗なること。丹波與作上「三十駄の馬方の、小歌が成って小奇麗な、聲のよいのをすぐられしも」 浮世風呂上「小ぎれいな男を亭主に持ちましたが」

ご-きれき 〜五紀曆 (名)〔歲・月・日・星辰・曆數の五項を紀す曆の義〕曆の一。支那唐の代宗の時、郭獻之等をして作らしめたるもの。本邦にては文德天皇の天安元年より清和天皇の貞觀四年まで、大衍曆と並用せり。文德實錄八、天安元年正月丙辰「依五紀曆經造之」 唐書曆志「代宗中略序題曰五紀曆」

こぎれ-もの 小切物 (名) 演劇の語。演戲上必用なる足袋・襷・手拭など衣服の附屬品の稱。こぎれ。

こぎ-わかる 漕別 (自動下二) 漕ぎ行きて其れと別かる。萬三「ともし火のあかしのおどに入らむ日や、榜將別(コギワカレナム)家のあたり見ず」 玉葉旅「泊りする一夜の契りこぎわかれ、おのがさまざま出づる船人」

こぎ-わく 漕分 (他動下二) 漕ぎてその間をわけゆく。夫木四「しかの浦に花のさざ浪こぎ分けて、釣りするあまや袖匂ふらん」

こぎ-わたる 漕渡 (自動四) 漕ぎて彼方へ越え渡る。萬七「あは島に許枳將渡(コギワタラム)と思へども、あかしのと波いまださわげり」 同廿「うなばらのかしこき道を、島傳ひい己藝和多利(コギワタリ)て」

こ-きん 〜古今 (名) ここん(古今)に同じ。謠、伏見「古今(コキン)妙文の詠をのべん」

こ-きん 〜古金 (名) 一 昔時、通用せし金銀貨幣、又は金貨。曾我虎磨下「大恩讓りの古金の月は、揚屋の藏に隱れ」 二 しやうとくきん(正德金)の異稱。金銀圖錄二、正用品「正德四年五月十五日、金銀の品、慶長の法の如くに成し返さるべきとの事にて、慶長金の位に改め鑄らる。添棟印等なし。是れを世に正德新金と云ふ、今是れを古金と云ふ」

こ-きん 〜古勤 (名) 古くより勤務すること。又、其の人。故參。賤孝環「古勤の人に音物をしたり」

こ-きん 〜胡琴 (名) 淸樂に用ふる樂器の一種。胴・棹共に竹にて造り、二絃にて、馬の尾を絃としたる弓にて摩擦して奏す。もと胡國より傳來せしものなりといふ。蘇軾詩「心知鹿鳴三、不及胡琴四」

こ-きん 〜庫金 (名) 庫の中にある金錢。五代史王景崇「取庫金奔迎高祖」

こ-きん 〜孤衾 (名) ひとりねのふすま、又、ひとりねすること。柳惲詩擣衣「孤衾引思緖、獨枕愴憂端」

こ-ぎん 〜古銀 (名) 昔時、通用せし銀貨。享保集成絲綸錄廿三「古銀・新銀入交、遣方、請取渡・兩替共、無滯可致通用候」 同四「新銀令出來、銀座より出之、世間之古銀と可引替候」

ご-きん 〜五金 (名) 金・銀・銅・鐵・錫の總稱。白居易詩「五金七寶相玲瓏」

こきん-おほばん 古金大判 (名) 享保以前發行の大判。(新金大判の對)

こ-きんかう 子銀行 (名)【商】親銀行より種種の便宜を受くる銀行。(親銀行の對)

こきん-かん (名)【植】きんかん(金橘)の異名。

こ-きんぎん 〜古金銀 (名) 一 昔時、通用せし金銀貨。二 しやうとくきんぎん

（正德金銀）の異稱。（往古金銀の對）貨幣通考「章廟の時、正德四年に至り、御遺言の趣きを以て、改造の令を出だされし也（中略）又是の時鑄造之幣、正德新金銀と呼び、又享保に至り、盛んに吹き繼ぎし故、享保金銀とも謂ふ。近世の俗には單に古金銀と唱ふ」

こきんぎん-くゎへい〔古金銀貨幣〕（名）昔時、通用せし金銀貨幣。古金銀。明治九年四月第五十七號布告贋造金銀銅貨紙幣等取扱規則第四條「古金銀貨幣贋造品は持主又は代理人の面前に於て斷截し直に其持主又は代理人へ還付すへし」

こきん-でんじゅ〔古今傳授〕（名）古今和歌集中の難語の解釋に關する祕傳の傳授。三木・三鳥などの類。東常緣より起こり宗祇を經て牡丹花肖柏に傳へたるを堺傳授といひ、肖柏より奈良の林宗二に傳へたるを奈良傳授といひ、宗祇より藤原實隆を經て細川幽齋に傳へたるを二條家傳といふ。

こ-きんばらげ（名）【植】たがらし（石龍芮）の異名。

こきん-ばらし〔古今帽子〕（名）こきんわた（古今綿）に同じ。

こきん-びな〔古今雛〕（名）古代雛の形を今樣のに折衷したるもの。玉眼入りの內裏びな。

こきん-ぶし〔古今節〕（名）元祿の頃、古今新左衞門といへる歌舞妓役者のうたひ始めたる小唄の節。（俚曲類纂）

こ-きんらん〔古金襴〕（名）古渡りの金襴。緯に平金絲にて模樣を織り出だせるもの。傾城酒呑童子四「古金襴の膝覆ひ」

こきん-わた〔古今綿〕（名）〔藤井古今といふ俳優より始まりたりといふ。（嬉遊笑覽）〕ふなわたばうし（船綿帽子）に同じ。わたばうし。產業袋五「丸綿此の頃殊の外大きなるあり、船綿・手ぼそといふ也。古今綿或ひは頰包とも云ふなり」

こく〔石・斛〕（名）一 我が國の量の名稱。升の百倍。斗の十倍。宇津保（國讓下）「よね十石」拾芥抄下末「十斗爲レ石」度量衡法第三條「石。百升」淮南子（說山訓）「升之不レ能レ大ニ於石一也、升在ニ石之中一」二 日本形の船舶の積量にて、十立方尺の稱。船舶積量測度規則第三條「日本形船の積量は十立方尺を以て一石とす」三 材木などの容積量にて、十立方尺の稱。四 鮭・鱒を數ふるにいふ語。鮭は四十尾を、鱒は六十尾を一石とす。

こく いちりゃう 石一兩 江戸時代、米相場にて、每石價一兩を中の價としていひし語。（俚言集覽）武備志二百卅、日本考「每ニ米一石ニ常價一兩、中國斛可ニ三石一」

こく〔刻〕（名）一 きざむこと。ちりばむること。彫刻すること。史記（始皇本紀）「金石刻、盡始皇帝所レ爲也」二 漏刻（ロウコク）の箭に刻みてある日盛。四十八あり。其の一は一時（トキ）の四分の一を表はす。雲圖抄裏書（御佛名次第）「初夜亥一刻打レ鐘」三 一晝夜を百分せる一の時刻の稱。一日を十二時とし、晝夜の長短によりて差あれども、平均一時は八刻三分の一にあたる。春分及び秋分は晝夜各五十刻、冬至は晝四十刻、夜六十刻、夏至は晝六十刻、夜四十刻なり。四 一晝夜十二時を十二支に配したる一時の三分の一の稱。上刻・中刻・下刻に分かち、すべて三十六刻あり。東鑑（廿一、建曆三年五月三日）「辰尅」

こく〔國〕（名）くに（國）に同じ。式部省式下「先引ニ東海道一國朝集使及郡司等一入也ニ立庭中一」宇津保（吹上上）「六十餘國を行ひありきけるを」

こく〔黑〕（名）くろき色。くろ。狂言（富士松）「青・黃・赤・白・黑、五色に問はらず」

こく〔穀〕（名）人の常食とする禾穀類。たなつもの。ごく。穀物。文德實錄（七、齊衡元年七月乙巳）「一伊蒲塞、斷レ穀不レ食」宇津保（俊蔭）「國滅びて、もろもろの衆生國土の人、こくにつかれし時ありき」禮記（曲禮）「馬不レ食レ穀」孟子（梁惠王上）「不レ違ニ農時一、穀不レ可ニ勝食一也」

こく〔殼〕（名）昆蟲などの外皮。から。甲殼。

こく〔轂〕（名）こしき（轂）に同じ。禮記（曲禮）「式視ニ馬尾一、顧不レ過レ轂」

こく を きしる 輾轂 こくげき（轂擊）に同じ。東鑑（十、建久元年十一月七日）「見物車輾レ轂立ニ河原一」

こく〔哭〕（名）哭すること。哭泣すること。

こく〔鵠〕（名）一【動】はくてう。おほとり。莊子（天運）「鵠不ニ日浴一而白」二 的の正中。まと。ほし。

（諺）**鵠を刻して鶩に類す** 虎を畫いて犬に類すに同じ。とら（虎）の條を見よ。後漢書（馬援傳）「龍伯高敦厚周愼、願汝曹效レ之（中略）效ニ伯高一不レ得、猶爲ニ謹勅之士一、所レ謂刻レ鵠不レ成、尙類レ鶩者也」

こ-く〔古句〕（名）むかしの句。古人の句。章碣詩（贈ニ蘇處士一）「烟月一時搜ニ古句一」

こく〔酷〕一 むごきこと。からきこと。殘忍。殘酷。史記（李斯傳）「嚴レ威、酷レ刑」二 はげしきこと。過激なること。

こく〔瘦〕（自動下二）やせほそる。おとろへ弱る。力なく見ゆ。無名抄「ただし、なかれぬるといふ言葉こそ、餘りこけすぎて、如何にぞや覺え侍る」

こく〔倒〕（自動下二）一 たふる。ころぶ。二 人の心に靡きて、戀ひ慕ふに至る。下文を見よ。色道大鑑「こくる、これも惚る心なり（中略）初めは何とも思はぬ女を、功者なる男のかかりて、其の男のしなし・いひなしにめでて、ひたひたと女の思ひつく所をこくるといふ。是れは物を立て置きて引くに、我が思ふやうにこなたへこくるやうの心也」

こく〔扱〕（他動四）一 かき落とす。しごきおとす。むしる。萬（八）「引きよぢて折らば散るべみ梅の花、袖に古寸（コキ）れつ染まば染むとも」枕（三）「稻といふもの多く取り出でて（中略）五六人してこかせ」二 片手にて握りて、片手にて挾みたるまま引き拔く。しごく。又、引きぬく。曾丹集「うばらこき手にとりためて、春の野の藤の若葉を折りてつかねん」齋宮女御集「御まへの藤をなん、しのびてこく人ありと聞かせ給ひて」

こく〔放〕（他動四）一 體外に出だす。はなつ。ひる。「屁をこく」和名（三）「霍亂之利（中略）比利久智（へ）」二 言ひ放つ。ぬかす。つく。卑しみいふ語。膝栗毛（四上）「脊中を流して下だせえといったら、はいとこいて、六十ばかりのばばあめが、たはしを持ってきやがって」

こぐ〔焦〕（自動下二）燒けて黑くなる。こがる。こげる。

こぐ〔漕〕（他動四）一 艣・棹にて船を進む。萬（三）「遊ぶ船には梶棹も無くてさぶしも、己具（コグ）人なしに」同（十八）「堀江には玉敷かましを、大君のみ船許我（コガ）むとかねて知りせば」二 居躍りをして、體を前後にふり動かす。

こぐ（他動四）根つきのまま引きぬく。根こぎにす。こず。狂言（富士松）「富士松とやらをばこいできた」

ごく〔曲〕（名）きよく（曲）に同じ。宇津保（樓上中）「琴調べて、ごくのめでたしといふを、折りかへし遊ばす」源（若菜下）「いはんや、多くのしらべわづらはしきごく多かるを」

ごく〔玉〕（名）たま。ぎよく。拾遺（雜上）「大貳國章、ごくの帶をかり侍りけるを、筑紫より上ぼり來て、かへし遣はすとて」

ごく〔穀〕（名）こく（穀）に同じ。「ごくつぶし」

ごく〔獄〕（名）一 未決又は已決の囚徒を監禁する所。ごくや。ひとや。牢屋。牢獄。監獄。牢。宇治拾遺（二）「獄に入れたりければ、僅かに十日ばかりありて死にけり」二 うったへ。訴訟。訟獄。易經（下經）「雷電皆至豐、君子以折レ獄致レ刑」詩經（國風）「誰謂女無レ家、何以速ニ我獄一」論語（顏淵）「片言可ニ以折一レ獄者、其由也與」

ごく〔御供〕（名）ごくもつ（御供物）の略。

ご-く〔語句〕（名）語と句と。ことば。又、ことばのきれめ。金史（王庭筠傳）「文藝頗佳、然語句不レ健」

ご-く〔後句〕（名）のちの句。次の句。（前句の對）謠（三井寺）「或る詩（中略）此の後句なかりしかば」

ご-く〔五苦〕（名）佛語。一 迷界の五道は苦にして樂にあらざること。卽ち、諸天苦・人道苦・畜生苦・餓鬼苦・地獄苦の稱。二 人間界の八苦の中・生苦・老苦・病苦・死苦・愛別離苦の稱。觀無量壽經「濁惡不善五苦所レ迫」

ごく〔極〕一 極めたるもの。最上のもの。狂言（鬮罪人）「宇治邊に知音を持ったが（中略）極を三袋くれた（中略）いかにそなたが茶ずきでも、極を二服とえ飲むまいぞ」大藏流（止動方角）「茶比べに參りまするが、折節詰めたがござらぬに依って、極を一袋わたしに入れて貸してくだされい」二 このうへなく。もっとも。きはめて。

ごく（接尾）競爭することをいふ語。くら。こくら。ごっこ。（京阪の方言）「にらみごく」「言ひごく」狂言（鬮罪人）「汝が賴うだ者と某と、勝負ごくをしたれば」

こく-あく〔國惡〕（名）自國の惡事。左傳（僖公元年）「諱ニ國惡一禮也」

こく-あく〔酷惡〕殘酷にして暴惡なること。甚だしき暴惡。漢書（宣帝紀）「或以ニ酷惡一爲レ賢、皆失ニ其中一」

ごく-あく〔極惡〕極めて惡しきこと。この上なき惡逆。榮華（鳥邊野）「下は極惡の衆生も」天神記（三）「踏んづ叩いつ泣き喚く、極惡見る目も忌ま忌まし」

ごくあく-にん〔極惡人〕（名）極めて惡しき人。極惡なる人。極重惡人。

こくあ-は〔國阿派〕（名）僧國阿を祖師とする時宗の一派。京都洛東の雙林寺を本山とす。教義は他派と異ならず。

こく-あん〔國安〕（名）國家の安寧。一國の治安。明治十二年一月內務省達注意報告規則第九條「國事國安に關する件」同（三）「國安に關する未發」

こく-あん〔黑闇〕一 あんこく（暗黑）に同じ。二 こくあんぢごく（黑闇地獄）の略。淨土和讃「三塗のこくあん開くなり」

ごく-あん〔獄案〕（名）訟獄のしらべがき。因話錄「岳武穆獄案」

こくあん-じん〔黑闇神〕（名）こくあんてんにょ（黑闇天女）に同じ。

こくあん-ぢごく〔黑闇地獄〕（名）佛語。地獄の一。黑山間の黑闇なる處にて、罪人を苛責するところ。

こくあん-てん〔黑闇天〕（名）佛語。次條の略。砂石集（七）「女人來たる。容顏醜陋にして見にくし。何なる人ぞと問ふ。我れをば黑闇天といふ。其の故は至る所に不祥・災害有りといふ」

こくあん-てんにょ〔黑闇天女〕（名）（梵 Kālarātri）閻魔天の后妃。黑夜天。

こく-い〔刻印〕（名）彫刻したる印。運歩色葉「木印・刻印（コクイ）」

こく-い〔極印〕（名）こくいん（極印）に同じ。

こく-い〔黑衣〕（名）こくえ（黑衣）に同じ。禮記（月令）「孟冬之月（中略）天子（中略）衣ニ黑衣一、服ニ玄玉一」

こくい の さいしゃう 黑衣宰相 こくえのさいしゃう（黑衣宰相）に同じ。こくえ（黑衣）の條を見よ。

こく-い〔國醫〕（名）こくしゅ（國手）に同じ。

こく-い〔刻意〕心を碎くこと。意志を苦しむること。苦心。莊子（刻意）「刻意尙行、離レ世異レ俗」

ごく-い〔極意〕（名）一 おくのて。奧義。奧旨。甲陽軍鑑（下十二）「山本勘介流、城取のごくいなり」吉野忠信（三）「文が物言ふ世のならひ、好色・極意の關門」二 至極の意味。終極の意義。

こく-いう〔國憂〕（名）國家のうれへ。國家の災難。國患。

こく-いう〔國有〕（名）國家の所有。耕地整理法第十一條「國有に屬する道路堤塘」

こくいう-ざいさん〔國有財產〕（名）【法】國家の所有に屬する財產。公有財產と收益財產とに分かつ。各條を見よ。

こくいう-ち〔國有地〕（名）國有の土地。耕地整理法第十三條「國有地に編入したる土地の面積」

こくいう-りん〔國有林〕（名）國有の森林。官林。森林法第二條「國有林」

こくいう-りんや〔國有林野〕（名）國有の森林と原野と。國有林野法「國有林野」

こくい-せい〔國醫生〕（名）大寶令の制、國學の醫生。

こく-いん〔黑印〕（名）一 黑肉にて捺したる印影。二 室町時代又は江戸時代に、令書の證として用ひし黑色の印。又、其の印を捺したる文書。すみつき。若風俗「五百石の御こくいん頂戴し」

こく-いん〔國印〕（名）王朝時代、諸國の國府におきて用ひし印形。公式令「諸國印方二寸」

こく-いん〔極印〕（名）一 金銀・器物等の僞造を防ぎ、且つ品質證明のため、物品に打記する印影、又は文字。こっくい。こくい。貨幣法第十三條「貨幣にして模樣の認識し難きもの又は私に極印を僞し其の他故意に毀傷せりと認むるものは貨幣たるの效用なきものとす」明治三十年十月勅令第三百七十四號第二條「政府の極印を施せる一圓銀貨幣」二 きはめのしるし。證據。三 あばた（痘痕）の隱語。御伽名代紙衣「顏見せぬは奧ゆかしけれど、必ずそんな奧樣の御面體には、こくいんの多きものぞかし」

こく-いん〔刻印〕印に彫刻すること。又、その彫刻したる印。こくい。史記（留侯世家）「趣刻レ印、先生因行佩レ之矣」

こくいん-づき〔極印附〕（名）極印の附きてあること。又、そのもの。たしかなることにいふ。

こくいん-やく〔極印役〕（名）江戸時代、銀座の役名。銀貨に極印を打つことを掌るもの。金銀御吹替次第（二編）「極印役」

こく-う〔穀雨〕（名）〔春雨の至りて百穀を生ずる義〕二十四氣の一。春の氣節中の最後なるもの。陽曆の四月二十日に當たる。孟郊然詩「帆得ニ樵風一送、春逢ニ穀雨一晴」孝經緯「淸明後十五日、斗指レ辰爲ニ穀雨一、言ニ雨生ニ百穀一」

こ-くう〔虛空〕（名）一 天と地との間の空なる所。そら。空間。平家（三、頼豪）「桁（ケタ）・梁（ウツバリ）・柱などは、虛空に散在し」太平記（十三、龍馬）有

射三巻「八月十七夜の月殊に晴れ渡って、虛空清明たるに」㊁佛語。無相・無色なること。續千載釋教「志賀の波虛空無我とはたたねども、開けば心ぞ澄みわたりける」㊂氣のつかぬこと。茫然として心のそらなること。目的なきこと。うっかり。甲陽軍鑑廿「善惡のわかりもなく、人の譽むるに乘り、こくうに知行を與ふれば」㊃忌憚なき暴行。前後の思慮なきふるまひ。むてっぱう。むやみ。甲陽軍鑑廿「仕合せよき時こくうにおごり、うかへたる顏にて人に慮外致し候」

こくう むしゃう〔虛空無性〕 虛空(コクウ)と無性との重言にて意を強むる語。めったむしゃう。

こくう むてん 前條に同じ。小町物語上「さきはいづく虛空むてんに歸る雁」

こくう むりゃう〔虛空無量〕 前條に同じ。

こくう やたら 虛空矢鱈 前條に同じ。

ごくう 御供 (名) 神佛にそなふる物。ごくもつ。ごく。東鑑六、文治二年六月十五日「毎日調味御供事」運歩色葉「御供(ゴクウ)」川中島合戰三「殊に仰山な、神に御供供ゆる樣に」

こくう-かい〔虛空界〕(名) 佛語。無形・無相にして、一切所作の業を受け容るる眞如の境界。盛衰記廿二、留原「不生・不滅の曲は、定めて虛空界の風に通じ」

こくう-ざう (名)【動】こくざう(穀象)の異名。

こくう-ざう〔虛空藏〕(名) 佛語。こくうざうぼさつ(虛空藏菩薩)の略。東鑑十四、建久五年六月廿八日「造東大寺中略二菩薩四天王像等、宛御家人可致造立中略虛空藏」

こくうざう-ぐもんぢほふ〔虛空藏求聞持法〕(名) 佛語。虛空藏菩薩を本尊として修する行法。盛衰記「眞言の大法を傳受せり中略其の後、虛空藏求聞持法を修めんとて」

こくうざう-ぼさつ〔虛空藏菩薩〕(名) 佛語。菩薩の名。右に劍を持ち、左に如意寶珠を持つ。大悲・利他の無邊なること恰も虛空を藏するが如く諸願を滿たすといふ。虛空藏菩薩神呪經「南无呵嘍那虛空藏菩薩、願以大悲」

(こくうざうぼさつ)

こくうざう-ゐん〔虛空藏院〕(名) 佛語。胎藏界曼荼羅の中の一院。中央を虛空藏菩薩として、二十八尊あり。

ごくう-しょ 御供所 (名) 社寺に附屬して、御供を調ふる所。神廚。東鑑六、文治二年六月十五日「建立六閒御供所屋一宇」

ごくう-すゐ 御供水 (名) 神佛にそなふる水。

こくう-ちだい 穀打臺 (名) 穀物の藁を手に把り、此れに打ちつけて實を落とすもの。

ごくう-でん 御供田 (名) 御供の料を穫る田地。謠曲淡路「此の御田は當社二の宮の御供田にて御座候」曾我虎磨下「植ゑ廣げたる御供田」

ごくう-ばこ 御供箱 (名) 神佛の御供物を入るる箱。

こくう-もの 虛空者 (名) 虛空㊂、㊃なる人。

ごくうれう-しょ 御供料所 (名) 御供の料を供する土地。東鑑一、治承四年十月十六日「以相模國桑原郷爲御供料所」

こく-うん〔國運〕(名) 一國の運命。國歩。「國運隆盛」

こく-うん〔黒雲〕(名) くろくも。謠錦「黒雲一むら立ち來たって」漢書天文志「日出時、有黒雲狀如焱風」

こく-うんも〔黒雲母〕(名)【鑛】くろうんも(黒雲母)の異名。

こく-え〔黒衣〕(名) ㊀黒き色の著物。㊁僧侶の著物。すみぞめのころも。すみぞめ。緇衣。太平記十一、金剛山寄手等被誅「皆黒衣を脱がせ、法名を元の名に改めて」

こくえ ごめん〔黒衣御免〕 武家の出家したる者に、幕府より、墨染めの衣の著用を許可すること。常照愚草「一跡を子に渡し、隱遁の身體にて諸家へ參會の事中略黒衣御免之事、面目の至り」

こくえ の さいしゃう 黒衣宰相 僧にして政治に參與するもの。通鑑宋文帝「宋文帝以慧琳道人善談論、因與議朝廷大事、遂參權要中略有黒衣宰相可謂冠屨失所矣」

こく-えい〔黒影〕(名) 黒きかげ。かげぼふし。

こく-えい〔黒翳〕(名) 眼球などのくろき陰翳。本草「空青又治黒翳覆瞳」

こくえう-せき〔黒曜石〕(名)【地】流紋岩の一變種。暗褐色若しくは暗綠色乃至黒色、玻璃質なり。介殼狀の斷口を有し、宛然麥酒瓶の破片を見るが如し。本邦、各地に之を產す。

こく-えき〔國益〕(名) 國家の利益。

こく-えん〔黒烟〕(名) くろき色のけぶり。くろけむり。庾肩吾詩「風前細塵起、月裏黒烟生」

こく-えん〔黒鉛〕(名)【鑛】結晶狀をなす炭素の一種。るつぼ・鉛筆の心・鐵器の塗料などとして用ふ。石墨。

こく-おん〔國恩〕(名) 其の國に生まれて其の生を遂ぐる恩。國家の恩。柳宗元文「思報國恩、獨惟文章」

こく-おん〔國音〕(名) ㊀其の國人に固有なる音聲。くになまり。謝莊詩「奪國音于中賓、遠方聲於遐表」㊁我が國語のよみごゑ。(字音の對)

こく-か〔國家〕(名)【法】一定の土地にて、統治組織を有する人類の團體。統治權の主體。くに。十訓上「爲國家の臣」太平記三、天下怪異「國家の安危、只此の一擧に可有候也」老子「國家昏亂有忠臣」易經繫辭「治而不忘亂、是以身安而國家可保也」書經立政「其惟吉士、用勵相我國家」

こくか の かべ 國家壁 國家の藩屏。盛衰記四十、唐皮小烏「人甲冑を著せし時は、專ら國家の壁と思ひて、我が物の想ひをなさじ」

こくか の ちゅうせき 國家柱石 一國の重任を擔ふ大臣。

こく-か〔國歌〕(名) ㊀國家の儀式の際、奏樂にのぼせて歌ふべきものと定められたる歌。卽ち、我が國の君が代の歌、佛蘭西國のまるせいゆ・の歌の類。㊁わか(和歌)に同じ。

こく-か〔轂下〕(名) 輦轂の下。王城のある土地。漢書谷永傳「執憲轂下」

こく-か〔穀價〕(名) 米穀の直段。穀物のあたひ。後漢書光武紀「水旱蝗蟲爲災、穀價騰躍、人用困乏」

こく-か〔穀稼〕(名) 稼穡すること。農事。謝靈運文山居賦「鼓山野草木水石穀稼之事」

こく-か〔告暇〕(名) 官吏の、暇を賜はりて歸休すること。韋航紀談「患背疽乞告暇」

こく-か〔刻下〕 このごろ。ただいま。目下。現時。曾我九「日は雲中にうつる、月は刻下に傾く」

こく-が〔國衙〕(名) ㊀國司が其の政務を取り扱ふ所。運歩色葉「國衙(コクガ)」㊁こくりやう(國領)に同じ。東鑑

二「毎國衙庄園被補守護地頭者」同四、元曆二年八月十三日「云國衙云庄園、如元可令委附國司領家之狀、所仰如件」盛衰記廿八、没行者「西海運上の米穀、國衙・庄園を云はず兵粮米のために貞能點定しけり」

ごく-が〔穀蛾〕(名)【動】昆蟲類中、鱗翅類の一種。體は小形、長さ二分、黃白色にして翅は細長く、長き緣毛を有す。前翅は白色・暗褐色又は黒色の斑紋あり、後翅は小なり。口吻は不完全にして單眼なし。幼蟲は體細長にして白黃、長さ三分許り、粗毛を被り、八對の脚を有し、穀物中に棲息して穀粒を食害す。

こく-かい〔國界〕(名) 國と國との境界。くにざかひ。國境。漢書匡衡傳「郡國定國界、上計簿更定圖」晉書扶風王駿「以民戸在國界者封」

こくかいうきたい-せつ〔國家有機體說〕(名)【法】國家の性質に關する學說の一。國家を以て土地・人民及び政府より成立する一箇の有機體と說くもの。これに生物的有機體となす說と、民法の法人の如き一種の公共體となす說とあり。

こく-かう〔國交〕(名) 國と國との交際。國際。明治三十二年法律第七十號「領事官の管轄に屬する刑事に關し國交上必要あるとき」戰國策秦「重樗里疾而使之者、將以爲國交也」

こく-かう〔國香〕(名) ㊀これとならぶもののなきかをり。一國に冠たる匂ひ。左傳宣公三年「以蘭有國香、人服媚之如是」㊁蘭の花の雅稱。范成大詩「但知愛國香、此外付烏有」

こく-がう〔國號〕(名) 國の名稱。王朝の稱號。史記五帝本紀「自黄帝至舜禹、皆同姓、而異其國號、以章明德」

ごくがう-おん〔極好音〕(名) 佛語。佛の八音の一。聽者の厭くことなきもの。

こくか-がく〔國家學〕(獨 Staatswissenschaft)(名) 國家の起源・沿革及び其の性質・組織・狀態・作用等を攷究する科學。記述的國家學・實際的國家學及び理論的國家學の三種に分かつ。各條を見よ。

こくか-きくわん〔國家機關〕(名)【法】國家が統治權の行使のために設けたる機關。

こく-がく〔國學〕(名) ㊀我が國の文物・典章を研究する學問。みくにのがく。和學。皇學。(漢學・洋學の對) ㊁王朝時代、京畿以外の諸國に設けて、郡司の子弟を教育せし學校。㊂支那の古代にて、輦轂の下、又は諸侯の居城ある地に設けし學校。國の大學。禮記學記「古之教者家有塾、黨有庠、術有序、國有學」

こくがく-しゃ〔國學者〕(名) 國學㊀に通達する人。和學者。皇學者。

こくがく-せい〔國學生〕(名) 國學㊁の學生。郡司の子弟より取りてこれに充つ。その人員は國の大・上・中・下によりて別あり。

こくか-けいざい〔國家經濟〕(名)【經】公經濟の一。國家の行ふ經濟。卽ち、國家の財政。

こくか-けいさつ〔國家警察〕(名)【法】警察の一。廣く國家一般の利益に關するもの。(地方警察の對)

こくか-けういく〔國家教育〕(名)【教】㊀國家にて施行する教育の總稱。㊁國家主義に基きて箇人に施す教育。

こくか-けつがふ〔國家結合〕(獨 Staatenverbindungen)(名)【法】國家と國家とが國際法上又は國法上或る種の結合關係を有するもの。其の國際法上或る種の結合關係を有するものを國際法上の國家結合といひ、同盟・國家連合及び保護國の三種に分かち、其の國法上或る種の結合關係を有するものを國法上の國家結合といひ、聯邦及び物上連合の二種に分かつ。各條を見よ。結合國家。(單一國家の對)

こくか-じげふ〔國家事業〕(名) 國家の經營する事業。國家的事業。

こくか-しゃくわいしゅぎ〔國家社會主義〕(英 State-socialism)(名)【經】社會主義の一。國家をして其の政策上に、或る程度まで社會主義の制度を適用せしめ、以て社會問題を解決せんとするもの。

こくか-しゅう〔國家衆〕(名) くにしゅう(國衆)に同じ。籾井日記「國家の衆は一人も召し連れなく、御手廻り許りにて候」

こくか-しゅぎ〔國家主義〕(英 Nationalism)(名) ㊀【經】國家全般の利害を攷究するを專一とし、重きを各箇人の休戚に置かざる經濟政策上の主義。㊁【倫】自己の係屬する國家の福利・安寧を保護・增進するを、人生の行爲の目的とする主義。

こくか-しゅけん〔國家主權〕(名)【法】しゅけん(主權)に同じ。

こくかしゅけん-せつ〔國家主權說〕(名)【法】國家の主權は國家にあり、君主は其の機關に過ぎずと唱ふる學說。(君主主權說の對)

こくかてき-けういく〔國家的教育〕(名) こくみんけういく(國民教育)に同じ。

こくかてき-じげふ〔國家的事業〕(名) こくかじげふ(國家事業)に同じ。

こくか-どくりつ-けん〔國家獨立權〕(英 Right of independence)(名)【法】國家が內治・外交共に他國の拘束を受けずして、獨立に其の主權を行使する權利。國外主權。

こくか-はふ〔國家法〕(獨 Staatsrecht)(名)【法】㊀公法の一。國家統治の組織、及び其の作用に關する法規。憲法と行政法とに分かつ。各條を見よ。國法。㊁こくはふがく(國法學)に同じ。

こくか-ばんのうしゅぎ〔國家萬能主義〕(英 Collectivism)(名)【經】貧富の甚だしき懸隔を防ぐために、經濟上の重要なる事業は總べて國家にて經營し、箇人に放任せしむべからずとする主義。

こくか-もくにんせつ〔國家默認說〕(名)【法】慣習が慣習法となる理由、及び時期に關する學說の一。永く人民間に行はれたる慣習は、國家の默認によりて法となると說くもの。

こくか-れんがふ〔國家連合〕(英 Confederated states)(名)【法】國家結合の一。二箇以上の國家が、條約により、一定の政務を共同して施行するために久遠を期して連合するもの。此の連合は、當事國の合意によりて變更・廢止することを得。卽ち、西曆千八百十五年より六十六年までの獨逸連合の類。

こく-かん〔酷寒〕(名) きびしきさむさ。極寒。

こく-かん〔國漢〕(名) 國語と漢文と。

こく-かん〔國幹〕(名) 治國の根本。左傳襄公卅年「子皮怒之曰、禮國之幹也、殺有

穢鴯莫大焉」

こく-がん 黒雁 (名)【動】鳥類中、游禽類の一種。全身灰黑色にして、頭頸より胸腹部は一層黑色に、尾筒は白し。本邦に產す。

ごく-かん 極寒 (名) きびしきさむさ。又、一歲中最も寒き時。運歩色葉「極寒ゴッカン」北史叙讃「隆冬極寒」

こくかん-ぶん 國漢文 (名) 國文と漢文と。

こく-き 黒旗 (名) 黑色のはた。くろはた。

こく-き 國旗 (名) 其の國を表彰する旗。即ち、我が國の日の丸の旗の類。船舶法第二條「日本の國旗」

こく-き 國基 (名) 國家の基礎。國のいしずゑ。國のもとゐ。國礎。左傳昭公十三年「仲尼謂子產、於是行也足以爲國基矣」

こく-き 國記 (名) 其の國の歷史。北史魏孝文帝紀「改祈國記、依紀傳體」

こく-き 國忌 (名) こき(國忌)に同じ。盛衰記四十四宮人曲「二十九日國忌なりければ、御神樂被止」

こく-き 國器 (名) 國を治むる任に堪ふる器量。又、其の器量ある人。韓非子難言「公孫座言國器、反爲悖」史記晉世家「晉公子賢、而困於外久、從者皆國器、此天所置」

こく-き 斛器 (名) 米穀を量る器。ます。古事談二「斛器は方櫃を差して、石を括ってさげておもしにて、跨木に懸けて、於穀倉院國國米をば被納けり」

こく-き 黒器 (名) 黑きいれこの椀。古事談二「黑器と云ふものに、みそうづの毛立ちたる一盃と、薯蕷の燒きたる二筋とを持ちて來て奉れば」

こく-き 克己 私欲を抑制すること。論語顏淵「克己復禮爲仁」

こく-ぎ 國儀 (名) 國家の儀式。易經上觀「觀國之光、利用賓于王、注居近得位、明習國儀者也、故曰、利用賓于王」

こく-ぎ 國議 (名) 一國の重要なる會議。後漢書廿八馮衍傳論「與參國議、分均休咎」

こく-ぎ 國技 (名) 其の國特有の技術。其の國人の趣味を發揮せる技藝。

こく-きう 國舅 (名) 君主の外戚。東觀奏記「國舅鄭宣莊不納租」

こく-きう 黒球 (名) 黑色のたま。

こく-ぎう 黒牛 (名) 黑色のうし。列子「黑牛生白犢瑞也」

こくき-しうかん 克己週間 (名) 救世軍に歸依する人人が、其の資金を得るため、一年の中、特に克己して金錢を貯へ、又は喜捨を乞ふ一定の週間の稱。

こくき-しゅぎ 克己主義 (名)【倫】禁慾主義と制慾主義との總稱。

こくき-しん 克己心 (名) 克己する意思。「克己心に乏し」

ごくき-ぢ 極喜地 (名) 佛語。くわんぎぢ(勸喜地)に同じ。

こく-きふ 哭泣 一聲を立てて泣くこと。なきさけぶこと。莊子齊物「夢飮酒者旦而哭泣、夢哭泣者旦而田獵」史記鄒世家「鄕人皆哭泣悲之、如亡親戚」二支那にて、親族の死を弔ひて泣きさけぶ禮。哭。左傳昭公廿五年「哀有哭泣、樂有歌舞」禮記曲禮「祭祀之禮、居喪之服、哭泣之位、皆如其國之故」

こく-きふ 刻急 嚴急にして深刻なること。史記酷吏傳「用刑刻急」

こく-きやう 國境 國竟 國疆 (名) 國と國との境界。くにざかひ。國界。皇室典範第四十三條「皇族國疆の外に旅行せむとするとき」禮記奔喪「望其國竟哭」蜀志張嶷傳裴注「折衝外禦、鎭保國境」

こ-くぎやう 小供饗 (名) 供饗の小形のもの。親長卿記文明十二年二月「丞相小四方・衝重勸亞相已下小公卿也」

こくきやう-ぜい 國境稅 (名)【法】くわんぜい(關稅)に同じ。

こく-ぎやく 酷虐 いたく虐待すること。殘酷に苦しめなやますこと。詩經疏「共公之政教、甚酷虐於民」

こく-きん 國禁 (名) 國法上の禁制。周禮秋官士師「五禁、中略三曰、國禁」

こく-きん 黒金 (名)【鑛】せきたん(石炭)の異名。

こく-く 刻苦 いたく心力を勞してつとむること。苦勞を積むこと。宋史孔文仲傳「少刻苦問學、號博洽」

ごく-く 獄苦 (名) 獄中のくるしみ。又、地獄の苦患。賀古敎信七墓廻五「文字の數、八八六十四佛と現じ、父の獄苦をまぬがれしは」

こく-ぐう 酷遇 むごくとりあつかふこと。虐待。酷待。

こく-くそ 穀糞 (名) 穀物を食ひて出だす糞。宇治拾遺十一「穀斷ちの屎はいかやうにかあるらん中略穀屎を多く痢りおきたり。怪しと思ひて」

こく-くわ 國華 (名) 國の光華。國の名譽。くにのはな。國光。國語「以德榮爲國華」

こく-くわ 國花 (名) 一其の國にて最も貴重する花。即ち、我が國の櫻の花、支那の牡丹の花、佛蘭西國の百合の花の類。二あうくわ(櫻花)の異稱。

ごく-くわ 極果 (名) 佛語。〔至極せる證果の義〕至極究竟の果(ツ)。大乘の佛果、小乘の無學果の類。「無上涅槃の極果」

こく-くわい 國會 (名) 一法律案・豫算案等を議決するために、主として民選議員によりて組織せる合議制の國家機關。一院制と二院制とあり。議會。明治十四年十月十二日勅諭「明治二十三年を期し議員を召し國會を開き以て朕か初志を成さんとす」二ていこくぎくわい(帝國議會)の俗稱。

こく-ぐわい 國外 (名) 一國の領域の外。(國內の對)

こくくわい-ぎじだう 國會議事堂 (名) 國會の議事の開かるる建物。

こくくわい-ぎゐん 國會議員 (名) 國會を組織する議員。

こくぐわい-しゅけん 國外主權 (名)【法】こくかどくりつけん(國家獨立權)に同じ。(國內主權の對)

こく-くわう 國光 (名) 一一國の民情・風俗等の狀態。國風。易經上觀「六四、觀國之光、利用賓于王」二國の光榮。國の名譽。國華。又、國の威光。

ごくくわうじやう-てん 極光淨天 (名) 佛語。くわうおんてん(光音天)に同じ。今鏡上「極光淨といふ天より、一人の天人生まれて、大梵王となる」

こく-くわん 國患 (名) 國家のうれひ。國家の災難。國憂。戰國策魏「今王亡地數百里、亡城數十、而國患不解」

ごく-くわん 極官 (名) 此の上なき高官。きよくくわん。故實拾要十「攝家、極位、極官、家業」

ごく-くわん 獄官 (名) 牢獄の官吏。

明律「獄官・獄卒・牢囚敢禁文狀者不坐」

こく-くん 國君 (名) 一國の君主。國王。易經上師「用行師、終有大敗、以其國君凶」禮記曲禮「國君撫式、大夫下之」左傳僖公廿四年「國君而讎匹夫、懼者甚衆矣」

こく-くん 國訓 (名) 我が國にての漢字の訓(ヨ)みかた。

こく-くん 國勳 (名) 國家に對する勳功。魏文帝文帝紀「野績不越廟堂、戰多不踰國勳」江淹文「國勳必書」史記「不謬讀」

こく-ぐん 國郡 (名) くにとこほりと。類聚三代格廿「國郡官司、無力禁止」拾芥抄中末「本朝國郡」

こくぐん ぼくてい 國郡卜定 大嘗會の神饌に供する新穀を納むる悠紀・主基の國郡をうらなひ定むること。代始和抄「國郡卜定は二月より九月に至るまで、八箇月の中は每月其の例あり。皆卽位以後の事也」

こく-げ 國解 (名) 古へ諸國より太政官又は所管に上つる場合に用ふる公文書。類聚三代格二「太政官符。應令神戶百姓護鴨上下大神宮邊川原幷野事。右得山城國解偁」今昔廿「國國の民此れを歎き悲しみて、國解を以て公に此の由申し上げたるに」著聞廿「國解を書きて、落としたりける帶を具して、國司に奉りたりけり」

ごく-げ 極下 きはめて下等なること。最も劣れること。(極上の對) 運步色葉古「極下」

こく-けい 酷刑 (名) 殘酷なる刑罰。

こく-けう 國敎 (名) 一其の國の文敎。孟郊詩贈藤「海葬國敎異、天聲冬冷冷」二國家が國民の信奉すべきものと認定し、其の敎務を國務の一部として取り扱ふ宗敎。

こく-げき 國劇 (名) 國民の趣味を發揮せる演劇。

こく-げき 轂擊 〔車のこしきとこしきとが擊ち合ふ義〕車馬の往來のしげきにいふ語。史記蘇秦傳「辯者轂擊於外」同蘇秦「臨菑之途、車轂擊、人肩摩」

こく-げつ 黒月 (名) 滿月より後の十五日間の稱。(白月の對) 平家三有王「白月・黑月の替はり行くを見ては、三十日を辨へ」蘇軾詩「黑月在濁水、何曾不清明」楞嚴經「明還日輪、暗還黑月」

ごく-げつ 極月 (名) 十二月の異稱。しはす。ごくつき。臘月。

こく-けん 國憲 (名) 一國家の法規。國法。漢書蕭望之傳「釋之典刑、國憲以平」二國家の根本法。憲法。敎育勅語「國憲を重し國法に遵ひ」

こく-けん 國權 (名) 國家の政權。國家の權力。戰國策楚「國權輕於鴻毛」左傳昭公廿二年杜注「失國權」史記淮南王安傳「擅國權、侵奪民田宅」

こく-けん 黒圈 (名) くろき圈點。

こく-げん 刻限 (名) 一限定したる時刻。定刻。定時。保元新院御遷幸「宣旨の刻限移り候ひなば、後勘いかが」大藏狂言止動方角「茶の湯などといふものは、刻限の極まったものぢや」二とき。ころ。時刻。時間。運步色葉「刻限コクゲン」諸鑰引「撞鐘中略夜晝の刻限を告ぐること」狂言見物左衞門祭の刻限は何時でござる。何と、巳午の刻ぢや」

こくげん-づけ 刻限附 (名) 急速に取り扱はしむべき文書などに、其の取扱の刻限を記入、又は附記しあること。刻づけ。

こく-こ 國庫 (名) 國家の收入・支出を統一する所。又、財產權の主體たる場合の國家の稱。大日本帝國憲法第六十二條二項「國庫の負擔となるべき契約」

こく-ご 國語 (名) 一其の國民に特有なる言語。くにことば。邦語。二我が國、特有の言語。

こくご-がくかう 國語學校 (名) たいわんさうとくふこくごがくかう(臺灣總督府國語學校)の略。臺灣總督府國語學校規則「國語學校」

こくこ-かりいれきん 國庫借入金 (名)【法】政府が國庫金の出納上、一會計年度間にて一時不足を生じたるとき、相當の利子を附して、國庫金取扱銀行たる日本銀行より借り入るる金額。其の金額は、大藏省證券の發行額と合はせて、該年度の大藏省證券發行の最高額を超ゆるを得ざるものとし、一年度の内に完濟すべきを通例とす。

こくこ-きようしんきん 國庫供進金 (名) 官國幣社の經費として、國庫より每年各社に供進する金額。其の總額は、天災・事變のために要する臨時費用の外、明治四十九年度に至るまで、每年二十二萬圓以內とし、其の各社に配附する金額は、建物の大小・社格・社入金の多寡等を標準として、內務大臣の定むべきものとす。官國幣社會計規則第十五條「各社共通金として國庫供進金より積立つへき額は其の一分五厘とす」

こくこ-きん 國庫金 (名) 國庫の所有に屬する金錢。會計法第三十一條「國庫金の取扱」

こくこきん-とりあつかひじよ 國庫金取扱所 (名) 一國庫金の保管・出納を取り扱ふ所。即ち、金庫。二轉じて、金庫の事務を取り扱ふ日本銀行の本店・支店又は出張店の稱。預金規則第七條「大藏卿は中略國庫金取扱所をして預り金受渡を取扱はしむることあるへし」

こく-こく 刻刻 (副) 居ねむりして首を動かすさまなどにいふ語。

こく-こく 刻刻 其の時どき。一刻づつ。「時時刻刻」

ごく-ごく (副) 液體の、勢ひよく流るる音にいふ語。

ごく-ごく 極極 (副) ごく(極)の重言。きはめて。もっとも。ひどく。至極。

こくこ-さいけん 國庫債券 (名) 一【經】臨時必要の經費を支辨するために發行する短期の國債證券。二我が國の國債の一。明治三十七八年日露戰役の際、軍費補充のため、前後五回に亙り、國內にて發行せし短期の債券、及び明治三十七年三月政府が烟草製造業者の事業を買收せる補償に充つるため、同年より同四十年まで發行して交付せし債券の總稱。烟草專賣法第八十九條「國庫債券」明治三十六年勅令第二百九十一號「國庫債券」同三十七年法律第一號「國庫債券」第一回乃至第五回國庫債券發行規程「國庫債券」

こくこさいけん-せいりこうさい 國庫債券整理公債 (名) 我が國の國債の一。第一回の國庫債券を整理するため、明治四十一年三月に發行し、第一回國庫債券と引換へに其の提出者に交付せるもの。國庫債券整理規程「國庫債券整理公債」

こくこ-しべん 國庫支辨 (名) 國庫より其の費用を支辨すること。

こくこじゅんびきん-せいど 國庫準備金制度 (名) 國家の緩急に應ぜんため、國庫に一定の準備金を積み置く制度。

こくごちょうさいいんかい 〜國語調査委員會（名）文部大臣の監督の下に、國語に關する事項を調査する委員會。委員長・委員を以て組織し、主任・書記の調査員を置く。大正二年廢止せらる。國語調査委員會官制「國語調査委員會」

こくごぶ 〜黒業（名）佛語。あくごふ（惡業）に同じ。（白業白業の對）盛衰記「死者ハ父母・兄弟・妻子・朋友・親族並ニ寶財・黒業・相親疎ニ來相親疎ニ離ルベシ」

こくこほ 〜國庫簿（名）國庫の計算に入るべき一切の現金の出納を登記する原簿及び補助簿の三種に分かつ。大藏省官制「國庫簿ノ登記ニ關スル事項」

こくこほじょ 〜國庫補助（名）國庫より其の費用を補助すること。

こくさ 小草（名）ちひさき草。をぐさ。重之集「山城の淀のこくさをかりそめにきて、紫濃れぬとはらちみざらなん」

狭丟「吹きまよふ風のけしきも知らぬかな、菰の下なる陰のこ草は」新六帖「こ草つむ野澤の小田の海水、打ちとけてこそ袖はぬれけれ」

こくさく （名）【植】ひめはぎ（遠志）の異名。

こくさい 〜國祭（名）其の國のおほやけの祭日。喪が四方拜・元始祭・紀元節・先帝の祭・春季皇靈祭・神武天皇祭・秋季皇靈祭・天長節・神嘗祭・新嘗祭等の總稱。舊刑法法「大記令節國祭ノ日」

こくさい 〜國宰（名）❶一國の大臣。宰相。盛衰記「攻寇ノ後國宰之使ヲ遣シ」❷こくし（國司）に同じ。

こくさいいんかい 〜國際委員會（名）文部大臣の監督の下に、國語に關する事項を調査する委員會。委員長・委員を以て組織し、主任・書記の調査員を置く。大正二年廢止せらる。國語調査委員會官制「國語調査委員會」

こくさいいんしょう 〜國際印章（名）國際郵便爲替約款に基きて、一國と他國との間に發送する郵便。

こくさいいんかせ 〜國際印花（名）國際郵便爲替約款に基きて、一國と他國との間に發送する郵便。

こくさい 〜國際（名）國家と國家との交際。又、其の關係。

こくさいさい 〜國債（名）國家の公債。其の起債の權所より して內國債と外國債とに分かち、其の償還の期限より して永遠國債と有期國債とに分かち、其の起債事件の確定せると否とより して確定國債と流動國債とに分かち、其の起債權の行動より して强制國債と任意國債とに分かち、其の行政上より して行政國債と財政國債とに分かつ。各條を見よ。大日本帝國憲法第六十四條「國債ヲ起シ及豫算ニ定メタル國債ノ元利償還ノ費ヲ除クノ外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲スハ帝國議會ノ協賛ヲ經ヘシ」

こくさいしょ 〜黒業（名）【植】あらあら（黒業）の異名。

こくさいしょ 〜穀業（名）【植】ひよどりじやうご（蜀羊泉）に同じ。

こくさいしょ 〜蔬業（名）【植】澤瀉科、蔬蛇（ヘビ）屬の一の草本。おもだかに似て小く、花は青白し。葉は企用に供すべくして、其の味ひ美なり。新撰字鏡。

こくさい 〜告祭（名）まつること。詩經「貫汝常受之以告祭于汝先祖有年受恩之人」

こくさい 〜國財（名）❶國家の所有に屬する財產。國幣。荘子「寓至貴國財ヲ、以富國財ヲ」❷國民の富力。國富。

こくさいゆうぎ 〜國際友誼（名）國交上の相互の友誼。

こくさいゆうびん 〜國際郵便（名）國際條約に基きて、一國と他國との間に發送する郵便。

こくさいゆうびんかせ 〜國際郵便爲替（名）國際條約に基きて、一國と他國との間に發送する郵便爲替。

こくさいりょう 〜國際裏書（名）【商】內國にて發行したる國債證券を外國市場に賣り出だすに、一定の期限・政府が其の證券の裏面に、其の利息・償還期限等を記入すること。此の裏書により、該證券の元利金の支拂を外國貨幣にて受け取ることとなる。

こくさいりゅうがう 〜國際運河（名）【法】條約により國際に通航の自由を與ふる運河。即ち、すえず運河の類。

こくさいかいほう 〜國際海法（名）【法】海法の一。內外國の海法の適用範圍を定むるもの。

こくさいかうが 〜國際航河（名）【法】こくさいかうが（國際河流）に同じ。

こくさいかかく 〜國際價格（名）【商】國際貿易により定められたる商品の價格。

こくさいかはせ 國際爲替（名）【商】ぐわいこくかはせ（外國爲替）に同じ。

こくさいかりう 〜國際河流（名）【法】二國以上の領域を貫通し、其の關係國が、共同に商船航行の自由を有する河流。即ち、らいん河・とな河・こんごー河の類。國際航河。

こくさいきょく 〜國債局（名）大藏省の一局。國債の募集・借入れ・償還・整理・利子・國債簿の登記・國債證券・大藏省證券及び借入證書の裏書・國債證券・大藏省調製・年金・恩給及び諸藏の給與・公共團體の公債に關する事項を掌る所。大藏省官制「國債局」

こくさいかいぎ 〜國際會議（英 International congress; International conference）（名）【法】三國以上に跨がる國際問題を議定するために、各國の全權委員の催す會議。公會と會議との二種あり。

こくさいかんけい 〜國際關係（名）國交上の關係。

こくさいかんれい 〜國際慣例（名）國際上に行はるる慣例。

こくさいけいざい 〜國際經濟（名）【經】經濟の一。經濟行爲の範圍が內外國に及ぶもの。

こくさいけいさんしょ 〜國債計算書（名）大藏大臣の調製して總決算に添へ帝國議會に提出すべき文書。當該年度日末に於ける國債の種類・現高・當該年度に償還し、及び仕拂ひたる各種國債の元高・利子、及び最近五箇年度間に於ける各種國債消滅の形況を示すもの。會計法「國債計算書」會計規則「國債計算書」

こくさいけいほう 〜國際刑法（英 Internationales strafrecht）（名）【法】箇人の犯罪行爲に關し、內外國刑法の適用範圍を定むる法規。

こくさいこ 〜國際湖（英 International lake）（名）【法】二國以上の領地に圍繞せられたる湖。外海より航行し得るものと否とあり。前者は國際河流の國際法の原則を適用せられ、後者は通例各關係國に分屬す。

こくさいこうあん 〜國際公安（佛 International ordre public international）（名）【法】一國の安寧秩序が外國人の行爲に關係する場合の稱。（國內公安の對）

こくさいこうほう 〜國際公法（英 Public international law）（名）❶【法】國際團體に加入せる國家と國家との權利・義務に關する準則。（國際私法の對）廣地平線に於ける權者及び約者の狀態改善に關する條約・海戰に關する國際公法の條約・三帝條に關する國際公法の

國との間に行はるる郵便爲替。

こくさいらんがき 國際裏書（名）【商】內國にて發行したる國債證券を外國市場に賣り出だすに、一定の期限・政府が其の證券の裏面に、其の利息・償還期限等を記入すること。此の裏書により、該證券の元利金の支拂を外國貨幣にて受け取ることとなる。

こくさいりゅうがう 〜國際運河（名）【法】條約により國際に通航の自由を與ふる運河。即ち、すえず運河の類。

こくさいかいほう 〜國際海法（名）【法】海法の一。內外國の海法の適用範圍を定むるもの。

こくさいかうが 〜國際航河（名）【法】こくさいかうが（國際河流）に同じ。

こくさいかかく 〜國際價格（名）【商】國際貿易により定められたる商品の價格。

こくさいかはせ 國際爲替（名）【商】ぐわいこくかはせ（外國爲替）に同じ。

こくさいかりう 〜國際河流（名）【法】二國以上の領域を貫通し、其の關係國が、共同に商船航行の自由を有する河流。即ち、らいん河・とな河・こんごー河の類。國際航河。

こくさいきょく 〜國債局（名）大藏省の一局。國債の募集・借入れ・償還・整理・利子・國債簿の登記・國債證券・大藏省證券及び借入證書の裏書・國債證券・大藏省調製・年金・恩給及び諸藏の給與・公共團體の公債に關する事項を掌る所。大藏省官制「國債局」

こくさいわさき 〜國際會議（英 International congress; International conference）（名）【法】三國以上に跨がる國際問題を議定するために、各國の全權委員の催す會議。公會と會議との二種あり。

こくさいわけい 〜國際關係（名）國交上の關係。

こくさいわれい 〜國際慣例（名）國際上に行はるる慣例。

こくさいけいざい 〜國際經濟（名）【經】經濟行爲の範圍が內外國に及ぶもの。

こくさいけいさんしょ 〜國債計算書（名）大藏大臣の調製して總決算に添へ帝國議會に提出すべき文書。當該年度日末に於ける國債の種類・現高・當該年度に償還し、及び仕拂ひたる各種國債の元高・利子、及び最近五箇年度間に於ける各種國債消滅の形況を示すもの。會計法「國債計算書」會計規則「國債計算書」

こくさいけいほう 〜國際刑法（英 Internationales strafrecht）（名）【法】箇人の犯罪行爲に關し、內外國刑法の適用範圍を定むる法規。

こくさいこ 〜國際湖（英 International lake）（名）【法】二國以上の領地に圍繞せられたる湖。外海より航行し得るものと否とあり。前者は國際河流の國際法の原則を適用せられ、後者は通例各關係國に分屬す。

こくさいこうあん 〜國際公安（佛 International ordre public international）（名）【法】一國の安寧秩序が外國人の行爲に關係する場合の稱。（國內公安の對）

こくさいこうほう 〜國際公法（英 Public international law）（名）❶【法】國際團體に加入せる國家と國家との權利・義務に關する準則。（國際私法の對）廣地平線に於ける權者及び約者の狀態改善に關する條約・海戰に關する國際公法の條約・三帝條に關する國際公法の

一般規則」❷次條の略。明治二十六年勅令第九十三號「國際公法」同三十六年勅令第六十八號「國際公法」

こくさいこうほうがく 〜國際公法學（名）國際公法の法理を研究する學問。國際公法。

こくさいこんいん 〜國際婚姻（名）【法】これを行ふ人又は土地が二箇以上の國家に渉る場合の婚姻の稱。

こくさいさいばんしょ 〜國際裁判所（英 International court）（名）國際紛議を審理せしむるため、國際條約により設けたる裁判所。

こくさいしき 〜極彩色（名）❶きはめて鮮麗なる彩色。濃彩。傾城反魂香「打ちて打ちもせぬ令砂子、極彩色に劣らじと」蒔門松「紅葩の子、極彩色の越後町」❷こいげしやう（濃化粧）を喩る語。

こくさいじけん 〜國際事件（名）國と國との間に生ずる事件。

こくさいしほう 〜國際私法（英 International private law）（名）❶【法】國際法の一。外國に關する私法上の事件につき內外國何れの私法を適用すべきやを定めたるもの。❷次條の略。明治二十六年勅令第九十三號「國際私法」同三十六年勅令第六十八號「國際私法」

こくさいしほうがく 〜國際私法學（名）國際私法の法理を研究する學問。

こくさいじむきょく 〜國際事務局（名）國際條約により定められたる國際上の事務を共同に處辦せしむるため、其の關係國の合意により派遣したる委員を以て組織する事務局。即ち國中央局・萬國郵便聯合事務局の類。萬國國際電信業所・萬國郵便聯合事務局・萬國電信聯合事務局。

國際間に行はるる遺憾。

こくさいだんたい 〜國際團體（英 Community of nations）（名）【法】若干の獨立國が相互に國際公法の拘束を受くることを承認して、事實上組織せる團體。國際社會。

こくさいだんぱん 〜國際談判（名）國際事件に關したる談判。

こくさいちやく 〜國際地役（英 International servitude）（名）【法】一國が條約又は默認により、他國のために領土權の行使を制限し、其の領域內にて常然なし得べき行爲をなさず、又は常然禁止し得べき行爲を、他國又は他國人に許すこと。

こくさいつうかつ 〜國際通貨（英 International coinage）（名）國際間に非通なる貨幣。

こくさいつうしやう 〜國際通商（名）ぐわいこくぼうえき（外國貿易）に同じ。

こくさいていこうけん 〜國際條件（名）【法】國際關係上或る事項を國家間にて條件にかからしむること。內閣官制「外國條約及重要なる國際條件」

こくさいていやく 〜國際條約（名）ていやく（條約）に同じ。公式令「國際條約を發表するときは上諭を附して之を公布す」

こくさいてがた 國際手形（名）【商】國際間に輸關・流通する手形。

こくさいてがたほう 國際手形法（名）【法】內外國手形法の適用範圍を定むる法律。

こくさいでんしん 〜國際電信（名）一國と他國との間に傳送せらるる電信。萬國電信條約書附屬國際業務規則「國際電信」

こくさいとうてい 〜國際登錄簿（名）公債國債を登錄する帳簿。甲乙の二種あり。甲種國債登錄簿は日本銀行本店に備へ、證券を發行せざるものを登錄し、乙種國債登錄簿は國債事務取扱店に備へ、權者の請求により、特に證券を發行したるものを登錄す。國債規則「國債登錄簿」

こくさいはさん 〜國際破產（名）【法】一箇の破產が國際上の關係を惹き起こす場合の稱。

こくさいほう 〜國際法（英 International law）（名）【法】❶國際公法及び國際私法の總稱。❷こくさいこうほう（國際公法）に同じ。

こくさいはんけん 〜國際版權（英 International copyright）（名）【法】國と國との間に條約を締結して、互ひに彼我の國民の版權を保護すること。

こくさいぶほんる 〜國際複本位（英 International bimetallism）（名）【經】貨幣本位制度の一。數國が共通の金銀複本位制度を採用するもの。

こくさいぶん 〜告祭文（名）きいぶん（祭文）に同じ。

こくさいふんぎ 〜國際紛議（名）【法】直接の外交談判によりて解決することはざるに至りたる國と國との意見の衝突。國際紛爭平和的處理條約「列國間の關係に於て兵力に訴ふることを成るべく制止せしむか爲記名國は國際紛議を平和に處理することに其の全力を竭さむことを約定す」

こくさいぶんけつ 〜國際分業（名）【經】場所的分業の一。各國が各其の有利なる貨物を生產して互ひに交換すること。（國內分業の對）

こくさいふんそう 〜國際紛爭（名）【法】こくさいふんぎ（國際紛議）に同じ。國際紛爭平和的處理條約（昭2.2.1）一般の平和を維持することに協力せむことを切に希望し全力を挙して國際紛爭を平和的に處理することを努力するに決し」

こくさい-くんしんきってけん 國際返信切手券（名）郵便物受取人に返信用として送附する切手。明治四十年選信省令第四十五號「國際返信切手券」郵便切手及收入印紙賣捌規則（明40）「國際返信切手券」

こくさい-ぼ 〜國債簿（独 Staatsschuldbuch）（名）登錄公債の形式による國債の權利を記名・登錄するために大藏省令（明41.3）「國債簿」「國債簿に關する事項」

こくさい-ぼうえき 〜國際貿易（英 International trade）（名）〜わいこくぼうえき（外國貿易）に同じ。

こくさい-ほくちゅうしんけんじょ 〜國捕獲審檢所（名）【法】交戰國の捕獲審檢所が中立国産又は敵國臣産の捕獲事件に貢献なしたる裁定の上訴を審檢すること。

こくさい-でんしん 〜國際電信（名）無線電信の方法を利用する國際電信。國際無線電信條約（明37）「國際無線電信」

こくさい-れんらく 〜國債連絡（名）明治六年大藏省中に置き、國債に關する事務を掌らしめし一局。明治十年國債局と改稱す。

こくさう 〜國喪（名）國民全體の喪。即ち、天皇・三后などの喪。

こくさう 〜國葬（名）國民全體の行ふ葬式。

こくさう 〜國葬（名）國費をもつて

こくさう 〜國造（名）くにのみやつこ（國造）に同じ。

こくさう 〜蔚草（名）【植】こくさい（蔚草）の異名。

こくさう 虚空藏（名）こくうざう（虚空藏）に同じ。

こくさう 〜穀象（名）【動】昆蟲類中、精選類の一種。長さ一分許りにて、黑褐色。頭は象鼻に突出す。本邦に普通なる害蟲にして、米・麥を食害す。こくうざう。こくさうむし。

こくさう-でん 〜國造田（名）王朝時代、國造に班ち給ひて、其の國内の神事に供せし田地。續紀（天平元年）「飯高元年」「以國造田中町地稲、永充選王已下五位已上卅人、試習内外射之資」

こくさう-むし 穀象蟲（名）【動】こくさう（穀象）の異名。

こくさう-ゐん 〜穀倉院（名）太藏に同じ。拾芥抄（中末）「穀倉院（中末）」

こくさう-ゐん 〜穀藏院（名）王朝時代、畿内諸國の調錢及び上納米を納めおきし所。穀倉院。源氏物語「所所の饗など、くらうかさ、こくさう院など、おほやけごとにつかふまつれる」古事談「米をば穀藏院より召し寄せて」

こくさうゐん-の-べったう 穀倉院別當（名）穀倉院の長官。仲資王記（大治元年）「安倉院別當」東鑑（文治元年）「穀倉院別當」

こくさう-ぶつき 小草生月（名）陰暦二月の異稱。藏玉（十二月異名）「二月小草生月」

こくし 〜國子（名）【植】こくさう（黑三稜）の異名。

こくし 〜國士（名）國中のすぐれたる人士。「左傳（哀公元年）「以報國士之恩」」戰國策「智伯以國士遇臣」

こくし 〜國史（名）❶其の國の歴史。又、其の國の史官。「得矢之適こ左傳（昭元年）「國史之記」必書」年」❷我が國の歴史。

こくし 〜國志（名）其の國の歴史。其君臣比「其行事」

こくし 〜國司（名）❶大化改新以後、日本六十六國及び二島に置きたる地方官。守（カミ）・介（スケ）・掾（ジョウ）・目（サカン）等の職員あり。くにのつかさ。じゅりょう。「萬葉四「佐人夫任上京國司」」「國の沙汰治」「國司者自公家」「稱任在國者國司」「國司は守護重任らして、國司は輕し」太平記「國には守護重任らして、國司は輕し」❷足利時代、特に三國司の稱。下女を見て「小姫」

こくしの-ちょう 國司廳（名）國司を置り執ふ所。國衙。

こくし 〜國師（名）❶奈良朝時代の僧官の職名。諸國に分置して其の國の僧尼を監督し、經典を講說し、國家の祈禱を なしたるもの。後、諸師と改む。續紀（天平三年）「任諸國國師」後紀（大同元年）「改諸國國師」❷天皇の子に

そ。「左傳（昭元年）「左氏有七十二君子」」「漢書（賈誼傳）「太師賈誼之祖、大諫賈偃如黑子之著面」」「東信文「地作黑子、域編雲丸」」

こくし 〜國子（名）古音、支部にて三線教員國子。「國子、公卿大夫之子弟」

こくし 〜國士（名）國中のすぐれたる人士。「左傳（哀公元年）「以報國士之恩」」「國士不足以事、矣、而多士遇臣」」戰國策「智伯以國士遇臣」

こくし 〜國史（名）❶其の國の歴史。「得矢之適こ左傳（昭元年）「國史之記」必書」年」❷我が國の歴史。

こくし 〜國志（名）其の國の歴史。「漢書（賈誼傳）「常覽國志考」其君臣比「其行事」」

こくし 〜國司（名）❶大化改新以後、日本六十六國及び二島に置きたる地方官。守（カミ）・介（スケ）・掾（ジョウ）・目（サカン）等の職員あり。くにのつかさ。じゅりょう。「萬葉四「佐人夫任上京國司」」「國の沙汰治」「國司者自公家」「稱任在國者國司」「國司は守護重任らして、國司は輕し」太平記「國には守護重任らして、國司は輕し」❷足利時代、特に三國司の稱。下女を見て「小姫」

こくしの-ちょう 國司廳（名）國司を置り執ふ所。國衙。

こくし 〜國師（名）❶奈良朝時代の僧官の職名。諸國に分置して其の國の僧尼を監督し、經典を講說し、國家の祈禱をなしたるもの。後、諸師と改む。續紀（天平三年）「任諸國國師」後紀（大同元年）「改諸國國師」❷天皇の子に

こくしき 常山（名）【植】雲谷（ウンコク）科、常山屬の落葉灌木。幹の高さ五六尺乃至一丈。葉は廣楕圓形、光澤を有し、透明の小點あり、て、惡臭を放つ。五月頃、淡綠色の花を開き、異性雌雄異株、雌花は葉腋花序に排列し、雄花は葉腋に密生す。果實は球なり。我が國、各地の山野に自生す。藥用に供すれども有毒植物なり。

こくしき 〜告朔（名）❶かうさく（祝告朔）に同じ。名目抄「祝告朔（正四・七・三）」❷支那の古音、諸侯が天子より受けたる曆を祖廟に藏め、朔日毎に告げて施行すること。周禮（春官）「諸侯之祖廟、朝事、邦國（注天子頒朝于諸侯）、諸侯藏之祖廟、月朔、聽朔于邦國（注天子頒朝于諸侯）、諸侯皆聽朔于廟、而受行之」

こくしきの-ひつじ 告朔餼羊（名）告朔の儀式に、祖廟に供へたる いけにへの羊。虛禮といへども省なき事は之を保存する方、全く無きよりはまさりとの譬へにいふ語。論語八「子貢欲去告朔之餼羊、子曰、賜也、爾愛其羊、我愛其禮」

こくしき 〜刻削（名）❶きざみけづること。彫刻。「韓非子（說林）「刻削之道、鼻莫如大」」❷殘忍なること。「史記（秦始皇）「剛毅戾深、薄恩而好利、天下苦秦法、刻削毒、乞恩和義」」

こくさく-のう 〜穀作農（名）穀物の耕作を主とする農業。又は其の農夫。

こくさん 〜國產（名）其の國の產物。又、我が國の產物。「國產奬勵」

こくさんりょう-くろ 〜黑三稜科（名）【植】くりわ（黑三稜）の異名。

こくし（名）國土の英字か、又は、穀子にて、穀くず雜穀をいふか。「內理さまおのくわしにて、事はよりもかけじ」こくしそうしやう種種のなりもの」

こくし 〜黑子（名）❶はくう。ほくろ。

「民忠不人、續四日田」

こくし-がっこう 〜國師號（名）國師の稱號。相國寺供養記「尊師、當住佛日宮光明寺」

こくし-かん 〜國子監（名）❶だいがくのじょう（大學寮）の唐名。❷だいがくのじょう（大學寮）の唐名。

こくじき 〜斛食 佛語。方形の木函に飯を半く盛りて、三界萬靈の牌前に供へ施すこと。又、そのもの。勤修百丈清規「斛食供養」

こくし-げんさいしゃ 〜國史現在社（名）六國史中に見えたる神社。明治四年五月十四日太政官布告「國史現在の諸社」

こくし-さいしゅ 〜國子祭酒（名）だいがくのかみ（大學頭）の唐名。

こくし-しげふ 〜國子司業（名）だいがくのすけ（大學助）の唐名。

こくし-しゅほ 〜國子主簿（名）だいがくのさくわん（大學屬）の唐名。

こくし-じょげう 〜國子助教（名）じょけう（助教）の唐名。

こくし-すがた 國司姿（名）國司の姿。國司となりたる姿。宇治拾遺「受領の國くだるまねせさせて御覽あるべし」中世文藝館の國司姿こそをかしかりつれ」

こくし-だい 〜國司代（名）國司に代はりて其の國內の政事を掌る職。荷狹國守護職次第「國司代若狹又太郎」

こくじ-たんてい 〜國事探偵（名）國事犯に關する探偵。

こくしつ 〜黑漆（名）❶黑色のうるし。又、其のうるしにて塗りたるもの。著名なるは、「黑漆唐櫃一合」義經記「黑漆三尺九寸有りけるこくしつの太刀に、蒲の皮の尻鞘入れてぞはきたりける」源賢「公

書」之於黑」

こくし 〜告示（名）❶一般に告げ知らすること。殊に、官公署が或る事實を一般に告げしらすること。「ふれわたし」ふれ。「國繕法「令」」❷爵位は之を官職に告示すること。「同「爵位」」❸爵位は之を以て善惡の第三者に對抗することを得す」荀子「仁者好告示人」「後漢書（賢）「即移書告示」」❹明治十九年二月以前の法令の一。關係者にのみ示すを目的とするもの。現今の處分令に當たる。

こくし 〜刻字 文字を刻すること。又、その刻したる文字。神仙傳「觀其刻字眞迹、乘雲之石窟也」張籍詩（秋日）「贈得寶刀」

こくじ 〜酷似（名）極めて似よりたること。「酷肖」「祭書（顧實）「卿宇之之外明、酷似其身」」

こくし 小串（名）的の一種。紙を四つに折り、六寸の串に挾みて立つるもの。「延喜式」「庭訓往來（月）「笠懸・小串之令」」

こくし 〜獄司（名）監獄の事務を司る役人。牢役人。

こくし 〜獄史（名）ひとやのつかさ（のさくわん（囚獄令史）の唐名。

こくし 〜獄死 獄中にて死すること。牢死。

こくしう 〜國讎（名）國家の仇敵。「周禮（秋官）「調人」凡和讎、國君之讎眥、父之讎、國讎」「公羊（定元）「國君之讎、國讎」」

こくしゅ 〜刻舟（名）劍を落として舟を刻む故事。呂氏春秋（察今）「有楚人涉江、其劍自舟中墜、遽刻其舟、曰、是我劍之所從墜、舟已行矣、而劍不行、求劍若此、亦惑矣」詩（衛）「載馳載驅、歸唁衛侯、驅馬悠悠、言至於漕」

言を傳へ、其の法師。又、一國の師。「一國師」「太平記」「盛衰記（三）「朝の國師國師」」「四海の依賴」「國師」「運歩色葉集「國師」」「太平記」「盛衰記（三）「國師」」❷朝廷より賜ふ稱號。死後に贈らるる佛日宮光明國師」相國寺供養記「尊師、當住佛日宮光明國師」

こくし 〜國資（名）國家の資產。大藏省官制（明3）「國資の運用出納に關する事項」

こくし 〜告詞（名）神に告ぐる辭。朝野類要「告詞有四六句者有散之文者」並書於告軸」

こくじ 〜國事（名）直接に國家に關する政治に關する事件。又、國內の事務。一國の政事。東鑑（文治元年）「可早建留守井在廳下知、先例有十月、限、國事敎、正動事」明治十二年一月內務省達注意報告規則「國事國安に關する件」禮記「曾子問「國有大事、主人立、君官、主事、不言國事」」同「國事」辨其人立、君官、主事、不言國事」」

こくじ 〜國璽（名）國家を表徵する印。方面尺二寸九分の金村にて大日本國璽の五字の篆文を刻す。內大臣これを尙侍し、國書・全權委任狀・條約批准書・外國派遣官吏委任狀・外國領事認可狀及び動書・三等勳章・功五級以上の勳記等に鈐するもの。內大臣及內大臣藏書官制（明3）「御璽國璽を尙藏す」

こくじ 〜國字（名）❶我が國の國の文字。❷我が國にて造りたる文字。即ち、辻・畑などの類。

こくじ 〜黑字（名）くろく書きたる文字。黑字。玉海「黑字爲之明、宗之門四字」

こくじ 〜告辭（名）告ぐることば。告示の文。「左傳（僖元年）「水昏正而畢、告辭、史乃

こくじ 〜告示（名）❶一般に告げ知らすること。殊に、官公署が或る事實を一般に告げしらすること。ふれわたし。ふれ。「國繕法「令」」❷爵位は之を官職に告示すること。「同「爵位」」❸爵位は之を以て善惡の第三者に對抗することを得す」荀子「仁者好告示人」「後漢書（賢）「即移書告示」」❹明治十九年二月以前の法令の一。關係者にのみ示すを目的とするもの。現今の處分令に當たる。

こくじ 〜刻字 文字を刻すること。又、その刻したる文字。神仙傳「觀其刻字眞迹、乘雲之石窟也」張籍詩（秋日）「贈得寶刀」

こくじ 〜酷似（名）極めて似よりたること。「酷肖」「祭書（顧實）「卿宇之之外明、酷似其身」」

こくし 小串（名）的の一種。紙を四つに折り、六寸の串に挾みて立つるもの。「延喜式」「庭訓往來（月）「笠懸・小串之令」」

こくし 〜獄司（名）監獄の事務を司る役人。牢役人。

こくし 〜獄史（名）ひとやのつかさ（のさくわん（囚獄令史）の唐名。

こくし 〜獄死 獄中にて死すること。牢死。

こくしう 〜國讎（名）國家の仇敵。「周禮（秋官）「調人」凡和讎、國君之讎眥、父之讎、國讎」「公羊（定元）「國君之讎、國讎」」

こくしゅ 〜刻舟（名）劍を落として舟を刻む故事。呂氏春秋（察今）「有楚人涉江、其劍自舟中墜、遽刻其舟、曰、是我劍之所從墜、舟已行矣、而劍不行、求劍若此、亦惑矣」詩（衛）「載馳載驅、歸唁衛侯、驅馬悠悠、言至於漕」

こくしゅ 〜國守（名）王朝時代、

諸國に盈きて、書記及び雜務を掌らしむる役。三代實錄貞觀十六年正月廿二日「土記文二人、中務省式、仲國掌令、勅、迦之若無、國底、探、求郡內」

こくじゃう 國情 國狀 (名) 國の內情。又、國の情態。左傳襄公十年「國病、盍請、勿、出於宮、君若爲其如國情、輪、楚」

こくじゃう 國常 (名) 國家の常に守るべき道。左傳僖公三十年「毋或如、叔孫僑如、欲、隧、國常、湯、賦、公室」

こくじゃう 國城 (名) くにとしろ。井筒業平河內通「經文の通り、國城・業平子が所望」

こくしゃう 國聖 (名) 佛語。至極の聖者。仰ち、佛の稱。

こくしゃう わくゎう 國聖和光 佛が和光同塵をなし給ふこと。盛衰記「國聖和光之砌、大權垂跡之地」

こくじゃう 極上 このうへなきこと。最も勝れたること。最上。運歩色葉集「極上、狂言、殊」手前に茶をきらしました。御貸しなされて下、だされ」

こくしぎう-がん 黑隙眼 (名) ぇこひ(疫鰐)の異名。

こくしぎう-じょ 國掌所 (名) 國掌の事務を取る所。

こくしぎう-じる 濃漿汁 (名) 料理の一種。芋・大根・椎茸・干瓢・豆腐の五品を味噌汁にてよく煮たるもの。

こくしやくでん 國寫田 (名) 王朝時代、諸國にて六年以上計帳を通ちさざる日、百日間を限度として公用に充てたる不輸租田。國司は其の地子を取りて、諸料・諸雜に充てり。

こくしゅ 國主 (名) ❶一國の元首。天子。くにのあるじ。國君。盛衰記「三國誌「朝恩の下に居ながら、朝家を蔑如すし、一門國務を執り行ひ、國主を蔑如すし、皆鏡一天照す御神もみもすそ川の同じ流れ、ことはつながら時の國主を守り給はす恩、ことはつよきなめりとぞ」李陵文「報主大名」の略。武家諸法度「國主可、撰、政務器用事」何城島原籠合戰「國主・城主・公家・高家にも望み次第」

こくしゅ 國守 (名) ❶國司の長官。くにのかみ。かみ。類聚三代格「太政官符、應、親王任、國守事」上總國・常陸國・上野國」❷別條に同じ。

こくしゅ 國手 (名) 「國を醫する名手の義」名醫の稱。又、國華の名人。國語「吾上醫醫國、其次救、人」要記詩「人心無、算、是國手有、輪時」

こくしゅかた 國主方 (名) 國主の家か、武家も國主方の御僕中」

こくしゅだいみぎう 國主大名 (名) 江戸時代、一國又は一國以上を領せし大名の稱。くにのもち。

こくしょ 國書 (名) ❶國の元首が、其の國の名を以て發する外交文書。公式令「凡國書、其上の位外交上の規書中略之には親署、諸國書の後國璽を鈐し主任の國務大臣に副署す」❷其の國の記錄。又、我が國

國司巡行・班田使・國等の任命に充つるもの。職員令。類聚三代格「國例計帳之日、不、通手實、無、佛調物、只使、都書物已畢、通期、造計帳、至手刪章、多有紀錄、無實調物、且令實調物、若不、通者、役、役戶田、爲國司」給別奏、立、代、國更免、果、謂、官裁者」

こくしゅ 國主 (名) ❶一國の元首。天子。くにのあるじ。國君。盛衰記「三國誌「朝恩の下に居ながら、朝家を蔑如すし、一門國務を執り行ひ、國主を蔑如すし、皆鏡一天照す御神もみもすそ川の同じ流れ、ことはつながら時の國主を守り給はす恩、ことはつよきなめりとぞ」李陵文「報主大名」の略。武家諸法度「國主可、撰、政務器用事」何城島原籠合戰「國主・城主・公家・高家にも望み次第」

こくしゅ 國守 (名) ❶國司の長官。くにのかみ。かみ。類聚三代格「太政官符、應、親王任、國守事」上總國・常陸國・上野國」❷別條に同じ。

こくしゅ 國手 (名) 「國を醫する名手の義」名醫の稱。又、國華の名人。國語「吾上醫醫國、其次救、人」要記詩「人心無、算、是國手有、輪時」

こくしゅかた 國主方 (名) 國主の家か、武家も國主方の御僕中」

こくしゅだいみぎう 國主大名 (名) 江戸時代、一國又は一國以上を領せし大名の稱。くにのもち。

こくしょ 國書 (名) ❶國の元首が、其の國の名を以て發する外交文書。公式令「凡國書、其上の位外交上の規書中略之には親署、諸國書の後國璽を鈐し主任の國務大臣に副署す」❷其の國の記錄。又、我が國

こくじょ 國初 (名) 一國成立のはじめ。建國の當初。

こくじょ 酷暑 (名) きびしきあつさ。酷熱。極暑。極熱。李洞詩「人居酷暑來」

こくしょ 獄所 (名) 牢獄。獄屋。盛衰記「宜、即檢、非違使、召、平利家中田使、使行、等、給、獄所、者也」

こくじょ 極暑 極めてあつきこと。又、一歲中、最もあつき時。

こくしょう 獄訟 (名) 斷獄と公事。こと。ごくそう。獄訟。周禮「凡萬民之不服、教、而有、獄訟者、鄭司農注「爭、罪曰、獄、爭、財曰、訟」禮記王制「司寇正、刑明、所、以、禁、獄訟」韓非子外儲說「獄訟繁興則田荒」

こくじょうおどく 黑繩地獄 (名) 佛語。八熱地獄の第二。罪人を熱鐵の繩などにて苦しめ殺す處。

こくしょく 黑色 (名) くろいろ。「黑然黑色、狩明」

こくしょく 國色 (名) 國中第一の容色。又、絕世の美人。史記「孫策得、霸公兩女、皆國色也」

こくしょく 穀食 穀物を常食とすること。

こくじょく 國辱 (名) 一國の面目に關する恥辱。くにのはじ。

こくしょくさんくわどう 黑色酸化銅 (名) 【化】さんくわだいにどう(酸化第二銅)に同じ。

こくしょくじんしゅ 黑色人種 (名) 人種の一。皮膚の色黑く、又は漆黑にして、髮黑く、鼻高く、手に、頭の中央の突出したる特徵あるもの。黑人種。

こくしょくじんから 黑色天竺 (名) 【植】ぼたん(牡丹)の異名。

こくしん 刻深 しんこく(深刻)に同じ。史記「用、慘覈刻深爲、九卿」

こくじん 國人 (名) 一國の人民。くにたみ。管子「文王蒐、人君子、正、是國人」詩經「淑人君子、正、是國人」

こくじん 黑人 (名) 黑色人種に屬するひと。くろんぼう。

こくじん 黑參 (名) 【植】ごまのはぐさ(玄參)の異名。

こくしん 極信 極めて信實なること。平治物語「忠信は、天性極信の者なり」盛衰記「左馬頭殿、「人、極信の者なし、殊に提婆品をば、極信に授讀けり」太平記「左馬頭殿、「忠信をも振る舞ひ、極信をも立つる人をば」

こくしん 極心 心をこめてすること。下學集「極心」

こくじんしゅ 黑人種 (名) こくしょくじんしゅ(黑色人種)に同じ。

こくす 哭 (自動サ) ❶聲をたてて悲しみなく。なきさけぶ。本朝文粹「村南村北に哭する慶悲し」禮記「當、主人、國則哭、手、入而后行」同「有、婦人哭、於、墓者、」歌國策「歌、哭」❷支那にて哭泣の禮をなす。論語「哭則不歌」於左傳哀「魯公至、晉三子自、投、而焉哭、之、於大門之外」

こくす 剋 (自動サ) 五行の運行にて、相剋す。「ごきやう(五行)を見よ。狂言「惡鬼誠にここに金剋木と剋して見えぬ所がどざる」

こくす 刻 (他動サ) きざむ。ちりばむ。ほる。ゑる。彫刻す。史記「孫臏「刻、石、其旁曰」之字、刻、石、其旁曰」

こくすうせん 石數錢 (名) 其の大小と石(○)の數にて、ちりばめられたる錢。

石紋・千石紋の類。

こくすぢ 黑筋 (名) 黑き毛色の筋。

こくすりぢ 黑粉藥 (名) 粉末とせる藥劑。散藥。陳藏器「身を粉藥に卸來公、定賞なしとぞ答へける」

こくすゐ 國粹 (名) 其の國民に固有なる精神上又は物質上の長所。

こくすゐほぞん 國粹保存 外來の文化に對して、國粹を永く保存すべしといふこと。

こくすゐ 谷水 (名) たにみづ。謠曲「所は山路、谷水(ヨミ)の影組が七百歲を經しも」庾信詩「谷水搖、蓋帝」

こくすゐ 曲水 (名) こくすゐのえん(曲水宴)の略。年中行事祕抄「三月、流觴、忘言、晉語、因流水以盛、觴、曲水起於此」

こくすゐ 極醍 ❶この上なきこと。至極。醍一。「こくすゐよし」❷全く中心に當たる部分。

こくすゐのいん 曲水飲 (名) 夫餘に同じ。日本紀略「天長三年三月、令、諸、三月三日於、淮院、賜、侍臣曲水飲、之詩、矣」

こくすゐのえん 曲水宴 (名) 古へ三月上巳の日、流水に臨みて酒を酌み詩などを誌すこと。めぐりみづのとよのあかり。「きよくすゐのえん。著聞集「三月に、京極殿にて曲水の宴を行はんとおぼしたちける」名月抄「曲水宴」

こくせ 國是 (名) 其國の是と認めたる施政の方針。新序「莊王問、於孫叔敖曰、寡人未、得、所、以爲、國是也。孫叔敖曰、國之有、是、衆非之所、惡也、臣恐王之不、能、定也」

こくせい 國政 (名) 一國の政治。國家の政治。蜻蛉加留多「勸善・懲惡は國政の始めとかや」左傳文公「孟明、爲、國政、士大夫謀、國家事」

こくせい 國勢 (名) 國の勢力。又、國の形勢。

こくせい 國姓 (名) 支那にて、其の當時の帝王の姓。音書「爲者國姓、而自殺、之不祥」

こくせい 國製 (名) 其の國の製造。又、我が國の製造。

こくせい 國胤 (名) 帝王の皇君に配せる男子。摠神記「今之國胤、亦爲、諸馬矣」

こくせい 哭聲 (名) 哭泣の聲。なきさけぶこゑ。

こくせい 國稅 (名) 中央政府の經費支辨のために賦課する租稅。直接國稅と間接國稅とに分かつ。各條を見よ。(地方稅の對)明治八年九月布告第百四十號「國稅」薩和詩「上以充、國稅、下以記、松楸」

こくせい 酷稅 (名) 苛酷なる租稅。

こくせい 極製 (名) 極上等の製造。特別の製造。又、其の物。上製。別製。

こくせいたいぶんしょぶん 國稅滯納處分 (名) 【法】國稅の納期限を過ぎて其の稅金を完納せざる者が、收稅官吏の督促令狀を受けて尚ほ其の指定期限內に完納せざる場合に、稅務管理局長が其の財產を差し押へて稅金を强制徵收する行政處分。所得稅法「國稅滯納處分を受けたる後一箇年を經過さる者」

こくせいひん 國稅品 (名) 國稅として納付せしむる物品。現時は小笠原島及び伊豆七島にのみ行はる。明治二十二年勅令第百四十一號「國稅品」

こくせう 酷肖 極めて似よりたること。酷似。

こくせき 國籍 (名) 【法】國民たる身分。即ち、臣民が其の國に經濟服從の關係に立つ資格。國民籍。國民分限。「國籍法「國籍」

こくせき 黑石 (名) 黑色石。くろいし。梅溪「詩「黑石文、難、著、苦苦頭易、成」

こくせき 刻石 石に刻すること。石を彫刻すること。漢書「夏、寫、黑、絲山、刻、石、勒、功」

こくせきーわいふ 國籍回復 (名) 【法】生來の日本人、又は婚姻認知により日本人となりたる者が、日本の國籍を喪失したる後、再び日本の國籍を取得すること。

こくせきそうしつ 國籍喪失 (名) 【法】其の國の臣民たる身分の消滅すること。「民法「同百四十九條、同百四十六條、同百四十九條、同百四十九條、國籍喪失」に同る家督相續」

こくせきそうしつしゃ 國籍喪失者 (名) 【法】國籍を喪失せる人。明治三十二年法律第九十四號「國籍喪失者の推利に關する法律」民法「國籍喪失者の家督相續人」

こくせきしゅとく 國籍取得 (名) 【法】出生・婚姻・緣組・認知又は歸化等によりて國籍を取得すること。

こくせきしゅとくしゃ 國籍取得者 (名) 【法】國籍を取得せる人。

こくせきていしよく 國籍抵觸 (名) 【法】二國以上の國籍法の規定相抵觸し、一人にて二國以上の國籍を有し、又は何れの國籍をも有せざることを惹き起こすこと。

こくせきくんかう 國籍變更 (名) 【法】一國の國籍を喪失して、他國の國籍を取得すること。

こくせつ 黑舌 (名) くろき色の舌。牛の目利。目・鼻・水・地目・鼻水・黑舌・鄭・黑・鼻・鼻・耳・少・・國・逆う・「狂狂よ」い牛でこざる」

こくせぜに 石錢 (名) 江戸時代、紙幣の石數に課せし稅。

こくせふ 克捷 戰爭に勝つこと。敵に勝つこと。酷鬼宛文「國事惟和可、以克捷」言書「安、進、帝石等、懼、機誅、時、所在克捷」

こくせん 國官 (名) 國司より下だす公文。盛衰記「遣かに不家を、國官を、授、出、能六・國官を授、下之上は、子細にや及ぶべき」

こくせん 黑線 (名) 黑色に引きたる線。黑色の線。

こくせん 極善 (名) 極めてよきこと。(惡惡の對)大原問答書「果、信、口唱念、佛は極善・最上の大法なれば」

こくそ 蠱毒 (名) 蠱の毒。和名抄「蠱、沙、本草云、蠱沙、有、今、蠱、矢名也」

こくそ 木炭 (名) 燒師が物の合せ目・裂れ目などに用ふるもの。運歩色葉集「木炭・粉炭」

こくそ 小刻字 粉藥 (名) 漆器に用ふる細みたる鑢。岱井雜文「引きうらし、粉くそ一斗に、漆目三分、附」

こくそ 國租 (名) 一國の租稅。書「禹貢「爲、等、賦、大國之租」、始皇「王公以下、各上、國租及日穀、以助、喪事」

こくそ 國礎 (名) こくき(國基)に同じ。

こくそ 黑鼠 (名) 毛色くろきねずみ。くろねずみ。朱史「高、黑鼠、食、禾、樂、鄭文帝文「鄭、「陳、白駒、麗、樂、黑鼠」

こくそ 告訴 告愬 ❶うったへ。告ること。史記「王有、愬、訟、故來告訴」韓非子「「是以其民絕望、無所、告愬」❷【法】犯罪の被害者又は其の法定代理人

が、其の犯罪の事實を犯罪地又は犯人所在地の檢事若しくは司法警察官に申告して、其の訴追を求むること。刑事訴訟法「告訴及び告發」

ごくそ 〜獄所（名）こくしょ（獄所）に同じ。宇津保物語「御馬ぜん・御馬ぜひのをのことどもは、つかへどころにつかはし、ごく所にさぶらはせんとかんだうせられ」

ごくそう 〜獄窓（名）❶獄屋のまど。❷轉じて、獄屋の中の稱。獄中。

ごくそく 〜縛縛（副）恐懼するさまにいふ語。孟子「寧遠、否不、忍、縛縛若、無、罪而就、於死地」

ごくそく 〜國俗（名）國の風俗。國の習慣。國風。孟子「寧、樂、共、夫、變、國俗」韓非子「臣、入、王之類、內、聞、王之國俗」

ごくそく 〜國賊（名）❶國を亂し、世に害をなす者。國家に仇する者。荀子「不、恤、君之榮辱、不、恤、國之臧否、惑合荀卿、以持、綠、柔、突而已耳」「罰之國賊」後漢書、黨、元、傳、曰、家人無狀、元、豈以、一子之故、而、綱、國、賊、乎、「民令、兵、迫」❷人を罵る語。「吉野郡女婦「やい、讒、知らずの國賊」

ごくそく 小具足（名）❶鎧の小手（ヨロイ・脇當（ワキ））及び脇楯（ワキ）の稱。これらの具を著用し武又は武具を著用したることと。

（ごくそく）

「錄、曰、小、町、次、郎、下、侍、「人、人、町、次、郎、侍、に、小具足、回めて、「後、先、に、迫、み、」

ごくそく 〜獄則（名）監獄內の規則。「法令、獄則を謹守し、悛改の狀ある時」

ごくそく 〜五具足（名）佛前に供する燭立で、花瓶各二箇及び香爐一箇の稱。「眞宗仏壇、佛、來、參、「、蓮、照、院、義、持、公、、床、書、院、の、飾、りを、定、め、給、ふ、に、、、

ふこと。「霊能経「天下太平、国土安穏」

こくどのぬし 国主 全国の領主。一国の政権を掌握するもの。室町千歳記「天に座しての無きが如く、土を踏まへし国土の主、此の君ならでは誰れやらん」

こくと 〜国祢 (名) 国庫の貯蓄。国府。

こくど 〜国度 (名) 国の用度。雄略「尹氏不一井国度、薪蔭」 聚武帝文「絲麻未入、国度多乏」

こくど 〜黒土 (名) くろつち(黒土)に同じ。三国志「三輔黄図「家得一黒土」」

こくど 〜黒奴 (名) ❶黒人の奴隷。❷黒色人種を卑しみていふ語。くろんぼう。

こくどう 〜黒頭 (名) ❶髪の毛の黒き頭。❷年若き人の称。

こくどうこう 〜黒頭公 (名) ふで(筆)の異名。下學集「黒頭公」

こくどうこう (名) 【植】ほうさう(朴樹子)の異名。

こくとせかい 〜国土世界 (名) 密に同じ。略語。其の外国土世界に於いて、稱の名ところまざまにして」

こくとせけん 〜国土世間 (名) 仏語。一切衆生の居住する国土。

こくとのぬし 国土主 (名) 一国の政権を掌握するもの。室町千歳記「天に座しての無きが如く、土を踏まへし国土の主、此の君ならでは誰れやらん」

こくと 〜国祢 (名) 国庫の貯蓄。国府。

こくど 〜国度 (名) 国の用度。雄略「尹氏不一井国度、薪蔭」 聚武帝文「絲麻未入、国度多乏」

こくど 〜黒土 (名) くろつち(黒土)に同じ。三国志「三輔黄図「家得一黒土」」

こくど 〜黒奴 (名) ❶黒人の奴隷。❷黒色人種を卑しみていふ語。くろんぼう。

こくどう 〜黒頭 (名) ❶髪の毛の黒き頭。❷年若き人の称。

こくどうこう 〜黒頭公 (名) ふで(筆)の異名。下學集「黒頭公」

こくどうこう (名) 【植】ほうさう(朴樹子)の異名。

こくとせかい 〜国土世界 (名) 密に同じ。略語。其の外国土世界に於いて、稱の名ところまざまにして」

こくとせけん 〜国土世間 (名) 仏語。一切衆生の居住する国土。

こくとのぬし 国土主 (名) 一国の政権を掌握するもの。室町千歳記「天に座しての無きが如く、土を踏まへし国土の主、此の君ならでは誰れやらん」

こくとの 〜国祢 (名) 国庫の貯蓄。国府。

こくど 〜国度 (名) 国の用度。雄略「尹氏不一井国度、薪蔭」 聚武帝文「絲麻未入、国度多乏」

こくど 〜黒土 (名) くろつち(黒土)に同じ。三国志「三輔黄図「家得一黒土」」

こくど 〜黒奴 (名) ❶黒人の奴隷。❷黒色人種を卑しみていふ語。くろんぼう。

こくどう 〜黒頭 (名) ❶髪の毛の黒き頭。❷年若き人の称。

こくどうこう 〜黒頭公 (名) ふで(筆)の異名。下學集「黒頭公」

こくどうこう (名) 【植】ほうさう(朴樹子)の異名。

こくとせかい 〜国土世界 (名) 密に同じ。略語。其の外国土世界に於いて、稱の名ところまざまにして」

こくとせけん 〜国土世間 (名) 仏語。一切衆生の居住する国土。

こくとのぬし 国土主 (名) 一国の政権を掌握するもの。室町千歳記「天に座しての無きが如く、土を踏まへし国土の主、此の君ならでは誰れやらん」

**こくと

こくはく（黒白）に同じ。〜黒白（名）こくびゃく

こくはくと。穀物又は布帛。宋書「穀物と布帛穀帛」〜穀帛（名）穀物と布帛

こくはく知らせること。〜告白（名）あからさまに告げ

こくはくむこくからきこと。唐書「由是益爲刻刻」〜刻刻（名）人を虐げ傷ふこと。

こくはく薄情なること。史記「酷薄〜刻薄（名）酷にして人也」北史「天性酷薄」

こくはくに同じ。宇津保物語「こくばくの年ごろの中に」同「こくばくにならびなく」同上「こくばくの人の」同「こくばく求め上げさせ侍るに」〜幾許（名）（幾許）

こくはつ〜黒髪（名）くろかみ。（白髮の對）神仙傳「髮老而少、黑髮更生、齒落復出」

こくはつ【法】犯罪の被害者にあらざるものが、其の犯罪事實を官府に申告すること。其の申告すべき官府は、一箇人と一般の官吏。公吏と巡査・憲兵卒とにより異なり。一箇人に在りては其の所在地若しくは犯罪地の檢事又は司法警察官に、一般の官吏・公吏に在りては其の職務を行ふ地の檢事に申告すべく、巡査・憲兵卒に在りては重罪又は輕罪刑に該ふべき輕罪の現行犯なるときは、被告人を逮捕し、遠かに司法警察官に引致し口頭にて申告し、罰金の刑に該ふべき輕罪の現行犯なるときは即決官署に、中申告すべきものとす。刑事訴訟法は檢事に、逮捕罪の現行犯なるときは即決官署に、一般告訴及び告發〜告發（名）（Information）

こくはくじょう〜告發狀（名）告發

こくはつする。〜告發（名）告發

こくはつ-ていしょ司法警察官が、巡査・憲兵卒の告發を聽取して作成する調書。〜告發調書（名）

こくはつ-にする人。〜告發人（名）告發

こくはふの法規。〜國法（名）【國】國家の總べての法規。國家の制定したる法規。國典。釋迦如來應生會「物のからからにせ弄打ち折るが大法・國法」教育勅語「國憲を重し國法に遵ひ」川路聞勝「國法」議記「法之禮而風俗國法也」【民】【法】こくはふがく（國法學）に同じ。【民】【法】こくはふがく（國法學）に同じ。

こくはふ則）に同じ。史記「秦王閉關絕高張力通國、手獄法、事以爲中事府令」〜獄法（名）こくそく（獄

こくはふがく〜國法學（獨 Staatsrechtwissenschaft）（名）【法】公法學の一。國家法の法理を研究するもの。諸國の國家法に通ずる法則と研究する一般國法學と、特定せる國の國家法を研究する特別國法學との二種あり。明治二十六年勅令第九十三號「國法學」

こくはん〜黒飯（名）佛語。禪家にて、四月八日の誕生會に、甫天の葉などを支流現「佛護浴佛日頃造黑飯」禪林象語集「黑飯」

こくばん〜黒板（名）白堊にて明記し得る黑漆の板。教授用として學校の教室に備ふべきもの。ばーるど。

こくばんと。又、その刻したるもの。朱子題跋「爲板刻、置公館」〜刻板（名）板に刻すること

こくひ〜國費（名）國庫の負擔に屬する費用。國用。古社寺保存法「國費を以て補助保存すべき社寺の建造物」管子「貴國費而賞豊之國可以知也」後漢書百官志「元初中、復上議減足以助國費」

こくびかしら。〜小首　小頸（名）【一】くび。

こくびを反らんとしけるを」【二】衣服の襟。（大鏡「はだこの對）催馬樂「蘇ぎぬも、わがめの如く、袂よく著よく肩よく己久比（こくび）やはらに誘ひきせめかも」【三】こくびぜめ（小首攻）の略。源頼業記「小頭・小臨・逆手」

こくびをかたむく　傾小首　少し首をかたむけて思案す。傾城反魂香「頭に小簾、頭巾つき、各小首を傾くる」狩車風見「わしも聞いたやうだと、小くびかたぶけ」

こくびをなな　投小首　少し首をうな垂る。國姓爺「虎も岩間に小首を投げ、大息吐いたる其の驚き」

こくびをふる　振小首　少し首をふる。盛衰記「振小首、取り得た者は小頭振って悦ぶ」

こくびと。〜小食（名）少し食すこと。多量に食はぬこと。又、小口に食ふこと。せうしよく。（おほ〜ひの對）

（諺）小食ひは長生の徴　こしよくは長生の徴に同じ。こしよく（小食）の條を見よ。

ごくひと。〜極秘（名）極めて祕密なること。

ごくひること。【一】極微（名）【一】極めて微小なる人。【二】極めて微小なる道の最も微妙なる義理。其の道の奥義。

こくびかけじ。源頼業「小頭掛、我「小頭掛、我」の手共其の數を盡くし」〜小首掛（名）衣服に同

こくびぜめ　小首攻（名）相撲の手の名。相手の首に手を掛けて攻めつつ、ことなるべし。骨我「骨「小やうのひねりを」「頭ひなくの」「こくびぜめに」黄めて、「せこことめてまはる所を」

こくびまはり（名）鷹の頭部の名所。たか（鷹）の項を見よ。

こくひゃうことと。〜酷評（名）苛酷に批評する

こくびゃくろと。盛衰記「黑白二つの鼠、木の根を齧むが如くせむ」國姓爺「黑白二つの石の數」源頼政「太子繪傳記「白子の神にひかるる黑の駒、黑白しゃれたる馬取りなり」荘子「天道不言日裕、而白、鳥不言日黑、而黑、黑白之杜、不足以爲辯」【一】是と非と。正と邪と。善と惡と。十訓抄「「訴心うせず」、黑白見えわかべきの心地も侍らず」韓非子「故知、黑白之分明」、盛衰記「黑白分明」、後漢書「黑白之分、民知所去就」

こくびゃくのちがひ　黑白差　いたく相絶せるにいふ。正反對。ちがはら。國姓爺後日合戰「忠臣と此の中間が眼には見る、卿達が眼には逆臣・佞臣と見る、天地・黑白の違ひ」

こくびゃくを わきまへず　不辨黑白　善惡を辨別心なきに譬へていふ。正氣なし。愚昧なり。おやゆびも、ふかず。「言葉鑑「黑白を辨ずる程の者に成りて」

こくびゃく-えと。〜黑白衣（名）信西の密藏、逆臣三浦之邊契。密藏「黑白衣之邊契」

こくひんして優待する外國人。〜國賓（名）國家が賓客と

こくび-びん白居易詩「黑蟲絲絲、毛」。〜黑毛（名）黑き獸の毛。

こくひん。〜極品（名）極上の品物。

こくひん。〜貧困（名）極貧なること。「貧困」に同じ。

こくひと。〜國府（名）古昔、國より郡に向かひて下だす符。

こくふ。〜國富（名）國家の富力。國財。

こくふかれし地方行政府。國衙。又は國衙の所在地。府中。こふ。【二】こくぶたばこ（國府烟草）の略。八笑人「手鼎・小津・小菊・こくぶは、小煙共から仕送る」

こくふ-ふう〜國風（名）【一】國の風俗。國のでぶり。川中島合戰「我が國に不義あれば、相手を糺し、同罪に行ふ於が國の國風」史記「太平「政事決定於家宰、以治地の俗謠。源平「多近方に命じて、國風をうたはせられけり」詩經「國風」【二】其の國のはやりうた。其の

こくふうげて薄皆き空となす旋風。盛衰記「波羅寺「折柳黑風俄かに吹き起こり、波羅寺を上げければ」李賀詩「黑風吹山作」平「地」〜黑風（名）座敷を捲き上

こくふうき來たる風。ひがしのかぜ。こふる東風。詩經「習習谷風、以陰以雨」陶潛「東風謂之谷風」【二】【地】東門山腹の空氣・氣象・黑風の空氣之を沛はんとなるにより、冷かなる谷風の風。たにかぜ。謠「深谷もきえけるる風。たにかぜ。寒風も便りありとして」〜谷風（名）【一】東方より吹

こくふく服。もふく。名目抄「黑服」にびいろの〜黑服（名）にびいろの

こくふくに勝ちて敵を服せしむること。〜克服　職ひに勝ちて敵を

こくふくと。〜克復　恢復　國を平げて

こくひんと。醫廣知來「貧困生會」未來の惨に盡き果てて、來世は極貧無財餓鬼」〜極貧（名）極めて貧困なること

こくふに向かひて下だす符。〜國符（名）古昔、國より郡

こくふと。〜國府烟草　國府烟草（名）大隅國給良郡國府地方より產する煙草。品質佳良にして芳烈なり。

こくふねの浮くと。樂の帆なにかけていふ。後撰「三玉つ島深き入江をこぐ舟のうきたる愁も我れはするかな」源平「しな黑るやにはのみづうみにこぐ舟の、まほならねども逢ひ見しものを」新勅撰「一浪間より明石の浦に漕ぐ舟の、ほには出でず思ひわたるかな」新千載「數なきはは鬪の廢川にこぐ舟の、りの浮木に又もあはめやもも」〜舟之（名）

こくぶんと。〜告文（名）上告の文。井筒業平河内通「則ち告文にしたため、上覽に供へ奉る」

こくぶんりたる文章。〜國文（名）【一】國語にて綴

こくぶんかに通曉する人。〜國文家（名）國文學

こくぶんがくは其の沿革等を研究する學問。【一】こくぶんぶんがく（國民文學）に同じ。〜國文學（名）【一】國語にて綴りたる文章の解釋・組織・使用又

こくぶんじ皇の天平十三年に、天下安穩の祈願所として諸國に建立せしめたる官寺。倍二十人を置き、東大寺の管理の下に、其の國內の僧尼を監督せしめしもの。續紀「天平十三年「詔諸國造三千戶塔、以充造丈六佛像之料」〜國分寺（名）翌武天

こくぶんに分寺の如く、諸國に置きたる尼寺。〜國分尼寺（名）國

こくへい〜國柄　國乘（名）國家

こくほと。〜國母（名）こくも（國母）に同じ。宇津保物語「女は天道に任せ奉る。天の御筆てあらば國母ぞ、女御ともなれ」

こくほを統治する權力。「君因其國之政權」史記「封建論「國之政權、民八歲爲傅相持國柄」後漢書「元初中、復上議減足以助國費」〜國柄（名）國權

こくへいと。〜克平　職ひに勝ちて其の地を平定すること。

こくへい-しゃの一。所年祈願の神祭に、宮內省より幣帛を捧げ、例祭に國庫より幣帛を捧ぐるもの。大社・中社及び小社の別あり。〜國幣社（名）官社

こくへい-せうしゃ治四年五月十四日太政官布告「國幣小社」〜國幣小社（名）國幣社の中、其の社格の最も低きもの。明

こくへい-たいしゃ明治四年五月十四日太政官布告「國幣大社」〜國幣大社（名）國幣社の中、其の社格の最も高きもの。

こくへい-ちゅうしゃ社格の、國幣大社の下、國幣小社の上にある國幣社。明治四年五月十四日太政官布告「國幣中社」〜國幣中社（名）

こくべつと。〜國別（名）くにわけ（國別）に同じ。

こくべつと。いとまごひ。源平「別れを告ぐ所、其夜弘景夢寐告別」杜甫詩「告別奚急」〜告別（名）別れを告ぐこと。

こくほ歩行の義として、「國運の進行を情勢。國運。國勢。詩經「雨於乎有、哀國步斯頻」、隋書「神明降、超「國步維艱」〜國步（名）

こくほかんなんず、內憂外患頻りに起こりて、保安に困難なること。〜國步艱難　國勢衰退は

こくほるもの。こ。松葉を搗みつめて酒とせ（名）松

こくほと。〜國母（名）こくも（國母）に同じ。宇津保物語「女御とも成れ」

こくほと。〜國保（名）國家の統治權の下に維持團結の國保を行ふる權力。「君因其國之政權」史記「封建論「國之政權、民八歲爲傅相持國柄」後漢書「元初中、復上議減足以助國費」

こくぼの名。〜黑牡丹（名）【一】紫花の紫黑色なる牡丹。【二】【動】すぐれ牛の異名。下文を見よ。下學集「黑牡丹、通俗常談「牛の異名」、本草「牡丹、一名鼠姑、一名鼠牡、一名百兩金、一名白茅根、一名木宿、一名鼠思、一名鼠眼、一名鼠目、一名鼠子、一名鼠妊、一名鼠蹄、一名鼠尾、一名鼠足、一名鼠頭、一名鼠鬚、一名鼠耳、一名鼠尾草、一名鼠尾草根、一名鼠尾草子、一名鼠尾草花、一名鼠尾草葉、一名鼠尾草莖、一名鼠尾草實、一名鼠尾草皮、一名鼠尾草汁、一名鼠尾草末、一名鼠尾草膏、一名鼠尾草丸、一名鼠尾草散、一名鼠尾草湯、一名鼠尾草酒、一名鼠尾草醋、一名鼠尾草蜜、一名鼠尾草油、一名鼠尾草脂、一名鼠尾草粉、一名鼠尾草末

る人民。種族の同一なる人民。㊁其の國内のたみ。土民。保元[ほうげん]物語「右京[うきょう]の亮[すけ]中[なかの]将[しょうの]姫[ひめ]君[きみ]を相語らひて、同民を催し、南都の大衆、朋家を恨み奈[なに]りて、國民を催し」

こくみん-ぎむ 〜國民義務（名）【法】國民一般の負擔すべき公法上の義務。即ち、兵役義務・納稅義務の類。

こくみん-ぐん 〜國民軍（名）國民兵を以て編制し、陸軍に屬し、主として成又は邊境の警備に充てらるる軍隊。明治三十八年一月勅令第十三號國民軍令[れい]。例「國民軍」

こくみん-けいざい 〜國民經濟（英 National economy）（名）【經】經濟の行爲の範圍が、一國内に限られたるものの稱。（國際經濟の對）

こくみんけいざい-がく 〜國民經濟學（英 National economic）（名）國民の經濟現象を研究する學問。

こくみん-けいきょう 〜國民教育（名）國民に其の國民たる本分・責務を知らしむることを目的とする教育。小學校令[れい]第一條「道徳教育及國民教育の基礎」

こくみん-けん 〜國民權（名）【法】國民のみこれを有し、外國人に其の享有を許さざる權利。即ち、參政權の類。

こくみん-しゅぎ 〜國民主義（英 Nationalism）（名）國家は同一の民族を以て組織すべしとする主義。又、自國の權力の下に自國民と同一なる民族を統一せしめんとする主義。

こくみん-せい 〜國民性（英 Nationality）（名）一國民又は一民族に特有なる性質。

こくみん-せいしん 〜國民精神（英 Nationality）（名）前條に同じ。

こくみん-せき 〜國民籍（名）【法】（國籍）に同じ。

こくみん-だいとく 〜國民道德（名）國民として守るべき道德。

こくみん-とうひょう 〜國民投票（名）【法】憲法改正などの如き國家の重大なる事項につき、全國民の行ふ投票。瑞西[スイス]聯邦及び其の聯邦内の各州、並びに北米合衆國の諸州に行はる。

こくみん-ぶんがく 〜國民文學（名）其の國民に特有なる文學。國文學。

こくみん-ぶんけん 〜國民分限（名）【法】（國籍）に同じ。

こくみん-へい 〜國民兵（名）㊀國民兵役に服する臣民の、召集せられて國民軍を編制したるもの。徴兵令[れい]「國民兵は戰時若くは事變に際し後備兵を召集し仍ほ兵員を要するときに限りこれを召集す」㊁平時の略。

こくみん-へいえき 〜國民兵役（名）兵役の一。戰時・事變の際、後備兵を召集し、仍ほ兵員を要するときに召集せられて國民軍を編制すべきもの。第一國民兵役と第二國民兵役とに分かち、第一國民兵役は、陸軍にありては補充兵を後備兵役、又は召集せられたる補充兵を後備兵役に、海軍にありては後備兵役を終はりたるもの、後備兵役に服し、第二國民兵役は常備兵役、後備兵役・補充兵役及び第一國民兵役にあらざる滿十七歲より滿四十歲までの日本帝國男子これに服するものとす。徴兵令[れい]「國民兵役」

こくみん-へい-せいり 〜國民兵召集（名）陸軍召集の一。國民軍を動員するために國民兵を召集するもの。其の第一國民兵を召集するを第一國民兵召集といひ、其の第二國民兵を召集するを第二國民兵召集といふ。陸軍召集條例[じょうれい]「國民兵召集」

こくむ 〜國務（名）㊀國家の政務。憲法「天皇は、國務を總攬し、此の憲法の條規に從ひ、之が爲に國務大臣を置き、其の任を負ふべしとす」㊁國務大臣の略。憲法「國務大臣は、天皇を輔弼し、其の責任を負ふ」

こくむ-だいじん 〜國務大臣（名）【法】憲法第六條の一。天皇を輔弼し、法律・勅令其の他國務に關する詔勅に副署する大日本帝國憲法[けんぽう]第六條[だいろくじょう]「國務大臣」

こくめ 石目（名）ますめ（桝目）に同じ。

こくめい 〜國名（名）㊀國の名稱。㊁國の名譽。

こくめい 〜國命（名）㊀國の使命。㊁國家の政令。論語「季氏陪臣執國命、三世希不失矣」

こくめい 〜克明（名）じつめい。じつよく。まめやか。「こくめいに働く」

ごくめん 〜極妙（名）きょくめう（極妙）に同じ。

こくめん 〜黑面（名）黑き顏。黑きおもて。「南史[なんし]「之我家黑面阿黍」

こくも 〜國母（名）㊀天皇の御母。即ち、皇太后の稱。くに母は。平家「一院[いちのいん]・女院[にょうゐん]・國母[こくも]・皇后[こうごう]・皆[みな]、院號・宣旨[せんじ]を給ひて建禮門院と申す」㊁國母たる中宮[ちゅうぐう]入道相國の御娘なる上、天下の國母たりしかば、名目抄「國母[こくも]」㊂國民の母。即ち、皇后の稱。宇津保[うつほ]物語「七人の后[きさき]、六人のこくもは千兩のこがねを惜しまずとも、こくもに、聞入れ給へ」同書「並び越えけんこくもに、ならむ國王」

こくもち 黑餅（名）紋所の名。圓くして中に横線なきもの。中世の武士、矢口の祭の黑餅を家紋とせしに起こるといふ。くろもち。三河物語「金の揚羽の蝶のは、とく、あさぎのこくもちの、さしもの」能樂底本[ていほん]「卯紋も黑餅・まんまる鳥毛は筑前福岡の御城主」

こくもちがたみづつ 黑餅形井筒（名）紋所の名。

こくもちづけ 黑餅附（名）黑餅の附きたる酒。「滿腹語[まんぷくがたり]」上は黑羽二重のこくもちづけ、若男尚きに仕立てたるなり」

こくもち-にらのはち 黑餅梅鉢（名）紋所の名。

こくもち-にらり 黑餅瓜（名）紋所の名。「くりり（瓜）」を見よ。

こくもち-にらうこ 黑餅鱗（名）紋所の名。

こくもち-におだか 黑餅澤潟（名）紋所の名。

こくもち-にかたばみ 黑餅酸漿（名）紋所の名。

こくもち-にかなわ 黑餅金輪（名）紋所の名。

こくもち-にからはな 黑餅唐花（名）紋所の名。

こくもち-にきぎう 黑餅桔梗（名）紋所の名。

こくもち-にきく 黑餅菊（名）紋所の名。

こくもち-にくちなし 黑餅梔子（名）紋所の名。くちなし（梔子）を見よ。

こくもち-にくつわ 黑餅轡（名）紋所の名。

こくもち-にけんかたばみ 黑餅劍酸漿（名）紋所の名。

こくもち-にこけんのさり 黑餅五三桐（名）紋所の名。

こくもち-にさざりんだう 黑餅笹龍膽（名）紋所の名。

こくもち-にすず 黑餅鈴（名）紋所の名。

こくもち-にすはま 黑餅洲濱（名）紋所の名。すはま（洲濱）を見よ。

こくもち-にたかのは 黑餅鷹羽（名）紋所の名。

こくもち-にたちばな 黑餅橘（名）紋所の名。たちばな（橘）を見よ。

こくもち-にちおとしうめはち 黑餅地落梅鉢（名）紋所の名。

こくもち-にちおとしもくかう 黑餅地落木瓜（名）紋所の名。もくかう（木瓜）を見よ。

こくもち-にちぬきあふぎ 黑餅地扱扇（名）紋所の名。

こくもち-にちやうじ 黑餅丁子（名）紋所の名。

こくもち-にちやうはん 黑餅打板（名）紋所の名。

こくもち-につた 黑餅蔦（名）紋所の名。つた（蔦）を見よ。

こくもち-につつち 黑餅槌（名）紋所の名。

こくもち-になでしこ 黑餅撫子（名）紋所の名。

こくもち-になんてん 黑餅南天（名）紋所の名。

こくもち-にへいし 黑餅瓶子（名）紋所の名。

こくもち-にほ 黑餅帆（名）紋所の名。

こくもち-にほうじゅ 黑餅寶珠（名）紋所の名。

こくもち-にまさりりんだう 黑餅笹龍膽（名）紋所の名。

こくもち-にすず 黑餅鈴（名）紋所の名。

こくもち-にすはま 黑餅洲濱（名）紋所の名。すはま（洲濱）を見よ。

こくもち-にたかのは 黑餅鷹羽（名）紋所の名。

こくもち-にたちばな 黑餅橘（名）紋所の名。たちばな（橘）を見よ。

こくもち-にちおとしうめはち 黑餅地落梅鉢（名）紋所の名。

こくもち-にちおとしもくかう 黑餅地落木瓜（名）紋所の名。もくかう（木瓜）を見よ。

こくもち-にちぬきあふぎ 黑餅地扱扇（名）紋所の名。

こくもち-にちやうじ 黑餅丁子（名）紋所の名。

こくもち-にちやうはん 黑餅打板（名）紋所の名。

こくもち-につた 黑餅蔦（名）紋所の名。つた（蔦）を見よ。

こくもち-につつち 黑餅槌（名）紋所の名。

こくもち-になでしこ 黑餅撫子（名）紋所の名。

こくもち-になんてん 黑餅南天（名）紋所の名。

こくもち-にへいし 黑餅瓶子（名）紋所の名。

こくもち-にほ 黑餅帆（名）紋所の名。

こくもち-にほうじゅ 黑餅寶珠（名）紋所の名。

こくもち-にまさりりんだう 黑餅笹龍膽（名）紋所の名。

こくもち-にまんじ 黑餅卍（名）紋所の名。

こくもち-にみつさき 黑餅三木（名）紋所の名。

こくもち-にみつぼし 黑餅三星（名）紋所の名。

こくもち-にもくかう 黑餅木瓜（名）紋所の名。

こくもち-にゆきわ 黑餅雪輪（名）紋所の名。

こくもち-にゐづつ 黑餅井筒（名）紋所の名。

こくもつ 〜穀物（名）常食に供する穀類。即ち、稻・麥・粟・稗・黍の類。穀。玉篇「穀、九日穀之穀。注、百穀中以數二」

ごくもつ 〜御供物（名）くもつ（供物）の數稱。

こくもつ-くもんぜい 〜穀物關稅（名）關稅の一。穀物の輸出入に賦課する稅。

こくり 石盛（名）〔段別に石高を盛り附くる義〕穀物の收穫高により田畑の等級を分かち、年貢高を定むること。盛り斗代。

ごくり 獄守（名）獄屋の番人。獄守帝。平家「獄守[ごくり]・獄司[ごくし]、文覺[もんがく]を召[めし]有りて、獄守[ごくり]に仰[おほせ]て、頸に懸けし」

ごくもん 〜獄門（名）㊀獄屋の門。懸東京[けんとうきょう]新聞[しんぶん]明治[めいじ]五年[ごねん]「義士の首、今日渡[わたし]大路、赤樹[あかき]の樹[き]に獄門[ごくもん]」同書「向[むかひ]獄門[ごくもん]の前[まへ]」㊁獄門に曰[いはく]、㊂昔時の刑名。所罪に處したる者の首を獄屋の門の邊なる木の上、又は刑場の木柴の上に梟らしたるもの。又、梟首。淀鯉出世滝登「科人はさらし首、獄門[ごくもん]の上[うへ]に梟[かけ]られ、獄門[ごくもん]の前[まへ]に、總兵衛「一味のあひずり十人倍り、栗田口[くりたぐち]獄門[ごくもん]にかかるぞ」浄瑠璃[じょうるり]「松平[まつだひら]主馬[しゅめ]上[かみ]、獄門[ごくもん]に上がらうが」㊃轉じて人を罵りいふ語。天網島[てんもうじま]「やあ、がんだらめ、こくもんめ」

こくもんにかく 獄門 獄門に處す。梟首。梟す。平家「法師[ほうし]ども、獄門[ごくもん]に懸けて、首を刎ねて、獄門に懸けて」吉野鄕女樹[よしのがうのをんなぎ]「見せしめのため、首斬りて獄門にかけ候はん」

こくもんのえだ 獄門枝 獄門首を晒らす木の枝。慶長記[けいちやうき]「今は成[なり]、西海之因縁、首を獄門之枝に懸けられたり」

こくもんのくび 獄門木 獄門首を晒らす木。こくもんばしら。大曦夜雜物語「由井が濱に、獄門の木に梟け晒らし」

こくもんくび 獄門首（名）獄門に懸けられたる首。さらしくび。梟首。

こくもんだい 〜獄門臺（名）獄門首を梟す臺。梟木。

こくもんだう 〜獄門道（名）こくもん（獄門）に同じ。用明天皇[ようめいてんのう]「人臣のれが首は、獄門道、高札にかく爲めなれば」

こくもんばしら 獄門柱（名）獄門臺の柱。平家「女護島「獄門柱えいと引きき、振り廻はし」

こくもんばしらのあるじ 獄門柱主 獄門臺に首を晒らさるる人。梟首せらるる人。女殺油地獄「其の根性が續いたら、門柱は思ひも寄らず、獄門柱の主にならうか」

こくや 穀屋（名）穀物・雜穀を賣買・取引する家。又、その人。又、その家。

こくや 〜黑夜（名）やみのよ。又、よなか。

ごくや 獄屋（名）ごくや。ひとや。

こくやう 〜酷暑（名）暑氣の甚だしきこと。緋縅綴卯月紅葉「入日の宣に炎し向かへば、實に炎天の酷暑の氣」

こくやく 〜國役（名）くにやく（國役）に同じ。運歩色葉「國役[こくやく]」

こくやてん 〜黑夜天（名）こくあんてん（黑闇天女）に同じ。

こくゆ 〜告諭（名）つげさとすこと。喻告。史記[しき]「乃使人奉璽書告諭之秦民大喜」

こくゆり 黑百合（名）【植】くろゆり（黑百合）の異名。

こくよう 〜國用（名）國家の費用。國費。明治五年十月二十八日徴兵告諭「凡そ天地の間一事一物として皆あらざるはなし以て國用に充つ」禮記[らいき]「國用以三十年通計、國用費、人以爲出」史記[しき]「無貶、國用益饒」

こくら 小倉（名）こくらおり（小倉織）の略。若草合「小倉の男帝」日本武尊「其妻愛[をとこ]「波は編みの小倉より、錦は眞紅の結び紐」

こくら（接尾）あらそひきそふことにいふ語。くらべ。こくら。貞徳獨吟百韻「勝つやうにせん弓の射こくらべ」「參りて拜む堂の前こくらべ」「天子樂「今朝やれ鼎[かなえ]と肩のおきこくらべ」「浄瑠璃「呂[りょ]・わしなどと走りこくらせうなら」

こくら 〜黑瘧（名）黑色になる瘧病。（白瘧の對）三河物語「起請の仰[おほせ]を蒙りて、今生に而者びやくらい・こくらいの罰[ばち]ひを請け」

こくら 〜黑浪（名）渦巻たる波。渦浪。白樂易詩「白浪與黑浪、呼吸總喧豗」

ごくらい　〜國老（名）❶諸侯の家老。「論語季氏十六」子曰、國老待子而行、若之何子之不言也」❷國の元老。「戰國策」「國老諫臣」

ごくらう　〜御苦勞（名）❶くらう（苦勞）の敬稱。「御苦勞を願ふ」百日會我「わしことは虎樣や少將樣の御苦勞になりましたが、舞の一手も舞ひ習ひ」❷帝祈「御苦勞でござります。ありがたい御談議で御ざりました。同題是れは何れも模、近來御苦勞に存じまする」

ごくら　〜極老　極めて年とりたること。「通業錄「年者極老」」

ごくらおり　小倉織（名）豐前國小倉地方より初め出だしたる木綿厚物。綿絲を合はせて悔多織の如くに地を用ふ。小倉。

ごくらがり　小暗（名）こくらきこと。又其のところ。「淀鯉出世瀧登「夫れから、周はつてかうかうと、指で數へて、招れて、小暗がりをそつとぬけ」「油島年代記三」小暗がりより女房誂り出せ」

ごくらかり　（名）こくらかること。こくらたるもの。こんくらかり。八笑人附下三「書樣のこくらかりとも、何とも名の附けやうのねえ、わからねえもんだ」

ごくらかり　木暗（自動ラ）木暗くあり。「蜻蛉日記」「片岸に木ども生ひこりて、いとこくらかりたる」

ごくらかる　（自動ラ）打ち濺り亂れてからまりつく。

ごくらく　〜極樂（名）❶佛語。西方十萬億土を經過せる所にある阿彌陀如來の居所。「諸佛菩薩具足し、全く苦惱なき安樂の世界。極樂淨土。」❷極樂に往生すること。

ごくらくのあまりかぜ　極樂微風　心地よき涼風の稱。

ごくらくのうてな　極樂臺　夫婦に同じ。「論語」「此の念佛の功力に引かれ、忽ち極樂の臺に生まれ」

ごくらくのたまのうてな　極樂玉臺　極樂淨土の蓮華の玉臺。「太平記」「極樂の玉のうてなの蓮華に、われ、上人を、いざなへゆらん玉の緒」

ごくらくのとうもん　極樂東門　極樂の東の門。即ち、西方淨土を忘して行けば第一に入る門。「盛衰記三」「極樂寺上宮太子立西天王寺、過者惑知、極樂東門」「賀古教信七箇週」「傾城の懷は極樂安樂淨土に爽し」「床に入るは極樂の東門に入る心モ」

ごくらくのにしかぜ　極樂西風　極樂即ち西方淨土より吹き來たる涼風。「今宮心中」「蒸し暑いが、外へ出づれば極樂の西風、えもいはず涼むの間に」

ごくらくのねがひ　極樂願　極樂に往生せんとする願ひ。「源平」「入道も淺樂のねがひをば忘れて、ただ此の御氣色を待つことにはすし」

ごくらくのぞみ　極樂望　前條に同じ。

ごくらくのむかへ　極樂迎　極樂へ行く望みある衆生が臨終の時、阿彌陀・觀音・勢至の來迎すること。

ごくらくをねがふ　願極樂　極樂に往生せんことを願ふ。「源平」「ひとへに世間の名利を捨てて、深く極樂をねがふ人也」

（誤）極樂願はんより地獄作らな　注意して惡因を作る勿れ。

ごくらく-あんやうじやう　〜極樂安養淨土（名）佛語。ごくらく（極樂）に同じ。「賀古教信七箇週」「傾城の懷は極樂安養淨土に爽し」

ごくらく-おとし　極樂落（名）鼠をおとし入れて捕らふる器。地獄おとしを反對にいふ語。ねずみおとし。ねずみとり。

ごくらく-かい　〜極樂界（名）佛語。ごくらく（極樂）に同じ。「榮華玉臺紫金臺に安座して須臾・刹那も經ねばとに、極樂界に參りつきぬ」

ごくらく-じやう　〜極樂城（名）前條に同じ。

ごくらく-じやうど　〜極樂淨土（名）前條に同じ。「宇津保」「其の人は極樂淨土の樂に、ことを譬へ合はせて遊ぶ人なり」「榮華物語」「極樂淨土の鳥陀羅」

ごくらく-せかい　〜極樂世界（名）前條に同じ。「榮華物語」「極樂世界とこれにつけても、いかにいかにと、いとどゆかしく思ひやり奉る」「自居易文集」「以無八苦・四德・涅槃・三佛・極樂世界者、故也」

ごくらくせんかいのけうしゅ　極樂世界教主　あみだにより「阿彌陀如來」に同じ。「源平」「我れはこれ極樂世界の教主也」

ごくらく-ちう　〜極樂鳥（名）【動】鳥類中、燕雀類の一種。稍類多く、昔にゆーぎにー・濱洲の北部に產し、羽色の華麗なる雄に鳥類中其の比を見ず。鳥類及び果實を食とす。

ごくらく-でぶ　極樂蜻（名）【動】あげはのてふ（揚羽蝶）の異名。

ごくらく-とくど　極樂蜻蛉（名）のらくらものを嘲いふ語。

ごくらく-わうじやう　〜極樂往生（名）此の世界を去りて、極樂世界に往生すること。

ごくらさ　小暗（名）こくらき度合。こくらきさま。「忠百首」「しくれたつは山の陰のこくらさに、あくらも知らずとも、しをそすると」

こくらし　木暗（形ク）木立など茂り合ひて暗し。「源平」「中日の月さし出づるほどに、いとど木高きかげどもこくらしらら見えわたりて」「同夕雨」「荒れたるかどのしのぶ草茂りて、見あげられたるだとしくなりこくらし」「曾丹集」「淺おふふも茂がくれになりにけり、うゑ木のもとはこくらかりけり」

こくらし　小暗（形ク）ややくらし。「蜻蛉日記」「さみだれやこくらきぬの夕されば、おもてるまでも照らす蛍か」

こくらじま　小倉縞（名）こくらおり（小倉織）に同じ。

こくらだち　小倉裁（名）小倉織にて仕立てたるもの。「代女」「こくらだちの布團」

こくらとかい　小倉渡海（名）豐前國小倉と長津國との間を往復せし船。總屋形小倉と長津國とのみを往復せし船。屋形小倉にて、左右に部あり、窓ありて、頂立（ヒサシ）なく、又、縱に頂立を用ひ、上の部に客を載せ、下に荷物を積むもの。小倉船。

こくらの　〜國立（名）【植】あさくさのり（紫菜）の異名。

こくら-ぶね　〜極雨（名）六位の藏人。年間に積み重ねる藏人。「源」「きよくらふ。故實抄要」「六位藏人中間四人は、中第一を云ふ極雨」

こくら-ぶね　小倉船（名）こくらとかい（小倉渡海）に同じ。

こくら-ん　〜國亂（名）國內の爭亂。內亂。

こくり　〜國利（名）國家の利益。國益。「後漢書」「或欲因緣行詐、以買國利」

こくり　〜酷吏（名）❶苛酷なる官吏。史記「酷吏列傳」「一切嚴酷、爲詐巧之作」「酷吏列傳」「漢書」「自是管者得全、然酷吏猶以爲、嚴」❷こくしと（酷吏）の雅稱。「杜牧詩」「大業去、酷吏消、風來、故人」

こくり　（副）居醒りして體を前後にゆり動かすさまなどにいふ語。こつくり。

こくり　濃栗（名）栗の色目の名。表は濃色、裏は薄色。秋用ふ。「雅遊集」

こくり　〜獄吏（名）囚人を取り扱ふ官吏。「監獄の役人。「史記」「張釋之傳」「任獄吏」「同書」「以千金與獄吏」「同書」「故延壽之不、然此一獄吏所決耳」

こくり　〜獄狸（名）獄屋のうち。獄中。獄內。

こくり　（副）液體の音を立てて流るるさまにいふ語。

こくり-いろ　濃栗色（名）こくり（濃栗）に同じ。「雅尤濃栗、淺栗、紗」「枕」「はひそくに薄青栗、紫付けて、こくりいろとて、おとなしきは、人は著るなり」

こくりく　〜國戮（名）國法により誅戮せらるること。「左傳」「十五年、殺其大夫、杜注」「寄寓逆亂、宜其爲國戮」

こくりつ　〜國立　國家の設立するもの。官立。

こくりつ-きんかう　〜國立銀行（名）商業上の金融機關となり、兼ねて政府の不換紙幣を整理し、もつて目的にて、政府の特別なる保護の下に、「明治五年十一月以後各地に設立せられし銀行」明治十六年四月其の存立期限を二十箇年に限り、二十九年以來漸次減縮し、其の多くは年二月に至りて全く消滅し、其の多くは私立銀行に變ぜり。明治五年十一月第三百四十九號布告「國立銀行條例」「國立銀行」「同九年八月布告第百六號國立銀行條例」「國立銀行」

こくりつきんかう-しへ　〜國立銀行紙幣（名）國立銀行が政府發行の公債證書を大藏省に預け入れ、これを抵當として發行せし紙幣。一圓・二圓・五圓・十圓・百圓・五百圓の六種あり。明治三十二年十二月九日限りにて其の通用を廢止せられたり。「銀行紙幣」明治二十九年三月法律第八號「國立銀行紙幣」

こくりやう　〜國領（名）國司の領有する土地。「東鑑」「二十六治承四宗頼」「河內國國領」「盛衰記」「領を いはず、段別兵糧米を充つ」「庄領・國領を いはず、段別兵糧米を充つ」

こくりようし　〜告陵使（名）天皇登極の時、其の由を山陵に來告して來奉する勅使。

こくりよく　〜國力（名）國家の勢力。又、國家の財力。「唐書」「多遽延、以困國力」

こくりよく-きんかう　〜國力均衡　國際關係にて、或る一國のみが他の列國を壓倒して、自己の勢力を得ることを許さざること。

こくる　（他動ラ）❶はげしき動作をなす。とばす、ちらす。「はりこくる」日本紀「袖始一叩かねばかりに叱りこくつて、迫ひ出した」❷くくる（括）に同じ。「木でこくる」

こくる　木茶（自動ラ）こくらくなる。樹木茂りて、其の下くらくなる。「こくれつつ茶のなかばになりにけり、今や咲くらん山吹の花」

こくるま　小車（名）❶小さきくるま。❷れんしや（輦車）に同じ。「顯後紀」「女御從四位下藤原朝臣澤子卒中略祭祀而因爲、戲之小車、出、自禁中」「宇津保」「馬、こくるまニつつづしらかね・こがねの馬、さまざまとりたてて」

こくるみ　（名）【植】さはぐるみの異名。

こくるみ　〜穀類（名）常食に供する禾穀類。穀物。穀。

こくれ　木茶（名）こくれること。こくれたるところ。「新六帖」「雨すぐるとて山の邊の木くれより、しがらき笠で見えかくれする」「堀河百首」「夏」「しすとも風にもものはぬもの故に、こくれの下に夜をあかしつる」「永久百首」「紅葉やみむろの山のこくれにも、見えまがはぬ朱の玉垣」

こくれい　〜刻勵（名）刻苦して勉勵すること。「唐書」「賈逵傳」「賈逵、刻勵而諳佛、之」「宋史」「周羽」「少刻勵、自修、己」

こくれい　〜剋勵（名）己れの欲にかちて事をなすにつとむること。「氣氏家訓」「勵者自足、不能剋勵也」

こくれつ　〜酷烈（名）極めてはげしきこと。「書經」「呂覽」「天更溢惡、烈、手猛火、」「天王之更爲溢惡之德、用酷烈、其手猛火、」

こくれん　〜谷漣（名）谷川のさざなみ。谷川の水。「謠」「泉」には谷漣一滴の水をあつめ、川には山蘇月の雪を煎す」

こくれん　〜刻廉（名）「書經」「刻廉剛直」にして廉潔なること。

こくろ　〜國祿（名）【植】あさくさのり（紫菜）の異名。

こくろ-ぶ　〜極雨（名）六位の藏人。年間に積み重ねる藏人。「源」「きよくらふ。故實抄要」「六位藏人中間四人は、中第一を云ふ極雨」

こくら-ぶね　小倉船（名）こくらとかい（小倉渡海）に同じ。

こくん　〜國亂（名）國內の爭亂。內亂。

こくり　〜國利（名）國家の利益。國益。「後漢書」「或欲因緣行詐、以買國利」

こくり　〜酷吏（名）❶苛酷なる官吏。史記「酷吏列傳」「一切嚴酷、爲詐巧之作」「酷吏列傳」「漢書」「自是管者得全、然酷吏猶以爲、嚴」❷こくしと（酷吏）の雅稱。「杜牧詩」「大業去、酷吏消、風來、故人」

こくり　（副）居醒りして體を前後にゆり動かすさまなどにいふ語。こつくり。

こくり　濃栗（名）栗の色目の名。表は濃色、裏は薄色。秋用ふ。「雅遊集」

こくり　〜獄吏（名）囚人を取り扱ふ官吏。「監獄の役人。「史記」「張釋之傳」「任獄吏」「同書」「以千金與獄吏」「同書」「故延壽之不、然此一獄吏所決耳」

こくり　〜獄狸（名）獄屋のうち。獄中。獄內。

こくり　（副）液體の音を立てて流るるさまにいふ語。

こくり-いろ　濃栗色（名）こくり（濃栗）に同じ。「雅尤濃栗、淺栗、紗」「枕」「はひそくに薄青栗、紫付けて、こくりいろとて、おとなしきは、人は著るなり」

こくり　〜國戮（名）國法により誅戮せらるること。「左傳」「十五年、殺其大夫、杜注」「寄寓逆亂、宜其爲國戮」

こくり　〜國立　國家の設立するもの。官立。

こくりつ-きんかう　〜國立銀行（名）商業上の金融機關となり、兼ねて政府の不換紙幣を整理し、もつて目的にて、政府の特別なる保護の下に、「明治五年十一月以後各地に設立せられし銀行」明治十六年四月其の存立期限を二十箇年に限り、二十九年以來漸次減縮し、其の多くは年二月に至りて全く消滅し、其の多くは私立銀行に變ぜり。明治五年十一月第三百四十九號布告「國立銀行條例」「國立銀行」「同九年八月布告第百六號國立銀行條例」「國立銀行」

こくりつきんかう-しへ　〜國立銀行紙幣（名）國立銀行が政府發行の公債證書を大藏省に預け入れ、これを抵當として發行せし紙幣。一圓・二圓・五圓・十圓・百圓・五百圓の六種あり。明治三十二年十二月九日限りにて其の通用を廢止せられたり。「銀行紙幣」明治二十九年三月法律第八號「國立銀行紙幣」

こくりやう　〜國領（名）國司の領有する土地。「東鑑」「二十六治承四宗頼」「河內國國領」「盛衰記」「領を いはず、段別兵糧米を充つ」「庄領・國領を いはず、段別兵糧米を充つ」

こくりようし　〜告陵使（名）天皇登極の時、其の由を山陵に來告して來奉する勅使。

こくりよく　〜國力（名）國家の勢力。又、國家の財力。「唐書」「多遽延、以困國力」

こくりよく-きんかう　〜國力均衡　國際關係にて、或る一國のみが他の列國を壓倒して、自己の勢力を得ることを許さざること。

こくる　（他動ラ）❶はげしき動作をなす。とばす、ちらす。「はりこくる」日本紀

抽筆」

ごくわい 〜非會（名）囲非の集會。「つ鶏衣（謡曲）月老人の非會は、仙家のかげをうつし」

ごくわいしょ 〜非會所（名）非常に集り、又は圓非を教授する家。

ごくわう 〜國王（名）【一】一國の元首。帝王。「竹哀國王の仰せごとをまきに世にすみ給はんんの、うけたまはり給はでありなんや」「手非保存」「天下にこくわう、かへに出だし給くりしに、こくわうすでれて時めかし給ふこと、ならびなかりけるほどに」【日】王の稱號ある國の元首。

とくわうおん 國王恩（名）國王恩四恩の一。「國王恩とは受けたる恩。平家に「世に四恩義。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩是れ也」

こくわう 〜弧光（名）【理】二個の導體を接觸し、之に電流を通じ少しく互ひに離隔するときは、其の間隙に火花を生じ、高度の熱を發するを以て、導電體は蒸發せられて蒸氣となり、間隙を充塞す。此の蒸氣は一種の導電體なるを以て、電流は之を通じて流れ、爲めに高度の光を發す。之を氣光と云ふ。あーく。

こくわう 〜後光（名）佛體より放射の光輝。之に象りて佛・菩薩の像ものの背部に金色の飾物を刻み、又描きたる色彩光を光背。「吟遊詩人賈何とやら、後光がさすは、ぢやし」賈古叡智七善題さ金色の光り後光と、「御佛の御影あらたに見え給ふ」

こくわうーでんとう 〜弧光電燈（名）導通石油にーくす・元所油にーくす・電燈に弧光を發生せしめ、之を燈火に使用する装置の電燈。

其の構造に依りて直流開放式・交流開放式・交流密閉式の四種に分かつ。最も普通に用ひらるるものは、千八百燭光と稱するものにして、壹燭を點ずるには約四百五十わっとの電力を要す。あーく燈。氣光燈。氣燈。

こくわうーとう 〜弧光燈（名）前條の略。

こくわく 〜御畫（名）夫條に同じ。「禁祕抄」「詔書奏案。上卿奏之、天子覽之、書可字也（中略）年號有二所、續年號には不書、公卿選擇奥年號左上也」

こくわくーか 〜御畫可（名）御畫日濟みて、「太政大臣以下の諸署したる詔書又は勅書に、天皇が可の字を親署し給ふこと。

こくわくーじつ 〜御畫日（名）昔、內記に命じて作成せしめし詔・勅を、「可」と認めたるとき、「天皇が其の年月の下に日を親署し給ひしこと。

こくわし （名）こがし（焦）をいふ。「上野・虎前の方言。（語源）

こくわじゃ 小冠者（名）こくわんじゃ（小冠者）に同じ。「宇治拾遺」「故殿の小冠者（中略）は十三より參りてより、五十まで充實權れ參らせ給はず（中略）故殿の小冠者小冠者召れ給ひき」「著聞集」「小冠者（こくわんじゃ）一人に弓矢持たせ、召し候ひき」

こくわつ 〜五月（名）一年十二箇月の中、第五番目に當たる月の稱。さつき。「古事談」「後國依に無言清五月五日、水草は同事なり」「東鑑」「五月一日、水草、菖蒲、菱、五月者、御菖蒲來獻」

（謡）五月の雨れ調 五月の調は陰りやすきより云ふ。

（謡）五月のめくらいも 五月に早苗を植るときは、「盲人にも容易に植り得らるる」

（謡）五月草に米賣ふな 陰暦五月の早すると、「翌年の米価とすれば」いふ。

（謡）五月女に結男 田植時には女刈入時には男の手を要すること多きこと。

（謡）五月女に金切鋏 田植時の女と、「雲國金屋の倍とは共にもてはやさるること。

こくわつーかぶと 〜五月甲（名）昔、陰暦五月五日に、甲冑などの兵器を飾りし儀式。

こくわつーご 〜五月子（名）五月に生まれたる子。父母に不利あり、として棄つ。「史記」「孟嘗君列傳」「以五月五日生（中略）五月子者、長乘戶戶齊、將不利乎、其父母」

こくわつーまめ 〜五月豆（名）【植】いんげんまめ（菜豆）の異名。

こくわつーせく 〜五月節句（名）五節句の一。五月五日の稱。此の日は幼き男子を祝ふ節句とて、「屋上に菖蒲・蓬を插み、「武者人形・幟などを飾り、「柏餅・粽などを食す。端午。

こくわつーにんぎやう 〜五月人形（名）五月節句に飾る武者人形。

こくわつーねぎ 〜五月葱（名）【植】ねぎ（葱）の異名。

こくわつーのぼり 〜五月幟（名）五月節句にたつる幟。

こくわつーりゅう 〜瓜龍（名）【植】つた（蔦）の異名。

こくわれい 〜護花鈴（名）はなのすず（花鈴）に同じ。「大隅記」「於雪東なる谷を見渡し給へば、紅の緋をもつてたくましく打ちたる繩を永く引きはへ、鈴をあまた所につけ、花に來まる鳥を追ふ。實に心に掛けよ花の鈴となんいひ置きしこと、もおぼし合はせ給ふて、いよいよ御憑もしたる鳥は、鈴の聲にもなれ、爲めに花の鈴となんいひ置きしこと、もおぼし合はせ給ふて、いよいよ御憑

と。

（謡）五月女に賣買ふな 陰暦五月の早すると、「翌年の米価とすれば」いふ。

（謡）五月女に結男 田植時には女刈入時には男の手を要すること多きこと。

（謡）五月女に金切鋏 田植時の女と、「雲國金屋の倍とは共にもてはやさるること。

こくわつーかぶと 〜五月甲（名）昔、陰暦五月五日に、甲冑などの兵器を飾りし儀式。

こくわつーご 〜五月子（名）五月に生まれたる子。父母に不利あり、として棄つ。「史記」「孟嘗君列傳」「以五月五日生（中略）五月子者、長乘戶戶齊、將不利乎、其父母」

こくわつーまめ 〜五月豆（名）【植】いんげんまめ（菜豆）の異名。

こくわつーせく 〜五月節句（名）五節句の一。五月五日の稱。此の日は幼き男子を祝ふ節句とて、「屋上に菖蒲・蓬を插み、「武者人形・幟などを飾り、「柏餅・粽などを食す。端午。

こくわつーにんぎやう 〜五月人形（名）五月節句に飾る武者人形。

こくわつーねぎ 〜五月葱（名）【植】ねぎ（葱）の異名。

こくわつーのぼり 〜五月幟（名）五月節句にたつる幟。

こくわつーりゅう 〜瓜龍（名）【植】つた（蔦）の異名。

こくわれい 〜護花鈴（名）はなのすず（花鈴）に同じ。「大隅記」「於雪東なる谷を見渡し給へば、紅の緋をもつてたくましく打ちたる繩を永く引きはへ、鈴をあまた所につけ、花に來まる鳥を追ふ。實に心に掛けよ花の鈴となんいひ置きしこと、もおぼし合はせ給ふて、いよいよ御憑もしたる鳥は、鈴の聲にもなれ、爲めに花の鈴となんいひ置きしこと、もおぼし合はせ給ふて、いよいよ御憑

有り」

こくわる （名）【植】ぎなしの異名。

こくわんじゃ 小冠（名）こくわんじゃ（小冠者）の略。「著聞集」「こともあちぬ小冠と、愛天を打ちけるほどに」

こくわん 〜孤館（名）さびしき旅館。「平家」「平清盛」「孤館宿時鳳凰宿」

こくわん 〜困關（名）こけん（困關）を見よ。

こくわん 〜五官（名）【一】【醫】五官器により感ずる感覺。即ち、「視覺・聽覺・嗅覺・味覺・觸覺」「荀子」「天論」「天官、耳目鼻口形、能各有一、接而不相一也、夫是之謂天官、心居中虛以治五官、夫是之謂天君」【二】山城國「上賀茂社の神體たる神主・禰宜・權禰宜・祝・權祝の稱。

こくわん 〜互換（名）互ひに交換すること。

こくわん 〜御願（名）りふくわん（立願）の敬語。「宇津保物語」「時の太政大臣、御願あり下して加茂に詣で給ひけるを」「平家」「「鳥羽院の御願、「得長壽院を造進して」」

ごくわんのはたし 御願果（名）けちくわん（結願）に同じ。

こくわんえい 〜古寛永（名）寛文以前に鑄造せる寛永通寶錢。

こくわんーき 〜五官器（名）【醫】天稟の感覺器官。各自固有の刺戟に反應す。即ち、「觸覺（皮膚）・視覺（眼）・聽覺（耳）・味覺（舌）及び嗅覺（鼻）」の五。

こくわんーじ 〜御願寺（名）天皇の願にて建立せられたる寺。「源氏」「天皇の東大寺の類。勅願寺。「著聞」「御願寺になぞらへられにけり」「相國寺塔婆事記」「代御願寺ぐやうの證誠は、他に異なることなり」「多くは法規王參り給ひ、「內陣に其の座を設けらる」

こけ （名）【植】こけ類の總稱。「新古今」「こけ（こさ）の」「こけ（こさ）の」「こけ（こさ）の

けい 敬りそむ、花を衣にかされてぞぬる」

けいの すず 苔蘚 衣装に同じ。字津保 俊蔭「けいのすずのもとに帝りて」

けいの すだれ 苔蘚 苔生びたるものの、垂れ下がりて簾の如くなるもの。字津保 俊蔭「けいのすだれのうちながら」

けいの そで 苔袖 けいのころもの袖。又、けいのころも。新古今 雜上「年くれにれし涙のつらら解けに け、けいの袖にも春やたつらら」新六帖「苔の袖岡くも春し古へ、の、風岡の流れの跡もたえねば」

けいの たも 苔袂 前條に同じ。古今 雜上「みな人は花の衣になりぬなり、苔の袂よかわきだにせよ」新六帖「身に そへぬしくれなりせばなかなかに、苔の袂はほす日あらまし」蜻蛉記 中九「目ちも苔の袂に後ち替へて、花を求めし」

けいの ゆ 苔鹿 苔における露。略 山家 海は苔の露よりしたたりて、波洟洟を農む高水たり」

けいの つゆしも 苔露霜 苔の上における露霜。略 雜上「弱り行きて、此の松が根の苔の露霜と消えし昔の物語」

けいの と 苔戸 わびずまひする人の家の戸。又は其の住居。けいのとぼそ。

けいの とぼそ 苔床 けいのむしろ(苔莚)に同じ。新六帖「枕には苔蒲も敷かで明けにけり、身はならはしの苔の床床かな」

けいかの とびら 苔扉 けいのと(苔戸)に同じ。夫木 冬「山深き岩やの月は明けやらで、苔のとびらに秋風そ吹く」

けいの とぼそ 苔柴 前條に同じ。壬二集「まれに明けし苔の戸ぼそもものとうらぬ月ふかなし」金

槐集「閑り行く袖よりおくか奥山の、苔のとぼそ の路の夕露」

けいの には 苔庭 苔生びたる庭。

けいの ふり 苔振 苔生びたる庭。公任集「花の散るむしろは昔の跡ながら、苔の庭にはあとはかもなし」金槐 山家七百首 冬「冬もきぬ洟しまさる苔の庭、はだれにふれる今朝の初雪」

けいの のき 苔軒 苔生びたる軒。光經集「花すすく、岡御所の水に影見えて、けいの軒端の山の端の月」

けいの は 苔葉 苔を葉に見たてていふ語。夫木 冬「岩の上のこけのはことに同「冷深み年ふりにける岩がねの、苔の葉なびき山風ぞ吹く」

けいの ほら 苔洞 苔生びたるほら。巣山のほらの。夫木「おぼつかなき峰のたきぎを拾ふまに、こけのほらにやあ立つらん」鎌門集 冬「こけのほら松の肩は數多あれど、久しくなりぬ風も鳴らさで」

けいの まがき 苔籬 苔生びたるまがき。略 雜「散りかはる花も紅葉もはては又、苔のまがきに殘る白露」

けいの まくら 苔枕 こけまくら(苔枕)に同じ。壬二集 冬「苔野山すすのしのめに吹く風、こけのまくらに寒ぞおぼめく」

けいの みぎり 苔砌 苔生びたる庭。爲忠百首 冬「むかしくのみぼのいかやを来て見れば、こけの砌に雪降きけり」

けいの みち 苔路 こけぢ(苔路)に同じ。夫木 冬「石の橋うづむもみちもむすぼほれ、苔のみちにや秋や殘らん」

けいの みづら 苔角髮 こけの乱れ下がりたる角髮(髪)に見たてていふ語。堀河百首 冬「年ふれば苔のみづらを結ひ

かけて、岩の髮を神さびにけり」

けいの むしろ 苔莚 ①こけむしろ(苔莚)に同じ。字津保 藤原「岩の上とこけのむしろに様む鶴も、よもさへ永く思ふべきかな」土御門院集「あだにしくこけのむしろの露けさは、都みぬ目の涙なりけり」②山住みの人の敷くむしろ。堀河百首 冬「夜を寒み藤たはしる山里は、苔の莚にれさめをそすする」新後撰 雜「仙人の苔のむしろに身をかくて、いかに千とせをしきしのぶらん」

けいの むすき 苔生木 苔の生ふる木。略 曲は「御をいふなるべし。謠曲 「常世の波も深緑、苔のむすきが岩根の出でしも過ぎ代を經て」

けいの ゆく 苔行方 苔の下に赴きたる後の行末。死したる後。拾遺 愚草「立ちかへり思ふこそなは悲しけれ、名は殘るなら苔の行へに」

けいを しく 苔敷 苔敷物となしたる如く、一面に苔生ふ。字津保 俊蔭「の木なつかしう、こけをしき、いさごをまきて、清げなる陰に立ち寄りて」

けい 鮭 (名) うろこ(鱗)に同じ。こけら。

けい (名) 【動】くろつくみ(黑鷸)の異名。

けい (名) 【植】きのこ(菌)をいふ。北國・美濃・尾張などの方言。

けい (名) 【植】まつばの異名。

けい ～虚假 (名) ①佛語。心内と外相と相調はざることと。(眞實の對) ②惡德の淺きこと。愚かなること。四の教かたること。又、其の人。愚者。(佛用)「虚假」字津床「こやたらにちんかんぷんかかりこそつて(淺)をおとしてゐるたぶ」蜻。

けい に す 苔莚にす。あなどる。

(誹)**けいの あと思案** 下種のあと知非に同じ。げの十(下種)の後を見よ。

(誹)**けい も一心** 愚人も一心に思ひこめば、他の人にまさることある意。

けい 焦 (名) ①こがること。又、其の物。②特に、こげめし(焦飯)の略。

けい 非筒 (名) 茶を盛る圓き器。字津保 藤原「非器・非器」非器 大平記「茶筒なる石をひら鋼み」

けい ～後家 (名) ①夫の死後、其の家を守り居る寡婦。後室。百練抄 三十三 寶治「十三日、故顯朝卿後家二品入滅」著聞集 二「故顯朝卿の後家と不快に成りて」東鑑 建久九 十四 正「故品山三郎重忠後家所領」②必く、寡婦(未亡人)の略。甲陽軍鑑「計死仕りたる者の後家は、甲斐彌前守むすこと配置あり」若風俗「六十餘りの後家が、紅の襦袢して」③新(こ)にてあるべき物の一方失せて、殘りたるものの略。「こけぶた」

けい たつ 後家立 後家となりて操を立つつれども」

(誹)**後家と雲不はさは** 見るは知れぬ 後家の貞操と新の良否とは、外觀のみにては知り難し。

(誹)**後家花を咲かす** 後家になりて後、一花咲かす。

けい ～五家 (名) 支那所宗譜の分流なる、臨濟・潙仰・曹洞・雲門・法眼の五流の略。

けい ～五悔 (名) 佛語。懺悔(ざん)・隨喜(ずい)・勸請(ぐん)・願願(がん)・願願(がん)の略。

けい ～固形 (名) こたい(固體)に同じ。

けい (名) こけ(後家)の訛り。

けいけい (名) みそぎ(禊)の故事。神代紀 神代上「伊弉諾尊、既に黄泉の穢に到りて、十月十日に大禊を行はせられる。而して、十月下旬に川の上流に行幸ましまして、みそぎし給ふこと。又、加茂の

祭院のみそぎにもいふ。源 桂川「御禊式にまさりて、長奈使などし給ふ。常の儀式に同じ。手引 祭「加茂の祭の程に御けいなどの程し、狭衣 四「御禊せんとも、つかひなど、定めさせ給ふにも、長奈 嘆「御禊・大管會とて、世のものしにそぎたり」

けいい 御禊 御禊 御禊をせらるる縫令。代始和抄「これより腰輿に召されて、御禊の縫にうつらせ給ふ」

けいの ぎょうかう 御禊行幸 天皇の御禊の後、河原に行幸せらるること。代始和抄「御禊行幸事」

けいの にょうご 御禊女御 大管會の御禊の時、勅仕する女御。

けいの にょうごだい 御禊女御代 御禊の女御の代理。雅亮裝束抄「わたらは中宮四人、八人などあるは、こけいの女御だいなどの車に乗る折りのことなり」

けい ～御慶 (名) 「よろこび(慶)の敬語。正月御慶、後、此歌、承之」

けい 往來 ～五刑 (名) ①支那にて、墨(ぶん)・劓(はな)・剕(あし)・刑(ち)・宮(去勢)・大辟(しぬ)の五つの刑。唐書 刑法志「男子は劓を劓き、女子は閉宮することと。大辟(しぬ)の五つの刑。時代により一定せず。盛衰記 三 行幸「縱ひ八虐の犯あり て、五刑の法を行はるるとも」書經 舜典「流宥て、五刑を宥て、鞭・撲・流・宮・大辟」②本邦にて、笞・杖・徒・流・死の五つの刑。五罪。

けい ～互惠 (名) 特別の便益又は恩惠を交互に享有すること。

けいたい ～固形體 (名) こたい(固體)に同じ。

けいでらや ～互惠條約 (名) 互惠條約に同じ。

けい 往來 ～五刑 (名) ①支那にて、墨(ぶん)・劓(はな)・剕(あし)・刑(ち)・宮(去勢)・大辟(しぬ)の五つの刑。盛衰記 三 行幸「縱ひ八虐の犯あり て、五刑の法を行はるるとも」書經 舜典「流宥て、五刑を宥て、鞭・撲・流・宮・大辟」②本邦にて、笞・杖・徒・流・死の五つの刑。五罪。

けい ～固形物 (名) 固形の物體。固體のもの。

けいらん 小雞蘭 (名) 【植】蘭科・雞蘭屬の多年生草本。地下に塊根を有し、之より二葉を生ず。葉は淡長卵狀、尖長さ八糎、平行脈を有す。花莖は葉側より生じ、高さ一尺許り。疎なる總狀花序を擬し、苞手、黄色五瓣の不整黄花を開く。我が國・各地の深山・園谷に自生す。きつねえびね。きぶねえびね。きりんらん。きさえびね。ほそばえびね。

けい り 後家人 (名) 後家の方に むこ入りすること。大鏡 道隆「山道御こそ後家入をすれ」の句。長刀を野太刀の鞘にさしこみて」

けいる (自動) ①「まつ」こちへこげいつて、盛のすしを喰はし」②「ば、えいやつと頻ばつて、ようか酒を飲めかし」

けい 萌黄 ～の濃き もの(略)。②裏の色目の名。

けいの 爽・爽井に濃き萌黄。色目 又、諸書 苦色(ごい)と混同して、同異詳かならず。

けい ～五教 (名) ①こじゃう(五常)に同じ。書經 舜典「明于五刑、以弼五教、期于予治」②父は義、母は慈、兄は友、弟は恭、子は孝なるべしとの五つの教へ。

けえ (副) このやう。上總・下總地方の方言。

けおとぎり (名) 【植】金絲桃(ごんしさう)科、橘風する傾きあり。葉は對生、小なる卵形なり。赤・夏に亘りて黄色の小花を開く。我が國・各地の山野に自生す。

けおとし 虚假威 (名) こけの人を威(ど)すのみなること。愚者を威嚇する淺薄の手段。

けおりぬ 苦織衣 (名) こけころも(苦衣)に同じ。金槐集「袖かけの苦つ 調れけん」

けがは 苦革 (名) 革の名。菁華 (ぎょく)にて紋を摺りたるもの。綿華 (ぎょく)。鹿革 (ぎょく)。伊勢 麗帝 (ぎょく)。

けかな (名) 【植】しゅろ(棕櫚)の異名。字津保 藤原「けかなの」

けくさ 焦臭 (副) こげくさきさま。

けくさき 焦臭 (名) こげくさき度合。こげくさきこと。

けくさし 焦臭 (形ク) 物の焦げたるにほひあり。かんこくさし 京 きなくさし 東 かとくさし 關 やくさし 近 かこびくさし 尾 ひなくさし 濃 けくさし 信 ふなくさし 遠 かなくさし 駿 ひなくさし 伊 ぶらくさい 志 (略)。

けくさひ 後家狂 (名) 後家の色香に酒れ狂ふこと。平家 女護島「後家狂せよ眉目(ぶ)わる」

けけ (名・副) いかにも虚假(ど)らしきこと。「ばからしきこと。浮世風呂 「まんざら遊ぶも、けけとして居らし」

けけ 焦焦 (副) よく燒け焦たるさまにいふ語。

けこむ (自動) こうげこむ。冥途飛 「鼎(ぶ)は鼎緒は鼎れて、横さまに泥田へぐわばとこけ込んだり」

けごろも 苦衣 (名) こけのころも(苦衣)に同じ。こけ(苔)の條を見よ。新後撰 雜上「夜なる夜なの涙しなくばこけ衣、秋おく露のほどは見てまし」夫木 山深き谷の垣ほのこけ衣、露けき程も誰れか見てみん」源 氏 苦衣 苔衣 露けき程も誰れか見ん」

けさ 苦小波 (名) 細かにたたむさざなみ。夫木 「柏くだすいぶきが奥の河上に、たつきりうつらしこけさなみ

けさ 袈裟 (名) 【佛】僧侶の法衣。梵語 Kasaya の音譯。「袈裟」は赤色の意。「袈裟」は赤色の意。「袈裟」は赤色の意。「袈裟」は赤色の意。

けさ 今朝 (名) 今日の朝。

けさ 今朝 (名) 今日の朝。

けさ 今朝 (名) 今日の朝

けた 紙（名）吉野より産する小廣形原紙。

けたぶし 後家倒（名）〔後家の寡婦が棒を棒と蓋と〕いなこき（稲扱）をいふ。農内の方言。

けたべ 苦路（名）苦の生ひたる路。永久百首「冬枯の苦路に綫れる卿は、苦路に綫れる卿とぞ見る」夫木抄「飯りにけり山はこけむのにしきにて、紅葉を洗ふ谷の岩水」

けたもや 焦茶（名）次條の略。

けたもやいろ 焦茶色（名）染色の名。濃き茶色。物の焦げたる如き色したるより いふ。

けたよりう （名）【植】つるぼ（絹裘兒）の異名。

けつ 〜虎穴（名）1虎のすめる穴。2極めて危険なる場所。李白詩「高里猿啼、哀猿虎穴」

（諺）虎穴に入らざれば虎子を得ず　虎を捕まざれば苟功を奏し難し。後漢書「不入虎穴、不得虎子」

けつ 〜古碑（名）ふるき墓碑。年經りたる碑。劉禹錫詩「荒臺側生草、古碑臥鮮苔」

けつ 〜固結　固く結ばるること。固結することと。蘇衡文「洪恩義著、民心固結」

けつ 〜涸竭　枯竭　涸れ竭くること。水分の乾枯はつることと。論衡「江河之水中道無長、無完皮血脈枯竭」

けつ 〜孤月（名）一輪の月。もの寂しき月。拙作詩「雨孤月高、樓閣」

けつ 焦附（名）1次條のこげつくこと。2次條の略。

けつ 紙（名）吉野より産する小廣形原紙。

けつ 〜こげつく　焦げつきたるもの。

けつ 〜そうば　焦附相場（名）取引所の語。變動なき相場。

けつ 〜つく　焦附（自動）焦げて物につく。

けつ 〜とり　轉徳利（名）徳利の倒るること。又、その倒れたる徳利。

（諺）けつ徳利で出放題　徳利の轉がたるままにすれば、中の物の出づる如く、口より出まかせに言ひ出づること。

けつ 〜なかせ　後家泣（名）いなこき（稲扱）をいふ。越後國の方言。

けつ 〜にん　〜御家人（名）1けにん（家人）の敬稱。2武家の臣下。いへのこ。平治物語「當時代の御家人達を御憑みあるうて、東の方へとこそ仰せ候ひし」東鑑「治承四年三月廿日」「景親手爲、源家當代御家人」3江戸時代、將軍家の直參にて、御目見以下の士。

けつ 〜なみ　御家人並（名）御家人になら匹敵すること。又、その身分。曾我物語「御直の御用承り、御近習の御家人なみの安堵の御判」

けつ 〜のみ（名）としよりじつ（社松實）に同じ。

けつ 〜むすまめ　苦生豆（名）しんせいまめ（眞盛豆）に同じ。醒睡笑「苦海苦を煎豆につけたる菜子、太閤の御前へ出だしたれば、國藏法印向かはせ給ひ、何と何と有りし時、君が代は千代に八千代にさざれ石の、いはほとなりて苦のむすまめ」

けつ 〜ぶた　後家蓋（名）器物の身に別の蓋。他より借りて代用せる蓋。

けつ 〜ぶん　〜後家分（名）後家相應の分。平治物語「若狭、美濃、尾張、三國の後家分を、平家方へ宛行はれ、其外、國々の地頭、御家人に、宛行はれ、其外、國々の地頭、御家人に、宛行はれ、其外、國々の地頭、御家人に、

んよは上手中書ここまで お出で、甘酒進じよ」

（諺）此處を囲んだら彼處が上からうかゝ 彼れと「此れと」、相手に心配するさまにいふ。蓬寺王山書「ここを囲んだらあそこが上がらうかゝ」

こう 九（數） ここの つ（九個）の略。記「かがなべて、夜には許許己己の衾、ひには十かを」

こう-こう 一戸一戸 ■一戸一戸。家ごと。毎戸。商法帳「戸に説き又は道路に於て物を賣買する者」■何れの家も殘らず。家ごと。各戸。各家。東京夢華錄「街巷鋪席、戸戸高仙」

こう-こう 一瓜瓜 乳兒の啼く聲にいふ語。書源鑑「啼瓜瓜而泣」

こう-こう 一箇箇 個個 ひとつひとつ。いちいち。商賈語「箇箇同一の惡き、箇箇同樣の道すがらに、今に絶えせぬ跡とかや」保元物語「箇箇の契約」

こう-こう 一箇箇別別 ひとつひとつ各別なるさまにいふ語。

こう-こう （名）「こう（供御）の略」 食物。たべもの。長明文藝切「釋迦牟尼の御供の招伴やら、おこうやら、蓬萊屋で支度して」

こう-こう 一古語 （名）■こけん（古言）に同じ。選歩色葉「古語」 蘇軾詩「古語多用妙字、可、讀不、可、讀」■ことば（故事）に同じ。用明天皇書人慶「古語に傳へし歌、れの つは昔の文を目の前に、今見ることの不思議さよ」

こう-こう 一故吾 （名） もとのわれ。ままの者が身。莊子「雖忘乎手故吾、吾有不忘者存乎」

こう-こう 一五古 （名） ごこんし（五言古詩）の略。

こう-こう 一五絶 （名） ごごしょく（五絶句）の略。

こう-こう 一故國 （名） ■ふるくより ある國。昔ありし國。もとの國。「所謂故國者、非謂有喬木之謂也、有世臣之謂也」史記秦始皇紀「食手遂故國、而悲思西河行交」蓬萊谷之故國」■ふるさと。故郷。天神記「故國の空のはるけきを、遥かに遥ふ故衣」 歳國賦「柳下惠史記於魯、三黜而不、去、去、故國」 杜牧詩「取、條他鄉客、相逢故國人」

こう-こう 一古國 （名） 歴史上ふるき國。蒼國。同名雲詩「古國群雄、前宗柳柏國」

こう-こう 一柳國 （名） 夷狄の國。えびすの國。野蠻國。保元物語「蒙武が胡國に起きしも、再び漢家眞番郡里の月に隠りし」 論語「是れは胡國の英の大將、呼延邪單于が國寶なり」

こう-こう 一五穀 （名） ■米・麥・黍・粟・豆の五種の穀物。一説、米・麻・粟・麥・豆。記語「穀・黍・稷・麥・豆。」論語「黍・粱・稷・麻・菽・麥・豆。」 論語「一定せず。」 論語「子曰、麻不、如、五穀、穀、給貧之以樂」■穀類の總稱。字書「保豐曰、穀、ふ、ふせんに五こくいるべし、穀物るに土いるべし」 宇治拾遺「久しく行ふ上人ありけり。五こくを斷つて年來になりゐ」 莊子「雖、不、食五穀、飯、風飲、露」

こう-こう の かみ 五穀神 稚產靈命。令。食稻魂命、神の稱。

（諺）五穀は民の子 五穀は農民の幸吉の結果になること。

こう-こう 一五黑 （名） 佛語。「こく（黑）は汚染不淨の義」ごこく（五惡）に同じ。

こう-こう 一護國 國家を擁護すること。國家を鎮護すること。

こう-こう の きんぷ 護國三部 佛語。法華經・仁王經・法華經・金光明最勝王經の

同和尊書「以小指書、非、所、謂一部、市、五手指、成、爲、國口計」

ごこう-ごみん 五公五民 （名） 全作物の五分を租稅として官に納め、其の五分を民の所得とすること。

ごこう-じつ 一戸口實査 （名） 實地戸口規則「奉送管吏は住家に臨み戸口實査を受くる者は之を拒むことを得ず」

ごこう-じつ 一戸口調査 （名） 實地住家に臨みて、其の戸口を調査すること。

ごこう-じつ 一戸口調査簿 （名） 商賈にて、戸口に關する事項を記載するため編・支編に備ふる帳簿。戸口規則「戸口調査簿」

ごこく-じに 凍死 （名） 寒さのため、こごえて死ぬこと。太平記「北國下行勢、こごえじにの事」 鎌倉加賀多「内に其き火のまさまさと、色を見ながらこごえ死にしたるよな」

ごこく-つく 凍附 （自動） こごえて くつつく。こほりつく。 寒鈴集「鉢を取る手さへ涙にこごえつき」

ごこく-はつ 凍果 （自動） こごえきる。全くこごゆ。 狂言「霜月・師走の曉の風に吹かれて、寒さは寒し、のなたくは ひらりしやらり、こなたくはひらりしや らりと、こごえはてた有樣を」

ごこる 凍 （自動） こごゆ（凍）の口語。

ごこ-かし 此處彼處 （代） ここと こちらかのところ。竹取「穴をくじり、ここと かしこよりのぞきかいまみまどひあつ へりし勢」 「ここかしこより、其の人のもとと いなんずなりとて」 源氏「打橋・渡殿、

ここかしこの道に」

ごこ-こ 一故國 （名） ■ふるくより ある國。昔ありし國。もとの國。「所謂故國者、非謂有喬木之謂也、有世臣之謂也」史記秦始皇紀「食手遂故國、而悲思西河行交」蓬萊谷之故國」■ふるさと。故郷。天神記「故國の空のはるけきを、遥かに遥ふ故衣」 歳國賦「柳下惠史記於魯、三黜而不、去、去、故國」 杜牧詩「取、條他鄉客、相逢故國人」

ごこ-こ 一古國 （名） 歴史上ふるき國。蒼國。同名雲詩「古國群雄、前宗柳柏國」

ごこ-こ 一柳國 （名） 夷狄の國。えびすの國。野蠻國。保元物語「蒙武が胡國に起きしも、再び漢家眞番郡里の月に隠りし」 論語「是れは胡國の英の大將、呼延邪單于が國寶なり」

ごこ-こ 一五穀 （名） ■米・麥・黍・粟・豆の五種の穀物。一説、米・麻・粟・麥・豆。記語「穀・黍・稷・麥・豆。」論語「黍・粱・稷・麻・菽・麥・豆。」 論語「一定せず。」 論語「子曰、麻不、如、五穀、穀、給貧之以樂」■穀類の總稱。字書「保豐曰、穀、ふ、ふせんに五こくいるべし、穀物るに土いるべし」 宇治拾遺「久しく行ふ上人ありけり。五こくを斷つて年來になりゐ」 莊子「雖、不、食五穀、飯、風飲、露」

ごこく の かみ 五穀神 稚產靈命。令。食稻魂命、神の稱。

（諺）五穀は民の子 五穀は農民の幸吉の結果になること。

ごこ-こく 一五黑 （名） 佛語。「こく（黑）は汚染不淨の義」ごこく（五惡）に同じ。

ごこ-こく 一護國 國家を擁護すること。國家を鎮護すること。

ごこく の きんぷ 護國三部 佛語。法華經・仁王經・法華經・金光明最勝王經の

三部の經典。此の經中には國王執政の要を說けるを以て、古來國家鎭護の祈願に讀誦したる故にいふ。

ごーふく　一夜刻（名）ちょっとの。のちほど。博多小女郎波枕「一夜の話は後刻後刻」

ごえーつぶし　五穀潰（名）徒らに五穀を食ひつぶすこと。又その人。ここくつぶし。源氏蜻蛉「五穀つぶしの姿穀潰げ」

ごーころ　小心　子心（名）子供心。小さき人の心。太平記「汝幼くとも父が子ならば、是れほど無禮に逆ふらてもみよかし」御所櫻堀川夜討「子心にさこそ主殺の道を辨ふるに」

ごーぶさた　小御座松（名）ごぶさた（御座松）を見よ。

ごーまま　御御謀（名）人の妻の敬稱。仙臺の方言。

ごし（形ク）小供めく。おぼこめく。大やうなり。落窪「ここしければ、らうたしと思ひて」源氏「舞のさま手づかひなん、家の子はことなる中將にいとよかしこけれど、ここしうなまめいたるすぢかをえなん見せぬ」同「清家」かちら中將の素手ももたびも中てつべき命人どものうらけばつきどもをとこそ結ませ、少しここしきまかせて、大將めとて、大將にいと深からざらんは、罪も消えてここしらうらうたかるべきわざなり」

ごーし　小腰（名）❶腰。松風村雨束帶鑑「手元・小腰をゆり合はせて、舞うつけて結ぶ羽衣の面白さよ」「風所八島」小腰に取りつ拂きつ袖を翻す。❷女の裳の腰の左右に取り付けて結ぶ紐。小腰を見よ。

ごし　小腰屈　少し腰をかがかおむ。

ごーし　小與（名）輿の一種。屋形なく、客の四邊に欄を回らしたるもの。

ごーじ　八日最勝講の時、講讀師之に乘る。貞觀儀式「正月八日最勝講、講讀師前行者、左右相分引進僕式」

ごし（形ク）けはし。險阻なり。寓「神さびるいはねこ凝敷（ごしみ）よし野の、みくまり山を見れば悲しも」同「いはがねの許凝敷（ごし）道の、いはどこの根はへるかどに」同「許其敷（ごし）かも、いはのかむさびし」

ごーし　ごしさに。ごしくて。寓「あしびきのいはね許其思美（ごし）、すがのねを引かばかたみとしめのみぞ結ぶ」

ごーしもう　小小姓（名）未だ元服せずして、近習に祗候する者。心中寓年「卒「朋輩は皆小小姓の、頭を赤めて挨拶せず」

ごーしよ　小御所（名）❶禁中清涼殿の東北にある宮殿。昔時、幕府の使臣又は所司代などに謁見を賜はりし所。❷將軍などの若君の住所。又若君の稱。天御所の對）東鑑「二月廿三日、若君、小御所御所に渡御」

醫師等之地、**醫師・醫官等奉行之**」同「御所所侍面面、有若此儀」蜻川親俊記「安宅町時代、禁中にて、將軍家參內の時の休息所。足利氏清涼殿記「源清麿公參內の時は、禁中に便宜所として休息殿あり。足れも禁中の上下、小御所と申しあり」

ごーしよ　五鈷杵（名）金剛杵の一種。其の兩端が各五つの鋭より成るもの。

ごーこ　我虎（ごこ）行「小腰屈し腰つきに」

ごーこし　小與（名）輿の一種。屋形なく、客の四邊に欄を回らしたるもの。

ごーこ　八日最勝講の時、伊賀の堺にて乘用し給ひ、又正月廿日僕式「正月八日最勝講、講讀師加之に乘る。貞觀儀式「正月八日最勝講、講讀師前行者、左右相分引進僕式」

ごし（形ク）けはし。險阻なり。寓「神さびるいはねこ凝敷（ごしみ）よし野の、みくまり山を見れば悲しも」同「いはがねの許凝敷（ごし）道の、いはどこの根はへるかどに」同「許其敷（ごし）かも、いはのかむさびし」

ごーし　ごしさに。ごしくて。寓「あしびきのいはね許其思美（ごし）、すがのねを引かばかたみとしめのみぞ結ぶ」

ごーしもう　小小姓（名）未だ元服せずして、近習に祗候する者。心中寓年「卒「朋輩は皆小小姓の、頭を赤めて挨拶せず」

ごーしよ　小御所（名）❶禁中清涼殿の東北にある宮殿。昔時、幕府の使臣又は所司代などに謁見を賜はりし所。❷將軍などの若君の住所。又若君の稱。天御所の對）東鑑「二月廿三日、若君、小御所御所に渡御」

ごーこ　八日最勝講の時、講讀師加之に乘る。貞觀儀式「正月八日最勝講、講讀師前行者、左右相分引進僕式」

ごし（形ク）けはし。險阻なり。寓「神さびるいはねこ凝敷（ごしみ）よし野の、みくまり山を見れば悲しも」同「いはがねの許凝敷（ごし）道の、いはどこの根はへるかどに」同「許其敷（ごし）かも、いはのかむさびし」

**ご

古歌倉七巻題「合字の十の蓮花や、九つの花の蕊の花の頭」

ここのよ 九世 冥途。黄泉。
藻鹽草「冥途。ここのつのよ」

ここのつ-いしだたみ 九石 (名) 矢倉の略。

ここのつ-いしだたみ 九石畳 (名) 紋所の名。

ここのつ-うろこ 九鱗 (名) 紋所の名。

ここのつ-かなわ 九金輪 (名) 紋所の名。

ここのつ-くみき 九組木 (名) 紋所の名。

ここのつ-じぶん 九時分 (名) ■九つ時のころ。甲陽軍鑑「亥は九つ時分迄」 ■軍鑑「甲州勝軍鑑」は九つ時分迄 軍鑑「総別器用だてをする者は無分別の九つ時分」

ここのつ-どき 九時 (名) 昔時の名。正午又は夜半。卯ち、午前の十二時と午後の十二時との称。ここのつ。
「時」参照 名義抄「九つ時」

ここのつ-ばしご 九梯子 (名) 段に九つある梯子。假名手本忠臣蔵「幸ひ変の節柴毛「九つばしごを二階へかけて」

ここのつ-へ 九重 (名) ■九つ重なりたること。「朝まだき八重咲く菊のここのへに、見ゆるは霜のおけるなりけり」新古今 ■ここのへに、見ゆることの、ここのへを知るは人もなし」 ■山吹の、いはぬ色をばなに知るらん 人重咲く山吹の、ここのへに、九天あるいふ九門 ■天に九天といふ九門 ■きんぢゆう(禁中)の異称。大和物語「大内山山人、ここのへに、見ゆ」 ■紀後撰紀「白雲の九重(ここのへ)のみ垣のもとに」 ■ここのへに、九天あるいふ九門 ■きんぢゆう(禁中)の異称。大和物語「大内山山人、ここのへに、見ゆ」 ■紀後撰紀「白雲の九重(ここのへ)のみ垣のもとに」

ここのへ-ざく 九重菊 (名) 紋所の名。

ここのへ-ぜ 九重座 (名) 咒の名所。
はちまんぐ(八幡座)の異名。

ここのへ-びと 九重人 (名) 禁中に出仕する人。おほみやびと。夫木「雲のたつ八重やまぶきの花ざかり、ここのへびとに折らせてしがな」

ここば 虎虎婆 (梵 Huhuva) (名) ここばちごく(虎婆地獄)の略。

ここば 幾許 (副) ここだ(幾許)に同じ。 ■寛平御時后宮歌合「白雲のたえにしいもを、あぜせ見ると、心にのりて許己婆(ここば)かなしけ」同「秋の夜を長みにかあらむ、なぞ許己波(ここば)いのねらえぬに獨ぬればか」

ここばく 幾許 (副) 尚能に同じ。 ■竹取「見ずまにはこのねた花さきぬ、許己婆久(ここばく)もうしやうの御子等など、物に堪き合はせて仕奉るべき中に」

ここばくさい 一後五百歳 (名) ここのへをかく立ち調らすらん」 ■禁中のあるところ。帝都。京都。謡曲「我が都の都路隔てきて、九重の雲にいそがん」 同謡曲「九重つづく八幡山」

ここのへ-の-うち 九重中 ここのへ(九重)に同じ。枕「憂中書「ここのへのうちに鳴かぬそ、いとわろき」 源聞「三千の列にも召しおかれて、九の重のうちにてのすみかをも、御はからひ有るべきにてありけるを」

ここのへ-の-みや 九重宮 尚能に同じ。栄華「九重の宮の内に遊戯し給ふこと、彼の切利天女の快樂をうけて歓ぶに、荒宛の内に遊戯するに劣らず」

ここのへ-ざく 九重菊 (名) 紋所の名。

**ここのへ-ざ

「しばしばもいかが忘れん」君をぞ心くもらすかくまのの月」藤千歳集中二三代まで君にあふかの鏡山「心くもらばいかが見るべき」

こころ　くる　心暮　心惑ひて前後の分別なきに至る。曾根崎心中「闇くに心もくれは烏」

こころ　こと　心異　其れに對する心も特別。心もちひ格別。竹取「天の羽衣中」きぬきつる人は「心ことになるなりといふ」字津保埋「上」よに心ことに思はれ給へる」枕「家中」をを底のわきてたちに調ふらんも「心ことなる物のねを猶ぞ尋らし」源氏「夢心ことなる物のねを猶ぞ尋らし」

こころ　ことはも　およばず　心言葉不及　如何に心言葉をつくしても「表はし難し」。口舌に及び難し。斎聞「祭合儀式後の荘厳心ことも葉も及びがたし」

こころ　さがしらな　心さかしらな心。新拾遺日記「そへたる文に「心さかしらついたるやうに見えつるも心にはなん」狭衣「とかくまことゆとかひあるべきなら ねば「ただみづからの心さかしらにはやる」

こころ　さわぐ　心騒　心おちゐず。胸さわぎす。字治拾遺「日もくれ「心もさわぎて」新六帖「今は又とふべきものと頼まねば「心さわがぬ家の上風」

こころ　しらる　心時雨　心しめりがちなり。夫木「前無月なほ定めなき雲よりも「心しらるる夕暮の空」

こころ　しづむ　心鎮　心を落ちつかす。萬「まき桂大き心もあり しかど「此の言が心鎮日(ひねもす)かねつも」同「から國の鏡を むむ行平げて「みな行平日記解豆来(ひねもす)給ふと」新六帖「もしやとて心しづむる夕暮に「こまぬく舟を底に漕ぐ」

こころ　しみぼる　心染水　心ひえ寒

注意深し。勢語「心かしこくやあらざりけん」はかなき人の事につきて「人の國なりける人に使はれて」字津保巻「此の中にかたち落げに「こころかしこき人の一にたてられ給ふ」枕「夜中」明いと心かしこくもなく中宮人の出でありたとして」

こころ　かたし　心固　奪恋案固なり。心づよし。北夜集「心かたき女のもとに」砂石集「餘りに心かたきものは「我が身に怨しむ事有り」

こころ　かはす　心交　互ひに心をかよはす。源氏「忍びて心かはせる人ぞあるやありけらし中宮もとよりの心をかはせるにまにはつれしみは かはをを「心かはしていかでむかん」

こころ　かはる　心變　心がはりす。變心す。栄華「出「この母宮には「殿は今は心卯心かはりて」

こころ　きかす　心利　氣をきかす。心をはたらかす。貞古敦信七慕題「心きかせて「そこそこの風を見合はす引き舟や」

こころ　きれる　心切　思ひきりよくあり。氣がきく。賀古敦信七慕題「身代よしの梓大盤「心のきれた捌き手の「遣手に渡山物大盤「れる好い客様」

こころ　くだく　心碎　ちちに思ひくだく。思ひ惑る。心屈す。萬「むらきもの心碎(ひねもす)て「死なむ命後かになりぬ」源氏「考かひなき事かなと心くだけて「つらく思しければ「人知れず音をのみ泣き給ふ」

こころ　くるる　心暮　心にくもり生ず。心にらしらくらきことあり。玉葉「恋

注意深し。勢語「心かしこくやあらざりけん」はかなき人の事につきて「人の國なりける人に使はれて」字津保巻「此の中にかたち落げに「こころかしこき人の一にたてられ給ふ」枕「夜中」明いと心かしこくもなく中宮人の出でありたとして」

こころ　かたし　心固　奪恋案固なり。心づよし。北夜集「心かたき女のもとに」砂石集「餘りに心かたきものは「我が身に怨しむ事有り」

こころ　かはす　心交　互ひに心をかよはす。源氏「忍びて心かはせる人ぞあるやありけん」狭恋百首「「たまぼこのひまにはつれしみは かはをを「心かはしていかでむかん」

こころ　かはる　心變　心がはりす。變心す。栄華「出「この母宮には「殿は今は心卯心かはりて」

こころ　きかす　心利　氣をきかす。心をはたらかす。貞古敦信七慕題「心きかせて「そこそこの風を見合はす引き舟や」

こころ　きれる　心切　思ひきりよくあり。氣がきく。賀古敦信七慕題「身代よしの梓大盤「心のきれた捌き手の「遣手に渡山物大盤「れる好い客様」

こころ　くだく　心碎　ちちに思ひくだく。思ひ惑る。心屈す。萬「むらきもの心碎(ひねもす)て「死なむ命後かになりぬ」源氏「考かひなき事かなと心くだけて「つらく思しければ「人知れず音をのみ泣き給ふ」

こころ　くるる　心暮　心にくもり生ず。心にらしらくらきことあり。玉葉「恋

心にしみて おぼえる。心に染む。宇治拾遺「身も切るやうに「心染む」。宇治拾遺「「足れを聞くに死ぬべき心ちす」

こころ　しむ　心絞　油斷せず。氣をしむ。曾我今物語「山「詰成の目やきめんと「心しめたる高からげ」

こころ　しる　心入　心深く留まる。心にかなふ。源氏「「心いる方ならませば「弓張の月なき空に迷はましを」後拾遺「「恋ならぬ山の櫻に心いりて「池の遊をしひたる放ちそ」

こころ　いろなり　心色　いろこころなり。萬葉集「さらだに心色なる女郎花「うつなびきけり秋の野風に」

こころ　うごく　心動　心感し動く。心さわぐ。思ひ惑る。萬「ほとときす「「「

て慰しきものを」勢語「佛の御名を御心に入れて」枕「から心にいれて思ひけるを」たがくたれば頼らん」　回心にかなふ。氣に入る。源斎考「此の内記は望むことありて、夜ひるいかで御心にいらんと思ふこころ」新千載雑下「若言はるのこころにいるものは高まど山の櫻なりけり」　回よくわかる。了解す。手に入る。落窪一「習はしおいる給らけるままに、しやうの琴を世にをかしく聞き給ひければ中書琴心に入りたりとて、これ習はせと北の方の給へば」讃千載雑下「西へ行く月をやよそに思ふらん、心に入らぬ人のためには」

こころに うかぶ　浮心　思ひうかぶ。

續後撰雑中「うき身こそ箱山かけに沈めども、心にうかぶ月を見せばや」新和歌集雑上「おのづから心にうかぶうたたねの、消えずはありとも夢かとも見じ」

こころに うく　受心　心に快く受けて入る。仏説観無量寿経記「最初より、心に受けぬ仏言を聞き」

こころに おくる　送心　心の中に見送る。月清集「ただ今そ時雨と告げて行く雁を、心におくる春のあけぼの」新後拾遺雑「山のはにかたぶく方を都として、心におくる有りあけの月」

こころに おつ　落心　心の中にて悲しむ。讃古今雑上「なかむれば心に落つる涙かな、いかなる時ぞ秋の夕べか」

こころに おとはず　心不及考へに及ばず。意想外なり。源氏末「世の有様にも見給へ集むるままに、心におとはずいとゆかしきことも多しや」

こころに かかる　掛心　気になる。心がかりとなる。念頭にかかる。源夕「はかなかりしタベより、あやしう心にかかりて」栄華花「若宮の御有様を、いつ

と慰しう御心にかかりて思しめす」

こころに かく　掛心　気にかく。心がく。源蜻「そのかみやいかがはありしゆふ雨、心にかけて忍ぶらんゆゑ」同蜻「心にかけて、いかにいかにとは、絶えず思ひきこえ給へれど」續後撰中「あけくれは心にかけし草の庵の、雨の中にうちもそ思ひ知りぬる」

こころに かなふ　適心　❶心の思ふやうになる。意の如くになる。古今雑「命だに心にかなふものならば何か別れの悲しからまし」手習保考「世を逃げまどになさんといふとも、心にかなふものならば、まかせて見んと思ふ」　回気に入る。好もしく思ふ。大和物語「機る人は心にかなふ離絡、うつ色衰に句ひたりけり」

こころに くもる　曇心　心の中にてくもる。心のためにくもる。新古今春上「春を身にはながむるかひもなかりけり、心に曇る秋の夜の月」

こころに こがす　焦心　心にて思ひこがれしむ。讃後撰恋一「明だにそれとは見えじ、おきなく心にこがす下の思ひは」

こころに こたふ　應心　胸にこたへる。心中に思ひあたる。堀河百首「女房は心にこたへ、草沙汰の夫の心も附くやとて」

こころに こむ　籠心、心中にひめおく。源蜻「心にこめて、よろづにに思ひ込め給へり」讃古今雑上「何事も心に籠めてしのぶるを、いかで涙のまづ知りぬらん」玉葉雑四「言の葉に出でし涙は袖にきはてて、心にこむる憂さになりぬる」

こころに こる　心凝　心がけがる。心沿ふならず。砂石集「一座分の中にして、心凝り至極に拾遺せば、道にとはからんこと思しきを、心にかけ

こころのすがた　心姿　心の移り行く末。新後撰雑中「契りこし心の末は知らねども、此の一ことやかはらざらん」玉葉雑三「憑しきを遠ひ見んまでと思ひしは、心の末を知らぬなりけり」

こころのせい　心参　心のやうす。心の向ふさま。盛衰記十「北條四郎時政は中国兵衛佐の心の勢を見てければ、後には深く恐ふてけり」

こころのそき　心間　[1]思ふ事を通さず、人に聞くべく、聞に聞くべく云ふ語。頭書雑院集「人もまた心の間を誰れすふて、又あふ坂に流逝ぶらん」新千載雑三「夏を人の心の間に打ちもねで、参詣をさくべき許さざりけり」[2]心にて案ずる留め、人とすることを、聞に聞くべく云ふ語。月詣集「惜しむ心はまことにて、ここの間はふかひなしけり」

こころのそこ　心底　[1]心の奥。しんそこ。しんてい。千載雑三「あかつきの嵐にたぐふ鐘の音を、心の底にこたへてぞ聞く」源氏帚木「れんごうに中しおくこと侍りき。其のことは、心のそこにとまりて」[2]かくし許りのなき心中。拾遺十七「流水朝宗之義、底有心源」源氏帚木「もてなしなど、けしうはあらぬ心の底ゆかしく、心の底ゆかしきまでして」

こころのそら　心空　[1]心のひま。源氏行幸「よろづひと三條にさぶらひ給ひて、こころのそらなりしものし給ひて」[2]こころそら(心空)に同じ。拾遺雑賀「君をのみ思ひやりつつ月日もゆく、心の空にぞ山なりし行かなと」後拾遺雑下「いふかにせんの鐘に花にとまりて、心の空に出田語。赤染衛門集「思をはこの月日も移りしぬ、心の空にぞ山なりし行かなと」[3]心を空に聞くべく云ふ語。

こころのたけ　心丈　心のありたけ。思ひのたけ。山家集「もの思ふ心のたけぞ知られぬる、中よりよりなる月をながめあかして」新和歌集雑「君が身に命しと聞きし佛にぞ、心のたけもあらはれにける」夫木雑「うき世とはいつもさこれにけるし」夫木雑「うき世とはいつもさこれ、そは思へども、心のたけを月に知りぬる」

こころのたけ　心竹　直(正)なる心を竹に譬へていふ語。聖徳太子伝暦記推古「ゆがまず直なる心の竹を立て初むる、一二の枝の房やかに」

こころのたね　心種　心を草木の種に譬へていふ語。古今序「やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれり」現存六帖「夏き人の心の種の忘草、うたてある世になと生ひにけん」新千載雑「苗代に心の種を詩きそへて、鳴くやかはづの声のやまと言の葉」

こころのたま　心玉　[1]心を玉に譬へていふ語。玉葉雑「あきらけきひじりの御代に二かくり、心の玉を又みがくかな」夫木雑「月見ればやがて秋の清るるかな、心の玉や水をとるらん」[2]玉の玉に魂をかけていふ語。日本紀神武「清ゆるは露より心の玉」

こころのちり　心塵　心の汚れ。如信「宇津保雑「我がくべく心のちりは雲となり、浴つる涙は海となるかな」

こころのつき　心尽　心に生ずる種々の思ひを草に譬へていふ語。夫木草「物思ふ恋ぢや冬のほかなら、心の草は繁かれもなし」

こころのつせ　心瀬　こころせ(心瀬)に同じ。拾遺月「こころ目とまること耳にたつこと多かりつれど、我がこころのくせにやと思ひけちつつを」同雑「なくて年心つかぬ心のくせとも覚しやすらんと、思ふ力もなくさあられしを」

こころのつま　心妻　他に離する心の部分。心の奥深きところ。後撰雑五「人はかふ心のくまはきたなくて、清き清きを、ふかで過ぎけん」源氏夕「つつみ給ふ御心のくま、残らずもてなし給はんなん」

こころのくも　心雲　心まよひて明らかならざるを雲に譬へていふ語。風雅十「其の夫木雑「身をも病うしとはいはじ、今は唯だ心の雲に迷かせて」後撰雑四「秋の夜は心の雲も晴れにけり、まことの月の澄むにまかせて」

こころのこころわ　如意輪　[如意輪の字の直譚]によいりん(如意輪)に同じ。夫木雑「何事もこころの如き輪圓の、法のはじめにめぐりあひぬる」

こころのこほり　心氷　心の結ぼれたるを氷に譬へていふ語。百寺若大臣野守鏡「心の氷解けそめて、谷の月水出づる蓑の」家綱集「年を忍ぶ心の氷三百月、身も懐ゆゆる夜に」

こころのこま　心駒　こころのうま(意馬)に同じ。頭丸「若い心の駒は日に千度、鞭しき方に走り井の」

こころのさくら　心櫻　こころのはな(心花)に同じ。源氏鳥飼「千折[illegible]老木の枝は朽ぬとも、心の櫻花やかに」

こころのさけび　心叫　こころのちり(心塵)に同じ。五十年忌歌合弾「庭下、心の叫びも哀なる時きたて」

こころのさる　心猿　下文を見よ。夫竹集「心の猿とは、心のさわがしき事をいふ也」

こころのし　心師　心を教へ導くもの。新六帖「おろかなる心の師とはなりぬとも、思ふおもひに身をばよわせじ」源氏賢「心を心の師と頼みゐ」延喜御「願作心師天心師於心」

こころのしめ　心注連　心にかけて神を祈ることと。神に祈りて心を慎み守ることと。新古今雑「神風や山日の原の榊葉に、心のしめをかけぬ日もなき」和泉式部集「さを鹿の朝たちすだく浅原に、心のしめは結ぶかひもなし」

こころのしるべ　心案内　[1]己れの心源をしるべとすることと。心のみちびき。[2]人たがいにこそ待れ中世ふがふべくもあらぬこころのしるべ、思はずに山日の原の榊葉に、心のしめをかけぬ日もなき」[3]ふて(菲)の異名。

こころのすき　心杉　杉は直ぐなる語もの。なれば、心の直なるに譬へていふ語。新古今雑三「誰れ云ふ人の三輪の檜原山ぞ」本院侍従集「夜しの心のすきは神山ぞ」

こころのすみにたにものの　心の正直ならぬもの。拾遺・かたりの類。狂言雷「これは此のあたりを走りまはる、心の直ぐもすくにない者でござる」同浦「是れは洛中にかくれもない、心の直ぐにない者でござる」

こころのすまい　心隠　心の片すみ。心のくまぐ。山家集雑「流水の心の奥。

こころのそこ　心底　[1]心の奥。しんそこ。しんてい。千載雑三「あかつきの嵐にたぐふ鐘の音を、心の底にこたへてぞ聞く」源氏帚木「れんごうに中しおくこと侍りき。其のことは、心のそこにとまりて」[2]かくし許りのなき心中。拾遺十七「流水朝宗之義、底有心源」源氏帚木「もてなしなど、けしうはあらぬ心の底ゆかしく、心の底ゆかしきまでして」

こころのそら　心空　[1]心のひま。源氏行幸「よろづひと三條にさぶらひて、こころのそらなりしものし給ひて」[2]こころそら(心空)に同じ。拾遺雑賀「君をのみ思ひやりつつ月日もゆく、心の空にぞ山なりし行かなと」後拾遺雑下「いふかにせんの鐘に花にとまりて、心の空に出田語。赤染衛門集「流水の心の奥をはこの月日も移りしぬ、心の空にぞ山なりし行かなと」[3]心を空に聞くべく云ふ語。

こころのたけ　心丈　心のありたけ。思ひのたけ。山家集「もの思ふ心のたけぞ知られぬる、中よりよりなる月をながめあかして」新和歌集雑「君が身に命しと聞きし佛にぞ、心のたけもあらはれにける」夫木雑「うき世とはいつもさこれにけるし」夫木雑「うき世とはいつもさこれ、そは思へども、心のたけを月に知りぬる」

こころのたけ　心竹　直(正)なる心を竹に譬へていふ語。聖徳太子伝暦記推古「ゆがまず直なる心の竹を立て初むる、一二の枝の房やかに」

こころのたねし　心種　心を草木の種に譬へていふ語。古今序「やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれり」現存六帖「夏き人の心の種の忘草、うたてある世になと生ひにけん」新千載雑「苗代に心の種を詩きそへて、鳴くやかはづの声のやまと言の葉」

こころのたま　心玉　[1]心を玉に譬へていふ語。玉葉雑「あきらけきひじりの御代に二かくり、心の玉を又みがくかな」夫木雑「月見ればやがて秋の清るるかな、心の玉や水をとるらん」[2]玉の玉に魂をかけていふ語。日本紀神武「清ゆるは露より心の玉」

こころのちり　心塵　心の汚れ。如信「宇津保雑「我がくべく心のちりは雲となり、浴つる涙は海となるかな」

こころのつき　心月　[1]大乗円満なる妙理を指ていふ語。同花雑「いかでか我が心こころの月をあらはして、閑にまどくる人を眠らさんと」新古今雑「古へのあらざりけり」[2]心の清きを月に譬へていふ語。師俊千首「雲も霧も晴れはれて行く中ぞ知られに、心の月ぞひとりくまなき」

こころのつな　心綱　おもひのつな(思綱)に同じ。おもひ(思)の綱を見よ。夫木雑「思ひ知る心のつなをよもに引きて、老いのねざめの寝れゆくかな」

こころのつの　心角　心中に生ずる怪気を角に譬へていふ語。頭丸雑「心の角高き、かげろふの森はの時なし」

こころのつま　心端　物思ひの端緒。おもひふるしたる、夕くれの空霧りまとかいつ庶衣「耶河百首雑「ふらしめしき心のつまかは」「はりもあくず袖の濡るらん」

こころのつゆ　心露　悲しみて心の内にやとすと想像する露。拾遺雑三「秋は我が心の露にあらねども、物なげかしきこころにもあるかな」夫木雑「あひ見てはまつと思ひし言の葉に、心の露のなほ重きかな」

こころのつるき　心鋼　身を苦し、他を害する心。平家女護島「永き別れと、なしたるも、不義より起こる心の鋼、衆生れと身を切る最期の一心」地獄鋼本地「これ思ひ、心なたの心の鋼ぞや」

こころのとが　心科　わが心から過る科。源氏賢「憂きは心の科ぞと、濡れが世をかこつ方もなし」

こころのとまり　心止　心の行きとまりて他に移らぬこと。資松三「此の人を心のとまりに、明夕見てこそ、又大浴の根みも少し解けぬ」

こころのともし　心友　[1]互ひに心を知り合ふ友。合心の友。建給草「我れと等しかふ、さら人人は、大方のよしなしごとこいはんほどこそあらめ、まめやかなる心の友には、遊かに所のありぬべきをわびしきや」[2]心を慰むる相手。源氏賢「春の山邊や秋の野の、草の葉にすだく蟲までも、聞けば心の友ならずや」

こころのなか　心中　心のうち。ちゆう。千載雑上「たなばたの心のしん空」新六帖「かきたゆる心の中のあやなしさを、さてもいかにと同はれぬるかな」

こころのねし　心成　こころなし(心成)に同じ。おもひなし。源氏雲「心のなしにやあらん、今すこしおもおもしく、やんごとなげなるけしきさへ、添ひにたりと見ゆ」同賢「猶たがひあらじと思ひ聞こえし、心のなしにやあり」

こころのなみ　心浪　心をおきてやすからぬこと。

こころのなみだ　心涙　外へ顕さで、心の中に堪ずる涙。国性爺合戦日合戦「はたと眠む目を見合はせ涙ふ親子の心の涙」

こころのにごり　心濁　心のわだかまり。心のちり。万葉記「人皆あやきなき事を遂べて、いさきかの心の濁りも清らかと見しほどに」

こころのぬし　心主　心の支配者。拾遺十「眠ひ眠ひ心の主に言問はん、有りがたき世にあられざらん」

こころのね　心根　こころね(心根)に同じ。夫木雑「なかめする古の根より生ひそめて、折にしのぶは素なるなりけり」新千載雑「新年の中は手ぐさの花の色色も、心のねよりなるとこそ聞け」

こころのねざし　心根差　心根に同じ。源氏賢「ねざし(根差し)は心の根ざしとこそ云へ。(今昔)「ねざしは心の根ざしとこそ云へ」

こころのの　心野邊　心より思想の萌し出づるを、野邊の草の萌ゆるに譬へていふ語。拾玉「冬の夫に心の野べを焼くかふらに、言の葉とゆる冬雨の空」

こころのはしら　心柱　しんのはしら(心柱)に同じ。

こころのはすす　心蓮　吾人の本来有する清浄なる心魂を蓮華に譬へていふ語。散木集雑「植えおきし心のはすす開けなん、頭ふ涙をうるはひにして」

こころのはて　心果　思ひやる心の限りもなく遠きこと。心のかぎりのこと。千載雑上「ながめやる心のはてぞなかる、明石の浦に寂める月かげ」新古今雑下「我れながら心のはてを知らぬかな、捨てられぬ世の又いとはしき」拾玉「夕おきに都はるかにながむれば、心のはてもなき雲路かな」

こころのはな　心花　[1]移ろひ易き心を花に譬へていふ語。おだこころ。古今雑三「色見えぬ物は世の中の、人のこころの花にぞありける」新古今雑下「ありしもと持ちし月日も移りゆく、心の花の色にまかせて」[2]新後撰雑「鶯の山の花の春こそ待たれけれ、心の花の色を損ふて」千載雑三「いかに、

毎に咲きて つひに心の山を飾り、黄は草の葉より つもりて蓬の海となる」新千載雑下「法を思ふ心の山し深ければ、世々の苔なら ぬ鳥も鳴くなり」

こころの やまぢか 心山坂　心を労す川中・心合歓「さる一代の離所、我が恋めの綾羽が様・物語「心の山坂、歌肩」

こころの やみ 心闇　思ひ惑れて、理非の分別に迷ふこと。古今雑三「かきくらす心のやみにまどひにき、ゆめうつつとは世人さだめよ」後撰雑一「人の親の心はやみにあらねど、子を思ふ心ふかしなり」源氏蜻蛉「これもわりなきこころのやみになん」

こころの ゆくへ 心行方　心の向かひ行く方。意向。源氏野「そこはかとなく さきづつるも、心のゆくへは同じことと」曾丹集「浅に遊ぶ蟬も、心のゆくへは隔てなしと思ひなせば」

こころの ゆめ 心夢　思ひ惑ふを夢に譬へていふ語。續後撰雑下「まどろまで 夜すがら月をながむとも、心の夢はさめずやあるらん」

こころの よろい 心用意　こころよろい（心用意）に同じ。源氏若「むかしだに、ありしたかりし御心の用意なれば」

こころの よろぎ 心迷　心の動揺。心の揺の反義にいふ語。夫行集「心のよろぎとは、まがりたる惑心をいふなり」

こころの を 心緒　〔心緒の字の直譲しんしょと（心緒）に同じ。夫木雪「よそなるらぬこころの緒にそそ短け、夏の夜と心のみ思ひけるかな」拾玉「むすぼほるる心の緒にそ悲しけれ、思ひし所かは解川中心合歓「さる一代の離所、我が恋めの綾羽が様・物語「心の山坂、歌肩」

こころの やま 心山　心を労す

こころの やまぢか 心山坂　心を労す

こころの やまぶし 心山伏　心を山に譬へていふ語。夫木「しら雲の八重にたつ奥なにいらねども、心の山の身をかしこみ」拾古今雑「しかのみのみならず、花は木の

こころの ゆく 心行　気がすむ。満足。竹取「かくや姫の心ゆきはてて」枕「春の草いみじかるべきものとなりたれば、と思ふに、心ゆかぬこころするなり」源氏若「かしこまりたるさまにて、御いらへも聞こえ給はれば、心ゆかぬなめりといとはしく愛ぼす」天德四年内裏歌合「白浪の立ちよる方のかたの人は、藤つにより てもで心ゆくらん」

こころの ゆるす 心許　心を人に任かす。又、氣をゆるす。油断す。夫木「深く長くしくしくば、まそ鏡とぎし情手鏡」「其の日のきはみ、波のうたた寝、く様の漢て」金葉「今よりは心ゆるさじ月かげの、行くへも知らず人さそひけり」宇治拾遺「なさけはかはしながら、心ゆるすべからず、つれなくて、はしたなかからねばゆるすべからず」

こころの ゆるぶ 心緩　氣をゆるす。油断す。新六帖「春はなほ長き日くらし引く網に、心ゆるべなたの浦人」

もえせめず」公忠百首「せきもりやそらも目しつらん、雲井より心のままに袋るるかりがね」

こころの みだれ 心乱　心の乱れること。又、その もとたるもの。新六帖「さ夜なかと月のさえたる空見れば、すむも心のみだれとぞ見る」藤原定家「心の乱れ知るならば、胸なる月は曇らじ」

こころの みち 心道　心に守るべき道。又、心を道に譬へていふ語。古今春「十万億の国土は海山隔て遠くとも、心の道だにしなければ、つとめて至るるとこそ聞け」夫木「思ひやる心の道や近からん、やがて千里の月を見るかな」

こころの みづ 心水　心の清浄また深なことを水に譬へていふ語。詞花下「思ひやれ心の水の澄ければ、かき流すべき言の葉もなし」新古今雑「底清くすこころの水を澄ますは、いかがはちすの濁れ忘れず思ひ出づる、心の水の深さをぞ知る」

こころの みなと 心港　すず（砌）の異名。

こころの やいば 心刃　毒意をさしはさむ心。源門松「北の御刀は美が所く心の刃」

こころの やど 心宿　心の宿る處。即ち、身體。玉葉雑「かりそめに心のやどとなれる身を、あるものがはに何思ふらん」拾玉「庭の松よおのが栖の風ならで、心の宿をとふものぞなき」

こころの やま 心山　心を山に譬へて、思ふことの積もりたることなどにいふ語。夫木「しら雲の八重にたつ奥なにいらねども、心の山の身をかしこみ」拾古今「しかのみのみならず、花は木の

こころの ゆき 心雪　〔心雪の字の直譲〕しんせつと（心雪）に同じ。夫木雪「よそなるらぬこころの雪にそそ短け、夏の夜と心のみ思ひけるかな」拾玉「むすぼほるる心の雪にそ悲しけれ、思ひし所かは解

井に譬へていふ語。海道記「心のふね井岱に清く、いまだ海道萬里の波に棹ささず、栗島あらましに跳す、いまだ關關山千程の雲にむちうたず」

こころの くだて 心隔　くだてをおく心。疎遠にする心。隔心。源若野「心も解けずうらとくはづかしきものにおもほしして、年の重なるにそへて、御心のくだてもまさるを」

こころの ほか 心外　1思ひの寄外。後拾遺雑「散る花も怪しまばとまれ世の中は心のほかのものとやは」「閑く」紫葉雑「今やと思しいそぐに、心より外のことは、かやうの事にこそあめれ」千載雑「こころの外なる事あり、て、知らぬ國に待りける時」2心に留めぬこと。新古今雑「今はただ心のほかに聞くものを、知らずがほなる荻の上風」

こころの ほだし 心絆　思ひのきづな。情緒。

こころの まち 心松　心の中に待つを松にかけていふ語。拾遺雑「彩たてるなの初花笑かかぬまは、心のまつにかかるなりけり」有房集「我が宿の蘇のひなかかぬまは、心のまつにかかるなりけり」

こころの まと 心的　心中にめざすもの。百合若大臣野守鏡「名もたかの羽の夫婦の矢、心の的に立ち花の」

こころの まどひ 心惑　種種に思ひ迷ふこと。源若野「かくこころのまどひに、ひがひがしくいひつけらるるなめり」

こころの まま 心儘　思ひのまま。心まかせ。詞代紀「可以任情（ココロノ）行矣」竹取「ここのおろそかなるやうに云ひはづかしげに、おろそかなれば、こころのままに

て、思ふことの積もりたることなどにいふ語。夫木「しら雲の八重にたつ奥なにいらねども、心の山の身をかしこみ」拾古今「しかのみのみならず、花は木の

こころの もと 「こころは塔尾」前條に同じ。

こころの やど 心宿　心の宿る處。即ち、身體。玉葉雑「かりそめに心のやどとなれる身を、あるものがはに何思ふらん」拾玉「庭の松よおのが栖の風ならで、心の宿をとふものぞなき」

こころの やま 心山　心を山に譬へて、思ふことの積もりたることなどにいふ語。夫木「しら雲の八重にたつ奥なにいらねども、心の山の身をかしこみ」拾古今「しかのみのみならず、花は木の

こころの ゆき 心雪　〔心雪の字の直譲〕しんせつと（心雪）に同じ。夫木雪「よそなるらぬこころの雪にそそ短け、夏の夜と心のみ思ひけるかな」拾玉「むすぼほるる心の雪にそ悲しけれ、思ひし所かは解

こころの ゆく 心行　気がすむ。満足。竹取「かくや姫の心ゆきはてて」枕「春の草いみじかるべきものとなりたれば、と思ふに、心ゆかぬこころするなり」源氏若「かしこまりたるさまにて、御いらへも聞こえ給はれば、心ゆかぬなめりといとはしく愛ぼす」天德四年内裏歌合「白浪の立ちよる方のかたの人は、藤つにより てもで心ゆくらん」

こころの ゆるす 心許　心を人に任かす。又、氣をゆるす。油断す。夫木「深く長くしくしくば、まそ鏡とぎし情手鏡」「其の日のきはみ、波のうたた寝、く様の漢て」金葉「今よりは心ゆるさじ月かげの、行くへも知らず人さそひけり」宇治拾遺「なさけはかはしながら、心ゆるすべからず、つれなくて、はしたなかからねばゆるすべからず」

こころの ゆるぶ 心緩　氣をゆるす。油断す。新六帖「春はなほ長き日くらし引く網に、心ゆるべなたの浦人」

ひたにたたはけはるくる夏の夜を、心共に心みじかき人やかくりし」月詞夏「もろ思ふ事ばかりきこえんなどはおぼさるるべし」同「夏もろくきにもあらず」「御心やぶりく

こころ やむ 心病　1心に悩む。思ひ煩ふ。源若野「御心やみ重くおはしますとて、りうちにも、つひに此の人をえけたずなる事」「こころやみおぼしけれど」2恋ひ悩む。恋る。参考語「とよめりけれ」名歌抄「「恋ひ悩む」」

こころ やる 心遣　思ひをはらす。心を慰む。氣をはらす。源若「思ふどち許己呂也良（コヽロヤラ）む、「馬なめて」「読節歌」「春宮心慰」宇津保藤花「花盛り紅葉盛りなどにもの し給ひて、心やりし給ふ所なり」

こころ ゆく 心行　気がすむ。満足。竹取「かくや姫の心ゆきはてて」枕「春の草いみじかるべきものとなりたれば、と思ふに、心ゆかぬこころするなり」源氏若「かしこまりたるさまにて、御いらへも聞こえ給はれば、心ゆかぬなめりといとはしく愛ぼす」天德四年内裏歌合「白浪の立ちよる方のかたの人は、藤つにより てもで心ゆくらん」

こころ ゆるす 心許　心を人に任かす。又、氣をゆるす。油断す。夫木「深く長くしくしくば、まそ鏡とぎし情手鏡」「其の日のきはみ、波のうたた寝、く様の漢て」金葉「今よりは心ゆるさじ月かげの、行くへも知らず人さそひけり」宇治拾遺「なさけはかはしながら、心ゆるすべからず、つれなくて、はしたなかからねばゆるすべからず」

こころ ゆるぶ 心緩　氣をゆるす。油断す。新六帖「春はなほ長き日くらし引く網に、心ゆるべなたの浦人」

に せんくちネの櫻老いぬとて、心の花はは知る人もなし」藤原成家「我れも渡し花きき埋木なれども、心の花のまだ有れば、手向けになどかなちざらん」四覧題「心華發明、照二十万刹」

こころの はやり 心逸　心はやること。心はやり。十訓「さしたる恨みの出で来ぬる折り、心のはやりのままに、ことばとはず、司をのがれて入り籠もり」

こころの はり 心針　心中に蔵する害意。

こころの はる 心春　春の如くのどかなる心。玉葉雑一「物思へば心の春も知らぬ身に、なに鶯の告げにきつらん」

こころの ひ 心火　胸中に燃えたつほのほ。心のむれのほのほ。

こころの ひかり 心光　心より出づる光。恋歌集「象をも雪をも同じ恋のうちに、見しや心の光なるらん」

こころの ひきひき 心引引　心のむきむきの。蟻紀「天下、政乃若乃物（ニ）在（ヲ）己可心乃比敍比敍（コヽロヒヽ）、太子ず立を冬天祭（ヒヽ）物（ニ）方不（ヲ）在」拾鏡「これかれ心のひきひきに、いどみ合はせさせ給へば」

こころの ひま 心暇　心の閑なる時。心のせはしからぬ時。詞代「秋花笑「秋の夜の月にこころのひまぞなき、出づるを待つと入るを惜しむと」新古今雑一「しの ぶるに心のひまはなけれども、なほもものは思ひなりけり」

こころの ひも 心紐　心を締めくくる紐。心の ゆるみなきやうにするに譬へ、ふ。持統天皇歌「軍法一勝」て兜の忍の緒を、心の紐をしつかと締めて」

こころの ふた 心蓋　心中をおほひかくすもの。合歓「八京「誰れを語らひ心をふたの上に」

こころの ふね 心舟　心を、酒を行くに譬へ、明けん心の蓋」

こころの ふる 心古　心の古びたること。源若野「ものはかなしと、心の古びぬるかな」

こころの ほど 心程　心の程度。心の深さ。

こころの まち 心待　心の中に待つこと。源若野「いつしかもきき明くべしとは思はれど、今日心まつほどとどきすかな」

こころの まて 心迄　志のしるしまで。寸志として。長所女腹切「金一枚貸さるしやれ、私が事なれば、心まで奥様へ上げます」

こころの まどふ 心惑　思ひ惑る。恋慕す。竹取「竹取心まどひて泣きふせる所に寄りて、かくや姫いふ」宇津保藤花「おとと心まどひて、我れか人かにもあらでのたまふ」

こころの まはる 心回　心の中にめざすもの。百合若大臣野守鏡「名もたかの羽の夫婦の矢、心の的に立ち花の」

こころの まどひ 心惑　種種に思ひ迷ふこと。源若野「かくこころのまどひに、ひがひがしくいひつけらるるなめり」

こころの まま 心儘　思ひのまま。心まかせ。詞代紀「可以任情（ココロノ）行矣」竹取「ここのおろそかなるやうに云ひはづかしげに、おろそかなれば、こころのままに

ひ、寓きそにこそ心ひくらめ」

こころ ひらく 心開　心解　心解ゆ。心はれはれず。寓氏「久方のつく夜を清みみ海の花」心開（ココロヒラク）て言がもくる君」新六帖「ふりやまぬ雪の海のつぼみがき、思ふ心はいつかひらけん」

こころ ふとし 心太　氣が太し。大膽なり。

こころ へだて 心隔　へだてを心に疎んじ遠ざく。寓「あしひきの山はなくもが、月見れば同じ里を許己呂敍（ココロヘ）つ」源上「さの給はんを、こころへだてんも、おいなしとおぼすなりけり」

こころ まち 心待　下心にまつ。心まちにす。出觀集「いつしかもきき明くべしとは思はれど、今日心まつほどとどきすかな」

こころ まて 心迄　志のしるしまで。寸志として。長所女腹切「金一枚貸さるしやれ、私が事なれば、心まで奥様へ上げます」

こころ まどふ 心惑　思ひ惑る。恋慕す。竹取「竹取心まどひて泣きふせる所に寄りて、かくや姫いふ」宇津保藤花「おとと心まどひて、我れか人かにもあらでのたまふ」

こころ まはる 心回　心の中にめざすもの。百合若大臣野守鏡「名もたかの羽の夫婦の矢、心の的に立ち花の」

こころ へだて 心隔　へだてを心に疎んじ遠ざく。寓氏「久方のつく夜を清みみ海の花」心開（ココロヒラク）て言がもくる君」新六帖「ふりやまぬ雪の海のつぼみがき、思ふ心はいつかひらけん」

こころ ふとし 心太　氣が太し。大膽なり。

こころ へだて 心隔　へだてを心に疎んじ遠ざく。寓氏「久方のつく夜を清みみ海の花」心開（ココロヒラク）て言がもくる君」新六帖「ふりやまぬ雪の海のつぼみがき、思ふ心はいつかひらけん」

こころ まち 心待　下心にまつ。心まちにす。出觀集「いつしかもきき明くべしとは思はれど、今日心まつほどとどきすかな」

こころ まて 心迄　志のしるしまで。寸志として。長所女腹切「金一枚貸さるしやれ、私が事なれば、心まで奥様へ上げます」

こころ まどふ 心惑　思ひ惑る。恋慕す。竹取「竹取心まどひて泣きふせる所に寄りて、かくや姫いふ」宇津保藤花「おとと心まどひて、我れか人かにもあらでのたまふ」

こころ まはる 心回　心の中にめざすもの。百合若大臣野守鏡「名もたかの羽の夫婦の矢、心の的に立ち花の」

こころ へだて 心隔　へだてを心に疎んじ遠ざく。寓氏「久方のつく夜を清みみ海の花」心開（ココロヒラク）て言がもくる君」新六帖「ふりやまぬ雪の海のつぼみがき、思ふ心はいつかひらけん」

こころ ふとし 心太　氣が太し。大膽なり。

こころより 心始　思ひをかく。心を向く。心引く。ひいきす。萬葉「みな底に恋ふる王淡のうちなびき」心依(ココロヨリ)思ふるこころのところ」源氏物語「こよなう心よせ聞こえ給へれば」玉葉集「石清水かざす蘿波うちなびき君にぞ神も心よせける」

こころより ❶我が心から。心と。新古今春上「秋はただ心よりおく夕露を、袖のほかとも思ひけるかな」❷心によりて。心から。新後撰「春の雪も及ばぬのりの誠をば心よりこそ傳へそめしか」

こころより ほか こころのほか(心外)に同じ。栄華「今や今やと覚しいそぐに心より外のことは、かやと覚しの事にこそあめれ」同「心より外に程くさせ給ふを中宮いみじくおぼしめしたり」

こころよる 心寄　心其の方にむかふ。源氏「彼の君に心よりにしあまり舟の、そむきし方に漕ぎかくるかな」重之集「取上川瀧の白糸くるる人の心よりぬは誰ならとしと思ふ」

こころを あはす 合心　同心すべし。源氏「えさらぬめだうの日をさしこめ、こなた・かなた心を合はせて、はしたなめもづらはせ」堀河百首「心をもあはせぬ人をは」慶の、なとやすうるに慕ひわたるらん」

こころを あらため 改心　改心す。砂石集「惡人なれども、こころを改めて、十念成就し浄土聞法したらんは、貴に往生すべし」

こころを あらふ 洗心　心の垢を去る。心のけがれを洗ひ去る。拾遺集「思ひ出でて、心を洗ひまんもの心をあらはしに」式子内親王集「一つ涙を洗ひ去る」

こころを いたす 致心　心を盡す。源氏「かく何がしが、心をいたしてつかはらまつる御修法に、しるしなきやうはあらじん」

こころを いる 入心　念を入る。思ひをこむ。宇津保物語「夢問に心入れて、そのそびの道にもいりたち給へる」大和物語「三輪山に心を入れてたづねずは、深き紅葉の色を見ましや」

こころを うごかす 動心　感情を動かす。古今序「歌にかける女をみて、いたづらに、こころをうごかすが如し」源氏「天子だにかたかどを聞きつたへて、こころを動かするもあり」

こころを おこす 起心　❶發心(ホッシン)す。佛道心を起こす。千載「源氏物語「源氏物語」心門の王子にて詠み侍りける。うれしくも神の誓ひをしるべにて心をおこす門に入りぬるこ」栄華「波斯匿王の頻、心おこさせる人も数へず業をそきし」❷精神を奮ひ起こす。發奮す。萬葉「大君のまけのまにまに、ますらをの情布里思於許之(ココロオコシ)」拾遺「いみじきこころをおこして、まうでたるに」源氏「いとうみじく心こころしければ、こころをおこして新りきゆ」

こころを かく 掛心　こころかく。思ひをかく。心をとむ。後拾遺「月づの輪にこころをかけし夕べより、よろの事を夢と見るかな」金葉「たゆみなく心をかくる彌陀はとよけ、人やりならぬ誓ひたがふな」狂言「御若なら心をかけ、いろいろと申したれば」

こころを かたむ 傾心　心を傾ける。

こころを いたす 致心　心を盡す。源氏「かく何がしが、心をいたしてつかはらまつる御修法に、しるしなきやうはあらじん」

こころを いる 入心　念を入る。思ひをこむ。宇津保物語「夢問に心入れて、そのそびの道にもいりたち給へる」大和物語「三輪山に心を入れてたづねずは、深き紅葉の色を見ましや」

こころを うごかす 動心　感情を動かす。古今序「歌にかける女をみて、いたづらに、こころをうごかすが如し」源氏「天子だにかたかどを聞きつたへて、こころを動かするもあり」

こころを おこす 起心　❶發心(ホッシン)す。佛道心を起こす。千載「源氏物語「源氏物語」心門の王子にて詠み侍りける。うれしくも神の誓ひをしるべにて心をおこす門に入りぬるこ」栄華「波斯匿王の頻、心おこさせる人も数へず業をそきし」❷精神を奮ひ起こす。發奮す。萬葉「大君のまけのまにまに、ますらをの情布里思於許之(ココロオコシ)」拾遺「いみじきこころをおこして、まうでたるに」源氏「いとうみじく心こころしければ、こころをおこして新りきゆ」

こころを かく 掛心　こころかく。思ひをかく。心をとむ。後拾遺「月づの輪にこころをかけし夕べより、よろの事を夢と見るかな」金葉「たゆみなく心をかくる彌陀はとよけ、人やりならぬ誓ひたがふな」狂言「御若なら心をかけ、いろいろと申したれば」

こころを かたむ 傾心　心を傾ける。

こころを くだく 碎心　心を盡す。源氏「かく何がしが、心をいたしてつかはらまつる御修法に、しるしなきやうはあらじん」

こころを いる 入心　念を入る。思ひをこむ。宇津保物語「夢問に心入れて、そのそびの道にもいりたち給へる」大和物語「三輪山に心を入れてたづねずは、深き紅葉の色を見ましや」

こころを うごかす 動心　感情を動かす。古今序「歌にかける女をみて、いたづらに、こころをうごかすが如し」源氏「天子だにかたかどを聞きつたへて、こころを動かするもあり」

こころを おこす 起心　❶發心(ホッシン)す。佛道心を起こす。千載「源氏物語「源氏物語」心門の王子にて詠み侍りける。うれしくも神の誓ひをしるべにて心をおこす門に入りぬるこ」栄華「波斯匿王の頻、心おこさせる人も数へず業をそきし」❷精神を奮ひ起こす。發奮す。萬葉「大君のまけのまにまに、ますらをの情布里思於許之(ココロオコシ)」拾遺「いみじきこころをおこして、まうでたるに」源氏「いとうみじく心こころしければ、こころをおこして新りきゆ」

こころを かく 掛心　こころかく。思ひをかく。心をとむ。後拾遺「月づの輪にこころをかけし夕べより、よろの事を夢と見るかな」金葉「たゆみなく心をかくる彌陀はとよけ、人やりならぬ誓ひたがふな」狂言「御若なら心をかけ、いろいろと申したれば」

こころを かたむ 傾心　心を傾ける。

こころを くだく 碎心　心を盡す。源氏「かく何がしが、心をいたしてつかはらまつる御修法に、しるしなきやうはあらじん」

こころを いたす 致心　心を盡す。源氏「かく何がしが、心をいたしてつかはらまつる御修法に、しるしなきやうはあらじん」

こころを いる 入心　念を入る。思ひをこむ。宇津保物語「夢問に心入れて、そのそびの道にもいりたち給へる」大和物語「三輪山に心を入れてたづねずは、深き紅葉の色を見ましや」

こころを うごかす 動心　感情を動かす。古今序「歌にかける女をみて、いたづらに、こころをうごかすが如し」源氏「天子だにかたかどを聞きつたへて、こころを動かするもあり」

こころを おこす 起心　❶發心(ホッシン)す。佛道心を起こす。千載「源氏物語「源氏物語」心門の王子にて詠み侍りける。うれしくも神の誓ひをしるべにて心をおこす門に入りぬるこ」栄華「波斯匿王の頻、心おこさせる人も数へず業をそきし」❷精神を奮ひ起こす。發奮す。萬葉「大君のまけのまにまに、ますらをの情布里思於許之(ココロオコシ)」拾遺「いみじきこころをおこして、まうでたるに」源氏「いとうみじく心こころしければ、こころをおこして新りきゆ」

ゐるはな」

(諺)心に鍋を吞む　危険なる思想を抱持す。心の鍋を持つ。蘆田兵衛名所百王「縄を手ひ成を振ひ、心に鍋をふくみあふ」平家女護島「折りかな時がな夫の仇と、心に鍋をふくんだる女」

(諺)心につるる姿　容姿の美醜は心の正邪に伴ふこと。

(諺)心の仇は心　己れの心を苦するものは、他にあらずして己れの心なりとの意。六帖「心こそ心をはかる心なれ、心の仇は心なりけり」正法念經「心是第一怨、此怨能縛人、令受到圓滿處」

(諺)心の同じからざるは面の如し　人心の同じからざるは其の面の如しに同じ。じんじん(人心)の條を見よ。蒙子教「心不同如面、縱知水面器」

(諺)心の鬼が身を責む　良心に呵責せらる。論語「身より出だせる者なれば、心の鬼の身をせめて、かやうに苦しとは受くるなり」

(諺)心の師となることも、心を師とせざれ　心の師となりて、迷はぬやうに心を制せざれ。十訓「ある經には、心の師とはなることも心を師とせざれと說かれたることかや」涅槃經「顚倒作心師、不師於心」

(諺)心の角を折らる　一念發起して、前非を悔ゆ。

(諺)心は鏡に似たり　鏡に似る心に同じ。かは(鏡)の條を見よ。

(諺)心は面の如し　人心の同じからざるは其の面の如しに同じ。じんじん(人心)の條を見よ。

(諺)心は犬、爪は角　心は主角なきやうに持ち、爪は角あるやうに拘るが定し。

(諺)心は己の主をくらす　人は心がらに相惑したる先達を忘る。

(諺)心を鬼にす　情にほだされずして、徐に

更に氣づかざるまをなす。

(諺)心を粉にす　大抵に同じ。

(諺)心を粉にはたく　いろいろに心をくだく。心を粉にす。いたく苦心す。謡門松「背から心粉にはたいた析落とし」

(諺)心を以て心に傳ふ　いしんでんしん(以心傳心)に同じ。太平記「拈花微目の妙旨を、以心傳心、たり」

こころ-あがり　心上　(名)　心をけだかく持つこと。高く思ひあがること。枕「草は中華おもだかも、名のをかしきなり。心あがりしけんと思ふに」

こころ-あさ-さ　心浅　(名)　心あさき度合。心あさきさま。源氏「をかしかりつるほかげならばいかがはせんとおぼしなるも、わろき御心あささなめりかし」同「ほどにつけたる心あささにて、をさなき程を見すて奉りにければ」

こころ-あたり　心當　(名)　❶心に思ひ當たること。思ひつくこと。推し量ること。推量。❷推し量りたる目あて。「んたら(見當)。「心あたりもさが子」謡葉毛上「隨分心當りがあるから、草段してやらう」

こころ-あて　心當　(名・副)　❶こころあたりをなすこと。おしあて。あてずりやう。古今序「心あてに折らばやをらん初霜の」源氏「心あてに、それか彼れかなど問ふ中に、いひあつるもあり」❷心に期すること。こころあてこと。心だのみ。

こころ-あはせ　心合　(名)　心を合はすること。心を合はせること。爲忠百首「しのぶれど厭けつつくもる人つまは、心あはせのこころもなりけり」

こころあひ-の-かぜ　心合風　(句)　心の合ひにあひの風をあはけて、いふ語。能因集「こころあひのかぜにあれ、ちのうちのくもりなくはけふのこころに」

こころ-あり　心有　(名)　❶思ひやりがあり。考へあり。尖筆。參考「こころあり人なれば、思ひやりがあり、人に思ひやりがあり、人に思ひやりがあり、人に

恥おおはさらず」浜柳集「たき物を出だされけるを、後に見ければあらぬ物にてあり日の心ねばそ、矣ひてやみれば、又の日、咔

こころ-おち　心落（名）心の中に落つる見込みあること。太平記「何かは明日か、心落ち侍るべき」

こころ-おとり　心劣（名）平生思はること。心に悪しと思ふこと。（心まさりの対）宇津保「いと醜き人どもなれば、御覧ぜんから、御心おとりと前り人どもなれば、恥づかしくてなん」枕「御みじらむとくなり。いとくと起きて、泣きてわかれん頃に、心おとりこそすれ」

こころ-おひ　心生（名）こころおふること。自然に生長すること。宇津保「上「平木などはこころおひにおひたるは、つたなきものなり」

こころ-おぶ　心生（自動）心の自然に生じ出づ。大和物語「朝ぼらけわが身は起の霜ながら、何をたれにてここころおひけん」

こころ-おぼえ　心覚（名）1心に覚えること。記憶。2記憶のしるしとする物。狂言「私は書きませぬが、女共が鳥の足形のやうな書致してゐる」

こころ-おもしろし　心面白（形ク）心ちおもしろし。気分愉快なり。

こころ-おもむけ　心赴（名）心の向かふ方。大鏡「かやうの御おもむけ、心のしたは、大鏡「かやうの御

心おもむけの、行りがたくおはしませば」

こころ-かかり　心掛（名）心にかかること。氣がかり。心遣ひ。懸念。頓慮。拾玉集「しはしなる今朝の別れに見つるかかな、心がかりの行末の夢」狂言「こなたの肝を潰させらるる事がござる。夫れは心がかりにござるが」同「あらはれはやせんが、何とやら心がかりなな」

こころ-がく　心懸心掛（他動）常に心にかく。思ひをかく。忘れず思ふ。思ひ設く。後撰尊上「年を經てここころかけたる女の、今年はかりをだに待ち暮らせなどいひけるが」枕「例もかくや悩み給ふなど、赤なしびにとふ人もあり。心がけたる人は、まことにいみじと思ひ歎き」源上「今さらに色になり出でそ山櫻及ばぬ枝に心かけきと」平佐集「北の頃東の方より、のぼれる人とて侍りけるが、腰折れをもとこころがくる人とあるとぃへりければ、強ひてよませもけり」

こころ-がけ　心懸心掛（名）こころがくること。常に用意し居ること。たしなみ。源夕顔「狂言「矢立を用意した、夫れは好い心掛けおぢやし」若風俗「春れた方より、夜習ひの心がけ」

（諺）心がけある武士は雪の雪に目をさます　用心深き武士は少しも油断せず。

（諺）心がけある武士は地を選ぶ蟲にも氣をゆるさぬ　前條に同じ。

こころ-がける　心懸（他動）こころがく（心懸）の口語。

こころ-がず　心嵩（名）考への多きこと。思慮深きこと。太平記「家富み一族繁らして、心がさある者にて候」

こころ-がなし　心悲（形ク）寒い波の上に浮きれたんらがなし。心に悲しと思ふ。

と思ふ。

（名記）いあに見えつつ」同「かかとも、か許己日我奈之久

照れる春日に雲花あがり、怖悲（名記）も、ひとりし思へば」

こころ-がね（名）こころね（心根）に同じ。九郎が心がねは他に為しき者也」

こころ-かは-し-ぼ　心交顔（名）心をかはす如き顔つき。心をかはしたるやうなるやうす。源若紫「きりとてこころかはしかほにあくしらはんも、いとつまらしく」

こころ-がは-り　心疑（名）1心の平生に疑はること。心の狂ふこと。源夕「かく心がはりし給へるやうに、人のいひ傳ふべきこころはひをだに、思ひのとめてこころはひけり。いとあさましくて、顔師の君、なにふくは宜ふ、御心がはりし給へるとぞ、のたまふままに泣き給ふ」2思ひの他へ移ること。變心。源若菜「いかなる人の心が移りはりを見ならひて」夫木「しばしなる今朝のまたねに見つるかな、心がはりの夢」夫木記「心がはりを聞いて」心源「心がはり」

こころ-がく　心替（名）我が心と他の心とを入れかふること。心を取りかふること。古今「心がくするものにもが、殿片恋は苦しきものと人に知らせん」金山七百首「心がくする世なりともかくばかり、我れをは人のえやは思はん」

こころ-がま　心構（名）心に待ちぶること。心支度。用意。覚悟。源夕顔「殘りのよはひひとべき心がまくも、にたくしたりけり」同夕顔「ことさらに、ここころしらき御ここころがまくなりと、又いひかくしらうらみ給ひつつ」

こころ-かゆ　心從（副）1心の底から。しんそこ。2心に思ふこと。

こころ-がら　心柄（名）1己れが心より出でて新くなれること。こころがけ。新勅撰春上「おのれ命く心からにぞ、うつ鶯のはにおく露の身を祥くらん」2自業自得なること。「こころがらとあきらめる」

（諺）心からの事を選ぶ　心はどの世をくるに同じ。こころ（心）の條を見よ。

こころ-がる　心輕（名）こころがるし（心輕）の語幹。宇津保「上「いかでなほ物をば思はじ、心がるの御心や」

こころがる-げ　心輕氣（副）こころがるきやうす。こころがるげ。

こころがる-さ　心輕（名）心がるきこと。又、その度合。こころがるさ。夫木「ものの思ひする論の、心がるさの限を見るかな」

こころ-がる-し　心輕（形ク）こころがるし（心輕）に同じ。清輝集「心がるき聞えありけるを女の、つれなくもたりけるに」

こころ-がろ　心輕（名）こころがるし（心輕）の語幹。

こころがろ-げ　心輕氣（副）こころがるきやうす。こころがるげ。

こころ-がろ-さ　心輕（名）心がるきこと。心がるきの度合。心がるさ。曾丹集「夏はきの露のをぶらとあはれ人の、心がるさこそいつれまされり」夫木「はげしさに

を力車に七車、積みて悪ふらん、苦が心柄「引」御宗門日集「色うすき垣はの陰のなでしこの心からにや色はまさらん」狂言「百度心から隠亭の涙を流し」2己れの心より出でて。心づから。心と。源「我が心慰くも苦れなり、はしきやし君に戀ふるも我が心柄「引」」後撰雑「人をのみ恨むるよりは心から、これ思ひざりし譬と思はんん」

（諺）心からの事　心と名付くるに同じ。こころ（心）の條を見よ。

こころ-がる　心輕（名）こころがるし（心輕）の語幹。宇津保「上「いかでなほ物をば思はじ、心がるの御心や」

こころがる-げ　心輕氣（副）こころがるきやうす。こころがるげ。

こころがる-さ　心輕（名）心がるきこと。こころがるさ。夫木「ものの思ひする論の、心がるさの限を見るかな」

こころ-がる-し　心輕（形ク）こころがるし（心輕）に同じ。清輝集「心がるき聞えありけるを女の、つれなくもたりけるに」

こころ-がろ　心輕（名）こころがるし（心輕）の語幹。

こころがろ-げ　心輕氣（副）こころがるきやうす。こころがるげ。

こころ-がろ-さ　心輕（名）心がるきこと。心がるきの度合。心がるさ。曾丹集「夏はきの露のをぶらとあはれ人の、心がるさこそいつれまされり」夫木「はげしさに

ゆゑ人の恨みがはなる」

こころ-くみ　心組（名）かれて思ひ設くること。心支度。心がまく。用意。心算。

こころ-ぐみ（副）心ぐみて。心ぐみ思ひて。寛平「おきそちはいとちふに足踏み意思具美「引」、おがもふこころが家のあたり見つつ」

こころ-くら　心鞍（名）心のほとをくらべあること。意氣地をくらぶること。いきはりづく。いきぢ。源夕顔「あいなかりける、こころくらべどもかな」後拾遺「こもこそはこころくらべに負けざらめ、はやくも見えし駒のあしかな」

こころ-くるし　心苦（形シク）1心に苦しく思ふ。苦しに思ふ。氣遣はし。寛文「あしひきのあら山中に怒りおきて、かくらふ見れば怖苦「引」」枕「思はん子を法師になしたらんこそは、いと心くるしけれ」2氣の毒なり。勢語「岩木にしあらねば、心くるしとやも思ひけん、やうやうにあはれと思ひけり」宇津保「かかる所に、離れておはせんが、こころくるしう、おぼえ給へばなり」

こころ-くる-しが-る　心苦（自動）心苦しと思ふ。勢語「男聞きて、いとこころくるしがりければ、（いとをしがりて）」

こころ-くる-しげ　心苦氣（副）心苦しきやうす。心苦しさうす。枕「いみじくあはれに心くるしげに、見すてがたきことなどを」源若紫「そこら心くるしげなる事を、とりとりに見しかど」

こころ-くる-しさ　心苦（名）心苦しきこと。又、その度合。茶羅「心苦しと心新げなる御有様の心苦しさに、いとと「日ごろの心くるしさを思ふにも、いと

とあはれに流からぬ」

こころ-ぐろし　心黒（形ク）心に邪心あり。はらぐろし。

こころ-けい　心（名）小さき土器。くそかはらけ。源「

こころ-けがし　心汚（名）心きたなき、こと。大鏡「あり訓れし契りはえて今更に、心けがしに千代ぞ、はらんん」

こころ-げさう　心假粧（名）心に粧ひて假粧すること。源若菜「若き人人三三人あるは、世にめでられ給ふ御有様をゆかしきものに思ひきこえて、心げさうしあへり」同「さまこそきらびて、心げさうしたるなん、をかしきやうらの見物なりけり」

こころ-こころ　心心（名副）各自の心。人人の考へ。おもひおもひ。源「中の品になん、人のこころこころ、おのがじしのたてる趣き見えて」同「所所の御さじき、こころこころにしまうしたるしつらひ」同花「なくゐの一つ事にも聞こえぬは、こころこころにものや思しき」

こころ-ことば　心言葉（名）心と言葉と。心又は言葉。故「「狂言形」「田舎とは申しながら、心言葉のやさしき、中中都に風村雨寒帝屋鶯「心同も及ばれば、雅に雅にも寄されし」

こころ-こは-さ　心强（名）心こはきこと。又、その度合。六帖「みちのくのあだちのまゆみたもれども、心こはさにやまずさりける」夫木「つれなさはつゆふしもせぬ鶴の羽の、やよなにかかる心こはさぞ」

こころ-こは-し　心强（形シク）心つよし。つれなし。宇津保「上「たが宮の御有様をして、さがなら心こはく、なまめかしきけ

たくたる御や思ふらん、風の木の葉こころがるさを」

こころ-がろし　心輕（形シク）心輕軽なり。心がろうつり易し。参語「田でていなば心がろしといひやせん、世のありさまを人は知らねば」後撰「「最上川深きにもかへるこころかな」

こころ-きき　心利（名）氣のききたること。狂言「「後なるものよ、しばしとどまれ。あら心ききや」

こころ-きたなし　心汚（形ク）心卑劣なり。心いやしし。宇津保「下「よくのうちの物の錢中「などか忘れさせ給ひにける、ぎたなき上選部も侍るものを」源「「仏もなかなか心きたなしと見給ひつべし」

こころ-きは　心際（名）心もと。心だて。心根。源松「わがをのこにて、かばかり圃ふなるにては、あらざりしだに、故宮うせ給ひぬる程のこころぎは、物やは覚えし」宇治拾遺「けしからぬ主の心ぎは、はかなし」

こころ-きも　心肝（名）1心ときもと。きもこころ。心。心の中。雄略紀「「歌「踊心肝「引」」」宇津保「上「まして人は、心ぎもやすからぬことどこそは、泣き給ふなれ」大和物語「「心ぎもをまことはしてもとむるに」2考へ。落窪「「心ぎもなく、和思ひ寄らざりしものを、しひて使ひ給ひて」

こころきも-つ　心肝盛　心も肝も共に消え失せ。源若菜「参りてはいとど苦しう、心ぎもつくるやうになん」

こころきも-つ-ふる　心肝沿　きもつぶる（肝潰）に同じ。きも（肝）の條を見よ。源若菜「いひかはすことどもに、いとど心ぎもつぶれぬ」

こころきも-ぞ-だく　碎心肝　かんたんをくだく（摧肝膽）に同じ。かんた（肝膽）の條を見よ。狭衣「明けくれ見奉り給ふまに、心ぎもをのみくだきて、新り奉りしかども」

こころきも-を-つく-す　盡心肝　けをつくす。誠心を傾け盡くす。紀「何不「「歌「心肝「引」」」誠勅殿勅」

こころ-きよ-し　心清（形ク）心中に思ひ穢るることなし。心いさぎよし。念なし。源夕顔「今なん河彌陀佛の御光邪も、こころきよく待たれ侍るべき」同「「歌「かの疑ひおきて、若人のおしはかり事さく、心きよくてす、い給ひけるなどを、ありがたう哀れと思ひましきこえ給ふも」

こころ-くし　心（形ク）1あてなつかしみてあり。らうらなつかし。赤「おぼつかなし。心晴れやらず。「「歌「「春日山霞たな引き、情其人「引」」紙れる月夜にひとりかもねむ」同「「情其夜「引」」」ものにぞありける。春霞たなびく時に戀のしげきは」同「「君待つとうらう戀すなり、己許呂其恋「引」」いざ見にゆかな」

こころ-ぐし　心癖（名）性癖。源「「人の心ぐせもこそとおぼしながら」大鏡「いと色有る御心癖にて」感忠百首「「叔里にと行きかく行くやり水は、心ぐせある人やまかせし」

こころ-ぐだき　心碎（名）心のくだくること。心をくだくこと。忠岑集「夢にだにつれなき人の面影を、鎖みもはてじ心ぐだきに」

こころ-ぐせり　心配（名）心をくばること。心づかひ。氣づかひ。明天鏡「人心づかひ、身は心配。用心。くばりに目もくらみ」

こころ-ぐま　心隈（名）心にくまあること。心中に打ちとけぬところ。風葉「「心ぐま我れは所にて思はぬに、何ゆゑ人の恨みがはなる」

こころ-ぐみ　心組（名）かれて思ひ設くること。心支度。心がまく。用意。心算。

こころ-ぐみ（副）心ぐみて。心ぐみ思ひて。寛平「おきそちはいとちふに足踏み意具美「引」、おがもふこころが家のあたり見つつ」

こころ-くら　心鞍（名）心のほとをくらべあること。意氣地をくらぶること。いきはりづく。いきぢ。源夕顔「あいなかりける、こころくらべどもかな」後拾遺「こもこそはこころくらべに負けざらめ、はやくも見えし駒のあしかな」

こころ-くるし　心苦（形シク）1心に苦しく思ふ。苦しに思ふ。氣遣はし。寛文「あしひきのあら山中に怒りおきて、かくらふ見れば怖苦「引」」」枕「思はん子を法師になしたらんこそは、いと心くるしけれ」2氣の毒なり。勢語「岩木にしあらねば、心くるしとやも思ひけん、やうやうにあはれと思ひけり」宇津保「「かかる所に、離れておはせんが、こころくるしう、おぼえ給へばなり」

こころ-くる-しが-る　心苦（自動）心苦しと思ふ。勢語「男聞きて、いとこころくるしがりければ、（いとをしがりて）」

こころ-くる-しげ　心苦氣（副）心苦しきやうす。心苦しさうす。枕「いみじくあはれに心くるしげに、見すてがたきことなどを」源若紫「そこら心くるしげなる事を、とりとりに見しかど」

こころ-くる-しさ　心苦（名）心苦しきこと。又、その度合。茶羅「心苦しと心新げなる御有様の心苦しさに、いとと「日ごろの心くるしさを思ふにも、いと

とあはれに流からぬ」

こころ-ぐろし　心黒（形ク）心に邪心あり。はらぐろし。

こころ-けい　心（名）小さき土器。くそかはらけ。源「

こころ-けがし　心汚（名）心きたなき、こと。大鏡「あり訓れし契りはえて今更に、心けがしに千代ぞ、はらんん」

こころ-げさう　心假粧（名）心に粧ひて假粧すること。源若菜「若き人人三三人あるは、世にめでられ給ふ御有様をゆかしきものに思ひきこえて、心げさうしあへり」同「さまこそきらびて、心げさうしたるなん、をかしきやうらの見物なりけり」

こころ-こころ　心心（名副）各自の心。人人の考へ。おもひおもひ。源「中の品になん、人のこころこころ、おのがじしのたてる趣き見えて」同「所所の御さじき、こころこころにしまうしたるしつらひ」同花「なくゐの一つ事にも聞こえぬは、こころこころにものや思しき」

こころ-ことば　心言葉（名）心と言葉と。心又は言葉。故「「狂言形」「田舎とは申しながら、心言葉のやさしき、中中都に風村雨寒帝屋鶯「心同も及ばれば、雅に雅にも寄されし」

こころ-こは-さ　心强（名）心こはきこと。又、その度合。六帖「みちのくのあだちのまゆみたもれども、心こはさにやまずさりける」夫木「つれなさはつゆふしもせぬ鶴の羽の、やよなにかかる心こはさぞ」

こころ-こは-し　心强（形シク）心つよし。つれなし。宇津保「上「たが宮の御有様をして、さがなら心こはく、なまめかしきけ

ちゃ」「ちゃ(モチ)」ごころ。

こころ-ぞめ 心染（名）心にしみこむこと。

こころ-そむく 心背（他カ四）心にそむく。

こころ-そわる 心騒（名）むねさわぎすること。心の落ちつかぬこと。源氏物語「まづ此の人はいかになりぬるぞ、と思ひ騒ぎ」同「心さわぎに、身の上も知られぬ給はず」

こころ-たい 心体（名）【神】こりかたまり(自然)の異名。

こころ-だて 心大第（名）心まかせなること。心のままに。

こころ-だて 心支度（名）こころがまえ。心ごころ。用意。

こころ-ちがい 心違（名）心のおちつきなくまどうこと。心のとがめ。伊勢物語「心ちがひてまどひにけり」

こころ-ちなし 心無（形ク）心のおもむくままに。

こころ-ちぶり 心振（名）心のとがめ。「天武紀「手有意(ココロ)而奏」源氏「近きまがきの中を、其のこころしらひ。おきてなどをなん、上手は いと勢ひことに」同「かたくは前後の心しらひなくて し」

こころ-しる （自動ラ）①明かに知る。源順「今、知らず。心づかひす。心ず。注意す。字治拾遺「其の心を知りて、あく」②心して あく。

こころ-ぞ 心底（名）心の奥。心の底。

こころ-ぞめ 心染（名）心にしみこむこと。

こころ-そわる 心騒（名）むねさわぎすること。心の落ちつかぬこと。源順「まづ此の人はいかになりぬるぞ、と思ひ騒ぎ」同「心さわぎに、身の上も知られぬ給はず」

こころ-たい 心体（名）【神】こりかたまり(自然)の異名。

こころ-だて 心大第（名）心まかせなること。心のままに。

こころ-じたい 心支度（名）こころがまえ。心ごころ。用意。

こころ-しづか 心静（名）心のおちつきなくまどうこと。心のとがめ。ゆづりまどひ。手洗保建「仲忠おぼえ給はりて、こころしづかにてものしたまひ給へ」源氏「心しづかなる折りなくおぼえ給ふ」後撰「思息りをおさへてまどろ代に花の盛りを心しづかに」

こころ-しのび （名）心づかひ。心がまえ。「天武紀「手有意(ココロ)而奏」源氏「近きまがきの中を、其のこころしらひ。おきてなどをなん、上手は いと勢ひことに」同「かたくは前後の心しらひなくて し」

こころ-しるし （自動ラ）①明かに知る。源順「今、知らず。心づかひす。心ず。注意す。字治拾遺「其の心を知りて、あく」②心して あく。

こころ-すい 心粋（名）心のおもむきのすぐれていること。

こころ-すがら 心ずから（副）心のままに。

こころ-すこし 心少（形ク）心にものたりない。

こころ-すさび 心荒（名）心のすさび。

こころ-すさまじ 心荒（形シク）心にものすごい。

こころ-せいもん 心誓文（名）心中に立つる誓文。医療「誠に天命の敵を討つ。つまでは、無念も恥もこころ〳〵と、心誓文立つたれども」

こころ-せき 心急（名）心のせくこと。心ぜはしきこと。

こころ-せばし 心狭（形ク）心のせまいこと。又、その度合。新六帖「秋霧の心せばさは歩廊たち隠したる山のもみぢ葉」夫木抄「ちえて手を組りたるこころしの夫、心せばさをなげくこころかな」

こころ-せばし 心狭（形ク）心がせばく小さい。心が狭くまし。狭量なり。字津保「すべて氣がせまし。狭量なり。字津保「すべて御心せばくおもはせばなけ保「すべて御心せばくおもはせばなけ保「すべて御心せばくおもはせばなけ」源氏「をかしくしかみのすちともおぼけり、頭の書かの今の此の書」

こころ-ぞ 心底（名）心のそこ。

こころ-ぞ 心底（名）心のそこ。

こころ-ぞ 心底（名）心のそこ。

こころ-づか-ず 不心附（動）思ひかけず。氣づかず。

こころ-づかひ 心使（名）其の物事に心をやりて心配する事。心の使にかけていふ語。後拾遺雜三若菜摘む春日の原に雪降れば、こころづかひを今日きへぬべしや」和泉式部日記圓遊えて今日ぞ勿ふと人は知る、思ひ絶えぬ心づかひを」

こころ-づかひ 心遣（名）心を用ふること。氣づかひ。氣が利。心配。注意。宇津保俊蔭「心づかひせられけん」枕「打たれ」と用意して、常にらしろを心づかひしたるけしきもをかしきに」源蜻「かかる折りにも、あるまじきゆもこそ、と、こころづかひして」謠「寒打ちかなふまじと、馬より下りて中略岩のかけちを過ぎ給ふ、心づかひぞたくひなき」

こころ-づから 自分の心よりして。おのれの心から。古今雜下春風は花のあるたりをよきて吹け、こころづからやうつろふと見ん」後撰雜一風をだに待ちてぞ花は散りなまし、心づからにうつろふが恨めしき」源雜「人知れぬ御心づからの物思はしさは、いつとなきことなめれど」

こころ-づき 心附（名）一ここころづくこと。氣がつくこと。二心にかかふこと。氣にいること。後撰雜三人の家より物見に出づる亦を見て、心づきに覚え侍りければ」栄華「この母上、この三位殿の御亦を心づきに思して」

こころづきな-し 心附無（名）ここころづきなし（心附無）の語幹。砂石集「あらら心づきなの様や、まだこそ、如何なる昔の衣通姫・小野小町といひし人も、源氏水科にしたる者岡かれ」

こころづきなげ 心附無（形）氣づきなきさま。心附無の語幹。

こころ-づかひ 心使（名）ここころづくこと。氣がつくこと。二心にかかふこと。氣にいること。後撰雜三人の家より物見に出づる亦を見て、心づきに覚え侍りければ」栄華「この母上、この三位殿の御亦を心づきに思して」

こころづきな-し 心附無（名）ここころづきなし（心附無）の語幹。砂石集「あらら心づきなの様や、まだこそ、如何なる昔の衣通姫・小野小町といひし人も、源氏水科にしたる者岡かれ」

こころづきなげ 心附無（形）氣づきなきさま。心附無の語幹。

こころ-づくし 心盡（名）心一つを盡くすこと。氣をもむこと。古今春下「春のまよりもりくる月のかげ見れば、心づくしの秋はきにけり」後撰雜六「渡りてはくしの秋はきにけり」「仇になるてふそのの川の、心づくしになりもこそすれ」源夕顔「人やりならず、心づくしにおもはし觀ることもあり」

こころ-づくろひ 心繕（名）宇津保俊蔭「心の用宮に詣でこころがまく、侍る年なれば、まさに木枝草類此の

げさらしあり中略いとこころづきなげにゑみて」

こころづきなき-こと 心附無（名）ここころづきなきこと。又、その度合。栄華花山「堀河殿の御心おきて、「あさましら心づきなきさに」

こころづきなし 心附無（形一）氣づくはず。氣がつかず。枕「心づきなきもの。物くへもいきき、寺へもまうづる日の雨」同「夫方心づきなしとおぼゆれば」源若紫「つれは少しそばそばしく心づきなき人の、折ふしにつけて、田でばえるやうもあり折ふしにつけて」

こころ-づく 心附（自動四）一氣がつく。思ひつく。感づく。後撰雜三「今はてふ心づくばの山見れば、こずゑよりこそ色かはりけれ」玉葉雜五「心づきし情、嘆の鏡のねも、待たず別かれて聞くしもそうき」狂言「人「誠に、氣が付く。宇津保俊蔭「藏人花園のんだ」二氣が付く。宇津保俊蔭「藏人花園が家、心づきたる人にて、かしこくおどろきて」三物ごころがつく。分別つく。成人す。大平記「御遊佳人松蔭を人と成し、心附きなば侍に成し」

こころ-づく 心附（他動四）一心をつけしむ。氣をつく。注意せしむ。二氣を利かして物なじを與ふ。

こころ-づくし 心盡（名）一つを盡くすこと。氣をもむこと。古今春下「春のまよりもりくる月のかげ見れば、心づくしの秋はきにけり」後撰雜六「渡りてはくしの秋はきにけり」「仇になるてふそのの川の、心づくしになりもこそすれ」源夕顔「人やりならず、心づくしにおもはし觀ることもあり」

こころ-づくろひ 心繕（名）宇津保俊蔭「心の用宮に詣でこころがまく、侍る年なれば、まさに木枝草類此の

ごころづくろひたくして、引き出でたるものの、ねどもいと面白し」同「見知りがほに、もらしらみ聞こえ給はず、心づくろひも後り苦しき折りは」

こころ-づけ 心附（名）一心附くること。こころぞへ。二氣をつけて贈與する金品。きのふはけ心の物語「毎年二手に心づけを致さうが、それもいやか」一代女「お心づけ」ありて御機嫌取る」

こころづけ-がほ 心附顔（名、動）人に注意をひかしむるをぶり。心附かしむるやうす。平家二「家重盛卿、申けるは「此の非務務御氣色にも御詞にも出だ中中惡しき御非也」

こころ-づけ 心附（他動下）こころづく（心附）の語幹の口語。

こころ-づつみ 心堤（名）心に慎み慎ること。源螢「すること。夫木消息世の中をこころづつみの草の葉に、消えにし露に濡れてこそ行け」

こころ-づま 心夫 心妻（名）わが心に思ひ定めたる夫又は妻。おもひづま。萬二「あしびきの山下とよみ鳴く鹿の、ことともしかも我が情妻夫」

こころ-づもり 心積（名）心にての見つもり。むなさんよう。

こころ-づよ 心强（名）ここころづよし（心强）の語幹。本朝書「家天平寶字二「流言萬人、我が情妻夫」「欠心づよの心なくば、かやうに恥をばさらきじものを」

こころづよ-がる 心强（自動四）自ら心づよげなるさまをなす。强ひて心づよがりきをよそはふ。源夕顔「さこそ心づよがりぬる、若きみ心ちに、いふかひなくなりぬる、力なくて」

こころ-づよ-げ 心强氣（動）心づよきやう。心づよさら。本朝書「家天平寶字二「流言萬人、我が情妻夫」「なほ心づよげ」なびきけもおはせず、かの「なほ心づよげ」におはすらむ」

こころづよ-さ 心强（名）心づよきさま。心づよき度合。新勅撰雜三「戀ひ死なぬ身の定りぞ年へぬる、ちらば逢ふ夜の心づよさに」清輝集「やそ島の千島の心づよさは君にまさらじ」

こころ-づよし 心强（形）一意志薄弱なり。柔弱なら ず。栄華花山「御門の心强からず、いかにぞやおはします」二情にはだされず。つれなし。竹取「心づよく焦らけたまはらずなりにしこと」源蜻「おくるるまめやかさは、たとしくなう情おくるるまめやかさは」三組むこころ。りあり。て心安し。氣丈夫なり。心丈夫なり。源夕顔「南殿の鬼の、来のおとこをおびやかしけるためしをおぼし出でて、心づよく」

こころ-づい 心木（名）ここころぶと（心木）に同じ。七十一番歌合「心木實。うらぼんのなかばの秋の夜もすがら、月にすますや我がこころづい」

こころ-ど 心（副）わが心より出で。自分の考へにて。心づからの。心からの。貫之集「緑なる松にかかれる藤なれど、おのがこころ花は散りける」枕「すずろなる物をんじして離れたるを中略そもてえ堪たち居たらねば、心ど出できたる」源夕顔「わがこころどころと思ひ得ることなく」ふかき至りなかるんは」

こころ-ど 心利（名）心の利（二）きこと。又、その心。利心詞。萬寸出でたたむ力をなみとこもりゐて、君に戀ふるに詰己呂度（詞）もなし」同「いもを見すこの国ゆ、に年ふれば、言が情度（詞）のなし」の国ゆ、に年ふれば、言が情度（詞）のなし」

こころ-ばせ 心根（名）心の根本。性質。根性。心根性。宇津保俊蔭「御心根に逆ふ所のあれば、こそ、亂神の災應にも引き出でて、實國集つつめどもえぬに引けるあやめ草、我が心ねどもらはれにけるこ」堤家記「西園寺の大納言に、立立とと思ひしかば、兩三人を呼び、心根見んとて」

こころ-ねたし 心妬（形一）心にねたましと思ふ。源螢「花、蜻に付けたるとよりこそは、心ねたしもてないたる、なかなかの主、なのめならず怒り腹立てて」

こころ-ばせ 心根（名）心の根本。性質。根性。心根性。宇津保俊蔭「御心根に逆ふ所のあれば、こそ、亂神の災應にも引き出でて、實國集つつめどもえぬに引けるあやめ草、我が心ねどもらはれにけるこ」堤家記「西園寺の大納言に、立立と思ひしかば、兩三人を呼び、心根見んとて」

こころ-ばせ 心遣（名）心のとき。宇津保俊蔭上「あやしの心ときめきやとて、打ちおき給ひつ」枕「心ときめきすする物。うちとけばする所の前渡りたる。よきたき物たきて一人臥したる」源螢「宮ほ聞こえ給へ、おさとけきらだちてももてなさじ、なかなか心ときめきにもなりぬべし」

こころ-ばせ 心遣（動四）物に感じて心動く。心さわぎたつ。むなさわぎす。

こころ-ばけ 心疾氣（動）心疾こきやう。源螢「非打ちはて、けちすわたり、ここころとけに見えて、きはぎはしらさうどけは」

こころ-ぶり 心取（名）心を取ること。機嫌をとること。きげんとり。源蜻「いとと繁う侍りし道の草も、少し打ち勝は緒せ侍らんかしと、心とりにきこえ給へば」

こころ-な 心無（名）ここころなし（心無）の語幹。萬十「わび人のあなた情無（こころ）と思ふらむ、秋の長夜をいねずしあれば」嵯峨「新「ものあらむ心なの村雨やな」同「日紅葉を、とうる漕来を、情なや中絶えて、渡らん人は心なや」

こころ-なが 心長（名）ここころながし（心長）の語幹。氣ながし。

こころ-なが-さ 心長（名）心長きさま。心長き度合。六帖「例まだき出でてて拾はしんん今日の緒に、心ながさをくらべて、は秋の夜に、いつれまさるとと空に知らなんは」後撰雜「君を思ふこころながさ」

こころ-なが-し 心長（形一）一氣長し。心あるせちすあり。度長なり。源螢「我れ、さりとも心ながら見はてんと覚ぼしなし」後拾遺雜三忘れなんと思ふに流るる涙は、どかに思ふ。安心す。本朝書「家天平寶字二「流言萬人、我が情妻夫」「命

計りは中し聞けて候ず、御心長く思し召して候へ、源宇治「おこれうがおそばに候て、御心長く思し召して、心御取扱宇治「おこれうがおそばに候て、御心長く思し召して、心永く幾年をして、此のやうな滿足な事はをりないぞ」

こころ-ながら 心在（副）一我が心ながら。我が心ではあるが。我れと我が心にて。源夕顔「恨めしと思ふこともあらんと、心ながらおぼゆる折り折りも侍りしを、見知らぬやうにて」同夕顔「氣色はみて、ふとそもき離れぬべき心ざまなどは、無ければ、かれがれにとだえおかん折りはこそは、さやうに思ひかはることもあらめ、心ながらも少しうつろふことあらんこそ哀れなるべけれ」二其の心のまま。玉葉雜五「あり し世の心ながらに戀ひかへ、し、いはばそれに今までの身を」

こころ-なぐさ 心慰（名、動）心の慰め。氣はらし。萬「わぎもこが許己呂奈久（コロナク）に、やらむため、沖つ島なる白玉もがも」同「田でてとこし月日よみつつなげくらむ、心奈久（コロナク）に」後撰雜三「あと見れば心なくさの濱千鳥、今は慶こそ聞かまほしけれ」

こころ-なぐさめ 心慰（名）心をなぐさむること。又、そのもの。土佐日記「男たちのこころなぐさめに」

こころ-なげ 心無氣（動）ここころきやう。心なきさま。源夕顔「心なげにいわけてきこゆるはなど、さぶらふ人人も問ひこえあへり」

こころ-な-き 心無（名）ここころなきさま。こころのなき度合。

こころ-なげ 心情（名）なさけごこころ。長承三年九月中宮定頼家歌合「たぶるに思ひたえてもあるべきに、あなむつかしの心なさけや」

こころ-な-し 心成（名）心の思ひな

し。我が心にてしかすること。

こころ-な-し 心無（名）心なきこと。思慮なきこと。又、其の人。源夕顔「例の心なしの、かかるわざをしてきいたまるるこそ、いと心づきなけれ」宇治拾遺「心なしのかたらとは、おのれがこころのをいふぞかし中略心なしのしれ者かな」

（諺）心無しの人恐み 思慮なき者は、自らを責めずして他人を恐むこと。

こころ-な-し 心無（形一）一思慮なし。考へなし。無分別なり。後撰雜中「心なき身は草葉にもあらなくに、秋くる風に疑はるらん」源螢「格子を上げければ、かかる心なしとむつかりて、おろしつれば」二をさなし。無邪氣なり。三思ひもつかず。不意なり。萬「許己呂奈久（コロナク）」里のみなかに逆へなむ、許己呂奈久（コロナク）」回思ひやりなし。情なし。萬「許己呂奈久（コロナク）」鳥にぞありけるほと、とぎす、ものもふ時に鳴くべきものか」同「無心（コロナク）秋のつく夜の、物もとい、のねらえぬに照りつつ、もとな」

（諺）心なき子は親の故重を語る 思慮なき子は、親の往時の故語を語る。

（諺）心なき者には云て聞へ 思ひやりなき人に對しては、推定して物を求むべし。

こころ-なら-ず 不心（副）一本意にあらず。わが心と異ひて。不本意ながら。竹取「おのがこころならず、まかりなんとす」後撰雜三「相知りて侍りけるを女の、心ならぬやうに見えければ」千載雜三「君若越ゆる逢坂波にたつ千鳥、心ならず、雜中「はかなさを恨みもはてじ櫻花うき世は誰れも心ならねば」二心も心なくして。我れ知らず。不安心なり。回心にもあらず。我れ知らず。砂石集「申し附けたる事にて、

考へなしの、かかるわざをしてきいたまるるこそ、いと心づきなけれ」宇治拾遺「心なしのかたらとは、おのれがこころのをいふぞかし中略心なしのしれ者かな」

（諺）心無しの人恐み 思慮なき者は、自らを責めずして他人を恐むこと。

こころ-な-し 心無（形一）一思慮なし。無分別なり。後撰雜中「心なき身は草葉にもあらなくに、秋くる風に疑はるらん」源螢「格子を上げければ、かかる心なしとむつかりて、おろしつれば」二をさなし。無邪氣なり。三思ひもつかず。不意なり。萬「許己呂奈久（コロナク）」里のみなかに逆へなむ、許己呂奈久（コロナク）」回思ひやりなし。情なし。萬「許己呂奈久（コロナク）」鳥にぞありけるほと、とぎす、ものもふ時に鳴くべきものか」同「無心（コロナク）秋のつく夜の、物もとい、のねらえぬに照りつつ、もとな」

（諺）心なき者には云て聞へ 思ひやりなき人に對しては、推定して物を求むべし。

こころ-なら-ず 不心（副）一本意にあらず。わが心と異ひて。不本意ながら。竹取「おのがこころならず、まかりなんとす」後撰雜三「相知りて侍りけるを女の、心ならぬやうに見えければ」千載雜三「君若越ゆる逢坂波にたつ千鳥、心ならず、雜中「はかなさを恨みもはてじ櫻花うき世は誰れも心ならねば」二心も心なくして。我れ知らず。不安心なり。回心にもあらず。我れ

こころ-ならひ 心習（名）心の習ひ。ならはしこと。習慣。源夕顔「かのきしつどひたるすまひのこころならひならんと、おかしく覚ぼす」同「なきたまぞいとこと思しなれ果てのくがれがたきこころならひに」金葉雜上「つらかりしこころならひにあひ見てもなほ夢かとぞ疑はれける」爲尹千首「幾度か心ならひの手向けしつ、花にはあらず前や思ふと」

こころ-にくし 心憎氣（動）ここころにくきさま。ここころにくきやう。

こころ-にくさ 心憎（名）心にくきと度合。心にくきさま。扶桑集「ねずなけど、のまきさる君かな」用明天皇「藏人産「心にくきにくきとゆかしきこと、「都の空の戀しきこと」

こころ-ぶと 心憎（形）一心中のはつかりかれて、何となく心置きぞ、ら。おぼつかなく氣がおかる。參語「初めこそこころにくくもつくりけれ、今は打ち解けて」二おくゆかし。何となくゆかし。宇津保俊蔭下「いとあてに、けはひなども式部卿の君よりも心にくく、はづかしげにものしゐ給へり」源夕「さてもたるる女のためも、心にくく、推しはかるるなり」

こころ-ね 心根（名）心の根本。性質。根性。心根性。宇津保俊蔭「御心根に逆ふ所のあれば、こそ、亂神の災應にも引き出でて、實國集つつめどもえぬに引けるあやめ草、我が心ねどもらはれにけるこ」堤家記「西園寺の大納言に、立立と思ひしかば、兩三人を呼び、心根見んとて」

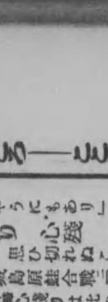
こころ-ねたし 心妬（形一）心にねたましと思ふ。源螢「花、蜻に付けたるとよりこそは、心ねたしもてないたる、なかなかの主、なのめならず怒り腹立てて」

こころ-の-とり　心鳥（名）胸に心の残ること。思ひ切れぬこと。氣がかりの未練。「何或島原桂谷戦」「こよひ胸を出ると思へば中書心鳥りは此の新造の唐琴殿」

こころ-の-とか　心長閑（名・副）心しづか。ゆったりとして。おちつきて。後撰一「夢にだに見ることもなき年を經て心のどかにねる夜なければ」手非保下上「心のどかに昔を思ひ出でて、さべきたふときあるもせさせし」榮華初「世の中、正月よりも、心のどかならず、怪しう物のさとしなどしげうて」

こころ-の-とか-げ　心長閑氣（副）心のどかなるやう。榮華玉「この頃は少し心のどかげにて」

こころ-ば　心葉（名）❶こころ。心ばえ。和泉式部集「人知れぬ我が心ばかりにあらねども、あきあつめてぞ物をこそ思へ」❷歌などに、金又は絲にて、梅・松の枝などを作りて飾りて添ふるもの。宇津保俊蔭「朝薬物を四四をじきて、物・心葉いと清らかなり」源葵「さしくべしの箱のここころばせに」同帚木「つの清のつき二つすゑて、おほきにまころがしの枝、白きには梅をえりて」紫式部日記「盛一とろひにたきものの入れて、心葉、梅・松の枝をして、いとみ聞こえたり」花鳥餘情「近代御前の情の四物折敷の前にも鶴を立つること、心葉のよしなし」目天平合などに、



（こころば）

こころ-の-ち　心殘（名）胸に心の殘ること。思ひ切れぬこと。氣がかりの未練。「何或島原桂谷戦」「こよひ胸を出ると思へば中書心殘りは此の新造の唐琴殿」

こころ-の-とか　心長閑（名・副）心しづか。ゆったりとして。おちつきて。後撰一「夢にだに見ることもなき年を經て心のどかにねる夜なければ」手非保下上「心のどかに昔を思ひ出でて、さべきたふときあるもせさせし」榮華初「世の中、正月よりも、心のどかならず、怪しう物のさとしなどしげうて」

こころ-の-とか-げ　心長閑氣（副）心のどかなるやう。榮華玉「この頃は少し心のどかげにて」

こころ-ば　心葉（名）❶こころ。心ばえ。和泉式部集「人知れぬ我が心ばかりにあらねども、あきあつめてぞ物をこそ思へ」❷歌などに、金又は絲にて、梅・松の枝などを作りて飾りて添ふるもの。宇津保俊蔭「朝薬物を四四をじきて、物・心葉いと清らかなり」源葵「さしくべしの箱のここころばせに」同帚木「つの清のつき二つすゑて、おほきにまころがしの枝、白きには梅をえりて」紫式部日記「盛一とろひにたきものの入れて、心葉、梅・松の枝をして、いとみ聞こえたり」花鳥餘情「近代御前の情の四物折敷の前にも鶴を立つること、心葉のよしなし」❸天平合などに、

（こころば）

こころ-の-ち　心殘（名）胸に心の殘ること。思ひ切れぬこと。氣がかりの未練。「何或島原桂谷戦」「こよひ胸を出ると思へば中書心殘りは此の新造の唐琴殿」

こころ-の-とか　心長閑（名・副）心しづか。ゆったりとして。おちつきて。後撰一「夢にだに見ることもなき年を經て心のどかにねる夜なければ」手非保下上「心のどかに昔を思ひ出でて、さべきたふときあるもせさせし」榮華初「世の中、正月よりも、心のどかならず、怪しう物のさとしなどしげうて」

こころ-の-とか-げ　心長閑氣（副）心のどかなるやう。榮華玉「この頃は少し心のどかげにて」

こころ-ば　心葉（名）❶こころ。心ばえ。和泉式部集「人知れぬ我が心ばかりにあらねども、あきあつめてぞ物をこそ思へ」❷歌などに、金又は絲にて、梅・松の枝などを作りて飾りて添ふるもの。宇津保俊蔭「朝薬物を四四をじきて、物・心葉いと清らかなり」源葵「さしくべしの箱のここころばせに」同帚木「つの清のつき二つすゑて、おほきにまころがしの枝、白きには梅をえりて」紫式部日記「盛一とろひにたきものの入れて、心葉、梅・松の枝をして、いとみ聞こえたり」花鳥餘情「近代御前の情の四物折敷の前にも鶴を立つること、心葉のよしなし」❸天平合などに、

（こころば）

こころ-ば-せ　意（名）〔心遣せの義〕❶心の起き向かふこと。心ばえ。心だて。思ひいり。意向。天武紀「瓦譜塹考選」「こころばせを世の人に似すぞ侍らこと」古今物名「いささあに時まつまきに見えつつ」名義抄「操心」❷こころばせ。世の人に時まつまきに見えつつ」名義抄「操心」❷こころばせ。注意深きこと。源東屋「我が心ばせをば、知たらん人人に

す。源氏「心みことにれんごろがらんの人のねぎごとに」なほ「しるしの神をぎ給ひて」

こころ-みじか 心短 (名) 夫銀の語幹。

こころ-みじかし 心短 (形ク) 氣短かなり。心ぜはし。志慮浅し。北史「六時斉「心みじかくて人忘れがちなる」六時斉「心ひなだにたたけばあくる夏の夜を心みじかき人やかへりし」月詣集「もろ共に心みじかき身なりせば忘るる人を恨みまましやは」

こころ-みだれ 心亂 (名) 心の亂るること。思慮・分別を失ふこと。謡小野「餘りの事の心亂れに身の置き所も知られどもし」

こころみ-なぎ-ちや 無試茶 (名) つつみつめ(最愛)に同じ。

こころみ-に 試 (副) 試みるために。靈異記「試ニ」古今序「三死ぬる命生きもやすることこころみに」「たまのゐ結ばかりあはんといはなん」後撰「三こころみになほおぼりたたん涙川、うれしきせにも流れあふやと」

こころみ-の-しゆう 試衆 (名) こころみられる人。試驗を受くる人。「開「學問科の試みを行はれけり中世家司「處業をもて試衆に問ふ」

こころ-みる 試 (他動ヰ) 〔心見る義〕實際を見んとてためす。實地につきてためす。試驗す。竹取「かはこころも中世猶これを樂きてこころみんといふ」古今序「人の身もならはしものをあはずして、いざここころみん懇ひや死ぬると」宇津保俊蔭「琴中世音を心みるに」

こころ-む 試 (他動ヰ) 前條の轉。平治「藤原信西家の浮沈をも試むべしとこそ存じ候へ」源少色葉「試ココロ

こころ-むき 心向 (名) 夫銀に同じ。王朝物語「我「賞時の心向きは知られど、物の心得ありしほどに」

こころ-むけ 心向 (名) 心のむけかた。心のしむけ。意向。源野分「やうやうかかる御心むけこそ恐ひにけれ」同若「時世の風いまきはまさる人には「なびきしたがひて「その心むけをたどるべきなり」

こころ-めたき (名) こころあたきさま。こころあたき度合。氣づかはしさ。宇治拾遺「若狭にも十日ばかりあるべかりけれど、この人のここ(うしろ)うめたきに、明けば行きて又の日歸るべきぞと、返す返す契りおきて」

こころ-めたし (形ク) 心にうしろめたく思ふ。氣づかはし。氣がかりなり。

こころ-もち 心持 (名、副) ❶心に感ずる工合。心の持ちかた。氣持ち。心地。源少色葉「心持ココロ」狂言「「心持がくわわら、くわっとした」❷やや。すこし。「ここころもちの小さし」狂言「小舞を舞へ。いや此のかなりでは舞はれぬ。どうなりと心持ばかり舞へ」

こころ-もちひ 心用 (名) 心の用ひかた。心がけ。心づかひ。用意。紫式部日記「さてもあり返べき身のほど、心もちひとしいひながら、人に劣らじと爭ふ心もちひも」榮華花「世の中を御心の中にしてそしてて愛すべかれど、猶打ちとけぬやうに御心もちひで見えさせ給ふ」後拾集「御かたちも・心もちひ・身のさえすべて秘けたることなく、とどのほり給へる人なり」

こころ-もち心用 (名) 前條に同じ。名義抄「用心ココロモチ」

こころ-もて 心以 (副) わが心からに。心と。後撰「上心もて生ふる山田のひつぢ穂は君守ちれと刈る人もなし」源蜻「こころもて日毎にむかふ炎だに、朝おく露を己れやはけつ」狭衣「のどかにて都にあらんとといと恐れありとおぼして、御心もて、其の年閏十月十日土佐の國のはたといふ所に渡らせ給ひぬ」

こころもと-な 心許無 (名) こころもとなし(心許無)の語幹。枕「「心もとなのことやとて「開くほどに」蜻蛉「あらぬ心もとなや「はやく日の暮れて有るに、何ごとて一人は來たりたるぞ」

こころもとなさ-がり 心許無 (名) もとながること。榮華「「中世我が給問に書かせなどしたる人は、その心もとながりをし」

こころもとなさ-がる 心許無 (自動ヰ) 心もとなく思ふ。竹取「とる・ひる待ち給ふに、年越ゆるまで音もせず、心もとながりて、いとしのびて世なにはにおはしまして」同「天人おそしと心もとながり給ふ」源澪「「「

節。殘薄脆胃。紅」

こーざ　小座（名）【一】ささやかな(小さい)座。【二】ねや(閨)をいふ。「下臈閨の方言」

こーざ　一胡坐　あぐらを組むこと。あぐら。

こーざ　一孤坐　獨り坐。獨り居ること。獨坐。「堪佳詩「禪窗孤坐」林空穆「獨眠」」

ごーさ　一誤差（名）【一】まちがひ。ちがひ。【二】【數】理論値と實際の眞の結果とを、其の近似値とのあひだの差。

ごーざ　一御座　【一】ざ(座)の敬語。おましし。「字津保「藤原の御座ざざのしも」「源氏「藤原の御座」ひき入れのおとどの御座」」【二】おはします。ましますこと。「大平記「品貫先づ內裏へ參りて見參るに、主上は御座なくて、只同町女房淺此(ヲンナ)夜(ヨル)にさしつどひて、御簾の前に御座をなされ、御簾の前を御待ちあらうずるにて候」【三】あげたたみ(上疊)に同じ。「はて、ことさらに御座といふたたみのさまにて、高麗などいふたたみらなり」「徐雅圓書「公方樣御殿所には、御座を敷かれ候」」【四】閨(ネヤ)・寢(ネ)・臥(フシ)・褥(シトネ)などにて、ねやみたる敷物。「閨所。ねやはしらべり。七十一番歌合「遲うちで、てじまむしらかはしまへ、御ざも候ぞ」」「源入記「うちはむしらを御座といふ事、なきことなり。たたみなどは、人によりて御座ともいふ。也」「明」【五】ねや(座敷船)をいふ。「大阪の方言。雙鬼「浮子記「河御座の涼しく、もあり今日の夜」」

ごーざ　一胡坐　あぐらを組むこと。あぐら。

ごーざ　一孤坐　獨り坐。獨り居ること。獨坐。「堪佳詩「禪窗孤坐」林空穆「獨眠」」

ごーさ　一誤差（名）【一】まちがひ。ちがひ。【二】【數】理論値と實際の眞の結果とを、其の近似値とのあひだの差。

ごーざ　一御座　【一】ざ(座)の敬語。おましし。「字津保「藤原の御座ざざのしも」「源氏「藤原の御座」ひき入れのおとどの御座」」【二】おはします。ましますこと。「大平記「品貫先づ內裏へ參りて見參るに、主上は御座なくて、只同町女房淺此(ヲンナ)夜(ヨル)にさしつどひて、御簾の前に御座をなされ、御簾の前を御待ちあらうずるにて候」【三】あげたたみ(上疊)に同じ。「はて、ことさらに御座といふたたみのさまにて、高麗などいふたたみらなり」「徐雅圓書「公方樣御殿所には、御座を敷かれ候」」【四】閨(ネヤ)・寢(ネ)・臥(フシ)・褥(シトネ)などにて、ねやみたる敷物。「閨所。ねやはしらべり。七十一番歌合「遲うちで、てじまむしらかはしまへ、御ざも候ぞ」」「源入記「うちはむしらを御座といふ事、なきことなり。たたみなどは、人によりて御座ともいふ。也」「明」【五】ねや(座敷船)をいふ。「大阪の方言。雙鬼「浮子記「河御座の涼しく、もあり今日の夜」」

ごーざ　一五座（名）能樂にて、觀世・

宝生・金春・金剛・喜多の五流の謂。

ごーざあり（名）こざあり(小屏)に同じ。「久安六年百首」から衣かつく袂ぞそぼちぬる見れども見えぬ春のこざ(こまざ)屏」

ごーざある　御座在（自動）あり(在)の敬語。ござる。「源氏「おりゐは、で、胸の上に御座有りける。「太平記「上皇の中に御座あることそ日本國の主、恐くは十善の君にていらせ給へ」狂言生薑「代代御門に御座ある、三種の神器のうち」同「ひだ生「殺生して罪が深く御座あらうずるあひだ」」

ごーさい　小才（名）大ならざる才。小事に巧みにて大事に巧みならざる才。「小才が利く」

ごーさい　一故歳（名）古きとし。ふるとし。「舊年。「高知之詩「故歳鹿裘蒸」」

ごーさい　一胡塞（名）塞外の胡國。えびすのくに。「明詩「胡塞誰能全使節」」或正見詩「胡塞「王維詩「胡塞「張安生「漢官」」

ごーさい　一胡采（名）【植】【一】たらな(菜)の異名。【二】こえんどう(胡豆)の異名。

ごーさい　子細（名動）こさい(豆細)に同じ。「遲歩色葉「子細」」

ごーさい　一豆細　大なる事と細やかなる事と。大小の事。小細。「東鑑「大安元年「可注申也」」

遲豆細之言上」「太平記「「豆細を申し殿きにけり」「庭訓往來「「豆細令參相伴之時、可計申也」」

こさいのもの　豆細者　豆細を知る人。委細を知る者。「義經記「「豆細者」「堀殿の妻女、若宮の案內者にて、おはしましし殿」」「わらはも此の所のこさいの者にて候へば」」

ごーさい　一御祭（名）【六月十六七日に伊勢の御祭あるよりいふ。】陰暦六月土用半過ぐる頃、七日ほど吹く北東の風。「源、思ふ。「恭度集「此の春は人もたのめぬ山ぶ風、心もしくやとくに飽りぬる」」

こーざ　小屏（名）小さきこまで。「平家「「行綱近ら寄り、小屏に成つて」「曾我「「二人が袖を引き寄せ、こざこざにいふやうは」」

ごーさん（名動）鐘の音などにいふ語。「ごーん。「大鑑「「鐘中「こんこん、こんこん、こんこんと、こんこんと、こんこんと

漢方醫の語。和名「五藏」。肝・心・脾・肺・腎也」。運歩色葉「五藏ぞう。心・肝・脾・肺・腎」。「五藏故藏と聲えたり」。「諸物理」。「心・肝・脾・肺・腎」。「五藏故藏」。「五藏故藏」。「五藏故藏

ごそ-しゃる（自動）ごさる（御座在）に同じ。お出でになる。狂言「いや、まづ向かうへごさ〻しやれませい」

ごそ-づつみ　袋包（名）　[1]ごさにて包むこと。又、その物。[2]乗物の一種。江戸時代、乗物を許された大名以下の人人の通常用ふるもの。軍に乗物ともいふ。

ごそ-ばり（名）[鑑]　ごぎれいなるさまにいふ語。漂酒。

ごそ-ぶま　小薩摩（名）　矢鉋の略。東海道名所記「大薩摩・小薩摩などとて、風呂をたらべて太鼓をうつ」

ごそ-ぶまぶし　小薩摩節（名）　大薩摩節より分かれたる一種の浮世節。

ごそ-ぶと　小里（名）　矢鉋の略。（おはざとの約）

ごそ-ぶ-くん　小里偏（名）　漢字の附・阮・限などの左傍にあるβの字の稱。字書には阜の部に属す。ごさ〻くん。

ごそ-ぶ-げ　御座無氣（名）[鑑]　ごさなきやうな。「[鑑]「さては此のあたりにては御座なげに候」

ごそ-ぶし　御座無（形ク）　なし（無）の[鑑]語。「太平記[三]「内裏へ参つて見るに、主上は御座なく候か」狂言「我れ等の國では御座なくは候」「ごさなどとて、「ごさと申す物を持つことは知らぬ人」[鑑]「御詠記」のとはり、一言・一句[鑑]りは「ごさない」」

ごそ-ぶぼし　御座直（名）　拜謁の時、主君が座を直し、其の人に敬意を表はすこと。[鑑]

ごそ-ぶ-れ（句）　ごさんなれに同じ。「由不来家家[鑑]「今日は勞も美は本[鑑]ざなれ」「[鑑]「今日・明日は勞も美は吉き座ごさなれ」

ごそ-れ　小札（名）　[1]縅の札(さね)の小さきもの。[2]大鎧目(ぶた)の縅の細廣き札(さね)に刻して、背通の札の帯。雑波職記「[鑑]「金鎖一枚交ぜの小札の縅是兜に彫打ちたるを猪首に著なし」

ごそ-れ-ぐさ-ぢり　小札草摺（名）　小札にて造りたる草ずり。

ごそ-の-ま　御座間（名）　[1]貴人の著座せる正面の桂間。東鑑「[鑑]「御座間並左右二間御厨」[2]ごさしよ(御座所)に同じ。「長鑑以来申次記「在所は則ち御會所之御座之間也」

ごそ-ぶび　小皺（名）　烏帽子などのびの小さきこと。又、その物。「大きびの約）幸若舞曲「[鑑]「冠者殿の召されうずる烏帽子は、大きびざうか、こさびざうか」

ごそ-ぶ-ぶえ　胡沙笛（名）　下文を見よ。「[鑑]「[鑑]「[鑑]人の吹けるこさぶえといふ物は、長さ一尺五六寸より一尺まで、大小あり。吹口に竹の管を入れて、黒木の皮をべるべると巻きて、丸く製したるものなり」

ごそ-ぶ-しき　小雑色（名）　年わかき雑色。「十訓[十]「[鑑]「[鑑]「[鑑

ごそんじょ（名）將軍家の產所のことを承り沙汰する事を掌る職。

ごそんすわ（御座所）の訛り。生玉心中「迎・付けて御座んしよ」洲國女夫池「今日斬られるは誰れでござんしよの」傾城酒呑童子「これ此處へござんせ」盛衰「淀殿酒呑童子「百錢「一人つの時分に又ござんせ」金調出世瀧「百錢きませう」

ごそんすことば 御座詞（名）ござんすを多く用ふる武都邊などの語。雪女五枝羽子板「頼・子供の色好きが、御座んすことばの酒のこなし」上戸に入れん爲め、召し給せて盛き餞」

ごそんすゐ ～枯山水（名）庭園の造り方。下文を見よ。作庭記「池もなく、山水と名附く。その枯山水のやうは、片山の岸、或ひは野邊などを作り出でて、それに取り附けて石を立つるなり」

ごそんだう ～御參道（名）の略。東鑑「此事於御參道珠可懸之由」

ごそんをと ～五三竹（名）【袴】ばていちく（布袋竹）の異名。

ごそんでんからう ～御三殿家老（名）江戸幕府の職名。田安・一橋・清水の三卿の庶務を總理し、用度・領地の事を掌る。

ごそんなれ（句）〔こそもあるなれの音便の約なり。貞享本文〕一說「御座あるなれの略」❶てにてあれ。にてあるよな。保元物語「平治物語」「敵の一家の郎等ござんなれ」「打てやれ者ども」❷平治物語「平家三殿御配流」「ござんなれ、汝は、此の夢を見たるござんなれと思ひ、手ごすれ、ひいて、待つさまに、いふ。卿丸三「哀れ殿原は、此の酒をしてこ」❸いざ來たれ。よしもきた。

ごそんじよ（名）將軍家の產所のことを承り沙汰する事を掌る職。

ごそんすわ（御座所）の訛り。生玉心中「迎・付けて御座んしよ」津國女夫池「今日斬られるは誰れでござんしよの」傾城酒呑童子「これ此處へござんせ」盛衰「淀殿酒呑童子「百錢「一人つの時分に又ござんせ」金調出世瀧「百錢きませう」

ごそんすことば 御座詞（名）ござんすを多く用ふる武都邊などの語。雪女五枝羽子板「頼・子供の色好きが、御座んすことばの酒のこなし」上戸に入れん爲め、召し給せて盛き餞」

ごそんすゐ ～枯山水（名）庭園の造り方。下文を見よ。作庭記「池もなく、山水と名附く。その枯山水のやうは、片山の岸、或ひは野邊などを作り出でて、それに取り附けて石を立つるなり」

ごそんだう ～御參道（名）の略。東鑑「此事於御參道珠可懸之由」

ごそんをと ～五三竹（名）【袴】ばていちく（布袋竹）の異名。

ごそんでんからう ～御三殿家老（名）江戸幕府の職名。田安・一橋・清水の三卿の庶務を總理し、用度・領地の事を掌る。

ごそんなれ（句）〔こそもあるなれの音便の約なり。貞享本文〕一說「御座あるなれの略」❶てにてあれ。にてあるよな。保元物語「平治物語」「敵の一家の郎等ござんなれ」「打てやれ者ども」❷平治物語「平家三殿御配流」「ござんなれ、汝は、此の夢を見たるござんなれと思ひ、手ごすれ、ひいて、待つさまに、いふ。卿丸三「哀れ殿原は、此の酒をしてこ」❸いざ來たれ。よしもきた。

「きやつこそ王の時參り、ござんなれ、大内の有樣たづねん」御所櫻川夜詰「走れ、走れ、ござんなれ、のがすまじと引つ組んで」

ごそんの-おにさぶ 五三鬼桐（名）敍所の名。きり（桐）を見よ。

ごそんの-おにわらぶ 五三鬼割桐（名）敍所の名。

ごそんの-おほわらぶ 五三大割桐（名）敍所の名。

ごそんの-さぶ 五三桐（名）敍所の名。きり（桐）を見よ。

ごそんは ～五山版（名）鎌倉・足利時代に、五山の佛寺などにて版行せる書籍。

ごそんぶんがく ～五山文學（名）鎌倉・室町時代、文敎隆盛の時、五山等の僧侶の間にのみ行はれたる文學。

ごさんまい ～五三昧（名）佛語。ごさんまいしよ（五三昧所）の略。保元物語「午の刻ばかりに御書切れにけり。其の後、夜ぞかすて敍若野の五三昧に納め來る」平家三「河内國の村、敍若野の五三昧也」

ごさんまいしよ（句）〔ごさんまいの音便〕御座あるまじ。あるまじ。有我會稽山「御袋あによくござんまいし」

ごさんまいしよ ～五三昧所（名）〔三昧は葬地の異名〕佛語。古昔、畿内五箇國の野、國昧に、大和の敍若野、其の他は詳かならず。

ごそんめれ（句）〔こそもあるめれの音便の約なり。〕こそもあるめれ。であらう。

ごそんをれ（句）〔こそもあるなれの音便の約なり。〕人を證はしたるござんめれ。同内侍「人から御使には、あらじ、平家の知音人、内侍殿、平家の知音人、内侍殿、平家の知音人、内侍殿

こじ　〜火笑（名）「火の笑者」ひばしら（火笑）の別名。

こじ　〜古寺（名）ふるき寺。

故事（名）❶古へ、ふるき事。史記「故事、秦王、王翦、王賁、王離、皆秦之名将」❷故事。

こじ　〜古字（名）むかし用ひて今は廃れた文字。漢書「魯恭王壞孔子宅、欲以廣宮、而得古文尚書、及禮記・論語・孝経凡數十篇、皆古字也」同書「初左氏傳・毛詩・礼・尚書・論語・孝経皆古字也」

こじ　〜古寺（名）ふるき寺。ふるてら。舊寺。謡「石に古寺の蒼跡あり」、薬「古寺」に対。和名抄「重閣西方止鶴観、老身古寺風冷冷」

こじ　〜孤寺（名）ただ一つの寺。人家を離れて孤にある寺。離山寺。謡「蒲冠寺、孤寺」

こじ　〜孤兒（名）❶親に離れたる孤幼兒。父に早く別かれし子。みなしご。孤子。十訓抄「孤兒・寡婦なりとも敬くべし」明治三十三年法律第五号「孤兒・寡婦に在る未成年の孤兒」史記「孤兒・寡婦、謹立之」❷親に離れたる未成年者。管子「孤兒・寡婦・不能自人之属」

こじ　〜巾子（名）冠の名所。後頂部に高く越に高く立てるもの。髻を此の中に入る。かんむり（冠）を見よ。神楽「や、近衛の御門に古志（巾子）おとい つ、や、美の根のなければ」和名抄「巾子。辨色立成云、巾子、俗語、所以插簪者也」字治拾遺「髻、冠のことばかり見えて」名目抄「冠中曲巾子」

こじ　〜火笑（名）「火の笑者」ひばしら（火笑）の別名。

こし　腰（助動）❶腰に帯び又は佩く太刀一腰、「太刀一腰、ふつふから取り出だし」❷矢を盛り入れたる筒を数ふる語。本草綱目「保元物語、義朝、矢一腰、ふつふから取り出だし」「抑も始めとも、此の腰に、中四寸、長さ三尺、九つ、さしたる矢三こし、十八さしたる矢三こし、九つ、さしたる矢一こし、射たりけるが」字治拾遺「五十腰の矢」❸兼目の矢四筋をいふ語。

こし　〜巾子（名）冠の名所。後頂部に高く越に高く立てるもの。髻を此の中に入る。かんむり（冠）を見よ。神楽「や、近衛の御門に古志（巾子）おとい つ、や、美の根のなければ」和名抄「巾子。辨色立成云、巾子、俗語、所以插簪者也」字治拾遺「巾子、俗語、冠のことばかり見えて」名目抄「冠中曲巾子」

こし　〜火笑（名）「火の笑者」ひばしら（火笑）の別名。

故事（名）❶古へ、ふるき事。史記「故事、秦王、王翦、王賁、王離、皆秦之名将」❷故事。

こじ　〜古字（名）むかし用ひて今は廃れた文字。漢書「魯恭王壞孔子宅、欲以廣宮、而得古文尚書、及禮記・論語・孝経凡數十篇、皆古字也」同書「初左氏傳・毛詩・礼・尚書・論語・孝経皆古字也」

こじ　〜古寺（名）ふるき寺。ふるてら。舊寺。謡「石に古寺の蒼跡あり」、薬「古寺」に対。和名抄「重閣西方止鶴観、老身古寺風冷冷」

こじ　〜孤寺（名）ただ一つの寺。人家を離れて孤にある寺。離山寺。謡「蒲冠寺、孤寺」

こじ　〜孤兒（名）❶親に離れたる孤幼兒。父に早く別かれし子。みなしご。孤子。十訓抄「孤兒・寡婦なりとも敬くべし」明治三十三年法律第五号「孤兒・寡婦に在る未成年の孤兒」史記「孤兒・寡婦、謹立之」❷親に離れたる未成年者。管子「孤兒・寡婦・不能自人之属」

こじ　〜虎兒（名）とらのこ。

こじ　〜居士（名）❶學德あり て世俗を離れ、家に居りて佛門に帰依せる有徳の男子。太平記「居士ハ、家ニ居テ、公事ヲ、大臣・列卿ニ、居士ハ、世俗ヲ、捨テ、出家シテ、仏門ニ、入リ、自然居士ト申テ、喰食ノ御座、鉢ガ、法華経ノ、諸経ノ、門・利利・居士、皆、悲敬、聞経、苦薩行経、有居・財之士、居家之士、居法之士、居明居山之士、六通名、居士ニ」❷佛語。眞言宗以外にて、男子の法名の下に附する稱號。

こじ　〜固辞（名）かたくことわること。頑ひて辞退すること。書「明「丁酉、書、命法師、師、爲、講、師、書、師、法、師、固、辞」書「秦、六、月、拜、稽首固辞」礼記「曾子、主人固辞、然後、答、拜、説、稽首、西階」

こじ　〜估侍（名）❶たのみに思ふこと。たより。左傳「子、産、估、侍、其、倹、負、其、衆、庶」❷父と母と。詩「小、人、無、父、何、估、無、母、何、恃」

こじ　〜兀子（名）四脚にして、卿か長官の用ゐる四角の腰掛。西宮記「宮内卿、廳、兀、子、脚、上、中、央、編、目、字、引、宜、脚、廳、四、角、北、行、第、四、子、脚、床、子、・、案、子、家、床、子、等、中、書、近、例、以、件、掛、布、鑑、箱、等、代、敷、蓋、鑑、下、不、敷、兀、子、下、記、也」

こじ　〜五指（名）五本の指。ゆび、親指・食指・中指・無名指・小指の等。

（慣）**五指のうちどうか一本の指つに如かず**　箇箇別別の力は、到底一致團結せるものに及ばざるに譬ふ。俠客傳「小可なんどが、謀局のための智慧袋、義は、足の知れたる小刀、和工、五指の志、代に限かんよりは一命に変ずることなし」

こじ　〜五師（名）古へ、寺日及び石清水の宮寺等の社僧の役名。寺院五人を選びて、一寺の事を管らしめしもの。三代實録「十月、八日、大宰府、言、筑紫、諸、寺、令、七大寺、僧、筑紫、王、等、相、共、勤、加、修、法」源氏「夢、ことしとは、やく、りおやの語らひし大人、この渡れるを呼びとて、語でさせ来る」

こじ　〜非師（名）国非を教ふる人。三代實録「以、事、示、諸、国、人、号、非、師、也」

こじ　〜語詞（名）ことば。言詞。

こし　〜吾子（代）同輩を親しみふいふ語。書「如、汝、吾、子、之、教、之、也」左傳「寡、人、有、疾、寡、人、之、子、其、須、矣、吾、子、其、入、也」孟子「孟子、謂、高、子、曰、子、尊、西、日、吾、子、乗、子、齊、義、賢」

こし　〜互市（名）ぼうえき（貿易）に同じ。後漢書「鮮卑、互、市、貿、易」

こし　越（接尾）❶時を越しになすこと。「昨、今、明、日、かけに、ほくろ山に照る月の、あかがさる君を山越て見つつこし、かつの絵屏風愛に見ゆ」勢語「女、ことしのびて、物、こしにあひにけり」❷月日を越え来たれるにいふ語。國姓爺合戦「日合戦「三年越し、来る、日も、三年越しの長、須びとかから」

こし　〜五事（名）❶人の外面に備はる五つのもの。下文の書經を見よ。於於、水、火、木、土、「「貌、言、視、聽、思、五、事、」「日、貌、恭、言、曰、従、視、曰、明、聽、曰、聰、思、曰、睿、恭、作、従、作、明、作、聰、作、睿、作、」❷五事。五悪心。四種の心の中に、三日、貪、欲、五、日、怒、」書、説、苑、「五、事、」「日、貌、言、視、聽、思、」「日、言、視、聽、思、貌、」「日、視、聽、思、貌、言、」「日、聽、思、貌、言、視、」「日、思、貌、言、視、聽、」

こし　〜五事（名）❶人の外面に備はる五つのもの。下文の書經を見よ。於於、水、火、木、土、「「貌、言、視、聽、思、五、事、」「日、貌、言、視、聽、思、」「日、言、視、聽、思、貌、」「日、視、聽、思、貌、言、」「日、聽、思、貌、言、視、」「日、思、貌、言、視、聽、」❷五事。五悪心。四種の心の中に、三日、貪、欲、五、日、怒、」書、説、苑、「五、事、」「日、貌、言、視、聽、思、」「日、言、視、聽、思、貌、」「日、視、聽、思、貌、言、」「日、聽、思、貌、言、視、」「日、思、貌、言、視、聽、」

こし　〜五時（名）❶昼夜を五時に分つ。「五時に、紫の色濃し。宇津保物語「こきらうきーかさね中書こきあこめ」❷時に、紫の色濃し。宇津保物語「こきらうきーかさね中書こきあこめ」

こし　腰（助動）❶腰に帯び又は佩く太刀一腰、「太刀一腰、ふつふから取り出だし」❷矢を盛り入れたる筒を数ふる語。本草綱目「保元物語、義朝、矢一腰、ふつふから取り出だし」「抑も始めとも、此の腰に、中四寸、長さ三尺、九つ、さしたる矢三こし、十八さしたる矢三こし、九つ、さしたる矢一こし、射たりけるが」字治拾遺「五十腰の矢」❸兼目の矢四筋をいふ語。

こし　〜巾子（名）冠の名所。後頂部に高く越に高く立てるもの。髻を此の中に入る。かんむり（冠）を見よ。神楽「や、近衛の御門に古志（巾子）おとい つ、や、美の根のなければ」和名抄「巾子。辨色立成云、巾子、俗語、所以插簪者也」字治拾遺「巾子、俗語、冠のことばかり見えて」名目抄「冠中曲巾子」

こし　〜火笑（名）「火の笑者」ひばしら（火笑）の別名。

故事（名）❶古へ、ふるき事。史記「故事、秦王、王翦、王賁、王離、皆秦之名将」❷故事。

こじ　〜古字（名）むかし用ひて今は廃れた文字。漢書「魯恭王壞孔子宅、欲以廣宮、而得古文尚書、及禮記・論語・孝経凡數十篇、皆古字也」同書「初左氏傳・毛詩・礼・尚書・論語・孝経皆古字也」

こじ　〜古寺（名）ふるき寺。ふるてら。舊寺。謡「石に古寺の蒼跡あり」、薬「古寺」に対。和名抄「重閣西方止鶴観、老身古寺風冷冷」

こじ　〜孤寺（名）ただ一つの寺。人家を離れて孤にある寺。離山寺。謡「蒲冠寺、孤寺」

こじ　〜孤兒（名）❶親に離れたる孤幼兒。父に早く別かれし子。みなしご。孤子。十訓抄「孤兒・寡婦なりとも敬くべし」明治三十三年法律第五号「孤兒・寡婦に在る未成年の孤兒」史記「孤兒・寡婦、謹立之」❷親に離れたる未成年者。管子「孤兒・寡婦・不能自人之属」

こじ　〜虎兒（名）とらのこ。

こじ　〜居士（名）❶學德あり て世俗を離れ、家に居りて佛門に帰依せる有徳の男子。太平記「居士ハ、家ニ居テ、公事ヲ、大臣・列卿ニ、居士ハ、世俗ヲ、捨テ、出家シテ、仏門ニ、入リ、自然居士ト申テ、喰食ノ御座、鉢ガ、法華経ノ、諸経ノ、門・利利・居士、皆、悲敬、聞経、苦薩行経、有居・財之士、居家之士、居法之士、居明居山之士、六通名、居士ニ」❷佛語。眞言宗以外にて、男子の法名の下に附する稱號。

こじ　〜固辞（名）かたくことわること。頑ひて辞退すること。書「明「丁酉、書、命法師、師、爲、講、師、書、師、法、師、固、辞」書「秦、六、月、拜、稽首固辞」礼記「曾子、主人固辞、然後、答、拜、説、稽首、西階」

こじ　〜估侍（名）❶たのみに思ふこと。たより。左傳「子、産、估、侍、其、倹、負、其、衆、庶」❷父と母と。詩「小、人、無、父、何、估、無、母、何、恃」

こじ　〜兀子（名）四脚にして、卿か長官の用ゐる四角の腰掛。西宮記「宮内卿、廳、兀、子、脚、上、中、央、編、目、字、引、宜、脚、廳、四、角、北、行、第、四、子、脚、床、子、・、案、子、家、床、子、等、中、書、近、例、以、件、掛、布、鑑、箱、等、代、敷、蓋、鑑、下、不、敷、兀、子、下、記、也」

こし　〜五指（名）五本の指。ゆび、親指・食指・中指・無名指・小指の等。

（慣）**五指のうちどうか一本の指つに如かず**　箇箇別別の力は、到底一致團結せるものに及ばざるに譬ふ。俠客傳「小可なんどが、謀局のための智慧袋、義は、足の知れたる小刀、和工、五指の志、代に限かんよりは一命に変ずることなし」

こし　〜五師（名）古へ、寺日及び石清水の宮寺等の社僧の役名。寺院五人を選びて、一寺の事を管らしめしもの。三代實録「十月、八日、大宰府、言、筑紫、諸、寺、令、七大寺、僧、筑紫、王、等、相、共、勤、加、修、法」源氏「夢、ことしとは、やく、りおやの語らひし大人、この渡れるを呼びとて、語でさせ来る」

こじ　〜非師（名）国非を教ふる人。三代實録「以、事、示、諸、国、人、号、非、師、也」

こじ　〜語詞（名）ことば。言詞。

こし　〜吾子（代）同輩を親しみふいふ語。書「如、汝、吾、子、之、教、之、也」左傳「寡、人、有、疾、寡、人、之、子、其、須、矣、吾、子、其、入、也」孟子「孟子、謂、高、子、曰、子、尊、西、日、吾、子、乗、子、齊、義、賢」

こし　〜互市（名）ぼうえき（貿易）に同じ。後漢書「鮮卑、互、市、貿、易」

こし　越（接尾）❶時を越しになすこと。「昨、今、明、日、かけに、ほくろ山に照る月の、あかがさる君を山越て見つつこし、かつの絵屏風愛に見ゆ」勢語「女、ことしのびて、物、こしにあひにけり」❷月日を越え来たれるにいふ語。國姓爺合戦「日合戦「三年越し、来る、日も、三年越しの長、須びとかから」

こし　〜五事（名）❶人の外面に備はる五つのもの。下文の書經を見よ。於於、水、火、木、土、「「貌、言、視、聽、思、五、事、」「日、貌、言、視、聽、思、」「日、言、視、聽、思、貌、」「日、視、聽、思、貌、言、」「日、聽、思、貌、言、視、」「日、思、貌、言、視、聽、」❷五事。五悪心。四種の心の中に、三日、貪、欲、五、日、怒、」書、説、苑、「五、事、」「日、貌、言、視、聽、思、」「日、言、視、聽、思、貌、」「日、視、聽、思、貌、言、」「日、聽、思、貌、言、視、」「日、思、貌、言、視、聽、」

こし　〜五事（名）❶人の外面に備はる五つのもの。下文の書經を見よ。於於、水、火、木、土、「「貌、言、視、聽、思、五、事、」「日、貌、言、視、聽、思、」「日、言、視、聽、思、貌、」「日、視、聽、思、貌、言、」「日、聽、思、貌、言、視、」「日、思、貌、言、視、聽、」❷五事。五悪心。四種の心の中に、三日、貪、欲、五、日、怒、」書、説、苑、「五、事、」「日、貌、言、視、聽、思、」「日、言、視、聽、思、貌、」「日、視、聽、思、貌、言、」「日、聽、思、貌、言、視、」「日、思、貌、言、視、聽、」

こし　〜五師（名）古へ、寺日及び石清水の宮寺等の社僧の役名。寺院五人を選びて、一寺の事を管らしめしもの。三代實録「十月、八日、大宰府、言、筑紫、諸、寺、令、七大寺、僧、筑紫、王、等、相、共、勤、加、修、法」源氏「夢、ことしとは、やく、りおやの語らひし大人、この渡れるを呼びとて、語でさせ来る」

こじ　〜非師（名）国非を教ふる人。三代實録「以、事、示、諸、国、人、号、非、師、也」

こじ　〜語詞（名）ことば。言詞。

こし　〜吾子（代）同輩を親しみふいふ語。書「如、汝、吾、子、之、教、之、也」左傳「寡、人、有、疾、寡、人、之、子、其、須、矣、吾、子、其、入、也」孟子「孟子、謂、高、子、曰、子、尊、西、日、吾、子、乗、子、齊、義、賢」

こし　〜互市（名）ぼうえき（貿易）に同じ。後漢書「鮮卑、互、市、貿、易」

こし　越（接尾）❶時を越しになすこと。「昨、今、明、日、かけに、ほくろ山に照る月の、あかがさる君を山越て見つつこし、かつの絵屏風愛に見ゆ」勢語「女、ことしのびて、物、こしにあひにけり」❷月日を越え来たれるにいふ語。國姓爺合戦「日合戦「三年越し、来る、日も、三年越しの長、須びとかから」

こし　〜五事（名）❶人の外面に備はる五つのもの。下文の書經を見よ。於於、水、火、木、土、「「貌、言、視、聽、思、五、事、」「日、貌、言、視、聽、思、」「日、言、視、聽、思、貌、」「日、視、聽、思、貌、言、」「日、聽、思、貌、言、視、」「日、思、貌、言、視、聽、」❷五事。五悪心。四種の心の中に、三日、貪、欲、五、日、怒、」書、説、苑、「五、事、」「日、貌、言、視、聽、思、」「日、言、視、聽、思、貌、」「日、視、聽、思、貌、言、」「日、聽、思、貌、言、視、」「日、思、貌、言、視、聽、」

こし　〜五時（名）❶昼夜を五時に分つ。「五時に、紫の色濃し。宇津保物語「こきらうきーかさね中書こきあこめ」❷時に、紫の色濃し。宇津保物語「こきらうきーかさね中書こきあこめ」

こし　腰（助動）❶腰に帯び又は佩く太刀一腰、「太刀一腰、ふつふから取り出だし」❷矢を盛り入れたる筒を数ふる語。本草綱目「保元物語、義朝、矢一腰、ふつふから取り出だし」「抑も始めとも、此の腰に、中四寸、長さ三尺、九つ、さしたる矢三こし、十八さしたる矢三こし、九つ、さしたる矢一こし、射たりけるが」字治拾遺「五十腰の矢」❸兼目の矢四筋をいふ語。

こじ　巾子（名）冠の名所。後頂部に高く越に高く立てるもの。髻を此の中に入る。かんむり（冠）を見よ。神楽「や、近衛の御門に古志（巾子）おとい つ、や、美の根のなければ」和名抄「巾子。辨色立成云、巾子、俗語、所以插簪者也」字治拾遺「巾子、俗語、冠のことばかり見えて」名目抄「冠中曲巾子」

こじ　〜火笑（名）「火の笑者」ひばしら（火笑）の別名。

故事（名）❶古へ、ふるき事。史記「故事、秦王、王翦、王賁、王離、皆秦之名将」❷故事。

こじ　〜古字（名）むかし用ひて今は廃れた文字。漢書「魯恭王壞孔子宅、欲以廣宮、而得古文尚書、及禮記・論語・孝経凡數十篇、皆古字也」同書「初左氏傳・毛詩・礼・尚書・論語・孝経皆古字也」

こじ　〜古寺（名）ふるき寺。ふるてら。舊寺。謡「石に古寺の蒼跡あり」、薬「古寺」に対。和名抄「重閣西方止鶴観、老身古寺風冷冷」

こじ　〜孤寺（名）ただ一つの寺。人家を離れて孤にある寺。離山寺。謡「蒲冠寺、孤寺」

こじ　〜孤兒（名）❶親に離れたる孤幼兒。父に早く別かれし子。みなしご。孤子。十訓抄「孤兒・寡婦なりとも敬くべし」明治三十三年法律第五号「孤兒・寡婦に在る未成年の孤兒」史記「孤兒・寡婦、謹立之」❷親に離れたる未成年者。管子「孤兒・寡婦・不能自人之属」

こじ　〜虎兒（名）とらのこ。

こじ　〜居士（名）❶學德あり て世俗を離れ、家に居りて佛門に帰依せる有徳の男子。太平記「居士ハ、家ニ居テ、公事ヲ、大臣・列卿ニ、居士ハ、世俗ヲ、捨テ、出家シテ、仏門ニ、入リ、自然居士ト申テ、喰食ノ御座、鉢ガ、法華経ノ、諸経ノ、門・利利・居士、皆、悲敬、聞経、苦薩行経、有居・財之士、居家之士、居法之士、居明居山之士、六通名、居士ニ」❷佛語。眞言宗以外にて、男子の法名の下に附する稱號。

こじ　〜固辞（名）かたくことわること。頑ひて辞退すること。書「明「丁酉、書、命法師、師、爲、講、師、書、師、法、師、固、辞」書「秦、六、月、拜、稽首固辞」礼記「曾子、主人固辞、然後、答、拜、説、稽首、西階」

こじ　〜估侍（名）❶たのみに思ふこと。たより。左傳「子、産、估、侍、其、倹、負、其、衆、庶」❷父と母と。詩「小、人、無、父、何、估、無、母、何、恃」

こじ　〜兀子（名）四脚にして、卿か長官の用ゐる四角の腰掛。西宮記「宮内卿、廳、兀、子、脚、上、中、央、編、目、字、引、宜、脚、廳、四、角、北、行、第、四、子、脚、床、子、・、案、子、家、床、子、等、中、書、近、例、以、件、掛、布、鑑、箱、等、代、敷、蓋、鑑、下、不、敷、兀、子、下、記、也」

こし　〜五指（名）五本の指。ゆび、親指・食指・中指・無名指・小指の等。

（慣）**五指のうちどうか一本の指つに如かず**　箇箇別別の力は、到底一致團結せるものに及ばざるに譬ふ。俠客傳「小可なんどが、謀局のための智慧袋、義は、足の知れたる小刀、和工、五指の志、代に限かんよりは一命に変ずることなし

こし-かがく 腰抱 (名) 出産のとき、産婆などが産婦の腰をいだくこと。

こし-かき 輿舁 (名) 輿を舁く人。駕輿丁。三十二番歌合「輿舁。旅の世のうきをいとはば輿かきの〻るしむ道ぞさしし合せなる」寒公覚悟事「私にてこしよせもの時中書御成には中書御所こしかきばかりあつかひ申し候也」

こし-がき 腰垣 (名) たけ低く立てるる人の腰のあたりの高さに結ひわたしたのるる垣。春花五大力「本舞臺、州崎竹屋の姿のるかかり、物すきしたる中門・冷路欠、みめがき崖の腰垣すきしたる竹屋としるしたる角行燈かけ」

こし-かけ 腰掛 (名) ❶腰を掛くること。書言字考「腰櫃には侍上座になほり、其の次に草履取なほる」遊歩色茶「腰櫃の石」狂言記「えびすのこぜのこしかけ」❷或る目的とする事件の到来する迄、假りに身をおくこと。又、其の位置。

こし-かけ 小仕掛 (名) ❶小規模の仕掛け。天仕掛の對。❷縮尾業組織の一。小規模の設備をなせるもの。

こしかけ-えだ 腰掛枝 (名) 腰掛となすに適する枝ぶり。又、その枝。傾城反魂香「腰掛枝の三蓋松」

こしかけ-しごと 腰掛仕事 (名) 腰掛仕事の心組にてなす腰掛仕事。

こしかけ-じり 腰掛尻 (名) 一時の腰掛にて、落ちつきて忠實に事を務むること。考へなきこと。

こしかけ-だい 腰掛臺 (名) 腰掛に用ふる臺。こしかけ。

こしかけ-ぢやや 腰掛茶屋 (名) 暫時腰を掛けて休憩する茶屋。かけぢや。入や。今宵荒神鳴十「腰掛茶屋の床几の床机」通町の床机を初用和の頃茶屋と呼び、通町の住民。

こし-かく 腰抱 (名) 出産のとき、産婆などが産婦の腰をいだくこと。

こし-かき 輿舁 (名) 輿を舁く人。駕輿丁。三十二番歌合「輿舁。旅の世のうきをいとはば輿かきの〻るしむ道ぞさしし合せなる」寒公覚悟事「私にてこしよせもの時中書御成には中書御所こしかきばかりあつかひ申し候也」

こし-がき 腰垣 (名) たけ低く立てるる人の腰のあたりの高さに結ひわたしたのるる垣。春花五大力「本舞臺、州崎竹屋の姿のるかかり、物すきしたる中門・冷路欠、みめがき崖の腰垣すきしたる竹屋としるしたる角行燈かけ」

こし-かけ 腰掛 (名) ❶腰を掛くること。書言字考「腰櫃には侍上座になほり、其の次に草履取なほる」遊歩色茶「腰櫃の石」狂言記「えびすのこぜのこしかけ」❷或る目的とする事件の到来する迄、假りに身をおくこと。又、其の位置。

こ-じかけ 小仕掛 (名) ❶小規模の仕掛け。天仕掛の對。❷縮尾業組織の一。小規模の設備をなせるもの。

こしかけ-えだ 腰掛枝 (名) 腰掛となすに適する枝ぶり。又、その枝。傾城反魂香「腰掛枝の三蓋松」

こしかけ-しごと 腰掛仕事 (名) 腰掛仕事の心組にてなす腰掛仕事。

こしかけ-じり 腰掛尻 (名) 一時の腰掛にて、落ちつきて忠實に事を務むること。考へなきこと。

こしかけ-だい 腰掛臺 (名) 腰掛に用ふる臺。こしかけ。

こしかけ-ぢやや 腰掛茶屋 (名) 暫時腰を掛けて休憩する茶屋。かけぢや。入や。今宵荒神鳴十「腰掛茶屋の床几の床机」通町の床机を初用和の頃茶屋と呼び、通町の住民。

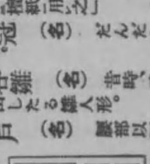
こし-かた 腰刀 (名) 〔帯に腰に差し、或は抑上書巾子紙、以檀紙用之〕

こし-かたな 腰刀 (名) 〔帯に腰に差し、或は抑上書巾子紙、以檀紙用之〕

こし-かつぎ 五字冠 (名) だんだんづけ(段段付)に同じ。

こし-がや-びなな 越谷雛 (名) 書時武藏國越谷より製出したる雛人形。

こし-からだ 腰唐戸 (名) 腰部以下は唐戸の如くなるもの。



上部はからすの障子の如くなるもの。ちり戸と障子との間なるもの。(ぢちかし)

こし-がらみ 腰絡 (名) 腰にからみつくこと。弱兵の働き得ずして、却りて足手まとひとなること。盛衰記三「土器に蕎麦を高坏に盛りて折敷に すゑ、五尺計に蕎麦が、左右の肩を脱ぎて、きる物を腰に巻き集め、蕎麦を取りて煮たる蕎の汁を差し賣きて、かはらけの汁をにらまへ立ちたる進ひて、腰がらみと云ふ事」

こしき 穀蒸 (名) 米の名所。輪の中央にあり、(ゆ)其の中を貫ぎ、(ゆ)其の外に集まるもの。和名抄「穀蒸(ゆ)とこうし(簡)。和名抄「穀蒸(ゆ)とこうし(簡)。和名抄「穀蒸(ゆ)とこうし(簡)

けり、浮くやうにせしめて振り回すこと。

こけ-ぶり 腰振（名）腰を振り・大木刀使のくせ者なれば、「十方斬り・八方抑ひ・腰車」雪女五枚羽子板「一條の能術の水車・横車・腰車」

こし-ぐるま 越車（名）ひきこしぐるま（引越車）の略。

こし-ぐるわ 腰郭（名）山城を築くに、本丸より二の丸へ移る間の地形に高下あるとき、本丸の腰に細き郭を巡りて段を附け、其の郭より二の丸へ下だるやうに下ることと。帶郭（ヒモクルワ）。附郭（ツケクルワ）。甲陽軍鑑「一國州花澤の城へ信玄公取りつめ給ふ。岡部次郎右衛門中略花澤こしぐるわの近くにある家の上にあがり居り申し候後略」

こし-ぐろ 腰黒（名）乘物の一種。腰に銅代を張らず、黑漆にしたるもの。

ごじ-ぐわ 五時花（名）【植】梧桐科、午時花の一年生草本。莖の高さ三尺。葉は狹長針形、漏斗狀を有す。夏秋の候、紅色の美花を葉腋に開き、正午に咲き、翌朝に至りて閉づるを以て此の名あり。紅蜀の觀賞用草本なり。夜落金錢。

こし-け 腰氣（名）しきゆうびやう（子宮病）の總名。即ち、白帶（ヒヤクタイ）・血崩（ケツホウ）などの類。帶下（タイカ）。

ごじ-けう 五時教（名）佛語。釋迦の一代の間に說かれし教法を五つの時代に區別したる稱。華嚴は三七日、阿含は十二年、方等は八年、般若は廿二年、法華は八年にして說き終はりしといふ。其れに涅槃の一日を加へて凡そ五十年間の說法とす。大藏「法華經一部を配き來らんとてこそ從經をば、とき給ひけれ。それをなづけて五時教とは、いふにこそ、あるなれ」

こし-げし 木茂（名）木生ひしげれる

袋。文德實錄「十天定元年三月帝聞光定在山、食用絕乏、別勅給乞食袋、淸山中之愛」耳底記「學問」問すること、「乞食袋のやうにするがよし。よきものしきもの一つに入れ置きて、用に從ひて使ふべし」

こしき-はんてん 腰切半纏（名）腰のあたりまで纏ふ短きはんてん。腰衆者の著用するもの。

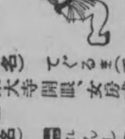
こしき-わら 腰薬（名）古へ腰の底に、今の袋を用ふる如く敷き込みし藁の稱。和名抄「腰帶藁」（ヒヲビワラ）。

こじき-えどし 乞食織（名）甲冑を色色の絲を張りまぜて織したるものなりと。（類聚國語）

こし-ぎんちゃく 腰巾著（名）【1】腰に著くる巾著。【2】帝に其の人に附屬して離れざること。又、其の附屬する人。浮世風呂「私が湯へ來るにも腰巾著だ」

こ-じく 乞食（自動）（こじき（乞食）の略）【1】乞食をなす。辭玉「一波笠頭にかけてはこじくとも天の下にてゝみのは頼まじ」【2】行く・なすなどを罵りいふ詞。「そこへこじけ」「かしこへこじけ」

こし-ぐじき 腰挫（名）相撲にて相手の褌を取りて引きつけ、其の肩の邊へ我が腰を當てて、相手の腰を挫き落とすこと。


（きじくし）

こし-ぐるま 輿車（名）てぐるま（手輿）に同じ。山輿記「異大寺間唱、女房或乘、車、或乘、輿、或輿、車」

こし-ぐるま 腰車（名）【1】れんしゃ（輦車）に同じ。內匠寮式「腰車（ヒヲグルマ）二具」今集神遊歌「榮者也「人」」宇治集「腰車（ヒヲグルマ）」「腰車に引載かれて參りけるに」【2】柔術などにて、自分の腰に相手の體をつ

こし-しゃうじ 腰障子（名）底障子の下方、高さ一尺許りなる腰高に成したるもの。盛衰記「大木「御」腰障子にも、女房の御手と、鬼しくして」應仁記「腰障子一間の直ひ二萬疊」

（しこ）

こし-じるし 腰印（名）甲冑をよろひたる時、腰にさしし腰小旗の遺例なるべし。初めは上帶にさしたりしが、後には後胴に受筒を作りて、後世は多く足輕等のみに用ひたり。

こし-じろ 腰白（名）腰の邊を白く染めたる小袖。御伽故實「白かたびら・こしじろなど、若き人可給餞」

ごし-せう 五絲節（名）「此の日五色の絲にて裂りたる長命縷を臂にかくるよりいふ」五月五日の節句の異稱。眞俗交談記「五月五日（五絲節）」

こし-せに 腰錢（名）腰巾著などに入れて、腰につけたる錢。望一千句「田樂に串の竹のぶしゃうきに句腰錢を紙國參り勢子を入れ、往き來の人の腰錢を背り取る べし」

こし-そひ 輿添（名）輿に添ひて行くこと。又、その人。源公實記「「私にて」こしとよせの時、こしそひのさむらひ兩人、えんくゝあがりて、こしを寄せ候」

こし-そく 輿添（名）輿に附き添ひて護行せしむること。又、其の人。姿入記「御「こしぞくへの人も、右左へ立ちよりて御「こしかきをもかへさせ申すなり」實我五人兄弟「物さびたる女の乘物近ゝ、こ、に、輿添への下女を見れば」

こし-だ 【植】裏白科、裏白屬の多年生草本。葉の大さ四五尺、羽狀に分裂す。葉面は鮮綠色、光澤あり、裏面は白色を呈する點、羊齒類に類す。我が國、暖地の山地に自生す。

こし-だ 小舌（名）病氣のため、舌根部に生じたる小さき舌の如きもの。（日葡和名「蛋舌」。病源論云「舌本直腰絡、腰絡、生如舌之狀、謂之重舌、也博物志」）

こし-だ 【植】さきとげ（通泉草）の異名。

ごし-だ 腰帶の語。大鏡「冠「平」上の御ぞ直し、五しに打ちきり」

こし-だい 腰臺（名）【1】輿を地に置くとき、轅（ながえ）を受くしむる机狀の臺。こしたて。【2】和歌の名所。頭立（ずたち）の腰にあるる臺。

こし-だか 腰高（名）【1】（かはらけの下に付けし木の脚を臺にしたる古製の形をうつしたるもの）腰の高き燈檠。高坏の類。秋草「燈皿・平皿・腰高」【2】すべて器物などの腰部を高くしたるもの。浮世床「こし高のたらひく湯を汲んで、さかやきを洗んでゐる」【3】腰板の高きこと。又、その子などの、腰板の高きこと。又、その子などの、腰板の高きこと。又、その子などの、

後日、各部編事」

こじつか 故實家 (名) 故實に通達せるひと。

こしつかひ 腰使 (名) 腰をつかふこと。腰のつかひやう。

こしつき 輿附 (名) 輿に附き添ふこと。又、その役。丹波國作事「醫師が二十騎、雅兒・醫者は御輿附」

こしつき 腰附 (名) 腰の帶。腰の風(ふう)。頭(ほう)きたなげなるしびちゐ結ひ附けたる腰つき、かたくなしげなり」狹衣「御こしつき・かひなどの美しさは」

こしつき 腰矢 腰纏 (名) 箭の一種。指貫の裾を上括りにする時、其の下に用ふるもの。下括に似て短かし。樣事「腰纏内内上括之時、用之」衣服便覽「上括の時は腰矢を用ふ。腰矢といふは生の平絹或は布也。短き白大口の袴也」

こじつく (他動) 不合理なることを道理あるる如く言ひ紛らはす。傳命。浮世風呂「わざとこじ附けた地口を書くが、滅作本の意とする所」

こしつく (英 Gothic) (名) ❶建築の式の一。西洋式にて十二世紀の半頃起こりしもの。其の特色は尖りたるあーちゝ又は壁の外に柱を立てたる類。❷舌字の形の一。線又は畫の肉、一樣に太きもの。

こしつけ 腰著 (名) ❶腰につくること。淀鑑「出世灌頂「腰著町に腰附けに、黒見ふる手の印繼慈「腰著町に腰著いもが、よやよやよ、巾著ならば、はりの、博多小梅を腰づけに、とよえ、いよ、腰づけに」❷こしざし(腰差)に同じ。夏山雜談「腰著けとは卷紙の書也」

こしつけ (名) こしつけること。又、其の音素。浮世風呂「どつちらも五分五分のこしつけだね」

こしつける (他動) こしつくの口語。浮世風呂「下「音素」とりて、又三綱はこしつけるとも、有音の異はあらじ」

こしつつみ 腰鼓 (名) えうこ(腰鼓)に同じ。洛陽田樂記「腰鼓・振鼓」謠曲「波の腰鼓、ていたらと拍子を打つなりや」

こしつな 腰綱 (名) 腰につくる綱。

こしつね 腰骨 (名) こしぼね(腰骨)の訛。

こしつよ 腰强 (名) ❶腰の强きこと。❷すべて耐ふる力の確かなること。

こして (名) 【植】あかしで(見風蓬)の異名。

こして 期 (副) ❶後日を期して。❷ゆくすえ。結局。文武五日「男「雷分は不孝者、期しては父の御怠めあり」

こしとみ 小部 (名) ❶小さきしとみのある意。枕「かみのこしとみ明けたれば、風いみじう吹き入りて」❷禁中「殿上の間にある小部の特稱。主上の殿上をこしとみそなはす所。せいりやうでん(清涼殿)を見よ。古事談「始昇殿後小板敷、主上御御覽目小部「」禁殿抄「殿上。六間戸上」

こしとり 腰取 (名) 鎧の縅の一種。❶袖・草摺取を、他と色を異へて縅したるもの。❷袴(はかま)の色の縅の色と異なるもの。

こしなげ 腰投 (名) 柔術などにて、相手の體を自分の腰にかけて投ぐること。

こしなげし 腰長押 (名) 中ほどよりも少し下方にある長押。

こしなは 腰縄 (名) 罪輕き囚人などに、縄を腰にのみかくること。又、其の縄の稱。(本縄の對) 國姓爺「用心の腰縄取縄の稱。取出だし、高手・小手に縛り上げ」

こしなはつき 腰縄附 (名) 腰縄のつきてあること。又、其の罪人など。

こじなほす (他動) 矯め直す。太平記「繼母思へば一人の男子、まー度こじ直して見んものと、容貌は親の因果」

こしぬけ 腰拔 (名) ❶腰の力うせて、起つこと能はざる不具者。こしなる。ゐざり。東海道名所記「うかれまどひ、腰をつきて腰ぬけになり、かひなをひきて疵いふ腰拔けぢやあるめえし、立たれねえとい」❷腰拔けぢやあるめえし、立たれねえといふことがあるものか」❸腰病にて氣慨なき人を罵る語。いくぢなし。無氣力者。三河物語「さてもさても、こしぬけめかなし」井筒業平河内通「不忠の臣、腰ぬけよと道知らずと、一天下のそしりを受け」

(腰拔忠案の居はかちひ こしぬけじあんの居はかちひ(腰拔忠案)に同じ。

(腰拔忠案)に同じ。冊罪談「腰が、ずせはああ腰拔の居はかちひ、三年案じて」も無い智慧つ、何の出よ」

こしぬけ-そびひ 腰拔待 (名) 臆病なる武士。他狩銅本「此の尾數が、腰拔待腰巣帶刀本処閉門のざまし」

こしぬけ-じあん 腰拔忠案 (名) 臆病なる考へ。意氣地なき考へ。

こしぬけ-はらひ 腰拔拂 (名) 腰拔の行ひあり。たるため、逃ひ拂はるること。甲陽軍鑑「月石において臆病を敢し、腰ぬけはらひにあらたる不案内の侍共」

こしぬけ-ぶろ 腰拔風呂 (名) 入浴の時、閉戸共だ長き人を嘲る語。京都の方言。浮世風呂「どつちらも五分五分」

こしぬの 輿乘初 (名) 古、正月の初めに、吉日をえらびて輿に乘り初むること。

こしの-ゆき 輿長 (名) 古へ行幸の時、輿奥丁を監督するもの。

こしは 小柴 (名) ❶細小なる柴。一說には本にて、木柴なりと。書「高丘庭なかのあすはの野に古忘渡(ふる)さし、あれはいはむ時りくまでに」盛忠百首「朝みなとに宿に鳴るむちら雀、こしばの書ゥ蹈みなる敢らしと」❷こしばがき(小柴垣)の略。源氏「おなじ小柴(小柴垣)なれど、うるはしらしわたして」

こしはぜならず 鹿谷の詞。鹿、木草をもたたず。三國

こしはつ 小四方 (名) こしば(小四方)に同じ。嬉遊加留多「小四方引せ、昆布に添うたる鼠ヰ引の調ふ」

こしばがき 小柴垣 (名) 小さき柴垣。一說、こは本にて、柴の垣をいふと。源氏「かの小柴垣のもとに立ち出でて給ふ」同夕顏「はかなきこと柴がきもの、あるままにしなして、かりそめなれど、あてはかに住まひなし給へり」遊濟集「こしばがきに書きあなどの遊びたるに、雪ふりかかりけれは」

こしはせ 腰支 (名) 〔はせは腰はせなどの「はせ」の義。日葡「腰つき。こし。「遊仙窟「依依腰帶束作(腰支)」和名「遊仙窟云、細細腰支(ほそ)」

こしはなつ (他動) こしりあく。吉野忠信「武きまで辨慶、蹴こしば打ちあれば」

こしは-の-ちゆすみ 小柴炭 (名) 小柴より製出するまゆずみ。小柴は京都の地名なりと。雜語「庭訓往來「小柴墨、城殿墨」

こしはめ 腰羽目 (名) 〔建築〕床の

「先、今不治、必爲病矣」庶事綱要「胡餅頭病」

こしつ 鼓室 (名) 〔醫〕中耳の一部。聽器中のやや局凹なる一腔洞にして、頭顱骨の岩樣部と鱗狀部との間隙の帶。音響の振動を圓和して內耳に傳ふるもの。三箇の小耳骨を具へ、外は鼓膜、內は內耳に接し咽喉に及ぶ。

こしつ 固執 (名) 失はぬ樣にかたく守ること。又、深く思ひこみて動かぬこと。執著。中庸「誠之者、擇善而固執之者也」

こじつ 故實 (名) 古き儀式・法令・作法等の事例。故例。又、古に通じ事を知る人。古語拾遺「序、進使一人、歷上而彌新事遠代而彌故、故實、故實、延祚茶園史「延祚茶園史、故實、故實、延祚之義、卿有「故實」聞」「長之度、非無故實」延祚故實を失ひ、帝闕も仙洞も朝儀破れなんと上とす」盛衰記「故實、三位已缺、赤行、頭、問、獄門、事無先例」魯語「魯侯故實」

こじつの-もの 故實者 (名) 故實に通じて居る人。盛衰記「一人也とも故實の者こそ召し使はれあ」義經記「故實の者なり、尤」

こしつ 牛漆 (名) 【植】ゐのこづち(牛漆)の漢名。用用天眞人鑑「こしつはるのこづち」

こじつ 期日 (名) 期したる日。きじつ。太平記「作事遲くして期日過れば、法を犯す者有りりて」

こしつ 後日 (名) 後の日。ごにち。平治「「まづ是れより四國へ渡り、勢を催し、配所へ入らんは、後日に都へ入らんは、後日を待つと、讀あよこ」書經「多方「今至于」

こしぬけ-ぶり 腰拔煙草 (名) 腰拔風呂の時、閉戸共だ長き人を嘲る語。京都の方言。

こしの 輿 (名) 輿。

こしの-ゆき 越雪 (名) 千束子の一種。白砂糖等にて製したるもの。紅・白の二色あり。口中に投ずれば雪の如く消えて少しも滓を留めず、且つ貯藏久しき後國の名產。

こしは 腰帶 (名) 〔建築〕床の

こしはぜ 腰支 (名) 〔はせは腰はせなどの「はせ」の義。日葡「腰つき。こし。「遊仙窟「依依腰帶束作(腰支)」和名「遊仙窟云、細細腰支(ほそ)」

こしはなつ (他動) こしりあく。吉野忠信「武きまで辨慶、蹴こしば打ちあれば」

こしは-の-ちゆすみ 小柴炭 (名) 小柴より製出するまゆずみ。小柴は京都の地名なりと。雜語「庭訓往來「小柴墨、城殿墨」

こしはめ 腰羽目 (名) 〔建築〕床の

面より三四尺内外に張りたる羽目。多く幅木と笠木との間を張る。

こしばり 腰張 (名) ㊀壁又は襖などの下部に紙などを張ること。天神記「菅丞相をまうけの爲め、座敷の疊あさ緣の壁の腰張、白大夫が聟取り祝ふ老心」浮世床「障子を張るの、腰張をするの、屏風を拵ふるのと云っても」㊁腰の力。

(諺)腰張り強くて家を倒す　かふ張強くて家倒すに同じ。かふばり(甲張)の條を見よ。

こーしばゐ 小芝居 (名) 規模小なる劇場。小劇場。緞帳芝居。笹櫓(ササグ)。(大芝居の對)歌舞妓事始「すべて小芝居には屋根なかりしが」

こーしひき 腰曳 (名) 腰を曳くを食。こしぬけ。雙國大明神祭禮記「十六日大佛に而施行ひかせられ中略居去・腰引・物いはず中略聽集、不知員幾何」

こーしひざ 腰膝 (名) 腰と膝と。腰または膝。ひざこし。

こしひざ たたず 腰膝不立　腰がぬけ、膝の力失す。立ち居に不自由なり。槍權三下「年寄って、忠太兵衛、腰膝立たぬ身ではなし、刀の刃に血も附けず、高枕でも暮らされず」

こーしびやうぶ 腰屏風 (名) 丈低く、腰程の高さなる屏風。鷹筑波「ひきく引く霞や山の腰屏風」

こーしびやうらう 腰兵粮 (名) 當座の分として、腰に著けたる兵粮。太閤記五、豐臣三七郎三「こし兵粮のみ、輕輕と營うて出でよ」三河物語下「天正二年四月いぬゐへ、腰びやうらうにて御はたらき有り而」

こーしぶ 一古集 (名) 古き詩文の集。源氏「珍らしき古集のゆゑなからぬ、少しえり出でさせ給うて」

こーしぶ 一故習 (名) ふるきならはし。昔よりの習慣。金史劉昭「自今以往、毋狃于故習」

こーしぶ 一袴褶 (名) 馬に乘る時のはかま。晉書輿服「著布袴褶騎馬」

こーしぶ 一固執 こしつ(固執)に同じ。

ごーじぶ 一五十 (數) 十の五倍。五の十倍。

ごじふ さんの が 五十算賀　次條に同じ。著聞「皇太后の五十算の賀せさせ給ひけり」

ごじふ の が 五十賀　五十歳の祝賀。續古事談「白河院五十の御賀の時」

(諺)五十たばこに百酒　五十歳になるまでたばこを用ひず、百になる迄酒を飲まずとの意。俚言集覽

ごじふーうで 五十腕 (名) 五十歳位の人の手・腕・骨節などの痛む病。俚言集覽

ごじふーおん 一五十音 (名) 片假名にて表はす五十の音。即ち、ア・イ・ウ・エ・オ、カ・キ・ク・ケ・コ、サ・シ・ス・セ・ソ、タ・チ・ツ・テ・ト、ナ・ニ・ヌ・ネ・ノ、ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ、マ・ミ・ム・メ・モ、ヤ・イ(レ)・ユ・エ(レ)・ヨ、ラ・リ・ル・レ・ロ、ワ・ヰ・ウ・ヱ・ヲの稱。

ごじふーおんーづ 一五十音圖 (名) 五十音を聲音の分類によりて排列したる表。ア・イ・ウ・エ・オの五段とア・カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ヤ・ラ・ワの十行とより成る。印度の悉曇に基きて配列せしもの。慈覺大師などの作成せしものならんといふ。

こーしぶさ 一古集 (名) 【植】しなのがき(君遷子)の異名。

ごじふおんーがな 五十音假名 (名) 前條の假名。

ごじふーかた 五十肩 (名) 俚言集覽 五十歳頃の人の肩などの痛むこと。

ごじふーから 五十雀 (名) 【動】鳥類中、燕雀類の一種。小鳥なり。背部は灰青色、下面は白色、腹部に至りて薄き茶色を帶ぶ。口角より眼を過ぎりて黑條あり。本邦、各地の山地に棲息す。きまはり。きめぐり。娥歌加留多小鳥「輕き羽風の山がら・小がら・五十から」

こーしぶくろ 腰袋 (名) 腰につける袋。火打袋の類。奇異雜談集「亭主、此の雁を市に出だして賣るべしとて、腰袋に入れて腰につけて行く」

こーしぶくろ 漉嚢 (名) 液體を漉すに用ふる嚢。

ごじふーさう 一五十艘 (名) 安永・天明の頃、江戸湯島邊の大根畠村に居りし隆妓の稱。喜夜來大根「程なく鐘は上野から、ごんと一聲夕暮の、四六時中が其の間に、南鐘の際過ぎて人間僅か五十艘」樓妓選大根畠見「五十艘のそそりは、だんのうを唄って歸り、二朱見世の客は長唄を歌って、ゆがみかへる頬冠あり」

ごじふさんーつぎ 五十三次 (名) 昔、江戸より京都に至る、東海道の宿驛五十三箇所の稱。又、東海道の稱。丹波與作上「五十三次に、汁かけて嚙みこなす與作ちや」

ごじふしてう-だて 五十四挺立 (名) 船の名。せきぶね(關船)を見よ。

こじーふじよれう 一孤兒扶助料 (名) 扶助料の一。二十年未滿にて、未だ結婚せざる孤兒に給與するもの。官吏遺族扶助法第六「孤兒扶助料」

こーしふす 腰衾 (名) 古へ冬期などの寒き時、夜中公事などある折り、腰に纏ひて暖をとる衾。西宮記六、小朝「外記召二縫殿寮一、令二進腰衾一」

ごじふせん-さんくわ (名) 次條の略。

ごじふせん-さんくわへい 一五拾錢銀貨幣 (名) 明治四年の新貨條例、及び三十年三月の貨幣法に基き發行せられる五拾錢の補助銀貨。貨幣法第六條「五拾錢銀貨幣」

ごじふーで 五十手 (名) ごじふうで(五十腕)に同じ。

ごじふてう-だて 五拾挺立 (名) 船の名。せきぶね(關船)を見よ。

ごじふーてんてん 一五十展轉 (名) 佛語。法華經は甲より乙と傳へ說きて、五十人目にあたる人もなほ福を受ること無量なりといふこと。平家六、祇王「五十展轉の隨喜の功德は、八十餘年の布施にも勝ぐれたり」

ごじふにち-がさ 五十日笠 (名) 編笠の一種。古へ伊勢國にて、父又は母の死亡後五十日間墓參の時被り、五十日の後は寺へ納めたりといふもの。

ごじふにてう-だて 五拾貳挺立 (名) 船の名。せきぶね(關船)を見よ。

ごじふにるゐ 一五十二類 (名) 佛語。釋迦の入滅の時、集まりて悲しみしといふ鳥獸・蟲魚等、五十二の種類。大般涅槃經保元法華「二月中の五日の入滅には、五十二類愁への色を顯し」誡鳥「有情非情皆共成佛道中略五十二類も我が同性の涅槃に引かれて」

ごじふに-ね 一五十二位 (名) 佛語。

菩薩の修行の功、漸次成就して、佛果に達する五十二の階級。

こ-じふにん 小十人 (名) こじふにんぐみ(小十人組)の略。明良帶錄「小十人。御先御供を致す、騙走りを第一とす。走りの者と稱す。平日足樣等、遠足を心掛けてよし」

こじふにん-がしら 小十人頭 (名) こじふにんぐみがしら(小十人組頭)に同じ。官中祕策「一、小十人頭、七人」大猷院殿御實紀「寛永十五年十一月十七日、三番頭並三組頭・小十人頭を召して」

こ-じふにんぐみ 小十人組 (名) 江戸幕府の職名。若年寄に屬し、殿中檜の間に勤番して將軍の護衛をなし、將軍出行の際には先驅をなす役。二十人を一組となし、組頭ありて之を率ゐ。吏徵「西丸小十人組百人」

こじふにんぐみ-がしら 小十人組頭 (名) 小十人組の頭。吏徵下「小十人組頭と成、是迄一組一人也」

こじふにん-しゆう 小十人衆 (名) こじふにんぐみ(小十人組)に同じ。落穗集追加「小十人衆の事」

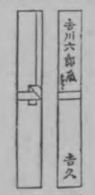
こし-ぶね 越船 (名) 越の國のふね。永久百首「雲津より洲洲廻りする越船の、沖漕ぎ離るほのぼのに見ゆ」

ごじふねん-き 一五十年忌 (名) 十年目の年回。梵舜日記元和八年十二月十日「唯神院殿五十年忌」大藏狂言武悪「身共が此の世に居てこそ、親ぢや人の五十年忌も百年忌も弔へ」

ごじふはってう-だて 五拾八挺立 (名) 船の名。せきぶね(關船)を見よ。

ごじふぼ-ひやくぼ 一五十歩百歩 (句) 多少の相違あれど、大體は同一なりとの意にいふ語。孟子梁惠王上「王好戰、請以戰喩。塡然鼓之、兵刃既接、棄甲曳兵而走、或百歩而後止、或五十歩而後止、以五十歩笑百歩、則如何。曰不可、直不百歩耳、是亦走也」

こし-ぶみ 腰文 (名) 狀の上包の端を細くたち、上の方はたち殘し、その細き所にて狀を卷き、餘りを挾み置きたるもの。切り封じ。貞丈雜記 蜷川親元記寛正六年「山名兵部少輔殿江御狀以前奉之、腰文也」書儛故實「折紙一重にかきて、表にて書留には、日附の奥につかはす所の名を可書、又裏にて書留には奥に名を書くに不及候也。但し是れは腰文の時の書也。立文の時は、裏にて書き留むと云ふとも、日附の奥に名をかくべし」



(みぶしこ)

ごじふろくてう-だて 五拾六挺立 (名) 船の名。せきぶね(關船)を見よ。

ごじふ-ゐん 一五十韻 (名) 連歌・俳諧の懷紙の式の一。百韻を二分し、後を略して、上部のみなるもの。

ごじふゐん-さつ 一五拾圓札 (名) めいぢつうはう(明治通寶)を見よ。

ご-じふん 一御自分 (代) 對稱の代名詞の敬稱。お手まへ。曾我扇八景「御自分は工藤殿の御内、近江小藤太」

こし-べ 越邊 (名) 越の國の方。萬葉「片思ひを馬にふつまにおほせもて、故事部にやらば人かたはむかも」

こし-べ 過戸 (名) あまべ(餘戸)の誤りなるべし。俚釋 安閑紀「過戸」

こし-べん 腰辨 (名) 次條の略。

こし-べんたう 腰辨當 (名) ㊀腰に携帶する辨當。㊁腰辨當にて官廳に出勤する下級官吏。小官吏。こしべん。

こ-しま 小潮 (名) 【地】上弦又は下弦の際に於ける潮汐。上弦・下弦の際は、太陰・太陽互ひに直角の方向にあるを以て、兩者の地球に對する引力は、互ひに他を消滅せしめんとする故に、潮汐の高さ最も低し。

こ-しま 小皺 小絞 (名) 樊(ボ)の小さきもの。(大しほの對)

こじま 小四方 (名) 四方(ボ)の小形のもの。故實拾要「供御の物を載せ持ち通ふ物を小四方と云ふ也。小さき臺也。地下に用ふる向詰などの如くなる細長き臺也」

こ-しまがま (名) 【植】玄參科、こしまがま屬の多年生草本。莖の高さ二三尺。葉は對生、殆ど羽狀複葉、各小葉は細鋸齒を有し、莖・葉共に毛茸多し。夏秋の際、淡紫紅色の脣形花を葉腋又は短き花軸の頂端に開く。我が國、各地の山野に自生す。こしまがまぎく。たぶりさう。

こ-しまがまぎく (名) 【植】前條に同じ。

こしまーさんとめ 小絞聖多默 (名) 聖多默革(ボ)の絞(ボ)の小さきもの。下品とす。

こ-しまそ 腰細 (名) ㊀腰の細やかなること。細腰。萬「みはなだのたへの帶を中略すがるの如き腰細(ボ)に取りかざらひ」㊁【動】こしまそばち(腰細蜂)の略。

こしまそ-の 腰細之 (枕) 似我蜂(ハチ)は腰細きより、すがるにかけていふ。萬「腰細之(ボ)すがる少女の、其の袖のいつくしけさに、花のごとゑみて立てれば」

こしまそ-ばち 腰細蜂 (名) 【動】じがばち(蜾蠃)の異名。

こし-まね 腰骨 (名) ㊀腰の邊の骨。和名「髂(ケツ)腰骨也」義經記「西住が六條一條のふし・こしまね痛ぎ打ちに」㊁忍耐する氣力。押し通す意氣。

こ-しまら 小島 (名) 小さき島。をじま。神代紀「處處小鳥(ボ)(中略)萬」ありそゆもまして思へや、たまの浦離れ小島(ボ)のいめにし見ゆる」

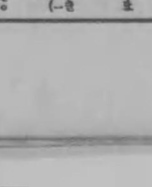
こ-しまら 形(シク) ちよっとしまらし。どこやらしまらし。關八州繁馬「銀子併の時ならば、こじまらしうもあれかし」

こじまらし-げ (副) こじまらしきさま。孕常磐「小じまらしげに憂らしう」平家女護島「目ざし儘かたげぶりも、小じまらしげな」

こじまらし-さ (名) こじまらしきこと。こじまらしう度合。

こ-じま 小島 (名) 小さき島。をじま。

こしまき 腰卷 (名) ㊀古への女の衣服の一。宮中にて下仕の女が、夏期著物の上につけ、腰より上部を脫ぎて腰に卷きつけたるもの。武家にては禮服とせり。宗五大雙紙「五月五日中略女中は殿中には すずし裏の練ぬきを召し候。御腰まきもすずし裏中略八月朔日より又ねりぬきを召し候。御こしまき染め附けの小袖を各御用ひ候」㊁婦人の衣の下に、腰より脚部にかけて纏ふ布帛。けだし。ゆもじ。㊂土藏の外廻りの下部の、一きは厚く塗り廻はしたる部分。圓兜の鉢としころとの接續せる部分。



こしまき-みの 腰巻蓑（名）こしみの（腰蓑）に同じ。「加島年代記」「遠国一人、腰巻蓑に竹の笠」

こじまさけ 小島酒（名）肥前国小島より産出する酒。「若風俗」「明け暮れこじまさけも面白からず」

こし-ざたら 腰延（名）【動】いたちうを（鼬鼠魚）の異名。

こじま-のしめ 小島熨斗目（名）縞目の小形なるのしめ。「本朝世事談綜」「狂言、宿老。著附。小格子厚板、著流し、腰に脇差、下に白帷子」

こし-ざは 腰廻（名）こべそ（小具足）に同じ。

こし-ざだれ 腰前垂（名）京都の大原女などの著けそる、衣服の上より腰のまはりにまとふ布。

こしまゆみ （名）【植】しきび（櫁）の異名。

こじみ （名）入相（ゐ）の鐘。節用「香鐘鳴」「遊歩色葉」「香鐘鳴」

こし-みづ 濾水（名）砂又は布などにて濾して清くしたる水。

こし-みの 腰蓑（名）腰に纏ふ短き蓑。「安土日記」「腰蓑、若、墨を御道服に、御立附、御腰蓑」

こし-むかへ 輿迎（名）輿入れの時、輿を迎ふること。又、其の人。

こじ-めく （自動四）こしこしす。「大鏡」「手を握りてはもびらうんけんのかぎ厳なま養えなるは五字あきて」

こし-めす （他動四）きこしめす（聞召）の略。「召しあがる。狂言、宇治今の程、こしめしてから、飲みかくしばかりきうしゃる」

こし-も 腰裳（名）古への衣服。裳とも云へるに対して、詳かならず。「神代紀」「腰裳を以て、おのおのこしもとなす」「遊歩色葉」「腰裳」

こしもの-がた 腰物方（名）江戸幕府の職名。若年寄の支配に属し、十四年に改称せしもの。と腰物奉行といひしを元禄二年に廃せらる。「吏徴」「腰物方十六人」「有徳院御実紀」「享保三年十月朔日腰物方を省かれ、同じ年十五人に定められし」

こしもの-ぶぎやう 腰物奉行（名）江戸幕府の職名。若年寄の支配に属し、諸軍の佩刀、鞘の腰に帯びたる逸につけたる金、栗形、折金（ゐ）、折金（ゐ）も此にあり。「諸家宗五大夫覚書」「公方様の御腰物は、さや・鎺・目貫・柄・頭同前」「大内問答」「公方様御腰物は、中略、こしもとがね」

こしもと-しゅ 腰元衆（名）夫人の略。「鹿鹿歌」「腰の上には腰元しゅ」

こしもと-しゅう 腰元衆（名）腰元たる人人。又、腰元の敬語。「狂言、人馬」「馬屋に一人居たらば、腰元しかしらう。どれぞこしもとの衆の内を一人、馬にして、身共が側においてたもれ」

こしもと-づかひ 腰元使（名）腰のはとりの用を弁ずしむるために使役する婢。又、その人。「腰元。本朝機略比事」「六尺一人、腰元使の女一人、暇を出だし候」

こしもと-ぼり 腰元彫（名）刀剣の附属品を彫刻すること。又、其れに用ふる器具。又は其の職人。

こし-もの 腰物（名）こしのもの（腰物）の略。「会我物語」「正月、女房、こしもの物とりかたなを忘るるは、おのおのこしもとや人の見るらん」「遊歩色葉」「腰物」「こし

こしもの-がしら 腰物頭（名）❶別項「御腰物奉行」の略称。吏徴に「御腰物奉行」と云ふ。❷次項の略称。

こしもの-がた 腰物方（名）江戸幕府の職名。もと腰物奉行といひしを元禄二年に廃せらる。「享保三年に廃せらる。「吏徴」「腰物方十六人」「有徳院御実紀」「享保三年十月朔日腰物方を省かれ、同じ年十五人に定められし」

こしもの-ぶぎやう 腰物奉行（名）江戸幕府の職名。若年寄の支配に属し、諸軍の佩刀、鞘の腰に帯びたる逸につけたる金、栗形、下緒の刀剣の事を掌り、御腰物奉行二人、慶應二年に廃せらる。「吏徴」「腰物奉行二人、布衣。統領近習衆、而零一切刀剣事之職也。領人同心二十人」

こし-もやう 腰模様（名）衣の腰の逸につけたる装飾。

こし-や 輿屋（名）すべて、乗物・輿・駕籠などを扱ふ家。又、其の人。

ご-しゃ 〜〜古社（名）古き神社。

ご-しゃ 〜〜者者（名）盲目の人。めくら。めしひ。「遊歩色葉」「者者、盲者」

ご-しゃ 〜〜鼓車（名）鼓を載する車。「太平記」「三国志、馬を以て鼓車に駕し、剣をば鼓士に隠ぶ」「後漢書、李郭伝、建武十三年、異国有献名馬者、日行千里、詔以馬駕鼓車」

ご-しゃ 〜〜牛車（名）佛語。牛にひかする車。「遊歩色葉」「牛車」

ご-しゃ 〜〜五車（名）五乗の車に積み載する程の多数の書籍。「荘子、天下」「惠施多方、其書五車」「唐月令詩」「五車方、乗多炭、七間目連公」

ご-しゃ 〜〜五舎（名）昔、禁裏に在りしの貴各。「昭陽舎・清涼殿・宣耀殿・飛香舎・凝花舎・襲芳舎・承香舎・麗景殿・弘徽殿・藤壺」

ご-しゃ 〜〜誤写　写し誤ること。うつしちがへ。

ご-しゃう 小姓　小性（名）❶小冠者。こわっぱ。小兒。「高野物語」「あれほどの小性一人を斬れはとて、手並にいかでこれ一人を、手並に」「同」「物物しく、あれほどの小性たちすべき」「同」「物物しく、あれほどの小性たちよりよりに、いかで渡らしあれほどの小性たちよりよりに、いかで渡らしあれほどの小性たちよりよりに、いかで渡らしあ

しゃうだう。

じゃうか　小城下　（名）小規模の城下。雲村句集「口切りの小城下なら只ならぬ」

じゃうがた　小姓方　（名）こしゃうしゅう（小姓衆）に同じ。醒睡歌「小姓方の衆公は、奏月代におぼ好みある」

じゃうき　小將儿　（名）【一】將儿の小形なるもの。【二】將形船の名所。ふなやかた（船屋形）を見よ。

じゃうき　〜後生氣　（名）こしゃうこころ（後生心）に同じ。

じゃうき　〜菲將菲　（名）閑非、しゃうぎぎ。閑菲又は將菲。

じゃうきかん　〜故障期間　（名）【法】民事又は刑事の訴訟にて、故障の申立てをなし得ることを定めたる一定の不變期間。この期間は民事にては國府列侯決の送達より十四日、刑事にては三日とす。

じゃうきらひ　後生嫌　（名）後生を願ふを嫌ふこと。佛法を嫌ふこと。釋迦如來誕生會「後生嫌ひのそなた衆」

じゃうくみ　小姓組　（名）江戸幕府の職名。若年寄の配下に屬し、殿中に詰め、諸種の儀式の用に供し、又、江戸市中の巡邏等をなす。もと殿中無番院の西南なる花畑の御番衆といひしを、明暦後に改稱し五十人、御用貴紀院殿、寛永九年七月中旬一組「上方は中旬小姓組・肥田日本忠親」柴一本「御番」小姓組・御書院番・大御番」

じゃうくみがしら　小姓組衆頭　（名）小姓組番頭に次ぐ役。史料「御小姓組衆頭六人、若年寄支配、菊間南御縁際、千石高」

じゃうくみばんがしら　小姓組番頭　（名）小姓組の頭、史料「別錄」御小姓組番頭、慶長十一年閏十二月二日始置、當職、若年寄又は御側御用人より衆帯、或ひは御番頭。小十人頭衆帯」明良帯錄「小姓組番頭。寄合より昇るは布衣、諸大夫御小再勤の仁にして、人材秀頴、一方の將となり、士卒を國石にすべき人材の、しかも德行あり、年齢公邊に明らけき人を選べ、中略古へは一萬石之大名の勤場にて、直に是れより若年寄に昇る」

じゃうくわつ　小正月　（名）陰曆正月十四・十五・十六日の稱。北越の方言。

じゃうくん　〜後將軍　（名）後鳥羽の天將。

じゃうごころ　後生心　（名）後生を願ふ心。菩提心。

じゃうさく　〜御正作　（名）地頭の手ずから其の田を耕作すること。延調往來「御正作之勤農、除租稅、獨給田」

じゃうじ　小障子　（名）こさうじ（小障子）に同じ。

じゃうじゃう　小猩猩　（名）【植】しゃうじゃうぎく（猩猩菊）を見よ。

じゃうしゅ　小姓衆　（名）夫衆に同じ。心中萬年草「小姓しゅは客殿の床に掛物、瓶子のほこり、拭いて扶うつ忙しいさ」

じゃうしゅう　小姓衆　（名）小姓の人。公人。又、小姓の敬稱。甲陽軍鑑「宿勝殘後公人」

じゃうしゅう　〜五性宗　（名）【玉造】諸方の士・小姓衆」

じゃうしゅうのはい　後生願　（名）こしゃうねがひ。

じゃうしゅう　小上手　（名）やや上手なること。少し上手なること。又、その人。書附「書則をば大上手、公望をば小上手と、世に稱しける」

じゃうだち　小姓立　（名）小姓より生ひ立ちたること。小姓の生ひ立ち。小姓あがり。又、その人。鍛歌加留多「昨日・今日前髪取って十九歳、お小姓立ち」使者男「雪女五枚羽子板」源三位頼政の小姓立ち、源の手太」

じゃうだのみ　後生願　（名）佛を願みて、後世の安樂を願ふこと。

じゃうつまぶなにしょうけん　故障附船荷證券　（名）【商】貨物を乗船に積み込む際、其の貨物に損傷ありたるとき、其の趣きを記入したる船荷證券。

じゃうでんとう　〜弧狀電燈　（名）こくわうでんとう（弧光電燈）に同じ。

じゃうとう　〜弧狀燈　（名）前條に同じ。

じゃうとうとり　小姓頭取　（名）江戸幕府の職名。小姓衆の頭。小姓組番頭。

じゃうとんぼ　小姓蜻蛉　（名）【動】あかとんぼ（赤蜻蛉）をいふ。越後國の方言。

じゃうにん　小商人　（名）【法】戸に つき若しくは道路にて、物品を賣買するものの。其の資本金額五百圓に滿たざるもの。こあきんど。明治三十二年勅令第二百七十二號「小商人」商法編「小商人」

じゃうねがひ　後生願　（名）じょうねがひ。

じゃうのみ　後生願　（名）佛を願ふ。「寺道歩く参つても、中略邪見では参らぬも同然、此方がほんの後生願」

（諺）後生願の八性　後生の安樂を願ふ人に、意地わるきものの多いこと。

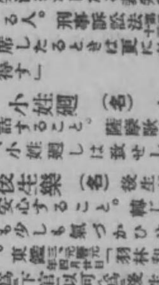
じゃうはり　小姓張　（名）煙管の一種。

じゃうぶしたてしょ　故障申立書　（名）【法】故障申立人が、國府列侯所に、故障を申し立つるため差したる願書。

じゃうぶしたてにん　故障申立人　（名）【法】國府列侯をなしたる裁判所に故障を申し立つる人。刑事訴訟法第三百三十三條「故障申立人國府したるときは更に故障を申立つることを得ず」

じゃうぶば　小姓廻　（名）小姓連を指揮又は非話すること。醒睡歌「近年高野に相勤めの小姓廻しは哀せしが」

じゃうらく　〜後生樂　（名）後生が安樂なりと思ひて安心すること。愛ふべきことをも少しも氣づかぬ樣なること。太平樂。東鑑「三月十日、羽林和漢、信、光、炎、太帝樂、鳥、下官以可、鳥、後生樂、由稱之」慶長記「中略立ひけるは、只今遊ばす樂をば、五帝樂とこそ申し習はして待れども、直衡が耳には後生樂とこそ聞き侍れ」浮世床「おの地震を知られえと言ふは、後生樂だの」



（ぐちゃじこ）

じゃうらく　〜五帝樂　（名）雅樂の一。禮記樂記「五帝樂」中略名。

「古社寺保存會」

じゅうどり　供宿　（名）供をおく所。儀式帳御贄貢宿國一川「供宿國」

じゅうね　腰屋根　（名）酒蔵の屋根。

じゅうのき　（名）【植】じゅうぶち（金漆）の異名。

じゅうのめでぶ　小蛇目蝶　（名）【動】尾蝶類中、鱗翅類の一種。雄の長さ五分五厘。翅は暗色、前翅に大小二箇、後翅に一箇の蛇の目形の斑紋あり。裏面は表面より稍淡色、中央部に白條の線あり。雌は外部に大小裏面の斑紋と三條線とを具ふ。

じゅうば　（名）【植】ちかめがしはの異名。

じゅうめんにんじん　（名）【植】ばたんにんじん（防葵）の異名。

じゅうら　（名）【植】ひめしゃうらの異名。

じゅうる　（他動）〔おこしゃるの約〕おこすことをなす。「本朝三國志「下女の竹でもこしゃらいで」

じゅう　腰湯　（名）腰部以下のみを沐浴すること。冥途飛脚「お湯殿かいて、腰湯して待ちます」浮世床「腰湯を使ふから、干葉の古いのを買つてくれと言ふ」

じゅう　〜戶主　（名）【一】一戶の主人。令義解紀十三「和泉國日根郡人戶主五六位上幸世宿禰國人公」國元戶令「諸戶主、皆以家長爲之」【二】【法】一家の首長たる身分。即ち、戶主權を有し、家族共産の義務を負ふもの。民法編三章「戶主」

じゅう　〜故主　（名）昔、仕へし主君。もとの主人。舊主。史記「其故主」

じゅう　〜孤主　（名）孤獨の主君。史記「上埽。高祖「下以朝、孤主」

じゅう　〜虎鬚　（名）虎のひげ。虎

しゅうだち。

じゅうか　小城下　（名）小規模の城下。雲村句集「口切りの小城下なら只ならぬ」

じゅうがた　小姓方　（名）こしゃうしゅう（小姓衆）に同じ。醒睡歌「小姓方の衆公は、奏月代におぼ好みある」

じゅうき　小將儿　（名）【一】將儿の小形なるもの。【二】將形船の名所。ふなやかた（船屋形）を見よ。

じゅうき　〜後生氣　（名）こしゃうこころ（後生心）に同じ。

じゅうき　〜菲將菲　（名）閑非、しゃうぎぎ。閑菲又は將菲。

じゅうきかん　〜故障期間　（名）【法】民事又は刑事の訴訟にて、故障の申立てをなし得ることを定めたる一定の不變期間。この期間は民事にては國府列侯決の送達より十四日、刑事にては三日とす。

じゅうきらひ　後生嫌　（名）後生を願ふを嫌ふこと。佛法を嫌ふこと。釋迦如來誕生會「後生嫌ひのそなた衆」

じゅうくみ　小姓組　（名）江戸幕府の職名。若年寄の配下に屬し、殿中に詰め、諸種の儀式の用に供し、又、江戸市中の巡邏等をなす。もと殿中無番院の西南なる花畑の御番衆といひしを、明暦後に改稱し五十人、御用貴紀院殿、寛永九年七月中旬一組「上方は中旬小姓組・肥田日本忠親」柴一本「御番」小姓組・御書院番・大御番」

じゅうくみがしら　小姓組衆頭　（名）小姓組番頭に次ぐ役。史料「御小姓組衆頭六人、若年寄支配、菊間南御縁際、千石高」

じゅうくみばんがしら　小姓組番頭　（名）小姓組の頭、史料「別錄」御小姓組番頭、慶長十一年閏十二月二日始置、當職、若年寄又は御側御用人より衆帯、或ひは御番頭。小十人頭衆帯」明良帯錄「小姓組番頭。寄合より昇るは布衣、諸大夫御小再勤の仁にして、人材秀頴、一方の將となり、士卒を國石にすべき人材の、しかも德行あり、年齢公邊に明らけき人を選べ、中略古へは一萬石之大名の勤場にて、直に是れより若年寄に昇る」

じゅうくわつ　小正月　（名）陰曆正月十四・十五・十六日の稱。北越の方言。

じゅうくん　〜後將軍　（名）後鳥羽の天將。

じゅうごころ　後生心　（名）後生を願ふ心。菩提心。

じゅうさく　〜御正作　（名）地頭の手ずから其の田を耕作すること。延調往來「御正作之勤農、除租稅、獨給田」

じゅうじ　小障子　（名）こさうじ（小障子）に同じ。

じゅうじゃう　小猩猩　（名）【植】しゃうじゃうぎく（猩猩菊）を見よ。

じゅうしゅ　小姓衆　（名）夫衆に同じ。心中萬年草「小姓しゅは客殿の床に掛物、瓶子のほこり、拭いて扶うつ忙しいさ」

じゅうしゅう　小姓衆　（名）小姓の人。公人。又、小姓の敬稱。甲陽軍鑑「宿勝殘後公人」

じゅうぶ　〜五性宗　（名）〔玉造〕諸方の士・小姓衆」

じゅうぶ　〜五性宗　（名）〔玉造〕諸方の士・小姓衆」

じゅうぶ　〜五性宗　（名）〔玉造〕諸方の士・小姓衆」

じゅう　腰屋根　（名）酒蔵の屋根。

じゅうのき　（名）【植】じゅうぶち（金漆）の異名。

じゅうのめでぶ　小蛇目蝶　（名）【動】尾蝶類中、鱗翅類の一種。雄の長さ五分五厘。翅は暗色、前翅に大小二箇、後翅に一箇の蛇の目形の斑紋あり。裏面は表面より稍淡色、中央部に白條の線あり。雌は外部に大小裏面の斑紋と三條線とを具ふ。

じゅうば　（名）【植】ちかめがしはの異名。

じゅうめんにんじん　（名）【植】ばたんにんじん（防葵）の異名。

じゅうら　（名）【植】ひめしゃうらの異名。

じゅうる　（他動）〔おこしゃるの約〕おこすことをなす。本朝三國志「下女の竹でもこしゃらいで」

じゅう　腰湯　（名）腰部以下のみを沐浴すること。冥途飛脚「お湯殿かいて、腰湯して待ちます」浮世床「腰湯を使ふから、干葉の古いのを買つてくれと言ふ」

じゅう　〜戶主　（名）【一】一戶の主人。令義解紀十三「和泉國日根郡人戶主五六位上幸世宿禰國人公」國元戶令「諸戶主、皆以家長爲之」【二】【法】一家の首長たる身分。即ち、戶主權を有し、家族共産の義務を負ふもの。民法編三章「戶主」

じゅう　〜故主　（名）昔、仕へし主君。もとの主人。舊主。史記「其故主」

じゅう　〜孤主　（名）孤獨の主君。史記「上埽。高祖「下以朝、孤主」

じゅう　〜虎鬚　（名）虎のひげ。虎

の髭。「虎の髭の御手本」「虎の髭」「虎の髭の御手本」「虎の髭」「虎の髭」「虎の髭

ごしゅ

ごしゅ

ごしゅ

近所あるならば、御所車一輛ひらつくれ」
■紋所の名。

ごしよ-ごしよ 〜御所御所 (名) ■あの御所、此の御所。平家三「ここ・そこ」浦の御所より初めて、御所御所に火をかけて」葉中蒙記「御所御所の上誘・中誘はしひしくにごしよと丘丘尼御所の羅。■中定例記「今日北丘尼御所之御参、於御台所平家三与あり。是れは御所御所へ御所もてなし也」

ごしよ-ことば 御所言葉 (名) 中世以後禁中にて、女房の私に物の名などに用ひし語。内内安綱「御所向にて、元日をくわんにち、御菰をにく、御厠をとらん、夏御所ひを撒却、天氣を晴れ、年始所配膳の時の所勞を歓樂、霍亂紙を筆紙墨、めしくふをは、参らしく聞こゆ、是れ御所詞なり」

ごしよ-ぞうく-そうぶさ-やう 〜御所造作総奉行 (名) 室町時代、幕府の大造作である時々の職。在盛卿記「長禄三年十七上上御所御造作総奉行事、山名令吾入道・道・仰付之」

ごしよ-ざくら 御所櫻 (名) 【植】薔薇科、櫻屬の落葉喬木。花は大形、重瓣にして、五花瓣り開くもの。花は女五教科子板「我が北山の御所櫻」川雪中鳥合歌「情の花の、やれ御所櫻」

ごしよ-さま 御所様 (名) ごしよ(御所)の敬語。蜻中蒙記「御所さまより御所へ御所の御文」吉野忠信「御所様には都を開かせ給ふとて、御門はひしと固めて」

ごしよ-ざま 御所方 (名) ごしよかた(御所方)に同じ。徒然草「ある御所ざまの、ふるき女房のし」

ごしよ-ざらひ 御所侍 (名) 昔時、御所の侍。

ごしよ-じたば 御所言葉 (名) 中世以後禁中にて、女房の私に物の名などに用ひし語。内内安綱「御所向にて、元日をくわんにち、御菰をにく、御厠をとらん、夏御所ひを撒却、天氣を晴れ、年始所配膳の時の所勞を歓樂、霍亂紙を筆紙墨、めしくふをは、参らしく聞こゆ、是れ御所詞なり」

ごしよ-ぞうく-そうぶさ-やう 〜御所造作総奉行 (名) 室町時代、幕府の大造作である時々の職。在盛卿記「長禄三年十七上上御所御造作総奉行事、山名令吾入道・道・仰付之」

ごしよ-ざくら 御所櫻 (名) 【植】薔薇科、櫻屬の落葉喬木。花は大形、重瓣にして、五花瓣り開くもの。花は女五教科子板「我が北山の御所櫻」川雪中鳥合歌「情の花の、やれ御所櫻」

ごしよ-さま 御所様 (名) ごしよ(御所)の敬語。蜻中蒙記「御所さまより御所へ御所の御文」吉野忠信「御所様には都を開かせ給ふとて、御門はひしと固めて」

ごしよ-ざま 御所方 (名) ごしよかた(御所方)に同じ。徒然草「ある御所ざまの、ふるき女房のし」

ごしよ-ざらひ 御所侍 (名) 昔時、御所の侍。

ごしよ-ざん 御所山 (名) 山城国宇治郡の山。

ごしよ-じ 御所司 (名) 室町時代の職名。所司代の職掌を助くる役。多くは其の家人之を勤む。

ごしよ-しき 御所敷 (名) 御所の敷地。

ごしよ-しつ 御所室 (名) 御所の妻。

ごしよ-しつ 御所室 (名) 御所の妻。

ごしよ-しつ 御所室 (名) 御所の妻

こしらへ　子代（名）上古、天皇・皇后・皇子などの御子なき時、後代の記念にすべき伊登志和氣王者四人皆伊登志和代と、孝德紀記「昔在、天皇等所立子代之民」

こしらへ　小城（名）小さき城。小規模の城。本平記「高さ一町許りにて、廻り一里に足らぬ小城なれば」

こじらう　小白（名）〔小さき蘚の意〕一朱蘚の異名。七個人に有る。私の目利では白足（ハクソク）一朱（シュ）がものは薬いと思はれます」

こしらぎく（名）〔植〕菊科、菊屬の多年生草本。茎の高さ二三尺、よく分枝す。葉は羽狀に深裂し、やや廣き裂片をなす。花は頭狀花序に排列し、初夏、茎頂に開き、花序の周圍は白色、中心は黄色の花にして、各地に栽培せらる。近時、鉢植の花卉にして、各地に栽培せらる。

こしらね（名）〔植〕唇科、しろね屬の多年生草本。しろねの變種。莖の高さ二三尺、方形なり。葉は對生、長楕圓形、鋸齒を有す。初秋、白色の唇形花を各葉腋に生ず。我が國、各地の濕地に自生す。

こしらへ　子代部（名）子代（コシラヘ）として設けられたる一部曲の民。

こしらやき　小代燒（名）肥後國小代の山の麓にて製したる陶器の稱。征韓の時、加藤清正が特に朝鮮の陶工を連れ來りて燒かしめたるに創まる。

こじわ　小皺（名）細かなしわ。きめこまかの皺。「柯城反魂香」「額に小皺、目尻に皺」「各小首を傾くる」緋縮緬卯月紅類三尺三寸の小袖のよりし、乾・頭・まで」浮世風呂日記「小皺が酒まで」

こしわざ　興別（名）興の別。又、その興。

こじん　子代（名）上古、天皇・皇后・皇子などの御子なき時、後代の記念にすべき伊登志和氣王者四人皆伊登志和代と、孝德紀記「昔在、天皇等所立子代之民」

こじん　小城（名）小さき城。小規模の城。本平記「高さ一町許りにて、廻り一里に足らぬ小城なれば」

こじん　小白（名）〔小さき蘚の意〕一朱蘚の異名。七個人に有る。私の目利では白足（ハクソク）一朱（シュ）がものは薬いと思はれます」

こじんぎく（名）〔植〕菊科、菊屬の多年生草本。茎の高さ二三尺、よく分枝す。花は頭狀花序に排列し、初夏、茎頂に開き、花序の周圍は白色、中心は黄色の花にして、各地に栽培せらる。近時、鉢植の花卉にして、各地に栽培せらる。

こじんね（名）〔植〕唇科、しろね屬の多年生草本。しろねの變種。莖の高さ二三尺、方形なり。葉は對生、長楕圓形、鋸齒を有す。初秋、白色の唇形花を各葉腋に生ず。我が國、各地の濕地に自生す。

こじんべ　子代部（名）子代（コシラヘ）として設けられたる一部曲の民。

こじんやき　小代燒（名）肥後國小代の山の麓にて製したる陶器の稱。征韓の時、加藤清正が特に朝鮮の陶工を連れ來りて燒かしめたるに創まる。

こじわ　小皺（名）細かなしわ。きめこまかの皺。「柯城反魂香」「額に小皺、目尻に皺」「各小首を傾くる」緋縮緬卯月紅類三尺三寸の小袖のよりし、乾・頭・まで」浮世風呂日記「小皺が酒まで」

こしわざ　興別（名）興の別。又、その興。

こに附き添ふ。

こしを　腰居（名）こしぬけ。ものさ。著聞集「腰居なりける腰居が盛みたりけるを云ひつゝあり」中世腰居申しけるは、「腰もちてこそ腰居なりき候へ、手を離れてはいかでか腰居なりき候へ」

こじをん　孤兒院（名）不幸なる孤兒を收容して其の養育をなす所。育兒院。

こしをけ　腰桶（名）かつらを（鬘）同じ。

こしをり　腰折（名）〔狂言〕腰和。

こしをり　腰折園（名）小さき御蔵（ごをいふ、御蔵園の方言）

こしをれ　腰折（名）〔物語〕老年になりて、腰、折れかがむこと。又、その人。宇治拾遺「腰折れ、茶良坊の越えてきつらん」丹波與作「腰ぬけたる中世抱き上げても腰折れの三十一助」

こしをれ　腰折（名）〔和歌〕和歌の欲三句、腰折文（ヲレブミ）の略。

こしをれ　腰折文（名）拙劣なる詩歌。源氏「そのもの人。宇治拾遺「腰折れ、茶良坊の越えてきつらん」丹波與作「腰ぬけたる中世抱き上げても腰折れの三十一助」

こしをれ　腰折歌（名）〔歌の略〕和歌。

こしをれうた　腰折歌（名）〔和歌〕和歌の欲三句、腰折文（ヲレブミ）の略。

こじん　一古人（名）古への人。昔の人。「中行若說抄」「眼者忘之、古人口傳也」「高者必低之、言者無說」「我思古人、伊無說今」書經「若于欲觀古人之象」

こじんのきらはく　殘りたる聖人の言は、聖人の用ひ盡くしたるかすなりといふこと。「敬問、公之所遺、何言也。曰、聖人之言也。曰、聖人之所遺

ごしんぼう 小新發意（名）小さき新發意。又、俗を厭る聖。吉野忠信「いやいや切ったり、小新發意」

ごしんぼふ 〜護身法（名）佛語。常數に「行法」の時、行者の身心を守護して、一切の魔障を除かんため、印を結び眞言を誦する祕法。「護身法」

ごしんもじ 御親文字　御心文字（名）御親切（ゴシン）をいふ女詞。こしん。「實盛」「井筒」「有常の息女、たれかあぐべきとよみかはし、井戸より深き御心もじに、まめ男のこころりとならせ給ふも、げに淺ましかりける中なるべし」

ごしん-よう 〜護身用（名）護身の用に供する品物。「護身用のびすとる」

ごす 小籠　鉤籠（名）古く、小籠（スガ）といひし、「竹」を編みて用ひしもの。「顯季集」「櫻花こすのまに通り散るからに、塵さへ咲くあらしやこすをあげつもらん、拂ふ葉に惜しきこすをあげつもらん、拂ふに惜しなるしるしにや玉をすだれこすのまに通しく、風の涼しさ」

ごす 子巢（名）えな（胞衣）の異名。「宇治拾遺」「雜事」

ごす 〜庫主（名）❶延暦寺の僧職。佛語。主（ス）庫（ス）を司る者。❷祇園の僧職。「枕」「殿上人」「奴婢の名」

ごす 庫司　庫司（名）❶延暦寺の僧職。「枕」「殿上人」「奴婢の名」❷祇園の僧職。「枕」「殿上人」「奴婢の名」

ごす 庫頭（名）庫司の行者。「庭訓往來」「常司・庫司・炭」

ごす 越（自動）❶上を過ぎ行く。上れる石ひらを、たどこに因作（ゴ）は因緣（ゴ）がて、心のみいもが、りやりて、わはこにして、心のみいもが、りやりて、わはこにして、高雪ひら、稀を、「三人までの產み巢と、松風村雨巢常盛「三子の出來すぎたる腹」は、「稀」じていはば子過ぎ腹」

ごすぎらん 〜（名）【植】石松（ヒカゲ）科、石松屬の多年生草本。莖の高さ一二寸、莖は小にして、分枝し、短き根を以て著生す。葉は鱗片狀にして莖に密生し、稍すべて、心のみいもが、りやりて、わはこにして、高雪ひら、稀を、「三人までの產み巢と、松風村雨巢常盛「三子の出來すぎたる腹」は、「稀」じていはば子過ぎ腹」

ごすぎ-はら 子過腹（名）子を多く產みすぎたる腹。「三子の出來すぎたる腹」

ごすぎ-はら 小杉原（名）杉原紙の小型のもの。「鼻紙」などに用ふ。こすぎ。「色道大鑑」「鼻紙は小杉原に限るべし」

ごすぎ-ひ 小杉（名）❶小さき杉の木。「今の如く、小菊・小杉などの如く、小根に濃きたる鼻紙はなし」

ごすき 〜悲（名）圓悲を好むこと。又、その人。「晉吟袋集」「初めの相手はかはれども、同じ心しはかはらぬ悲ずきなるべし」

ごすき-ぶり 小杉原（名）杉原紙の小型のもの。「鼻紙などに用ふ。こすぎ。「色道大鑑」「鼻紙は小杉原に限るべし」

ごすぎ-はら 子過腹（名）子を多く產みすぎたる腹。「三子の出來すぎたる腹」

ごすぎらん 〜（名）【植】石松（ヒカゲ）科、石松屬の多年生草本。莖の高さ一二寸、莖は小にして、分枝し、短き根を以て著生す。葉は鱗片狀にして莖に密生し、稍すべて、心のみいもが、りやりて、わはこにして、高雪ひら、稀を、「三人までの產み巢と、松風村雨巢常盛「三子の出來すぎたる腹」は、「稀」じていはば子過ぎ腹」

ごすぎ-ひ 小杉（名）❶小さき杉の木。「今の如く、小菊・小杉などの如く、小根に濃きたる鼻紙はなし」

ごすき 〜悲（名）圓悲を好むこと。又、その人。「晉吟袋集」「初めの相手はかはれども、同じ心しはかはらぬ悲ずきなるべし」

ごすぎ-ぶり 小杉原（名）杉原紙の小型のもの。「鼻紙などに用ふ。こすぎ。「色道大鑑」「鼻紙は小杉原に限るべし」

ごすぎ-はら 子過腹（名）子を多く產みすぎたる腹。「三子の出來すぎたる腹」

ごすぎらん 〜（名）【植】石松（ヒカゲ）科、石松屬の多年生草本。莖の高さ一二寸、莖は小にして、分枝し、短き根を以て著生す。葉は鱗片狀にして莖に密生し、稍すべて、心のみいもが、りやりて、わはこにして、高雪ひら、稀を、「三人までの產み巢と、松風村雨巢常盛「三子の出來すぎたる腹」は、「稀」じていはば子過ぎ腹」

ごすぎ-ひ 小杉（名）❶小さき杉の木。「今の如く、小菊・小杉などの如く、小根に濃きたる鼻紙はなし」

**ごすぎ

退役の苦ならん」

こずゑのはなちる 五葉花散　五葉の来たるを花の散るに譬ふ。狩猟天皇「歌経標式」「天上の五葉の花も散るとかや」

こずゑめづしき 〜五葉滅色　こずゑいもつ(五葉退役)に同じ。嘉祥「今は いつしか引きかへて、五葉滅色の秋なれや」

ごーずゑ 〜午睡　ひるねすること。葉集「文「午睡昏昏」史者及「門」」

こずゑし 〜鼓吹司(名)　くすゑし(鼓吹司)に同じ。

こーずゑじん 小随身(名)　近衛府の閣身の外に、近衛の中少将及び左右兵衛等の召し仕ふ閣身。相國寺塔供養記「小閣身四人(閣身の中に近衛の閣身)、六位(閣身の中に衛府)」「令宣旨」後照念院殿装束抄「小閣身(閣身の中に衛府)」

ごずゑーてんてん (名)　こじゅてんてん(五十展展)の訛り。狂言「五すゑてんてん、すゑるきのくどくといふ郷が有る」

ごずゑーもじ 御推文字(名)　すゑりもじ(推文)を いふ。女詞。

こーずゑ 梢(名)　〔木末の義〕木の枝の末、又は木の幹のさき。古今雑三「さつき山こずゑを高み子規、鳴くね空なる時もするかな」和名「梢枝(訓)木末也」　列子「黄帝篇「梢枝梢也」」

こずゑあきなり 梢秋　梢秋となる。玉葉秋上「山風にもろるさ一葉はかつ落ちて、こずゑ秋なる日ぐらしの庭」

こずゑつたひ 木末傳　木すゑをつたふこと。木すゑより木すゑをつたひ行くこと。新六帖「秋の山のこずゑづたひ行くに、なく鶯の、しづまる時もなき心かな」

こずゑなみたち 梢波立　梢が風に吹かれて、波の如く上下に動く。謡「百万「梢の色づく秋の夕嵐、梢波立つ沙堤しの、伝宅の伝説の夕嵐」

こずゑのおき 梢秋　〔梢の色づく秋の末を

こずゑのはるか 梢遥　〔梢の末を遥かけていふ〕秋の末。陰暦九月の異名。八雲御抄「九月、ながつき、こずゑの秋」後撰集冬「紅葉ばの散りしく色はかはらねど、こ末の秋はなほぞ悲しき」謡「紅葉」「長月の色も梢の秋を得て、照るや紅葉の土佐の里」

こずゑのおらし 梢嵐　こずゑに吹きわたるあらし。謡「梢の嵐、袋の蟻」

こずゑのうれ 梢末　小枝のすゑ。枝頭。梢端。夫木「鶯と夜鳥鳴きて此の山頭の、こずゑのうれは いまだ静けし」

こずゑのかぜ 梢風　こずゑに吹きわたる風。金葉雑上「山櫻、こずゑの風の袋ければ、花のさかりになりぞ頼ぶ」

こずゑのくも 梢雲　1梢にたなびく雲。夫木「もとこえし道とも見えずはこねる山、木ずゑの雲に絵る高嶺は」　2梢の花を雲と見立てていふ語。新後撰春下「三吉野の花の白雪ふるままに、梢の くもをはらふ山風」

こずゑのさくら 梢桜　こずゑに咲ける櫻花。後拾遺雑五「みゆきとか世には ふらせて今はただ、梢の櫻ちらずなりけり」

こずゑのそら 梢空　梢のあるあたりの空。玉葉雑三「暗き夜の山松風はさわげども、梢の空に起ぞのとけき」風雅「雑上「峰しらむ梢の空にかげ落ちて、花の雪まにありあけの月」

こずゑのつき 梢月　こずゑにやどる月。謡「千歳冬「もみぢばをさそ風のたびごとに、木末の月の影ぞしづまる」

こずゑのつゆ 梢露　こずゑにおける露。風雅「夕立の雲吹きおろくる迫ひ風に、木末の露ぞ まさりける」謡百万「身のうきに、梢の露のふるにまさりて、こずゑの雨の、ちらでもなほ、なほ、なほ、な

に栽培せらる。果實より黒・白二種の胡椒を製し、香辛料及び藥用に供す。

こせう（名）【植】おにしばり（黄瑠璃）の異名。

こせう（名）【植】たちばらし（唐芋）をいふ。西國・伊豫の方言。

こせう（名）【植】胡椒の粉。

こせう（名）【料理】胡椒丸。

こせう（名）【植】胡椒の一種。

こせう（名）【植】ちんちやうげ（瑠璃）の異名

こ-せん 小銭 (名) 價格の少なき錢。ごぜに。明慶錄「此度鐵小錢吹立被仰附」銅小錢之分追迫引替候積、右引替方、銅小錢壹貫文之替り、鐵小錢百文錢取交、壹貫五百四十八文」

こ-せん 〔一〕古錢 古泉 (名) 昔時、通用せし錢。古銅。續紀(世代)「今聞百姓徒蓄古錢」武江年表「好事の輩、古錢を集むる事行はる」南史(宋朝)「泰始二年、斷新錢、專用古錢」

こ-せん 〔二〕雇錢 (名) やとひせん。雇賃。

こ-せん 〔一〕古仙 (名) 古昔の仙人。盛衰記「古仙經行之聖跡」李白詩「道與古仙合」

こ-せん 〔一〕賈船 (名) 商賈の船舶。あきんどぶね。商船。膝栗毛「諸國の賈船、木津・安治の兩川口にみよしをならべ」漢書(地理)「蠻夷賈船、轉送致之」

こ-せん 〔一〕姑洗 (名) 〔一〕十二律の一。じふにりつ(十二律)を見よ。禮記(月令)「季春之月(中略)律中姑洗」〔二〕陰曆、三月の異稱。運歩色葉「姑洗(セン)三月」白虎通「三月謂之姑洗、姑者故也、洗者鮮也、言萬物皆去故就其新英、不鮮明也」

こ-せん 〔一〕顧瞻 ふりかへりてみること。詩經(鄘風)「顧瞻周道、中心怛兮」韓愈詩(苦寒)「天子哀無辜、憐我下顧瞻」

こ-せん 〔一〕故戰 故意に戰鬪をしかくること。侍所沙汰篇「一、故戰防戰事。縱雖有確論之宿意、可仰上意之處、任雅意及鬪殺之條、罪科不輕、所詮於故戰者、雖有理運、不可有御免者也、至防戰者、若有理運者、可被免許者哉」

こ-せん 〔一〕股戰 怖ろしさに脚のわななくこと。史記(晉世家)「失火之家(中略)退立股戰而栗」

こ-せん 〔一〕虎帟 (名) 〔一〕とらのひげ。〔二〕男者などの恐ろしきひげ。とらひげ。

こ-せん 〔一〕胡髯 (名) あごひげ。諸江(亀)「隆準の鼻、胡髯の腮」史記(秦武)「有龍垂胡髯、下迎黃帝」

ご-せん 〔一〕互選 特定の數人が、其の範圍内の人につきて互ひに選擧すること。又、其の選擧。貴族院多額納稅者議員互選規則(第一)「互選の選擧」華族令(七條)「十、有爵者の互選に依り組織したる懲戒委員會」

ご-せん 〔一〕午前 (名) 朝より正午までの間。夜半零時より正午十二時までの間。ひるまへ。北齊書(畫)「自午以前馴庭飲啄、午後更不下樹」

ご-せん 〔一〕五善 (名) 射術にて、五つのよきこと。下文を見よ。太平記(十三、聖廟)「如雪なる膚を推肩脫きて、打ち揚げて引きおろすより(一番)雷ししをり堅めたる體(二番)切って放したる(三番)矢色・弦音(四番)弓倒し(五番)五善何れも逞しく勢ひありて」雲州消息(五善)「五善之體更無所避、已有獨步之氣」論語(八佾)「子曰、射不主皮、(集解)馬融曰、射有五善焉、一曰和、志體和也、二曰有容儀、三曰主皮、能中質也、四曰和頌、合雅頌也、五曰、興武、與舞同也」

ご-せん 〔一〕御膳 (名) 食膳の敬稱。轉じて食事の敬稱。續古事談「やがて其の座にて供御を參らす。諸卿御膳をおろして各これを食ふ」著聞「隆方陪膳つとめて候ひければ、御膳にもえ著かせおはしまさざりけり。恥ぢさせ給ひけるにこそ」謠(阿蘭)、伊勢太神宮御降臨より以來、御膳調進の綱を引く所なり」

ご-せん 〔一〕御前 (名) 〔一〕貴人の座前又は面前の敬語。おんまへ。源(若菜下)「その人彼の人、御前(ゴ)などにてたびたび試みさせ給ふに」東鑑(八、治承四年)「召「邦道・昌長等」於御前(ゴ)有「卜筮」」逕歩色葉「御前(ゴ)」狂言(鬼瓦)「此の中御前に詰めてあれば、新地をくわっと下だされた」漢書(子胡)「數講於御前」同(武帝)「矢及御前」〔二〕尊稱に用ふる語。東鑑(廿三、建暦元年)「若君御前御行始」(延慶本)平家(三末、清方)「若君をば六代御前とぞ申しける」源氏烏帽子折「西の宮の惠美須御ぜん」〔三〕すべて婦人の敬稱に用ふる語。こぜ。今昔「前追はざらん人をば、我が御前達の御當りには、何でか寄せん」宇治拾遺「大姫こぜん」同「らへの御前」砂石集「をば御前は、忠盛の最後の御前にて」(延慶本)平家(三末、維盛)「池尼御前の略」ぜん〳〵(前驅)の敬稱。宇津保(藤原)「御隨身ともごぜんすべき人、さらぬも多かり」同(楼上)「御ともには御ぜん六人、御馬ぞひ(院)人。御ぜん二人は四位、二人五位、二人やんごとなきつかさある六位」枕「(敵)人おりたる人、むかしは御ぜんなどいふ事もせず」源(宿木)「御ぜん・するじん・車ぞひ・とねりなど」

ごぜん さらず 御前不去 片時も君公などの御前を離れざること。君寵の篤きこと。又、その人。おそばさらず。浦島年代記「御前さらずの御出頭」

ごぜん ていちゅう 〔御前庭中〕 鎌倉時代、將軍の親しく審問し又は評定の座にて言上すること。(鎌倉)

ごぜん のこころみ 御前試 ごせちのこぜんのこころみ(五節御前試)の略。ごせち(五節)の條を見よ。榮華(殿上)「五節中略御前の試みの夜などは」名目抄「御前試(ゴゼンノ)こころみ」

ごぜん のめし 御前召 前條に同じ。增鏡「五節のまれ中略諸臣の亂舞、御前のめし、北の陣、推參まで盡くされ侍り」

ごぜん まじはり 御前交 同僚となりて相共に君公の前に伺候すること。又、其の交際。又は其の人。狂言(生捕)「こんのう丸といひしわっぱを法師になし給ひ、御前まじはり過りと、京童がとりどりに申し候」

ご-ぜん 〔一〕御前 (代) 〔一〕江戸時代、諸大名・旗下等を其の家臣より稱する語。其の奥方を御前樣といふ。現今に至りても華族の家にてなほ之を稱す。〔二〕古へ己れの妻、又は他の婦人に對する對稱代名詞。宇治拾遺「御前たち、さはいたく笑ひ給ひてわび給ふなよ」義經記(三、伊勢三郎(初めは「壁に耳をあてて聞き給へば、やごぜんどもとおしおどろかせば」砂石集「御前の御ふるまひ、有りがたき御心ばえにておはします由承り」

ごぜん-うちどり 御前内取 (名) 古へ相撲の節會の二日前に、相撲を宮廷に召し、先づ左方をして相撲せしめ、次に右方をして相撲せしめて御覽に供せしこと。西宮記(七、相撲)「御前内取」

こせん-か 古錢家 古泉家 (名) 古き貨幣を集めて研究又は愛翫する人。愛泉家。

ごぜん-かう 〔一〕御前講 (名) 次條に同じ。

ごぜん-かうぎ 〔一〕御前講義 (名) 貴人の前にて書物などの講義をなすこと。

こせんかう-さんとうきくわんし 〔一〕湖川港三等機關士 (名) 其の受有する海技免狀の種類によりて區別したる機關士の一。三等機關士の免狀を有し、湖川港内のみを航行する汽船又は發動汽船に限り船舶職員たることを得るもの。船舶職員試驗規程(第二)「湖川港三等機關士試驗」同(第三)「湖川港三等機關士試驗」

ごぜん-かかり 御前掛 (名) 能樂などにて、敬意を表するため、貴人の御前に

て行ふ式の一。

ごぜん-かご 御膳籠 (名) 食品をいれて、かつぎあるくかご。竹にて方形に編みたるもの。しまふぐ(信濃)「物語」

ごぜん-さんくわ 〔一〕五錢銀貨 (名) 明治四年の新貨條例に基き發行せられし五錢の補助銀貨。明治四年五月新貨條例「五錢銀貨」

ご-せんぐう 御遷宮 (名) せんぐう(遷宮)の敬語。御遷座。

ごぜん-くじ 〔一〕御前公事 (名) 君主親しく訴訟をさばくこと。甲陽軍鑑「是れは只の事にあらず、侍道の事なれば、目安をもって、信玄公の御さばきに任せられ中略御前公事になる」(武家名目抄)

ごぜん-くわいぎ 〔一〕御前會議 (名) 國家の大事に關し、天皇陛下の聖旨により、陛下の御前にて元老・大臣などのなす會議。

ご-せんざ 〔一〕御遷座 (名) せんざ(遷座)の敬稱。

ご-せんざ-しき 〔一〕御遷座式 (名) 神體の御遷座につきて行ふ儀式。

ごぜん-さま 御前樣 (名) ごぜん(御前)を一層敬ひたる語。又、特に貴族の奥方の敬稱。曾我會稽山「本田ほどの者は、家來に持つた大名の御前樣」傾城島原蛙合戰「御前樣・奥樣と云はれたい望みも無い」

こ-せんじ 小宣旨 (名) 辨官より在京の諸司に下だす宣旨。事件の小にして、大臣宣を要せざるもの。(おほ宣旨の對)西宮記(十五、左中將)「謂之小宣旨」江次第(十、踏歌)「小宣旨三枚、一枚下(下)木枕(二)枚下宮(内)、(中略)一枚下宮(内)、作米不入(讀奏)、一枚下宮(内)、」

こせん-し 濃染紙 (名) 濃く染めたる紙。一說に小宣旨の紙なりと。(和訓)紫式部日記「かへりごと中略いたうかすめた

るこぜんしに」盛衰記(三、頼)「仙女の衣の薄く透き通りて、紫しき有樣が薄紫と厚染紫の紙に相似たり」

ご-せん-し 〔一〕五線紙 (名) 樂譜を畫く紙。水平に五つの線の引きてあるもの。

ご-せん-しかく 〔一〕互選資格 (名) 互選人中に加はり、互選を行ふことを得る資格。貴族院多額納稅者互選規則(第八)「其の府縣に於て互選資格を有する者」

ごぜんじ-がみ 御宣旨紙 (名) うすずみがみ(薄墨紙)に同じ。

ごぜん-じゃうとう 〔一〕御前上等 御膳上等 (名) 上等といふを戯めていふ語。

ごぜん-じるこ 御膳汁粉 (名) 普通の汁粉。即ち、漉餡を溶かして、餅を入れたるもの。

ごぜん-ずし 御膳鮨 (名) ごぜんばこずし(御膳箱鮨)に同じ。

ごぜん-そう 〔一〕御前僧 (名) 古へ宮中にて、法事を勤むる僧。遠幸故實「齋永二年三月廿日可候御前僧」續現葉集(長徳)「後嵯峨院の御前僧にて侍りけるに」名目抄「御前僧(ゴゼン)誘(寺僧)勤(ニ)」

ごぜん-そば 御膳蕎麥 (名) 盛蕎麥の細く打ちたるもの。蒸籠に盛りて出だす。

ごぜん-たき 御膳炊 (名) めしたき。ごはんたき。

ごぜん-たちばな (名) 【植】山茱萸(シュユ)科、山茱萸屬の多年生草本。莖の高さ三四寸。葉は卵形又は楕圓形、數葉莖頂に輪生し、時に一二對の葉、其の下部に對生す。夏季、葉間より花莖を抽出し、白色花瓣樣の總苞を有する小花を生ず。我が國、各地の山地に自生す。くるまばさう。

ごぜん-だな 御膳棚 (名) 〔一〕床の間・書院などの脇に設くる棚の一種。膳具を載するに用ふ。〔二〕茶所にて、膳具を載する戸棚。

こ-せんだん (名) 【植】せんだん(楝)の異名。

こ-せんぢゃう 〔一〕古戰場 (名) 昔、戰爭のありし場處。李華文「弔古戰場文」

ごぜん-ちょくし 〔一〕御前勅使 (名) いつきのみこの御禊の時、河原まで供奉する勅使。

ごぜん-にん 〔一〕互選人 (名) 互選を行ふ人。貴族院多額納稅者議員互選規則「互選人」

ごぜんばこ-ずし 御膳箱鮨 (名) 江戸時代、伊勢屋八兵衛の賣り出だしたるすし。下文を見よ。(增)江戸鹿子「御膳箱鮨(交)切(酒)・星(酒)・外(宴)・太(宴)」

ごぜん-ばし 五膳箸 御前箸 (名) 指にて食物をはさみ食ふこと。(國語)

ごぜん-はらひ 御膳祓 (名) じんぐはらひ(神供祓)に同じ。

ごぜん-ばん 〔一〕御膳番 (名) 君公の御膳の事を掌る役。槍權三「御膳番の淺香市之進に、茶の湯の相弟子」最明寺殿百人上萬(ヤ)「大納戸・小納戸・進物所・御膳番」

ごぜん-ひかう 〔一〕御前披講 (名) 禁中、歌台などの時、主上の御前にて和歌などの披講をすること。

ごぜん-ひら 五泉平 (名) 精巧織の一種にて、やや劣りたるもの。袴地とす。享保後國中蒲原郡五泉町の產。

ごぜん-ひろ 御前廣 (名) 奉書紙の一種。大廣よりやや小にて、縱は一尺三寸餘、横は一尺八寸餘のもの。中廣。五分廣。

ごぜん-ふぎゃう 〔一〕御膳奉行 (名) 大名諸家にて、將軍家の出行ある時、膳部を淨汰せしむる役。江戸時代には幕府にも此の職を置き、將軍の食膳を掌る。吏徵見(第)「御膳奉行、三人、若年寄支配」

ごぜん-まい 〔一〕御膳米 (名) 御飯料の米。松風村雨東帶鑑「とんと開けたる機俠、これ公家業の御膳米、鼠むとは鼠が當たろかも」

ごぜん-まはり 御膳廻 (名) 御膳部のまはり。御膳のはとり。關八州繫馬「大毒蟲、嫁君のお部屋さき、御膳廻りへ落ち入るまいものでもない」

ごぜん-まへ 御膳前 (名) 貴人の食物をいふ俗稱。(狂言)

ごぜん-むき 御前向 (名) 君公などの御前の用むき。雪女五枚羽子板「御前向を有體に承らん」

ごぜん-むし 御膳蒸 (名) ひやめしを喫むる具。銅・鐵などにて作り、下部に湯を入れ、火にかけて蒸し暖むるもの。舊製のは底に小孔數十あり、中に冷飯を入れて熱湯をくぐらせ、火にかけて水分を少からしむ。

ごぜん-めいぼ 〔一〕互選名簿 (名) 互選人の名簿。貴族院多額納稅者議員互選規則(第八)「互選名簿」

ごぜん-らぶそく 〔一〕御前蠟燭 (名) 佛前に供ふる蠟燭。

こそ (代) くそに同じ。

こそ 越 (自動) こす(越)の訛り。古へ東國の方言。萬葉「しほ船の(古風)白波、にはしくも、おふせたまほか、おもはへなくに」

こそ (助) 〔一〕多くの中より、特に其の物事を取り出だして慥かにいふ語。記「如屎醉而吐散登許賀(ヒ)、我那勢之命爲如此」同(上)「な許賀(ヒ)はをにいませば(中略)つま持たせらめ」同(下)「うべし許賀(ヒ)問ひ給

こそく 〜古族 (名) 古代の種族。

こ-そく 〜五則 (名) 五つの準則とすべきもの。佛・衡・規・矩・繩の帯。演書[中]裡異ト物約而生衡・衡運生規・規圓生矩・矩方生繩・繩直生準中準也定五則」

こ-そく 〜語則 (名) 言語におのづから存在する法則。

こ-そく 〜語族 (名) 人類の言語を、その系統・親疎しくは形態等によりて分類せるもの。

こそ-くさ 去年草 (名) 【植】じさ(蓼)の異名。証中抄「もみぢ葉の散るや散らぬに種苗きて、卯月さつきに刈るやこぞくさ」

こ-そくさい 〜御息災 (名) 1そくさい(息災)の敬語。2質樸にして他事に純きこと。

こそく-しゅぎ 〜姑息主義 (名) 寓意を重ずる主義。ことなかれしゅぎ。

こそく-たさ (名) こそくたきさま。こそくたき度合。

こそく-たし (形ク) こそくはゆしに同じ。源細海「吉原岡中[中]にこそくはいとこそくたい」

こそくり-あひ 撰合 (名) こそくりあふこと。絶対絶本地「おこそくりあひ、腰元衆のもちひ笑ひ」

こそくり-あふ 撰合 (他動ハ四) 互ひにこそくる。

こそくる 撰 (他動ハ四) 皮膚の一部を裂き摩りて、刺激し、くすぐるように感覚を起こさしむ。くすぐる。字鏡「擽[擽]記」名義抄「擽」擽[擽]記「不知恵[恵]記」人名義抄「擽」擽[擽]記「擽[擽]記」「擽[擽]記」「擽[擽]記」

長骨北部元親の攻め落とされし時。一條きりもせず」

こそめ-ぐさ 紅玉草（名）【植】はぎ（萩）の異名。蔵王草・紅染草。萩。花咲けばつれなき人もこそめぐさ、色にめでつつる今日や問ふらん」

こそめ-づき 木染月（名）木木の紅葉濃染月。八染月の異名。謹王十一月黄名中略八月。時雨れつつはじの立枝も紅葉し て、紅染の月の深きくれなゐ」英傳抄「松を見てかをぞ忘るる木染月露やむなしき色やつれなき」

こそり（名・副）こそこそする音、又こそこそするさまにいふ語。こつそり。

ごそり（名・副）ごそごそする音にいふ語。ごつそり。百伴蔭忽卒ごそごそかわきて細かに聞こゆる音をいふ。鼠の物ひびき、夏毛毛の笹にて文かく音、障子にとどまる蜻蛉、若めるる花の正に散るを見たる」

こそり-て 副（副）殘らず。悉く。みな。全體。神代紀上「衆皆悉不平」孝経「孝経紀（合ひ）」結没死」勢語「舟こぞりて泣きにけり」

こ-そりは 小反刀（名）小さき薙刀刀きしいふなる小反刀、薙刀こぞり薙義解記六月二十日「狂言記「仁王三即のこと」

こそる 自動（自動）悉く集まる。殘らず。「一隨寄の位り南都にこぞりて、我れも我れもと」南都時の佛事をはじめて」保元「こぞりて」

こたい 故態（名）故態也、故態也、故態也、

りも形小さき故にいふ。字津伎草「馬・牛・こだか」同「上」をかしからん野茨邊に、こたかん入れて見ばやし」 ⑤こたかがり（小鷹狩）の略。源氏「何がしの朝臣の、こたかにかかづらひて立ちおくれ侍りぬる」

こたかがり 小鷹狩（名）秋頃に行いふ鷹狩。鷹・雲雀などを狩るより。はつとりがり（冬の狩を大鷹狩といいふ對）拾遺「陶成院の御所風に小鷹がりしたる所」源平盛衰「八月十日餘りのほとに、小鷹狩のついでに」

こたかさ 木高（名）こだかきさま。こだかくある度合。

こたかさ 小高（名）こだかきさま。小高き度合。

こたかし 木高（形ク）梢高し。木だちの高し。萬葉「許太加久（コダカク）て里はあれども、ほととぎすいまだ鳴かず」古今「雪羽山こだかく鳴きてほととぎす、君がわかれを惜しむべらなり」枕「木だかき木どもの中に」

こたかきこゑ 木高き聲（名）高き樹の上にて鳴く聲。和泉式部日記「忍び音は苦しきものを、邪公、木高き聲を今日よりは聞け」

こたかし 小高（形ク）少し高し。やや高し。高き度合「小高き桂の木の陰こそ」

こたかだんし 小鷹檀紙（名）檀紙の小判にて小鷹狩などに用ひたるもの。霧は一尺四寸餘り。小鷹狩に用ひたる檀紙。東雲雑聞帝「檀紙」こたかだんしなど原。

こたち 小太刀（名）小刀。帶き添へる太刀。

こたち 小太刀（名）小刀の。帶き添へる太刀。

こたち 小太刀（名）小刀もの。帶き添へる太刀。

こたち 小太刀（名）小刀もの。帶き添へる太刀。

こたち 小太刀（名）小刀もの。帶き添へる太刀。

こたち 御達（名）仰せに從ひ給ふ。「御達」を添へて複數としたる語。勢語「宮仕へしける女の方に、こたちなりける人をあひ知りたりけり」宇津保物語「内にこたち・うなるとも、親の家・産衣・汗衫ども著て居なみたり」枕「一條の木ひきかくして、家のこたち・女房などのうかがふを」

こたち 小立（名）①稲大工の語。ゆりたつ（絲立）に同じ。②中立符（ヒ）と隔立符（ヒ）との間に、笠木（ヒ）の上に立てる小さき門。

こたち 火燵・炬燵（名）圍爐裏の上に棚を設き、布團などをかけて、足などを煖むるもの。篠廻爭「小袖の、裏には、こたつのやうなる物にて絲」遊歩色葉「火燵」大筑紫「生木にてけるこたつの火はつよし」百燵。火鉢（ヒ）

（諺）火燵で鰻汁 一方にて大事をとりながら、一方にて危險の行ひをする譬へ。

こたち 木立（自動ヒ）樹木生ひ立つ。家動「事さまざまさばかり植ゑ集めつくろはせ給ひしもさいうゑ木どもを、ここだつ（こだつ）にまかせて生ひあがり」

こたち 一五達（名）五方に通ひうべき辻。爾雅「五達達于康六達謂之莊」

こたち 一誤脱（名）文句の誤り脱（ヌケ）たること。又、その所。誤謬と脱漏と。

こたちつき 御達（名）こたつくこと。

こたちつく 御達（自動ヒ）こたつくこと。もめる。

こたつ 混雜（名）紛擾。

こたつびやうぶ 火燵兵法（名）はたけずゐれん（昌木蓮）に同じ。

こたつぶとん 一火燵蒲團（名）火燵に用ふる蒲團。天鵞絨・木綿・羅紗・更紗・ビロード・ビロウド・ビロード・ビロウド・ビロード・ビロウド

蔓せ置く畑。

こたに 小谷 (名) なかたに(中谷)の異名。

こたに 木蔭 (名) 蔦(ヒ)の類をいふ。「枕草子」「すこし引き直せ給ひて」「中務集」「あどけなくすこしにくきに」源氏「こだに」「聞こえはせたの右大臣夜深く帰り給ひて、こだに・ひかかげを包みて聞はせたりしに、ひとりしに、きこえきせし」

こたに (名) 種種の物を雑ぜて煮ること。又、其の煮物。

こたにわたり 水机間 (名) 【植】水鬼帰科、水机川屬の多年生草本。地下に根茎を有し之より高さ一尺五寸内外にて、葉柄ある葉を叢生し、之に毛茸を生ずず。葉身は長卵形、全縁、葉脈は心臓形を生じたのなり。茎は葉に生ず。我が國、各地の沼地に自生す。

こたねさも (名) 【植】狸藻科、狸藻屬の一年生草本。食蟲植物なり。茎は鐵線の如く、葉も亦細短なる針狀にして、所所に葉の腋形せる小さき囊狀の捕蟲器を有す。花梗は葉柄より直生し、夏日黄色の花を疎生す。我が國、各地の淺き池沼・水田等に自生す。

こたねさらん (名) 【植】蓼科、蓼屬の多年生草本。茎の高さ一尺餘り。葉は細長、剛硬なり。茎の上に生じ、雌雄異株。茎の上部に生ず。我が國、各地の高山にして最上部に自生す。

こたね 子種 (名) 子を生むべき種。子となるべきものと。日本紀「神代紀」「身にやどりし子鳥を、游水と流し捨つるとも」「身かはは子故に子鳥の無いかし」

こたね 木種 (名) 木のたね。「神代紀」「一書」「種」

こたぶ 小谷 (名) なかたに(中谷)の異名。

こたぶ 木蔭 (名) 蔦(ヒ)の類をいふ。「枕草子」「すこし引き直せ給ひて」源氏「こだに」「聞こえはせたの右大臣夜深く帰り給ひて、こだに・ひかかげを包みて聞はせたりしに、ひとりしに、きこえきせし」

こたに (名) 種種の物を雑ぜて煮ること。又、其の煮物。

こたにわたり 水机間 (名) 【植】水鬼帰科、水机川屬の多年生草本。地下に根茎を有し之より高さ一尺五寸内外にて、葉柄ある葉を叢生し、之に毛茸を生ずず。葉身は長卵形、全縁、葉脈は心臓形を生じたのなり。茎は葉に生ず。我が國、各地の沼地に自生す。

こたねさも (名) 【植】狸藻科、狸藻屬の一年生草本。食蟲植物なり。茎は鐵線の如く、葉も亦細短なる針狀にして、所所に葉の腋形せる小さき囊狀の捕蟲器を有す。花梗は葉柄より直生し、夏日黄色の花を疎生す。我が國、各地の淺き池沼・水田等に自生す。

こたねさらん (名) 【植】蓼科、蓼屬の多年生草本。茎の高さ一尺餘り。葉は細長、剛硬なり。茎の上に生じ、雌雄異株。茎の上部に生ず。我が國、各地の高山にして最上部に自生す。

こたね 子種 (名) 子を生むべき種。子となるべきものと。日本紀「神代紀」「身にやどりし子鳥を、游水と流し捨つるとも」「身かはは子故に子鳥の無いかし」

こたね 木種 (名) 木のたね。「神代紀」「一書」「種」

こたねはん 蘊種 (名) かひこの卵。さんらん。

こたば 小束 (名) 小さきたば。(大たばの對)

こたばこ 粉烟草 (名) 刻み烟草の細かく粉になりたるもの。こなたばこ。

こたばこ (名) 種種の品をごたごたと雑へ入るること。

こたはり (名) こだはること。こだはりたること。

こたはる (自動) 【1】さはる。ささはる。「蜉蝣毛吉脇指の鍔が横つぼらへこだはつて、いてえのだ」【2】かかはる。かかづらふ。【3】故障を言ひたてらる。妨げとなる。「鞍家加留多」「たつて御暇を願ひ給へども、都司御殿こだはつて埒明けず」

こたび 此度 (副) このたび。こたみ。今度。今回。「蜻蛉日記」「何れとも分かぬ心はそへたれど、こたびの頭は疑ひなく、帝のぶり」「源氏「こたびの御口づからこそ給へるなり」

こたびな 小鯛 (名) 小さき鯛。まだ成長せぬ鯛。

こたふ 古塔 (名) ふるき塔。「佛者」「拾遺和歌」「古塔高百尺」「白帖」

こたふ 孤樹 (名) ただ一つのこしかけ。「李嶠詩」「一燈孤閉孤樹夜窓空」

こたふ 答 (自動) 【1】他の言に對して返り言をなす。いらふ。返答す。返辞す。「神代紀」「陽神陰神」「之目」「竹取」「と問はするに」「刑」「詔」「詔」「之」「之目」「竹取」「と問はす。」「問題の意を解く。」「狂言」「陸奥の守」「めちやくちやといひかけ、ただのりと答へさせられた。」「反響す。」「古今集」「打ちわびてとばらく」「回ひびく。」「響と響と五ひに響す。」【2】質疑の解釋をなす。「問題の意を解く。」「狂言」「陸奥の守」【3】他の言に對して

こたふ 答 (自動) 【1】他の言に對して返り言をなす。いらふ。返答す。返辞す。「神代紀」「陽神陰神」「之目」「竹取」「と問はするに」「刑」「詔」「詔」「之」「之目」「竹取」「と問はす。」「問題の意を解く。」【2】質疑の解釋をなす。「問題の意を解く。」「狂言」「陸奥の守」「めちやくちやといひかけ、ただのりと答へさせられた。」「反響す。」「古今集」「打ちわびてとばらく」「回ひびく。」「響と響と五ひに響す。」

こたふ 答 (自動) 【1】他の言に對して返り言をなす。いらふ。返答す。返辞す。「神代紀」「陽神陰神」「之目」「竹取」「と問はするに」「刑」「詔」「詔」「之」「之目」「竹取」「と問はす。」「問題の意を解く。」「狂言」「陸奥の守」「めちやくちやといひかけ、ただのりと答へさせられた。」「反響す。」「古今集」「打ちわびてとばらく」「回ひびく。」「響と響と五ひに響す。」【2】質疑の解釋をなす。「問題の意を解く。」「狂言」「陸奥の守」【3】他の言に對して

こたぶ 答 (自動) 【1】他の言に對して返り言をなす。いらふ。返答す。返辞す。「神代紀」「陽神陰神」「之目」「竹取」「と問はするに」「刑」「詔」「詔」「之」「之目」「竹取」「と問はす。」「問題の意を解く。」「狂言」「陸奥の守

の花はあづまじの、こちのかへしの風につけしは」

こちのやまかぜ　東風山風　東方より吹き来る山風。夫木「咲り散りなき月日をかへす浮雲を、あとなく拂ふこちの山風」

こちふかぜ　東風吹風　東方より吹く風。こち。東風。曾丹集「のぼり舟こちふく風を過ぐすとて、よをうしまとに敷きてぞふる」夾衣「ひとへづつ匂ひおおこせよ八重櫻、こち吹く風の便りすぐさず」

こち　牛尾魚　(名)【動】魚類中、硬骨類の一種。頭及び體の前部扁平、尾端に至るに從ひて細小となる。體の長さ一尺乃至三尺。背部は灰褐色の斑あり、側部は帶黄白色。奇鱗には本邦、各地の淺海に產す。三好筑前守義長朝臣亭御成記「獻立次第」こち。鯛。鯉。鯛臣亭御成記「獻立次第」こち。

(篠)牛尾魚の頭は嫁に食はせ　牛尾魚の頭は肉少なければ嫁に食はせよ。姑の嫁を惡みていふ。

こち　〜骨　(名)こつ(骨)に同じ。

こち　〜故智　(名)古人の用ひし智謀。史記「秦王必組銀篋之故智」

こち　〜古地　故地　(名)ふるき土地。もと所有地。「復故地而罷」

こち　〜胡地　(名)えびすの國の地。「習樂夫子翁傳記」今日は蒸宮の人にして、明朝胡地の姿となる」

こち　此方　(代)(俗)身に近き方をいふ語。(そこなた。こちら。この方。この方。こつい知ちこの方。(そこなた。こちら。この方。この方。この方許山のもこなたとあちこの方。こつい知ちこの方。(そこなた。こちら

施行前、全國の各町村若しくは數町村に跨きて、行政事務を執行せしめし數町村制施行後、未だ町村制を施行せざる北海道の各村には廳之を置き、町村長と同一の行政事務に從事せしむ。明治十一年七月太政官布告第十七號郡區町村編制法「戸長」

ごーちゃう 一腸（名）飢渇したる腹。尺素往來「於渇貪之身者、餌手市肆、賈手村酒、柳枯鳥、酬佳節而已」鄰嘲詩「閉城引泡、相戲酬、枯腸渴肺忘朝饑」

ごーちゃう 一刺腸（名）はらをさくこと。無腸を通笑、不堪、避刺腸之患」

ごーちゃう 一詮張（名）實際よりおほげさに言ひたつること。列子天瑞「詮張於非」

ごーちゃう 一伍長（名）❶五人を一組としたる頭。❷陸軍下士の一。軍曹の下位にあるもの。意兵・歩兵・騎兵・砲兵・工兵・輜重兵の各兵科に置く。

ごーちゃう 一御諚（名）貴人のおほせ。おことば。御命令。容命。東鑑六「記文治元年三月稱御定令下、五旨餘」盛衰記「一院の御諚として、大勢にて答すると申しましかば」

ごーちゃうきん 一古丁銀（名）天正の頃、鑄造せし丁銀。丁銀は三寸二分。はの一寸二分。大日本貨幣史「古丁銀」

ごーちゃうけんばう（名）【動】鳥類中、猛禽類の一種。小形の一類にして、本邦七種あり。翼の長さ六七寸。

雄は上面灰茶白色、下面淡色、雌は尾羽に黒斑あり。

ごーちゃう 一刺法（名）餘法の一。ちゃうを選度に大きくして形狀すること。又は小さくするもの。

ごーちゃう 一詩張（名）實際よりおほげさに言ひたつること。列子天瑞「詩張於非」

ごーちゃう 一伍長（名）❶五人を一組としたる頭。❷陸軍下士の一。軍曹の下位にあるもの。意兵・歩兵・騎兵・砲兵・工兵・輜重兵の各兵科に置く。

ごーちゃう 一御諚（名）貴人のおほせ。おことば。御命令。容命。東鑑六「記文治元年三月稱御定令下、五旨餘」盛衰記「一院の御諚として、大勢にて答すると申しましかば」

ごーちゃうきん 一古丁銀（名）天正の頃、鑄造せし丁銀。丁銀は三寸二分。はの一寸二分。大日本貨幣史「古丁銀」

ごーちゃうけんばう（名）【動】鳥類中、猛禽類の一種。小形の一類にして、本邦七種あり。翼の長さ六七寸。

雄は上面灰茶白色、下面淡色、雌は尾羽に黒斑あり。

ごーちゃう 一枯腸（名）飢渇したる腹。尺素往來「於渇貪之身者、餌手市肆、賈手村酒、柳枯鳥、酬佳節而已」鄰嘲詩「閉城引泡、相戲酬、枯腸渴肺忘朝饑」

ごーちゃう 一刺腸（名）はらをさくこと。無腸を通笑、不堪、避刺腸之患」

ごーちゃう 一誇張（名）實際よりおほげさに言ひたつること。列子天瑞「誇

在ル後」左傳哀十一年「君夏怨焉又怨焉沒今我安適辭矣」史記平準書「訕讟腹誹沒入其財」

こうか 小柄 (名) 刀の小刀の柄。又、轉じて、其に插む小さき刀。こがたな。大内問答「公方様御腰物、さやぬりおとし小柄金にて貫あり」

こうあ (名) 小がひなのつかね。丹波果作「互ひにこうかを取つては投げつ投げられつ」骨我流「母飛びかかり、こうかを取つて引つ衣せ」

こうがい 〜骨髄 (名) がいこつ(髄骨に同じ。〜骨髄。虞美記「四方の合戰に、士卒骨肝腦於土地、人血遍骨髄」

こうがい 〜乞丐 (名) 乞丐人。陳琳文「曹操父當天之分、骨髄者地之分」

こうがい 乞丐人。乞丐人。陳琳文「曹操父當乞丐」

こうかいし 〜乞戒師 (名) 寒敎の語。授戒の時、受くる者に代はりて阿闍梨に乞ふ者。

こうかいにん 〜乞丐人 (名) こじき、もの、もらひ。平家三下「都にて多くの乞丐人は見しかども、高野聖「いかにこれなる乞丐人」

こうがら 〜骨鯁 (名) 〔から(鯁)は魚の骨、堅く立つて喉に下だり難き義〕剛直の人に譬へていふ語。鯁骨。荀子「君有忠臣、謂之骨鯁」史記樂毅傳「項王骨鯁之臣、亞父・鍾離眛・龍且・周殷之屬、不過數人」

こうかん 〜牛頭香 (名) こうせんだん(牛頭栴檀)の異名。

こうかく 〜骨格 (名) 【醫】身體を構成する骨五ひに相關接する骨格。骨格。骨格。

宜旨を怠緒し来るべき」同十六、弊法愛一
怨類、親、常非、怠緒朝家、矢、祠威與、佛法こ

こつ-じよ 一忽如 (副) たちまち。に
わか。忽然。突如。忽爾。

ごつす (自動) ございます(御座在)の訛
り。浮世風呂「御座居」どうこつすなし
同「腹ごなしに、鞠を初めたてこつす」

こつ-すま (名) [植]かうほね(河骨)の
異名。

こつ-すね 一骨髓 (名) 1[醫]骨の内
部の腔所を充たせる黄色及び赤色油脂の
液。骨の養素を司る。2骨と髓と。太平平
記「骨髓司命之所、屬無、奈何也」史記「疾
の底、心中。にねみ。読本「天に仰ぎ、頂
を地に附け、骨髓の丹誠即効、之何」歌國
策「吾毎念常痛於骨髓」吉野都女柳「子房
が秘蔵、孔明が骨髓、殘る方なく奏せらる」

こつするくたく 骨髓砕 骨身が砕け
る。太原問答「不便さも亦哀れ
さも、骨髓砕くる涙に暮れ、取り落とし
ては候へども」

こつずるにいる 入骨髓
じ。太平記「史記、怨人を憂う骨、骨髓
に入り」

こつずるにこたふ 徹骨髓 衣徹に同
じ。門出八島「親の一言骨髓にこたへ、
もだされず」

こつずるにてつす 徹骨髓 骨の奥ま
でしみこむ。多く、非常なる怨恨の感
情などにいふ。

こつずるにとほる 徹骨髓 衣徹に同
じ。太平記「根み骨髓に徹つて、
父の仇を報ずばやと思ふ」

こつ-ずい 一骨髓 (名) 1[醫]骨の内
部の腔所を充たせる黄色及び赤色油脂の
液。骨の養素を司る。2骨と髓と。太平平
記「球を浮かれ、骨髓も砕けぬる心地
し」運歩色葉「骨髓、奈何也」史記「疾
骨髓、司命之所、屬無、奈何也」史記「疾
の底、心中。にねみ。読本「天に仰ぎ、頂
を地に附け、骨髓の丹誠即効、之何」
歌國策「吾毎念常痛於骨髓」吉野都女柳「
子。「一篇中の骨髓」吉野都女柳「子房
が秘蔵、孔明が骨髓、殘る方なく奏せらる」

こつするくたく 骨髓砕 骨身が砕け
る。太原問答「不便さも亦哀れ
さも、骨髓砕くる涙に暮れ、取り落とし
ては候へども」

こつずるにいる 入骨髓
じ。太平記「史記、怨人を憂う骨、骨髓
に入り」

こつずるにこたふ 徹骨髓 衣徹に同
じ。門出八島「親の一言骨髓にこたへ、
もだされず」

こつずるにてつす 徹骨髓 骨の奥ま
でしみこむ。多く、非常なる怨恨の感
情などにいふ。

こつずるにとほる 徹骨髓 衣徹に同
じ。太平記「根み骨髓に徹つて、
父の仇を報ずばやと思ふ」

こつ-ずい 一骨髓 (名) 1[醫]骨の内
部の腔所を充たせる黄色及び赤色油脂の
液。骨の養素を司る。2骨と髓と。太平平
記「球を浮かれ、骨髓も砕けぬる心
地し」運歩色葉「骨髓、奈何也」史記「疾
骨髓、司命之所、屬無、奈何也」史記「疾
の底、心中。にねみ。読本「天に仰ぎ、頂
を地に附け、骨髓の丹誠即効、之何」
歌國策「吾毎念常痛於骨髓」吉野都女柳「
子。「一篇中の骨髓」吉野都女柳「子房
が秘蔵、孔明が骨髓、殘る方なく奏せらる」

こつするくたく 骨髓砕 骨身が砕け
る。太原問答「不便さも亦哀れ
さも、骨髓砕くる涙に暮れ、取り落とし
ては候へども」

こつずるにいる 入骨髓
じ。太平記「史記、怨人を憂う骨、骨髓
に入り」

こつずるにこたふ 徹骨髓 衣徹に同
じ。門出八島「親の一言骨髓にこたへ、
もだされず」

こつずるにてつす 徹骨髓 骨の奥ま
でしみこむ。多く、非常なる怨恨の感
情などにいふ。

こつずるにとほる 徹骨髓 衣徹に同
じ。太平記「根み骨髓に徹つて、
父の仇を報ずばやと思ふ」

こつ-ずい 一骨髓 (名) 1[醫]骨の内
部の腔所を充たせる黄色及び赤色油脂の
液。骨の養素を司る。2骨と髓と。太平平
記「球を浮かれ、骨髓も砕けぬる心
地し」運歩色葉「骨髓、奈何也」史記「疾
骨髓、司命之所、屬無、奈何也」史記「疾
の底、心中。にねみ。読本「天に仰ぎ、頂
を地に附け、骨髓の丹誠即効、之何」
歌國策「吾毎念常痛於骨髓」吉野都女柳「
子。「一篇中の骨髓」吉野都女柳「子房
が秘蔵、孔明が骨髓、殘る方なく奏せらる」

こつ-ずい 一骨髓 (名) 1[醫]骨の内
部の腔所を充たせる黄色及び赤色油脂の
液。骨の養素を司る。2骨と髓と。太平平
記「球を浮かれ、骨髓も砕けぬる心
地し」運歩色葉「骨髓、奈何也」史記「疾
骨髓、司命之所、屬無、奈何也」史記「疾
の底、心中。にねみ。読本「天に仰ぎ、頂
を地に附け、骨髓の丹誠即効、之何」
歌國策「吾毎念常痛於骨髓」吉野都女柳「
子。「一篇中の骨髓」吉野都女柳「子房
が秘蔵、孔明が骨髓、殘る方なく奏せらる」

こつするくたく 骨髓砕 骨身が砕け
る。太原問答「不便さも亦哀れ
さも、骨髓砕くる涙に暮れ、取り落とし
ては候へども」

こつずるにいる 入骨髓
じ。太平記「史記、怨人を憂う骨、骨髓
に入り」

こつずるにこたふ 徹骨髓 衣徹に同
じ。門出八島「親の一言骨髓にこたへ、
もだされず」

こつずるにてつす 徹骨髓 骨の奥ま
でしみこむ。多く、非常なる怨恨の感
情などにいふ。

こつずるにとほる 徹骨髓 衣徹に同
じ。太平記「根み骨髓に徹つて、
父の仇を報ずばやと思ふ

こつ-にく 〜骨肉（名）❶ほねとにく。骨はまた肉。骨肉の親。「骨肉の親、離れ難し」（平家）「骨肉の親、骨肉の親、骨肉の親、

「弁髫」。說文云「髫、毒蛇、一名弁髫也」 ㊁鎧

其の具に頸・鎧・袋布・袋ふもの。腕を金具に巻く。

小手・甲・足沙（ヲ）

門小手・産（ヲ）

（ア）おりかけ
（イ）いちのたて
（ウ）ちがねたて
（エ）ちがねたて
（オ）ちがねたて
（カ）ちがねたて
（キ）ふけをまみ
（ク）ふけをまみ
（ケ）ふけをまみ
（コ）ふけをまみ
（サ）ことはせ
（シ）ことはせ
（ス）ことはせ
（セ）ことはせ
（ソ）ことはせ
（タ）ことはせ
（チ）ことはせ
（ツ）ことはせ
（テ）ことはせ
（ト）ことはせ

其の制に小手・足沙（ヲ）

（ナ）ことはせ
（ニ）ことはせ
（ヌ）ことはせ
（ネ）ことはせ
（ノ）ことはせ
（ハ）ことはせ
（ヒ）ことはせ
（フ）ことはせ
（ヘ）ことはせ
（ホ）ことはせ
（マ）ことはせ
（ミ）ことはせ
（ム）ことはせ
（メ）ことはせ
（モ）ことはせ
（ヤ）ことはせ
（ユ）ことはせ
（ヨ）ことはせ
（ラ）ことはせ
（リ）ことはせ
（ル）ことはせ
（レ）ことはせ
（ロ）ことはせ
（ワ）ことはせ
（ヰ）ことはせ
（ヱ）ことはせ
（ヲ）ことはせ

小手・産（ヲ）永小手・彼小手・篠小手・尚小手・鎧・袖の直垂に黒糸縅の腹巻に、左右の小手をさして、三枚兜に鍬形の立て、左右に鍬形の立て、左右に鍬形の立て、左右

方。

ことぶらう 名 舞楽にて、高麗楽の一種。背に胡蝶の翼の形をしたる衣を負ひ、山吹の花をかざして舞ふもの。著聞集「楽を楽に新作の胡蝶ことぶらう」

（こちょうとことぶらう）

ことぶらう 名 【植】うちやうらんの異名。

ことぶれ 小手招 他動 小手先をも動かして招く。手まねく。古今夷曲集「馬をのこ童は山寺の御兒稚子げ、折りかとら蕨待の茶筅に結びなし、友とちこよと小手ぶれ」

ことぶれ 小手廻 名 手まはし。ことぶれ。氣轉のきくこと。

ことぶり 麻葉繰球 名 【植】蔵王菊科。繰球菊。高一尺五寸。茎は麻葉針形、又は長楕圓形にして、鋸歯あり。花は白色、繖房花序に密に生じ、春日・四月に花を開く。我が國・庭園に栽培せられ、蔵王山に産せる。すずかけ。生玉心中上「樒・南天に小手毬に、いとしし男と射干(ぬばたま)の」

ことぶら 小寺 名 ちひさき寺。今世御前をば小寺の小僧とこそ可申かり折れ」夫木雑「すまばやな峰の樒の花をこと折り、谷の水汲む山のこでらに」

ことぶり 小手巾羽 名 きうびのいたち(鼬尾敬)に同じ。

ことぶれ 愛染 名 しつくひも強りたもの上れ。愛染にて風呂・行燈等を頭はしたるもの。

ことぶれ 五天 名 ごてんぶらう(五天竺)の略。釋迦如來誕生令「書は五天竺の仰主、令蕃記の内にして、月輪・宝蓮にかしづかれ給ひし身の」

ことぶれ 五天宮 名 ごてんぶらうのあなたにある五天竺。盛衰記「物相者、沿岸の五天宮」

ことぶれ 五天竺 名 ごてんぶらう(五天竺)の略。釋迦如來誕生令「書は五天竺の仰主、令蕃記の内にして、月輪・宝蓮にかしづかれ給ひし身の」

ことぶれ 琴線 名 しつくひも強りたもの上れ。

ことぶれ 琴線 名 ことぶれ

天はせ給ふ。許登能加多理非登(ヨロシ)も、許登能加多理非登(ヨロシ)も、ことをは」同「流光る日のみこ」許登能加多理非登(ヨロシ)も、ことをは」

ことのきこえ 事聞 評判。取り沙汰。紫式部「あづかるより、はまきりたる人を認びてかたらひ侍りしに、ことの聞えありて」

ことのこころ 事心 ❶事の意味。趣意。源氏物語「事の上手どものとりどりに書けるに、延喜の御手づから、事の心かかせ給へる」同「五「源少納言さぶらひ給はば、前面して、ことの心と申さん」❷内情。事態。事情。源氏物語「心柴」ことのこころを問ひ、我が志あるやうなといひけるほどに」蜻蛉記「十六「事の心を仰せ合はせられ」

ことのきはま 事際 事のありさま。様況。狀態。枕「若かう人人は、さもえ書くまじきことのきはまにやとぞおぼゆる」砂石集「事のきはまを見参らせ候に」

ことのすぢ 事筋 事の次第。事情。蜻蛉日記「つれづれのなかめの内にそぞろごとのすぢこそをかしかりけれ」

ことのたとへ 事譬 たとへごと。譬喩。狂言「法師「見れかやことのたとへにも、盗人に逢ひといふ事は、かかる事をや申すらん」

ことのたより 事便 ❶何くれの事につきての便宜。源氏物語「ことのたより聞はせずて、はべりかかりりみさせ給ふほどに、よろづの人ぞほひすみ住す」❷物事のついで。何故のついで。たよりの言ふついで。源氏物語「ことのたよりに、人の問ふを聞けば」砂石集「石清水の山里を、事の様ありて過え侍りしに」

ことのついで 事序 源氏に同じ。後撰集「事の日、ことのついでありてよめる」

ことのはじめ 事初 物事の最初。さいさき。源氏物語「ことのはじめに、むつかしく思し」蜻蛉「ことのはじめに、つかしく思ひ」

ことのもと 事本 事の起因。神代紀「今世人、夜忌二片之火、又夜忌憚(ハバカリ)此非樂(ヨロシ)也」

ことのゆゑ 事故 事のさまは、り。古語「高砂「わがもとの君にとりては、言之故(ユエ)もなくありこそと」

ことのよし 事由 事のわけ。理由。崇神紀「後二年、数災之所由(ユエ)也」手津保物語「ことのよしを委しく」同「ひ給ふ」枕「それを聞してきかさらんものは、ことのよしを申せなど、いひきかせて」

ことのわづらひ 事煩 何くれの事につき、都合あしきこと。物事の面倒。源氏物語「わづらひあり。早う西殿に渡らせ給ひれ」

ことふる 事蓋 事柄ふるめかし。物ふりたり。新新ならず。徒然草「いひつづくれば、昔源氏物語、枕草紙などに、ことふりにたれど」

ことむなし 事無 何もなし。事もなし。宇鏡集「敏明記「汝有二何事一、答云無(ヨロシ)也」

こともあらず こととしいふべくもあらず。ことにもあらず。取るに足らず。著聞「ことにもあらぬ小冠と雙六を打ちけるほどに」

ことめおろか 事愚 おはよその事。なみ大抵。いふもおろか。千載「秋の田に紅葉散りはるる山里を、こともおろかに思ひけるかな」行宗集「身のうらたびに思みもせめ」

ことめなし ❶何事もなし。無事なり。高「事毛無(ヨロシ)」ありこしものを老いなみに、かかる憂にも我れはあへるかも」國姫記「事もなきに申侍を著し」❷非難すべき點なし。無難なり。宇津保物語「おやしくめでたき人かな、心耐げなるすまひするかなと見給ふに、うら歩みくるうるうしうてこともなく」源「末「手つき・口つき皆たとたとしからず、見聞きわたり侍りき。見る目もことともなく侍りしかば」❸これと取り立ていふほどの事もなし。平凡なり。著聞「こともなき女房のありけるが」國「わけもなし。難事ならず。

ことやすし 事易 事のさまたやすし。手がるなり。容易なり。平凡なり。「夫木「淡ましく軒ばにかかるさざがにの、ものもことやすき家づくりかな」

ことゆく 事行 事とのぶ。事滑りなく進行す。折合ひ併く。竹取「ことゆかぬものゆゑ、大納言をそしりあひたり」源「思ふことなきだに聞きすぐし難けなるに、ましてわりなき御心まどひどもに、中中ことゆゆかぬにや」著聞「相傳の所領の候を人に推し取られて候を、御こし候へども、身の厄弱ふぶにより、事ゆかず候」同「五「ひて、ことゆきあたきにより」

ことよし 事宜 事のさまよし。ことよろし。著聞「只二人向かひて、其のけしき殊に事よく、心ゆきたるけしきなり」源六帖「人をわく心とは見じ、大空の月のきらめきことよけれども」

ことよろし 事宜 ❶事にきしつかへなし。宇治拾遺「初めの法師も、ことよろしく行宗集「身のうらたびに、事もおろかにおろかにぞ、花見のうらたびに思みもせめ」

ことわりなし ❶何事もなし。無事なり。高「事毛無(ヨロシ)」ありこしものを老いなみに、かかる憂にも我れはあへるかも」國姫記「事もなきに申侍を著し」❷非難すべき點なし。無難なり。宇津保物語「おやしくめでたき人かな、心耐げなるすまひするかなと見給ふに、うら歩みくるうるうしうてこともなく」源「末「手つき・口つき皆たとたとしからず、見聞きわたり侍りき。見る目もことともなく侍りしかば」❸これと取り立ていふほどの事もなし。平凡なり。著聞「こともなき女房のありけるが」國「わけもなし。難事ならず。

ことをきく 聞事 ❶事の次第を聞く。事情を聞く。源氏物語「ことをきくに、ものもおぼえず」❷事の次第。事情。

ことをこそ 切事 こときる(事切ル)に同じ。無名抄「貫之が劣り侍るか、ことをきり給ふべきなりとせめられければ」

ことをこのむ 好事 事起こらんことを望む。物ずきなり。

ことをわけていふ すじを立てていふ。細說す。

(諺)事ある時は佛の足を觸く 苦しい時の神だのみに同じ。くるし(苦)の緣を見よ。後拾遺「恋四「頼朝」

(諺)事がな笛吹かん ❶事があれかし、笛を吹き鳴し立てん。事起これかし、夫れに乘じて事を行はん。手ぐすね引いて待ち構ふる意にいふ。盛衰記十八「北面の者共は無きか、急ぎそくび奪り給へと仰せあり。さきだきだに、事がな笛吹かんと思ひける北面の下臈共、我れも我れもと走り向かひける中に」❷事に琴をかけて、琴あれば笛を吹かんにも用ふ。武道傳來記「陸奥國は事がな笛吹かんと、御乘馬をとしらく」

(諺)事が延びれば屠蘇がつく 物事遅延すれば、其の間に種種の故障など生じ來たる。醍醐寺「事が延びれば屠蘇が呼のこと」の外に事は出れば」❷可なり。相應なり。十訓「此の度の令の前を、ことようしきは、いはず、こと(ことに)ようしき人の中にも」

ことをかく 缺事 ❶ことかく(事缺)に同じ。太平記「狂言綺語今晩欲かに答を得させらるるが、事には、つたと事をかかせられた」❷他にも欲するべきことを多かに、かかることにことをかいて」

ことをきる 切事 こときる(事切ル)に同じ。無名抄「貫之が劣り侍るか、ことをきり給ふべきなりとせめられけれは」

ことをこのむ 好事 事起こらんことを望む。物ずきなり。

ことをわけていふ すじを立てていふ。細說す。

(諺)事ある時は佛の足を觸く 苦しい時の神だのみに同じ。くるし(苦)の緣を見よ。後拾遺「恋四「頼朝」

(諺)事がな笛吹かん ❶事があれかし、笛を吹き鳴し立てん。事起これかし、夫れに乘じて事を行はん。手ぐすね引いて待ち構ふる意にいふ。盛衰記十八「北面の者共は無きか、急ぎそくび奪り給へと仰せあり。さきだきだに、事がな笛吹かんと思ひける北面の下臈共、我れも我れもと走り向かひける中に」❷事に琴をかけて、琴あれば笛を吹かんにも用ふ。武道傳來記「陸奥國は事がな笛吹かんと、御乘馬をとしらく」

(諺)事は言ひなし 物事は言ひなしやうにて、いかやうにも同じゆ。

(諺)事は時節 何事にも時機あること。

(諺)事は易きに在れと是れを難きに求む 事の平易なるをば、却つてむづかしきものとして考へ求む。狂言「綺語は通きにあれと是れを遠きに求め、事は易きに在れと是れを難きに求む」毛子「遊花「通而求「諸遠「事在「易而求「諸難」

(諺)事を成すは運・根・緣 事業をなすには、「天運と根緣と就根との三つを必要とす。運就なる者は知つて執念深くて事を成し遂ぐること。

ことば 言 (名) ❶ことば。もものいひ。話。言語。記「許登(ヨロシ)をこそ、すげ原と、いはめ」神代紀「陰神乃先唱曰「憙哉人之妹(ヨロシ)」其已先事」源「事を悲しみぬにのりは先受(ヨロシ)にて、ことばなくては心のをさうにのりて悲しも」同「人事の許登(ヨロシ)は稀少にして、ものは、にしなのいしるの手ごこの許登(ヨロシ)な絶えそそれ」古今「いで人はことのみぞとき、月草のうつし心はをことにして」❷言の葉にかけていふこと。ことに出づること。いふこと。高「ことばにそやすき、少なくしも妹に恋ひつつすべなくなくに」同「問歌「ことばといへば許登(ヨロシ)にそやすき、すべもなく苦しき波もこころにまさめやも」

ことばふ 言葉をおろおろ延ふ義にて、ほのかにいひかはす。花鳥「一說、ことばふは言葉をおろおろ延ふ義にて、ほのかにいひかはす。花鳥「一說、ことばふは言葉を、心と連ふ 事が思ふやうにならず。物事の中にある人、何きも申しきも、心と相違ふものなり。うるさ木節かからんと思へども風やまず、子孝ぜんと思へども親またず」

(諺)事は言ひなし 物事は言ひなしやうにて、いかやうにも同じゆ。

(諺)事は時節 何事にも時機あること。

(諺)事は易きに在れと是れを難きに求む 事の平易なるをば、却つてむづかしきものとして考へ求む。狂言「綺語は通きにあれと是れを遠きに求め、事は易きに在れと是れを難きに求む」毛子「遊花「通而求「諸遠「事在「易而求「諸難」

(諺)事を成すは運・根・緣 事業をなすには、「天運と根緣と就根との三つを必要とす。運就なる者は知つて執念深くて事を成し遂ぐること。

ことば 言 (名) ❶ことば。もものいひ。話。言語。記「許登(ヨロシ)をこそ、すげ原と、いはめ」神代紀「陰神乃先唱曰「憙哉人之妹(ヨロシ)」其已先事」源「事を悲しみぬにのりは先受(ヨロシ)にて、ことばなくては心のをさうにのりて悲しも」同「人事の許登(ヨロシ)は稀少にして、ものは、にしなのいしるの手ごこの許登(ヨロシ)な絶えそそれ」古今「いで人はことのみぞとき、月草のうつし心はをことにして」❷言の葉にかけていふこと。ことに出づること。いふこと。高「ことばにそやすき、少なくしも妹に恋ひつつすべなくなくに」同「問歌「ことばといへば許登(ヨロシ)にそやすき、すべもなく苦しき波もこころにまさめやも」

面に紙を張り直して厚き唐(カラ)の国のこと・和琴・箏(ソウ)の琴・大和琴・笛・琴・人琴琴などと種類甚だ多し。古くは記録にも「いふ」、今は専ら十三絃のもの、即ち就琴琴の帝。なほ各條を見よ。記「ものから」をしほどに弱き、しが強り許登(コト)に逆り」皇極紀「言問はぬ木にもあり」と、我がせこがた「言問ひのみ豆腐(ヒ)つちに置かめやも」字津保物語「ことをひき、文を頭して」同上「うく琵琶のおんこと」同「博雅うくの御琴」「琴の御琴にきりの御琴にきりの御琴」枕「むみやうといふびはの御ことと」梅枝「月のあかきに、人の許にいきて門を叩くに、年に来りながら琵琶を弾くと面きのなから、つひに開ければ、つとめて、春の夜の月に調べしことの音の、訪れを知れる人、でなかりし」三琴を弾くこと。又、其の道。琴曲。字津保物語「ただ琴をならはしてあり、ふるほどに」源氏物語「琴を弾くこと」平家「琴、琴、琴、

し。歴史遺詩「楽府鼓吹、承聞、孤燈殿」画

こ-とう 〜孤燈 (英 Arc lamp) (名) こくわらやでんとう(孤光電燈)に同じ。

こ-とう 〜古藤 (名) 古木の藤。陳後主詩「雅殘枯樹影、零落古藤陰」

こ-とう 〜孤桐 (名) ただ一本の桐の樹。周五経之旅「龍門之下孤桐」

こ-とう 〜古桐 (名) ふるき桐の木。古木のきり。

こ-とう 〜胡桐 (名) 【植】梧桐科、やまもならし属の落葉喬木。幹の高さ数丈、樹皮灰色なり。新葉は樹脂に富む。葉は平滑、廣卵形、濃緑色、光澤ありて、葉裏は淡緑色にて、鋸頭又は鋭尖頭、葉脚は圓形又は楔形、鋸緑鋸歯を有す。花は單性、雌雄異株、葉腋花序に排列し、春季に開く。我が蜂窩、各地の山野・水流に近き地に自生す。

こ-とう 小胴 (名) とうみ(小鼓)に同じ。

こ-とう 〜古洞 (名) ふるきほらあな。

こ-とう 〜古銅 (名) 1古代の銅。古代の銅。下學集「古銅薬瓶」 2こせん(古錢)に同じ。吹塵錄「古銅直錢、近年諸國共錢、底差支候由、古銅直錢高直に相成、銅錢釣合不一致故と相聞候、銅錢・小錢共、夫夫然の相掛に任せ、壹枚に付相應之歩歩、猶可申候」

こ-とう 〜鼓動 心臓などの血液、激しくはたらきて鳴くさまにいふ語。

ご-とう 〜御燈 (名) 1神佛に供する燈火の敬語。みあかしの前などにともす燈火の敬語。みあかし。2年中行事、陰暦三月三日「天皇が北斗に祭の月ちらるる燈。西宮記「三月三日御燈」 中略 「御燈」祭畢、抄「三月三日、九月三日」之下、これは天子の北斗に燈明を

こ-とう 〜孤燈 (英 Arc lamp) (名) こくわらやでんとう(孤光電燈)に同じ。

こ-とう 〜古藤 (名) 古木の藤。陳後主詩「雅殘枯樹影、零落古藤陰」

こ-とう 〜孤桐 (名) ただ一本の桐の樹。周五経之旅「龍門之下孤桐」

こ-とう 〜古桐 (名) ふるき桐の木。古木のきり。

こ-とう 〜胡桐 (名) 【植】梧桐科、やまもならし属の落葉喬木。幹の高さ数丈、樹皮灰色なり。新葉は樹脂に富む。葉は平滑、廣卵形、濃緑色、光澤ありて、葉裏は淡緑色にて、鋸頭又は鋭尖頭、葉脚は圓形又は楔形、鋸緑鋸歯を有す。花は單性、雌雄異株、葉腋花序に排列し、春季に開く。我が蜂窩、各地の山野・水流に近き地に自生す。

こ-とう 小胴 (名) とうみ(小鼓)に同じ。

こ-とう 〜古洞 (名) ふるきほらあな。

こ-とう 〜古銅 (名) 1古代の銅。古代の銅。下學集「古銅薬瓶」 2こせん(古錢)に同じ。吹塵錄「古銅直錢、近年諸國共錢、底差支候由、古銅直錢高直に相成、銅錢釣合不一致故と相聞候、銅錢・小錢共、夫夫然の相掛に任せ、壹枚に付相應之歩歩、猶可申候」

こ-とう 〜鼓動 心臓などの血液、激しくはたらきて鳴くさまにいふ語。

ご-とう 〜御燈 (名) 1神佛に供する燈火の敬語。みあかし。2年中行事、陰暦三月三日「天皇が北斗に祭の月ちらるる燈。西宮記「三月三日御燈」 中略 「御燈」祭畢、抄「三月三日、九月三日」之下、これは天子の北斗に燈明を

こ-とう 〜胡桐 (名) 【植】梧桐科、やまもならし属の落葉喬木。幹の高さ数丈、樹皮灰色なり。新葉は樹脂に富む。葉は平滑、廣卵形、濃緑色、光澤ありて、葉裏は淡緑色にて、鋸頭又は鋭尖頭、葉脚は圓形又は楔形、鋸緑鋸歯を有す。花は單性、雌雄異株、葉腋花序に排列し、春季に開く。我が蜂窩、各地の山野・水流に近き地に自生す。

こ-とう 小胴 (名) とうみ(小鼓)に同じ。

こ-とう 〜古洞 (名) ふるきほらあな。

こ-とう 〜古銅 (名) 1古代の銅。古代の銅。下學集「古銅薬瓶」 2こせん(古錢)に同じ。吹塵錄「古銅直錢、近年諸國共錢、底差支候由、古銅直錢高直に相成、銅錢釣合不一致故と相聞候、銅錢・小錢共、夫夫然の相掛に任せ、壹枚に付相應之歩歩、猶可申候」

こ-とう 〜鼓動 心臓などの血液、激しくはたらきて鳴くさまにいふ語。

ご-とう 〜御燈 (名) 1神佛に供する燈火の敬語。みあかし。2年中行事、陰暦三月三日「天皇が北斗に祭の月ちらるる燈。西宮記「三月三日御燈」 中略 「御燈」祭畢、抄「三月三日、九月三日」之下、これは天子の北斗に燈明を

こ-とう 〜梧桐 (名) 1、梧桐の異名。朗詠「春風桃李花開日、秋露梧桐葉落時」 2、太平記「梧桐の紅葉を踏み分けたる道もなく」、詩經「梧桐生矣、于彼朝陽」 3五三の桐。持統天皇歌「軍法一「后成りの鋸葉始め、巌嶋・鳳凰・連理の竹、梧桐の旋」

ごとう-かはらけ 五度土器 (名) ごとかはらけ(ごど土器)に同じ。「五度土器中略五度の讃み五島の如し」

こ-とうき 〜古銅器 (名) 支那の古代、青銅にて鑄造せる器物。

ごとう-ぎり 梧桐桐 (名) 【植】あをぎり(梧桐)の異名。

ごとう-くわ 〜梧桐科 (名) 【植】あをぎりくわ(梧桐科)の異名。

ことう-けい 言承 (名) うけたこと。返答。返辞。承諾。著聞集「のがれがたなくて、いふ儘にことうけしぬ」 徒然草「都の人は、ことうけのみよくて實なし」

(諺)言承けよしの鬼見聞かず 口にのみ言受けはすれど、他人の異見を入れて實行せず。

ごとう-けぶり 後藤家彫 彫金工の一流。美濃國の人後藤祐乗、足利義政に仕へ、力銅の装飾・金物の彫刻に長じ、爾後子孫相承して江戸時代に至る。いへばり。

ごとう-しゃく 〜五等爵 (名) 公・侯・伯・子・男の五等に分かちたる爵。五爵。

ごとう-しん 〜五等親 (名) ごとうしん(等親)を見よ。令義解「凡五等親者、父母・養父母・継父母・夫・子孫、一等、伯叔父姑・兄弟姉妹・嫡母・継母・養母・舅・姑・孫・子孫、二等、祖父母・外祖父母・伯母・叔母・姪・甥、三等、高祖父母・曾祖父母・外曾祖父母・伯母・叔母・姪・甥、四等、高祖父母・外高祖父母・伯母・叔母・姪・甥、五等」

ごとう-ぞめ 〜古銅石 (名) 【鑛】粒状又は緻密状の塊をなす鉄鑛。半透明又は不透明、褐色乃至緑色にして硬し。主成分は鐵・苦土・珪酸・鑛類にて、岩石の合分をなして出づ。本邦にては小笠原島に産す。

ご-とうぜん 〜御同前 (名・副) 1おたがひ。ともども。2同様といふ敬語。「いただいたも御同前」

ことう-た 琴歌 (名) 十三絃の筑紫琴に合はせて謡ふ唄歌。組歌と外曲とあり。琴の唱歌。

ごとう-づる 後藤蘭毬 (名) 【植】虎耳草科、八仙花属の落葉木本。蔓性の木本にして、他の樹木に攀縁す。葉は對生、廣卵形、鋸頭、葉脚は圓形又は楔形、鋸緑鋸歯を有す。夏日、白色の花を開く。蒴は、葉腋花序に排列す。我が國、各地の山地に自生す。つるあぢさゐ。つるでまり。ゆきかづら。

ごとう-てん 〜後藤點 (名) 漢文訓讀の法の一種。後藤芝山の創出したる。夫の訓み方、道春點の如く和訓にのみよらず、一書點の如く漢文讀に傾せざるゆゑ、最も正に行はる。

ごとう-ぼり 後藤彫 (名) ごとうけぼり(後藤家彫)に同じ。

ごとう-みそ 〜後藤味噌 (名) 後藤又兵衛の創製したりと云ふ味噌。下文を見よ。「歌舞伎年記「後藤又兵衛が工風を以て中略味噌は樽を蒸して、酒の糟と麹とを合はせてこしらへたり。諸人賞歎して、今の世まで後藤味噌といへること、又兵衛が工風なり」

ごとう-みゃく 〜股動脈 (名) 【醫】大腿の内部にあり、下肢の營養を司る動脈。

ごとう-もの 後藤物 (名) 後藤家彫の細工物。

ごとう-やしょ 〜後藤役所 (名) 【後藤氏の所管なるより云ふ】きんざ(金座)の異稱。

ことう-ら 異浦 (名) 異の浦。他の浦。後拾遺「しほ垂るる袖が身の方はつれなくて、こと浦にそ袖立つなれ」

ことう-ら 琴占 (名) 琴を鳴き鳴響を迎へて、吉凶等を問ひ占なふこと。は琴の代りに琴板を以てし、筋にて鳴きて占ふ。

ことう-がぜ 異浦風 (名) ことの浦風。異の浦風。千三集「あまの住む甲のしるべにたつ烟、ことの浦風に誰れ靡くらん」 新後拾遺「霧まじなこと浦風に行く舟の、片帆ばかりにかかる契りは」

ことう-びと 異浦人 (名) 異浦の人。鶴千載「遠ふらんことと浦人のねさめまで、思ひ知られて鳴く千鳥かな」

ことう-ぶし 言美 (形ク) ことばうるはし。くちぶしくなへよし。「言愛(ことばい)出でて行かば、袋ひきしるけむ雪なふりそね」

ことう-ぶし-げ 言美氣 (副) ことうるはしきやうに。ことうるはしさう。源氏「ことうるはしげなるあたりに取りてあられて」

ことう-ぶし-さ 言美 (名) ことうるはしきこと。ことうるはしさ度合。

こ-とう-れ 〜古同れ (名) むかしの同僚。古僚。盛義記「藤原頼通は古同僚、見知りたるらんとて召されたり」

こ-とう-ぶり 言選 (名) 用語を選擇すること。源氏「文を書けど、おほどかにことえりをし」 同「いみじくことえりをして聞こゆとゆ、いとしるかるべきわざぞ」

こ-とおこし 事起 (名) 事をおこしたること。又、その人。盛衰記「あの鈴持ったる男こそ事起しよ、逃合せすな、射よ、切れ」

こ-とおほ 事多 (名・副) 事多きこと。多事。(事ずくなの對)「御ことおほの中」

こ-とおほす 事課 (自動サ) 物事をいひつづく。命ず。業平記「天皇命(ことおほす)有司」

こ-とおほせごと 異仰言 (名) 別のおほせごと。他の御命令。字津保物語「ことおほせごとは中略身の堪へんに從ひて承らんに」

こ-とおもひ 異思 (名) 他のおもひ。他念。發心集「又ことと思ひせず、一心に念佛をぞ申したりける」

こ-とかき 事書 (名) 1箇條書。一、何何之事として書きつらぬる故にいふ。東鑑、建仁元年正月廿日条「京畿之間可致沙汰條條、被遣御使事書」 同「事書云、一、謀叛殺害事、太平記「事書云、一、謀叛殺害、十七箇條のおんさいを添へ、心を委細の事書、十七箇條書を決断所に押されたりし。是れを見て、其の事書の奥に」 2ことばがき(詞書)に同じ。夫木「此の歌、事書にいはく」 太平記「委細の事書を載せられて、歌集を編ぜらるべしとぞ」

こ-とかた 異方 (名) 異なる方。別の所。枕「ことかたよりて入りて、女房の物もとに寄りて」 同「ことかたよりに中略矢の本に寄りて」 源平盛衰記「ことかたもまたゆかしさに山櫻、同じ一本を眺かにも見ず」

ことかた-いそ 異方磯 (名) 別の方の磯。他方のいそ。拾遺「同百首「石見潟ことかた磯によるる波の、くだけてかへるものと知らずやし」

ことかた-ごと 異方方 (名) ことのはう。ちがひたる方方。相模集「夢ならばことかたごとに書つつ、語りあはせんしるしあらせん」

こ-とかたらふ 言語 (他動ハ四) 言ひかたらはす。かたりあふ。言ひ契る。後撰「ちはやぶる神の御代にかたらひつ、ちはやぶる神の御代にかたらひつ、ちはやぶる神の御代にかたらひつ、

仙臺の方言。【轉】 ❷教所の名。五德を象りたるもの。「とくとくとくと

  type

わりてけり」

ことし 如（助動）■物事を比べて、其のとほりなるをいふ詞。やう。とほり。「蜻蛉をはくたる期等久（ごと）同可邪き蜂に」「かから鹿をそそぐちふが其等久（ごと）」同可（行く水のかくらぬ其等久（ごと）」「吹く風の見えぬが其登久（ごと）」同可「さきくしもあるらむ其登久（ごと）」同可「うらら日さす都の人に告げまくは、見し日の其等久（ごと）ありと告げこそ」宇津保俊蔭「頭の変を見れば鉢の個を立てたるがごとし」「眼を見れば金まりのごとし」「足手を見れば蜘のごとくきちめきて」■物事の一例を挙げていふに用ふる詞。など。平家・祇王「家・祇王・仏御前・時政・宗盛・貴平如きのおとなを召して」「きの者太郎は参りませぬか」

ことし-おひ 今年生（名）今年生ひ出でたるもの。拾遺雑「ことしおひの松はゆゆしき日になりにけり」「幾りの程を思ひこそやれ」「貫之集」「ことしおひのにひくまゆのから衣、千代をかけてぞいはひ初めつる」

ことし-しげ 事繁（名）ことしげし（事繁）の語幹。「多事」ことし（事）の條を見よ。

ことし-ごめ 今年米（名）今年とりたる米。新米。

ことし-だけ 今年竹（名）今年生ひたる竹。若竹。新竹。

ことし-でき 今年出来（名）當年出来たること。又、その物。

ことし-しのび 言忍（名）歌詞を楽ずること。「言忍」は「いさ」には「の」に立たして歌ふ。「みゆ」の上のこむちもしのびの語幹。

ことし-まい 今年米（名）ことしまい（今年米）に同じ。

ことし-わかさ 今年枝（名）ことしできの新らしきもの。「さ」。「枕冊本地」「今年枝・ひね枝・二十年から百年まで」

ことしより 小年寄（名）豊臣時代に置きたる中老の異稱。「天年寄の對」

ことし-ぢり 琴尾（名）琴の後方。ことがみの對。神功紀「琴頭尾（ことがしら）」

ことし-り 事知（名）■よく物事を知りをること。又、其の人。ものしり。■男女間の關係の事などをよく知りをること。又、其の人。わけしり。通人。「一代女」「御肌盛かなる風情、あとにてことしりに尋ねしに、彼れは都のわけある大盡と聞くに」

ことしり-がほ 事知顔（名、形動）よく知りたる如き態度。物知り顔。「何城事を島原蛙合戦「おのおの問なき物知り顔、知り顔に掘原年三霜時過みな出で」

ことし-しる 事知（名）古語。事を知ること。「事を知るし」めすこと。「於天新代（ごと）、於虚事代、王誠（入鹿本）神功紀」「事代主神有之也」

ことし-わたり 今年渡（名）今年新らしく渡来したること。新渡（ごと）。「枕冊本地」「今年渡りの伽羅ではないが、とめて侵卷の一重ね」

ことし-すくな 事少（名、形動）用事の少なきこと。（事おほの對）

ことば-すくな 言少（名、形動）ことばすくな（言葉少）に同じ。源氏「僅かなる寝き入れ、ことすくなるが」同可「ことばすくなにて」「とかくまぎらはしつつ、取り隠し給ひつつ」

ことば-すまひ 異相撲（名）異。他の相撲。「ことば」は「他」。字治拾遺「それにつぎて、ことば相撲も、たゞ酒りに酒らんとするを」

ことば-そばく （名）ざれごとをなすこと。ふざけること。「仁王のことそばく」

ことば-たい 異釣（名）ことば方の釣の餌。字津保「中纏」「ひんがしの釣かけて営住み給ふ。ことばたいとも」

ことば-だい 異臺（名）八寸臺を載する机。

ことば-だいじ 事大事（名、形動）大切なる事件。容易ならざる事件。狂言「べて事大事の事でおりやる程に、必ず必ず、おとまりやれ」

ことば-たかり 言痛（自動）ことばたかり（言痛）に同じ。古へ、東國の方言。「寒話」「かからこうも裾のうちかひあはなくば、れなくのからに許多可利（ごと）」

ことば-たつ 事立（自動）常とかはれることをなす。「記」「故天皇所使之美者、不得盛宮中、言立（ごと）者、足忍阿賀迦邇姫」「續紀」「此食國天下平瑞賜事者、解立（ごと）不在人祇乃意能覆賜事者、乃如今治賜事乃如今治賜来業」「聖武紀」「神所念行国」「珍喬「むつきなれば、ことだつとて、おほみき賜ひけり」

ことば-だつ 事立（自動）前條に同じ。古語「忠などを立つること常人に異なり。「寒話」「大君のくにこそ死なめ、かくりみはせじと許等太豆（ごと）」同可「つかくりるおやのつかさと、許等太豆（ごと）て授け給へる、うみの子のいやつぎつぎに」

ことば-だて 事立（名）ことだつること。ことだてたること。「仁徳紀」「うまく人のたつる虚等太氏（ごと）」「ちさゆゆつる断ゆ間つがむにならべてるかも」「寒話」「世の人のたつる許等太豆（ごと）」

ことば-たばかり 異議（名）異なる計畫。他の工夫。字津保「国譲」「長雨の降れば、ことたばかりもえせず、ものもてこ」

ことば-ばれ-ごと 異戯言（名）他のたはむれ言。ほかのざれごと。宇津保「国譲」「ことたはぶれごとはのたまふとも、このかかる日あそびはうけ給はらじ」

ことば-ばく 故（副）古語。わざと。意に。殊更。允恭紀「或說云、故己性、或故（ごと）語高氏」字鏡「故故故起」「故」は「故」。

ことば-ぶき 言霊（名）古來わが國の言語の妙用を尊びていふ語。言に一種靈妙の活力ありといふこと。大鏡「一記ひつる月るることだにならば、百歳の後も盛きせぬ月るをこそ見めし」保元物語「書き集めてけり。春・夏・秋・冬四季なり。よろづ世照らす日の本の國、ことだまを保つにかなへり」「清輔集」「答神祇」「たちられの神の賜ひしことだまは、千代までも守れ年も限らずし」

ことだま-の-さきはふ-くに 言霊幸國 言霊の妙用によりて、幸福の出でて來る國。我が日本國の一稱。寒「そらみつやまとの國は、すべ神のいつくしき國、言霊佐岐佐布國（ごと）」「語りつぎいひつがひけり」「續後紀」「日の本の後の國は言玉乃宮國（ごと）」「古語に傳へ來たれる」

ことだま-のたすくる-くに 言霊助國 前條に同じ。「高しき島のやまとの國は、言霊之所佐國（ごと）」「ますきくあり」

ことち （名）【蛾】へぬき（蛾）の異名。

ことち 琴柱（名）■琴の胴の上に立てて、絃を支へしむる具。ぢ。和名「柱（ことち）」「千載集」「夜半の琴ひくに、ことちの走りて矢やたるを」■ことちの人（琴柱）の略。「宇治拾遺」「ことちの人、琴ひは沼なひはひ」「ことちなどに人」

  type

ことち-に-おつる-かりがね 琴柱落雁 琴柱（ことち）を立てて調べたるさまを、列をなせる雁の落ちたるに見なして、いふ語。「浦島年代記」「琴柱は浪の緒すげて風や吹くらん」琴柱に落つる雁金の」

（諺）琴柱に膠さす 次條に同じ。「紫式部日記」「昔はよき若うと、今は琴柱に膠さすやうにてこそ里居して侍るなれ」

（諺）琴柱に膠して琴を調ふ 物事に拘泥して少しも變通の才なし。「運用すること」を知らず。「文子」「一事之法鏡、以非一傳代之俗、膠柱調瑟」「楊子法言」「均以往聖人法、治將來、猶膠柱而調瑟」

（諺）琴柱に膠して瑟を鼓す 前條に同じ。「史記」「王以名使趙、若膠柱而鼓瑟耳、趙王不知合變也」

（諺）琴柱に膠す 前條に同じ。

ことち （名）【卵】はうらら（卵）の異名。

ことち-さきやう 琴柱枯梗（名）紋所の名。

ことち-ぎり 琴柱桐（名）紋所の名。

ことち-くわとう 琴柱火燈（名）【建築】火燈の一種。琴柱の形に似たるもの。

ことち-ぞう （名）【楠】唇形科、鼠尾草（ぞうたち）屬の多年生草本。莖の高さ二尺餘、方莖なり。葉は對生、鋸歯、卵頭、不整の鋸歯を有し、全葉形、稍琴柱に似たり。莖の外は培葉稍稍を具ふ。上部の鋸葉腋に黄色の唇形花を開く。花の山地に自生し、おき葉を食用とす。食が國、各地の山地に自生し、おき葉を食用とす。

ことち-つのまた （名）【植】紅色藻類、底角菜（ジョン）屬の海藻。全長二寸乃至四五寸に達して、「扁平、幅一二分、叢回二又狀に分岐す。莖部紫色を帯び、乾燥すれば軟骨様となる。食が國、外海に漂ずる荒海に多く自生す。肥料に用ふ。

ことち-つめ 琴柱爪（名）紋所の名。

ことち-で-ふ 琴柱蝶（名）紋所の名。

ことち-ふせん 琴柱浮線（名）紋所の名。

ことち-ぼう 琴柱棒（名）〔尖端の形、琴柱を逆にしたるに似たればいふ〕さすまた（刺股）の異名。ことち。

ことち-まる 琴柱丸（名）紋所の名。

ことづ 言出（自動）ことに出づ。察言す。いひいづ。寒「事出（ごと）しは誰がことなるか、を山田の苗代水の中よどにしてし」「拾遺」「九の重ねの其の中に、いつきすえしもことでしも、誰れならなくに」

ことづいで 仕事庁（名、副）事をなすついで。平家「のゆかり、治中・治外に忍び居ん、事次でに根を絶つべし」

ことづかさ 異司（名）他の所司。將なし給ひつ。「ことづかさ」とも皆なり。「宇津保俊蔭」「幸相には御心と頭中他ぬし」

ことづかり-もの 託物（名）人よりことづけられたる物。依託せられたるもの。「狂言「鬼瓦」「あれは人のことづかり物で御座る」

ことづかる 託（他動）ことづけられる。託せられる。「寒話」「人のをばことづかりまして御ざりましたし」

ことづく （自動）ことづくとも書く。

ことづく 事附 託（自動）ことづく。ことよす。託す。「源氏」「北の夜の同書「下人のまかり出づるをも見咎め問ひ侍れば、ことづくる事なくて、笑ひ給ひ」「なやましさにことづけさせ給ひて、」「拾遺」「何事に附けてかこれを敷さんと思ふに、事づくべきことなし」

ことづく 言附（他動）人などに託して物事をいひやる。ことづけをなす。傳言す。託す。「寒方集」「おほつかな我がことづけし郊公、はやみの里をいかに鳴くらん」「夫木」「ことづけん人もなければみ山なる、薬守の神を思ひこそやれ」「寒」「寒家」「玉葉」「寒」「一同を書きて中庸に是れをことづけ」

ことづけ-やる 言附遣 ことづけてやる。「源行」「兵部卿宮は、今はことづけやり給ふべきことにはりもなきを」「寒」「二年實國卿家歌合」「行く事にことづけやらん、いつしかと待つ人あり」「人に告げなん」

ごと-づく （自動）ことことと書す。

ことづけ 言告（名）ことづけて（言傳に同じ。「源歩色葉」「言告」

ことづけ 事託（名）ことづくること。かこつけ。「源」「末」「さがにのふるまひしるきゆ事だにひるまず、せといふがあやなさ、いかなることづけぞや」同「寒」「とあるを、例のことづけと見給ふものから」

ことづけ 言附（名）ことづくること。又、其の言、傳言。寄託。枕「職くなん參る、ことづけやある、いつか參るなどのたまふ」「源」「若つきづきしきことづけどもを作り出でて」

ことづけ-がほ 託顔（名）ことづくる如き顔つき。かこつけ顔。「源」「若」「打ちにことづけ顔なるを」

ことづける 言附（他動）ことづく（言附）の口語。

ことづたく 言傳（名）夫能に同じ。「枕冊」「鳥を掛けて飛ぶとはまことや鳥」「尼にも羽子にもことづたへせん」

ことづて 言傳（名）〔ことづたへ（言傳）の約〕■ことづけ（言附）に同じ。古今「春下」「山がつの垣ほにはへる青つづら、人はくれどもことづてもなし」後撰「春中」「櫻花主を忘れぬものならば、吹きこむ風にことづてはせよ」宇津保「俊蔭」「いとさびあなることづてもしてしがな」「傳記」「鬱少」■人の話によりて傳へ聞くこと。傳聞。

ことづて-じる 言傳汁（名）〔よくいひ（言説）やうの義〕ことろろじる（寒汁）の異名。下文を見よ。「醍醐美」「ことろろ汁」の田でたるを、「庭訓」に古人あり「今日のことづて汁は、いつにまさり、」「しは出汁寒たるなどいひぼむ。これはもつらしき言葉やと、其の作法を問ふ。されば、此の汁にては、いかほども飯が進む故、いひやるとの後に、ことづて汁といふなりん」

ことづて-づける 言傳（他動）ことづてをなす。古今「春下」「やよや待て山時鳥ことづてん、我れ世の中に住みわびぬとよ」「新古今」「春下」「北く行くかりの翅にことづてよ、雲のうはがきかきたえずして」「風雅」「上」「玉葉」もことづてて「まし春の雁、我がふる里に聞くと思はば」

ことづて-やる 言傳遣 ことづてやる。「寒」「甲」「寒」「宇治拾遺」「郭公」「ことづてやず」古今「春下」「寒」「根」「ことし山にしし吹く風を人にもがもやことづてやらん」

ことづま 異夫（名）ことなりたる

  type

夫。おだしをとこ。

ことづま 異妻（名）ことなりたる妻。新六帖「まくれなるのこぞめの衣あくがれて、まことことづまに何うつるらん」

ことづま 琴爪（名）夫婦に同じ。

ことづめ 琴爪（名）象牙などにて爪の形に造り琴をひくとき、親指と中指と食指との指先にはむる具。古事談「相國御前、琵琶の撥のありけるを一ふき耳中に入れて、琴の甲に到りて、皮をむきて」

ことて 言出（名）ことづること。言に出づること。こといで。東遊歌「我がせせこが今朝の古止天（ヲ）は」赤染衛門集「祥遊き此の事をきゝして古へに、誰れとことでしてまづ契りけん」

ことば （名）古語。ことばに同じ。明かるる時のしるし。記「一説、ことは言、とは「たはことことば」などいへるとにて、歌をいへるなるべし」萬葉「玉桙の道に出でて立ちて往く、吾れは君が手脚（ヲ）を負ひてしゆかむ」

ことば 事（副）上の事と特にとり立てて。とりわけて。わざとがましく。家持集「秋風はことことに吹き来ぬ、白妙の我がとき衣誰か人はなし」源氏物語「取りたててはかばかしき御うしろみなければ、ことことあるある時は、鏡よりどころなく心細げなり」同野分「ことことに訓れ訓れしきにこそあめれ」

ことば （名）古へ妻を離別する時の一の方式。神代紀「絶妻之誓、此云二許等度（ヲ）」

ことどもをわたす 妻に離別の辭を言ひ渡す。記中「各對立而、於二高天原一事戸渡之時」

ことばがめ 言咎（名）ことばとがめ。語問。萬「人の見て言咎（ヲ）せぬ夢に我れ、こよひ至らむ宿をすなゆめ」同「人の見て言咎（ヲ）せぬいめにだに、恋に見えこそ我が戀やまむ」

ことばき 異時（名）異なる時。他の時。神代紀「旦明時（ヲ）異玉姫從容語曰」枕草子「なほ知らず、ことよひは「年をへて花のたよりにこととはば、いとどあだなる名をや立ちなん」」玉葉「秋の風のたよりにつけてこととはば、うらはの空にや人の思はん」

ことばひすつ 言問捨（名）こととひたる儘に捨ておく。續古今「浪の寄る曙の浮雲のさ夜枕、こととひすてて行くや千島かな」

ことばわたる 言問渡（名）あまれく言問ふ。續後撰「夏我れぞまづ言とひわたるほとゝぎす、人づてにだになほ待たれつつ」

ことばほし 事遠（形ク）遠し。とほどほし。新勅撰「よもぎの門にさしこもり、道の芝草生ひはてて、春の光はことば遠く」玉葉「あはれにもことば遠くのみなり行くよ、人のうらければ我れも恨みて」

ことめ （名）魚の鱗（ヒ）の名所。うを（魚）を見よ。

ことり 言吃（名）言語をなめらかに續けて發し得ざること。又、其の人。どもり。和名「吃、巨訖反、言語難也」枕「少し、ことばとりする人の、いみじうつくろひ、めでたしと聞かせんと思ひければ」源氏「ことばとりとそ、大ぎこゝろ潔りたる」嘲吃・訥・呟・喃・喋・喇・呟・喃・喋・喇・呟・喃・喋・喇

霞を撰び、露を選しむ心・言は多く、さまざまになりにけり」大和物語「文は世に見給はに」、ただことばにて申せよ」■言語を文字にあらはしたるもの。竹取「うち泣きて書くことは」源氏「御返り申書召し出でて、こと葉などの給ひて書かせ給ふ」■いひ方。口まね。ものいひ。語氣。神代紀下「其例(ソノ)氣慨」風雅「人鳥などの語稱にて、節以外の所の稱。四ふし、節附のなきところ。■いひざま。たとへ言。狂言「言葉畫」を結んでなりとも、しるしを哀られねばなりまじぬ。夫れは安い事るしを哀られねば、見れ是れ、歌やるる。歌を結んでといらたは同じことさる。何なり歌とも印に成る物をおこさせられい」同引用「それは言葉でこそ。身についた物をおこさしし心」

ことば　あまし　言葉甘　物言ひ厳しからず。おとなしき言葉を使ふ。浮太閤狂言「此の回花子が方へ使にやること思うて、言葉甘う云うておけば、万事がない」

ことば　おほし　言葉多　口かず多し。多辯なり。源氏「ことばおほかる人にて、つねづねしういひつづくれど」

ことば　すすし　言葉涼　言葉に関りなし。物いひ潔し。百合若大臣「野守鏡」「天機を安んじ給らんは百合若が方寸。胸の間に殺こ同涼しく奏せらる」吉野忠信「平泉覺」な事は、義はず、ただお涼り候へと、言葉すすしく座にけるる」

ことば　なし　言葉無　少しも出づる言葉なし。一言も無し。新撰字鏡「我が意り思ひ知られて、言葉なき心地なり」三河白道「文を入れて返事きましたて、それ方なしと、遠うた時言はがなし」

ことば　ぬる　言葉濃　言ひつづ

れず。口にて述べ難し。

ことば　に　あまる　言葉余有　ことばにおだやかならぬ節あり。言詞に非有あり。

ことば　に　ぎや　がある　言葉賑有　詞に関てたる意あり。言葉打ちとけず。伊賀越道中雙六「お師匠様の詞に、賑力があるらうかと存じられ、頼まれるに力がない」

ことば　に　しなを　つく　言葉につや　をつく。言葉を飾る。日本武尊吾妻鑑「三はつと言葉に品つけて」

ことば　に　とがある　言葉疵　ことばにかどがあるに同じ。賀古教信七墓廻「詞に尖る風先非、家中能をそ耳り加ぬる」

ことば　に　はな　が　さく　言葉花咲　ことば争ひより喧嘩になる。

ことば　に　はなみ　をまず　言葉愛花　貴花も貴もある詞を用ふ。曾我物語「御詞に花賞を交ぜ、面白をかしき御求ひし」

ことば　に　はな　をそへず　言葉咲花　言語を飾る。

ことば　に　はり　をさす　ことばを鍛　くしめぬやうにす。井筒業平河内通「返事遅くしは有常殿と、同に御をさいたぞや」

ことば　に　ふる　舊言葉　口のはにかく。ことばに出だす。袋草紙「まがまにかしくあくい非にもあらずと、ことばにもふれさせ給はねば」

ことば　の　あや　言葉綾　言葉の巧みなることりなし。

ことば　の　いつみ　言葉泉　人のことばの言の限りなきを、泉のたえず湧き出づるに譬へいふ語。袋草紙「詞のいづみ　ふるもしきりなるはしるしのしるし」又は

ことば——ことば

を見よ。源氏草紙「なけのことのはの節」

ことの　は　の　はな　言葉花　ことばのはなを(言葉花)に同じ。ことば(言葉)の綾を見よ。栗田口歌撰「何とさてやかは　もなまし、言の葉の花も思ひの色し見えねば」

ことの　は　の　みち　言葉道　和歌の學問。歌道。

ことの　は　の　みどり　言葉綠　言の葉ち歌の道の盛りにて哀くさるを、常磐木の緑に譬へていふ語。蜻蛉日記「治三年御代の榮花をなししも、この花の句ひ、又は問へる言の葉の緑なにはのことかは法なられる」

ことの　は　かぜ　言葉風　(名)　和歌の風物。夫木「和歌の油やことのは風にたつ波を、心にかけて教るとを知れ」

ことの　は　ぐさ　言葉種　(名)　物いふたねぬ。ことぐさ。いひぐさ。新撰古今「よしゝを君しわかずは、書きたむる言中の葉ぐさのかひやなからん」蜻蛉「言の言葉草の蔭の玉、心をみがく種にもと」

ことの　ばの　小殿原　(名)　■若き殿たち。中務業經「返答・小姓・小殿原」■こまめ(虫)の異稱。數の多きを以て稱すといふ。

ことの　く　(名)　(言ひにて、なひは音のなひなどのひに同じ)古語。多くの人の種種にいひさわぐことなりと。哲うつせみのやそ詐登乃敵(ヒ)は、本草和漢寓言「げく、とも、爭ひかねてあをことなすなし」

ことの　ほか　殊外　(名・副)　■思ひの外。案外。意外。存外。字治拾遺下「見くらべ、ものせ給ふに、うつくしげに、のてぬにけだかきまの「いとことの外にもあらぬに」、「さきに」源氏「胡蝶」■あまりて。多くの。力少し手ぬりて色づく高らのぼらみ、「さきに」源氏「胡蝶」■あまりて。多くの。

ことの　ね　琴音　琴の音。琴の音。

ことの　ねの　みち　琴音道　琴の音の道。琴の音の道。

ことの　ねの　ゆかり　琴音縁　琴の音の縁。琴の音の縁。

ことの　ねの　をし　琴音惜　琴の音の惜しい。琴の音の惜しい。

ことの　ねの　をし　琴音惜　(名)　琴の音の惜しい。琴の音の惜しい。

ことの　ねの　をし　琴音緒　(名)　琴の音の緒。琴の音の緒。

ことの　ねの　をし　琴緒　(名)　琴にはりて鳴らす絃。いと。和名「絃管」新千載「今はとて引きわかれぬることのねに、涙の露のかかるころかな」

(琴)琴の　緒　絶ゆ　「文選」にて、嫁子周死して伯牙の琴の絃を斷ちし故事に基づく」琴を引かんやうになる。知己を失ふことにいふ。源氏「ことのをたえにし後とより、君の御おもひは遊びの名殘にて給はずなん成りにて侍るめる」

(琴)琴の　緒を　断つ　前條に同じ。蜻蛉日記「こなき人は音づれもせで、琴のをを、たちし月日を、なほりきにけるる」

ことば　は　事　(副)　とてもものことには。同じことならば。古今「かきくらしこ、とは降らなん水雨に、ぬれぎぬきせて君をとどめむ」赤染衛門集「沖中の水はいとどは、ぬるからん、ことはまた波を人の波あかし」和泉式部集「ことは蘆蟹らでつつ千載をすぐさなん、松のときはに来らん」見るべく」

ことば　言葉　詞　辭　(名)　■げんぎ言葉で、さいつあれて、「いひし古歌(ヒ)ことを忘れるる」古今「花をめで、鳥を歌ひ、ものを思ふ人、いかなる事、世の中に、いたづらに、ものを思ふ人、いかなる事、世の中に、いたづらに、ものを思ふ人、いかなる事、世の中に、いたづらに

拔むこと。議論を拔むこと。宣れ詞人倉「いやいや討たん討たせじの」同かからかひ云ひのぼり」

ことばがり 事計 (名) 事のはからひ。處置。思慮。萬葉「よキに居て夢ふれば苦し」わぎもこをつぎて相見む計にかも」「せよ」同三「吸へる心いぶせ」事計にかも」よくせ我がせこ」あへる時だに」

ことば-べばり 言葉配 (名) ことばを給るべく配り用ふること。

ことば-ぐみ 言葉組 (名) ことばのくみあはせ。

ことばこ 寒箱 (名) こと(琴)をいふ。

ことば-じち 言葉質 (名) 後の證據にとらへおく人のことば。げんしち言質)。吾吟我集「契りおく阿賀をやなほ言質ん、遠ふ潮けしひの日限りのばすは」雪女五枝羽子板「何がな阿賀にせんと思ひ」

ことば-はじめ 事始 (名) ❶始めて物事に著手すること。蓉隅「ここにて事はじめしたることなれば」おろかならんいとほし」東鑑「公可」敬、建立御願寺並御堂、今日於二北条殿一有二日時定一、事始始め」増鏡「一月廿九日」太平記「合戦の事始始なれば」軍神に祭りて人に見意りさせよ」「戰陣八島「幸ひ今日は吉祥日、修組の事始」❷おことはじめ(御事始)を見よ。

ことば-じり 言葉後 (名) ❶ことばの末。語尾。❷いひそこなひの部分。失言のかど。

ことばじりをとる 執言葉尻 人の失言をとらへて咎む。

ことば-すくな 言葉少 (名・形) 口かずを少なきこと。言葉すくなし。蓉雪。

こと詞すくなにて出でなるは、いとたふと

ことば-ぞこ 言葉質 (名) 【歌】れもて

ことば-あらそひ 言葉爭 (名) ことばたたかひ。言の爭ひ。口論。

ことば-ばえ 事映 (名) 事のはえ。面目。宇津保中興「はじめ物し給ふに、ことばえもなかんめるに」

ことば-えらみ 言葉選 (名) 用語を選擇すること。ことえり。

ことば-がき 詞書 (名) ❶文詞を書くこと。又、其の文詞。❷和歌の小序。はがき。前書。徒然草「古き歌のことばがきに、「枯れたる茅に さしてつかはしける」ともあり」

ことば-かず 言葉數 (名) ❶ことばのかず。語數。❷くちかず(口數)に同じ。

ことば-がたき 言葉敵 (名) はなし相手。

ことば-がへし 言返 (名) 人の言に服從せずして、いひかへすこと。口ごたへ。口返答。

ことば-からかひ (名) ことばにて爭ひ

(諺)**言葉は心の使** 心に思へることは、言葉に現はるること。醒睡笑「ことばは心の使とあり」

(諺)**言葉は立居をあらはす** 言語は其の性行をあらはす。世話燈「言葉は立居をあらはす」

(諺)**言葉は身の文** 言葉は其の人の人品をあらはすものの。

ことば-あつ 言葉當 (名) 一種の遊戯。數人相會し、一人を言ひ當つる役と定めて別所に居らしめ、他の者相議りて、成るべく意味多き言葉を選定したる後、當役のもの其の場に入り來たりて問ふに、「一人づつ其れに關係したる事をいふを、彼れ此れ思ひ合はせて、其れと言ひ當つるもの。當つれば他の人代はり、當たらざれは罰を受く。

ことば-あらそひ 言葉爭 (名) ことばたたかひ。言の爭ひ。口論。

ことば-ばえ 事映 (名) 事のはえ。面目。宇津保中興「はじめ物し給ふに、ことばえもなかんめるに」

ことば-えらみ 言葉選 (名) 用語を選擇すること。ことえり。

ことば-がき 詞書 (名) ❶文詞を書くこと。又、其の文詞。❷和歌の小序。はがき。前書。徒然草「古き歌のことばがきに、「枯れたる茅に さしてつかはしける」ともあり」

ことば-かず 言葉數 (名) ❶ことばのかず。語數。❷くちかず(口數)に同じ。

ことば-がたき 言葉敵 (名) はなし相手。

ことば-がへし 言返 (名) 人の言に服從せずして、いひかへすこと。口ごたへ。口返答。

ことば-からかひ (名) ことばにて爭ひ

(諺)**言葉は心の使** 心に思へることは、言葉に現はるること。醒睡笑「ことばは心の使とあり」

(諺)**言葉は立居をあらはす** 言語は其の性行をあらはす。世話燈「言葉は立居をあらはす」

(諺)**言葉は身の文** 言葉は其の人の人品をあらはすものの。

ことば-あつ 言葉當 (名) 一種の遊戯。數人相會し、一人を言ひ當つる役と定めて別所に居らしめ、他の者相議りて、成るべく意味多き言葉を選定したる後、當役のもの其の場に入り來たりて問ふに、「一人づつ其れに關係したる事をいふを、彼れ此れ思ひ合はせて、其れと言ひ當つるもの。當つれば他の人代はり、當たらざれは罰を受く。

ことば-あらそひ 言葉爭 (名) ことばたたかひ。言の爭ひ。口論。

ことば-ばえ 事映 (名) 事のはえ。面目。宇津保中興「はじめ物し給ふに、ことばえもなかんめるに」

ことば-えらみ 言葉選 (名) 用語を選擇すること。ことえり。

ことば-がき 詞書 (名) ❶文詞を書くこと。又、其の文詞。❷和歌の小序。はがき。前書。徒然草「古き歌のことばがきに、「枯れたる茅に さしてつかはしける」ともあり」

ことば-かず 言葉數 (名) ❶ことばのかず。語數。❷くちかず(口數)に同じ。

ことば-がたき 言葉敵 (名) はなし相手。

ことば-がへし 言返 (名) 人の言に服從せずして、いひかへすこと。口ごたへ。口返答。

ことば-からかひ (名) ことばにて爭ひ

ことば-ぞこ 言葉質 (名) 【歌】れもて

ことば-ぞこ 言葉質 (名) 後の證據にとらへおく人のことば。げんしち言質)。吾吟我集「契りおく阿賀をやなほ言質ん、遠ふ潮けしひの日限りのばすは」雪女五枝羽子板「何がな阿賀にせんと思ひ」

ことば-はじめ 事始 (名) ❶始めて物事に著手すること。蓉隅「ここにて事はじめしたることなれば」おろかならんいとほし」東鑑「公可」敬、建立御願寺並御堂、今日於二北条殿一有二日時定一、事始始め」増鏡「一月廿九日」太平記「合戦の事始始なれば」軍神に祭りて人に見意りさせよ」「戰陣八島「幸ひ今日は吉祥日、修組の事始」❷おことはじめ(御事始)を見よ。

ことば-じり 言葉後 (名) ❶ことばの末。語尾。❷いひそこなひの部分。失言のかど。

ことばじりをとる 執言葉尻 人の失言をとらへて咎む。

ことば-すくな 言葉少 (名・形) 口かずを少なきこと。言葉すくなし。蓉雪。

こと詞すくなにて出でなるは、いとたふと

し」

ことぶく 言祝（他動ヵ）ことほぐ（言祝）卿に同じ。源氏烏帽子折「殿上人、君が御出世を、千代・萬代とことぶきて」

ことぶれ 事觸（名）❶事を廣く布達し知らすること。拾遺三「最初不義の證據無しと、ことぶれや、物言いふ神無月」日本永代藏「雪國は、人饗に、おほ鹿島香取より、祖り出でたる事ぶれでござりや申す」

ごとべい 〜五斗米（名）僅かばかりの米。少しの俸祿。

（諺）**五斗米に腰を折る** 小祿の爲めに浸りに腰を屈めて、人の憐みを乞ふ。否書「陶潛、彭澤令、郡督郵至縣、束帶見之、潛歎曰、吾不能爲五斗米折腰、拳笏向督郵、乃歸印綬、去來」

ごとべらい 〜五斗俵（名）米五斗を入れたる俵。昔は所によりて此の制によれり。

ことほがひ 言祝（名）夫祿の延。

ことほぎ 言祝（名）ことほぐこと。ことほぎ。賀。祝詞式「宮主、宅、言語（ことほぎ）」

ことほぐ 言祝（他動ヵ）ことばにて祝ふ。祝ふ。賀す。ことぶく。

ことまけ 後途負（名）後に負くること。甲陽軍鑑「力あつて、輕薄の侍は、大將の分別過ひ給ひ、後途負けになることをもほむるもののなれば」

ことみたなび 言厚（名）【御】あうち（語源）の異名。

ことみ 事見（名）物見。見物。茶筅

月「事さるべき折節のをかしき事見には、宮へ必ず參り給ひけるを」

ことみかど 異御門（名）他の御門。枕「なにかことの御門のやうにあらで、此の土御門しも、うへもなく造りそめけんと、今日こそいとにくけれ」

ことみそ 〜五斗味噌（名）じんだ（糅法）に同じ。豆二斗・鹽一斗を搗き合はせて用ふる故に云ふ。宇治拾遺「女重寶記「五斗みそ」はさきさいん」天皇寶記「糅法（ねりほ）五斗味噌不に天目酒」

ごとみそーじる 五斗味噌汁（名）五斗味噌にて造りたる味噌汁。樂模樣「門松、麥飯に五斗味噌汁、茶羅食はようせねど」

ことみち 異道（名）他の道。別の道。太平記「駿馬、ことの道より馳せ來り」

ことみね 異峰（名）別のみね。字非保實鳥「ふたりの鹿、子供をひきつれて、この木のうつぼをこの子にゆづりて、ことみねに移りぬ」

ことみや 異宮（名）他の宮。はかの宮。源氏「ことみやたちのさるべきおはせず」

ことむく 事向（他動ヵ）そむけるものを我が方へ向かしむ。從はしむ。平「意行紀「所平（コトムケ）之國」萬葉「ちはやぶる神を祈等が氣（コトム）」

ことむすび 言結（名）ことむすぶこと。口約束。

ことむすぶ 言結（自動ヵ）口約束をなす。いひちぎりをする。孝德紀「浪要（コトムス）他女中書浪要（コトムス）者」

ことむつかし 〜（形）事柄むづかし。事面倒なり。狂言音曲「一部八卷の二十八品なりとて、事むづかしい事を願はうより、粗朝兄弟の命を助け參らせしが有る故に、弟の命を助け參らせしが、弟の命

宮へ必ず參り給ひけるを」

ことみかど 異御門（名）他の御門。枕「なにかことの御門のやうにあらで、此の土御門しも、うへもなく造りそめけんと、今日こそいとにくけれ」

ことみそ 〜五斗味噌（名）じんだ（糅法）に同じ。豆二斗・鹽一斗を搗き合はせて用ふる故に云ふ。宇治拾遺「女重寶記「五斗みそ」はさきさいん」天皇寶記「糅法（ねりほ）五斗味噌不に天目酒」

ごとみそーじる 五斗味噌汁（名）五斗味噌にて造りたる味噌汁。樂模樣「門松、麥飯に五斗味噌汁、茶羅食はようせねど」

ことみち 異道（名）他の道。別の道。太平記「駿馬、ことの道より馳せ來り」

ことみね 異峰（名）別のみね。字非保實鳥「ふたりの鹿、子供をひきつれて、この木のうつぼをこの子にゆづりて、ことみねに移りぬ」

ことみや 異宮（名）他の宮。はかの宮。源氏「ことみやたちのさるべきおはせず」

ことむく 事向（他動ヵ）そむけるものを我が方へ向かしむ。從はしむ。平「意行紀「所平（コトムケ）之國」萬葉「ちはやぶる神を祈等が氣（コトム）」

ことむすび 言結（名）ことむすぶこと。口約束。

ことむすぶ 言結（自動ヵ）口約束をなす。いひちぎりをする。孝德紀「浪要（コトムス）他女中書浪要（コトムス）者」

ことむつかし 〜（形）事柄むづかし。事面倒なり。狂言音曲「一部八卷の二十八品なりとて、事むづかしい事を願はうより、粗朝兄弟の命を助け參らせしが有る故に、弟の命

平家の譜代なれば、なま中に事むづかし」

ごとめ 後止（名）取引所の語。後場の打ち止め。

ことも 子供　子等（名）❶ひとたち（人達）。親しむ語。人人。記「いざ古杼母（ヒメ）」萬「いざ子等毛（ヒモ）」たはわざなせそ、あめつちの固めし國ぞ、やまと島根は」❷多くの子。子。續紀「此家乃子（ヒモ）等、既淚良何奈在物乎」萬「はつしけやし妻も古杼毛（ヒモ）も、たかだかに待つらむ君や島隱れぬる」同「瓜はめば胡藤母（ヒモ）おもほゆ栗はめば（ヒモ）まして偲はゆ」宇津保俊蔭「女、おきな・子ども・うまことなどそ」同「いかあし・きめ袋、子ども多く引きつれて來て」❸わらべ。兄童。小兒。枕「あかちさきに來たる子ども・わらはべをとらたがり」「尾張節も、子どもの時から舞を舞うた程に」賀古教信七部集「死に後れしとたどれども、子供の足に雨の岡、大人の足に追ひ抜いて」❹かげま（陰間）に同じ。❺遊郭などの語。かかへの禿飯、又は娼妓。

（諺）**子供隱されたる鬼子母神のやう** 大切なる物を失ひて狼狽するさまにいふ譬へ。鬼子母神は多くの子を養ひて鍾愛するよりいふ。

（諺）**小供が火はふりすると屁小便をする** 小供の火を弄ぶを戒めていふ。

（諺）**子供騙げば雨が降る** 多くの子供が寄をたててさわげば雨が降るといふ言ひ傳へ。

（諺）**子供でも數の中** 餓鬼も人數に同じ。がき（餓鬼）の條を見よ。

（諺）**子供と小錢は小使によし** 小供と小錢とは使用するに便なり。

（諺）**小供に無體なし** 父母はみづから銀うとも、子を銀ゑしめず。

（諺）**子供にもの** 頭（名）にさはるといふ酒落。

（諺）**子供の喧嘩に親が出る** 小事に騒ぎ立てて、外より手傳ひするをそしるに譬ふ。又、大人氣なきことにいふ。浮世風呂「おまへがたはどうしたもんだえ。子供の喧嘩に親が出ると、嘗へにきくんだ」

（諺）**子供の喧嘩に親が出ると人立・中立・御膳看立** 子供の喧嘩に親が出るといふ諺の意を指にて示したるもの。即ち、片手の大指と小指とを合はする時は、人差し指・中指・藥指の三指殘り立つより云ふ。

（諺）**小供の使のやう** 藍染の要領を得ざるにいふ語。

（諺）**小供の頃同じ** 小供は根ほりはほり疑問を發すること。

（諺）**子供は風の子** 子供は寒氣を恐れず。

（諺）**子供は教へ樹せ** 子供は柔軟に教育せよ。

（諺）**子供持つなら三人持て** 子は三人位が適度なり。

（諺）**子供の頭よりまし** 子供も時としては用に立つ。

こともあがり 子供上（名）子兒の城を脱して、大人になりたるはかりのこと。又、その時。

こともあそび 子供遊（名）子供の遊戯。子供らしく遊び。兒戯。用明天皇職人鑑「「隱れんぼ」はしりこきりこぎりや、ごろびらつ野の花ずり衣・草刈衣縫びて、子ども遊びの」

こともあつかひ 子供扱（名）❶子供の世話をすること。源氏「何ぞもただおいらかに、うちおほどきたるさまして、ことこもあつかひをいとまなくつぎつぎし給へば」源氏「あまたの子どももつかひに、おのづから忘れぐさにつみてんと」❷子

言（コト）・事（コト）・來（キ）・聞（キ）・相（アヒ）・問（ヒ）

ことよす 事寄（自動ヵ）❶前條に同じ。神代紀上「交易（コトヨス）諸子、各有其能」「高天原のあつちの神已等（コトヨス）、各有事」❷事に託す。かこつける。源氏「夕顏「ものすさまじ、所の方ぞ、はしまさぬ」卿かはりのうらしろみにことよせて」後拾遺「月・神なり夜はの時雨にことよせて、片しく袖をはしぞわづらふ」

ことよす 言寄（自動ヵ）いひよる。

ことよす 言寄事寄（他動ヵ）ことづく。傳言す。委託す。新古今「惡三惡道に堕ち天の河瀬に事よせんせめては秋を忘れだにせな」新撰萬葉「名にしおふ花の便にことよせて、寄ねやせましこ吉野の山」

ことよせづま 言寄妻（名）いひよれる女。源十「人の言緣妻（ヨリ）を、あらぬ瑕のよそにやせ、我が見む、にくからなくに」謠「「誤なき言緣妻の空だのめ」

ことよーひめ 異夜姫（名）たなばたつめ（織女）の異名。

ことよる 言寄（自動ヵ）いひよる。源「「ひとり方なめれば、それにことよりて、かひなげなるすまひし給ふ方こそは多かめるを」

ことら 小銅鑼（名）小形の銅鑼。長崎遊時記「此のちやんから吹き正月中、市中家家に鑼を乞ふ」

ことり 部領（名）〔こととり（事取）の略〕❶一部屬の頭領。一部の長。推古紀「部部領（コトリ）」❷先代。先祖。「夫代（ヒ）に、夫代にて、兼宮の令人の衛門の國を兼ぬるもの。木鳥（ヒ）」江次第「「取（ヒ）廢（ヒ）」源自條馬九（ヒ）」

ことり 小鳥（名）❶小さき鳥の總稱。雀・燕・雲雀・鶯・鶴などの類。又、鳥の子。（親鳥の對）宇津保俊蔭「ことり

供の如く、涙りあつかふこと。

ことものがほ 子供顏（名）ことものしきかほ。をさなかほ。

ことものき 子供氣（名）をさなこころ。をさなきなこころ。

ことものきゃうげん 子供狂言（名）ことものしばゐ（子供芝居）に同じ。我妻寛保元酉三月より九月迄まで、大阪竹田近江大掾、堺勘三郎芝居の向にて、「から、くりり並びに子供狂言令見之」

ことものけいしゃ 子供藝者（名）はんぎよく（半玉）に同じ。茶花五力「ことも藝者鶯吉」

ことものげんくわ 子供喧嘩（名）小兒の喧嘩。稚氣あるいさかひ。

（諺）**子供喧嘩が親喧嘩** 子供の爭ひより、其の親どもの爭ひとなること。

ことものこころ 子供心（名）をさなごころ。子供らしき心。丹波與作「子に飽るや飽らずの、子供心の慰さは」

ことものさかり 子供盛（名）子供の年頃なるさかり。

ことものじ 異文字（名）他の文字。別字。源「みそ一文字の中に、ことものじは少なく」

ことものしばゐ 子供芝居（名）子供の演ずる芝居。

ことものじゃ 子供業（自動ヵ）子供らしくふるゆ。

ことものしゅう 子供衆（名）子供たち。又、子供の數衆。狂言「「なに、は子供衆が多うござるによつて」

ことものすき 子供好（名）子供を好むこと。又、その人。子煩悩。

（諺）**子供好きに子なし** 子供好きの人には自分の子なきもの多し。

ことものだまし 子供騙（名）❶子供をだますこと。❷その方法・手段の淺はかなることを嘲いふ語。

ことものたらし 子供騙（名）前條に同じ。源氏「御繪合」「秘藏とはよいと少べ、地獄とは殘るしい夢見る如く、手にも取られぬ國の夜の空蟬、虚空の繪を書く子供たちらし」

ことものおやや 子供茶屋（名）男色を鬻ぐ家。かげま茶屋。

ことものともだち 子供友達（名）幼時よりの友達。をさなともだち。わらはともだち。

ことものなげ 事無氣（副）事なきやうら。何事なきやうら。平氣をよそほひて。

ことものもの 異物　異者（名）❶異なる物。外の物。竹取「ことものの皮なりけり」枕「ことものは食はで、佛のおろしをのみ食ふ、いと奇き事かな」❷當通の他の者。なみのもの。源「ねびとのひ給へる御かたち、いよいよことの物ならず」

ことものや 子供屋（名）❶ことものやや（子供茶屋）に同じ。寛天日記「かげまやや中書子供屋多く有りて」❷遊女屋。

ことものらし 子供（形ニ）❶いわけたり。あどけなし。❷非動、子供の如し。

ことものわざ 子供業（名）子供のしわざ。子供らしきしわざ。傾城島原雄合「「しらさ海老にて鯊を釣り、麥飯で鯉を釣るは子供わざ」

ことものをがしは 小巴柏（名）紋所の名。

ことやや 琴屋（名）琴を造り、又は商ふ家。又、その人。用明天皇職人鑑「「琴屋が爪たてて、家職に骨を折り琴の調べに君をまつ風や」

ことやう 異樣（名）かはりたる樣。非通なら抜趣。枕「ことやうなることもまことにさることやは侍る」砂石集「

言（コト）・事（コト）・來（キ）・聞（キ）・相（アヒ）・問（ヒ）

「朝の鐘所作にこそ、ことやうに見侍れ、いかなる御所行ひにか」徒然草「若一重にてこそおれ、八重襲は異樣の物なり」

ことやぶり 事破（名）調和を破ること。樂藩著「ただ六つと定め申したるを過たせ給はねば、この宮にそこと、やぶりにおはしませ」

ことゆゑ 事故（名）事の仔細。さしさはり。別條。「こ。祭元號「事故なく歸り給ふのみならず」著聞集「母子共に、事ゆゑなく母り給ひけり」徒然草「あまたところ食はれながら、ことゆゑなかりけり」

ことよう 異用（名）別の用事。他の所要。徒然草「またことようにも用ふる事なくて、その夜し世になりにけり」

ことよがり （名）ことよがること。源「夕顏「何のわろびたる女房などは、かかることにはいとまきさかしらもいひまぜて、ことよがりなどもすめる」

ことよがる （自動ヵ）ことよしと思ふ。源「夕顏「ことよがるを、更に受けひき給はねば」

ことよげーさ 事善（名）ことよきやう。祥惡。祥惡「我が方へあなをかしの梶原かな、われらをすかしおほせたりと思ひしに、頼のことよげさよ」

ことよさ 異夜（名）他日の夜。昔日「「ことよさはきらきらしくて、皆ごとに出てはしかられぬ空だのめかな」

ことよさ 事善（名）ことよきやう。ことよげさ。丹觀集「いとほしと答ふる聲のことよさに、嬉しくもあるかすずのみこかな」

ことよさし 事寄（名）ことよさすこと。ことよさしたること。

ことよさす 事寄（自動ヵ）いひつけ。委任す。命ず。依託す。神代紀「勅（コトヨ）任（コトヨ）三子」祝詞式「宮國平所知食」

言（コト）・事（コト）・來（キ）・聞（キ）・相（アヒ）・問（ヒ）

ことよす 事寄（自動ヵ）❶前條に同じ。神代紀上「交易（コトヨス）諸子、各有其能」「高天原のあつちの神已等（コトヨス）、各有事」❷事に託す。かこつける。源「夕顏「ものすさまじ、所の方ぞ、はしまさぬ」卿かはりのうらしろみにことよせて」後拾遺「月・神なり夜はの時雨にことよせて、片しく袖をはしぞわづらふ」

ことよす 言寄（自動ヵ）いひよる。

ことよす 言寄事寄（他動ヵ）ことづく。傳言す。委託す。新古今「惡三惡道に堕ち天の河瀬に事よせんせめては秋を忘れだにせな」新撰萬葉「名にしおふ花の便にことよせて、寄ねやせましこ吉野の山」

ことよせづま 言寄妻（名）いひよれる女。源十「人の言緣妻（ヨリ）を、あらぬ瑕のよそにやせ、我が見む、にくからなくに」謠「「誤なき言緣妻の空だのめ」

ことよーひめ 異夜姫（名）たなばたつめ（織女）の異名。

ことよる 言寄（自動ヵ）いひよる。源「「ひとり方なめれば、それにことよりて、かひなげなるすまひし給ふ方こそは多かめるを」

ことら 小銅鑼（名）小形の銅鑼。長崎遊時記「此のちやんから吹き正月中、市中家家に鑼を乞ふ」

ことり 部領（名）〔こととり（事取）の略〕❶一部屬の頭領。一部の長。推古紀「部部領（コトリ）」❷先代。先祖。「夫代（ヒ）に、夫代にて、兼宮の令人の衛門の國を兼ぬるもの。木鳥（ヒ）」江次第「「取（ヒ）廢（ヒ）」源自條馬九（ヒ）」

ことり 小鳥（名）❶小さき鳥の總稱。雀・燕・雲雀・鶯・鶴などの類。又、鳥の子。（親鳥の對）宇津保俊蔭「ことり

ども、生きたるはいぬ宮に参り給へ」と申し侍りしかば、「ことわりなる君たち、ことわりしばかり引きつけさせたる弦の枝なども、枕にして参れり」■特に、しとど(副)の帯。問書「小鳥とさして申し候は、しとどの事也」

ことり　子取（名）小見の遊戯。一人は鬼、一人は親、他は子となり、子は親の後に互ひに帯につかまりて連なり、鬼が尾の子を捕らんとすると、親雨手を広げて之を妨げ、捕らへらるる時はそれぞれ役目を換ぶ。

ことり　木取（名）鋏の手足。庭訓往来五月「鋏木取・手足等也」同「鋏・天神鋏の記」「長崎より唐人油の料理人を呼び寄せ、中華料理のきわたり、鋏の木取」

ことり（名・副）固き物の解れあたる音にいふ。語。

ことり　小取（名）少し取ること。僅かに取ること。「天取の針」「大どりせうとり小どりしろ」

ことり（名）【動】みそさざい(鷦鷯)の異名。

ことり（名・副）ことりのやや強き音にいふ。語。

ことり-あはせ　小鳥合（名）小鳥を狩りて各々、其の雄雌・羽色等の優劣を判ずる競戯。寄合「宮治五年十月六日、鹿上人・所衆・瀧口・小令人、左右をわかちて、小鳥合せの事ありけり」

ことり-あはせ　部領合（名）すまひのせち(相撲節)をいふ。相撲

ことり-あらそひ　部領争（名）前銭に同じ。

ことり-うち　子鳥打（名）ちうのそ所。ゆみ(弓)を見よ。

ことり-かご　小鳥籠（名）小鳥を入れて飼ふかご。「伽羅先代萩「置きなほしたる小鳥籠、忠と教ふる親鳥の」

ことりそ　古鳥蘇（名）高麗楽。壱越調三十四曲中の一。新鳥蘇(ことりそ)に対して後来の古きをいふ。書閉「天古鳥蘇、衣裳飲酒、中院・お右府、童にてはしけるが、仕うまつり給ひけるは」「右、落蹲。左、蔡鷹。右、古鳥蘇」

ことり-づかひ　部領使（名）■古へ防人の役を免て「雑し」之を部領せし使。蔡鳳所「相模國防人部領使(ことりづかひ)、守従五位下守従五位下布勢朝臣人主」■古へ、朝廷より諸国に遣はして、相撲人を召さしめられし使。江家次第「相撲召仰、年中行事「合」「力わざくらべ」の急ぎしは、「今日のぬきでのたあとなりけり」

ことり-とまるす　（名）【植】■ありどほし(虎卿)の異名。■ぬめぎ(小蘇)の異名。■たらのき(懸木)の異名。葉の本又は幹にとげあり、「物をきずつくるよりいふ。

ことり-は　小鳥羽（名）小さき鳥の羽。拒言「二十四さいたる小鳥羽の征矢はずだかにとりてつけ」

ことり-はば　子取婆（名）さんば(産婆)に同じ。

ことり-ばし　小取箸（名）木箸の略。「一代女「それが上を、ことりばしに箸のかかへ帯して」

ことり-ばし　小取匙（名）取りまはしの上きこと。氣のきくこと。若風俗「他にかはりて、ことりまはしの路銭を藤田小平次にもまれて」

ことり-や　小鳥屋（名）小鳥を捕らへ、又は寄買又は飼養する業とする人。又、その家。人倫訓蒙図彙「小鳥や。諸の飼鳥を商ふ。其の外、鶯・鶉等の鳴音を持てば、諸方の鳥に番附をする也」

ことり-やき　小鳥焼（名）小鳥を骨ずめにし、醤油をつけて焼きたるもの。すずめやき。

ことり-れうり　小鳥料理（名）小鳥を料理すること。又、その料理。

ことり-わき　木鳥脇（名）裏宮の帯刀の脇。脇ちゐ木鳥(ことり)の詞。

ことわき　辞別（名）ことわくること。又、其のことば。禁秘抄「「加茶帯有」辞別必奏立」

ことわく　辞別（自動）■を改めていふ。■勢・生天眼・左御神・記詞式「辞別(ことわく)、伊勢生天眼左御神白久」

ことわけ　事譯（名）事がらのわけ。事の由。

ことわき　事業（名）しわざ。ことと。縁紀「人力見可各和和外(ことわきとと)」古今序「世の中にある人、ことわざしげきものなれば」源氏「はかなくし田でたることもわざも、故なからず」紫式部日記「彼の物いひの内侍は元岡がざるべし。知りたらばいかに感り侍らんものと、すべて世の中ことわざしげくうきものに侍りけり」

ことわき　異業（名）異なるしわざ。外のしごと。他のわざ。異事。宇津保「「業をことそ教くさらめ」とわざも彼の侍業のすること事は、えならねとやし」大和物語「三条殿がかくありきすることを嫌きて、ことわざすることにやあらん」

ことわき　蔭（名）古へよりのいひならはし。問誠又は風俗の意などを高して、一般に用ひらるる熟句又は秀句。記「故於今誠(ことわき)曰「雄之頻使、不来蔭也」」書紀「「古人善言有蔭曰「現在甘蔗、未来蔭丸者」」」忠百首「いにしへの谷の桂折ちしことわざに、「今日も心をうちつくしつる」

ことわり　理（名）■ふち。すぢ。道理。神代紀「若是男子、理(ことわり)宜先唱」■風俗・世の中の許容和理(ことわり)。もちゐ方。「かかからはしもよ」同「やめこと見ればかなしくあめくし、うせみの世の許容和利(ことわり)と、かくさまにいひけるものを」源氏「「ことわりもいはせなんとして」「今世の給ひわたるなり」」言問「「道理」」■■■

か。

こなかをなす 成子中　夫婦の間に子を生む。狂言貫「こなかをなしたる中を〻出るぞひく〻そといふことは」出世景清「人は業性が卒つかしし。子中出をなせし河古屋奴が〻夫の訴人をしたりしに」

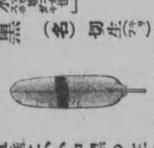
(諺)子なかなしでも女に心ゆるすな 女には容易に心をゆるすべからず。

こなかえ 小椹（名）牛蒡の名所。「びのを(毋尾)に同じ。和名抄「蒡(牛蒡)小椹(毋尾)」

こなかきの味 （名）〔熟語の義か〕 ❶米の粉をまぜて煮立てたる粥の料理。和名抄「飯加古保乃美賀也」 ❷(字鏡本)種種の料理。和名抄「膾・臠(加乃美)」

こなかくろ 下屎集「下屎(食下門屎)。将水(ガキ)也」 ❶ざぶうする(雑炊)に同じ。

こなかくろの小中黒 （名）切生(ヤ)の一種。中黒の形。



(そのかなこ)

萌黄の木すすしの鏃直垂に、小中黒の征矢を〻負ひたりける」

こなかしなのがさ （名）【植】柿樹科、柿屬の落葉喬木。君遷子(ギン)の一品種。稍小さきも。

こなかがね 熟金（名）鍊製したる金。(砂金の對)孝德紀「銀(金彩の譯)釋紀「銀(金彩)」

こなから 小牛（名）一升の牛を更に二分したるもの、即ち二合五勺。轉じて少童。酒にいふ語。浮世風呂「例所(ゴ)へ行って、もんぢいで、四文、二合半(ゴウ)と」ききあてい」

こなからいり 小牛入（名）二合五勺(ゴウ)の方合。

こなかり 小牛入（名）二合五勺を容るること。又、その容積の器物。

こなかの 善門松「柚から出だす小牛入りの德利に餘るる親心」

こなからざけ 小牛酒（名）二合五勺の酒。又、少童の酒。一代女「小なからざけ酒も何とも思はず」

こながれ 小流（名）小さき流れ。

こなぎ 小川。

こなぎ 小葱（名）❶小さき水葱。❷水葱を親しみていふ語。高野「なはしろの古奈俊(コナギ)が花をきぬにすり〻なるるまにまにあぜかかなしけ」同同「上つけぬ伊香保の沼に植ゑ古奈俊(コナギ)かく戀ひむとや種もとめけむ」

こなぎおつゆのうた 小水葱露歌（かいろのうた(蓮露歌)の直譯）かいろ(蓮露)を見よ。俳白集「こなぎがつゆのうたうたふ」いともかなし」

こなぎ 鴨跖草（名）【植】雨久花(ウ)科、雨久花屬の一年生草本。莖は短く、葉は叢生し、心臟形或ひは細き卵形、鋭尖頭、長き葉柄を有し、葉柄の基部は鞘狀をなす。夏秋の際紫青色にして小數花を開き、總狀花序に排列す。我が國、各地の水田・小流に自生す。さざなぎ。みづなぎ。

こなくすり 粉藥（名）こぐすり(粉藥)に同じ。

こなくち 粉口（名）栗毛の馬の嘴の白みたるもの。白口鬪。

こなくちかげ 粉口鹿毛（名）馬の毛色。鹿毛の嘴白きもの。粉嘴駒。

こなこな 粉粉（名）副）碎け方の樣。

こなこなちん 粉小微塵（名）副）こなみちん(粉微塵)に同じ。

こなさあ 此方樣（代）次條に同じ。

こなさま 此方樣（代）〔こなたさまの略〕次條に同じ。狂言「こなさまも流らしやれませい」浄國女夫池「人を切ると聞きしが、こな樣かいの」

こなさん 此方樣（代）〔こなたさまの略記〕あなたさま。あなたさん。こなさん。阿波佛眼「こなら、こなさんは〻と〻樣でないか」笑話飛問「美が鎖より此方樣(コナサン)の肌にこれをと風防〻し」膝栗毛「たとへこなさんが居やうといふて、ここにやもうおきやせんのぢや」

こなし 熟（名）❶こなすこと。こなれくること。❷物のとりなし。身につつかひ。調節。和山千葉「ぶさき衣裳のこなし、心柄樣で道中よろふて」❸衣裳的動作。身體のあつかひ。雪女五枚羽子板「銀子供の色好きが、御坐んす阿の酒のこなし、上意に入れんため、召し寄せ盃きて飲」❹立居時代、遊里の語。下文を見よ。色道大鑑「こなし。男女共によく取り入りて、心の盡にかかけひく銀をいふ」

こなし 小梨（名）【植】❶おかりんご(梨)の異名。❷いぬなし(鹿梨)の異名。

こなじは 椒(ハ)の異名。

こなす 熟（他動）❶碎きて細かに碎す。粉碎す。故朝記「粉(コナ)石相推子(ツイ)、搗(ツク)」字津保物「木を切りこなす」著聞集「かからぞをこなして、料紙漉きけるる時」❷土などを「肆しならす。❸胃にて消化す。こなれしむ。❹能く意義を咀嚼して應用し得るやうにす。合得す。❺意思のごとくにあつかふ。調ひらす。調節す。❻無理矢「こなしこなされ、嚙くてはとらくるもす」❼眞りさないひたす。そしる。

こなた 此方（代）〔こなたさまの略記〕あなたさま。相坂佛眼「あなたさん。こなさん。こなたは〻と〻樣でないか」笑話飛問「美が鎖より此方樣(コナタ

最明寺殿・御所・御庭番」

こなんどしゅう　小納戸衆　(名)　[官職]諸役人之事、御小納戸衆・布衣、凡百人」

こなんどとうどり　小納戸頭取　(名)　小納戸衆の頭。更微上衆御小納戸頭取四人、歳六千五百石高御役料無之」

こなんどばうず　小納戸坊主　(名)　おくばうず(奥坊主)に同じ。

こーなんれいう　小南鐐　(名)　ぶんせいなんれうぎん(文政南鐐銀)の異名。文政二年六月日又は小南鐐貨之を文政二朱銀といふ」

こにきし　王　(名)　[古へ朝鮮語。三韓の王。王號、神功紀「百濟王」[ことなり]、杜氏通典「百濟王號[ことなり]百濟呼[ことなり]王[ことなり]、夏音並王也」[軍記]

こーにくし　小憎　(形ク)　小づらにくし。にくらし。心中刃米湖日「定めしタ〳〵平素と手を引き合うて御ぜんせう、小憎いことよや」

こーにくらし　小憎　(形シク)　前條に同じ。

こーにさい　小二才　(名)　年若き者を いやしめいふ語。おをにさい。

こーにし　小螺　(名)　小さき螺貝。山家集「あま人のいみじくかへるひじきもの、こにしなどがうらなしただみ」

こにし　胡荽　(名)　[字音の轉]　[植]こえんどろ(胡荽)の異名。和名抄「胡荽之名」

こーにしゅきん　一古二一朱金　(名)　(天保に朱判(金)の異名。貨法類編[ぶんきん]「古二朱金百兩、目方三百五十目」

こーにしゅぎん　一古二一朱銀　(名)　ぎんしゅぎん(安永南鐐銀)の異名。貨法類編[ぶんきん]「古二朱銀百兩、安永金百六十兩」

こにすい　呉茱萸　(名)　[植]ごしゅゆ(呉茱萸)に同じ。

こにせし　太子　(名)　[字音]　[呉茱萸]　古へ の御料語。三韓の太子。

こにせしび　太子　(名)　前條に同じ。繼體紀「百濟太子[ことなり]」

こーにた　小荷駄　(名)　馬に負はする荷物。軍隊の兵食。編重。「諸侍家記「氏庭の諸士、軍陣ひかるを喰ひとめんと ひしめく。或ひは地下人ども起こり合ひ、小荷駄を奪ひ、歩兵を討ちければ」

こにたーうま　小荷駄馬　(名)　小荷駄を運搬する馬。

こにたーおさく　小荷駄押　(名)　こにたぶぎゃう(小荷駄奉行)に同じ。

こにたーじるし　小荷駄印　(名)　小荷駄に附くる旗印。甲陽軍鑑「小荷駄じるしの事」

こにたーぶぎゃう　小荷駄奉行　(名)　武家の職名。行軍の時、列の最後にあり て、小荷駄、即ち兵粮を守り、食事を分かち配ることを掌る。甲陽軍鑑「行軍の時、陣備・小荷駄奉行備・殿備」

こにたーぶね　小荷駄船　(名)　船頭又は水手の荷物を積む船。荷物船若[ことなり]。荷方船若[ことなり]。

こーにち　一後日　こじつ(後日)に同じ。平家「[軍記]河辺藤部の申さん事、後日の難にやはべらんずらん」

ごにちのきく　後日菊　九月九日の重陽の宴以後の菊。殘菊。

ごにちのりう　後日龍　年年十一月朱日宗の聖寺八月十五日に催す茶樂。

ごにちーじふぜ　一五日十座　(名)　(五日間(原)夕方の二回づつ行ふより いふ)は八講(法華八講)に同じ。榮華物語「[歌]五日十座の程譬ぜられ給ひ、法華經の功德をいみじう說き盡くす」

こーにはー　小庭　(名)　❶狹き庭。宇治拾遺「侍の、立蔀の内の小庭に立ちけるを」　❷清涼殿の南庭の稱。紫宸殿の南庭を大庭といふ對。平家「[軍記]殿上殿上の小庭に畏まりてぞ候ひける」

ごーにふ　一悟入　悟道に入ること。

ごーにふようーはし　御入用橋　(名)　江戸時代、江戸府内の官費にて修理すべき橋。

こーにもつ　小荷物　(名)　容積・重量共に輕少なる荷物。汽車などにて、手荷物として取り扱ふ荷物。

こーにもつーうりあげしょ　小荷物賣上書　(名)　[商]おくりけん(送參)に同じ。

こーにもつーうりわたししょう　小荷物賣渡證　(名)　[商]小取引にて賣主より買主に引き渡す商品に添へて送る證書。附(ち)。

こーにゃく　(蒟蒻)の古名。拾遺物名「こにゃく。野もを見れば春あきにけり芋づつら、こにゃくまましし若菜つむべく」

こーにゃくーいも　(蒟蒻)の異名。

こーにょうばう　小女房　(名)　年若き女。小づくりなる女房。盛衰記「良(ち)ありて領をはづし、門を細めにあけて、いたいけしたる小女房、頭ばかり指し出だし」

こーにら　(名)　[植]にら(韮)の異名。

こーれい　(名)　[植]こえんどろ(胡荽)の異名。

ごーにん　一誤認　あやまりみとむること。往來誤認自公家」

ごーにんぐみ　五人組　(名)　❶五人の組、❷江戸時代、比較的の間に於いて、五戸を一組とし、其の中の一人を長として互ひに取り締まらしめし自治團體。五保。

こーにんず　小人數　(名)　少しの人數。小勢。

ごにんーよやし　五人囃子　(名)　琴・笛・三味線・太鼓・鼓の五種の樂器を用ひて行ふ合樂。又、雛祭等にて、その形を模せる五箇の人形。

ごにんーばり　五人張　(名)　四人にて弓をまげ、一人が張をかくる程の强弓。保元物語「五人張の弓」、長さ七尺五寸にて鉄打つたる箭」、盛衰記「矢弓は三人張・五人張、矢束は弓に似たる者なれば十四束・十五束」

こーぬか　小糠　粉糠　(名)　米をつく時に出づるかす。ぬか。

(諺)小糠三合あるならば入聟すな　能めて僅少なりとも財産を所有せば、入聟となるよりは獨立して一家計を立つべし。耕餘編卯月紅葉「[軍記]好雄三合あるならば、入聟すなと云ふ事は、吾が身の上の譬へかや」

こぬかーあめ　小糠雨　(名)　こまかなる雨。ぬかあめ。細雨。微雨。

こぬかーいぼひ　小糠疣　(名)　ぬかよろこび(糠疣)に同じ。

こーぬかがや　(名)　[植]ぬかすきの異名。

こーぬかぐさ　(名)　[植]禾本科。ぬかは雷の多年生草本。莖の高さ二尺許り、葉生す。葉は細長線形にて、莖・葉共に平滑なり。花穗には小穗を生なし、小穗は紫色なる圓卵花序に排列し、夏季、淡紫色なる穎を生ず。非常に風、各地の山地に自生す。

こぬかーようこび　小糠喜び　(名)　ぬかよろこび(糠疣)に同じ。

こーぬけ　小抜　小脱　(名)　❶乏居に用ふる一種の變形。小並人などに貸すもの。❷用ふるもの。❸晉の乏居茶屋の隱語。錢七十二文の稱。(天ぬけの對)[隱語]

こーぬさ　小幣　小麻　(名)　❶紙と麻の束とをこまかに切り、米とかさねぜて、神前に打ちぬらすもの。切麻。❷小さき幣帛。夫木「三里人の大ぬさ小ぬさ立てなめて、うまはたむすぶ野邊になりぬる」

こーぬすびと　小盜人　(名)　こぬすみをなす人。こそこそ泥棒。竊盜。狂言「[歌]ここに一人、小盜人がこざり ます」

こーぬすみ　小盜　(名)　すこしの物貨をぬすむこと。

こぬれ　木末　(名)　[このうれの約]こずえ。萬「あしびきの山の許奴禮[ことなり]に、白雲にたちたなびくとあれに告げつる」同「なぎさにはあさりもとめず、鳥みにはこぬれ[ことなり]花咲き」

こぬれがくる　木末隱　枕のかげに隱る。萬「春されば許奴禮我久利[ことなり]て、愛でなきていぬなる梅がしづえに」

こねー　此　(代)　これ(此)の訛り。狂言「[ことなり]これ見せさうしやれ。これ御ろんじやれ」

こねーかへす　捏返　(自動)　紛擾す。紛擾す。浮世風呂「出るの引くのと、やつさもつさが發こつて、家内中こね返すはなし」

こねーかへす　捏返　(他動)　❶こねてうらがへす。❷强くこねる。官良句「こねかへす澁も師走の市のさま」　❸紛擾せしむ。紛亂せしむ。

こねくる　捏　(他動)　こねる(捏)に同じ。

こねこ　小猫　子猫　(名)　小さき猫。又、猫の子。宇治拾遺「小犬の子の ねこ、この子ねこ、しし子のこししとよみたりければ」

ごねこ　黄花菜　(名)　[植]いぼたのき(木蠟樹)の異名。

こねーずみ　練靈　(名)　練りたる靈。眉靈を炭がく料。墨。

こーねずみ　小鼠　子鼠　(名)　小さき鼠。又、鼠の子。著聞集「なげしたるきの間などに、確かに小ねずみ すりの身に成りて」、夫木「よめのこの子鼠いかがなりぬらん、あちらつくしとおもほゆるかな」

こーねずみいろ　濃鼠　(名)　灰緑の略。濃きもの。

こねつ　(名)　[植]やぶでまりの異名。

ごーねつ　一午熱　(名)　午時の熱。日中の熱。

こねどり　捏取　(名)　餅をつく時、白俵に居て、杵を下ろす手間に餅をこねかへすこと。又、その人。

ごーねん　御涅槃　(名)　し(死)の敬稱。主として佛教の死滅。ねは(涅槃)を見よ。

こーねぶさ　小寢卷　(名)　小形のねまきで、手幅につくれる夜著。かいまきの類。

こねーなす　捏廻　(他動)　こねかへす(捏返)に同じ。

こーねーず　子鼠　(名)　子鼠。(天ねらの對)狂言「[歌]ねらはいかにもなりぬるらん、あなうつくしとおもほゆるかな」風俗文選「[軍記]大ねら・小ねら、はたは二十日鼠と名のり」

こーねり　木練　(名)　次條の略。甲陽軍鑑「[ことなり]柿を伐りて木練をつくれば、小身なる者のことわざなり」

こねーがき　木練柿　(名)　木におきてうましたる柿の實。木にたれるまま熟して甘くなる柿(ことなりしぶきの對)

こねーのーかき　木練柿　(名)　前條に同じ。著聞集「柿おけるこれ りの柿はおのづから、ぶくめば消ゆるものにぞおりける」

こねる　❶粉又は土などに水をまぜて、よく練りかへす。ねやす。❷種種に惑し惑みる。こねまはす。❸籠同を設して人を困しむ。

ごねる　(自動)　[こねはんの轉と。俗語]死ぬることを忌しりいふ俗言。

こーねん　一願念　願望。

ごーねん　一御念　後の結果を心配する。

ごねんぐかなぶーわっぷ　御年貢可納割付　(名)　江戸時代、百姓公納年貢の目錄。

ごーねんごろ　御懇　(名)　ねんごろ(懇)の敬語。御親切。長町女腹切「後後はお屋敷の御用も仰せ附けられ、田入りさせんとの御念比」

こねんーたち　一古年刀　(名)　武家にて、平代の太刀の稱。

こねんーどう　一古年童　(名)　❶諸寺に代々使はれ來たれる下僕。❷東寺の金堂にて、七日の行ひの時、手水湯をわかす者。

こねんーどう　一古年胴　(名)　武家にて、平代の鎧の稱。

こーの　此　(代)　[代名詞のこに助詞ののの添へる語]❶最も身に近き物を指し示す語。記「許能[ことなり]みきをかみけむ人は、其の酒自に立てて」歌「ひつつかみけれかの許能[ことなり]たけたちに」、萬「天地の共に久しく言ひつげと、許能[ことなり]くしみ玉しかしけらしも」　❷かの。あのに代へて、指遠きものを指す。

このか　(名)　[植]ぬかすきの異名。

このかーうえ　此月頃　(名)　この數月この頃。萬「かくばかりもとなし戀ひば、古郷に此月頃[ことなり]も有りがてましを」同「いもが目を見ずあの崎の狹蕨は、此月頃[ことなり]は飽りこうなゆめ」

このとしごろ　此年頃　(名)　この數年この頃。萬「朝日てるさだの國邊に鳴く鳥の、夜鳴きかはらふ此年己呂[ことなり]を」

このーあと　此後　(名)　そのきこう、このあひだ。以前。醒睡笑「このあと、海野まるりの時」

このーあひだ　此間　(名)　このごろ、さきの頃。さきだつて。こなひだ。過日。庭訓往來「此間依連歌會、五忘蔵樂之雜談」

このーいと　此糸　(名)　[糸の字の轉字]むらさき(紫)の雅語。

このーいろ　(名)　[この(此)の色の義に や。[歌語]]袍の色の一種。

このーうれ　木末　(名)　こずえ。こぬれ。

このうれーもと　木末下　(名)　木の枝のすえ。こずえ。こぬれ。忠仁元年歌合「秋はなほおぼつかなしや初瀬川、このうれもとに殘る夜の月」

このーえ　木枝　(名)　木の枝。枝。萬「春の、この木枝[ことなり]ぬけ、鶯くがとともちぬ男にし答へけらしも」

このーかうべ　兄部　(名)　[子の上部の義]❶師家にて、力者(ちから)のかしら。庭訓往來「十二兄部」、下學集「兄部[ことなり]、師傅」　❷庭のめのこともなく侍りしかば、此のさぶらひも、涼巾石住吉の神をたのみ奉りて、この夜、涼巾石住吉の神をたのみ奉りて、この十八年になりぬ」

このうへなし　此上無　これよりまさるものなし。最上なり。

このつきごろ　此月頃　この數月この頃。萬「かくばかりもとなし戀ひば、古郷に此月頃[ことなり]も有りがてましを」同「いもが目を見ずあの崎の狹蕨は、此月頃[ことなり]は飽りこうなゆめ」

このとしごろ　此年頃　この數年この頃。萬「朝日てるさだの國邊に鳴く鳥の、夜鳴きかはらふ此年己呂[ことなり]を」

このーあと　此後　(名)　そのきこう、このあひだ。以前。醒睡笑「このあと、海野まるりの時」

このーあひだ　此間　(名)　このごろ、さきの頃。さきだつて。こなひだ。過日。庭訓往來「此間依連歌會、五忘蔵樂之雜談」

このーいと　此糸　(名)　[糸の字の轉字]むらさき(紫)の雅語。

このーいろ　(名)　[この(此)の色の義に や。[歌語]]袍の色の一種。

このーうれ　木末　(名)　こずえ。こぬれ。

このうれーもと　木末下　(名)　木の枝のすえ。こずえ。こぬれ。忠仁元年歌合「秋はなほおぼつかなしや初瀬川、このうれもとに殘る夜の月」

このーえ　木枝　(名)　木の枝。枝。萬「春の、この木枝[ことなり]ぬけ、鶯くがとともちぬ男にし答へけらしも」

このーかうべ　兄部　(名)　[子の上部の義]❶師家にて、力者(ちから)のかしら。庭訓往來「十二兄部」、下學集「兄部[ことなり]、師傅」　❷庭

嫌倉年時代、武家の供奉の人。力者の頭は御長を持ち、其の跡に小冷人、其の跡に朝夕、木の跡に御雑色」

このかげ 木陰 (名) 木のかげ。かげ。袋草紙「あさづまの三井のこのかげのしげりあひて、袖ふれ行く世を見るかたしさ」

このかた 此方 (名) 1 こちらの方。くのはつせの川の、をちかたにいもらはたたし、己乃加多(コノカタ)にわれはたちてこそそれより後。こなた。以来。神代紀「自爾以来(コノカタ)」千載「かの御時より此方、年はふたもちぬ」に及び」 2 (子の上の義) 保元「又かみは帥。兄 (名) 「子の上の義」 1 兄弟姉妹の中で最も年長者。「この琴のしらべを聞くにつけ給らうて、御ことのかみの右のおとどに聞こえ給ふ」 2 としうへの人。年長者。紫式部「帥(ソチ)の君、長(コノカミ)」 3 としうへの人。年長者。紫式部「帥(ソチ)の君、長(コノカミ)」 4 幼之次第。「この御殿のきんたち四所、十一なるをこのかみとして、四五なるおとはす」源氏「かの君、五六年程のこのかみなりしかど、猶いと若やかになまめかしきあいだれてもしの上に立つもの。音髄。「頭領」神武紀「鳥師者、鳥飼部也、長者也」 5 氏のかみ。氏の長者。天智紀「氏上(コノカミ)」天武紀「氏長(コノカミ)」 6 来人の上に立つもの。音髄。「頭領」神武紀「鳥師者、鳥飼部也、長者也」 7 舒明紀「音(コノカミ)女淵」

このかみだち 兄らし。年長者らしい。源氏「宮の今めかしく、このかみだちて給へるはとにて」

このかみ 小腹 (名) 下腹。こがみ。下腹がみ。和名「小腹。釋名云、自臍以下曰之水腹或云小腹」

このかみ 椎頭 (名) こんのかみ(椎頭)の約。

このくに 胡國人 (名) 支那の北方なる胡國の人。えびすの國の人。後拾遺「思ひきやふるき都をたち離れ、この國人にならんものとは」

このくらゐ 此位 (名・副) 分量をくらべいふ語。これほど。

このくれ 木暗 木暮 (名) 木の茂りて暗きこと。又、その處。実ひは其の時。こぐれ。万葉「天の原富士のしば山、木暗の時ゆつりなばあはずかもも」「己能久禮(コノクレ)の時ゆつりなばあはずかもも」同「許能久禮(コノクレ)になりぬるもの同じ「子規何か来鳴かぬ君にあへるとき」

このくれがくり 木暗隠 (名) 木の暗くしげりたる間に隠るること。万葉「鶯は木暗隠(コノクレガクリ)かほ鳥はまなくしば鳴くし」

このくれしげ 木暗茂 (名) 木のくれの茂きこと。又、その處。万葉「たこの木暗茂(コノクレシゲ)に子規きぬ鳴きぬとよめばはた繁ひめやも」同「赤に至れればこの木暗茂(コノクレシゲ)に」

このくれの 木暗乃 (枕) 木の暗れしげしとかけ、又、四乃月には茂葉茂りて木暗くなるとよりうづきにもかく。万葉「ぶさはしきこの心。おとなしき心。源氏「二の宮はことなくこのかみ心に、ところに去り聞こえ給ふ」同「この宮にや、のとかにけだかきものから、人のため哀れになさけなさけしらおはしける」

このかみつかさ 官人の長。長官。持統紀「勅「諸國長吏(コノカミツカサ)」」

このきみ 此君 (名) 「支那、晉の王子猷が竹を種ゑて、何可一日無此君」邪」と云ひしより出づ。【竹】たけ(竹)の異稱。朗詠「香餌兵参軍王子猷我稱此君」枕「くれ行く枝なりけり。おい、このきみにこそといひたるを」

このくにびと 胡國人 (名) 支那の北方なる胡國の人。えびすの國の人。後拾遺「思ひきやふるき都をたち離れ、この國人にならんものとは」

このくらゐ 此位 (名・副) 分量をくらべいふ語。これほど。

このくれ 木暗 木暮 (名) 木の茂りて暗きこと。又、その處。実ひは其の時。こぐれ。万葉「天の原富士のしば山、木暗の時ゆつりなばあはずかもも」「己能久禮(コノクレ)の時ゆつりなばあはずかもも」同「許能久禮(コノクレ)になりぬるもの」「子規何か来鳴かぬ君にあへるとき」同「許能久禮(コノクレ)のしげき谷邊を」

このくれがくり 木暗隠 (名) 木の暗くしげりたる間に隠るること。万葉「鶯は木暗隠(コノクレガクリ)かほ鳥はまなくしば鳴く」

このくれしげ 木暗茂 (名) 木のくれの茂きこと。又、その處。万葉「たこの木暗茂(コノクレシゲ)に子規きぬ鳴きぬとよめばはた繁ひめやも」同「赤に至れ

このは-ごろも 木葉衣（名）木の葉を綴みてつくれる衣。仙人などの著る料といふ。謠曲「木の葉衣の袖の上」

このは-ぞむひ 木葉侍（名）つまらぬ侍をいやしめいふ語。「こつぱざむらひ」の転。曾我虎磨「走士・足軽の、吠ければ敢なら木の葉侍が高名して」

このは-ざる 木葉猿（名）體の軽く小さき猿。謠曲「一配、さわがしき袋の軽く久百首夢記あし明の山べにあそぶ木の葉永袋、おもふ心ぞありてなくなる」夫木「時雨れ行く秋の梢の木の葉袋、袋が色が悲しみてぞなく」

このは-しぐれ 木葉時雨（名）木の葉の飛び散るを時雨のふるに見たてていふ語。續古今序「紅のやに木の葉しぐれとふりはてて、袖にとまるは涙なりけり」玉葉「三花の雪木の葉時雨の幾歳を、身は香も袖と誰れ名づけけむ」

このは-せんべい 木葉煎餅（名）木の葉の形に焼したる煎餅。

こ-の-はだ 木肌（名）木の肌。きはだ。

このは-づく 木葉角鴟（名）【動】鳥類中、狐類の一種。鴟に似たる習性を有し、大形なり。

このは-づく 木葉蝶（名）【動】昆蟲類中、鱗翅類の一種。翅は尾様状に延長し、翅の裏面は緑褐色にして、枯葉の如き色を呈し、前翅の中央に廣き淡黄色の條あり。翅をたたみて枝にとまれる時は、殆ど枯葉と見わくること能はず。本邦、琉球・台湾に産す。

このは-づく 木葉天狗（名）小さき天狗。狐狸力なき落ちて、木の葉天狗や鳶んに恐れ吹く風の吹く力なき落ちて、木の葉天狗や鳶んで飛ぶらん」

このは-ごろも 木葉衣（名）木の葉を綴みてつくれる衣。仙人などの著る料といふ。謠曲「木の葉衣の袖の上」

このは-ぞむひ 木葉侍（名）つまらぬ侍をいやしめいふ語。「こつぱざむらひ」の転。曾我虎磨「走士・足軽の、吠ければ敢なら木の葉侍が高名して」

このは-ざる 木葉猿（名）體の軽く小さき猿。謠曲「一配、さわがしき袋の軽く久百首夢記あし明の山べにあそぶ木の葉永袋、おもふ心ぞありてなくなる」夫木「時雨れ行く秋の梢の木の葉袋、袋が色が悲しみてぞなく」

このは-しぐれ 木葉時雨（名）木の葉の飛び散るを時雨のふるに見たてていふ語。續古今序「紅のやに木の葉しぐれとふりはてて、袖にとまるは涙なりけり」玉葉「三花の雪木の葉時雨の幾歳を、身は香も袖と誰れ名づけけむ」

このは-せんべい 木葉煎餅（名）木の葉の形に焼したる煎餅。

こ-の-はだ 木肌（名）木の肌。きはだ。

このは-づく 木葉角鴟（名）【動】鳥類中、狐類の一種。鴟に似たる習性を有し、大形なり。

このは-づく 木葉蝶（名）【動】昆蟲類中、鱗翅類の一種。翅は尾様状に延長し、翅の裏面は緑褐色にして、枯葉の如き色を呈し、前翅の中央に廣き淡黄色の條あり。翅をたたみて枝にとまれる時は、殆ど枯葉と見わくること能はず。本邦、琉球・台湾に産す。

このは-づく 木葉天狗（名）小さき天狗。狐狸力なき落ちて、木の葉天狗や鳶んで飛ぶらん」

このはとり-づき 木葉採月（名）〔養蚕の時に、桑の木の葉を採る義。蚕月〕陰暦四月の異称。続千載抄「四月。このはとり月きなれば何かもすべき郭公このはとり月きなれば鳴かなん」

こ-の-はな 木花（名）木に咲く花。特に櫻又は梅の称。神代紀「其生見必如木華之移盛」同貞本花開耶姫「古今序「雖波津に咲くやこの花冬ごもり、今を春べと咲くやこの花」

この-はな 斯花（名）〔雖波津に咲くやこの花冬ごもり、今を春べと咲くやこの花とよめる歌より出づ〕【植】うめ（梅）の異名。

この-はな （名）【植】だいこん（蘿蔔）の異名。

このは-ぼう 木葉坊（名）次條の略。

このは-ぼうず 木葉坊主（名）宿なし坊主。俳諧「蕉花叫」蕉窓を云ふことなるべきくいやがりて、一文づつやりて云ひやませけるに、次第に寄り附きて中間後には三文づつ毎晩取りければ、此處の揚げ銭八十五匁と、外に三文は木の葉坊主が取る」

このは-ばみ 木葉衝（名）蝶の側の一種。蝶（ぎ）を木の葉の形に象りて逃形（ぎょう）にせるもの。

このは-ぶね 木葉舟（名）【1】木に浮かべる木の葉。【2】遠く水上に浮かべる小舟を弁を譬へいふ語。【3】数所の名。ふね（船）を見よ。

このは-むしゃ 木葉武者（名）取るに足らぬ雑兵。こつぱむしゃ。神樹「宇治の朝代にたまりてる木の葉武者」

このふ-すま （名）【植】はんくわいあさぶんの異名。

このふん 此分（名）此の歌意。こて

ごーばこ　小箱（名）年若き婦。

ごーばらす　小坊主（名）年若き僧。

こづくりの僧。雑僧。賈古歌信七蓋遺「行衛も知らずも知らぬ美しい小坊主がが、袈裟まで折り折り見え」

ごばーうそ　（名）【植】こなら（楢）の異名。

ごーばーうら　強打（名）刀・棒などの打物にすぐれたる人。顕記奥州後三年記「鎧夫・手夫と云ふ二人の打手あり、並びなきつはものなり。是れをこはうちと名附けたり」

ごーばーうらのばかーで　（名）【植】蔵樹（ぞう）科、域樹園の常緑喬木。葉は倒卵形、裏面の葉脈上に毛茸あり。花は黄色にして單性、雄雌異株、雄蕊房花序に排列し、春季開き、後鋭角狀の翅果を結ぶ。我が國、各地の山地に自生す。きはなはうちはかへで。

ごばーうーぬき　牛蒡抜（名）太く長きものを、一氣に容易く抜き取ること。

ごばーうーね　牛蒡根（名）牛蒡の根の如き細長き根。

公家も立ち出でて、ひくや子の日の松とりの牛蒡根」

ごーばーうはい　（名）古傍輩。古き傍輩の同僚。

ごーばーうーへん　御方便（名）❶うべん（方便）の敬語。源氏「佛の御はうべんにて、彼のかばねを拾ひて、つひにひじりの道に入り侍りにけるこ」❷まはりあはせのよきこと。都合のよきこと。

ごばーうーあつほし　五方井筒星（名）紋所の名。

ごーばかーし　小馬鹿（名）すこしおろかなこと。

ごーばかーぐし　小馬鹿臭（形ク）や

（語源）胡馬北風に嘶（いな）ゆ　胡地より出でし馬の、北風吹く毎に胡國を慕ひて嘶く。故郷の忘れ難きに譬ふ。平治物語「越鳥南枝に巣を掛け、胡馬北風にいなゝ」文選言「胡馬依北風、越鳥巣南枝」

ごーは　〜五派（名）禅宗の五つの流派。臨濟・雲門・曹洞・潙仰・法眼の稱。

ごーば　後場（名）取引所の午後の立會の稱。（前場の對）

ごばーい　（形口）大儀なり。上機・下機の方言。

ごばーい　（名）【動】あだか（自高）をいふ。伊勢國白子、及び美濃國の方言。

ごーばい　〜故買（名）【法】故意に贓品を買ふこと。けいずかひ。「贓物の運搬等誠故買又は牙保を爲すこと」

ごーばい　（名）からはい（向拜）に同じ。

ごばいがーそーうーぶぎょう　〜御拜賀總奉行（名）武家の職名。御拜賀奉行の長。次條を見よ。

ごばいがーぶぎょう　〜御拜賀奉行（名）武家の職名。將軍家にて補任のとき、拜賀の禮を行ふ儀式などのことを掌る。

ごーばいけい　赤裂蘆（名）【植】百合科、三藥蘆（ゆり）屬の多年生草本。莖の高さ三尺。葉は大なる廣披針形、平行脈を有す。花は雌性・雄花・雌花・兩性性花共に同形、總狀花序に排列し、初夏、白色花を開く。各地の山地に自生す。薯蕷名の薯蕷なり。しらはき。

ごばいけいーぞう　（名）【植】前條の異名。

ごーばーいーけん　强意見（名）手こはく意見すること。厳重なる訓誡。「きつい所うあちらうかと存じた故出世世」

ごーばーうーの　〜五倍子（名）【植】ふしの（鹽膚木）の異名。

ごばいーしーやーゆう　〜五倍子蟲（名）【動】ふしむし（五倍子蟲）の異名。

ごばいた　木羽板　小羽板（名）こけら（木端）に同じ。

ごばいたーぶき　木羽板葺（名）こけらぶき（柿葺）に同じ。

ごばいば　骨拜波（名）【植】豆科、骨拜波屬の常緑喬木。幹の高さ二丈許り。葉は羽狀複葉、各小葉は卵形なり。花は四箇の萼片を有し、花冠無し。果實は稍稍米國利加の原產。樹脂を藥用に供す。

ごばいばーばーるーさむ　骨拜波拔爾撒謨（名）ごばいばの樹皮を擣ちて滴出せし樹脂。藥用に供す。

ごばいーはん　〜故買犯（名）【法】故買をなしたるにより成立する犯罪。

ごばーいーひ　强飯（名）米を蒸したる飯。こはいひ。「源氏御かゆ・こはいひめして、まらうどにもまゐり給ひて」

ごーばーいも　（名）【植】百合科、貝母（ばい）屬の多年生草本。莖の高さ三四寸許り。葉は披針形、平行脈を有す。早春、淡綠色六片が國、各地の深淵濕地に自生す。かさゆりが國、各地の山地に自生す。てんがいゆり。

ごーばう　小袍（名）袍の一種。參議以上の人の用ひる。袍の上に着用す。

ごーばーう　强意見（名）厳重風吕「此の一言、子を思ふおやの心、こはいけんにて、おのづから思慮愛の情をふくめり」

ごばーいし　〜五倍子（名）【植】ふしの（鹽膚木）の異名。

ごばーいーしーやーゆう　〜五倍子蟲（名）【動】ふしむし（五倍子蟲）の異名。

ごばーいた　木羽板　小羽板（名）こけら（木端）に同じ。

ごばいたーぶき　木羽板葺（名）こけらぶき（柿葺）に同じ。

ごばいば　骨拜波（名）【植】豆科、骨拜波屬の常緑喬木。幹の高さ二丈許り。葉は羽狀複葉、各小葉は卵形なり。花は四箇の萼片を有し、花冠無し。果實は稍稍米國利加の原產。樹脂を藥用に供す。

ごばいばーばーるーさむ　骨拜波拔爾撒謨（名）ごばいばの樹皮を擣ちて滴出せし樹脂。藥用に供す。

ごばーいーはん　〜故買犯（名）【法】故買をなしたるにより成立する犯罪。

ごばーいーひ　强飯（名）米を蒸したる飯。こはいひ。「源氏御かゆ・こはいひめして、まらうどにもまゐり給ひて」

ごーばーいも　（名）【植】百合科、貝母（ばい）屬の多年生草本。莖の高さ三四寸許り。葉は披針形、平行脈を有す。早春、淡綠色六片が國、各地の深淵濕地に自生す。かさゆりが國、各地の山地に自生す。てんがいゆり。

ごーばう　小袍（名）袍の一種。參議以上の人の用ひる。袍の上に着用す。

ごーばーう　〜古方（名）古き方法。

ごばーうーう　〜顧望（名）❶こと。禮記曲禮「侍於君子、君子不顧望而對、非禮也」❷二心をいだきて決定せざること。ためらふこと。後漢書「年五十、惟有一子終不顧望」陳琳文「懷持二心使游顧望」

ごーばーう　〜午砲（名）正午を報ずる大砲の音。どん。

ごーばーう　〜五方（名）五つの方角。東・西・南・北と中央と。

ごーばーう　〜後報（名）三報の一。きんぱう（三報）を見よ。

ごばーう　〜誤報（名）誤りて報知すること。又、その報知。

ごーばーう　〜御坊　御房（名）そうの（僧）の敬稱。「此の御ばうたちの惜しみ給ふと云ふ」太平記「山臥御房、先づ我れ等を御助け候へ」

ごばーう　〜牛蒡（名）【植】菊科、牛蒡屬の二年生草本。莖の高さ四五尺、地下に多肉の圓錐根を有す。葉は大なる心臓形、粗糙、裏面には白毛密生し、夏、葉柄を具ぶ。夏日、帶紫色の花を開き、頭狀花序に排列す。我が國、北部地方に自生すれども、廣く國内に栽培せられ、根及び若きを食用とす。ごんぼう。

ごばーうーうま　牛蒡馬（名）うしをの（牛足馬）に同じ。

ごばーうーか　〜古方家（名）こいはう（古醫方）に同じ。

ごばーうーじーり　牛蒡尻（名）蒲などの五分尻の逆りなりと。

ごばーう　〜顧望（名）【醫記曲禮「侍於君子、君子不顧望而對、非禮也」❷二心をいだきて決定せざること。ためらふこと。後漢書「年五十、惟有一子終不顧望」陳琳文「懷持二心使游顧望」

ごーばーう　〜午砲（名）正午を報ずる大砲の音。どん。

ごーばーう　〜五方（名）五つの方角。東・西・南・北と中央と。

ごーばーう　〜後報（名）三報の一。きんぱう（三報）を見よ。

ごばーう　〜誤報（名）誤りて報知すること。又、その報知。

ごーばーう　〜御坊　御房（名）そうの（僧）の敬稱。「此の御ばうたちの惜しみ給ふと云ふ」太平記「山臥御房、先づ我れ等を御助け候へ」

ごばーう　〜牛蒡（名）【植】菊科、牛蒡屬の二年生草本。莖の高さ四五尺、地下に多肉の圓錐根を有す。葉は大なる心臓形、粗糙、裏面には白毛密生し、夏、葉柄を具ぶ。夏日、帶紫色の花を開き、頭狀花序に排列す。我が國、北部地方に自生すれども、廣く國内に栽培せられ、根及び若きを食用とす。ごんぼう。

ごばーうーうま　牛蒡馬（名）うしをの（牛足馬）に同じ。

ごばーうーか　〜古方家（名）こいはう（古醫方）に同じ。

ごばーうーじーり　牛蒡尻（名）蒲などの五分尻の逆りなりと。

ごばーうーへーたーう　〜疣拍繻（名）かんてん製にして、砂糖をまぜ、れり固めて食べる菓子。

ごばーげ　恐氣（名）動こはさう。こはさま。苦原傳授手習鑑「我が詞を用ひずば七生迄の抑窓そと聞いて、布世が、こはげも殺し」

ごばーけーたーつ　恐氣立（自動）恐ろしき氣狀になる。傳田兵衛名所蓋「打つてかかる頻魂、思ひこたる顔色に、長田しきりに恐氣立ち」

ごばーこーあばーせ　小笹合（名）小笹の物合せをすること。夫木「九條の宮の御息所の御もとに、こはこ合せのころ」

ごばーこーうーてーんーそーう　〜御八講修奏（名）室町時代、法華八講を行はれし時、置かれし職名。

ごばーこーばー　恐恐（副）おそるおそる。「恐れつつ、蛭丸は、こはこは立ち寄つて、そつと覗けば」

ごばーこーばー　（名）動こはりたる紙・革・布などの縫れ合ふ音、又は其のままにいふ語。

ごばーこーばーし　强强（形シク）❶こはきやうなり。こはりたるさまなり。北斗七星「こはこはしくさうぞきたるももあり」❷こつこつしたるさまなり。「なめらかならぬさまにもどろの女ぶみに、なかは過ぎて書きすくめたる、あうなたてゆ書おの、づからこはこはしき筆によみなされなどしつつ、ここさらびたり」❸あらあらし。無骨なり。「盛衰記三小説「田舎侍の、氣折りにこはこはしかりけるが」

ごばーこーばーしーさ　强强（名）こはこはしきさま。こはこはしき度合。

ごばーこーばーし　强（名）こはきこと。こはき度合。

ごばーこーさ　恐（名）恐ろしさ。恐しき度合。太平記「思ひ儲けたる者共が、死に狂ひをせんと引き纏もつたるがこはさに」

ごばーこーうーそーく　强裝束（名）烏帽子に硬き纏をつけ、袖・裾表等一切を硬く調製したるもの。海人藻屑「烏羽舵の御代より强き裝束用ふる故に、衣紋の少法出来たるなるべし。上代は皆大裝束とて、ふくく初めたる强裝束の衣紋を書きたるは、絵院以後御初めたる强裝束の衣紋を書きたるは、絵院以後の不電也」

ごばーこーうーばーかーで　（名）【植】蔵樹（ぞう）科、域樹園の常緑喬木。葉は倒卵形、裏面の葉脈上に毛茸あり。花は黄色にして單性、雄雌異株、雄蕊房花序に排列し、春季開き、後鋭角狀の翅果を結ぶ。我が國、各地の山地に自生す。きはなはうちはかへで。

ごばーもーぬき　牛蒡抜（名）太く長きものを、一氣に容易く抜き取ること。

ごばーもーねーぎ　牛蒡根（名）牛蒡の根の如き細長き根。

公家も立ち出でて、ひくや子の日の松とりの牛蒡根」

ごーばーらーは　〜古傍輩（名）古き傍輩。輩は書の同僚。

ごーばーらーへーん　〜御方便（名）❶うべん（方便）の敬語。源氏「佛の御はうべんにて、彼のかばねを拾ひて、つひにひじりの道に入り侍りにけるこ」❷まはりあはせのよきこと。都合のよきこと。

ごばーらーあつほし　五方井筒星（名）紋所の名。

ごーばーかーし　小馬鹿（名）すこしおろかなこと。

ごーばかーぐし　小馬鹿臭（形ク）や

ごばーかーせ　小博士（名）明經博士を大博士と稱するに對して附せし後世の名目なるべし。慶長記「大臣殿は小博士に當基と云ふ者を御使にて」

ごばーかーね　强金（名）特に質固き金屬。字鏡集「鑌（こがねつくる）鑌（はがね）」

歌合「工匠鑌れ行く人の心のこはがねを、からくりかれてねをのみぞなく」

ごーばーまー　小袴（名）❶指貫の袴の異名。袋語「陸奥國殿は小袴きて、あしだはかせ給ひて」❷後世、武家にて、素襖などの下に用ひし指貫に似たる袴。慶長記「其の後鎧をば底ぎ殿きて、直垂・小袴袴入計り、其の後鎧をば底ぎ殿きて、直垂・小袴袴入也」他絵卷「肌には腹卷・小袴袴に水無迫袴をはかせ」❸半袴、即ち現今の袴より、ずいぶんちのやや低きもの。

ごばーかーばーし　小馬鹿廻（名）愚かなる者をあしらふやうにすること。八笑人「上「いい年をした者を、こばかまはしにして」

ごばーがーう　恐（他動）おどす。おそれがせよらかの」

ごばーがーる　恐（自動）こはしと思ふ。恐ろしく思ふ。しきりに恐る。枕「なはこそそこはがり給はめなど打ちいひたるよ」

ごーばーきー　小秋（名）小さき蕨。又、蕨をいふ。古今「宮城野のもとあらの小萩露を重み、風を待つごと君をこそ待てと」源氏「蕨手重み、風ふせぎしかげの枯れしよ」「こはぎが上でしづ心なき」後拾遺「上「小蕨咲く秋までもあらば思ひ出でん、嵯峨野の露をぬきし浴は其の日と」

こはぎーはーら　小秋原（名）こはぎ（小秋）の一面に生えてもる處。金葉「小秋原句ふ盛りは白露も、いろいろにこそ見え渡りけれ」千載「小秋原まだ花咲かぬ宮城野の、風やこよひの月に鳴くらん」

ごーばーく　〜琥珀（名）❶【鑛】不規則なる塊塊をなし往往木片又は昆蟲を包含し、透明乃至不透明にして脂肪光澤著しきものの。黄・赤・褐等の色を呈す。前世界の針葉樹の樹脂が地中に埋没して成りしもの。美しき裝飾に供せらる。本邦には貫の琥珀を產せず。松風村雨東帶盛三「琥珀の櫛、蘇芳の櫛の櫛をあさりけり」❷こはくおり（琥珀織）の略。

ごーばーく　〜賈舶（名）あきんどぶね。商船。商船。張籍詩「賈舶何時國興國亡」八犬「」

ごーばーく　御畫（名）ごくわく（御畫）の音賞よみ。源氏「ごくわく（御畫）及び、ごくわくじつ（御畫日）を見よ。

ごばーくーおーり　琥珀織（名）なたこに似て光澤ある組布の一種。羽織地又は帶地などに用ひる。元は、たちちやうと稱して、和年間より京都の職工織り始む。

ごーばーか　（名）【植】❶いぶきじゃかうきう（石蒲荷）の異名。❷ひめはくかの異名。

ごばーくーぎ　小羽釘（名）こばねくぎ（小羽根釘）に同じ。

ごばーくーこ　强供御（名）こはめし（强飯）をいふ。禁中女房の詞。

ごばーこーたーう　〜疣拍繻（名）かんてん製にして、砂糖をまぜ、れり固めて食べる菓子。

ごばーげ　恐氣（名）動こはさう。こはさま。苦原傳授手習鑑「我が詞を用ひずば七生迄の抑窓そと聞いて、布世が、こはげも殺し」

ごばーけーたーつ　恐氣立（自動）恐ろしき氣狀になる。傳田兵衛名所蓋「打つてかかる頻魂、思ひこたる顔色に、長田しきりに恐氣立ち」

ごばーこーあばーせ　小笹合（名）小笹の物合せをすること。夫木「九條の宮の御息所の御もとに、こはこ合せのころ」

ごばーこーうーてーんーそーう　〜御八講修奏（名）室町時代、法華八講を行はれし時、置かれし職名。

ごばーこーばー　恐恐（副）おそるおそる。「恐れつつ、蛭丸は、こはこは立ち寄つて、そつと覗けば」

ごばーこーばー　（名）動こはりたる紙・革・布などの縫れ合ふ音、又は其のままにいふ語。

ごばーこーばーし　强强（形シク）❶こはきやうなり。こはりたるさまなり。北斗七星「こはこはしくさうぞきたるももあり」❷こつこつしたるさまなり。「なめらかならぬさまにもどろの女ぶみに、なかは過ぎて書きすくめたる、あうなたてゆ書おの、づからこはこはしき筆によみなされなどしつつ、ここさらびたり」❸あらあらし。無骨なり。盛衰記三小説「田舎侍の、氣折りにこはこはしかりけるが」

ごばーこーばーしーさ　强强（名）こはこはしきさま。こはこはしき度合。

ごばーこーばーし　强（名）こはきこと。こはき度合。

ごばーこーさ　恐（名）恐ろしさ。恐しき度合。太平記「思ひ儲けたる者共が、死に狂ひをせんと引き纏もつたるがこはさに」

ごばーこーうーそーく　强裝束（名）烏帽子に硬き纏をつけ、袖・裾表等一切を硬く調製したるもの。海人藻屑「烏羽舵の御代より强き裝束用ふる故に、衣紋の少法出来たるなるべし。上代は皆大裝束とて、ふくく初めたる强裝束の衣紋を書きたるは、絵院以後の不電也」

ごばーこーうーばーかーで　（名）【植】蔵樹（ぞう）科、域樹園の常緑喬木。葉は倒卵形、裏面の葉脈上に毛茸あり。花は黄色にして單性、雄雌異株、雄蕊房花序に排列し、春季開き、後鋭角狀の翅果を結ぶ。我が國、各地の山地に自生す。きはなはうちはかへで。

ごばーもーぬき　牛蒡抜（名）太く長きものを、一氣に容易く抜き取ること。

ごばーもーねーぎ　牛蒡根（名）牛蒡の根の如き細長き根。

公家も立ち出でて、ひくや子の日の松とりの牛蒡根」

ごーばーらーは　〜古傍輩（名）古き傍輩。輩は書の同僚。

ごーばーらーへーん　〜御方便（名）❶うべん（方便）の敬語。源氏「佛の御はうべんにて、彼のかばねを拾ひて、つひにひじりの道に入り侍りにけるこ」❷まはりあはせのよきこと。都合のよきこと。

ごばーらーあつほし　五方井筒星（名）紋所の名。

ごーばーかーし　小馬鹿（名）すこしおろかなこと。

ごーばかーぐし　小馬鹿臭（形ク）や

馬鹿くさし。又、ばかくさしを强めていふ。

ごーばかーせ　小博士（名）明經博士を大博士と稱するに對して附せし後世の名目なるべし。慶長記「大臣殿は小博士に當基と云ふ者を御使にて」

ごばーかーね　强金（名）特に質固き金屬。字鏡集「鑌（こがねつくる）鑌（はがね）」

歌合「工匠鑌れ行く人の心のこはがねを、からくりかれてねをのみぞなく」

ごーばーまー　小袴（名）❶指貫の袴の異名。袋語「陸奥國殿は小袴きて、あしだはかせ給ひて」❷後世、武家にて、素襖などの下に用ひし指貫に似たる袴。慶長記「其の後鎧をば底ぎ殿きて、直垂・小袴袴入計り、其の後鎧をば底ぎ殿きて、直垂・小袴袴入也」他絵卷「肌には腹卷・小袴袴に水無迫袴をはかせ」❸半袴、即ち現今の袴より、ずいぶんちのやや低きもの。

ごばーかーばーし　小馬鹿廻（名）愚かなる者をあしらふやうにすること。八笑人「上「いい年をした者を、こばかまはしにして」

ごばーがーう　恐（他動）おどす。おそれがせよらかの」

ごばーがーる　恐（自動）こはしと思ふ。恐ろしく思ふ。しきりに恐る。枕「なはこそそこはがり給はめなど打ちいひたるよ」

ごーばーきー　小秋（名）小さき蕨。又、蕨をいふ。古今「宮城野のもとあらの小萩露を重み、風を待つごと君をこそ待てと」源氏「蕨手重み、風ふせぎしかげの枯れしよ」「こはぎが上でしづ心なき」後拾遺「上「小蕨咲く秋までもあらば思ひ出でん、嵯峨野の露をぬきし浴は其の日と」

こはぎーはーら　小秋原（名）こはぎ（小秋）の一面に生えてもる處。金葉「小秋原句ふ盛りは白露も、いろいろにこそ見え渡りけれ」千載「小秋原まだ花咲かぬ宮城野の、風やこよひの月に鳴くらん」

ごーばーく　〜琥珀（名）❶【鑛】不規則なる塊塊をなし往往木片又は昆蟲を包含し、透明乃至不透明にして脂肪光澤著しきものの。黄・赤・褐等の色を呈す。前世界の針葉樹の樹脂が地中に埋没して成りしもの。美しき裝飾に供せらる。本邦には貫の琥珀を產せず。松風村雨東帶盛三「琥珀の櫛、蘇芳の櫛の櫛をあさりけり」❷こはくおり（琥珀織）の略。

ごーばーく　〜賈舶（名）あきんどぶね。商船。商船。張籍詩「賈舶何時國興國亡」八犬「」

ごーばーく　御畫（名）ごくわく（御畫）の音賞よみ。源氏「ごくわく（御畫）及び、ごくわくじつ（御畫日）を見よ。

ごばーくーおーり　琥珀織（名）なたこに似て光澤ある組布の一種。羽織地又は帶地などに用ひる。元は、たちちやうと稱して、和年間より京都の職工織り始む。

ごーばーか　（名）【植】❶いぶきじゃかうきう（石蒲荷）の異名。❷ひめはくかの異名。

ごばーくーぎ　小羽釘（名）こばねくぎ（小羽根釘）に同じ。

ごばーくーこ　强供御（名）こはめし（强飯）をいふ。禁中女房の詞。

ごばーこーたーう　〜疣拍繻（名）かんてん製にして、砂糖をまぜ、れり固めて食べる菓子。

ごばーげ　恐氣（名）動こはさう。こはさま。苦原傳授手習鑑「我が詞を用ひずば七生迄の抑窓そと聞いて、布世が、こはげも殺し」

ごばーけーたーつ　恐氣立（自動）恐ろしき氣狀になる。傳田兵衛名所蓋「打つてかかる頻魂、思ひこたる顔色に、長田しきりに恐氣立ち」

ごばーこーあばーせ　小笹合（名）小笹の物合せをすること。夫木「九條の宮の御息所の御もとに、こはこ合せのころ」

ごばーこーうーてーんーそーう　〜御八講修奏（名）室町時代、法華八講を行はれし時、置かれし職名。

ごばーこーばー　恐恐（副）おそるおそる。「恐れつつ、蛭丸は、こはこは立ち寄つて、そつと覗けば」

ごばーこーばー　（名）動こはりたる紙・革・布などの縫れ合ふ音、又は其のままにいふ語。

ごばーこーばーし　强强（形シク）❶こはきやうなり。こはりたるさまなり。北斗七星「こはこはしくさうぞきたるももあり」❷こつこつしたるさまなり。「なめらかならぬさまにもどろの女ぶみに、なかは過ぎて書きすくめたる、あうなたてゆ書おの、づからこはこはしき筆によみなされなどしつつ、ここさらびたり」❸あらあらし。無骨なり。盛衰記三小説「田舎侍の、氣折りにこはこはしかりけるが」

ごばーこーばーしーさ　强强（名）こはこはしきさま。こはこはしき度合。

ごばーこーばーし　强（名）こはきこと。こはき度合。

ごばーこーさ　恐（名）恐ろしさ。恐しき度合。太平記「思ひ儲けたる者共が、死に狂ひをせんと引き纏もつたるがこはさに」

ごばーこーうーそーく　强裝束（名）烏帽子に硬き纏をつけ、袖・裾表等一切を硬く調製したるもの。海人藻屑「烏羽舵の御代より强き裝束用ふる故に、衣紋の少法出来たるなるべし。上代は皆大裝束とて、ふくく初めたる强裝束の衣紋を書きたるは、絵院以後の不電也」

ごばーこーうーばーかーで　（名）【植】蔵樹（ぞう）科、域樹園の常緑喬木。葉は倒卵形、裏面の葉脈上に毛茸あり。花は黄色にして單性、雄雌異株、雄蕊房花序に排列し、春季開き、後鋭角狀の翅果を結ぶ。我が國、各地の山地に自生す。きはなはうちはかへで。

ごばーもーぬき　牛蒡抜（名）太く長きものを、一氣に容易く抜き取ること。

ごばーもーねーぎ　牛蒡根（名）牛蒡の根の如き細長き根。

公家も立ち出でて、ひくや子の日の松とりの牛蒡根」

ごーばーらーは　〜古傍輩（名）古き傍輩。輩は書の同僚。

ごーばーらーへーん　〜御方便（名）❶うべん（方便）の敬語。源氏「佛の御はうべんにて、彼のかばねを拾ひて、つひにひじりの道に入り侍りにけるこ」❷まはりあはせのよきこと。都合のよきこと。

ごばーらーあつほし　五方井筒星（名）紋所の名。

ごーばーかーし　小馬鹿（名）すこしおろかなこと。

ごーばかーぐし　小馬鹿臭（形ク）や

ごばーかーせ　小博士（名）明經博士を大博士と稱するに對して附せし後世の名目なるべし。慶長記「大臣殿は小博士に當基と云ふ者を御使にて」

ごばーかーね　强金（名）特に質固き金屬。字鏡集「鑌（こがねつくる）鑌（はがね）」

歌合「工匠鑌れ行く人の心のこはがねを、からくりかれてねをのみぞなく」

ごーばーまー　小袴（名）❶指貫の袴の異名。袋語「陸奥國殿は小袴きて、あしだはかせ給ひて」❷後世、武家にて、素襖などの下に用ひし指貫に似たる袴。慶長記「其の後鎧をば底ぎ殿きて、直垂・小袴袴入計り、其の後鎧をば底ぎ殿きて、直垂・小袴袴入也」他絵卷「肌には腹卷・小袴袴に水無迫袴をはかせ」❸半袴、即ち現今の袴より、ずいぶんちのやや低きもの。

ごばーかーばーし　小馬鹿廻（名）愚かなる者をあしらふやうにすること。八笑人「上「いい年をした者を、こばかまはしにして」

ごばーがーう　恐（他動）おどす。おそれがせよらかの」

ごばーがーる　恐（自動）こはしと思ふ。恐ろしく思ふ。しきりに恐る。枕「なはこそそこはがり給はめなど打ちいひたるよ」

ごーばーきー　小秋（名）小さき蕨。又、蕨をいふ。古今「宮城野のもとあらの小萩露を重み、風を待つごと君をこそ待てと」源氏「蕨手重み、風ふせぎしかげの枯れしよ」「こはぎが上でしづ心なき」後拾遺「上「小蕨咲く秋までもあらば思ひ出でん、嵯峨野の露をぬきし浴は其の日と」

こはぎーはーら　小秋原（名）こはぎ（小秋）の一面に生えてもる處。金葉「小秋原句ふ盛りは白露も、いろいろにこそ見え渡りけれ」千載「小秋原まだ花咲かぬ宮城野の、風やこよひの月に鳴くらん」

ごーばーく　〜琥珀（名）❶【鑛】不規則なる塊塊をなし往往木片又は昆蟲を包含し、透明乃至不透明にして脂肪光澤著しきものの。黄・赤・褐等の色を呈す。前世界の針葉樹の樹脂が地中に埋没して成りしもの。美しき裝飾に供せらる。本邦には貫の琥珀を產せず。松風村雨東帶盛三「琥珀の櫛、蘇芳の櫛の櫛をあさりけり」❷こはくおり（琥珀織）の略。

ごーばーく　〜賈舶（名）あきんどぶね。商船。商船。張籍詩「賈舶何時國興國亡」八犬「」

ごーばーく　御畫（名）ごくわく（御畫）の音賞よみ。源氏「ごくわく（御畫）及び、ごくわくじつ（御畫日）を見よ。

ごばーくーおーり　琥珀織（名）なたこに似て光澤ある組布の一種。羽織地又は帶地などに用ひる。元は、たちちやうと稱して、和年間より京都の職工織り始む。

ごーばーか　（名）【植】❶いぶきじゃかうきう（石蒲荷）の異名。❷ひめはくかの異名。

ごばーくーぎ　小羽釘（名）こばねくぎ（小羽根釘）に同じ。

ごばーくーこ　强供御（名）こはめし（强飯）をいふ。禁中女房の詞。

は[連体]拒言[連体]すれば、山の神はこはし、身共はこはうないか」

こはいものなし　我がままに増長して、恐怖するものなし。

(諺)恐いものの見たさ　こはいものは、皆通人情の弱点にて、知りて見たしと思ふこと。

こはじ　(名)　簾を巻きて釣り上げおく綱。枕「三もかからのすは、きしてこはきゆ(こはじ)の打ちおかるるいとしるし」　冷忠後百首「うちなびくこすのこはじにわかれきて、床の上にも寝もる事かな」

こ-はし　小橋　(名)　小さき橋。(大橋の對)

こ-はしこみ　小牛部　(名)　小さき牛部(ぶ)。枕「かからぎぬどもは牛部こはしこみ(ぶ)のみすより出てたるはどと」

こは-じひ　強強　(名)　手強くしぶること。

こは-しやうそく　強装束　(名)　こはさうそく(強装束)に同じ。

こ-はしり　小走　(名)　[1]小股に急き歩くこと。[2]狂詩、武家の婦人に奉へて雑用を辨ぜし少女。

こはしり-しゆう　小走衆　(名)　かちしゆう(歩行衆)に同じ。走衆。

こはす　乞　(他動サ)　こふ(乞)の延。数記「ここなみが、な許袋佐(ばし)」

こはす　毀　(他動サ)　こぼつ。破る。くだく。くづす。破壊す。

こ-ます　(他動サ)　省略す。(敬語)　他我身の上「文字の心をもよく知らずして、片言まじりに物をこはし」

こはぜ　鞐　(名)　書物の帙・足袋・脚半などの端に附けて、こはぜにかけ、角・鼈甲・象牙などにて製る。牙鞐。

こはぜ-かけ　鞐掛　(名)　[1]こはぜを懸くる爲めにこしらへある所。[2]こはぜにて懸け合はする様に裂したるもの。

こはぜ-さやはん　鞐脚袢　(名)　こはぜにて懸け合はする様に裂りたる脚袢。博多小女郎鈴枕「一身綻い出立ちの袷脚引、牙鞐脚袢(はん)に身を緊め」

こはた　(名)　下人の著る一種の衣。づりの異名。(語源)　一説、機(はた)にて、木の皮にて織りたる布か。袋草子「こはた山裾野の嵐寒ければ、伏見の里もいこそねられぬ。是れは後鳥羽院の御見に侍りけるに、夜たたずみありきけるに、あやしの宿直人のつちにふせりて詠めける歌なり。聞えず小袖をぬぎて腰ひけ」とぞ。下蔵のきるつづりと云ふ物をばこはたといふと」

こ-はた　和名抄「機(はた)」　字鏡集「朴(はた)」

こ-はた　小鰭　(名)　[節]鰭(はた)の幼なるもの。江鯽(鰭魚)。

こ-はたぞく　「番族の木小族(はたぞく)のうへを通ふとは、目には見れどもただにあはぬかも」[2]さしこばた(差小族)に同じ。

こはたぞく　小族卒　(名)　小族を附くる卒。今川大小雲霧「族卒の節をかぞふる事は、小族梯も同前」

こは-たちあひ　後場立合　(名)　こば(後場)に同じ。

こは-だんぱん　強談判　(名)　手づよき談判。

こ-はち　小鉢　(名)　小さき鉢。浮世風呂「一人あたりにちらして、傍にある入物・小鉢は、そのあたりにぶちこはすだ」

こ-はちまき　五八　(名)　遊女に附せし一天(語源)の名目。天神の事は、下女を見よ。色道大鑑「目の下女を見よ。色道大鑑「目の下女を見よ。色道大鑑「目の

先手の戦船、又は飛脚船に用ふ。松蕃薬八門鼎立「同山がよひの六ちよこばやに鱠を鍋立て」小剣。

こばやし 小早（形ク）すこし早し。やや早し。

こばやし 子早（形ク）子を孕むことはやし。直ちに懐妊す。

こば-やね 木羽尾根（名）こけらぶきの屋根。東北地方の方言。

こば-ゆみ 張弓（名）つよき弓。がらきゆゆう。宇治集「張弓」

こば-ゆり （名）【植】ばゆり（蕃薬葉貝母）の異名。

こばら 小原（名）狭き原野。

こばら 木原（名）木の生えたる原。拾丹集「山里の梅のこばらに咲ばかり、いほりてをらん花を見がてら」

こ-はら 小腹（名）したはら。このかみ。

こはらおたち 小腹立（名）やや腹立つ。すこしく怒氣を生ず。天鶯鳥「小腹が立つやら可笑しいやら、胸が痛いと鏡ぎしみし」

こば-らか 張（副）荒くかたくるしき。ことばはしき意にいふ語。平家「片田舎の侍の、窮めてこはらかなるが」

こはらまき 小腹巻（名）少年の著る小さき腹巻。承久軍物語「判官は頗子小腹巻」

こ-はり 小張（名）はくちやう（白鞍）に同じ。平治「正安黒絲縅の腹巻の上に、小張り著て」

こ-はり 小針（名）小さき針。薩摩歌「辛や悲しや、忍び泣き、涙小針にしくしくと、まばらまばらに話ひこぼすし」

こ-はる 小春（名）陰暦十月の異称。和歌にて赤にはたるより いふ。

こ-ばん 一同じ。

こばる 張（自動四）こはる（張）に同じ。

こ-ぼる 毀（自動下二）破れ碎く。くづる。

こぼるえら 小春空（名）小春の頃の空。

こ-ばると （英 Cobalt）（名）【鑛】鑛に似たる金鑛。少しく赤味を帶び、磁性を有す。金鑛としては殆ど應用なし。

こばるとーくわ （名）【鑛】結晶は小にして、針狀・束狀等の塊をなす。又、土狀・層狀なるもあり。眞鍮光澤又は金剛光澤あり、多少赤色若しくは桃灰色なり。酸化こばるとを主成分とす。我が國・但馬より少しく出づ。青色の繪の具を製す。

こばるなぎ 小春風（名）小春の頃、海のなぎ。

こばるび 小春日（名）こはる（小春）に同じ。

こばるびより 小春日和（名）小春の頃のよき天氣。

こ-ぼれ 毀（名）一こはること。はれたること。二こはれたるもの。小こじ。片。碎片。

こぼれもの 毀物（名）一前條に同じ。二こはれ易きもの。「こはれもの用心」

こぼれる 毀（自動下二）こはる（毀）の口語。

こ-ぼん 孤帆（名）帆かけたる唯一隻の船。

こ-ぼん 一虎斑（名）とらふ（虎斑）に同じ。

こ-ぼん 一火伴（名）とか（火伴）に同じ。

こ-ぼん 枯攀（名）【化】やきみやうばん（明礬）の異名。

こ-ぼん 小判（名）一紙などの面の狭小なるもの。（天判・中判などの對）二天正の頃より江戸幕府の末まで鑄造せし薄き稍圓板狀の金銀貨の總稱。一枚一兩に相當するもの。武藏小判・駿河小判・慶長小判・元禄小判など補類多し。一馬判。（天判の對）心中萬年草「紅の花の樣な小判二百五十兩」

こ-ぼん 小番（名）こばんしゅう（小番衆）に同じ。

こぼん （名）官渡の渡船の稱。

こ-ぼん 小鵜（名）【動】鳥類中、涉禽類の一種。體形鴨に似て、嘴長く紅色を呈し、光澤黃色を帶ぶ。體は黑くして腹を白し。脚は長くして赤く、趾は長きも紅蹼の用をなさず。水邊に常棲す。田鷸。紅冠水鷸。

こ-ぼん 一火番（名）諸家にて、しもべ（冠僕）の稱。選歩色葉「火番、冠僕」

ごぼん 一御飯（名）めし（飯）の敬語。ひ〜ごはん。午飯（ひるげ）。午餐。蘇鐵詩話「玉接竹齋齒午飯客」

ごぼん 一誤判（名）誤りて判斷すること。又、其の判斷。

ごぼん 一御番（名）當番又は當直の敬語。名宇津保「帝相中將の君、ごばんの夜、同じ帝の男・女まうらのぼりたり」

ごぼん 一非盤（名）非をうつに用ふる盤。厚き方形の板に、縦横おのおの十九の罫を交叉して、三百六十一路を作る。和名抄「局五平」枕「非をやんごとなき人のうつとて中略」ばんより少し遠くて、おのおのの非のかたちに召し寄せ、非盤召し出でて、御非盤召し寄せ、非盤則。

こばん 小番（名）【植】ばんしゅう（小番草）に同じ。

こばん （名）官渡の渡船の稱。

こばん 小鵜（名）【動】鳥類中、涉禽類の一種。體形鴨に似て、嘴長く紅色を呈し、光澤黃色を帶ぶ。體は黑くして腹を白し。脚は長くして赤く、趾は長きも紅蹼の用をなさず。水邊に常棲す。田鷸。紅冠水鷸。

こ-ばん 一火番（名）諸家にて、しもべ（冠僕）の稱。選歩色葉「火番、冠僕」

ごぼん 一御飯（名）めし（飯）の敬語。ひ〜ごはん。午飯（ひるげ）。午餐。蘇鐵詩話「玉接竹齋齒午飯客」

ごぼん 一誤判（名）誤りて判斷すること。又、其の判斷。

ごぼん 一御番（名）當番又は當直の敬語。名宇津保「帝相中將の君、ごばんの夜、同じ帝の男・女まうらのぼりたり」

ごぼん 一非盤（名）非をうつに用ふる盤。厚き方形の板に、縦横おのおの十九の罫を交叉して、三百六十一路を作る。和名抄「局五平」枕「非をやんごとなき人のうつとて中略」ばんより少し遠くて、おのおのの非のかたちに召し寄せ、非盤召し出でて、御非盤召し寄せ、非盤則。

こ-ばん-いし 一御番醫師（名）江戸幕府の職名。常中に宿直して、不時の治療に備ふる醫師。

こばん-いただき 小判頂（名）【動】魚類中、鯉類の一種。體の長さ三尺餘りなるものあり。ほぼ、鯉の形にして長く、小鱗を以て被はる。頭上には前背鰭の變形したる吸盤を具へ、他の大魚の腹部又は船舶の側面に吸著す。たゆすく本非中を泳行して、食物を補らふ。東部あふりかの海岸に住む。土人はこの魚の尾非に鬚を固着して海水に放ち、以てうみがめに吸著せしめてこれを捕獲すといふ。こばんざめ。

こばん-いり 御番入（名）江戸幕府の職、大番の家筋の者の番頭になること。斯様の時、大番の家筋の者の番頭になること。「斯様の時、大番の家筋の者の番頭になること。年の春大御番、御番入之事」蘆陵遺記

こばん-いを （名）【動】こばんいただき（小判頂）の異名。

こばん-がうし 非盤格子（名）非盤の目の如き格子。薩摩歌「非盤格子の四五六モ」

こばん-がしら 小番頭（名）小番衆の頭。近習の頭。

こばん-がた 小判形（名）小判の形。楕圓形。

こ-ばん-きん 小半斤（名）半斤の二分の一。四半斤。

こばん-きん 小判金（名）金貨の小判。天稚彦草紙「經濟雜誌集」天正年中造る大稚金・小稚金・方金・角金・長四年始鑄・方金・角金・慶長大判・慶長小判・慶長小判・慶長方金・慶長角金・慶長丁銀・慶長豆板・慶長小粒金・方金・角金・慶長豆板・慶長豆板」

こばん 小判銀（名）銀貨の小判。

科。小判草筋の小一平生草本。葉は細長にして尖る。花は小穗をなし、小穗は楕圓形扁平の穗狀花序に集生し、長き花梗にして下垂し、夏日、黃綠色を呈す。南部歐羅巴の原産にして、觀賞用として栽培せらる。たはらむぎ。

こばん-さめ 小判鮫（名）【動】こばんいただき（小判頂）の異名。

こばん-し 小判師（名）元文以前の金座の座人の稱。

こ-ばん-し 小半紙（名）半紙の小形なるもの。天稚彦草紙「紙屋の治兵衛、小袴狂ひが形屏紙で、一分小半紙、雙雙紙で、内の身代減殺紙」八笑人「無錢（ぜに）の算段、小半紙の安いのでござりまする」

ごばん-じま 非盤縞（名）非盤の目の如き縞模の縞ある織物。

こばん-しゅう 小番衆（名）室町時代、近習の稱。小番。建内記「寛十二年今日於室町殿有祗候習禮、是近習並小番衆、信濃玄家にて近習のことなり」

こばん-せき 一虎斑石（名）近江國高島郡地方より出づる一種の石。黑くして白斑あり。硯材などに用ふ。

ごばん-たき 御飯炊（名）ごぜんたき（御膳炊）に同じ。

ごばん-だて 御盤立（名）茶所にて御膳をのせ置く足の四本つきたる臺。

こばん-もく 一虎斑竹（名）【植】ばんちく（斑竹）の異名。

こ-ばんやう 小半挺（名）一挺の四分の一。豆腐にいふ語。

こばん-おとう 小判女郎（名）小判を女に贈べて愛すべき意にいふ語。淀屋田中藩「耳を摘んで懷中した、是れ抽口から手を入れて、虚か誠か是れ見や。

ごばん-ふん 小判粉（名）あをきん（青金粉）に同じ。

こひ 一御番入（名）江戸幕府の職名。常中に宿直して、不時の治療に備ふる醫師。

こひ 鯉（名）魚類中、鯉類の一種。體の長さ三尺餘りなるものあり。ほぼ、鯉の形にして長く、小鱗を以て被はる。頭上には前背鰭の變形したる吸盤を具へ、他の大魚の腹部又は船舶の側面に吸著す。たゆすく本非中を泳行して、食物を補らふ。東部あふりかの海岸に住む。土人はこの魚の尾非に鬚を固着して海水に放ち、以てうみがめに吸著せしめてこれを捕獲すといふ。こばんざめ。

ごばん-いり 御番入（名）江戸幕府の職、大番の家筋の者の番頭になること。斯様の時、大番の家筋の者の番頭になること。年の春大御番、御番入之事」蘆陵遺記

ごばん-いを （名）【動】こばんいただき（小判頂）の異名。

ごばん-がうし 非盤格子（名）非盤の目の如き格子。薩摩歌「非盤格子の四五六モ」

こばん-がしら 小番頭（名）小番衆の頭。近習の頭。

こばん-がた 小判形（名）小判の形。楕圓形。

こ-ばん-きん 小半斤（名）半斤の二分の一。四半斤。

こばん-きん 小判金（名）金貨の小判。天稚彦草紙「經濟雜誌集」天正年中造る大稚金・小稚金・方金・角金・長四年始鑄・方金・角金・慶長大判・慶長小判・慶長小粒金・方金・角金・慶長豆板・慶長豆板」

こ-ばん 小判銀（名）銀貨の小判。

こ-ばん-ぜし 御飯蒸（名）ごぜんむし（御膳蒸）に同じ。

こばん-め 非盤目（名）非盤の目の如く、一つの方形に縦横等分に、數條の平行線を引きて分かちたる目。

こばん-わり 非盤割（名）市街を非盤の目の如く正しくわること。

こひ 戀（名）こふること。ひたること。戀慕。戀愛。萬「あすか川よどを去らず立つきりの、思ひすべき孤戀（こひ）にあらなくに」同「これの孤戀（こひ）いまだ荷ひあへむまねに、郷より馬にこひこば荷ひあへむかも」

こひの 戀慕。戀の。

こひのいきち 戀慕地。戀慕に關する意氣地。生玉心中「相屋嬢嬢は遊業にこざる、戀の意地酒やとんとん」

こひのいちねん 戀一念（名）一途に思ひこがれたる戀慕の情。會我兄人「過りし戀の一念を、此の石にとどめおきし」

こひのうた 戀歌（名）こひうた（戀歌）に同じ。娥歌加賀多「歌の道にも、戀の歌を手本として」

こひのうはに 戀上荷（名）戀の苦しさを重荷に譬へて、其の上の幾部分。日本振振柳始「くるしき妹を選れて來て、戀の上荷をはねさせたなあ」

こひのおもに 戀重荷（名）戀のため心の堪へ難く感ずること。諺「名もこと わりや難く戀の重荷、げに持ちかねる此の身かな」狂言「文戀の重荷といふがあるの、四四きおよりたが」

こひのかたき 戀敵（名）我が戀人を奪ひ又は戀を妨ぐる敵。こひのあだ。浦島年代記「戀の敵は御殿のいたづらもの」

こひのきづな 戀絆（名）戀にひかされること。薩摩歌「戀の絆に繋ぎとめ、物の見事にそうて見しよ」

こひのく 戀句（名）狂言に用ふる詞。おまくの句は、「戀の句ではこざらぬか」

こひのけぶり 戀煙（名）戀ひこがるる情の切なるさまを、物の火に燃がれて煙に譬へていふ語。源氏「かがり火に立ちそふ戀の煙こそ、世にはたえせぬほのはなりけり」夫木「秋八重霧も風吹く空ぞはなびきけり、戀の煙ぞやるかたもなき」

こひのこころ 戀心（名）戀ひ慕ふ情。狂言「あかがりは戀の心にさも似たれ、ひびにまさりて思はれぞする」

こひのさか 戀坂（名）こひのたうげ（戀峠）に同じ。阿波反魂香「太夫後、名を遷山と呼ばれしも、人に逢れる戀の坂」

こひのさかり 戀盛（名）賞愛の盛さかり。又、戀ざかり。萬「櫻花時はすぎぬれど、見る人の戀盛（さかり）と今し散るらむ」

こひのせき 戀關（名）互ひの戀を妨げ隔つること。又、其のもの。俗樣三「許さぬ戀の關の戸や、いつそ山邊と思ひしも」

こひのせきもり 戀關守（名）戀の關を守る人。戀を妨ぐる人。狂言「歌句には鳥もせめてわかれはのべて鳴け、人あもらすなこひの關守」

こひのぞめき 戀のため心の亂れ。夫木「伊勢の海の藻のまでがたなれども、戀のぞめきもいとなかりけり」

こひのたいかい 戀大海（名）戀の深く廣きを大海に譬へていふ語。天稚彦草紙「戀の底深き、これかや戀の大海をかくも干されぬ鶴川」

こひのたちげ 戀峠（名）戀の頂。情歌の

高潮に達したること。賀古鶴所「七夕恋」「二人と上はり医、恋の舟を打ち越して」

こひの つかれ 恋衆 恋の心の亂れを慰むること。「緒にて衆ぬるに曾へて」いふ語。詞書「かかる歌の産出ではそれこそ恋の衆れなれ」

こひの つじうら 恋辻占 恋につきてさまざまのあてごとを記したる辻占。

こひの つま 恋褄 恋のてがかり。恋の端緒。六帖「つれづれと袖のみひじりて春の日の、ながめは恋のつまにぞあり」源氏「今は何につけてか心をもち亂らさん」「似げなき恋のつまなりや」

こひの なかだち 恋中立 恋人の媒介を打物師「恋の中立ちの名誉」

こひの なごさ 恋の心をなぐさむること。又、そのもの。恋ふる心のなぐさめ。賀「さはかたは貴になるものとも、花にのみ咲きて見えこそ、恋之名草(こひのなぐさ)に」

こひの なみ 恋波 恋を波に曾へていふ語。鶴島年代記「ことんとそこちらを聞らして、恋の波をあげたがよし」

こひの なみだ 恋涙 恋ひて泣く涙。月詣集「手ことひ、そつつみかれてはは ちひつれ、恋のなみだにぬれし袖も」

こひの はつかぜ 恋初風 はつ恋の心。人を恋ひそむる心。夫木「紅葉がやどの袂の上素はいかならん、けふ吹き初風」

こひそむる はな 恋花 恋を花に曾へていふ語。平家女護島「朱雀の師所の菜山に、花の咲いたを見たるか、貴に、きっと見ればば、恋の花をいたづら花や」

こひの ふね 恋船 恋の心の深きを河に曾へていふ語。詞書「三つの河所記えに」

こひの ふみ 恋文 こひぶみ(恋文)に同じ。狂言「恋の文ぢやにより、重重いと見えた」

こひの ほたる 恋蛍 恋ひこがるる思ひのひを、蛍の火にかけていふ語。夫木「人のまひこと恋のまがきにことづてぬ」「恋の蛍は燃えはてぬ」

こひの みち 恋道 こひぢ(恋路)に同じ。天鶴「恋が文も見ぬ恋の道、別れて、こそは帰りけれ」

こひの みづ 恋水 恋を水に曾へていふ語。心中刃水鶴「日に重ね井筒の恋の水、むすび波も手は多けれど」

こひの もちぶね 恋持夫 恋の重荷を持ちて運ぶ人夫の義にて、恋のために心を苦しむる人。諸嘗「恋重荷なりとも迷ふまでもし、恋の持夫(こひのもちぶね)にならうよ」

こひの やっこ 恋奴 恋の様に心の使はるるを奴に曾へていふ語。賀「打ておもも忘れだにもえすやとした鶴」「恋の愛しず恋之奴(こひのやっこ)は」同「すすらを」「恋のさとき心も今はなし、恋之奴(こひのやっこ)にわれは死ぬべし」

こひの やま 恋山 恋の深もれるを山に曾へていふ語。浪花「なに、ありがたきこひの山にしも、まどひ侍らん」

こひの やまぢ 恋山路 前條に同じ。賀「源氏「近きためしをおぼすにぞ、恋の山路はえもどくまじき御心まじりけける」

こひの やまひ 恋病 恋恋の情熱し て起こりたる病氣。こひわづらひ。こひやみ。金葉「事手かくばかり恋のやまひは重けれど、敵歌にかけきけてあはぬ中かなこ」「恋歌歌「とくかしたら恋のやまひ」

こひの ゆき 恋雪 恋の心のたゆたひを雪に曾へていふ語。「恋の雪の消ぬ間に、恋の涙の袖にも、恋る恋の涙はあり けり」

こひの ゆふ 恋文 こひぶみ(恋文)に同じ。狂言「恋の文ぢやにより、重重いと見えた」

こひの ほたる 恋蛍 恋ひこがるる思ひのひを、蛍の火にかけていふ語。夫木「人のまひこと恋のまがきにことづてぬ」「恋の蛍は燃えはてぬ」

こひの うらない 恋辻占 恋につきてさまざまのあてごとを記したる辻占。

こひの つま 恋褄 恋のてがかり。恋の端緒。六帖「つれづれと袖のみひじりて春の日の、ながめは恋のつまにぞあり」源氏「今は何につけてか心をもち亂らさん」「似げなき恋のつまなりや」

こひの なかだち 恋中立 恋人の媒介を打物師「恋の中立ちの名誉」

こひの なごさ 恋の心をなぐさむること。又、そのもの。恋ふる心のなぐさめ。賀「さはかたは貴になるものとも、花にのみ咲きて見えこそ、恋之名草(こひのなぐさ)に」

こひの なみ 恋波 恋を波に曾へていふ語。鶴島年代記「ことんとそこちらを聞らして、恋の波をあげたがよし」

こひの なみだ 恋涙 恋ひて泣く涙。月詣集「手ことひ、そつつみかれてはは ちひつれ、恋のなみだにぬれし袖も」

こひの はつかぜ 恋初風 はつ恋の心。人を恋ひそむる心。夫木「紅葉がやどの袂の上素はいかならん、けふ吹き初風」

こひそむる はな 恋花 恋を花に曾へていふ語。平家女護島「朱雀の師所の菜山に、花の咲いたを見たるか、貴に、きっと見ればば、恋の花をいたづら花や」

こひの ふね 恋船 恋の心の深きを河に曾へていふ語。詞書「三つの河所記えに」

こひの ふみ 恋文 こひぶみ(恋文)に同じ。狂言「恋の文ぢやにより、重重いと見えた」

こひの ほたる 恋蛍 恋ひこがるる思ひのひを、蛍の火にかけていふ語。夫木「人のまひこと恋のまがきにことづてぬ」「恋の蛍は燃えはてぬ」

こひの みち 恋道 こひぢ(恋路)に同じ。天鶴「恋が文も見ぬ恋の道、別れて、こそは帰りけれ」

こひの みづ 恋水 恋を水に曾へていふ語。心中刃水鶴「日に重ね井筒の恋の水、むすび波も手は多けれど」

こひの もちぶね 恋持夫 恋の重荷を持ちて運ぶ人夫の義にて、恋のために心を苦しむる人。諸嘗「恋重荷なりとも迷ふまでもし、恋の持夫(こひのもちぶね)にならうよ」

こひの やっこ 恋奴 恋の様に心の使はるるを奴に曾へていふ語。賀「打ておもも忘れだにもえすやとした鶴」「恋の愛しず恋之奴(こひのやっこ)は」同「すすらを」「恋のさとき心も今はなし、恋之奴(こひのやっこ)にわれは死ぬべし」

こひの やま 恋山 恋の深もれるを山に曾へていふ語。浪花「なに、ありがたきこひの山にしも、まどひ侍らん」

こひの やまぢ 恋山路 前條に同じ。賀「源氏「近きためしをおぼすにぞ、恋の山路はえもどくまじき御心まじりけける」

こひの やまひ 恋病 恋恋の情熱して起こりたる病氣。こひわづらひ。こひやみ。金葉「事手かくばかり恋のやまひは重けれど、敵歌にかけきけてあはぬ中かなこ」「恋歌歌「とくかしたら恋のやまひ」

こひの ゆき 恋雪 恋の心のたゆたひを雪に曾へていふ語。「恋の雪の消ぬ間に、恋の涙の袖にも、恋る恋の涙はあり けり」

こひの ゆふ 恋文 こひぶみ(恋文)に同じ。狂言「恋の文ぢやにより、重重いと見えた」

こひの よ 恋世 男女恋愛の世の中。冥途飛脚「何歳の田舎も恋の世や、背門に米を縛り十七八ぶ」

こひの よどの 恋淀殿 恋ひわびつつ すまうと思ひわびなこやのふかしつつ」

こひ をみおく 恋恋 恋の姿を水に曾へていふ語。流鶯出世雲「鶴も昔は恋を磨き、年中曲輪に入りたり」

(慣)恋に上下の差別なし 男女の情は貴賤共に同じ。

(慣)恋の山には孔子(こし)の用れ 恋情の爲めには聖人も失敗することあり。源氏「「恋の山にはくしのたふれまれびつつ」きけいきに変ひたるも」

(慣)恋は盲者 恋は人の心を亂して、思はぬ事をなさしむること。浦年「けに恋は恋はくせものの」心中刃水鶴「日に「さりとして、恋は曲者、みな人の地金をくすす幾何は「盲き曲者」と見して」

(慣)恋は思案の外 恋情は分別を以て律すべからざること。

(慣)恋は盲目 恋情のためには、理性の光も其の明を失はるること。恋の闇となること。

こひ 乞請 (名) 乞ふこと。乞ひたひること。古今「「こひにおこせたりければ」

こひ 鯉 (名) 【動】魚類中、硬鱗類の一住する人に多く生ずといふ。おめめもし。

こひ 恋 (名) 足の脚する病。酒地に 乾杯「恋」「恋」「恋」

口語。

こひ-えん 戀煙（名）料理の一種。鯉の肉を煮たる味噌汁。こひのこくしやう。

こひ-ごころ 戀心（名）戀ひ慕ふ心。

こひ-しぶる 戀戀（自動ラ）戀ふる上に戀ふ。戀えず戀ふ。萬四「戀戀(コヒ)てあひたるものを」月しあれば夜はこもるらむ、しましましはあり待て」同十「戀戀(コヒ)てのちもてあらむとなげくなる心しなくば生きてあらめやも」

こひ-ごろも 戀衣（名）戀する人の衣。戀に著なれし衣。風雅三「いもを待つつと山のしづくに立ちぬれて、そぼちにけらし吾が戀衣」謠曲芦刈「女心の風れ美、ゆひかひなくも戀衣の、妻の形見ゝ戀ぎ」今宮心中書「いつの時雨の一雫、洗へど落ちぬ戀衣」

こひ-ぞめ 小藍（名）輕く又はちよつと藍をつき、或ひは染めなどする場合にいふ語。「小藍を打つ」「小藍を染む」平治「門出の小藍を折りて、どうと伏す」

こひ-ぞかり 戀盛（名）戀の盛りなること。源氏十二段長生殿遊「三三五の春の花盛り・色盛り・戀盛り・情盛りの面影を」

こひ-ぞし 小匙（名）小さきひさし。小さきひさしの皿。枕草子「東の御門につとむかひて、をかしき小ひさしに、式部のおもとといとともるるともに、よるもひるもあれば」

こひぞ-つき 小藍突（名）大藍(ヒサ)に剪し、小藍を突きて、ちよとひさまづくこと。產家記「八條左列宮忠房は、陵王の舞曲を舞ひ、藍突きし」

こひ-ぞら 戀空（名）戀に沸り、大藍突きを突きて、花月と共に、大藍冠里の「同國宮忠房の戀男、花月と共に」

こひ-ぞり 戀里（名）いつぞ(色里)

こひ-ぞり 戀反（名）戀に沸り、大藍突を突きて、ちよとひさまづくこと。產家記「八條左列宮忠房は、陵王の舞曲を舞ひ、藍突きし」

こひ-たる 戀垂（名）戀ふる上に戀ふ。戀えず戀ふ。萬四「戀戀(コヒ)てあひたるものを」月しあれば夜はこもるらむ、しましましはあり待て」同十「戀戀(コヒ)てのちもてあらむとなげくなる心しなくば生きてあらめやも」

こひ-ごろも 戀衣（名）戀する人の衣。戀に著なれし衣。風雅三「いもを待つつと山のしづくに立ちぬれて、そぼちにけらし吾が戀衣」謠曲芦刈「女心の風れ美、ゆひかひなくも戀衣の、妻の形見ゝ戀ぎ」今宮心中書「いつの時雨の一雫、洗へど落ちぬ戀衣」

こひ-ぢ 小藍（名）輕く又はちよつと藍をつき、或ひは染めなどする場合にいふ語。「小藍を打つ」「小藍を染む」平治「門出の小藍を折りて、どうと伏す」

こひ-ぢかり 戀盛（名）戀の盛りなること。源氏十二段長生殿遊「三三五の春の花盛り・色盛り・戀盛り・情盛りの面影を」

こひ-ぢし 小匙（名）小さきひさし。小さきひさしの皿。枕草子「東の御門につとむかひて、をかしき小ひさしに、式部のおもとといとともるるともに、よるもひるもあれば」

こひぢ-つき 小藍突（名）大藍(ヒサ)に剪し、小藍を突きて、ちよとひさまづくこと。產家記「八條左列宮忠房は、陵王の舞曲を舞ひ、藍突きし」

こひ-ぢら 戀里（名）いつぞ(色里)

こひ-ぢり 戀反（名）戀に沸り、大藍突を突きて、花月と共に、大藍冠里の「同國宮忠房の戀男、花月と共に」

こひ-ぢり 戀里（名）いつぞ(色里)

こひ-ぢり 戀反（名）戀に沸り、大藍突を突きて、花月と共に、大藍冠里の「同國宮忠房の戀男、花月と共に」

「こひひねらねて組ねらしけり」

こひ-ねる 戀寐（名）戀ひつつ寐ること。「戀ひつつ寐ねるは戀宿（こひね）むの花」「われ一人のみ見むやと思ひけさくに見よ」

こひ-ねがは-ず 願はず（連）こひねがふことには。願はくは。なにとぞ。「手無底底紀」「ねがはくは。なにとぞ。手無底底紀」

こひ-ねがふ 願ひ願ふ（他動）切に願ふ。皇極紀「願（ねが）ひ願ひて」「千五百番歌合」「知らずがはこひねがはる世なれども、又てがたきこひうつせ貝かな」

こひ-ねこ 戀猫（名）さかりの附き猫。つま戀ふ猫。

こひ-ねり 小撚（名）もとゆひ（元結）同じ。

こひ-にほひ 鯉幟（名）紙にて大なる鯉の形につくりたる五月幟。

こひ-のむ 請祈（他動）請ひ願る。祈願す。萬葉「まそ鏡手に取りもちて、あまつ神あふぎ許比乃美（こひのみ）國つ神ふしてぬかづき」同「ぬさをきてあれは許比能（こひの）美（み）武（む）ぬさむけすたびにる行きて天路しらしめ」

こひ-の-ほぼし 鯉の乾（名）こゆひぼし（小結）の訛。

こひ-はなし 戀話（名）戀愛に關したる話。「宝町千歳歌」「彼の嫁を姿らんもの、のをと戀吟」

こひ-びと 戀人（名）戀しく思ふ人。高る高中中の人。「恰好本地」「文紙明りく解すさみに、大高の粕び文、多る、身より」

こひ-びな 小雛（名）小さき雛人形。三月節句「こひびなのやうに田で立ち」

「而けいはくを云ふ夢は」

こひ-ぶみ 戀文（名）❶こひのふみ。けさらぶみ。戀書。❷紀所の名。

こひ-ぶるひ 戀振（名）初心の者などが、戀の感情にて身慄ひすること。「門松士「羅與手見調れ」「振屋の大鷹ぎ、戀振ひしてみすぼらし」

こひ-ぐつ 戀靴（名）人に戀ひ慕ひねらる。

こひ-くつわ 一語尾變化（名）【文法】動詞・形容詞・助動詞の語尾が、他語と結合する場合によりて變化すること。

こひ-まく 戀（他動）こふ（戀）の活用、こひむと助動詞むとの連續したる。こひむの延。萬「君を思ひあが古非萬久（こひまく）は、あらたまのたつ月ごとによくる日もらじ」

こひ-みだる 戀亂（自動）矢條に同じ。「萬「白露と秋の萩と戀亂（こひみだ）れ、わくことかたき我が心かも」

こひ-みだる 戀亂（自動）戀の為に心亂る。思ひ亂る。萬「解き去の戀亂（こひみだ）つつ浮きてのみ、きさごな我が戀ひわたるかも」

こひ-みつ 戀水（名）戀ひて出づる涙。

こひ-むこ 戀聟（名）戀ひ慕ふ聟。「前撰三「第一妻が戀聟」

こひ-むこ 乞聟（名）所望して貰ひたる聟。浮世親仁形容「聞き慣くて、乞聟にすれども」

こひ-むすび 戀結（名）戀の中の結ぶこと。「ちんの戀の神に管ひて物を結ぶこと。萬「白たくの我が妻の結の紐えぬまに（こひむすび）やむ、やはむ日までに」

こひ-め 小姫（名）小さき姫。こひめ

「手拍刈りておちつき頭や小百姓」

こひ-ぞ-し-ぞう 五百生（名）五百度生まれかはること。幾度も生をかふること。平家「「雪夫素は一夜の枕を變ふるも、五百生の宿緣と承れば」」後撰「五百生を頁りて人に戀まゝたる人、五百生の間、手なき者に生まるることもを佛は說き給ふ」「五百生の物語草子」

**こひ-ぞ-し

非の語。敵を劫(ゴウ)かす石を打ちて、敵之を防ぐ。同に、他感を攻め又は守ること。源平盛衰記「非のうちはてて、待ち給へや、そこは ちにこそあらめ、此のわたりの劫をここそ なといへと」國姓爺「手詰めのせきを勝軍、敵のはまを拾ひ上げ、國も御代も打ちかへて、手をも離くしたる劫もあり」

こふを ふ 經劫　年月を積む。瓜之集「法の海に浮かべる船のこふを經て、めぐる浮木にあひにけるかな」

こふ 〜甲（名）かふ(甲)に同じ。和名抄「甲 日本紀略云、甲 古理曾呂」

こふ 〜故夫（名）まへつぎみ。古語「下、山邊故夫」。以前の夫。

こふ 〜虎符（名）兵を徴集する符。太平記「虎符、早司二諸之兵符一則得二虎符一、奪二諸將之兵一」史記「魏公無忌、竊二虎符一、奪二將軍之兵一」

こふ 乞　請（他動）❶人に物を求む。所望す。記「こなみが、な許波(ゴハ)さば」高砂「みどり兒のちぎり許布(ゴフ)が如く、あまつ水あふぎてぞ待つ」❷願ひ望む。高「ニあまつ神あふぎ許比(ゴヒ)のみ、國つ神 してはかづぬきし」同「あめつちの神を許比(ゴヒ)つつあれはまたむ、はやく來ませ君またば」

こふ 戀（他動ハ）❶惑ひ思ふ。こひしく思ふ。しのぶ。齊明紀「君が目のこはしもきかからにはてて居て、かくやは幼悲(ゴヒ)むねはほしく許布(ゴフ)やすぎなむ」同「人皆の見らむきつらの玉島 もなく」同「人皆の見らむきつらの玉島 を、見ずてやわれは故飛(ゴヒ)つつをらむ」古今「今年、又の年、梅の花さかりに月のおもしろにるかきりける夜、こゝをこひて彼の西の對に行きてこそ」❷男女相惑ひ思ふ。「あかに なる古歌(ゴヒ)歌」源氏「こゝをこひしやちはこそ」この

神のみこと」高「わぎもこに古布流(ゴフ)にあれば、たまきはる短き命も惜しけくもなし」同「ああうちのそこひのうらにあが如く君に故布(ゴフ)らむ人はきねあらじ」

こひ かな 戀案　なつかしさにこらへかね。新勅撰集「古への袖居の花に戀ひかれて、身を忘れても見つる春かな」讃岐後撰「いかにせんひとり書を戀ひて、老いの枕に年のくれぬる」

こひ こもる 戀籠　戀にむすぼゝるる。鯉の池に籠もるにかけていふ。夫木「こひこもるはりまの池のみくりこそ、ひけば根絶われわれやは絶ゆる」

こひしけ は 戀しく　あらば。戀しからば。高「古非思家波(ゴヒシケハ)初も振るせ、むきしぬのうらけらが花の色にづなゆめ」同「古非思家婆(ゴヒシケハ)來ませ我が、垣つやぎうれ撫乃(ナデノ)からし我れ立ちせ待たむ」

こひしらに 戀しきまに。千載「あたら夜を伊勢の濱荻折りしきて、いもこひしらにに見つる月かな」玉葉「袖の露ふりならの濱荻に風吹きて、もの こひしらにさよぞ更け行く」

(誤)戀うたほど厳いた 戀情の烈しかりしほど。今となりては厭き方も烈し。

こぶ 瘤（名）❶病氣のため、皮膚の表面に上がりたるもの。しひね。宇治拾遺「石の瘤に大なるこぶある翁ありけり」字鏡集「瘤 ヲコリ 宮ブ」❷打撲傷などにて、筋肉の膨れ上がりたるもの。❸樹木などに生じて、堆く盛りたるもの。❹物の表面などに堆く現れ出でたるもの。❺凡そ外物・無用物、又は切げとなるもの。【字解】こぶやなぎの略。

こぶ 昆布（名）【語】こんぶ(昆布)の異名。

こぶの かは 昆布皮　織物の地の厚きを賞へていふ語。戀人丹桂實「主も心を美濃の袴も、と渡りのこぶの皮、こはばつたる頭附にて」

(誤)昆布に山椒 物のふく出合ふこと。の譬へ。書時、昆布に山椒を雜へて製したるみづからといふ菜子ありしとりといふ。慌袴倒本地「花に紫、紅葉に蔦、こぶに山椒」雪女五枝羽子板「獅子に牡丹、昆布に山椒」

こ-ぶ 〜戸部（名）みんしやう(民部省)の唐名。

こぶ 媚（自動ハ）❶人の心に適ふやうにふるまふ。人の顔色を伺ひて機嫌をとる。へつらふ。おもねる。迎起す。持起「許來(コブ)來(コブ)朝(チカツヒ)」靈異記「其女媚(コブ)牡鹿師(ヒ)之」雜集記「其女媚(コブ)牡鹿師之」❷なまめきたるさまなり。やさしく色めきたり。名義抄「媚 ヒ」

こ-ぶ 〜鼓舞（名）人の氣を奮ひ起こさしむること。鼓吹。易經「鼓之舞之以盡神」枕子「鼓舞萬物者、非唯風雨乎」

こ-ぶ （名）こふん(胡粉)の訛り。

こ-ぶ 〜業（梵 Karma）（名）❶佛語。身・口・意にてなす善惡の行爲の稱。此の三業上の行爲は、未來に於いて善・惡の果を生ずべき因種となれば、之を業因(ゴウ)といふ。翻譯名義集「業因 ゴウ」❷宿世における善惡の應報。源平盛衰記「こころみに助け來てんかしと、それにとま	ばば業つきけりと思はんと」

こふ おに える 業盡　氣がいらいらす。悪口「それたとつて、あんまりこふおにえる」

こふ へる 業盡　前條に同じ。

こふ へきらかす 業腐　こふをにやす(煮業)に同じ。非國女夫池「港上夫婦業へきらかし居たりしが」

こふ に しづむ 沈業　惡業のために苦しみをうけて浮かばれず。誠知實「つひにここにて討たれつつ、其のまま惡業の業に沈むを」

こふ に やらかす 業煮　こふをにやす(煮業)に同じ。能樂毛氣「そなたに業にやらかしてくだんすな」

こふ の はかり 業秤　業の多少をはかるはかり。夫木「たれも皆心にかけて思へかし、こふのはかりの重き輕きを」相城反魂香「一業ひ深き香無河、流れの罪をかけて見る、こふの秤の重かには」

こふ を きらす 嗜業　こふきらしをなす。中明寺百首「こふをきらす布は五夫十夫あるもよし、こふをきらす布は人の良いきこ」

こふ を にやす 煮業　氣をいらいらさせる。戀慕に堪へず。能樂を煩やす。

こ-ぶ 〜劫（名）こふ(劫)に同じ。

こふの いし 劫石　こふじやく(劫石)に同じ。後拾遺「いとけなき衣の袖はせばくとも、こふの石をば進で壽くしてん」

こ-ぶ 〜護符（名）紙片などに眞言密呪を書けるもの。之を所持すれば神佛の加護を受け一切の災厄を免るといふ。おまもり。護身符。護摩札。

こ-ぶ 〜五府（名）ごふ(五衛府)に同じ。

こ-ぶ 〜五分（名）❶長さ五分位に切りたる麁の稱。牛肉麩などにて用ふる語。❷煙草刻麁劣なること。五分五分。

こふ の たまし ら 五分魂　一寸の魂にも五分の魂の略。いつすん(一寸)の能にも見よ。

こ-ぶ 〜五部（名）佛語。密教にて、五智部・蓮華部・金剛部・寶部・佛部五部。盛衰記「五部の印相を授けて」

こふの だいじ ふ ぎやう 五部大乘經　華嚴經・般若經・法華經・涅槃經の稱。

こふ いん 〜業因（名）佛語。ごふ(業)を見よ。

こふ 〜古風（名）❶古へ の風。雖仰人丸、赤人之古風、狩世風呂「民の取とこそひなせ、民ならだけ、古風で業つぼいし」唐書「穆宗每言、仲舒之文、古風有」❷古體の詩。古詩。自居易詩「古風無手敵」

こ-ふ 御符　護符（名）ごふ(護符)に同じ。心中高年草「日頃戀切遊ばし、御守りよ御符よと、御恩をうけた裕雅樣」

こふ じ ふ 〜五風十雨（句）（五時穀の稼めて適順なること。論衡「太平之世、五日一風、十日一雨、風不鳴枝、雨不破塊」

こ-ふ ふ （名）【植】牛兒苗(ゴフフ)。科、牛兒苗屬の多年生草本。莖は稍膨脹し、葉は弱なり。葉は三裂し、各裂片は又缺刻及び鋸牙を有し、托葉を具ふ。花は白色にして、夏秋の交開く。我が國、各地の山野に自生す。

こふ ふ 〜鼓風爐（英 Blast furnace）（名）【冶金】鐵を其の原鑛より得るとき、などに用ひらるる爐。四筒狀をなし、高さ七八尺にして、上方より鐵鑛(鉄化鐵)・こーくす(石炭)・石灰・砂等を交互に加へて點火し、爐の下部にある羽口(帝に)より熱風を送り焼けたる鐵は爐底に集まり、焼滓は其の上を蔽ふ。何ほ後出するためには原材を上方より入れ、還元鐵を下方より取り出だすを以て一旦操作を始めれば、常に之を繰行して休止せざるも可なり。

こふ ん 〜業緣（名）こふいん(業因)に同じ。

こふかき 木深 こふかきさま。こふかき庭合。

こ-ふかし 木深（形）木立ち繁りて奥深し。源氏「すくよかならぬ山のけしき、木ふかく世はなれてたたみなし」同「森のこだちこふかく、心すごし」

こふ-がり 五分刈（名）頭髪を長さ五分ばかりに刈ること。

こふ き 〜業鬼（名）佛語。ごふき(業魔)に同じ。平家「如常隨業鬼縛我」

こふき いちふ きん 古吹一分銀（名）こいちふきん(古一分銀)に同じ。寶法類編「古吹一分銀」

こ-ふ きやう 小泰行（名）❶室町幕府の職名。泰行を補佐するもの。(總泰行の對)❷さくじこふきやう(作事小泰行)の異稱。

こ-ふ きやう 〜五奉行（名）豐臣時代の職名。五人にて法令・土木・訟獄・財政等を分掌し、大中老と政事を議する役。ト齋記「日本國中〜觸流は五人の家老中連判の御狀に淺野彈正・治日右衛門尉の石田治部少輔・德善院・長束大藏大輔五人の狀諸國へ被遣候」

こふ きり 五分切（名）長さ五分位に物を切ること。粗く物を切り又は刻むこと。

こふ ぐ 〜業因（名）佛語。ごふいん(業因)に同じ。

こふ ぐ 〜業報（名）佛語。ごふ(業)を見よ。加護「一切生法、皆屬業因」

こ-ふ ふう 〜古風（名）❶古へ の風。雖仰人丸、赤人之古風、狩世風呂「民の取とこそひなせ、民ならだけ、古風で業つぼいし」唐書「穆宗每言、仲舒之文、古風有」❷古體の詩。古詩。自居易詩「古風無手敵」

こ-ふ ふ 御符　護符（名）ごふ(護符)に同じ。心中高年草「日頃戀切遊ばし、御守りよ御符よと、御恩をうけた裕雅樣」

こふ じ ふ 〜五風十雨（句）（五時穀の稼めて適順なること。論衡「太平之世、五日一風、十日一雨、風不鳴枝、雨不破塊」

こ-ふ ふう （名）【植】牛兒苗(ゴフフ)。科、牛兒苗屬の多年生草本。莖は稍膨脹し、葉は弱なり。葉は三裂し、各裂片は又缺刻及び鋸牙を有し、托葉を具ふ。花は白色にして、夏秋の交開く。我が國、各地の山野に自生す。

こふ ふう ろ 〜鼓風爐（英 Blast furnace）（名）【冶金】鐵を其の原鑛より得るとき、などに用ひらるる爐。四筒狀をなし、高さ七八尺にして、上方より鐵鑛(鉄化鐵)・こーくす(石炭)・石灰・砂等を交互に加へて點火し、爐の下部にある羽口(帝に)より熱風を送り焼けたる鐵は爐底に集まり、焼滓は其の上を蔽ふ。何ほ後出するためには原材を上方より入れ、還元鐵を下方より取り出だすを以て一旦操作を始めれば、常に之を繰行して休止せざるも可なり。

こふ ん 〜業緣（名）こふいん(業因)に同じ。

こふかき 木深 こふかきさま。こふかき庭合。

こ-ふかし 木深（形）木立ち繁りて奥深し。源氏「すくよかならぬ山のけしき、木ふかく世はなれてたたみなし」同「森のこだちこふかく、心すごし」

こふ-がり 五分刈（名）頭髪を長さ五分ばかりに刈ること。

こふ き 〜業鬼（名）佛語。ごふき(業魔)に同じ。平家「如常隨業鬼縛我」

こふき いちふ きん 古吹一分銀（名）こいちふきん(古一分銀)に同じ。寶法類編「古吹一分銀」

こ-ふ きやう 小泰行（名）❶室町幕府の職名。泰行を補佐するもの。(總泰行の對)❷さくじこふきやう(作事小泰行)の異稱。

こ-ふ きやう 〜五奉行（名）豐臣時代の職名。五人にて法令・土木・訟獄・財政等を分掌し、大中老と政事を議する役。ト齋記「日本國中〜觸流は五人の家老中連判の御狀に淺野彈正・治日右衛門尉の石田治部少輔・德善院・長束大藏大輔五人の狀諸國へ被遣候」

こふ り 五分切（名）長さ五分位に物を切ること。粗く物を切り又は刻むこと。

こ-ふ 〜昆布（名）【語】こんぶ(昆布)の異名。

こふの かは 昆布皮　織物の地の厚きを賞へていふ語。戀人丹桂實「主も心を美濃の袴も、と渡りのこぶの皮、こはばつたる頭附にて」

(誤)昆布に山椒 物のふく出合ふこと。の譬へ。書時、昆布に山椒を雜へて製したるみづからといふ菜子ありしとりといふ。慌袴倒本地「花に紫、紅葉に蔦、こぶに山椒」雪女五枝羽子板「獅子に牡丹、昆布に山椒」

こ-ふ 〜戸部（名）みんしやう(民部省)の唐名。

こふ 媚（自動ハ）❶人の心に適ふやうにふるまふ。人の顔色を伺ひて機嫌をとる。へつらふ。おもねる。迎起す。持起「許來(コブ)來(コブ)朝(チカツヒ)」靈異記「其女媚(コブ)牡鹿師之」❷なまめきたるさまなり。やさしく色めきたり。名義抄「媚 ヒ」

こ-ふ 〜鼓舞（名）人の氣を奮ひ起こさしむること。鼓吹。易經「鼓之舞之以盡神」枕子「鼓舞萬物者、非唯風雨乎」

こ-ふ （名）こふん(胡粉)の訛り。

こ-ふ 〜業（梵 Karma）（名）❶佛語。身・口・意にてなす善惡の行爲の稱。此の三業上の行爲は、未來に於いて善・惡の果を生ずべき因種となれば、之を業因(ゴウ)といふ。翻譯名義集「業因 ゴウ」❷宿世における善惡の應報。源平盛衰記「こころみに助け來てんかしと、それにとまるべきけりと思はんと」

こふ おに える 業盡　氣がいらいらす。悪口「それたとつて、あんまりこふおにえる」

こふ へる 業盡　前條に同じ。

こふ へきらかす 業腐　こふをにやす(煮業)に同じ。非國女夫池「港上夫婦業へきらかし居たりしが」

こふ に しづむ 沈業　惡業のために苦しみをうけて浮かばれず。誠知實「つひにここにて討たれつつ、其のまま惡業の業に沈むを」

こふ に やらかす 業煮　こふをにやす(煮業)に同じ。能樂毛氣「そなたに業にやらかしてくだんすな」

こふ の はかり 業秤　業の多少をはかるはかり。夫木「たれも皆心にかけて思へかし、こふのはかりの重き輕きを」相城反魂香「一業ひ深き香無河、流れの罪をかけて見る、こふの秤の重かには」

こふ を きらす 嗜業　こふきらしをなす。中明寺百首「こふをきらす布は五夫十夫あるもよし、こふをきらす布は人の良いきこ」

こふ を にやす 煮業　氣をいらいらさせる。戀慕に堪へず。能樂を煩やす。

こ-ぶ 〜劫（名）こふ(劫)に同じ。

こふの いし 劫石　こふじやく(劫石)に同じ。後拾遺「いとけなき衣の袖はせばくとも、こふの石をば進で壽くしてん」

こ-ぶ 〜護符（名）紙片などに眞言密呪を書けるもの。之を所持すれば神佛の加護を受け一切の災厄を免るといふ。おまもり。護身符。護摩札。

こ-ぶ 〜五府（名）ごふ(五衛府)に同じ。

こ-ぶ 〜五分（名）❶長さ五分位に切りたる麁の稱。牛肉麩などにて用ふる語。❷煙草刻麁劣なること。五分五分。

こふ の たまし ら 五分魂　一寸の魂にも五分の魂の略。いつすん(一寸)の能にも見よ。

こ-ぶ 〜五部（名）佛語。密教にて、五智部・蓮華部・金剛部・寶部・佛部五部。盛衰記「五部の印相を授けて」

こふの だいじ ふ ぎやう 五部大乘經　華嚴經・般若經・法華經・涅槃經の稱。

こふ いん 〜業因

と高野聖の諸國を巡行して衣類を賣りしより起こるといふ。

ごふびび 小匏（名）【植】びは（枇杷）の異名。

ごふびみせ 呉服店（名）呉服を商なふ店。ごふくてん。ごふくだな。

ごふびめ 香合（名）香を焚き合ませてあること。五人女「こぶくめの袖をうかがさしかけるに、白菊などいへる留め木の」

ごふびもの 呉服物（名）織物。反物。呉服。

ごふびものさし 呉服物指（名）ごふくじもの（呉服尺）に同じ。指「蘆中雑記」とのるものものさしやらの事。御みたけ、ごふくものさしに五尺五寸」

ごふびや 呉服屋（名）呉服を商なふ家。又、其の人。江戸職人歌合「呉服屋。植田島郡内島のしまじまも、くまなく見ゆる秋の夜の月」

ごふびやーもの 呉服屋者（名）呉服屋に居る人。呉服屋に奉公する人。

ごふびら 甲倉（名）あぜくら（袋倉）の類なるべし。和名抄「甲倉、袋倉、俗用之」

ごふびら 小袋　小嚢（名）小さきふくろ。小さきを包み。字鏡集「帙、フクロ」

（匿）**小袋と小嚢**　1小さき袋は物が入らぬ様にて多く入り、小さきを嚢は費用のかかからぬ様にて切りて多くかかること。2小袋は綻び易く、小嚢には きずの附き易くて油斷のなり難しといふ意。

ごふびら 子袋（名）婦人の胎内の子のやどる所。こつぼ。子宮。

ごふーびん 劫火（名）佛語。四劫の一なる壞劫の時、此の世界の滅却する三大災の中の一なる火災。盛衰記「若し劫火下り来て、三千大千世界を焼き尽くすとも、我が法華経を持つ者は、劫火の為に焼け失せずして、我が浄土に来生すべし」

ごふーみ 業火（名）1佛語。惡業所感の苦報。即ち、地獄の猛火。又、惡業の力、身心の肚實を焼き盡くすを火に譬へていふ。太平記「業火盛んに燃えて、修羅の闘諍四方に聞こゆし」2烈しく怒ること。

ごふーみ 惡業果（名）佛語。前世の惡業により受くる果報。太平記「業果法給の理とは云ひながら、修りに心にうくべき覆えける」

ごふーけ 業繫（名）佛語。業（ごふ）より起こる種種の惡しき行ひ。業垢。浄土和讃「一切のごふけものぞこりぬ」

ごふーごふ（名・副）1物の倒るる音などにいふ語。「御所御所風、御九郎」などこふこふと倒れぬ」2水に入りたる音にいふ語。がぶがぶ。宇治拾遺「船はたなる船に、足をかけてひしめくほどに、弟子の聖はつゐたれば、さかさまに入りて、こふこふとするを」

ごふーごふ 猫猫（名・副）1こぶ（猫）に同じ。小兒の語。2こぶだちたるさまにいふ語。

ごふーごふ 一五分五分（名）雙方優劣又は可否なく同様なること。五分。緋縅縅縅卯月紅葉「三日頃は此所なる字と、言ひ事、小言が絶えねども、五分五分に聞いて居た」浮世風呂「どっちも五分五分分のことつけだね」

ごふごふだつ 猫猫立（自動）とこどこどこに猫現はる。こぶ多く出づ。

ごふーさき 小穂穂（名）1小形のふさ。2しりぶさき（穂）を見よ。

ごふーさらし 業晒（名）前世の業報に九想の炎は、劫火よりも苦し。太平記「三界世界悉く劫火の爲めに焼け失せずとも、業は」

ごふーわ 業火（名）1佛語。惡業所感の苦報。即ち、地獄の猛火。又、惡業の力、身心の肚實を焼き盡くすを火に譬へていふ。太平記「業火盛んに燃えて、修羅の闘諍四方に聞こゆし」2烈しく怒ること。

ごふーわ 惡業果（名）佛語。前世の惡業により受くる果報。太平記「業果法給の理とは云ひながら、修りに心にうくべき覆えける」

ごふーけ 業繫（名）佛語。業（ごふ）より起こる種種の惡しき行ひ。業垢。浄土和讃「一切のごふけものぞこりぬ」

ごふーごふ（名・副）1物の倒るる音などにいふ語。「御所御所風、御九郎」などこふこふと倒れぬ」2水に入りたる音にいふ語。がぶがぶ。宇治拾遺「船はたなる船に、足をかけてひしめくほどに、弟子の聖はつゐたれば、さかさまに入りて、こふこふとするを」

ごふーごふ 猫猫（名・副）1こぶ（猫）に同じ。小兒の語。2こぶだちたるさまにいふ語。

ごふーごふ 一五分五分（名）雙方優劣又は可否なく同様なること。五分。緋縅縅縅卯月紅葉「三日頃は此所なる字と、言ひ事、小言が絶えねども、五分五分に聞いて居た」浮世風呂「どっちも五分五分分のことつけだね」

ごふごふだつ 猫猫立（自動）とこどこどこに猫現はる。こぶ多く出づ。

ごふーさき 小穂穂（名）1小形のふさ。2しりぶさき（穂）を見よ。

ごふーさらし 業晒（名）前世の業報に九想の炎は、劫火よりも苦し。太平記「三界世界悉く劫火の爲めに焼け失せずとも、業は」

ごふーわ 業火（名）1佛語。惡業所感の苦報。即ち、地獄の猛火。又、惡業の力、身心の肚實を焼き盡くすを火に譬へていふ。太平記「業火盛んに燃えて、修羅の闘諍四方に聞こゆし」2烈しく怒ること。

ごふーわ 惡業果（名）佛語。前世の惡業により受くる果報。太平記「業果法給の理とは云ひながら、修りに心にうくべき覆えける」

ごふーけ 業繫（名）佛語。業（ごふ）より起こる種種の惡しき行ひ。業垢。浄土和讃「一切のごふけものぞこりぬ」

ごふーごふ（名・副）1物の倒るる音などにいふ語。「御所御所風、御九郎」などこふこふと倒れぬ」2水に入りたる音にいふ語。がぶがぶ。宇治拾遺「船はたなる船に、足をかけてひしめくほどに、弟子の聖はつゐたれば、さかさまに入りて、こふこふとするを」

ごふーごふ 猫猫（名・副）1こぶ（猫）に同じ。小兒の語。2こぶだちたるさまにいふ語。

ごふーごふ 一五分五分（名）雙方優劣又は可否なく同様なること。五分。緋縅縅縅卯月紅葉「三日頃は此所なる字と、言ひ事、小言が絶えねども、五分五分に聞いて居た」浮世風呂「どっちも五分五分分のことつけだね」

ごふごふだつ 猫猫立（自動）とこどこどこに猫現はる。こぶ多く出づ。

ごふーさき 小穂穂（名）1小形のふさ。2しりぶさき（穂）を見よ。

ごふーさらし 業晒（名）前世の業報に九想の炎は、劫火よりも苦し。太平記「三界世界悉く劫火の爲めに焼け失せずとも、業は」

ごふーし 一御無事（名）1ぶじ（無事）

ごふーし 把柄。

ごふし 惡業なる。「世界の業報」

ごふーし 一劫火（名）佛語。四劫の一なる壞劫の時、此の世界の滅却する三大災の中の一なる火災。盛衰記「若し劫火下り来て、三千大千世界を焼き尽くすとも、我が法華経を持つ者は、劫火の為に焼け失せずして、我が浄土に来生すべし」

ごふーじ 小鮑（名）【植】びは（枇杷）の異名。

ごふーみせ 呉服店（名）呉服を商なふ店。ごふくてん。ごふくだな。

ごふーめ 香合（名）香を焚き合ませてあること。五人女「こぶくめの袖をうかがさしかけるに、白菊などいへる留め木の」

ごふーもの 呉服物（名）織物。反物。呉服。

ごふーものさし 呉服物指（名）ごふくじもの（呉服尺）に同じ。指「蘆中雑記」とのるものものさしやらの事。御みたけ、ごふくものさしに五尺五寸」

ごふーや 呉服屋（名）呉服を商なふ家。又、其の人。江戸職人歌合「呉服屋。植田島郡内島のしまじまも、くまなく見ゆる秋の夜の月」

ごふーやーもの 呉服屋者（名）呉服屋に居る人。呉服屋に奉公する人。

ごふーら 甲倉（名）あぜくら（袋倉）の類なるべし。和名抄「甲倉、袋倉、俗用之」

ごふーら 小袋　小嚢（名）小さきふくろ。小さきを包み。字鏡集「帙、フクロ」

（匿）**小袋と小嚢**　1小さき袋は物が入らぬ様にて多く入り、小さきを嚢は費用のかかからぬ様にて切りて多くかかること。2小袋は綻び易く、小嚢には きずの附き易くて油斷のなり難しといふ意。

ごふーら 子袋（名）婦人の胎内の子のやどる所。こつぼ。子宮。

ごふーん 一劫（名）佛語。四劫の一なる壞劫の時、此の世界の滅却する三大災の中の一なる火災。盛衰記「若し劫火下り来て、三千大千世界を焼き尽くすとも、我が法華経を持つ者は、劫火の為に焼け失せずして、我が浄土に来生すべし」

ごふーじゃく 一劫石（名）劫の長久なる譬へにいふ語。天人の衣にて一大石を永劫経て、其の石の磨滅する時期より も永遠なりといふこと。下文を見よ。答華事鑑「劫石、劫、一辰、一劫、一大石、一方四十里、百歳諸天来下、辰、一劫、殺去、劫、石、石盡、劫、猶未盡」

ごふーじゅじ 一戸部主事（名）みんぶのさくわんん（民部大輔）の唐名。

ごふーしょ 一劫初（名）劫の初め。世の初め。成劫（ごふ）。保元（保延）記「劫初より以来」神皇正統記「天竺の説には、世の始まりを劫初と云ふ」

ごふーじら 一戸部侍郎（名）みんぶたいふ（民部大輔）の唐名。

ごふーじり 牛蒡尻（名）ごばうじり（牛蒡尻）の訛り。

ごふーじる 昆布汁（名）こぶだし（昆布出し）に同じ。浮世風呂「昆布汁」

ごふーしん 小普請（名）1小破損の修繕。2江戸幕府の制。幕府の造營に際し、小普請方の祿高に應じて人夫を課することと。後には百石の祿高につき、小判二兩の率にて出金せしむることとなり、之を小普請金といへり。

ごふーしん 一五分心（名）腦の五分ほどたらんぶんの心。

ごふしんーい 小普請醫師（名）屋敷及び町方の病人に繕を與へ、治療を施すを本職とする醫師。

ごふしんかた 小普請方（名）江戸幕府の制。小普請奉行を助けて造營・修繕の事を掌る役。明暦元年幣「小普請方」

ごふしんかたあらためやく 小普請方改役（名）江戸幕府の職名。小普請方の人、奉行の下役。吏微「小普請方改役四人、奉行支配」

ごふしんかたあらためやくーしたやく 小普請方改役下役（名）江戸幕府の職名。小普請方改役に屬するもの。吏微「小普請方改役下役、實永七年庚戌九月六日始置」

ごふしんかたーさんみやく 小普請方三味役（名）江戸幕府の職名。小普請方の下役。吏微「小普請方三味役、七十俵五人扶持、勤金十兩」

ごふしんーきん 小普請金（名）ごふしんかん（小普請）を見よ。

ごふしんーぶぎやう 小普請奉行（名）江戸幕府の職名。營中・大奥・東叡山及び役屋敷等の造營・修繕を掌る役。元方・勝方の二部に分かれ、元方は所用の物品を購入し、勝方はこれを受け取りて配分することを掌る。吏職記「「小普請奉行二人、奴五位下、慶延略記「寛永九年六月以前田五郎左衛門中四人、後補小普請奉行也、常職之號、先是無所見」

ごふしんぶぎやうーくみがしら 小普請奉行組頭（名）江戸幕府の職名。小普請奉行の頭。他川記「元祿十年二月小普請奉行組頭」

ごふーじん 一五不淨（名）ごしゅじんぶじゃう（五種不淨）の略。

ごふーしゃうしょ 一戸部尚書（名）みんぶきやう（民部卿）の唐名。

ごふーじゃうーせかい 一劫成世界（名）じゃうごふのせかい（成劫世界）に同じ。

ごふーじゃうせかいのちぎり 劫成世界の契（名）極めて久遠なる契り。釋迦如來誕生會「我れは大通智勝佛、劫成世界の契りを遂へず、阿羅羅仙人と現じ来たれり」

ごふーじゃく 一劫石（名）劫の長久なる譬へにいふ語。天人の衣にて一大石を永劫経て、其の石の磨滅する時期より も永遠なりといふこと。下文を見よ。答華事鑑「劫石、劫、一辰、一劫、一大石、一方四十里、百歳諸天来下、辰、一劫、殺去、劫、石盡、劫、猶未盡」

ごふーしゅじ 一戸部主事（名）みんぶのさくわんん（民部大輔）の唐名。

ごふーしょ 一劫初（名）劫の初め。世の初め。成劫（ごふ）。保元（保延）記「劫初より以来」神皇正統記「天竺の説には、世の始まりを劫初と云ふ」

ごふーじら 一戸部侍郎（名）みんぶたいふ（民部大輔）の唐名。

ごふーじり 牛蒡尻（名）ごばうじり（牛蒡尻）の訛り。

ごふーじる 昆布汁（名）こぶだし（昆布出し）に同じ。浮世風呂「昆布汁」

ごふーしん 小普請（名）1小破損の修繕。2江戸幕府の制。幕府の造營に際し、小普請方の祿高に應じて人夫を課することと。後には百石の祿高につき、小判二兩の率にて出金せしむることとなり、之を小普請金といへり。

ごふーしん 一五分心（名）腦の五分ほどたらんぶんの心。

ごふしんーい 小普請醫師（名）屋敷及び町方の病人に繕を與へ、治療を施すを本職とする醫師。

ごふしんかた 小普請方（名）江戸幕府の制。小普請奉行を助けて造營・修繕の事を掌る役。明暦元年幣「小普請方」

ごふしんかたあらためやく 小普請方改役（名）江戸幕府の職名。小普請方の人、奉行の下役。吏微「小普請方改役四人、奉行支配」

ごふしんかたあらためやくーしたやく 小普請方改役下役（名）江戸幕府の職名。小普請方改役に屬するもの。吏微「小普請方改役下役、實永七年庚戌九月六日始置」

ごふしんかたーさんみやく 小普請方三味役（名）江戸幕府の職名。小普請方の下役。吏微「小普請方三味役、七十俵五人扶持、勤金十兩」

ごふしんーきん 小普請金（名）ごふしんかん（小普請）を見よ。

ごふしんーぶぎやう 小普請奉行（名）江戸幕府の職名。營中・大奥・東叡山及び役屋敷等の造營・修繕を掌る役。元方・勝方の二部に分かれ、元方は所用の物品を購入し、勝方はこれを受け取りて配分することを掌る。吏職記「「小普請奉行二人、奴五位下、慶延略記「寛永九年六月以前田五郎左衛門中四人、後補小普請奉行也、常職之號、先是無所見」

ごふーすま 小衾（名）小形のふすま。寓話「庭にたつ蘆で古夫須麻（ごふすま）よりだにつまよしこせれ、蘆で古夫須麻（ごふすま）」

ごふーせき 一劫石（名）ごふじゃく（劫石）に同じ。

ごふーせん 一劫戰　劫掠し戰ふこと。太平記「新田殿、鎌倉に攻め寄せ、劫戰不慮に起こるに依りて、御方敗ひ敗れて」

ごーぶた 小札（名）1小さなる札。形の札。2芝居の語。一番叟又は小兒の入場券。（天礼の約）

ごふたし 昆布出（名）昆布を煎じ作りたるだし汁。

ごふーたち 瘤立（自動）瘤現はれ見ゆ。

ごふーたはら 瘤原（名）【植】蓼科、二葉蓼（ごふ）屬の草本。莖の高さ二寸乃至七八寸、鐵線狀なり。葉は心臟形又は菱卵形、鐵色頭、葉柄を有せず。夏季、紫色の小花を開き、總狀花序に排列す。我が國各地の山地、陰濕の地に自生す。

ごふーたひ 瘤鯛（名）【動】魚類中、鯛類の一種。體の長さ二尺許り、鯛同形にて鱗は小さし。背鰭は十二棘・十刺を具ふ。全身、灰黑色又は灰紅色にして、頭上に瘤狀物あり。

ごふーたら 昆布鱈（名）たらこぶ（鱈昆布）に同じ。浮世風呂「昆布鱈」

ごーぶち 小藤（名）【植】藤草の一。葉・花等の形狀、其の他すべて藤に似たり。花色は赤・白あり。

ごふーち 小扶持（名）僅少の扶持。

ごふーつ 瘤附（名）1瘤のつきてあること。又、そのもの。2藤のりし前より妊娠し居りしこと。又、其の婦人。3厄介者又は小供などの伴ひ居ること。

ごふーつくはり 業突張（名）ごふさ

十一日、大香組頭、宿沼次郎右衛門、鄙重は小普請奉行組頭になる」

ごふーすま 小衾（名）小形のふすま。寓話「庭にたつ蘆で古夫須麻（ごふすま）よりだにつまよしこせれ、蘆で古夫須麻（ごふすま）」

ごふーせき 一劫石（名）ごふじゃく（劫石）に同じ。

ごふーせん 一劫戰　劫掠し戰ふこと。太平記「新田殿、鎌倉に攻め寄せ、劫戰不慮に起こるに依りて、御方敗ひ敗れて」

ごーぶた 小札（名）1小さなる札。形の札。2芝居の語。一番叟又は小兒の入場券。（天礼の約）

ごふたし 昆布出（名）昆布を煎じ作りたるだし汁。

ごふーたち 瘤立（自動）瘤現はれ見ゆ。

ごふーたはら 瘤原（名）【植】蓼科、二葉蓼（ごふ）屬の草本。莖の高さ二寸乃至七八寸、鐵線狀なり。葉は心臟形又は菱卵形、鐵色頭、葉柄を有せず。夏季、紫色の小花を開き、總狀花序に排列す。我が國各地の山地、陰濕の地に自生す。

ごふーたひ 瘤鯛（名）【動】魚類中、鯛類の一種。體の長さ二尺許り、鯛同形にて鱗は小さし。背鰭は十二棘・十刺を具ふ。全身、灰黑色又は灰紅色にして、頭上に瘤狀物あり。

ごふーたら 昆布鱈（名）たらこぶ（鱈昆布）に同じ。浮世風呂「昆布鱈」

ごーぶち 小藤（名）【植】藤草の一。葉・花等の形狀、其の他すべて藤に似たり。花色は赤・白あり。

ごふーち 小扶持（名）僅少の扶持。

ごふーつ 瘤附（名）1瘤のつきてあること。又、そのもの。2藤のりし前より妊娠し居りしこと。又、其の婦人。3厄介者又は小供などの伴ひ居ること。

ごふーつくはり 業突張（名）ごふさ

田島郡内島のしまじまも、くまなく見ゆる秋の夜の月」

ごーぶち 瘤原（名）【植】蓼科、二葉蓼（ごふ）屬の草本。莖の高さ二寸乃至七八寸、鐵線狀なり。葉は心臟形又は菱卵形、鐵色頭、葉柄を有せず。夏季、紫色の小花を開き、總狀花序に排列す。我が國各地の山地、陰濕の地に自生す。

ごーぶち 瘤鯛（名）【動】魚類中、鯛類の一種。體の長さ二尺許り、鯛同形にて鱗は小さし。背鰭は十二棘・十刺を具ふ。全身、灰黑色又は灰紅色にして、頭上に瘤狀物あり。

ごーぶち 藤草（名）【植】ごふち（小藤）の異名。

ごーぶーぶ 一劫濁（名）佛語。五濁の一。天災・疫病・爭亂など起こりて、時節の濁惡なること。浄衣「劫濁亂時、諸佛方便もかひなくありけるかな」

ごーぶつ 一古物（名）1古き物品。古く傳はりし物。賞會「書性好古、故盡故物」2「前」一度使用したる物品、又は其の物品に幾部の手入をなしたるもの。古物商取締法「古物の市場行商賣店及賣買」

ごーぶつ 一古佛（名）古代に製作せる佛像。文同詩「老作高論都無、茅屋古佛高身宛然」

ごーぶつ 一誤拂　誤りて拂ひ渡すこと。會計法「誤拂過度となりたる金額の返納」

ごーぶつ 一互物（名）互ひに組み合ひてはじめて用をなすもの。

ごーぶつ 一五佛（名）ごちのによらい（五智如來）に同じ。

ごーぶつ 一後佛（名）後に世に現はれ出づる佛。即ち、彌勒菩薩。「未来なれば」「前佛の智水を、後佛に授くる意なり」「蓮小經「それ前佛は既に去り、後佛はいまだ世に出でず」」沈約文「前佛」

後佛、跡同轍、車」

ごーぶーぶ 瘤瘤（名）【動】魚類中、鯛類の一種。體の長さ二尺許り、鯛同形にて鱗は小さし。背鰭は十二棘・十刺を具ふ。全身、灰黑色又は灰紅色にして、頭上に瘤狀物あり。

ごーぶーぶ 一御無事（名）1ぶじ（無事）

ごーぶし 把柄。

ごーぶーし 一劫火（名）佛語。四劫の一なる壞劫の時、此の世界の滅却する三大災の中の一なる火災。盛衰記「若し劫火下り来て、三千大千世界を焼き尽くすとも、我が法華経を持つ者は、劫火の為に焼け失せずして、我が浄土に来生すべし」

ごーぶじ 小鮑（名）【植】びは（枇杷）の異名。

ごーぶみせ 呉服店（名）呉服を商なふ店。ごふくてん。ごふくだな。

ごーぶめ 香合（名）香を焚き合ませてあること。五人女「こぶくめの袖をうかがさしかけるに、白菊などいへる留め木の」

ごーぶもの 呉服物（名）織物。反物。呉服。

ごーぶものさし 呉服物指（名）ごふくじもの（呉服尺）に同じ。指「蘆中雑記」とのるものものさしやらの事。御みたけ、ごふくものさしに五尺五寸」

ごーぶや 呉服屋（名）呉服を商なふ家。又、其の人。江戸職人歌合「呉服屋。植田島郡内島のしまじまも、くまなく見ゆる秋の夜の月」

ごーぶやーもの 呉服屋者（名）呉服屋に居る人。呉服屋に奉公する人。

ごーぶら 甲倉（名）あぜくら（袋倉）の類なるべし。和名抄「甲倉、袋倉、俗用之」

ごーぶら 小袋　小嚢（名）小さきふくろ。小さきを包み。字鏡集「帙、フクロ」

（匿）**小袋と小嚢**　1小さき袋は物が入らぬ様にて多く入り、小さきを嚢は費用のかかからぬ様にて切りて多くかかること。2小袋は綻び易く、小嚢には きずの附き易くて油斷のなり難しといふ意。

ごーぶら 子袋（名）婦人の胎内の子のやどる所。こつぼ。子宮。

ごーぶん 一劫（名）佛語。四劫の一なる壞劫の時、此の世界の滅却する三大災の中の一なる火災。盛衰記「若し劫火下り来て、三千大千世界を焼き尽くすとも、我が法華経を持つ者は、劫火の為に焼け失せずして、我が浄土に来生すべし」

ごーぶじ 一戸部主事（名）みんぶのさくわんん（民部大輔）の唐名。

ごーぶしょ 一劫初（名）劫の初め。世の初め。成劫（ごふ）。保元（保延）記「劫初より以来」神皇正統記「天竺の説には、世の始まりを劫初と云ふ」

ごーぶじら 一戸部侍郎（名）みんぶたいふ（民部大輔）の唐名。

ごーぶじり 牛蒡尻（名）ごばうじり（牛蒡尻）の訛り。

ごーぶじる 昆布汁（名）こぶだし（昆布出し）に同じ。浮世風呂「昆布汁」

ごーぶしん 小普請（名）1小破損の修繕。2江戸幕府の制。幕府の造營に際し、小普請方の祿高に應じて人夫を課することと。後には百石の祿高につき、小判二兩の率にて出金せしむることとなり、之を小普請金といへり。

ごーぶーん 一五分心（名）腦の五分ほどたらんぶんの心。

ごーぶしんーい 小普請醫師（名）屋敷及び町方の病人に繕を與へ、治療を施すを本職とする醫師。

ごーぶしんかた 小普請方（名）江戸幕府の制。小普請奉行を助けて造營・修繕の事を掌る役。明暦元年幣「小普請方」

ごーぶしんかたあらためやく 小普請方改役（名）江戸幕府の職名。小普請方の人、奉行の下役。吏微「小普請方改役四人、奉行支配」

ごーぶしんかたあらためやくーしたやく 小普請方改役下役（名）江戸幕府の職名。小普請方改役に屬するもの。吏微「小普請方改役下役、實永七年庚戌九月六日始置」

ごーぶしんかたーさんみやく 小普請方三味役（名）江戸幕府の職名。小普請方の下役。吏微「小普請方三味役、七十俵五人扶持、勤金十兩」

ごーぶしんーきん 小普請金（名）ごふしんかん（小普請）を見よ。

ごーぶしんぶぎやう 小普請奉行（名）江戸幕府の職名。營中・大奥・東叡山及び役屋敷等の造營・修繕を掌る役。元方・勝方の二部に分かれ、元方は所用の物品を購入し、勝方はこれを受け取りて配分することを掌る。吏職記「「小普請奉行二人、奴五位下、慶延略記「寛永九年六月以前田五郎左衛門中四人、後補小普請奉行也、常職之號、先是無所見」

ごーぶしんぶぎやうくみがしら 小普請奉行組頭（名）江戸幕府の職名。小普請奉行の頭。他川記「元祿十年二月小普請奉行組頭」

色を呈す。花は小穂をなし、小穂は長き針形又は長卵形、尺、やや横風する。葉は頭状花序に排列し、穀殻は霊生し、夏季紫褐色を呈す。花が図、各地の山野に自生す。

ごぶ-づけ　五分漬（名）大根をみのぼしにし、五分程に切り、糠・味噌・砂糖を混じて煮くさたる汁に漬けたるもの。

ごぶ-しゃう　〜古物商（名）古物を買・交換する商業。又は其の商業をなす人。古物商買賣業法「古物商」

ごぶ-うる　鶴（名）【動】こぶのとり（鶴）の異名。

ごぶ-で　小筆（名）小字をかくに用ふる小さき筆。（大筆の對）

ごぶ-とり　瘤取（名）こぶを取り去ること。こぶ取り。

ごぶ-とり　小肥（名）やや肥りてあること。やや肥えてあること。

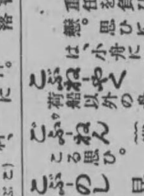
ごぶ-な　小鮒（名）小さき鮒。保元物語「こはえ・いしぶし・こぶな入れ給へ」

ごぶ-ないち　小鮒市（名）鮒を賣る市。北藤句「しばし見ん柳がもとの小鮒市」

ごぶ-ないと　（名）小豆の莢。小豆に鮒は木製の小魚の形を三箇つけて昇降するやうにしたるもの。亨保頃俳書書「小ぶないとこの果に」小ぶないとこの落書葉かな」

ごぶ-なが　五分長（名）一種の縫料。下文を見よ。衣食住記「縫料明和に」は五分長として、袖口の外へ出づるあり」

ごぶなが-ぐさ　蕎草（名）【植】禾本科、蕎麦の二年生草本。莖の高さ一二尺、やや横風する。葉は頭狀針形又は長卵形、長花序に排列し、穀殻は霊生し、夏季紫褐色を呈す。花が図、各地の山野に自生す。



（ごぶなぶと）

ごぶ-づけ　五分漬（名）大根をみのぼしにし、五分程に切り、糠・味噌・砂糖を混じて煮くさたる汁に漬けたるもの。

ごぶ-しゃう　〜古物商（名）古物を買・交換する商業。又は其の商業をなす人。古物商買賣業法「古物商」

ごぶ-うる　鶴（名）【動】こぶのとり（鶴）の異名。

ごぶ-で　小筆（名）小字をかくに用ふる小さき筆。（大筆の對）

ごぶ-とり　瘤取（名）こぶを取り去ること。こぶ取り。

ごぶ-ぶとり　小肥（名）やや肥りてあること。やや肥えてあること。

ごぶ-な　小鮒（名）小さき鮒。保元物語「こはえ・いしぶし・こぶな入れ給へ」

ごぶ-なし　小鮒市（名）鮒を賣る市。北藤句「しばし見ん柳がもとの小鮒市」

ごぶ-ないと　（名）小豆の莢。小豆に鮒は木製の小魚の形を三箇つけて昇降するやうにしたるもの。亨保頃俳書書「小ぶないとこの果に」小ぶないとこの落書葉かな」

ごぶ-なが　五分長（名）一種の縫料。下文を見よ。衣食住記「縫料明和に」は五分長として、袖口の外へ出づるあり」

ごぶなが-ぐさ　蕎草（名）【植】禾本科、蕎麦の二年生草本。莖の高さ一二尺、やや横風する。葉は頭状針形又は長卵形、長花序に排列し、穀殻は霊生し、夏季紫褐色を呈す。花が図、各地の山野に自生す。

ごぶ-ぶな　保元物語「河のあなたより、をかしき小舟けり。船に乘り棹突き向かうて漕ぎ過ぎは（ごぶなぶと）

官物語「かいだてかいたる小舟に」

（ごぶ）小舟に荷が勝ったやう　力量以上に重任を負ひたること。吾吟我集「苦舟懸。思ひにしづかれてしづむ我が戀は、小舟に過ぎた荷物なりけり」

ごぶ-ぶね　小船役（名）江戸時代、船以外の舟に課したる役錢。

ごぶ-ねん　〜業念（名）業によりておこる思ひ。

ごぶ-のし　昆布鮫斗（名）こんぶのし（昆布鮫斗）に同じ。

ごぶ-の-とり　鷽（名）【動】鳥類中、渉禽類の一種。鷽に類し、大さ丹頂鶴の如し。嘴は長く、鋸に似て角質なり。脚は小脚を欠る。眼の邊赤黄色にて、全身は白色なり。鳴くこと能はず。喉を彩つて

伊豆國八丈島にては、所謂黄八丈の染料に供す。はちぢやうかりやす。

ごぶ-なはら　（名）【植】すずいこの異名。

ごぶ-なはり　小船梁（名）河舟の船梁の名。

ごぶ-に　〜業人（名）ごぶきらし（業曝）に同じ。天神記「死したる惡は其報もこの殘りしなく、（ごぶ）は業人」用明天皇「業人盛このやいここな、運命盡きの業人めし」狩權三「彼の業人の苦生の、人でなしの腹から、此の様な器用な子を何としてこの産み出しした」

ごぶ-ぬき　瘤抜（名）こぶとり（瘤取）に同じ。

ごぶ-ね　小舩・小舟（名）小さき船。保元物語「河のあなたより、をかしき小舟けり。船に乘り棹突き向かうて漕ぎ過ぎは官物語「かいだてかいたる小舟に」

（ごぶ）小舟に荷が勝ったやう　力量以上に重任を負ひたること。吾吟我集「苦舟懸。思ひにしづかれてしづむ我が戀は、小舟に過ぎた荷物なりけり」

ごぶ-ねや　小船役（名）江戸時代、船以外の舟に課したる役錢。

ごぶ-ねん　〜業念（名）業によりておこる思ひ。

ごぶ-のし　昆布鮫斗（名）こんぶのし（昆布鮫斗）に同じ。

ごぶ-の-とり　鷽（名）【動】鳥類中、渉禽類の一種。鷽に類し、大さ丹頂鶴の如し。嘴は長く、鋸に似て角質なり。脚は小脚を欠る。眼の邊赤黄色にて、全身は白色なり。鳴くこと能はず。喉を彩つて

ごぶ-ぶな　（名）【植】紅色藻類、布苔（ふのり）の海藻。體は小にして絲狀、中空、丹三分岐し、枝は條り成かうず。上端は細く、堅し。我が國、關西の沿海、潮線附近の岩礁上に生ず。糊料として又、食用となす。

ごぶ-の　昆布滝苔（名）阿波の鳴門に產する海藻。

ごぶ-ぼう　〜業報（名）ごぶくわ（業報）に同じ。平治物語「不義の致す所、業報の果たす所なりと、人人申しける」太平記「業報の時到る故也」

ごぶ-ぼ-じゅ　〜劫波樹（名）佛語。妙高山の頂上にありといふ樹木。發菩提「劫波樹の白玉の鈴石に座し」要集記「波利質多、此云圓生花、妙高頂東北角上高百由旬、枝葉四布五十由旬、切利諸天夏三月時、於此樹下、歡受樂、劫波樹者、諸餘小樹」

ごぶ-ぼう　業腹（名）憤怒の念に堪へざること。殘念なること。いまいまきこと。浮世風呂「業腹な、跡の祭り目しも見損なったよ」

ごぶ-びゃう　〜業病（名）惡業の報いにて受くるといふ病。保元物語「御獄病調伏させ給ひけるなり」平家三「業病を惡やすと云ふ共、從先生の業病を治せんや」

ごぶ-びゃう-にん　〜業病人（名）業病にかかりたる人。廣疑瑞「今國性塔」とても死ぬる業病人嘆貧やし」

ごぶ-ひろ　五分廣（名）こぜんひろ（御前廣）に同じ。

ごぶ-ぶう　〜業風（名）【佛】業報のため

ごぶ-ぶん　〜業魔（名）佛語。一切の惡業が正道を妨げて、智慧を失はしむるを魔に譬へていふ語。業魔。

ごぶ-まき　昆布巻（名）こんぶまき（昆布巻）に同じ。

ごぶ-まだら　五分斑（名）五分はどづつ色をかへて、まだらに組みたる縞。武藝記「五分まだらは何色も不苦候」

ごぶみ　小文（名）半切りの書狀。立て文を略したるものにて、「うすやう・杉原などを半切りにして書くもの。

ごぶみのはらいし　小文の祓石（名）【佛】鳥類の子又は杉原紙を三つに切り調禮すること。鳥の子の時は、經紙を三つに割り、一分切り放して表卷の料とし、殘り二分を横に疊みて三分し、一分切り放し、殘り二分に文言を書き、一分は禮紙として卷く。杉原の時は禮紙に三つに割り、一分を切り放して表卷に用ひ、殘り二分に狀を書く。

ごぶみ-げ-うしょ　小文御教書（名）小文にて書きし御教書。

ごぶ-むね　乞旨（名）辻ばなし・辻講・其の外臨筵を著て物を乞ふ乞食。

ごぶ-やらし　猫柳子（名）皮のつきたるままの木にて造りたる柳子。故實類聚集雜に「こぶやらしとて皮をつけて用ふる。宣旨町家より始まるとし酒記に見えたり。昆布にさしあひて拔だるしき木あるを故、惡處に苦を處する、惡風に書くていふ語。大乘義章「業力如風、火諸業生惡處受苦」■地獄に起こる大暴風。平家三「修しう鳴りとよむ音は、彼の地獄の業風なりとも是れには過ぎじ」方丈記「かの地獄の業風なりとも、かくこそはとぞ覺えける」

ごぶ-ま　〜業魔（名）佛語。一切の惡業が正道を妨げて、智慧を失はしむるを魔に譬へていふ語。業魔。

ごぶ-まき　昆布巻（名）こんぶまき（昆布巻）に同じ。

ごぶ-まだら　五分斑（名）五分はどづつ色をかへて、まだらに組みたる縞。武藝記「五分まだらは何色も不苦候」

ごぶみ　小文（名）半切りの書狀。立て文を略したるものにて、「うすやう・杉原などを半切りにして書くもの。

ごぶみのはらいし　小文の祓石（名）【佛】鳥類の子又は杉原紙を三つに切り調禮すること。鳥の子の時は、經紙を三つに割り、一分切り放して表卷の料とし、殘り二分を横に疊みて三分し、一分切り放し、殘り二分に文言を書き、一分は禮紙として卷く。杉原の時は禮紙に三つに割り、一分を切り放して表卷に用ひ、殘り二分に狀を書く。

ごぶみ-げ-うしょ　小文御教書（名）小文にて書きし御教書。

ごぶ-むね　乞旨（名）辻ばなし・辻講・其の外臨筵を著て物を乞ふ乞食。

ごぶ-やらし　猫柳子（名）皮のつきたるままの木にて造りたる柳子。故實類聚集雜に「こぶやらしとて皮をつけて用ふる。宣旨町家より始まるとし酒記に見えたり。昆布にさしあひて拔だるしき木あるを故、

ごぶり　見振（名）もきなすがた。

ごぶ-りき　〜業力（名）佛語。業のちから。因果の業力。又、佛が一切衆生の過去・現在・未來の諸業業を知る能力。御伽草子「正統記」これらの天は小大の災に逢すと云へども、業力に際限あり、報盡きなば退役すべし」

ごぶ-りこ　（名）野蕨（ごぶ）の子をいふ。蕨丙の方言。

ごぶ-りこうさい　五分利公債（名）鐵道公債・事業公債・北海道鐵道公債・臺灣事業公債・臺灣高鐵理公債・臺灣鐵道會社債券鐵理公債・臺灣貸收公債・第一回國庫債券鐵理公債など、大日本帝國政府が五分利公債證書を發行して交付したる公債の總稱。明治三十九年大藏省告示第七百二十八號。五分利公債

ごぶ-りこぶり　（副）流動物を飲み下だすさまにいふ語。長町女腹切「喉が湯くとこぶりこぶりと養え花の、茶びん天瓶も振り立てて」

ごぶりつきえいくわこうさい　五分利附英貨公債（名）我が國の國債の名。明治三十七年五月及び同年十一月英吉利國倫敦及び北米合衆國紐育にて募集したる六分利附英貨公債二千二百萬磅を整理・償還するために、明治四十年三月英吉利國倫敦及び佛蘭西國巴里にて募集せしたる六分利附英貨公債二千三百萬磅を發行總價格は額面百磅につき九十九磅十志、振替期限明治五十五年（大正十一年）三月十一日償還期限明治八十年（大正十三年）三月十二日、其の證券は二十磅・百磅・百磅の三種とす。明治四十年勅令第二十三號五分利附英貨公債」

ごぶりやく　〜劫掠　劫略　おびやかし

てかすめ取ること。盛衰記「奪之、奪之、奪之、

こぐつ-さいえん 〜箇別財産 (名) 財産の區別の一。

こぐつて-きしやう 〜箇別的商行爲 (名) 【法】ぜったい〜てきしやう商行爲(絶對的商行爲)に同じ。

こぐつて-わり 戶別割 (名) 【法】地方稅の一。市町村が各戶に賦課する戶數割に附加して徵收するもの。稅として徵收するものとの二種あり。前者は均一の稅率によるを通例とし、これ者によらざるときは、市町村會の議決を經て府縣郡參事會の許可を要す。後者は均一の稅率によるを要せず、其の新設・增額又は變更には市町村會の議決を經て內務大臣の許可を要す。

こくさ-ぐさ (名) 【植】はまとらのをの異名。

こくり-つく (自動) こびりつくに同じ。

こくれ-にんぎやう 小兵衛人形 (名) 小兵衛といふ俳優の形に作りし人形。下文を見よ。近世答問考に「江戶に名高く聞こえし坊主小兵衛と云ふ俳優は、延寶・天和・貞享の頃、盛んに經たる道外形也中略其の頃、小兵衛が參を五月の宮人形に作りはじめて、これを小兵衛人形といふ」

こ-くん 〜湖邊 (名) みづうみのほとり。湖上。拙市詩「柳綻湖邊暮」

こ-くん 〜顧眄 (名) ふりかへりて見ること。我友生に「顧眄如詩「顧眄微笑」言思德如詩「顧眄微笑」言思我友生」

こ-くん 〜御邊 (代) 同輩に用ふる對稱の代名詞。そこもと。そなた。貴殿。貴所。尊公。不市「貴所御邊は隨道の才人かな」平家「今度御邊をば一方の大將にたのむなり」

こくん-けい 〜圭 (名) 【數】こくけいに五角形に同じ。

こぐん-ぐ 〜具 (名) 【數】こくけいに五角形に同じ。

こ-げ 〜毛 (名) 【植】こけに同じ。

こ-げ 〜毛 (名) 【動】こけに同じ。

こ-げ 〜毛 (名) 【動】こけに同じ。

こ-げ 〜毛 (名) 【動

こほり—ゆき 氷雪。

こほり—ゆき 氷雪。

こほり—ゆき 氷雪。

れて、をのことをいと多く、牛よくやるものの事走らせたる」宇治拾遺「耳にのりこぼれて、やりよせて見れば」本朝三國誌「令曾鞭こぼれて出づる月」

こぼれいづ 零出 はみだす。外へ表はれ出づ。枕「織物のかからぬとも、こぼれ出でて」源氏物語「悲しきに、包むとすれどこぼれ出でつつ」狭衣「人あまたけはひして、こぼれ出でたり」

こぼる 毀 (自動ボ) 破れくづる。損ぶ。こはる。推古紀「地動令屋悉破」浜士佐日記「家にいるに月あかければ、いとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまして、いふかひなくぞこぼれやぶれたる」後拾遺「宇治にまかりて、おじろのこぼれたるを見てよめる」

こぼれ 零 (名) こぼるる(零)こと。こぼれたるもの。

こぼれ 毀 (名) こぼるる(壊)こと。こぼれたるもの。

こぼれうめ 零梅 (名) 梅の花のこぼれ散ること。又、其の樣。大鏡虎稚物語「春風や花の蕊りのこぼれ櫻にこぼれ梅」

こぼれ-ぢつ 零落 (自動ヂ) ❶流れ落つ。落ちぶれる。「こぼれ落つ。參詣「その石の上に走り かかる水は、小柑子・栗の大きさにてこぼれおつ」枕「風のいたう吹くに、黄なる木の葉どもの、ほろほろとこぼれおつるいとあはれなり」❷もろく脆く。太平記「今度京の敵を退ひとすれば、元弘の如く、天下の武士皆落ちこぼれ落ちうせ、附き順ひ連らせんずらん皆落ちこぼれ忍ひ逃げるに」

こぼ-おろす 零下 (自動サ) こぼるる。盛衰記「木曾馬より下りて」

こぼれかかる 零懸 (自動ラ) ❶ふだれ下がる。こぼれかかる。枕「若やかなる女房などの、美うるはしく長くこぼれかかりなどそひゐたるは」源氏物語「ふしめになりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪、つやつやとめでたう見ゆ」❷あふるる。「局にはかりに多くよりかかる。日本紀神武紀「始め饒元・はしたこぼれかかり乘り局にかかり、眠き、ささやき」

こぼれかかる 毀懸 (自動ラ) こぼれかかる。九州道記「辻堂のこぼれかかりたる板敷の上に、夜ふくるまで立ちて」

こぼれざいはひ 溢幸 (名) 意外の幸福。幽期せざるさいはひ。まぐれざいはひ。「鮑俸。雖遲醉狂樂」植物を見る沼宮ひひ。みゆかば金鏡花、たれと露とのこぼれ幸ひひ。鷹筑波「思ひも寄らずこぼれざいはひ」

こぼれざくら 零櫻 (名) 櫻の花のこぼれ散ること。又、其の樣。大鏡虎稚物語「春風や花の蕊りのこぼれ櫻」

こぼれ-まつば 零松葉 (名) 松の落葉の地上に散り敷くこと。又、其の樣。

こぼれ-もの 零物 (名) ❶こぼれたるもの。又、餘りもの。殘り。❷懷妊したる腹。出產せんとする腹。

こぼれる 零 (自動ラ) こぼるる(零)の口語。「狂言「雷いや大盃いや中盃おうあるは。こぼれる」こぼれる」

こぼう (名・副) 物の轉び鳴るさまにいふ語。今昔「大きなる鐵瓶の樣なる物の有りけるが、人も不寄ぬに、こぼうこぼうと鳴りて、蓋の開きければ」

こぼうず 惡僧 (名) 【動】尼僧類中、二條殿の尼狀突記「全身黑袈裟色にて、眼部に赤の初めに尼卽下の尼狀突記」と其ふ。

こぼん 小本 (名) 小形の書物。(大本の對)

こぼん 古本 (名) ❶ふるき書物。ふるほん。❷古代の書籍。

こぼん 虎賁 (名) 勇力を以て君に事ふる人。太平記「虎賁・武士・朝家一人誰か敵」同「猛虎賁狼卒、猛士・勇士・武士・朝家一人誰か敵」同「虎賁狼卒、猛士・勇士・武士・朝家一人誰か敵」書紀「虎賁・武士・朝家一人誰か敵」衣服

に自生す。食用根物なり。

こまうち (名) こまようろをいふ。津綻の在郷の方言。

こまうど高麗人 (名) 〔こまひとの音便〕高麗の國の人。催馬樂「石川の古末宇止(ウジ)に帯を取られて、かからき姫いすうる末(ヲ)、其の頃、こまうどの参れるが中に」源氏「其の頃こまうどの参れるが中に」

こまか 細 (副) ❶甚だちひさきさまにといふ。こまやか。源氏「さるこまかにちよりも、こまかにをかしげにて、つぶつぶの様雨の夕べ、れに、蛍こまかなるさきがに」❷念を入れて。よく行きとどきて。くはしく。細密に。手津保「上「宋雀院こまかに御覧するに、あかずめでたけれ物をひく時に、かくては御ろくもいかがにちにのたまへば」❸同意「例のごくの手をひかで思ひにいひければ、こまかにこそあらねど、時時物いひ置きて出で給ひぬ」同「右「ことにこまかなるうしろる見なき人の」

こまがき 細書 (名) ❶文字を細かくかくこと。又、其の文字。❷細字を細かく雑。

こまがく 高麗楽 (名) 古へ高麗の國より傳来したる雅楽。和名抄「高麗楽曲」

こまがくし 高麗楽師 (名) 古へ雅楽寮にて、楽生を教ふることを掌るもの。職員令「唐楽師四十二人」

こまかーさ 細さ (名) こまかきさま。こまかさ度合。

こまかし 細 (形ク) ❶こまかにてあに自生す。食用根物なり。

こまーうち (名) こまようろをいふ。津綻の在郷の方言。

こまーうど高麗の人 (名) 〔こまひとの音便〕高麗の國の人。催馬樂「石川の古末宇止(ウジ)に帯を取られて、かからき姫いすうる末(ヲ)、其の頃、こまうどの参れるが中に」源氏「其の頃こまうどの参れるが中に」

こまか 細 (副) ❶甚だちひさきさまにといふ。こまやか。源氏「さるこまかにちよりも、こまかにをかしげにて、つぶつぶの様雨の夕べ、れに、蛍こまかなるさきがに」王蘇「降りそそぐ軒ばの雨のぶと消らなり」❷念を入れて。よく行きとどきて。くはしく。細密に。手津保「上「宋雀院こまかに御覧するに、あかずめでたけれ物をひく時に、かくては御ろくもいかがにちにのたまへば」同「例のごくの手をひかで思ひにいひければ、こまかにこそあらねど、時時物いひ置きて出で給ひぬ」同「右「ことにこまかなるうしろる見なき人の」

こまーがき 細書 (名) ❶文字を細かくかくこと。又、其の文字。❷細字を細かくかく雑。

こまーがく 高麗楽 (名) 古へ高麗の國より傳来したる雅楽。和名抄「高麗楽曲」

こまーがくし 高麗楽師 (名) 古へ雅楽寮にて、楽生を教ふることを掌るもの。職員令「唐楽師四十二人」

こまかーさ 細さ (名) こまかきさま。こまかさ度合。

こまかし 細 (形ク) ❶こまかにてあること。❷念を入れて。よく行きとどきて。くはしく。細密に。手津保「上「宋雀院こまかに御覧するに、あかずめでたけれ物をひく時に、かくては御ろくもいかがにちにのたまへば」同「例のごくの手をひかで思ひにいひければ、こまかにこそあらねど、時時物いひ置きて出で給ひぬ」同「右「ことにこまかなるうしろる見なき人の」

こまーがき 細書 (名) ❶文字を細かくかくこと。又、其の文字。❷細字を細かくかく雑。

こまーがく 高麗楽 (名) 古へ高麗の國より傳来したる雅楽。和名抄「高麗楽曲」

こまーがくし 高麗楽師 (名) 古へ雅楽寮にて、楽生を教ふることを掌るもの。職員令「唐楽師四十二人」

こまかーさ 細さ (名) こまかきさま。こまかさ度合。

こまかし 細 (形ク) ❶甚だちひさきさまにといふ。こまやか。源氏「さるこまかにちよりも、こまかにをかしげにて、つぶつぶの様雨の夕べ、れに、蛍こまかなるさきがに」王蘇「降りそそぐ軒ばの雨のぶと消らなり」❷念を入れて。よく行きとどきて。くはしく。細密に。手津保「上「宋雀院こまかに御覧するに、あかずめでたけれ物をひく時に、かくては御ろくもいかがにちにのたまへば」同「例のごくの手をひかで思ひにいひければ、こまかにこそあらねど、時時物いひ置きて出で給ひぬ」同「右「ことにこまかなるうしろる見なき人の」

こまーがき 細書 (名) ❶文字を細かくかくこと。又、其の文字。❷細字を細かくかく雑。

こまーがく 高麗楽 (名) 古へ高麗の國より傳来したる雅楽。和名抄「高麗楽曲」

こまーがくし 高麗楽師 (名) 古へ雅楽寮にて、楽生を教ふることを掌るもの。職員令「唐楽師四十二人」

こまかーさ 細さ (名) こまかきさま。こまかさ度合。

こまかし 細 (形ク) ❶こまかにてあること。❷念を入れて。よく行きとどきて。くはしく。細密に。手津保「上「宋雀院こまかに御覧するに、あかずめでたけれ物をひく時に、かくては御ろくもいかがにちにのたまへば」同「例のごくの手をひかで思ひにいひければ、こまかにこそあらねど、時時物いひ置きて出で給ひぬ」同「右「ことにこまかなるうしろる見なき人の」

こまーうち (名) こまようろをいふ。津綻の在郷の方言。

こまーうど高麗の人 (名) 〔こまひとの音便〕高麗の國の人。催馬樂「石川の古末宇止(ウジ)に帯を取られて、かからき姫いすうる末(ヲ)、其の頃、こまうどの参れるが中に」源氏「其の頃こまうどの参れるが中に」

こまか 細 (副

ども。こまとめはぎ。夫木等をみなへし多かる野邊のこまつなぎ、おちけん人やり引きとどめこし」

こまつなぎ 小松苗（名）【植】かつもとさう（狼牙）の異名。和名抄「狼牙。一名、犬牙。野王云、蒜根似狼牙、似鼠牙、齒故以名之」

こまつ-はら 小松原（名）❶小松の生ひ立てる野原。萬葉「わが命をながくもがと思ふ島の小松原（ハラ）幾代をへてかかむさびわたる」後撰雜三「白雪のきやどる峰の小松原、枝しげけれや日の光り見ぬ」❷馬の異名。

こまつはら-の-つむじ 小松原旋毛（名）馬の旋毛。とらじやう（鹿蛇）に同じ。

こまつ-ひき 小松引（名）古へ正月初子の日に小松を引くこと。

こまつぶり 小松振（名）こま（獨樂）の古名。今も我く〜るくるくると轉びて、前の鉄どももとりも如く飛び行きて」大鏡「逆び物中間こまつぶりに、むらこの緒つけて奉り給へりければ中間はしまして御覽じおはしませし」

こまつやに 小松脂（名）まつやに（松脂）に同じ。狂言「小松やにや、小松やにやにゃ」

こまつり 木祭（名）樵夫などの木を伐るときなど、山神を祭ること。夫木「猟人は矢にみてぐら取りそへて、こまつりすらし谷深く入る」

こまつるぎ 高麗劒（名）柄頭に環のある劒。

こまつるぎ 高麗劒（枕）高麗劒は柄頭に環（こま）あれば、おのかけていふ。又、劒の中心を劒の心といふより心にかけていふ。古歌「高麗劒（コマツルギ）わがかたもりの宮にいもりつるかも」同「高麗劒（コマツルギ）わが心ゆゑ、よそのみに見つつやもりなむし」

こまと 小的（名）小さき的。直徑凡そ一尺位といふ。（大的の對）浮

こまどうふ 胡麻豆腐（名）料理の一種。白胡麻をすりて葛粉を加へ、火にかけて煉り、豆腐の如くにしたるもの。

こまどうらん 胡麻胴亂（名）❶蓮の葉子の一種。中の空なるもの。❷外見のみにて心の劣りたるものを嘲りいふ語。

こまとめ 駒留（名）馬を繋ぎとどむること。又、そのもの。うまとめ。うまつなぎ。

こまとめ （名）【植】❶あきのたむらさう（鼠尾草）の異名。❷こまつなぎ（馬繋）の異名。

こまとめ-ぐさ （名）【植】前條に同じ。

こまとめ-はぎ （名）【植】こまつなぎ（馬繋）の異名。

こまひ 小纏（名）武具の名。ひの小さきもの。甲陽軍鑑「こまとひは、北條家よりはじまる」

こまとめ 駒留（名）こまとめ（馬留）に同じ。

こまとめ （名）【植】ますくさの異名。

こまとめ-ぞう （名）【植】せんりこ（地筋）の異名。

こまとめ-はぎ （名）【植】こまつなぎ（馬繋）の異名。

こまどり 駒捕（名）牧飼にした馬を捕らふること。

こまどり （名）❶人數を左右に分かちて勝負を爭ふとき、其の座次を入り混ひに列ねること。例へば、一方を一・三・五・七とし、一方を二・四・六・八とする類。❷宇津保藤原殿の君たち十所を、五所こまどりて、左・右にこまどりに分わかつ。源氏「殿上人も大佛のこまどりに、方わかたせ給へり。

かたせ給へり。

「勿論左右にわかつ事也。其の座の次第なるは、左右へ一人づつまぜずてわくるを云ふ。」

をいふやうに申されし也。たとへば、左一・三・五・七・九、右二・四・六・八・十かくの如し。左一・四・五・八・九、右二・三・六・七・十かやうになどはあるべからざるか」同「下賜「小弓との給ひしかど、かちゐの下れれたる上手どもありければ、召し出でて射させ給ふ。殿上人どもつきづきしきて限りは、皆まへしりへの心ごまどりに方わきて」❸こをとることに同じ。

こまどり 駒鳥（名）【鳥】鳳類中、燕雀類の一種。嘴は鷲より大きく、嘴細く尖にして尖れり。脚は淵鳥にして青く、頭・背・翼に緑色なるも、腹は白し。頭を左右に振る。其の鳴聲くつわの如し。知更鳥。

こまな （名）【植】菊科、紫菀（シヲン）屬の多年生草本。莖の高さ三四尺。葉は披針形、不整の鋸歯を有し、莖葉共に毛茸を有す。花は頂狀花序に排列し、花序は多數枝梢上に生じ、初夏開き、花序の周圍に位す。花は白色、中心のものは黃色なり。我が國、各地の山地に自生す。

こまなこ （名）こくいかつぎ（御能掛）に同じ。狂言「こまなこ」

こまにしき 高麗錦（名）古へ高麗國より渡來せし錦。萬葉「豆蘆瀾思吉（ツレナシヒキ）ひもゆ解きさけてぬるがへに、あどせるとかもあやにかなしき」宇津保俊蔭「錦の天井に、こまにしきはり」

こまぬく-にん 拱（他動）【植】あま（海藻）の異名。

こまぬく 拱（他動）手を組み合はす。「俳記「拱（コマヌク）手薛日」」

こまの-あしかた （名）【植】つまのあしかた（毛莨）の異名。

こまの-あぶら 胡麻油（名）胡麻の種子より搾り取りたる油。黑胡麻を炒りて搾りたる一番搾・二番搾は食品にして揚物などに用ひ、三番搾は石鹸製造に用ふ。又、白胡麻を白に乾し、「許き、炒にしてて搾り取りたるを白絞（詩）」といひ、婦人の頭髮用の油などとす。

こまの-き （名）【植】こまき（土瓶樹）の異名。

こまの-すず （名）【植】うきのすずくさ（山空鈴）の異名。

こまの-つめ 駒爪（名）❶こまげた（駒下駄）に同じ。俳諧玉手箱「駒の爪やつぼの石ぶみ陸の雪」蟬打屋「尻げたもはふねのあがるやう五月雨。」❷駒の爪のつめと云ふ。ぼくりを、今は馬げたといふ、いやしと云ふ。古老の申されしなり」❸【植】つぼすみれの異名。

こまの-はぐさ 玄參（名）【植】玄參科、玄參屬の多年生草本。莖の高さ五六尺、方莖なり。葉は對生、長卵形、鋸歯を有す。夏秋の際、帶綠黃色の唇形花を開き、圓錐花序に排列す。我が國、各地の山野に自生し、往時は地下部を藥用に供せしことあり。

こまのはぐさ-ぐわ 玄參科（名）【植】顯花植物、雙子葉類の一科。草本・灌木又は蔓本。葉は互生、無托葉。花は完全、多くは具備不整、稀に花冠を缺くものあり。雄は深裂又は全く分離せず。花冠をなし、或は合瓣唇形をなし、又は離と不整瓣なり。雄蕊は二箇・四箇又は五箇。二強雄蕊又は稍々同長花冠に著生す。花盤は明瞭又は不明なり。雌蕊は一子房に二室、或は一室、雌柱は單一なり。果實は蒴、胞間又は胞背にて裂開す。種子は多數に存す。

こまの-ひ 駒迎（名）【植】ごまの異名。

こまの-ぶね 胡麻斑蝶（名）【動】てふこまだらてふの異名。

こまぶね 高麗船（名）高麗の國の船。からふね。

こまべ 小前（名）賤しき民。細民。

こまべ （名）こまひ（未舞）の訛。

こまべ 狛部（名）王朝時代、種種の作業を業とする者。職員令「大藏省中務狛部六人（内藏作業）」

こまべ-の-つかさ 典革（名）てんかく（典革）に同じ。官位令「典革（コマベノ）」

こまべ-もの 小前者（名）小まへの人。細民。貧民。

こまほこ 高麗矛（名）高麗人の用ふる矛。高麗より傳來せし矛。國姓爺「いはねどそれと白鹿弓・鐵砲・高麗矛・槍・長刀」

こまほこ 狛鉾（名）高麗樂・壹越調・平調・四調・盤涉調の一。鉾持舞。和名抄「高麗樂中曲狛鉾（ホコ）」

（にぼまこ）

こまま-ぎ 獨樂廻（名）獨樂を廻はすこと。又、其の人。倭城色三味線「頃日九州より獨樂廻しの少人のぼりて、四條河原の小芝居にて、さまざまの曲こまをまはし」

こまま-まわり （名）【動】まひまひむし（舞蟲）をいふ。東近江の方言。

こまみそ 胡麻味噌（名）炒りたる胡麻と味噌とを混ぜ合はせたるもの。

こまむかひ 駒迎（名）矢條に同じ。狂言「中秋月の駒むかひせし連歌の、こざかの駒も心して、引く白馬の節會にも」

こまむしろ 胡麻莚（名）【動】こまだらてふの異名。

こまむね 高麗船（名）高麗の國の船。からふね。

こまめ 小前（名）賤しき民。細民。

こまめ （名）こまひ（未舞）の訛。

こまめ 狛部（名）王朝時代、種種の作業を業とする者。職員令「大藏省中務狛部六人（内藏作業）」

こまめ-の-つかさ 典革（名）てんかく（典革）に同じ。官位令「典革（コマメノ）」

こまめ-もの 小前者（名）小まへの人。細民。貧民。

こまもろ 高麗矛（名）高麗人の用ふる矛。高麗より傳來せし矛。國姓爺「いはねどそれと白鹿弓・鐵砲・高麗矛・槍・長刀」

こまもろ 狛鉾（名）高麗樂・壹越調・平調・四調・盤涉調の一。鉾持舞。和名抄「高麗樂中曲狛鉾（ホコ）」

こまもろし 獨樂廻（名）獨樂を廻はすこと。又、其の人。倭城色三味線「頃日九州より獨樂廻しの少人のぼりて、四條河原の小芝居にて、さまざまの曲こまをまはし」

こまもろのり （名）【動】まひまひむし（舞蟲）をいふ。東近江の方言。

こまもろ-みそ 胡麻味噌（名）炒りたる胡麻と味噌とを混ぜ合はせたるもの。

こまもろ-むかひ 駒迎（名）矢條に同じ。狂言「中秋月の駒むかひせし連歌の、こざかの駒も心して、引く白馬の節會にも」

こまもろ-むかへ 駒迎（名）五月五日に左右馬寮の使、駒牽を近江國の番坂國まで出で迎ふること。

こまもろし （名）【動】けらこ（蟋蟀）の異名。

こまもろびし 小間結（名）結の結び方の名。こまかむすび。まむすび。たまむすび。

こまめ 鯛田作（名）すぼしたる鯛。多くは又は煮て食ふ。鯉全（ゼン）の語にちなみて配賀の席などに用ふ。たづくり。夕顏「四波雪渡二裏白・ゆづり葉・こまめで御座んせの春來に」

（雜）鱗のことを交り　雜魚のことまじりに同じ。ざこ（雜魚）の條を見よ。

（雜）鱗の雲きしり　力及ばざる者の、徒らに憤慨する譬へ。

こまめ （名）【植】こまなの異名。

こまめ-ざく （名）【植】前條に同じ。

こまめ-ぐさ （名）【植】いたちさげ（江芝浪明）の異名。

こまめ-たます 鯛膾（名）こまめを混ぜて作りたる膾。生活の裕かならぬにもいふ。雪女五枚羽子板「こまめ鯛の素浪人、雜煮の上置き、輪ん切り大根」浮世風呂「田作鯛に鮭の燒いたので、又六盃とお目にかけた」

こまめ 胡麻餅（名）小麥粉に白砂糖を混ぜて製したる餅。

こまもの 小間物（名）〔細物の義〕婦人の商品の化粧品、其の他雜貨・婦人用・雜細の商品の稱。

こまもの-うり 小間物賣（名）小間物を賣ること。又、その物の人。

こまもの-みせ 小間物店（名）❶小間物を商ふなる店。狂言「田舍者と見えて、小間物見世に見入つてゐるこ、清水物語「上こまの物見せとて、たなに一つに色色さまざまの物を取りあつめておき、人の用夫

節に賣るものの餞」 ㊁小間物見せをならぶること。へどをつくこと。又、そのへどを出だす。浮世風呂「亨屋の中へ、ゑましく麥に海苔のどうどうと突たのさ世話をりやあ、小間物店に見立てたのさ」

こまものみせ 小間物屋 (名) 飲食したる種種の物を吐き戻らす。へどをつく。吐逆す。

こまものや 小間物屋 (名) 小間物を商なふ家。又、其の人。浮世風呂「小間物屋のちやうほこが、さう云つたけ」

こまものわく 小間物桶 (名) けしやうばん(化粧板)に同じ。

こまやか 細 (副) ㊀こまごましさま、ささやかなるさま、細密なるさまにいふ語。源氏「なほまことの筋をこまやかに書きえたるは」同夕顔「こまやかなること厚きさまに、しとやかに品よきさまにいふ語。雄略紀「麁矣(ヨロシ)細矣(ヨロシ)諸好雜矣」 ㊁濃く、こくれなるのこまやかなるすずしのはかまの」同竹取「ひとよせ、盛こまやかにおしすりて」源氏「こまやかにをかしとはなけれど、なまめきたるさまして、あてに人と見えたり」同宿直「身なり・はだつきこまやかにまさまにいふ語。源夕顔「こまやかにかたちひ給ひて」同早乙「わが御子どもの君だちより給ひて、此の君をばこまやかにやんごとなくもてなしかしづき奉り給ふ」

こまやき 駒焼 (名) さうまやき(相馬焼)に同じ。

こまやき 胡麻焼 (名) 胡麻をつけて焼くこと。又、其の食品。

こまやさし 小柳 (名) 【植】あせび(馬酔木)の別名。

こまゆみ (名) 【植】衛矛(エビヅル)科、常緑灌木。幹の高さ一丈許り、不活なる葉樹花序に排列し、花は葉腋に生じ、五、六月の頃、綠黃色を呈す。果實は乾果にして裂開し、淡紅色の假種皮を有する種子を出だす。我が國、各地の山野に自生す。材を細工物とし、又、觀賞用として栽培す。

こまーようう (名) あつきの類。大きなる釣を以てなすもの。津輕の城下の方言。(東奥)こまうち。

こまーよけ 駒除 (名) 夫餞に同じ。

こまーよせ 駒寄 (名) 夫餞に同じ。藤葉衆葉記「馬の乘邊を防ぐ低き柵。門前などに設て、馬の乘邊を防ぐ。こまよけ。藤葉衆葉記「川橋の兩方には、蘆葦を以て、高さ六七尺に駒寄を仕りたりける」

こまり 小駒 (名) 小さきまり。源氏「侍の大盤の上に、杏をはきながらの、ぼりて、小鞠を蹴られたるに」

こまりいる 困入 (自動ヤ) 非常に困る。甚だしく困る。よわりいる。

こまりきる 困切 (自動ラ) 此の上なく困る。甚だしく困る。こまりはつ。よわりきる。

こまりはつ 困果 (自動ラ) 前條に同じ。

こまりはてる 困果 (自動ヤ) 前條の口語。藤葉毛「わらはは、まことにこまりはてる」

こまりもの 困者 (名) 處分に困るもの。もてあましもの。厄介もの。

こまる 鉤丸 (名) 〔こうまるを(鉤丸)の略〕(鉤丸)みすのふさ。

こまる 困 (自動ラ) ㊀處分に困じむ。もてあます。もてわづらふ。 ㊁貧しくなる。窮す。

こまろう 〜護摩壇 (名) 佛語。密教壇の中央にあり、護摩を修する火壇。

こまーわらう 駒藁 (名) 具足の上巻。

里程の稱。(おはみちの約)

こみおん 妙微座 (名) 極めて細かく、詳けなどは、こと。こみおん。官衆虎魔「妙微座にせんと、虎少將、局の火鉢・烟草盆・茶たる物を投げつくれば」

こみづ 濃水 (名) 濃漿(こんづ)。和名抄「白飲。四時食制經云、冬宜食白飲。今案、濃漿之名也」 名義抄「白飲(こんづ)」

こみず 小水 (名) 少しばかりの水。太平記「清泥に降ひたる魚の、小水にいきつくに異ならず」

こみーつく (他動ヤ) やりとむ。おしつく。清水物語「人に口あらせぬやうに物をいひ、人をこみつくる事を好み、人の迷惑する事を悦び」同何事によらず、こばみそねみ、人をこみつけて悦びとし、笑ひをふくむ故に」

こみーつける (他動ヤ) 前條の口語。

こみつこし 小水越 (名) 海船の舵の小名。羽柴に、あり て綱を通す孔。

こみつこしーつな 小水越綱 (名) 舵の小水越に通して、舵を自由に動かす綱。

こみつたがらし (名) 【植】十字花科、辛菜(たがらし)屬の草本。莖の高さ尺許。葉は羽狀に裂し、葉柄の基部耳形をなす。頂小葉は圓形、又は卵形、波狀齒牙あり、側小葉は卵形、全緣なり。春季、白色の花を總狀花序に排列す。我が國、各地の濕潤の地に自生す。みづたがらし。

こみーとり 芥取 (名) ちりとり(塵取)に同じ。

こみなん 御末男 (名) おすえしゅう(御末衆)に同じ。

こみーね 小峰 (名) 小さき峰。をみね。

こみねかーで (名) 【植】槭樹(ヒラ)科、槭葉樹屬の落葉小喬木又は灌木。葉は常狀脈五深裂乃至七深裂し、葉間は心臟形を呈す。花は黃綠花序に排列し、花序は葉腋に生じ、五、六月の頃、綠黃色を呈す。果實は乾果にして裂開し、淡紅色の假種皮を有する種子を出だす。我が國、各地の山野に自生す。材を細工物とし、又、觀賞用として栽培す。

こまーようう (名) あつきの類。大きなる釣を以てなすもの。津輕の城下の方言。(東奥)こまうち。

こまーよけ 駒除 (名) 夫餞に同じ。

こまーよせ 駒寄 (名) 夫餞に同じ。藤葉衆葉記「川橋の兩方には、蘆葦を以て、高さ六七尺に駒寄を仕りたりける」

こまり 小駒 (名) 小さきまり。源氏「侍の大盤の上に、杏をはきながらの、ぼりて、小鞠を蹴られたるに」

こまりいる 困入 (自動ヤ) 非常に困る。甚だしく困る。よわりいる。

こまりきる 困切 (自動ラ) 此の上なく困る。甚だしく困る。こまりはつ。よわりきる。

こまりはつ 困果 (自動ラ) 前條に同じ。

こまりはてる 困果 (自動ヤ) 前條の口語。藤葉毛「わらはは、まことにこまりはてる」

こまりもの 困者 (名) 處分に困るもの。もてあましもの。厄介もの。

こまる 鉤丸 (名) 〔こうまるを(鉤丸)の略〕(鉤丸)みすのふさ。

こまる 困 (自動ラ) ㊀處分に困じむ。もてあます。もてわづらふ。 ㊁貧しくなる。窮す。

こまろう 〜護摩壇 (名) 佛語。密教壇の中央にあり、護摩を修する火壇。

こまーわらう 駒藁 (名) 具足の上巻。

こみあ 本草和名用雲「駒藁、ヒヤ、ヒ、ヒ」

こーまんじゅうじこう 小饅頭鉦 (名) 小形の饅頭鉦。(大饅頭鉦の對)

こみ 込 (名) ㊀物の著盛・大小打ち込みて種種なること。 ㊁うるこみ(紙込)に同じ。 ㊂(中世語)「御室の御所作り、並びの岡を木傳(ヒ)として、池の見越しの上叔の山(中世語)巳沙門谷に梅の坊、百梅を植へくして木密(ヒ)に切り、山を作りて、色色に谷・嶺をこそ透かしけれ」

こみ 込 小身 (名) ㊀刀鍔の名所。なかこ(中心)に同じ。由良家傳記「金井出雲守、一風流者にて中世刀の込みすたり申す故、惜しく存候」 ㊁藤の名所。のしろ(荷代)に同じ。

こみ (名) ㊀水の入りこみ來たること。左德紀「將軍、防北河之潮(ヒ)以築矣田堤」 字鏡集「湧(ヒ)」 ㊁みづうみ。湖水。字鏡集「湖(ヒ)」

こみ (名) こみこめ(耗米)の略。

こみ 芥塵 (名) ちり。あくた。ほこり。塵芥。

こみ (名) 【植】あきくみ(秋米英)の異名。

こみ五味 (名) 酸・苦・甘・辛・鹹の五種の味。太平記「三(ヒ)・五(ヒ)・百種・五味の魚鳥」 左傳「五味、酸・苦・甘・辛・鹹」 百種・五味の藥穀」

こみ 〜流寝 (名) こびる(流寝)に同じ。砂石集「實に物に淫すき其の道を好まん人は、流寝(ヒ)に其の事に心をもやせし」

こみあく 込上 (自動カ) ㊀洪水の逆流して、水門などに逆入す。 ㊁胃より逆に物を上げて嘔吐を催す。 ㊂さしこみが起こる。

こみあくた 塵芥 (名) ごみとあくたとの重言。こみくた。

こみーあげる 込上 (自動ヤ) こみあく(込上)の口語。

こみあしげ 馬鹿 (名) 馬の毛色。葦毛の類。

こみあひ 込合 (名) こみあふこと。

こみあふ 込合 (自動ハ) 多人數一時に入り込む。雜沓す。雜沓す。

こみいた 込板 (名) 船の名所。浪間(ヒ)の小名。

こみいる 込入 (自動ラ) ㊀物し入る。間入す。國姓爺「さしったりと切り伏ひ、込み入れば、なくりり立て打ちや世」 ㊁入りこむ。混雜す。 ㊂物事錯雜す。紛糾す。

こみうま 込馬 (名) 馬ごみして、おとじさりする藤の馬。

こーみか 小鋺 (名) 酒を入るる小さき器。小さきかあ。字鏡「椀(己鋺)」同「椀(己鋺)」

こみかくし 井隱 (名) 井を隱しおきて、求め出ださしむる小兒の遊戯。

こみかつぎ (名) 【動】いさごむし(石蠶)の異名。

こーみかど 小御門 (名) こもん(小門)の轉語。宇治拾遺「小御門より出でんと仰せごとと候ひつれば」

こーみかんぞう 葉下珠 (名) 【植】大戟(ヒ)科、葉下珠屬の一年生草本。莖の高さ三四寸乃至六七寸、稀に多し。葉は小にして楕圓形なり。夏日、細雜にして綠黃色の花を葉腋に開き、花後、扁圓小形の果實を結ぶ。我が國、各地の平地に自生す。地項

こみーくた (名) こみあくた。ちり。塵芥。

こみーくも 芥蜘蛛 (名) 【動】節足動物中、蛛類の一種。本邦に普通なる種類。平輪狀の網を張り、中央に蜘蛛を蔵す。芝に身を潜めて餌の來たるを待つ。

こみこ (名) 犬・猫小手に紐を入れたるもの。

こみこめ 耗米 (名) へりまい。

こみさき 込先 (名) 〔刀鍔の名所。中心(ヒ)の端〕由良家傳記「金井出雲守一風流者にて中世こみ先を三寸計り出だしし」

こみさらひ 芥波 (名) 家家にて捨てたる塵芥を時時來たりてさらひ行く者。

こみし 〜五味子 (名) 【植】てらせんこみし(朝鮮五味子)の異名。

こーみじかし 小短 (形ク) 手短し。罪なり。頓城反魂香「亘組は御屋形の御帳意でどざると、小短く、譯も聞こえる、道理も立つ」

こみすてば 芥捨場 (名) こみを棄つる所。ごみため。

こみせ 小店 (名) 小さき店。小規模のみせ。(大みせの對)堀河波枕「女二人は堀河おもてに小見世に上がつて、廢子敲破りつつと入れ」

こみそ 小御衣 (名) 小さき裳。(宴)

こみたがら 芥太夫 (名) 二人して種種のいでたちをなし、一人は三味線を弾き、一人は歌を唄ひ、種種の藝をして物をこひありくもの。

こみため 芥溜 (名) 塵芥を捨て置く所。はきだめ。ちりづか。

こみためのつる 芥溜鶴 下級の社會に、すくれたる人の混じ居る譬へ。雞群の一鶴。

こーみち 小道 (名) ㊀幅の狹き路。こみち。和名抄「微道、小道也」(宇治) ㊁六町を一里とする里程の稱。(おはみちの約)

こーみおん 妙微座 (名) 極めて細かく、詳けなどは、こと。こみおん。官衆虎魔「妙微座にせんと、虎少將、局の火鉢・烟草盆・茶たる物を投げつくれば」

こーみづ 濃水 (名) 濃漿(こんづ)。和名抄「白飲。四時食制經云、冬宜食白飲。今案、濃漿之名也」 名義抄「白飲(こんづ)」

こーみず 小水 (名) 少しばかりの水。太平記「清泥に降ひたる魚の、小水にいきつくに異ならず」

こみーつく (他動ヤ) やりとむ。おしつく。清水物語「人に口あらせぬやうに物をいひ、人をこみつくる事を好み、人の迷惑する事を悦び」同何事によらず、こばみそねみ、人をこみつけて悦びとし、笑ひをふくむ故に」

こみーつける (他動ヤ) 前條の口語。

こみつこし 小水越 (名) 海船の舵の小名。羽柴に、あり て綱を通す孔。

こみつこしーつな 小水越綱 (名) 舵の小水越に通して、舵を自由に動かす綱。

こーみつたがらし (名) 【植】十字花科、辛菜(たがらし)屬の草本。莖の高さ尺許。葉は羽狀に裂し、葉柄の基部耳形をなす。頂小葉は圓形、又は卵形、波狀齒牙あり、側小葉は卵形、全緣なり。春季、白色の花を總狀花序に排列す。我が國、各地の濕潤の地に自生す。みづたがらし。

こみーとり 芥取 (名) ちりとり(塵取)に同じ。

こーみなん 御末男 (名) おすえしゅう(御末衆)に同じ。

こーみね 小峰 (名) 小さき峰。をみね。

こみねかーで (名) 【植】槭樹(ヒラ)科、槭葉樹屬の落葉小喬木又は灌木。葉は常狀脈五深裂乃至七深裂し、葉間は心臟形を呈す。花は葉腋に排列し、花序は葉腋に生じ、五、六月の頃、綠黃色を呈す。果實は乾果にして裂開し、淡紅色の假種皮を有する種子を出だす。我が國、各地の山野に自生す。材を細工物とし、又、觀賞用として栽培す。

こみーのこ 小柳 (名) 【植】こみゆみ(馬酔木)の別名。

こーみーはこ 小箱 (名) 【動】こびる(流寝)の異名。

こみーはさみ (名) 植ふこみをはさむに用ふるはさみ。

こみーぶ 込歩 (名) すてぶ(捨歩)に同じ。

こーみみ 小耳 (名) ㊀みみ(耳)に同じ。保元物語「左の小耳の根く、尾中ばかり射込んだれば」 太平記「小耳に、三太刀まで被切ければ、流るる血に目眩れて」 ㊁小兒の略の耳。心中二枚繪草紙「言うて死んだは小耳に、も、定めて覺えて居らうぞやと」浮世風呂「子供衆といふものは、詞くまあ、子耳に、はさんで、お忘れなさんねえ物でございますねえ」

こみーや 込矢 (名) ㊀群りて射込む矢。太平記「中世諸國の降人手負死屍の射手を勝ぐて、弼藁を箭の底までも込み入るるに用ふるもの。かるか。かるこ。こめや。 ㊁雅式の小鏑の具。鏃の細長き柄に、弼藁を箭の底までも込み入るるに用ふるもの。かるか。かるこ。こめや。

こーみゃう 〜五明 (名) 古代印度にあり し學問の區分。因明(ヒ)・聲明(ヒ)・內明・醫方明・工巧明(ヒ)の五つの稱。

こみゃう-みそ 〜護命味噌 (名) 〔天長の頃、大和國元興寺の學僧、護命僧正の製なれば、いふ。ほふろみそ(法論味噌)の異名。

こーみゃすみれ (名) 【植】菫菜(ヒ)科、菫菜屬の多年生草本。地上莖を有せず。葉は心臟狀卵形、銳齒を有し、葉面は稀に帶白綠又は帶暗色を呈す。花莖は葉腋に排列し、各莖片は紫矢頭、赤紫色の花を同き、葉柱、蕚柱同樣、總花序に排列す。我が國、各地の山地に自生す。

こーみの 小美濃 (名) こきく(小菊)に同じ。

こみーはさみ (名) 植ふこみをはさむに用ふるはさみ。

こみ 込歩 (名) すてぶ(捨歩)に同じ。

こーみみ 小耳 (名) ㊀みみ(耳)に同じ。保元物語「左の小耳の根く、尾中ばかり射込んだれば」 太平記「小耳に、三太刀まで被切ければ、流るる血に目眩れて」 ㊁小兒の略の耳。心中二枚繪草紙「言うて死んだは小耳に、も、定めて覺えて居らうぞやと」浮世風呂「子供衆といふものは、詞くまあ、子耳に、はさんで、お忘れなさんねえ物でございますねえ」

こみーや 込矢 (名) ㊀群りて射込む矢。太平記「中世諸國の降人手負死屍の射手を勝ぐて、弼藁を箭の底までも込み入るるに用ふるもの。かるか。かるこ。こめや。 ㊁雅式の小鏑の具。鏃の細長き柄に、弼藁を箭の底までも込み入るるに用ふるもの。かるか。かるこ。こめや。

こーみゃう 〜五明 (名) 古代印度にあり し學問の區分。因明(ヒ)・聲明(ヒ)・內明・醫方明・工巧明(ヒ)の五つの稱。

こみゃう-みそ 〜護命味噌 (名) 〔天長の頃、大和國元興寺の學僧、護命僧正の製なれば、いふ。ほふろみそ(法論味噌)の異名。

こーみゃすみれ (名) 【植】菫菜(ヒ)科、菫菜屬の多年生草本。地上莖を有せず。葉は心臟狀卵形、銳齒を有し、葉面は稀に帶白綠又は帶暗色を呈す。花莖は葉腋に排列し、各莖片は紫矢頭、赤紫色の花を同き、葉柱、蕚柱同樣、總花序に排列す。我が國、各地の山地に自生す。

こーみの 小菊 (名) 【植】こ(菊)の異名。和名抄「菊、小菊、味辛、性温、無毒也」

こみーわり 込薬 (名) 藥を立たせぬため、口の中へ藥などを押し込むこと。百日曾我「一引き起こして、口に込み薬、いきほねを立たせな、山ぎはに下つて捨てよ」

こみーゐる 込居 (自動ヤ) 入り込みて居る。群がり居る。茶番狂言そのわたりの茶どもの ほど廣きに、おしいるさまにてこみ居たり」

こむ 子産 (自動ヤ) 〔こうむの略〕古語。子を產む。出產す。記「そらみつやまとの國に、かりの古佐(ヒ)と國くやし」

こむ (自動ヤ) 古語。しみこむ。入り込む。安閑紀「此田者、天皇御產地、水流易、是(ヒ)」

こむ 籠込 (自動ヤ) ㊀こもる。茶式部集「さしこみていると、ものかたみ三笠山、霞炭きとく風をこそ待て」寂蓮法師百首「さしこのみ人まつ宿の柴の戸を、たれこみたるは青柳の絲」 ㊁押し合ひ集まる。群集す。 ㊂入りくむ。緻密なる。和雅なる群れず。 ㊃(中世語)狂言「藪から藪まで、も、手のこうだよい、青鷺ぢや」回のみこむ(呑込)の略。含蓄す。合點なり。承知なり。浮世風呂「をつと、皆まで、いはんずな。込んでゐる」

こむ 籠込 (他動ヤ) ㊀こもらす。入れおくく。詞。納む。納功紀「(ヒ)雷中入れおくく。竹取「たはやすく人分りくまじき家等を造りて、機へを三重にしこめて、たくみつつみかくす。源氏「こもせこの內にこめたりつるものを」 ㊁含ます。もたす。「意味をつこむ」 ㊂炭にあらはさぬやうに、つつみかくす。源氏「みやしろの岡べ

にたてるかほが花なさき出でそね許来(ゐ)てしねばむ」字津保(宇津保)ちらちらに思ひくだくれと「の給ふべき人しなければ心にこめてあり へ給ふ」源(源氏)おとは思ひのままに「こめたる所おはせぬ本性に「いとど老いの御ひがみさくそひにたれば「河ことかはとどこほり給はん」圓一つに集中す。とどむ。「榊神をとむ」

ごむ 〜護謨(Gum) (名) 【植】ごむの木(護謨樹)の略。 【化】ごむの樹より浸出したる液汁より製取したる物質。弾力性に富み、諸種の薬品に犯されず、電気等のごむ輪・ごむ管等、並びに良好なる絶縁体として、廣く電氣事業に應用せらる。

ごむ-いん 〜護謨印 (名) 弾性護謨にてつくりたる印。石膏の印形にあてて製す。

ごむおる (名) 古への朝鮮語。三韓の王后の稱。雄略紀王及大后(コホキサキ)語「王子等」

ごむか (名) こみか(小麥)に同じ。字鏡「集(ツドヒ)樹(ハヘ)ごむか」

ごむがつぱ 護謨合羽 (名) 護謨布にてつくりたる合羽。

ごむかふ (自動) 高麗の許(コ)は伊の誤りにて、いむかふなりと。古(舊)一説(ごむかふ)は(從此)の略、ここより向かふ。(舊)高麗「ゆ(從此)すの川許(コ)平可比(ヒ)たちて」としの懸けは皮き手らがつまことひの衣ぞ」

ごむき 小麥 (名) 【植】禾本科、小麥屬の一・二年生草本。莖の高さ三四尺。葉は細長にして尖り、平行脈を有す。花は小穗をなし、小穗は雄花序に排列し、各小穗は頂に四五花より成り、五月頃開く。果實は頂来なり。我が國へ到る處に栽培せられ、種子は粉末として食用品を製し、其の他種種の用途ある。こと世人の知る處なり。まむぎ。科學に應強も苦くに用ふ。

名セ「小麥(ムギ)」

こむぎの 小麥粉 (名) 小麥粉(ふ(麥)の異名。和名セ「麥末(ムギ)」

こむぎ-こ 小麥粉 (名) 小麥を碾きたる粉。饅飩・菓子・粉包(ふ)などの製造に供す。らどんこ。らどんこ。

こむぎ-だんご 小麥團子 (名) 小麥粉にて製りたる團子。

こむ-げ (名) 【植】ぼんでんくわの異名。

こむ-くし 護謨櫛 (名) えばないにて製りたる櫛。

こむくそり 小椋鳥 (名) 【動】鳥類中、鳴禽類の一種。椋鳥の一種。小形のもの。雄は頭部灰白色にして褐色點を散布し、頬部は赤褐、胃面は黑色にて、光澤あり、下面は一般に白く、互部より腹側に喉部より腹側に翼は黑色にて綠の光澤を帶び、大なる白色帶を有す。尾は上面赤褐、翼尾は黑褐にして、多少綠色の光澤を有すれども白色帶なく、下面は一般に淡褐、中央部やや白し。夏期、本邦に多く、冬期は東印度諸島に去る。しまむくそり。

(うどくむ)

こむくそわん 〜護謨管 (名) 弾性護謨にてつくりたる管。

こむ-けし 護謨消 (名) けしごむ(消護謨)に同じ。

こむしやう 〜護謨漿 (名) こむ・を溶解したる液。製造又は薬用に供す。

こむ-すび 小結 (名) 相撲にて、大關の五結目は五行の所なるが故に先輩なき時は人結の五結目は五行の所なるが故に先輩なき時は人結の五結目は五行の所なるが故に先輩なき時は人結

こめ-ぞ 米座（名）こめざ（米座）に同じ。

こめ-の-き 米裂（名）こめき（米裂）に同じ。字鏡「粉己乃乎乃」

こめ-の-うた （名）【植】つくばねの異名。

こめ-の-べうり 米延賈（名）江戸時代、米相場の稱。享保十四年十二月町觸「右五組之者共、此度米延賈・切手賈相場曾所相願候に付、願之通申附候、空之者共、曾所へ致割賈、賈可仕候」

こめ-の-むし 米蟲（名）【動】こくぞう（穀象）の異名。【人】の稱。米を食すること甚しい。

こめ-の-めし 米飯（名）米を炊ぎたる飯。（むぎめし・かてめし・笥の飯）四方赤良「旬一里の中はいつも月夜にて米の飯」

こめ-のり （名）【植】紅色濃藻、ひかでのりの屬の海藻。全長二三寸。葉狀たる二叉分岐を繰り返し、枝の幅廣き所は二三分に達し、扁平にして薄く、暗紫色を呈す。我が國・各地の淺海・干潮線附近の岩石上に繁生し、糊料とし、又食用とす。こめな。きくらのり。

こめ-わらは 小童（名）小さき童女。小さきめのわらは。十訓「一歩行にて、こめの童一人を具して」

こめ-びつ 米櫃（名）【】白米を貯ふる器。（むまけしびつ・めしびつ・飯櫃）【】生活費を供給する者。生活の基本となるもの。

こめ-ぶくろ 米袋（名）米を入るる袋。

こめ-ぶね 米船（名）【】米穀を積める船。【】ひやかしぶね（冷船）に同じ。

こめ-ぶみ 米酒（名）【】新白酒を醸して米を調き新酒となること。又、米の人。

こめ-ぶね 米屋（名）米を賣る人。又、其の家。

こめ-ぶや 込矢（名）こみや（込矢）に同じ。

こめ-やなぎ （名）【植】こめさぐちを いふ。加賀國の方言。

こめやまち 米屋町（名）米穀取引所のある附近にて、米相場により衣食する者どもの住む所。

こ-めら 小女郎（名）矢筈の轉。

こ-めらは 小女童（名）〔こめわらは の約〕めのわらは。こむすめ。七十一番歌合「やぶれ借衣ほしきたればこめらは の、男と見てやしりにつくらん」

こめる 籠込（他動）こむ（籠）の口語。

こ-めろ 小女郎（名）こめらく（小女郎）の約。長町女殺切「そもそも小女郎の時分から、手形の裏、まる十年」

こ-めん 〜顧門（名）こべん（顧門）に同じ。太平記「駕の御心を附けられず」

こ-めん 〜牛面（名）【】牛の面に當つる具。【】牛の面に當つる類。太閤記「牛面」

こ-めん 〜【】矢筈の略。

こめ-ふみ-せむし 米酒米酒（名）【動】こめつきむし（米搗虫）の異名。

こめ-へん 米偏（名）漢字の偏の名。粒・粉・粟・糧などの字にある米の字の稱。

こめ-ぼね （名）普通の十本の骨より、骨の數の多き扇。（ぼさら扇の對）狂言「こめぼねと云ふは、此の扇の骨を、常は十本あれど、十二本か十五本にこめたをこめぼねと云ふ」

こめ-むし 米蟲（名）【動】こくぞう（穀象）の異名。

こめ-や 米屋（名）米を賣る人。又、其の家。

こめ-じ-や 込矢（名）こみや（込矢）に同じ。

こめ-やなぎ （名）【植】こめさぐちを いふ。加賀國の方言。

こめやまち 米屋町（名）米穀取引所のある附近にて、米相場により衣食する者どもの住む所。

こ-めら 小女郎（名）矢筈の轉。

こ-めらは 小女童（名）〔こめわらは の約〕めのわらは。こむすめ。七十一番歌合「やぶれ借衣ほしきたればこめらは の、男と見てやしりにつくらん」

こめる 籠込（他動）こむ（籠）の口語。

こ-めろ 小女郎（名）こめらく（小女郎）の約。長町女殺切「そもそも小女郎の時分から、手形の裏、まる十年」

こ-めん 〜顧門（名）こべん（顧門）に同じ。太平記「駕の御心を附けられず」

こ-めん 〜牛面（名）【】牛の面に當つる具。【】牛の面に當つる類。太閤記「牛面」

こ-めん 〜【】矢筈の略。

こめ-ふみ-せむし 米酒米酒（名）【動】こめつきむし（米搗虫）の異名。

**こ

こもち-まめ 五目豆（名）大豆に牛蒡・蓮根・人参・慈姑などを雑へ、煮たる料理。正月の儀式に用ふ。

こもち-めし 五目飯（名）魚肉・野菜などの種種の物を雑へたる飯。

こも-こも 交（副）互ひに入りかはりて。かはるがはる。互ひに。「巻略紀」「相」

こ-もし 女房（名）【動】こひ（恋）をいふ。禁中の女房詞。大上高御名之事「女房詞。一、こひ、こもし」

こ-もじ 五文字（名）矢倉の略。

こ-もじ 五文字（名）ふじん（婦人）の敬称。ごじ（御）を見よ。

こもじ-づけ 五文字附（名）かむりづけ（冠附）に同じ。

こも-ごも 菰汁 蒋汁（名）海鼠（ナマコ）の若芽を入れて製りたる汁。「節用」蒋汁（ナマコ）」

こも-すだれ 菰簾（名）茎にて編みたる簾。「散木集」紋様火の烟になるこもりすだれ、ものむつかしきわぶ心かな」

こも-すり （名）魚の尾の名所。うを（魚）を見よ。

こも-そら 虚無僧（名）こむそう（虚無僧）の訛。一説、鹿部に起臥するよりいふと。「類聚」頃城御原三迫の附け且那殿が、こもそらと成つて、ここへ、こざこらう」

こもそう-がさ 虚無僧笠（名）こもが、後には上下・廣狭なく深く編みたり。蕉谷笠。こもがさ。

こもそう-ごさ 虚無僧草（名）【植】■おにのやがら（天蘇）の異名。■をとりこそうの異名。

こもは-な （名）【植】前條に同じ。

こもだたみ 蔣壁（名）蔣を幾重も重ねて編むもの。

こ-もち 〜御物（名）こもつ（御物）に同じ。三代實録「老人賜御物」「承和二年」「清廉ましき大假宇にて、ただ今こもちを、まきかけ敷へば、まきはてて参り敷べし」

こ-もち-いし 子持石（名）■石の中に小さき石を抱有するもの。■こもちいし（子持岩）の略。

こもだたみ 蔣壁（枕）蔣壁は幾重も重ねて編むもの。ゆゑ、重（ヘ）にかけていふ。「一説、蔣壁は幾重も隔てて重ねる意にて、一つづつの略なるへにかけていふ。「新撰万葉集」いづくにそまそは狭る岡、蔣壁（コモダタミ）、一つのおそが鼻のへをはれ」

こ-もだび （名）小さきもたひ。小があ。「和字類聚抄」「蔣壁」

こもだれ 蔣垂（名）出入口などにこもを垂れたる乞食小屋などの称。「菅原傳授手習鑑」「王龍の中の誕生と、武垂れの中に、育つたとは、似ても似附かず」

こ-もち 子持（名）■子を持ちたること。又、其の人。人の母となりたる人。「万葉集」「中宮の御方より、子持の御前の産物、源氏物語」「おほやけ（中宮）のことにいかめしらせさせ給へり」「紫式部日記」「華やぎ、怪しく見苦しきこもちなどは、愛の御すそ綱う、色青びれなどしたればこそ心苦しけれ」■大小相伴ひたる物の称。■和船の名所。帆柱の根を保つ盞。はいのざ。其の道木（ヤ）を盲居（ヒ）といひ、筒に嵌せて打つ木をはしらせがいといふ。■こもちすど（子持簾）の略。

こもち子持になること猫がものいふ 寡官の人も、子持となれば口数多くなる。

こもち子持の腹へ馬の首 子持となれば大食する譬へ。

こもち子持を置ふより公こを置へ 子持が保育の為めに、十分の働きをなし得ざるをいふ。

こ-もち 〜御物（名）こもつ（御物）に同じ。三代實録「老人賜御物」「承和二年」「清廉ましき大假宇にて、ただ今こもちを、まきかけ敷へば、まきはてて参り敷べし」

こ-もち-いし 子持石（名）■石の中に小さき石を抱有するもの。■こもちいし（子持岩）の略。

こ-もち-いは 子持岩（名）【地】れきがん（礫岩）の異名。

こもち-おほびし 子持大菱（名）紋所の名。

こ-もち-かた 子持角（名）紋所の名。

こ-もち-かたてかた 子持角立角（名）紋所の名。

こもち-がめ 子持龜（名）紋所の名。

こもち-かめのまる 子持龜丸（名）紋所の名。

こ-もち-がらす 子持烏（名）子を持てる烏。六帖「夏の夜のこもちがらすのさがぞかし、夜ふかくなきて君をやりつつる」

こ-もち-がんぎかた 子持雁木角（名）紋所の名。

こ-もち-かんらん 子持甘藍（名）【植】十字花科、蕓薹（ナタネ）屬の草本。甘藍の一種。多數の小球を密生し、賞翫くして、霜にあへば美味になるもの。ひめかんらん。

こ-もち-き 子持木（名）船具。木碇（イカリ）の石を結ひ附くる所。

こ-もち-きっかふこのじ 子持龜甲小字（名）紋所の名。

こ-もち-きっかふしばなびし 子持龜甲四方花菱（名）はなきっかふ（花龜甲）に同じ。

こ-もち-きっかふはなびし 子持龜甲花菱（名）紋所の名。

こ-もち-きん 子持銀（名）けいちやうまめいたぎん（慶長豆板銀）に同じ。

こ-もち-くせき （名）【植】こもちしだの異名。

こ-もち-ぐさ 子持草（名）【植】木賊科（ヒ）の多年生草本。地下に根茎を有し、之より大なる葉を叢生す。葉は細長三角形、淡緑色にして毒質、羽狀複葉、各小葉また羽狀に深裂し、各裂片は線狀、全緑、葉面に多數の無性芽を生じ、此の芽落下して新株となる。子囊群は葉裏に生ず。我が國、沿海の山野に自生す。おにぜんまい。

こ-もち-じま 子持縞（名）織物の子持筋なる織物。

こ-もち-すぢ 子持筋（名）■太き筋に細き筋を並行せしめて引ける線。織物用ふ。「和漢三才圖會」「子持筋といふ事は、ふとき筋を三つ引揃へて、其の中に細き一筋をいれたるを申すなり。上下のふとき筋は父母にかたどり、内の筋を子をはらめるにかたどるなり。今世、太き筋一筋引きて、其の下に細き筋おろを申すはあやまれるよし」「宝暦」■こもすど（子簾筋）の略。

こ-もち-すみきり 子持隅切（名）紋所の名。すみきり（角切）を見よ。

こ-もち-そりきっかふ 子持反龜甲（名）紋所の名。

こ-もち-たきおもたか 子持抱澤潟（名）紋所の名。

こ-もち-たきひひらぎ 子持抱柊（名）紋所の名。

こ-もち-つき 小望月（名）もちづきの前夜、即ち陰暦八月十四日の月。

こ-もち-とめぶ 子持巴（名）紋所の名。

こ-もち-とらのを （名）【植】じかんとらのを（名）【植】木賊科（ヒ）の多年生草本。地下に根茎を有し、之より大なる葉を叢生す。葉は細長三角形、淡緑色にして毒質、羽狀複葉、各小葉また羽狀に深裂し、各裂片は線狀、全緑、葉面に多數の無性芽を生じ、此の芽落下して新株となる。子囊群は葉裏に生ず。我が國、沿海の山野に自生す。おにぜんまい。

こ-もち-ぬま 子持三羽鳥（名）紋所の名。

こ-もち-した （名）【植】木賊科（ヒ）の多年生草本。地下に根茎を有し、之より大なる葉を叢生す。葉は細長三角形、淡緑色にして毒質、羽狀複葉、各小葉また羽狀に深裂し、各裂片は線狀、全緑、葉面に多數の無性芽を生じ、此の芽落下して新株となる。子囊群は葉裏に生ず。我が國、沿海の山野に自生す。おにぜんまい。

こ-もち-ぬま 子持三羽鳥（名）紋所の名。

こ-もち-した （名）【植】木賊科（ヒ）の多年生草本。地下に根茎を有し、之より大なる葉を叢生す。葉は細長三角形、淡緑色にして毒質、羽狀複葉、各小葉また羽狀に深裂し、各裂片は線狀、全緑、葉面に多數の無性芽を生じ、此の芽落下して新株となる。子囊群は葉裏に生ず。我が國、沿海の山野に自生す。おにぜんまい。

こ-もち-ぬま 子持三羽鳥（名）紋所の名。

こ-もち-しま 子持縞（名）織物の子持筋なる織物。

こ-もち-すぢ 子持筋（名）■太き筋に細き筋を並行せしめて引ける線。織物用ふ。「和漢三才圖會」「子持筋といふ事は、ふとき筋を三つ引揃へて、其の中に細き一筋をいれたるを申すなり。上下のふとき筋は父母にかたどり、内の筋を子をはらめるにかたどるなり。今世、太き筋一筋引きて、其の下に細き筋おろを申すはあやまれるよし」「宝暦」■こもすど（子簾筋）の略。

こ-もち-すみきり 子持隅切（名）紋所の名。すみきり（角切）を見よ。

こ-もち-そりきっかふ 子持反龜甲（名）紋所の名。

こ-もち-たきおもたか 子持抱澤潟（名）紋所の名。

こ-もち-たきひひらぎ 子持抱柊（名）紋所の名。

こ-もち-つき 小望月（名）もちづきの前夜、即ち陰暦八月十四日の月。

こ-もち-とめぶ 子持巴（名）紋所の名。

こ-もち-とらのを （名）【植】じかんとらのを（名）【植】木賊科（ヒ）の多年生草本。地下に根茎を有し、之より大なる葉を叢生す。葉は細長三角形、淡緑色にして毒質、羽狀複葉、各小葉また羽狀に深裂し、各裂片は線狀、全緑、葉面に多數の無性芽を生じ、此の芽落下して新株となる。子囊群は葉裏に生ず。我が國、沿海の山野に自生す。おにぜんまい。

こ-もち-ぬま 子持三羽鳥（名）紋所の名。

こ-もち-した （名）【植】木賊科（ヒ）の多年生草本。地下に根茎を有し、之より大なる葉を叢生す。葉は細長三角形、淡緑色にして毒質、羽狀複葉、各小葉また羽狀に深裂し、各裂片は線狀、全緑、葉面に多數の無性芽を生じ、此の芽落下して新株となる。子囊群は葉裏に生ず。我が國、沿海の山野に自生す。おにぜんまい。

こ-もち-しま 子持縞（名）織物の子持筋なる織物。

こ-もち-すぢ 子持筋（名）■太き筋に細き筋を並行せしめて引ける線。織物用ふ。「和漢三才圖會」「子持筋といふ事は、ふとき筋を三つ引揃へて、其の中に細き一筋をいれたるを申すなり。上下のふとき筋は父母にかたどり、内の筋を子をはらめるにかたどるなり。今世、太き筋一筋引きて、其の下に細き筋おろを申すはあやまれるよし」「宝暦」■こもすど（子簾筋）の略。

こ-もち-すみきり 子持隅切（名）紋所の名。すみきり（角切）を見よ。

こ-もち-そりきっかふ 子持反龜甲（名）紋所の名。

こ-もち-たきおもたか 子持抱澤潟（名）紋所の名。

こ-もち-たきひひらぎ 子持抱柊（名）紋所の名。

こ-もち-つき 小望月（名）もちづきの前夜、即ち陰暦八月十四日の月。

こ-もち-とめぶ 子持巴（名）紋所の名